

西大寺旧境内発掘調査報告書1

—西大寺旧境内第25次調査—

(本 篇)

奈良市教育委員会

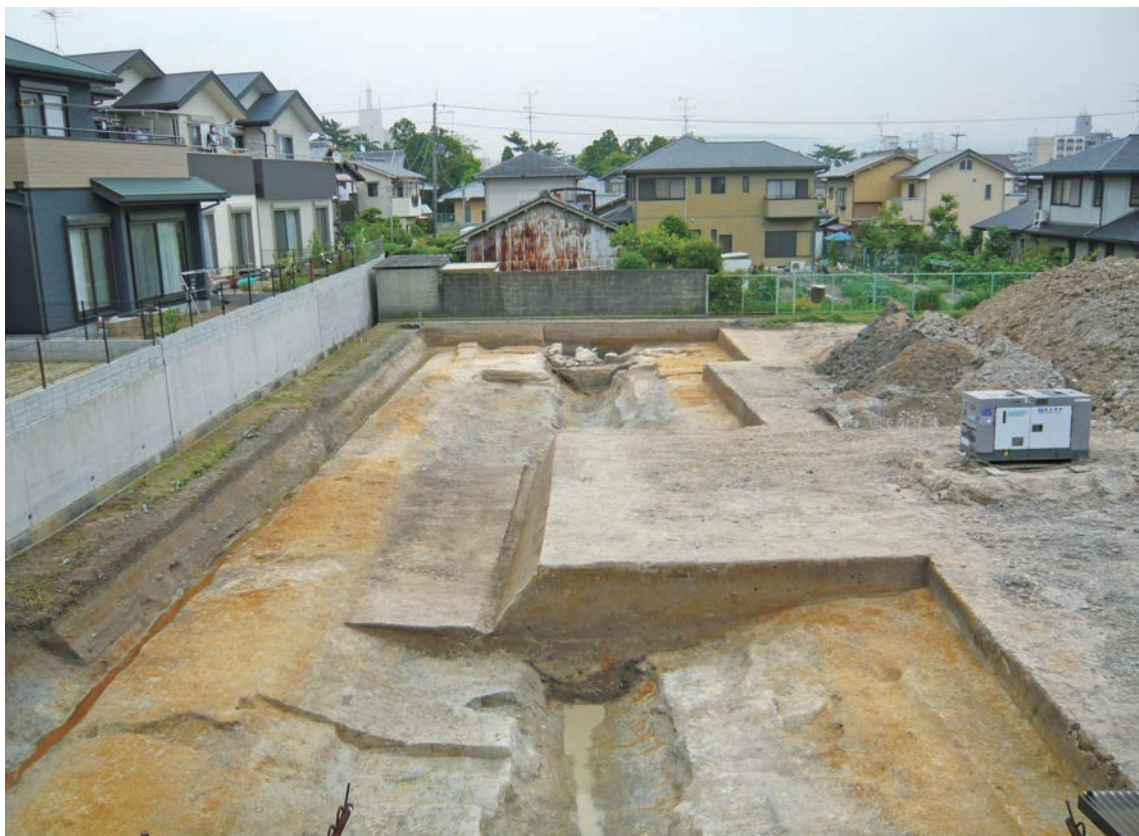
2013



1. 西大寺旧境内（北辺坊含む）周辺航空写真（上が北 矢印の交点が今回の調査地）
（平成18年12月奈良市都市計画課撮影）



2. 西大寺旧境内周辺航空写真（北から 平成20年撮影 矢印の交点が今回の調査地）



3. 西大寺旧境内第25次調査発掘区全景（西から）



4. SD01完掘写真（西から）



5. SD01土層断面写真（東から）



6. SD01古木屑層に入ったイスラム陶器（東から）



7. 土橋SX05・石組SX06 (西から)



8. 土橋SX05・石組SX06 (南西から)



9. イスラム陶器
(出土品を展示台にはめたもののもの)



10. イスラム陶器



11. 奈良三彩托



12. 施釉瓦

西大寺旧境内発掘調査報告書1

—西大寺旧境内第25次調査—

(本 篇)

奈良市教育委員会

2013

序 文

西大寺は平城京の北西隅に位置し、天平宝字八年（764年）に孝謙上皇の発願によって造営が開始された寺院です。平城京最後の官の大寺で、31町にも及ぶ広さでありました。平安時代には一時衰退しましたが、鎌倉時代の叡尊の尽力により復興し、その法燈を今に伝えていきます。大茶盛などの行事が有名で、今も多くの人々が訪れています。

平成21年4月、中心伽藍から外れた旧境内地南西部で発掘調査を開始しました。調査面積は狭く、見つかった主な遺構は一条の溝でした。その溝から、イスラム陶器・来日唐人名の書かれた墨書土器・石上宅嗣の官職を記した木簡など新聞紙上を賑やかす大発見が次ぎから次ぎへとありました。それらの成果をまとめたのが、本書になります。

本書をまとめるにあたってご指導・ご協力をいただいた、独立行政法人奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所・西大寺旧境内出土文字資料検討委員会の諸先生方・関係機関、ならびに大量の土壌の洗浄にボランティアとして参加して下さった市民考古サポーターの皆様方のご支援に対して厚く御礼を申し上げます。

平成25年3月

奈良市教育委員会

教育長 中室 雄俊

例 言

1. 本書は、奈良市西大寺新田町2564-1 他で実施した個人住宅建設に関わる緊急調査西大寺旧境内第25次調査の発掘報告書である。
2. 出土遺物のなかでも、文字資料に関するものは独立行政法人奈良文化財研究所の『平城宮木簡』『平城京木簡』などにならない、(文字資料篇)として縦書き・右開きの体裁で別の冊とし、2冊1組で構成している。
3. 奈良市教育委員会では、西大寺旧境内において継続的な調査を実施しており、今回はその調査の一部として本書を『西大寺旧境内発掘調査報告書1』とする。
4. 調査次数は、奈良市教育委員会が実施した西大寺旧境内に対する調査の通算次数である。その詳細については第2章第3節を参照していただきたい。なお、西大寺旧境内の調査については調査の略記号「SD」を付している。特に、略記号を持たない平城京跡の調査の場合は調査次数の前に「HJ」の略記号を付す。
5. 本書で使用した遺構の分類記号や遺物の名称・型式は、奈良文化財研究所及び、奈良市教育委員会の刊行物に基本的に準拠している。
6. 本書の写真図版に示した遺物番号は、本文中に図示した遺物番号に対応する。
7. 本書の遺構図、土層図に示した座標値は平面直角座標系第VI系(世界測地系)の数値である。また、高さは国土交通省街区基準点を基本とし、T. P. (東京湾平均海面)を採用する。
8. 本文中の註記については、参考文献一覧と重複する場合にのみ「文」をその文献番号の頭に付けて記し、その他は各節ごとに1から番号をつけ節末に示した。
9. 本文中で示した過去の調査実施機関は、調査次数の前に以下の略記号を使用し表記した。
国—独立行政法人奈良文化財研究所(旧奈良国立文化財研究所を含む)
県—奈良県教育委員会 および 奈良県立橿原考古学研究所 市—奈良市教育委員会
10. 本書の作成にあたっては、奈良県立橿原考古学研究所 奥山誠義氏から分析報告をいただき、第5章1～3節に掲載した。また、本編第4章第4節の石材の鑑定については京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏にお願いした。記して感謝いたします。
11. 自然遺物の分析・同定については株式会社古環境研究所・環境考古研究会に分析委託し、また、木製品に付着した物質の成分分析については株式会社古環境研究所に分析委託し、それぞれ成果報告を得た。それらを一部編集し、第5章4～8節に掲載した。
12. 遺物写真撮影については、文字資料に関わるものは、奈良文化財研究所 中村一郎氏にお願いした。記して感謝いたします。土器・瓦・木製品で、図版掲載分については、アートフォト右文の佐藤右文氏に撮影委託した。
13. 木製品の一部の実測図作成と、一部のトレース作業については(株)文化財サービスに委託した。
14. 本書の内容について要旨を作成し、英語・中国語に翻訳して付載している。翻訳は下記の方々をお願いした。記して感謝いたします。
英文: Walter Edwards (奈良文化財研究所客員研究員) 中文: 山根弓果 (龍谷大学大学院博士後期課程)
15. 本書の作成にあたっては下記の方々から、ご助言、ご教示をいただいた。記して感謝いたします。
浅野啓介 綾村 宏 池田祐司 石田由希子 井上和人 今井晃樹 大塚紀宜 大林 潤
岡野智彦 桑田訓也 西藤清秀 佐伯俊源 佐々木達夫 佐々木花江 菅谷文則 館野和己
田辺征夫 土橋理子 鶴見泰寿 東野治之 馬場 基 星野恵美 山下信一郎 山本 崇
山本祥隆 山本信夫 力武卓治 和田 萃 渡辺晃宏 (50音順・敬称略)
16. 現地調査は奈良市埋蔵文化財調査センター 久保邦江(当時主務)と嘱託職員 中井和志(現 京都府教育委員会)が担当した。
17. 本書の執筆分担は目次及び、文末に記した。
18. この報告書に関する調査記録・出土遺物は奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。
19. 本書の編集は埋蔵文化財調査センター所長 森下恵介の指導のもとに、所長補佐 篠原豊一、主任 鐘方正樹の助言を得て、主任 久保邦江が担当した。

西大寺旧境内発掘調査報告書 1

—西大寺旧境内第25次調査—

本篇目次

巻首図版	I ~ VI
序文	i
例言	ii
目次	iii ~ viii
第1章 発掘調査の経緯と経過	
第1節 発掘調査の経過	久保邦江…… 1
第2節 整理作業の経過	久保邦江…… 2
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	
第1節 位置と環境	安井宣也…… 4
第2節 西大寺の沿革	久保邦江…… 10
第3節 西大寺旧境内の既往の調査	久保邦江…… 13
第3章 検出遺構	
第1節 調査の方法	久保邦江…… 17
第2節 検出した遺構	久保邦江…… 19
第4章 出土遺物	
第1節 瓦・埴類	宮崎正裕…… 26
第2節 土器類・土製品	三好美穂・池田裕英・池田富貴子・久保邦江…… 35
第3節 木製品	久保邦江…… 71
第4節 その他の遺物	久保邦江…… 96
第5章 自然科学分析	
第1節 イスラム陶器の釉薬・胎土の蛍光X線分析	奥山誠義…… 97
第2節 出土金属・ガラスの成分分析	奥山誠義…… 99
第3節 出土繊維製品の分析	奥山誠義…… 102
第4節 木製品付着物の蛍光X線分析	株式会社古環境研究所…… 112
第5節 花粉分析	株式会社古環境研究所…… 113
第6節 珪藻分析	株式会社古環境研究所…… 118
第7節 樹種同定	株式会社古環境研究所・環境考古研究会…… 123
第8節 種実同定	株式会社古環境研究所・環境考古研究会…… 133
第6章 総括	
第1節 遺構について	久保邦江…… 140
第2節 遺物について	宮崎正裕・三好美穂・池田裕英・久保邦江…… 145
第3節 結語	久保邦江…… 156
参考文献	158
英文要旨	Walter Edwards…… 160
中文要旨	山根弓果…… 161
写真図版	

文字資料篇目次

巻首図版	I・II
例言	i
目次	ii

第7章 出土文字資料

第1節 はじめに	武田和哉	1
第2節 出土文字資料の概要	武田和哉・鶴見泰寿	6
第3節 結語	武田和哉	15
第4節 木簡・削屑の積文および各種データ	鶴見泰寿・武田和哉	18
第5節 墨書土器の積文および各種データ	武田和哉・鶴見泰寿・池田富貴子	60
第6節 その他出土文字資料の積文および各種データ	武田和哉	78
図版目次・凡例		80

図版 木簡（板状）	図版	1～58
木簡（削屑）	図版	59～70
墨書土器	図版	71～95
その他の出土文字資料	図版	96

本篇図版目次

巻首図版

- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|--------------------------|
| 巻首図版Ⅰ | 1. 西大寺旧境内（北辺坊含む）周辺航空写真 | 巻首図版Ⅳ | 7. 土橋SX05・石組SX06（西から） |
| | 2. 西大寺旧境内周辺航空写真（北から） | | 8. 土橋SX05・石組SX06（南西から） |
| 巻首図版Ⅱ | 3. 西大寺旧境内第25次調査発掘区全景（西から） | 巻首図版Ⅴ | 9. イスラム陶器（出土品を展示台にはめたもの） |
| | 4. SD01完掘写真（西から） | | 10. イスラム陶器 |
| 巻首図版Ⅲ | 5. SD01土層断面写真（東から） | 巻首図版Ⅵ | 11. 奈良三彩托 |
| | 6. SD01古木屑層に入ったイスラム陶器（東から） | | 12. 施釉瓦 |

写真図版目次

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------------------------|
| Ph. 1 | 1. 調査前写真（南東から） | Ph. 9 | 1. SD01出土土師器 |
| | 2. 発掘区全景（西から） | | 2. SD01古木屑層出土須恵器 |
| Ph. 2 | 1. 発掘区全景（南東から） | Ph.10 | 1. SD01古木屑層・古埋立層出土須恵器 |
| | 2. 発掘区全景（南西から） | | 2. SD01新出土土師器・須恵器・黒色土器A類 |
| Ph. 3 | 1. SD01全景（西から） | Ph.11 | 1. SD01・SX04出土灰釉陶器・緑釉陶器 |
| | 2. SD02全景（東から） | | 2. SD01・SX04出土陶硯・転用硯 |
| Ph. 4 | 1. 土橋SX05全景（南西から） | Ph.12 | SD01出土イスラム陶器（表面） |
| | 2. 石組SX06全景（南西から） | Ph.13 | SD01出土イスラム陶器（内面） |
| Ph. 5 | 1. 石組SX06基礎の石（東から） | Ph.14 | SD01古最下層出土木製品・古木屑層出土木製品（工具） |
| | 2. 土器溜まりSX04検出状況（北から） | Ph.15 | SD01古木屑層出土木製品（服飾具） |
| Ph. 6 | 1. 軒丸瓦出土状況 | Ph.16 | SD01古木屑層出土木製品（容器） |
| | 2. 軒平瓦出土状況 | Ph.17 | SD01古木屑層出土木製品（食事具） |
| | 3. 土師器出土状況 | Ph.18 | SD01古木屑層出土木製品（文房具・遊戯具・祭祀具） |
| | 4. イスラム陶器出土状況 | Ph.19 | SD01古木屑層出土木製品（調度） |
| | 5. 木簡出土状況 | Ph.20 | SD01古木屑層出土木製品（部材） |
| | 6. 木簡取り上げ状況 | Ph.21 | SD01古木屑層出土木製品（その他・用途不明品1） |
| | 7. 文杖形木製品出土状況 | Ph.22 | SD01古木屑層出土木製品（用途不明品2） |
| | 8. 和同開珎出土状況 | Ph.23 | SD01新・その他出土木製品 |
| Ph. 7 | 出土瓦類 | Ph.24 | その他の遺物 |
| Ph. 8 | 1. SD01古最下層出土土師器・須恵器 | | |
| | 2. SD01古木屑層出土土師器・黒色土器A類 | | |

挿図目次

- | | | | |
|-----|----------------------------------|--------|--|
| 図1 | 市SD25次調査区（薄い網掛け部分が拡張範囲 1/400）… 1 | 図11・12 | 西大寺西方の段丘面・段丘構成層と遺構（市SD10次調査地、左：段丘構成層最上面と奈良時代の遺構—南東から、右：土坑と段丘構成層上部の断面）… 8 |
| 図2 | 遺物洗浄・分類の様子 …… 3 | | |
| 図3 | 市SD25次調査地の位置 …… 4 | 図13・14 | 菅原町・横領町付近の段丘面・段丘構成層と遺跡（市H J 200次調査地、左：段丘面と宝来山古墳・菅原東埴輪窯跡群・平城京跡-北東から、右：菅原東3号埴輪窯と段丘を構成する粘土層—西から）… 8 |
| 図4 | 西大寺周辺の航空写真と遺跡（1961年）… 4 | | |
| 図5 | 西大寺周辺の旧状と遺跡（1/30,000）… 5 | 図15~17 | 大池川の谷底平野 沖積層と遺構面（市H J 386次調査地、左上：沖積層最上面と奈良時代の遺構—南から、左下、縄文時代後期前半の遺構（右端）—東から、 |
| 図6 | 西大寺周辺の地形分類と遺跡・関連調査地（1/30,000）… 5 | | |
| 図7 | 赤田横穴墓群 第1～9号墓（南から）… 8 | | |
| 図8 | 奈良山丘陵の瓦窯（奈良山第51号窯、北東から）… 8 | | |
| 図9 | 西ノ京丘陵の大坂層群精華累層（赤田横穴墓群内、南から）… 8 | | |
| 図10 | 赤田川の開析谷斜面の土層（赤田横穴墓群内、東から）… 8 | | |

右：沖積層上部の断面と黒泥層の補正 ¹⁴ C年代) …………… 9	図58 SX04出土白磁 ……………56
図18・19 秋篠川の沖積平野 沖積層と遺構面（市SD28次調査地、左：沖積層最上面と奈良時代の遺構一南から、右：沖積層上部の断面と含まれる流木の補正 ¹⁴ C年代値一南西から） …………… 9	図59 遺物包含層出土土器・陶硯実測図・写真（1/4） ……………57
図20 外大門川の旧河道（市H J 319次調査地、東から） …………… 9	図60 球形土製品 ……………57
図21 一条南大路の位置を踏襲した流路（市SD21次調査地、南東から） …………… 9	図61 SD01古最下層出土木製品実測図（1・2：1/4、3：1/2） ……………71
図22 西大寺の占地（1/10,000） ……………10	図62 SD01古木屑層出土木製品実測図（工具）（1/2） ……………72
図23 西大寺主要伽藍復元案（1/5,000） ……………11	図63 SD01古木屑層出土木製品実測図（服飾具）（21～38:1/2、39～42：1/4） ……………74
図24 西大寺旧境内の調査例（1/6,000） ……………13	図64 SD01古木屑層出土木製品実測図（容器）（43～66・68：1/4、67：1/2） ……………76
図25 平城京跡発掘調査新地区割図 ……………17	図65 SD01古木屑層出土木製品実測図（食器具1）（1/3） ……………78
図26 平城京基本大地区16分割線 ……………18	図66 SD01古木屑層出土木製品実測図（食器具2）（1/4） ……………79
図27 平城京跡中地区割図 ……………18	図67 SD01古木屑層出土木製品実測図（文房具・遊戯具）（1/2） ……………81
図28 市SD25次調査小地区割図（1/200） ……………18	図68 参考：一故家所傳題箋軸（藤貞幹『好古小録』） ……………82
図29 市SD25次調査遺構平面図（1/200） ……………20	図69 SD01古木屑層出土木製品実測図（祭祀具）（132～143：1/2、144：1/4） ……………83
図30 発掘区西壁土層断面図（1/50） ……………20	図70 SD01古木屑層出土木製品実測図（調度）（1/4） ……………85
図31 A期の遺構平面図（1/200） ……………21	図71 SD01古木屑層出土木製品実測図（部材1）（1/4） ……………87
図32 B期の遺構平面図（1/200） ……………21	図72 SD01古木屑層出土木製品実測図（部材2）（1/4） ……………88
図33 SD01土層断面図(1) ……………22	図73 SD01古木屑層出土木製品実測図（その他・用途不明品1）（206・207：1/2、それ以外は1/4） ……………91
図34 SD01土層断面図(2) ……………23	図74 SD01古木屑層出土木製品実測図（用途不明品2）（1/4） ……………92
図35 土橋SX05・石組SX06平面図・立面図・断面図（1/40） ……………24	図75 SD01古埋立層出土木製品実測図（1/4） ……………94
図36 出土軒瓦実測図・拓影（1/4） ……………28	図76 SD01新・その他出土木製品実測図（275・277～279：1/4、276：1/10） ……………94
図37 出土丸瓦実測図・拓影（1/5） ……………30	図77 その他の遺物実測図（1・7～15：1/1、2～6・17・18：1/2） ……………96
図38 出土平瓦実測図・拓影（1/5）、刻印瓦拓影（1/2） ……………31	図78 イスラム陶器No.1（表面） ……………98
図39 出土施釉丸瓦・平瓦実測図（1/2） ……………32	図79 イスラム陶器No.1（裏面） ……………98
図40 出土極先瓦実測図（1/2） ……………33	図80 イスラム陶器No.2（表面） ……………98
図41 出土熨斗瓦実測図・拓影（1/4）・鴟尾実測図（1/2） ……………33	図81 イスラム陶器No.2（裏面） ……………98
図42 出土用途不明瓦製品実測図（1/4） ……………34	図82 イスラム陶器No.3（裏面） ……………98
図43 出土土器主要器種名（1/8） ……………35	図83 イスラム陶器No.3（側面） ……………98
図44 土師器A・皿Aの形態分類 ……………36	図84 イスラム陶器No.1 施釉層の蛍光X線スペクトル（左：低電圧測定、右：高電圧測定） ……………98
図45 SD01古最下層出土土器実測図（1/4） ……………38	図85 イスラム陶器No.2 施釉層の蛍光X線スペクトル（左：低電圧測定、右：高電圧測定） ……………98
図46 SD01古木屑層出土土器実測図1（1/4） ……………41	図86 イスラム陶器No.3 胎土粉末X線回折分析結果 ……………99
図47 SD01古木屑層出土土器実測図2（1/4） ……………42	図87 資料No.1 ……………100
図48 SD01古木屑層出土土器実測図3（1/4） ……………44	図88 資料No.2 ……………100
図49 SD01古木屑層出土土器実測図4（1/4） ……………46	図89 資料No.3 ……………100
図50 SD01古木屑層出土土器実測図5（1/4） ……………47	図90 資料No.4 ……………100
図51 SD01古木屑層出土奈良三彩実測図（1/2） ……………48	図91 資料No.1の蛍光X線スペクトル（左：低電圧測定、右：高電圧測定） ……………100
図52 SD01古埋立層出土土器実測図（1/4） ……………49	
図53 SD01新下層出土土器実測図1（1/4） ……………51	
図54 SD01新下層出土土器2（1/4）・奈良三彩実測図（1/2） ……………52	
図55 SD01新上層出土土器実測図（1/4） ……………53	
図56 イスラム陶器破片実測図・復元図（1/4） ……………55	
図57 SX04出土土器実測図（1/4） ……………56	

図92	資料No.2の蛍光X線スペクトル(左:低電圧測定、 右:高電圧測定)……………	101	図121	No.12の赤外線分光分析結果(a:No.12、b:植物性 繊維(大麻)、c:漆、(生漆))……………	111
図93	資料No.3の蛍光X線スペクトル (左:低電圧測定、右:高電圧測定)……………	101	図122	No.13およびNo.14の赤外線分光分析結果(a:No.13、 b:No.14、c:植物性繊維(大麻)、d:漆(生漆))…	111
図94	資料No.4の黄色部分の蛍光X線スペクトル(左: 低電圧測定、右:高電圧測定)……………	101	図123	蛍光X線分析結果……………	112
図95	資料No.4の黒色部分の蛍光X線スペクトル(左: 低電圧測定、右:高電圧測定)……………	101	図124	試料採取箇所模式柱状図……………	114
図96	No.1の観察記録(左から×20、×60、×100)……………	105	図125	SD01(LD-78区)採取試料における花粉ダイヤグラム…	115
図97	No.9の観察記録(左から×20、×60、×100)……………	105	図126	花粉・孢子・寄生虫卵顕微鏡写真……………	117
図98	No.3の観察記録(左から×20、×60、×100)……………	105	図127	SD01(LG-78区)試料採取箇所(東から)……………	119
図99	No.4の観察記録(左から×20、×60、×100)……………	106	図128	SD01(LG-78区)試料採取状況(東から)……………	119
図100	No.5の観察記録(左から×20、×60、×100)……………	106	図129	SD01(LG-78区)における主要珪藻ダイヤグラム…	121
図101	No.6の観察記録(左から×20、×60、×100)……………	106	図130	SD01(LG-78区)の珪藻顕微鏡写真……………	122
図102	No.7の織りが粗い(目が粗い)部分の観察記録 (左から×20、×60、×100)……………	106	図131	SD01古木屑層(試料E)の木材顕微鏡写真(1)……………	131
図103	No.7の織りが緻密(目が密)部分の観察記録 (左から×20、×60、×100)……………	106	図132	SD01古木屑層(試料E)の木材顕微鏡写真(2)……………	132
図104	No.1経糸表面(上)・断面(下)SEM写真……………	107	図133	SD01古木屑層の水洗選別試料における種実数 および推定される性格区分……………	137
図105	No.1緯糸表面(上)・断面(下)SEM写真……………	107	図134	SD01古木屑層(試料E)の種実顕微鏡写真……………	138
図106	No.1緯糸断面のSEM-EDS Mapping画像……………	108	図135	SD01古木屑層水洗選別試料の種実顕微鏡写真……………	139
図107	No.2経糸表面(上)・断面(下)SEM写真……………	108	図136	出土木製品平面分布図・断面模式図……………	140
図108	No.2緯糸表面(上)・断面(下)SEM写真……………	109	図137	イスラム陶器東西断面・層別出土分布図……………	141
図109	No.9経糸断面SEM写真……………	109	図138	須恵器接合関係東西断面・層別出土分布図……………	141
図110	No.9緯糸断面SEM写真……………	109	図139	周辺の調査例(SD01延長上・条坊関係)(1/5,000)…	142
図111	No.9経糸繊維表面SEM写真……………	110	図140	木屑層出土土師器杯Aの口径ヒストグラム……………	148
図112	No.4緯糸表面SEM写真……………	110	図141	木屑層出土土師器皿Aの口径ヒストグラム……………	148
図113	No.4緯糸断面SEM写真……………	110	図142	木屑層出土土師器椀Aの口径ヒストグラム……………	148
図114	No.10の断面SEM写真……………	110	図143	木屑層出土土師器杯Aの口径と径高指数分布……………	148
図115	No.11の断面SEM写真……………	110	図144	木屑層出土土師器皿Aの口径と径高指数分布……………	148
図116	No.12の断面SEM写真……………	110	図145	木屑層出土土師器椀Aの口径と径高指数分布……………	148
図117	Aグループ 赤外分光分析の結果 (a:No.1経糸、b:漆、c:精練絹糸、d:大麻)……………	111	図146	ヒストグラムによる木屑層出土土師器杯Aの比較…	150
図118	No.1(Aグループ)経糸の偏光IRスペクトル……………	111	図147	木屑層出土土師器杯Aの口径と径高指数による比較…	150
図119	No.3(Bグループ)経糸の赤外分光分析の結果……………	111	図148	ヒストグラムによる木屑層出土土師器皿Aの比較…	150
	(a:No.3経糸、b:漆、c:精練絹糸、d:大麻)		図149	木屑層出土土師器皿Aの口径と径高指数による比較…	150
図120	No.3(Bグループ)経糸と下池山古墳出土縞織物絹糸 とのIRスペクトル比較(a:No.3経糸、b:精練絹糸、 c:下池山古墳出土縞織物絹糸(劣化絹糸))……………	111	図150	ヒストグラムによる木屑層出土土師器椀Aの比較…	151
			図151	木屑層出土土師器椀Aの口径と径高指数による比較…	151
			図152	SD01出土須恵器杯Bの層別による法量分布……………	151
			図153	SD01出土須恵器杯Bの層別による径高指数の分布…	151

挿表目次

表 1	西大寺関連年表	12	表 25	SD01古木屑層出土木製品一覧（文房具）	80
表 2	西大寺旧境内発掘調査一覧（奈良(国立)文化財研究所調査分）	14	表 26	SD01古木屑層出土木製品一覧（遊戯具）	81
表 3	西大寺旧境内発掘調査一覧（奈良県調査分）	14	表 27	SD01古木屑層出土木製品一覧（祭祀具）	83
表 4	西大寺旧境内発掘調査一覧（奈良市調査分）	15	表 28	SD01古木屑層出土木製品一覧（調度）	84
表 5	西大寺旧境内発掘調査一覧（その他の機関調査分）	16	表 29	SD01古木屑層出土木製品一覧（部材）	87
表 6	出土軒瓦一覧表	26	表 30	SD01古木屑層出土木製品一覧（その他・用途不明品）	90
表 7	出土主要軒瓦計測表	29	表 31	SD01古埋立層出土木製品一覧	93
表 8	SD01古最下層出土土器の器種構成	36	表 32	SD01新・その他出土木製品一覧	94
表 9	SD01古木屑層出土土器の器種構成	40	表 33	その他の遺物一覧	95
表 10	SD01古埋立層出土土器の器種構成	48	表 34	植物性繊維（大麻）のIR吸収帯帰属表	104
表 11	SD01新下層出土土器の器種構成	51	表 35	精練絹糸のIR吸収帯帰属表	104
表 12	SD01古最下層出土土器観察表	58・59	表 36	織組織を持つ繊維製品の組織観察表	105
表 13	SD01古木屑層出土土器観察表	59～65	表 37	SD01（LG-78区）における花粉分析結果	116
表 14	SD01古埋立層出土土器観察表	66	表 38	SD01（LG-78区）における珪藻分析結果	120
表 15	SD01新下層出土土器観察表	67・68	表 39	SD01古木屑層（試料E）における樹種同定結果	129
表 16	SD01新上層出土土器観察表	68	表 40	SD01古木屑層における木材出現率	129
表 17	SX04出土土器観察表	69	表 41	SD01古木屑層における木材同定結果	130
表 18	包含層出土土器観察表	69	表 42	SD01古木屑層（試料E）の種実同定結果	136
表 19	土製品観察表	69	表 43	SD01古木屑層における種実同定結果	136
表 20	イスラム陶器観察表	70	表 44	周辺の調査例（SD01延長上・条坊関係）	143
表 21	SD01古最下層出土木製品一覧	71	表 45	国内の初期イスラム陶器出土例一覧	153
表 22	SD01古木屑層出土木製品一覧（工具・服飾具）	73	表 46	出土木製品点数一覧	154
表 23	SD01古木屑層出土木製品一覧（容器）	75	表 47	参考文献一覧（調査報告書・資料集成）	158・159
表 24-1	SD01古木屑層出土木製品一覧（食事具1）	77	表 48	参考文献一覧（論文）	159
表 24-2	SD01古木屑層出土木製品一覧（食事具2）	79	表 49	参考文献一覧（単行本類）	159

第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の経過

I. 発掘調査の経緯

調査地は、奈良市西大寺新田町2564-1他にあたり、現在の西大寺境内の西側に位置する。

平成21年2月9日付けで文化財保護法第93条第1項の規定により、奈良市役所文化財課に埋蔵文化財届出書が提出された。

届出の内容は個人住宅の新築であった。事前のボーリング調査の結果から、建物範囲よりも広い範囲で地盤改良をする必要があり、当時の地盤から0.75mの掘削を行う工事内容であった。ただし地盤の状況から、それ以上の掘削になる可能性が高いということであった。

工事面積が広く、基礎掘削が遺構面より深くなる可能性が高いため、平成19年3月13日付け教文第3586号で、奈良県教育委員会から発掘調査が必要であるという通知がだされ、奈良市が発掘調査を行うことになった。

届出者との協議をすすめ、文化財保護法第99条第1項に従い、平成21年3月24日に発掘調査通知（奈教文第6040号）を奈良県教育委員会に提出し、平成21年4月2日に奈良県教育委員会から教文第1002号で通知が届いた。個人住宅建設にともなう発掘調査であるため、埋蔵文化財緊急調査経費によって、調査を実施した。

II. 調査体制

発掘調査は、平成21年度に奈良市文化財課埋蔵文化財調査センターが担当した。当該年度の埋蔵文化財調査に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局 教育総務部
文化財課

課長 西岡康夫

課長補佐 西崎卓哉

大西章一（文化財総務係長事務取扱）

文化財総務係

主任 三好美穂 植松宏益

技術職員 大窪淳司

埋蔵文化財調査センター

所長 森下恵介

所長補佐 岡田恭明

調査第1グループ

主任 森下浩行

技術職員 松浦五輪美 武田和哉 秋山成人

宮崎正裕 原田憲二郎 久保清子 山前智敬

調査第2グループ

主任 鐘方正樹

技術職員 安井宣也 池田裕英 中島和彦

久保邦江 原田香織 池田富貴子

事務職員 酒井真弓

嘱託職員 大原 瞳

中井和志（現京都府教育委員会）

調査第2グループの久保（邦）と中井が現地調査を担当し、鐘方・安井が補佐した。

III. 発掘調査の経過

建物基礎の部分とその周りの地盤改良予定範囲は東西32m、南北11.3mで、建物の形状に合わせて敷地北端部分に調査区を逆凹字形に設定した。平成21（2009）年4月8日に開始し、最終的な調査面積は321㎡である。

掘削は調査区北東から重機で表土掘削を始め、北端で東西方向の溝（SD02）の南肩を検出し、その以南で黄灰色砂質粘土の地山を確認した。地山は南北幅0.5mほどで途切れそれ以南は灰色もしくは黒灰褐色の粘土が続いた。粘土層には奈良時代の遺物が含まれていたため掘り下げず、南側の肩を探すべくさらに南に掘り進んだ。

翌4月9日、北側の地山面から約7m南の部分で再び地山面を確認した。遺物を包含する粘土層が直線的に西へ続いていったため、幅7mほどの東西方向の溝（SD01）になることが判明した。

4月15日に遺構検出を終え、溝の深さを確認するため、発掘区西端の壁に沿い幅0.8mの範囲を掘削した。

4月16日、灰色粘土層の3層下に暗灰褐色土層があり、その中に木屑が混在することを確認した。木屑の中に木簡が含まれる可能性があるかと判断し、一旦掘削を止め、木屑層の広がりを確認するため、東張出し部の西壁面に沿って溝埋土を掘削し同様の木屑層を確認した。その内容を調べるために採取した木屑層の土を持ち帰り、洗浄

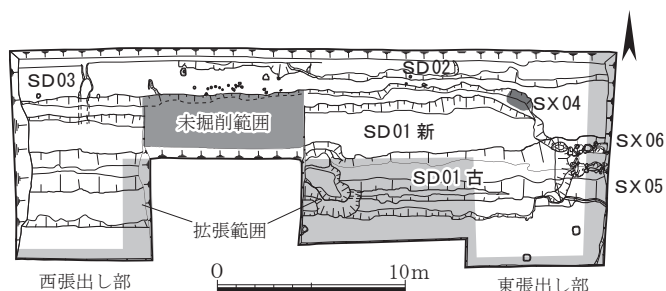


図1 市SD25次調査区（薄い網掛け部分が拡張範囲 1/400）

したところ木簡が含まれていることが判明した。

4月20日、持ち帰った木屑層の中にイスラム陶器片が入っていることを確認した。

4月24日に遺構掘削前の全景写真を撮影。同日、届出者立ち会いのうえ、出土遺物の重要性を説明し、調査期間延長の協議を行い了承を得る。手続きのため、本格的な拡張は5月の連休明けからになる。その間平面、土層断面の記録を作成する。なお、東・西張出し部の間のSD01埋土は建物基礎の影響をうけないということで現地保存し、SD01の掘削は張出し部の部分のみで行うこととした。

5月8日、この日からSD01の掘削を本格的に始める。木屑層の土は現場で遺物を探さず、土ごと遺物整理箱に入れて持ち帰る。掘削にはスコップを用いず、竹べらなどを使用し、木簡を傷めないように細心の注意を払う。土壌を採取する過程で木簡、イスラム陶器片などが次々と見つかる。木簡の場合は、水漬けにして、直射日光が当たらないように保管し、イスラム陶器片は位置情報と出土状況写真を撮影した。

5月19日に溝埋土の掘削を終え、翌5月20日に全景写真を撮影。届出者、設計者、代理人に現状を見ていただき、今後の工程について協議する。設計者から溝部分の地盤が軟弱であることが判明したため、設計の都合上改良範囲が広くならざるを得ないという報告を受ける。その部分を拡張し調査する必要が生じたため、さらに調査期間を延長することになった（図1の薄い網目部分が拡張範囲）。この地盤改良範囲の拡張で、SD01埋土の現地保存の範囲も広く影響を受けるため、最終的には概ねLG～LH-74～76区（18頁の地区割図参照）の範囲の埋土を残すのみとなった（図1の濃い網目範囲）。

5月27日、発掘区南端拡張部分の表土を重機で掘削する。東端拡張部分は、重機のアームがとどかないため、幅約1.4mを人力で掘削。東壁で確認していた石がさらに東に続いており、石組になることが判明した。

5月29日、持ち帰った木屑層の土壌を洗浄中に、「神護景雲二年三月五日」と書かれた木簡を発見。

6月10日、全景写真撮影。東端の石組の記録をとった後、石をはずしていく。

6月29日、埋め戻しに先立ち、発掘区西端の法面に残る木屑層の土壌を採取。

7月1日、埋め戻し作業開始。埋め戻しに際しては、従来の地下水の流れを遮断させないようにクラッシャーを入れ、未発掘部分のSD01埋土の保全を図った。

7月14日、埋め戻し・整地作業を終え、調査完了。

第2節 整理作業の経過

I. 整理体制

遺物整理・報告書作成時の体制は以下のとおりである。

奈良市教育委員会事務局 教育総務部

埋蔵文化財調査センター

所 長 森下恵介

所長補佐 篠原豊一

主 任 三好美穂 鐘方正樹

技術職員 武田和哉（平成24年度から大谷大学）

秋山成人 安井宣也 宮崎正裕

原田憲二郎 久保清子 池田裕英

（以上平成23年度から主任）

中島和彦 久保邦江

（以上平成24年度から主任）

原田香織 池田富貴子 山前智敬

事務職員 酒井真弓（平成23年度から嘱託職員）

松村健次（平成24年度から）

嘱託職員 大原 瞳（平成24年9月まで）

奥井智子（平成23年1月から平成24年

9月まで 現京都市教育委員会）

遺物整理と報告書の作成は、埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業として平成21～24年度に実施した。

本書を作成するにあたり、基本的に原稿の執筆担当者が遺物整理を担当した。執筆担当者については目次と文末に示す。また、土器の整理については原稿執筆者の他に、鐘方・中島が支援した。

II. 各年度の経過

平成21年度

遺物洗浄作業 調査を実施した平成21年度は報告書作成のための作業工程の検討と、持ち帰った遺物の洗浄作業を一部着手したにとどまる。洗浄作業には、整理補助員に加えて、平成21年度に発足した市民考古サポーター第1期生の方々のご協力を得、イスラム陶器片や木簡の発見に大きく貢献していただいた。

土壌分析 SD01の西壁で採取した土壌試料の分析（花粉分析・珪藻分析・樹種同定・種実同定）作業を株式会社古環境研究所に委託した。

文字資料整理 出土した文字資料の重要性に鑑み「西大寺旧境内出土文字資料検討会」を発足させ、木簡・文字資料の専門研究者の方々に木簡の積文の検討、歴史的意義などについてご検討をお願いした。第1回は平成21年10月2日に開催した。検討会については平成24年度まで

に9回開催した。検討会の記録については、文字資料篇に詳細を記す。

また、奈良県立橿原考古学研究所から鶴見泰寿氏の派遣があり、文字資料の積読作業についてご協力をいただいた。(平成24年度まで継続)

文字資料の写真撮影については、独立行政法人奈良文化財研究所史料研究室のご支援を得て、同研究所企画調整部の中村一郎氏にお願いした。(平成24年度まで継続)

平成22年度

遺物整理 整理補助員と、市民考古サポーター第1・2期生の方々のご協力を得て、遺物の洗浄作業が終了した。

洗浄済みの木製品・自然遺物は水漬けの状態、瓦・土器類は乾燥後、チャック付きポリ袋に入れて遺物の種類ごとに分類した。

同一の遺構・地区・土層・出土年月日のものを1つの出土単位とし、出土番号を付し出土台帳を作成する。瓦類・土器類についてはラベルに出土番号を記入すると同時に遺物に注記作業を行う。木製品・金属製品などはラベルに出土番号を記載するだけで注記は行っていない。

保存処理委託 「東海道木簡」、「石上宅嗣の位署書き木簡」、「大徳一心木簡」など、大型で重要度の高い8点の木簡について、アルコール・キシレン法による保存処理を元興寺文化財研究所に委託した。

また、木製品70点の糖アルコール法(ラクチトール・トレハロース混液)による保存処理を環境考古研究会に委託して実施した。

平成23年度

遺物整理 出土遺物の観察・接合作業、遺物の復元作業を行う。各遺物の台帳を作成し、報告書掲載分については実測作業を行った。土器・瓦については破片の点数のカウント作業を行った。

なお、イスラム陶器については、史跡及び埋蔵文化財公開活用事業費の国庫補助を得て、公開活用のための展示台を作成した。

保存処理 板状木簡160点・墨書のある削屑175点・木製品53点の糖アルコール法(ラクチトール・トレハロース混液)による保存処理を環境考古研究会に委託して実施した。

植物遺体分析 土壌中から採取した植物遺体(種実・樹種)の同定作業を環境考古研究会に委託した。葉の同定については、破損が著しく、同定できる試料がなかった。

成分分析 奈良県立橿原考古学研究所の奥山誠義氏に、イスラム陶器の胎土と釉薬の蛍光X線分析・出土した繊維片・不明金属の分析をお願いした。また、木製品に付

着していた金色の物質の成分分析を古環境研究所に委託して実施した。

遺物写真撮影 瓦・土器・木製品の遺物写真50カット分の撮影をアートフォト右文に委託した。

遺物実測・製図作業 木製品73点の実測・製図作業を(株)文化財サービスに委託した。

平成24年度

遺物整理・報告書の作成 報告書に掲載予定以外の木製品を箸状木製品、細棒状木製品、板状木製品、角材状木製品など、形状によって分類し、寸法を記録して点数をカウントする。整理の終わった資料についてはシールパックして保管する。木屑・自然遺物については、各出土単位ごとに湿性重量を計測した。

土器・瓦についても掲載予定外の遺物のデータを記録し、遺物保管に必要な整理作業を行った。

前年度に引き続き、報告書に掲載予定遺物の実測作業実側を行なった。製図作業については、遺構図・土器類・木製品の実測図は、製図ソフトのイラストレーターを使用して、デジタルトレースを行った。これらをまとめて原稿執筆、編集作業を行い、報告書を作成した。

保存処理 板状木簡50点・墨書のある削屑152点、木製品145点の糖アルコール法(削屑のみトレハロース、他はラクチトール)による保存処理を環境考古研究会に委託した。

遺物写真撮影 報告書の図版に使用する土器・木製品の遺物写真40カット分の撮影をアートフォト右文に委託して実施した。

遺物製図作業 木製品116点分の製図作業を(株)文化財サービスに委託して実施した。

(久保邦江)



図2 遺物洗浄・分類の様子

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 位置と環境

I. 西大寺及び調査地の位置と現況

西大寺は、奈良盆地の北西部にある大和川水系の秋篠川の右岸に位置する。西大寺が位置する奈良盆地の北西部は、西辺が西ノ京丘陵の北部、北辺が奈良山丘陵の西部に面しており、丘陵沿いには段丘がみられ、その下位には秋篠川が形成した沖積平野が広がる。丘陵や段丘には、中・小河川の侵食で生じた開析谷がみられる。

西大寺の周辺は、1960年代前半には丘陵が主にマツ林で、秋篠川の沖積平野・開析谷内の谷底平野や段丘上には水田や畑が広がり、集村形態の集落が点在した。この景観は、1887年に旧陸軍陸地測量部作成の地形図から読み取れる景観とあまり変わらない。1960年代後半以降、西大寺西方の丘陵や近鉄西大寺駅周辺で宅地を主とする開発が急速に進み、マツ林や耕地が激減している。

奈良時代の西大寺の寺地は、西ノ京丘陵の西縁に広がる段丘と秋篠川が形成した沖積平野にまたがっており、平城京北西部の右京一条三・四坊の31町を占め、伽藍は東半の右京一条三坊五～十六坪の12町分の範囲と推定されている。現在の寺地は、奈良時代の伽藍推定地の南半部北寄りを占める。市SD25次調査地は、奈良時代の伽

藍南西部にある十一面堂院（十四坪）と西南角院（十三坪）の推定地の境界付近にあたる。現況は、西大寺周辺に広がる家屋密集地の南に面する畑地で、すぐ南を秋篠川支流の外大門川が東流する。

II. 周辺の地形・地質の特色

周辺の地形・地質の特色は、以下の通りである。

1. 丘陵

地形 西ノ京丘陵は、奈良市西部から大和郡山市西部にかけて南北に延びる標高100～150mの丘陵で、尾根筋

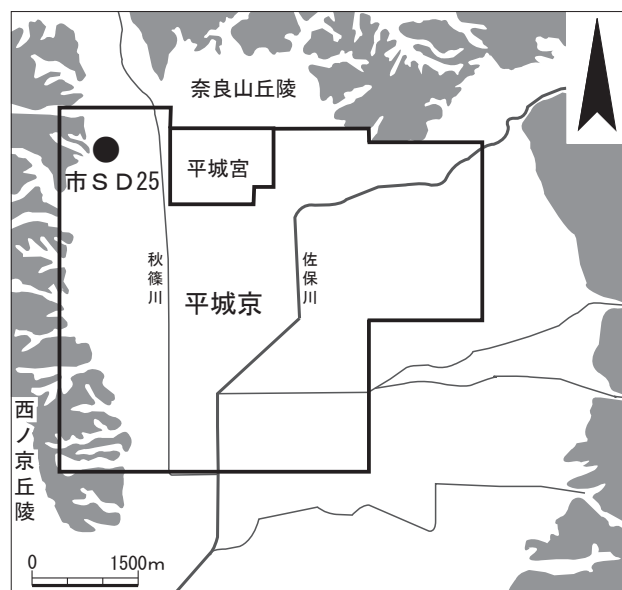


図3 市SD25次調査地の位置

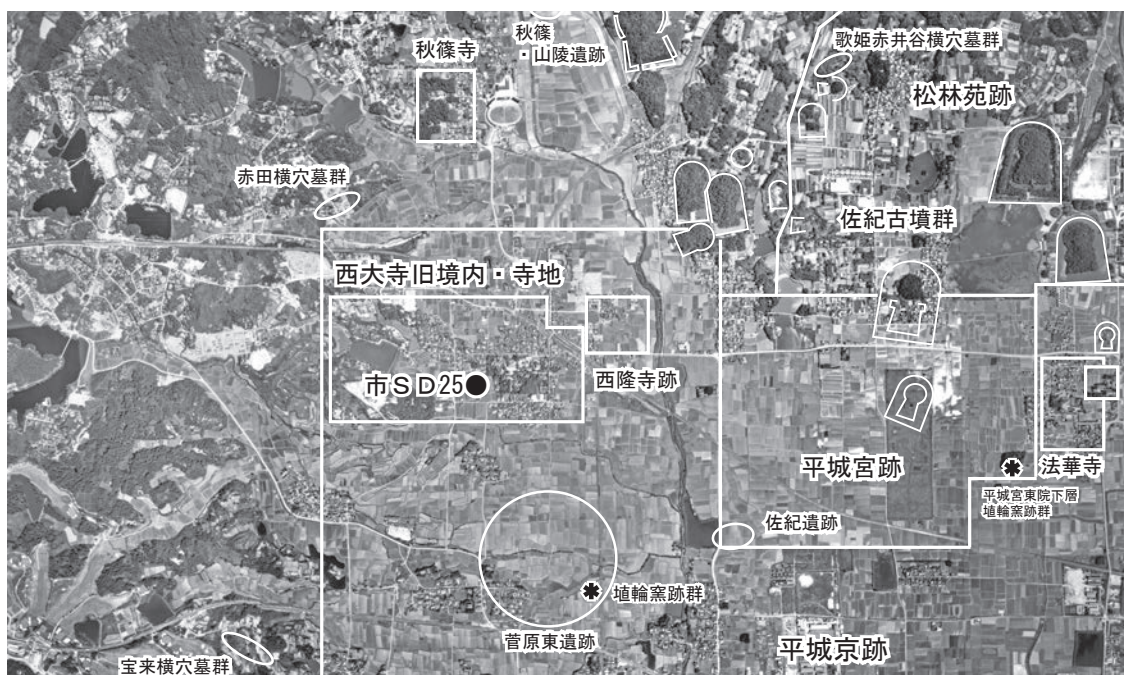


図4 西大寺周辺の航空写真と遺跡（1961年、国土地理院KK-61-3・C3-137～139を合成、上が北）

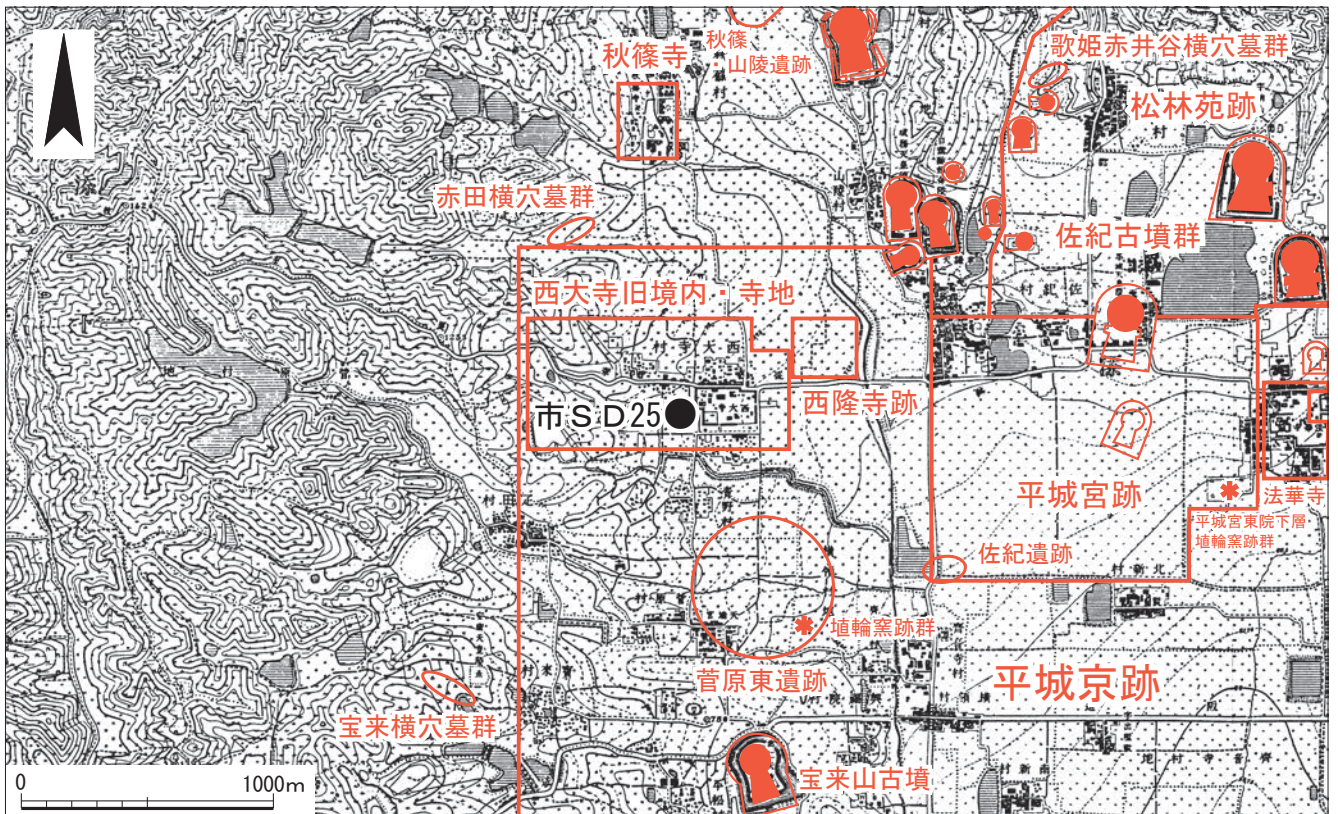


図5 西大寺周辺の旧状と遺跡 (1/30,000、基図は陸地測量部1887年作成の1/20,000地形図を縮小)

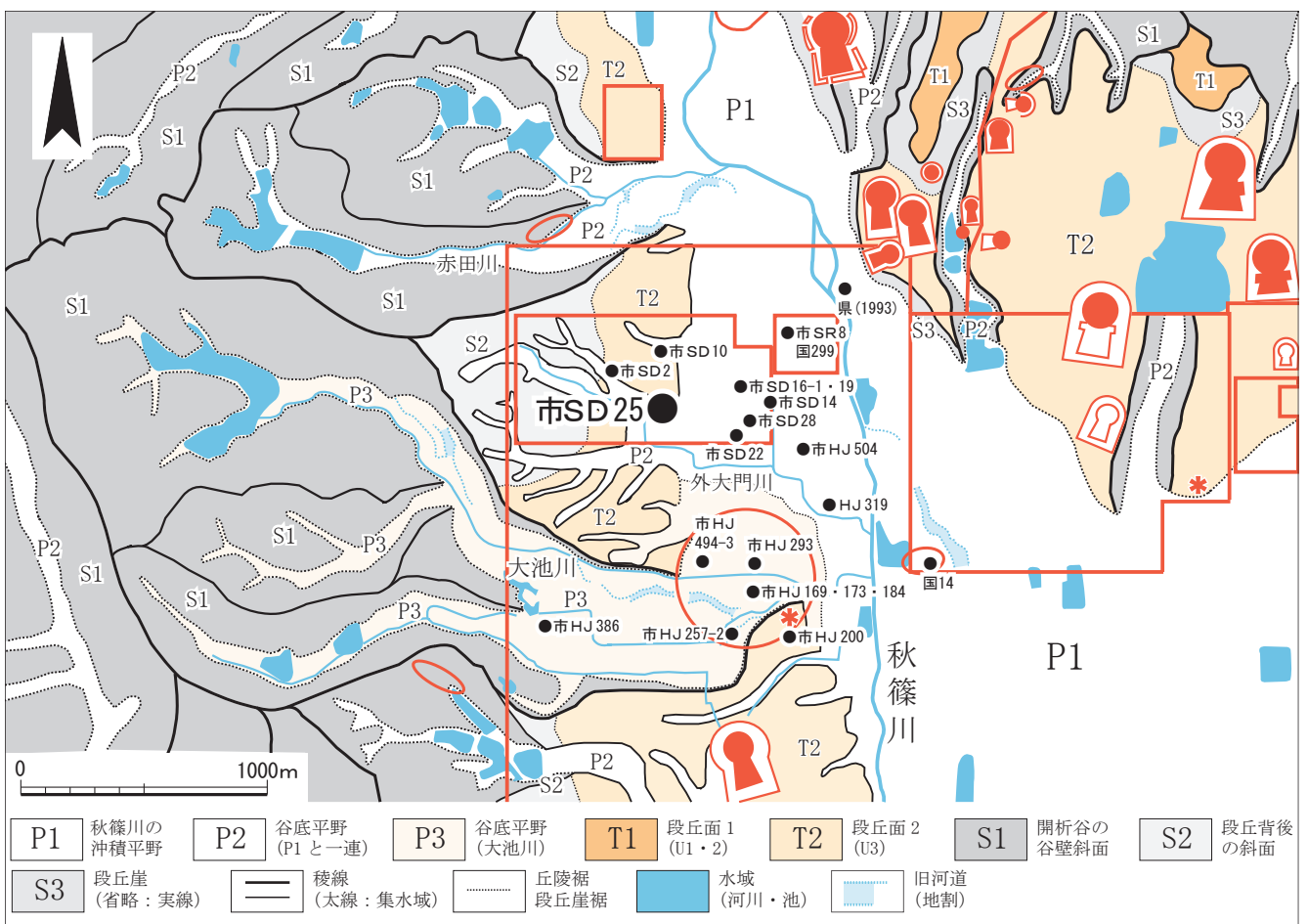


図6 西大寺周辺の地形分類と遺跡・関連調査地 (1/30,000、文2)・文13)・文60)を参考に作成)

は丘陵の西寄りにある。奈良盆地側の東斜面は広く緩やかで、ここを集水域とする秋篠川支流の中・小河川の侵食で生じた開析谷が数多くみられる。

奈良山丘陵は、奈良県と京都府の境界付近で東西に延びる標高100～150mの丘陵で、尾根筋は丘陵の南寄りにあり、京都盆地へ流れる木津川支流の中・小河川の侵食で生じた開析谷が数多くみられる。

地質 更新世前期（約80万～180万年前）に形成された大阪層群下部層に相当する田辺累層の柘榴互層や精華累層で構成されている。柘榴互層は厚さ0.2～0.5mの砂層と泥層の互層である。上限がピンク火山灰層（約100万年前）で、上部に海成粘土層のMa1層を挟む。精華累層は柘榴互層上に堆積する厚さ0.2～1mの砂礫層と厚さ0.05～0.2mの泥層の互層である。

これらは水成層で、大阪層群上部層（大阪平野や京都盆地の周辺の丘陵を構成）形成後の更新世後期（約10～50万年前）に起こった奈良盆地形成につながる地殻変動により基盤が東西方向に圧縮された結果、隆起したうえに走向が南北方向の撓曲が生じている^{文2)}。

2. 段丘

地形 奈良盆地内の段丘は、更新世後期の地殻変動の過程で形成されたと考えられる堆積面を残す地形で、池田硯・大橋健は、地殻変動の初期に形成されたものをU1・2面、その後の現地形・水系の確立期に形成されたものをU3面に分類している^{文60)}。

西大寺がある西ノ京丘陵東縁の段丘はU3面に対応する。秋篠川支流の中・小河川の侵食で生じた東西方向の開析谷で分断されている。奈良山丘陵南縁で平城宮跡がある段丘もU3面に対応する。南北方向の開析谷がみられるが、前者ほど侵食が進んでいない。ともに段丘面の標高は70～80mで、北から南に緩やかに下る。1980年代までは田畑で、平城宮・京の遺存地割が認められた。

地質 ともに耕土等の表土層（厚さ0.5m前後）直下が段丘構成層の最上面で、平城宮・京跡や松林苑跡の発掘調査では古墳時代以降の遺構が検出されている。段丘構成層については、西ノ京丘陵東縁では上位が主に泥層であることが発掘調査で、奈良山丘陵南縁では上部が風化し明赤褐色を呈する厚さ3m以上の砂礫層であることがボーリング調査で確認されている^{文2)}。

3. 西ノ京丘陵の東斜面及び段丘の開析谷

地形 西大寺の北方を東流する赤田川と西大寺の南方を東流する大池川の侵食によって形成された開析谷は、丘陵西寄りの尾根筋近くまで達する。上流部では両者が近接しており、下流部ではともに段丘を南北に分断する。

丘陵の東辺で2つの開析谷の間に残った斜面は西大寺のすぐ南を東流する外大門川の水源地、段丘も含めて樹枝状の開析谷が形成されている。いずれも谷内には河川の沖積作用によって平坦な谷底平野が形成されている。赤田川や外大門川の谷底平野は後述する秋篠川の沖積平野と一連の面をなすが、大池川の谷底平野は北東に下る緩斜面を介して秋篠川の沖積平野に続いている。1980年代頃までは水田が広がり、旧河道を反映する地割や平城京の遺存地割が認められた。

なお、谷頭部には下流側を堤防で堰き止めた溜池があり、現河川の水源地となっている。赤田川と大池川の現河道は概して谷壁斜面の裾に沿い、谷底平野側に堤防が築かれているが、外大門川の現河道は谷底平野のほぼ中央で、両岸に堤防が築かれている。

地質 谷壁斜面については、赤田川沿いの赤田横穴墓群第2次調査地において、8～15世紀にかけて形成された旧表土の上を土砂の流出で堆積した厚さ1～2mの泥・砂互層が覆う状態が確認されている^{文56)}。

大池川下流部の谷底平野では、水田耕土・床土等の表土層（厚さ0.5m前後）の下が沖積層の最上面で、平城京域の発掘調査ではこの面で縄文時代晩期以降の旧河道や遺構、0.2～1m下の沖積層上面で縄文時代中・後期の遺構が確認されている。市HJ386次調査地では、沖積層の上部約2mでは厚さ0.2m前後の泥層や砂層が累重し、最上面から1.2m～1.6m下に有機物の補正¹⁴C年代値が5410～6030年BP（→縄文時代前期）を示す黒泥層を挟むことが確認されている^{文48)}。

なお、赤田川や外大門川の谷底平野における沖積層や遺構面の様相はよくわかっていない。

4. 秋篠川の沖積平野

地形 西ノ京・奈良山丘陵及び両丘陵の縁辺にある段丘の間に幅0.5～1kmの秋篠川の河谷内に形成された沖積平野がある。標高60～80mで、北西から南東に緩やかに下る。1980年代までは水田が広がり、支流の合流部も含めた旧河道を反映する地割、平城宮・京の遺存地割や条里地割が認められた。

秋篠川の現河川は、西ノ京・奈良山丘陵の間では谷底平野の中央を北西から南東に流れ、平城京域では外大門川の合流部より北は沖積平野の中央、南は沖積平野の西辺を南流する。赤田川の合流点以南の現河道は概して両岸に堤防が築かれている。

地質 水田耕土・床土等の表土層（厚さ0.5m前後）の下が沖積層の最上面で、平城宮・京域や北方の秋篠・山陵遺跡の発掘調査ではこの面で縄文時代晩期以降の旧

河道や遺構が確認されている^{文1)}。

西大寺周辺の発掘調査地では、沖積層の上部約1～2mでは厚さ0.2～0.5m程度の黒泥層・泥層や砂層が累重する様相が確認されており、市SD28次調査地では、上部0.5～1mに含まれる流木の補正¹⁴C年代値が2940～3170年BP（→縄文時代晩期）を示す^{文57)}。

Ⅲ. 周辺の遺跡の特色

奈良時代の平城京跡が、赤田川より南方の西ノ京丘陵西縁の段丘・開析谷の谷底平野とその東方の秋篠川の沖積平野にわたって広がる。奈良山丘陵南縁の段丘・開析谷の谷底平野やその縁辺の秋篠川の沖積平野にわたる場所に平城宮跡と後苑の松林苑跡がある。奈良時代の主な寺院については、京内の官寺である西大寺・唐招提寺・薬師寺と京外の秋篠寺が西ノ京丘陵東縁の段丘の東辺部付近、西大寺の尼寺である西隆寺跡が秋篠川の沖積平野に営まれている。

西ノ京丘陵や奈良山丘陵では古墳時代後期後半～飛鳥時代前半の横穴墓と奈良時代の瓦窯が見つかっている。段丘では、特に奈良山丘陵南縁で古墳時代前期末～中期の全長200m以上の大型前方後円墳を含む古墳が数多く築かれ、埴輪生産遺跡もみられる。大池川の谷底平野では縄文時代中期以降、秋篠川の沖積平野では縄文時代晩期以降の生活や居住に関連する遺跡が認められる。

以下、特記すべき点を時代別に記す。

縄文時代 大池川下流部の谷底平野では、菅原東遺跡の市HJ257-2・293次調査地で中期の石器・炭の集積、市HJ494-3次調査地で晩期の土器埋納遺構^{文42・43・50)}、その西方の市HJ386次調査地で後期の土坑^{文48)}が確認されている。秋篠川の沖積平野では、国第212次調査地で晩期の溝^{文20)}、秋篠・山陵遺跡で晩期の土器埋納遺構^{文1)}が確認されている。

弥生時代 大池川下流部の谷底平野では、菅原東遺跡の市HJ173次調査地で中期の方形周溝墓が確認されている^{文27)}。秋篠川の沖積平野では、佐紀遺跡の国14次調査地で後期の竪穴住居・土坑や方形周溝墓が確認されており、土坑から炭化米が出土している^{文13)}。

古墳・飛鳥時代 西ノ京丘陵東縁の段丘上には、古墳時代前期末の大型前方後円墳である宝来山古墳（全長227m）と同後期の埴輪生産遺跡である菅原東遺跡埴輪窯跡群がある。奈良山丘陵南縁の段丘上には、同前期末～中期の全長200m以上の大型前方後円墳を含む佐紀古墳群と同時期の埴輪生産遺跡である平城宮東院下層埴輪窯跡群がある。

古墳時代後期後半～飛鳥時代前半の横穴墓は、西ノ京

丘陵で赤田横穴墓群・宝来横穴墓群、奈良山丘陵で狐塚横穴墓群・歌姫赤井谷横穴墓群等が知られている。墓室内には主に陶棺が納められている。

大池川下流部の谷底平野では、菅原東遺跡で古墳時代前～中期の集落が確認されており、首長居館に伴う可能性がある方形の区画溝がみられる^{文27・28・31・32・34・35・37～40)}。秋篠川の沖積平野では、西隆寺の周辺で古墳時代の集落に関連する建物や溝等の遺構が確認されている。市SR8次調査地や国299次調査地では極楽寺ヒビキ遺跡（御所市）と同様の大型掘立柱建物が確認されており^{文19・54)}、県（1993）調査地では溝から同初頭～中期の土器と前期末の埴輪が出土している^{文7)}。北方の秋篠・山陵遺跡でも、同前・後期の集落が確認されている^{文1)}。

奈良時代・平安時代初頭 平城京跡については、広く宅地として利用されている様相がうかがえる。大池川下流部の谷底平野では、右京二条三坊・三条三坊付近で一町利用の大規模な宅地がみられ、宅地利用が平安時代前期まで継続する傾向がある^{文27・29・33・36・41・44～47)}。

奈良時代の官寺である西大寺・唐招提寺・薬師寺の主要伽藍と、平城宮内の内裏・大極殿・朝堂院は、ともに段丘面の縁辺部を平坦に造成して基壇建物を造営している。平城宮南西部の馬寮の区画では、秋篠川の旧河道を東に付け替えて敷地を造成している^{文13)}。

瓦窯跡は、西ノ京丘陵で中山瓦窯、奈良山丘陵で押熊瓦窯・歌姫瓦窯等が知られている。窖窯や平窯を築き、主に平城宮の瓦を生産している^{文77)}。

なお、市SD25次調査地の西方で外大門川の谷底平野内にある同2次調査地では、奈良時代の遺物包含層から木炭・炉体・轆の羽口・鋳物屑が出土し、近隣に鋳造工房跡の存在が想定される^{文26)}。

平安時代後期～室町時代 大池川下流部の谷底平野では、菅原東遺跡で平安時代後期～室町時代の集落が確認されている。室町時代には方形の区画溝に囲まれた屋敷地を伴う^{文27)}。秋篠川の沖積平野では、西大寺の東方の市SD16-1・19次調査地や市HJ504次調査地で鎌倉～室町時代の井戸や土坑等の居住地の遺構^{文51～53)}、北方の秋篠・山陵遺跡で平安時代後期～室町時代の集落が確認されている^{文1)}。成立時期や存続期間が似ていることから、共通の社会背景下で営まれたことが推察できる。

なお、西大寺東方の市SD14次調査地で西二坊大路、市SD21次調査地で一条南大路の位置を踏襲した流路が見つかっている。ともに付近の河川から砂礫や泥が流入しており、後者は室町時代後半に埋没し、江戸時代に水田化することが確認されている^{文49・55)}。（安井宣也）

第2章 遺跡の立地と歴史的環境



図7 赤田横穴墓群 第1～9号墓（南から）



図8 奈良山丘陵の瓦窯（奈良山第51号窯、北東から）

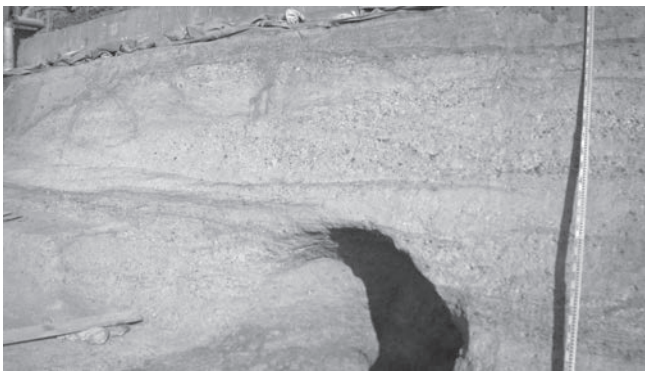


図9 西ノ京丘陵の大坂層群精華累層（赤田横穴墓群内、南から）

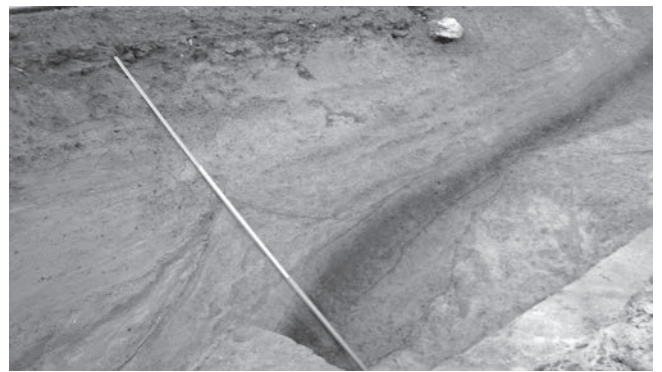


図10 赤田川の開析谷斜面の土層（赤田横穴墓群内、東から）



図11・12 西大寺西方の段丘面・段丘構成層と遺構（市SD10次調査地、左：段丘構成層最上面と奈良時代の遺構－南東から、右：土坑と段丘構成層上部の断面）



図13・14 菅原町・横領町付近の段丘面・段丘構成層と遺跡（市HJ200次調査地、左：段丘面と宝来山古墳・菅原東埴輪窯跡群・平城京跡－北東から、右：菅原東3号埴輪窯と段丘を構成する粘土層－西から）

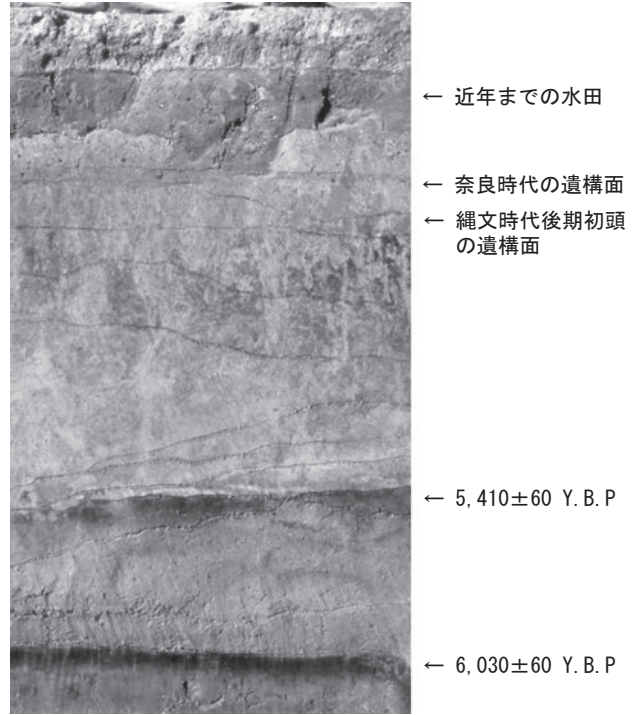
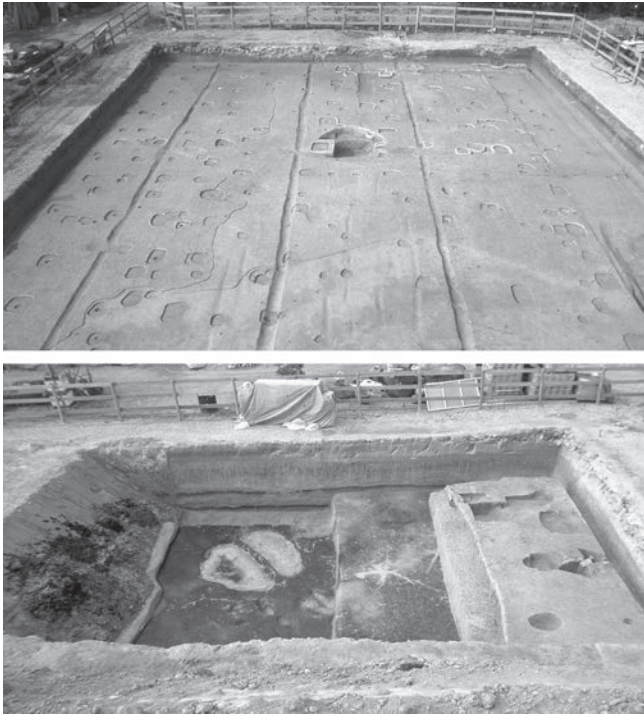


図15・16・17 大池川の谷底平野 沖積層と遺構面（市HJ386次調査地、左上：沖積層最上面と奈良時代の遺構－南から、左下：縄文時代後期前半の遺構（右端）－東から、右：沖積層上部の断面と黒泥層の補正¹⁴C年代）

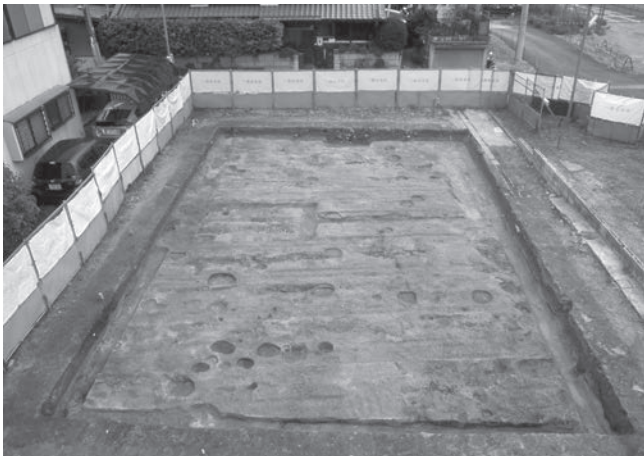


図18・19 秋篠川の沖積平野 沖積層と遺構面（市SD28次調査地、左：沖積層最上面と奈良時代の遺構－南から、右：沖積層上部の断面と含まれる流木の補正¹⁴C年代値－南西から）



図20 外大門川の旧河道（市HJ319次調査地、東から）

図21 一条南大路の位置を踏襲した流路（市SD21次調査地、南東から）

第2節 西大寺の沿革

I. 西大寺の略歴

『西大寺資財流記帳』（以下資財帳）は宝亀十一（780）年に勘録され、西大寺発願の由来から占地、所有する財産などを詳細に記したものである。その資財帳の第一章目ともいべき「縁起坊地第一」には、天平宝字八（764）年9月11日に「称徳孝謙皇帝」（当時は孝謙上皇）、が藤原仲麻呂の乱の戦勝を祈願して七尺の金銅四王像とそれを安置するための寺を建てることを発願し、天平神護元（765）年に金銅四王像の鑄造を開始して、伽藍を開くと書かれている。資財帳が成立した宝亀十一年には主要な建物が建立されていたと考えると、約15年の歳月をかけて造営されたことになる。

『続日本紀』にも西大寺に関する記述は多く、重祚した称徳天皇は造営中の西大寺にしばしば行幸しており、西大寺造営に対する熱の入れようがうかがえる。

宝亀元（770）年、西大寺の完成をまたずして称徳天皇が崩御するが、その後も『続日本紀』には造西大寺に関する叙任記事が見られる。遷都後も、桓武天皇が西大寺に行幸して、曲水の宴を催したという記載があるが、平安時代になって西大寺が文献でみられるのは、ほとんどが罹災と別当叙任の記事である。承和十三（846）年

の講堂焼失、延長年間の塔罹災の記事からもわかるように、次第にその堂宇が欠けていき、保延六（1140）年に記された大江親通の『七大寺巡礼私記』によれば「食堂・四王堂・塔一基のみ残る」有様となり、かなり衰退した様子うかがわれる。

鎌倉時代になると、文暦二（1235）年に叡尊が西大寺にはいり、荒廃していた寺内の整備をおこなって復興をすすめた。

その後、室町時代に弥勒金堂、南僧房、経蔵などが相次いで焼失している。『大乘院寺社雑事記』によると明応八（1499）年と文亀二（1502）年の2度にわたって兵火に会い、塔・四王堂・鐘楼など、かなりの範囲が焼失した。この時、四王堂中門、石塔院、地藏院、東大門のみ焼失せずに残ったようである。焼失後すぐに、光明真言堂の立柱の記事がみられるが、室町時代末の記事は専ら仏像や仏画の修理の記事ばかりで、堂宇を建立した記録はみられない。

江戸時代になって、ようやく堂宇の建立の記事がみられる。寛永元（1624）年には護摩堂建立、延宝二（1674）年に四王堂建立、元禄二（1689）年に本堂修理、享保年間に阿弥陀堂、護国院を建立、明和四（1767）年に愛染堂が上棟されている。元禄十一（1698）年に描かれた「西大寺古伽藍敷地并現存堂舎坊院図」（東京大学文学部蔵）には新たにつくられた子院が数多く描かれており、西大寺

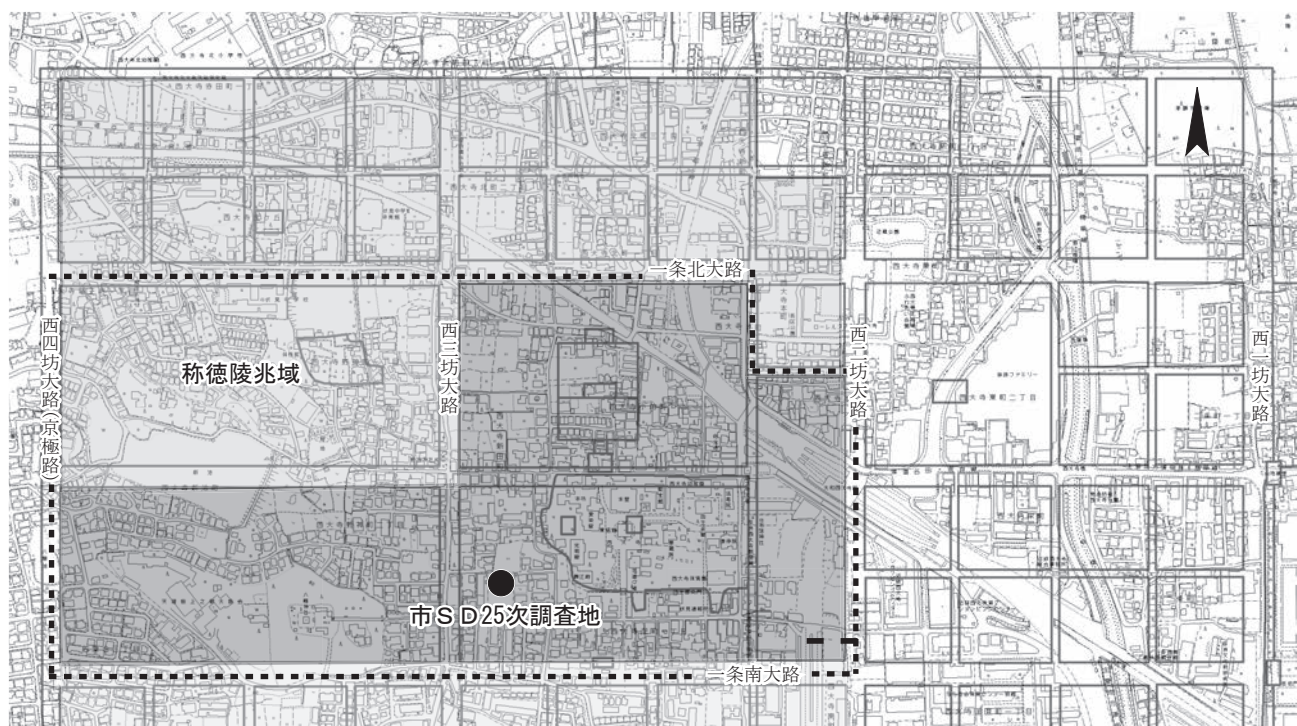


図22 西大寺の占地（1/10,000：点線の範囲は「平城京条坊復元図」による）^{註1)}

の復興の様子がうかがい知れる。江戸時代には元興寺の極楽院・小塔院や白毫寺の小塔院などを末寺とするなど、ある程度の勢力を保持していたことを示す記事もみられる。こうして西大寺は衰退しつつも連綿と法燈を伝え、真言律宗の総本山として現在に至っている。

II. 西大寺の占地

資財帳には西大寺の建立に関わる由来につづき、その占地について記述している。

「居地参拾壹町、在右京一條三四坊、東限佐貴路除東北角裏儀寮、南限一條南路、西限京極路除山陵八町北限京極路」とある。31町の広さは平城京外北東にある東大寺には及ばないが、京内においては当時の最大の寺院であった。

この31町がどの範囲を示すかについては「北限京極路」を一条北大路とするのか、さらに北側の右京北辺坊の北辺を限る東西道路とするのかで諸説があり、まだ、確定しているとはいえない^{註2)}。

図22の濃い網掛け部分は、諸説あるなかで共通して寺域と認められている範囲であり、薄い網掛け部分は、諸説により寺地とされたり、除かれたりしている範囲である。今回の調査地は平城京の条坊復元では右京一条三坊十三・十四坪の間にあたり、従来の諸説からいっても、西大寺旧境内であることは間違いない。

III. 西大寺の伽藍（調査地周辺を中心として）

さらに資財帳には、主要伽藍周辺に配された各院の建物やその規模などを詳細に記述している。

院の記述は、薬師金堂と弥勒金堂が存在した金堂院が最初で、十一面堂院、西南角院、東南角院、四王院、小塔院、食堂院、馬屋房、政所院、正倉院の順になっている。

鎌倉時代に描かれた西大寺敷地之図・西大寺往古敷地図（いずれも東京大学文学部蔵）があり、弥勒金堂、薬師金堂、（寶）塔院、十一面堂院、西南角院、東南角院、四王院、食堂院については、朱書きでその位置が示されている。これらの絵図を参考にして、資財帳の院を記載順に反時計回りで配置した復元案が図23である^{註3)}。この復元でわかる西大寺の伽藍の大きな特徴は、僧房の位置である。奈良時代の大寺院の伽藍復元では、僧房は中心伽藍の周辺に配置され寺院全体の僧房という位置づけになるが、西大寺の僧房は各院の中に取り込まれ、分散して配置されている。

十一面堂院と西南角院との間には通路が推定されており、調査地はまさにその通路の位置に相当する。北側の十一面堂院には、長さ十一丈五尺ある2列の雙堂、2棟の樓・3棟の僧房・小房・屋・門屋などの記述が見られる。規模の点からみてもおそらく雙堂が仏像を安置する

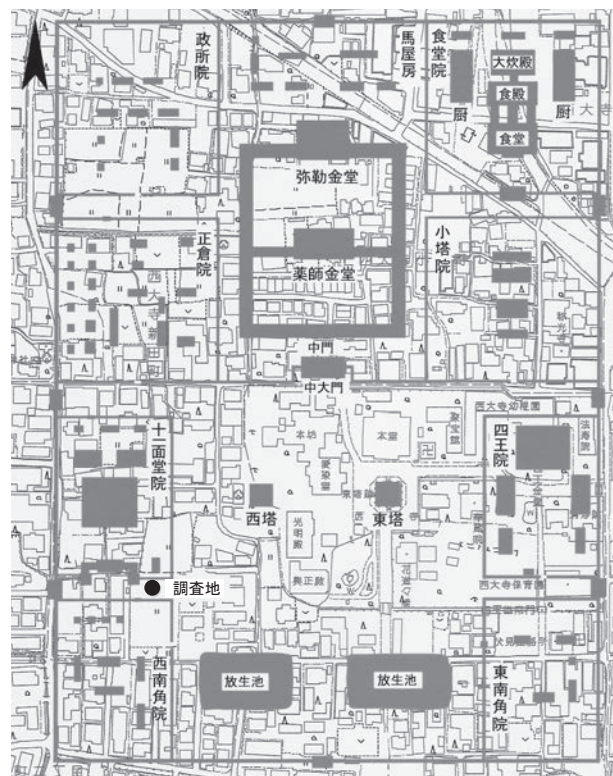


図23 西大寺主要伽藍復元案 (1/5,000)^{註3)}

堂宇で、十一面堂であったのであろう。そこには不空羅索観音菩薩立像と十一面観音菩薩像が併存して本尊とされ、当時の信仰上特に重要な堂舎であったことが推定される^{文59)}。また、南檜皮葺門屋があり、このことが十一面堂院の南面に通路を推定する根拠となっている。南側の西南角院に関しては、草葺板倉、草葺丸木倉など、長さ2丈足らずの倉4棟と、5棟の檜皮葺の建物がある。西南角院の名称は東南角院と同様、位置を示すものでその機能がわからない。他の院、例えば金堂院、十一面堂院、四王院にある堂には、仏像を安置していることが資財帳の記載から明らかで、そこでは宗教的行事が行われていたことが予想される。また、食堂院・正倉院・政所院・馬屋房などはその名称から機能がある程度判断できる。南側の東西角に推定される二つの院は、中心となる大型建物がなく閑散とし、これらより北側に位置する他の院とは性格を異にした可能性がある。（久保邦江）

註1) 「平城京条坊復元図」は平成7年度作成の1:10,000奈良市全図を平成8年4月に編纂焼付した図である。計画機関は奈良国立文化財研究所で、奈良市が作成した。

註2) 直木孝次郎「称徳天皇山陵の所在地」『有光教一先生白寿記念論集』高麗美術研究所 2006、井上和人「平城京右京北辺坊考」『古代都城制条理制の実証的研究』学生社 2004など多数ある。

註3) 宮本長二郎他『平城京復元模型記録』奈良市 1978を、1:2,500奈良市都市計画図にあてはめて作成。

表1 西大寺関連年表（『南都七大寺の歴史と年表』太田博太郎 1979^{x74)} の西大寺関連の主な部分を抜粋し、一部加筆。）

西暦	年号	日付	記 事
764	天平宝字八	9月	恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱。押勝琵琶湖湖西にて斬死。（続日本紀）
		9月11日	孝謙太上天皇が七尺の金銅四天王の造像と寺院建立を祈願。（西大寺資財流記帳）
		10月9日	称徳天皇重祚（続日本紀）
765	天平神護元		道鏡が大臣禪師になる。（続日本紀）
		10月	道鏡が太政大臣禪師になる。（続日本紀） 金銅四天王像を鋳始め、伽藍を開く。（西大寺資財流記帳）
766	天平神護二	10月20日	道鏡が法王になる。（続日本紀）
		12月12日	称徳天皇が西大寺に行幸する。（続日本紀） 封戸・蘭地を施入。（西大寺資財流記帳）
767	天平神護三	2月28日	佐伯今毛人を造西大寺長官、大伴伯麻呂を同次官に任命する。（続日本紀）
		3月3日	称徳天皇が法院に行幸する。（続日本紀）
768	神護景雲元	9月2日	称徳天皇が嶋院に行幸する。（続日本紀）
		2月18日	飛騨国造高市麻呂・橘部越麻呂を造西大寺大判官に任命する。（続日本紀）
769	神護景雲二	4月24日	称徳天皇が西大寺に行幸する。佐伯今毛人・益田繩手等の造寺官の官位を進む（続日本紀）
		6月15日	弥勒浄土堂を建立。（扶桑略記） 実忠、東大寺工を率いて齋会の幡20基を立つ。（東大寺要録）
770	神護景雲四		封戸・蘭地を施入、薬院に備前国水田を施入（西大寺資財流記帳）
		2月23日	東塔の心礎用の巨石を祟りのために破却し、焼酒を注ぎ道路に棄てる。（続日本紀）
772	宝亀三	8月4日	称徳天皇崩御。道鏡が下野国薬師寺別当に左遷される。（続日本紀）
		4月6日	道鏡が下野国で没する報がある。（続日本紀）
		4月29日	西塔に落雷。（続日本紀）
773	宝亀四	11月1日	粟田公足を造西大寺員外次官、軽間島麻呂を同修理次官に任命（続日本紀）
774	宝亀五	5月19日	津連秋主を造西大寺次官に任命。（続日本紀）
776	宝亀七	5月10日	大和国添下郡京北（四条）の班田を行う（西大寺関係銘文）
780	宝亀十一	7月19日	西塔に落雷。（続日本紀）
781	天応元	12月29日	『西大寺資財流記帳』を勘録。「絵図流記」を作る。（西大寺資財流記帳）
785	延暦四	4月3日	光仁天皇から桓武（山部親王）に譲位する。（続日本紀）
846	承和十三	3月3日	桓武天皇が、文人を嶋院に召して曲水の宴を催す。（続日本紀）
860	貞観二	12月11日	講堂（薬師金堂のことか？）佛像焼失。（続日本後紀）
927	延長五		西大寺炎上。（和州旧跡幽考）
928	延長六	10月	塔「火」あり。（日本紀略）
962	応和二	7月11日	五重塔、落雷により焼失。（扶桑略記）
1048	永承三	8月30日	大風雨により西大寺食堂一字など損壊。（日本紀略）
1138	保延四	1月20日	鐘楼顛倒後再建なく、鐘を興福寺に移す。（造興福寺記）
1140	保延六	12月29日	四王堂の再建で、別当済円を権律師に除す。（三会定一記）
1153	仁平三		食堂・四王堂・塔一基のみ残る。（七大寺巡礼私記）
1206	建永元	5月14日	覚珍、塔の修造功により権律師に叙せられる。（興福寺別当次第）
1235	文暦二	5月29日	覚芸、東大門造営功により権律師に叙せられる。（三長記）
1238	嘉禎四	1月16日	叡尊が西大寺に住み始める。（感身学正記）
1245	寛元三	8月5日	叡尊が、海竜王寺から西大寺に戻る。（感身学正記）
1278	弘安元	9月上旬	八角五重の石塔を建て、舍利を奉納。（感身学正記）
1280	弘安三	11月	真言堂建立。（興正菩薩行実年譜）
1290	正応三	6月26日	護摩堂建立。（興正菩薩行実年譜・西大寺三宝物田畠目録）
1302	乾元元		叡尊、新造の僧房に移り澄む。（感身学正記）
1307	徳治二		『西大寺敷地図』成立。（西大寺関係銘文）
1361	正平十六・延文六	8月25日	叡尊没。（（叡尊上人）遷化之記）
1499	明応八	12月26日	このころ秋篠寺と山地につき相論。（吉続記）
1502	文亀二	2月29日	弥勒金堂を焼失。（一代要記）
1504	永正元	1月17日	南僧房・経蔵・湯屋等焼失。（嘉元記）
1514	永正十一	12月18日	兵火にかかる。（大乘院寺社雑事記）
1547	天文十六	5月7日	兵火により、塔・四王堂・鐘楼をはじめ一山焼亡。四王堂中門・石塔院・地藏院のみ免る。（大乘院寺社雑事記）
1599	慶長四	8月3日	光明真言堂立柱。（大乘院寺社雑事記）
1624	寛永元	12月1日	大黒天像造立。（西大寺関係銘文）
1633	寛永十	5月24日	地藏菩薩像造立。（西大寺関係銘文）
1674	延宝二	8月15日	地藏菩薩像の首を修理。（西大寺関係銘文）
1687	貞享四	12月13日	釈迦三尊十六善神画像修理。（西大寺関係銘文）
1689	元禄二	3月19日	護摩堂建立。（西大寺関係銘文）
1698	元禄十一	3月7日	（元興寺）極楽院・小塔院、西大寺の末寺となる。（西大寺末寺帳）
1719	享保四	3月7日	四王堂建立。（和州旧跡幽考）
1767	明和四		白毫寺普門院下の小塔院、西大寺の末寺となる。（西大寺集会引付）
1794	寛政六	1月5日	本堂修理。（西大寺関係銘文）
	享保年間	8月	「西大寺伽藍絵図」を描く。（西大寺関係銘文）
		8月26日	金堂宝塔修理。（西大寺関係銘文）
			阿弥陀堂・護国院建立。（西大寺関係銘文）
		6月24日	愛染堂上棟。（西大寺関係銘文）
		4月19日	西塔跡より古銭を発掘する。（西大寺文書）

第3節 西大寺旧境内の既往の調査

西大寺旧境内では、昭和30・31（1955・1956）年の大岡実氏を団長とする文部省科学研究費の調査を皮切りに、奈良（国立）文化財研究所（以下奈文研）、奈良県、奈良市、西大寺清浄院発掘調査委員会などによって、合わせて76次（平成23年度末現在。立会、試掘調査を除く）の調査が行われている。前述のように、旧境内の範囲がどこまで含まれるかという問題はあるが、奈良市では「条坊復元図」による旧境内の範囲の調査について、調査次数を通して付けて整理している^{註1)}。

以下、奈良時代の西大寺に関する主要な調査の概要と、今回の調査地周辺の調査例を概観する^{註2)}。

金堂院については、平成16年度に奈良市が実施した試掘調査（市04-13次）^{註3)}で薬師金堂の基壇を確認しており、平成18・19（2006・2007）年度に奈文研が実施した国409次・422次調査で建物基壇とその柱穴を確認している。この建物はSB1000と報告され、柱穴は南北幅が1.7mもある大きいもので、柱穴の中には二上山産の流紋岩質

溶結凝灰岩の切石を2個並べて据えてあった。調査範囲が狭く建物の全貌が明らかになったわけではないが、柱穴の規模、柱間などを考慮すると、このSB1000は薬師金堂で間違いないと考えられている。

東塔・西塔については、先にふれた昭和30・31（1955・1956）年の調査で、東西両塔ともに八角形の掘込地業跡を検出し、西大寺の主要伽藍の中軸線が、右京一条三坊十一坪の中心を通ることが判明した。また、奈文研が昭和56（1981）年に実施した調査で、東塔の八角形基壇の掘込地業と計画変更後の基壇築成土を確認している。防災施設工事関連では、奈文研が昭和62（1987）年度に東塔跡、平成元（1989）年度に西塔跡をそれぞれ調査し、八角形基壇の掘込地業を確認している。

中大門推定箇所では、奈文研が昭和50（1975）年に国95-9次調査を実施した。門の遺構は確認できなかったが、西大寺造営以前の4条の東西溝を検出し、そのうちの2本は一条条間路の南北側溝であるとした。道路幅は側溝の心々で5.8m、さらにこの道路心と平城宮西面北門心がほぼ一致すると報告されている。

四王院推定地では、昭和61（1986）年度に奈文研が調

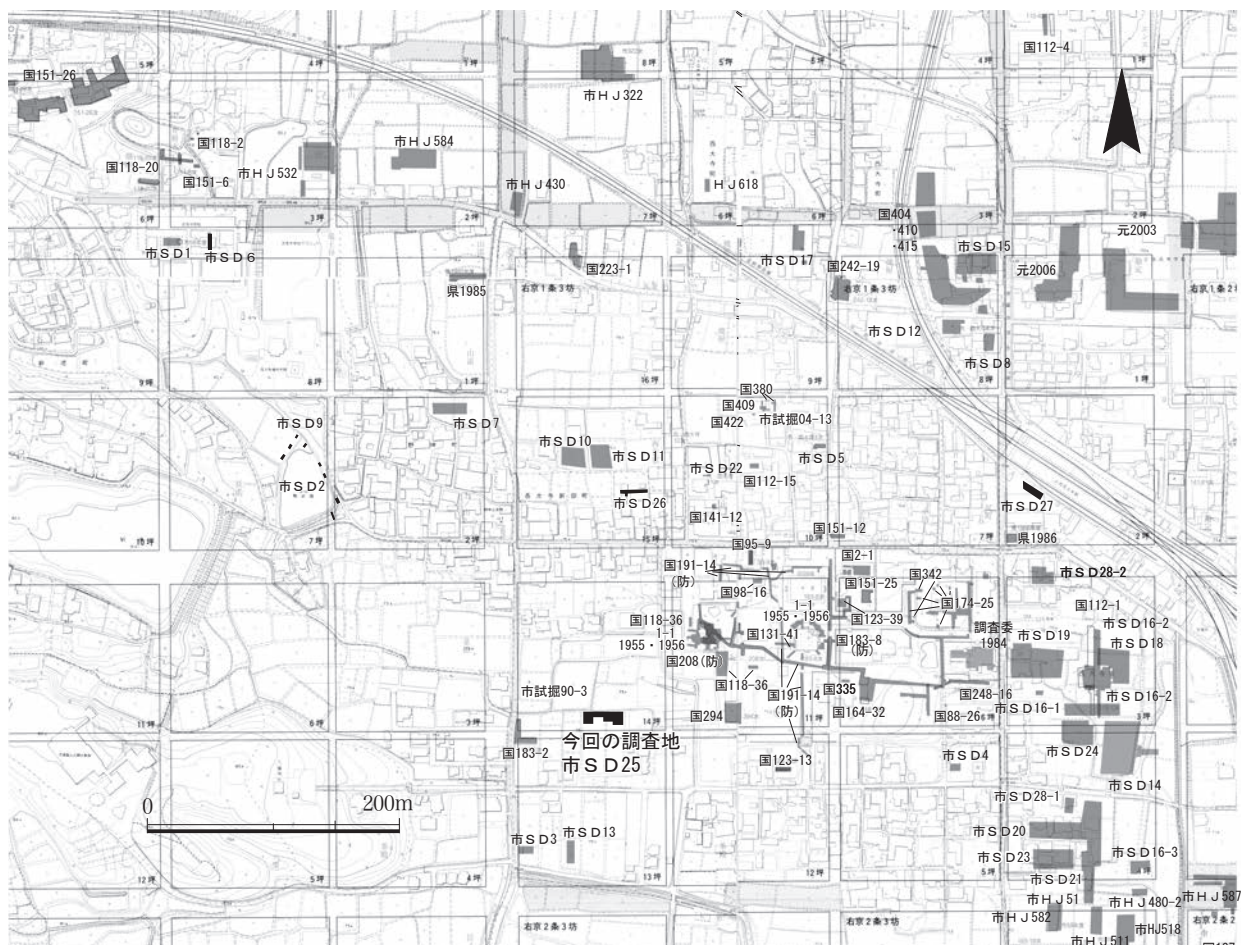


図24 西大寺旧境内の調査例（1/6,000）
 (『平城京条坊総合地図』(奈良文化財研究所2003)の「西大寺」「野上」「山陵」「秋篠寺」をもとに作成)

表2 西大寺旧境内発掘調査一覧(奈良(国立)文化財研究所調査分)

No.	調査回数	調査年度	伽藍・院推定地名・平城京条坊等	調査地	調査面積(m ²)	典拠・文献(*印は調査一覧表の記載のみ)
1	2-1	1959	一条条間路			『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』(付録掲載)
2	88-26	1974	四王院推定地	西大寺町	171	『昭和49年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』*
3	95-9	1975	一条条間路 中大門跡推定地	西大寺芝町1-1-5	33	『昭和50年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
4	98-16	1976	中門跡推定地南東	西大寺芝町1-1-5	24	『昭和51年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
5	112-1	1978	寺地推定地 右京一条三坊三坪	奈良市西大寺町上瀬2414	490	『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
6	112-15	1978	金堂院推定地	西大寺町	18	『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』*
7	118-36	1979	西塔の南方・西塔の南東・西塔の北西	西大寺芝町1-1-5	214	『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
8	123-13	1980	南門の西方	西大寺新田町2545	35.2	『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』*
9	123-39	1980	東塔の北東・右京三坊坊間路	西大寺芝町1-1-5	45.5	『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
10	131-37	1981	(本堂の西)	西大寺芝町1-1-5	15	『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
11	131-39	1981	(本堂の西)	西大寺芝町1-1-5	26	『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
12	131-40	1981	(本堂の西)	西大寺芝町1-1-5	7	『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
13	131-41	1981	東塔	西大寺芝町1-1-5	15	『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
14	141-12	1982	金堂院回廊南西隅推定地	西大寺西坊町	5	『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』*
15	151-12	1983	西三坊坊間路	西大寺小坊町320	33	『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』*
16	151-25	1983	右京一条三坊六坪	西大寺芝町1-2578	54	『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
17	164-32	1985	四王院推定地西南	西大寺町2585	140	『昭和60年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、 『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』
18	174-25	1986	四王院・四王堂	西大寺芝町一丁目	456.7	『昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、 『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』
19	183-2	1987	西南門推定地	西大寺新田町2555	90	『昭和62年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』*
20	183-8	1987	(現本堂～現護摩堂)	西大寺芝町一丁目	324	『昭和62年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、 『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』
21	191-14	1988	(現本堂北と西、現本坊北と西、 現本堂～本坊間、現愛染堂東 南、東塔～南門、南門の南)	西大寺芝町一丁目	330	『昭和63年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、 『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』
22	208	1989	右京一条三坊十一坪	西大寺芝町一丁目	300	『1989年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、 『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』
23	223-1	1991	政所院推定地・右京一条三坊 十六坪西北隅	西大寺新田町	110	『1991年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
24	223-11	1991	東塔の東南	西大寺町	472	『1991年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
25	242-19	1993	右京一条三坊八坪、西三坊坊間路	西大寺町	187	『1993年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
26	248-16	1994	四王院推定地・右京一条三坊六坪	西大寺町	67	『1994年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』*
27	294	1998	西塔の南方・右京一条三坊十一坪	西大寺芝町	180	『奈良国立文化財研究所年報1999-III』
28	334	2001	(体性院)	西大寺野神町	15	『奈良文化財研究所紀要2002』*
29	335	2001	(護国院の北部)・右京一条三坊六坪	西大寺町	21	『奈良文化財研究所紀要2002』
30	341	2001	(法寿院)、右京一条三坊六坪	西大寺芝町	61.5	『奈良文化財研究所紀要2003』
31	342	2001	四王堂	西大寺芝町	16.5	『奈良文化財研究所紀要2003』
32	380	2004	右京一条三坊九坪 薬師金堂 (浄土院)	西大寺小坊町	29	『奈良文化財研究所紀要2005』*
33	391	2005	西大寺旧境内寺地・(石落神社)	西大寺小坊町	4.9	『奈良文化財研究所紀要2006』*
34	404	2006	食堂院推定地	西大寺本町	728	『奈良文化財研究所紀要2007』、 『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』
35	409	2006	薬師金堂	西大寺小坊町	32	『奈良文化財研究所紀要2007』
36	410	2006	食堂院推定地・右京北辺	西大寺本町	1111	『奈良文化財研究所紀要2007』、 『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』
37	415	2006	食堂院推定地	西大寺本町	61	『奈良文化財研究所紀要2007』、 『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』
38	422	2007	薬師金堂	西大寺小坊町	94.5	『奈良文化財研究所紀要2008』
39	473	2010	金堂院回廊外側	西大寺小坊町	15	『奈良文化財研究所紀要2011』*
40	485	2011	薬師金堂 (浄土院)	西大寺小坊町7-26	20	『奈良文化財研究所紀要2012』*

表3 西大寺旧境内発掘調査一覧(奈良県調査分)

No.	調査回数	調査年度	伽藍・院推定地名・平城京条坊等	調査地	調査面積(m ²)	典拠・文献
41	県1985	1985	称徳陵兆域推定地・右京一条四坊 一坪、西三坊大路	西大寺野神町一丁目 624-3	記載 なし	『奈良県遺跡調査概報1985年度第一分冊』
42	県1986	1986	寺地推定地・右京一条三坊二坪	西大寺国見町一丁目2	170.1	『奈良県遺跡調査概報1986年度第二分冊』

表4 西大寺旧境内発掘調査一覧(奈良市調査分)

No.	調査次数	調査年度	伽藍・院推定地名・平城京条坊等	調査地	調査面積(m ²)	典拠・文献
43	SD 1 (旧HJ47)	1983	称徳陵兆域推定地・右京一条四坊八坪	西大寺野神町1-6-1	120	『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和58年度』 〔※「平城京右京一条四坊八坪の調査」として報告〕
44	SD 2 (旧HJ83)	1985	称徳陵兆域推定地・右京一条四坊七坪	西大寺野神町1576ほか	49.8	『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和59年度』 〔※「平城京右京一条四坊七坪の調査」として報告〕
45	SD 3 (旧SD 1)	1985	西南角院推定地・右京一条三坊十三坪	西大寺芝町1-2525、2527 ～2530	80	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和61年度』 〔※「西大寺旧境内(第1次)の調査」として報告〕
46	SD 4 (旧SD 2)	1988	東南角院推定地・右京一条三坊五坪	西大寺芝町1-2463、2464	44	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和63年度』 〔※「西大寺旧境内(第2次)の調査」として報告〕
47	SD 5 (旧SD 3)	1988	金堂院推定地・右京一条三坊十坪	西大寺小坊町330-3	20	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和63年度』 〔※「西大寺旧境内(第3次)の調査」として報告〕
48	SD 6 (旧SD 4)	1989	称徳陵兆域推定地・右京一条四坊	西大寺野神町1-6-1	30	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成元年度』 〔※「称徳陵兆域推定地(西大寺旧境内第4次)の調査」として報告〕
49	SD 7 (旧HJ235)	1991	称徳陵兆域推定地・右京一条四坊二坪	西大寺野神町1-159番地 ほか	176	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成3年度』 〔※「平城京右京一条四坊二坪の調査 第235次」として報告〕
50	SD 8	1993	食堂院推定地・右京一条三坊八坪	西大寺本町250番2、3、5	98	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成5年度』
51	SD 9	1993	称徳陵兆域推定地・右京一条四坊七坪	西大寺野神町1-1577	50	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成5年度』
52	SD10	1996	正倉院推定地・右京一条三坊十坪	西大寺新田町523	295	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成9年度 (第一分冊)』
53	SD11	1997	正倉院推定地・右京一条三坊十坪	西大寺新田町523ほか	206	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成9年度 (第一分冊)』
54	SD12	1997	食堂院推定地・右京一条三坊八坪	西大寺本町250-6ほか	130	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成9年度 (第二分冊)』
55	SD13	1999	西南角院推定地・右京一条三坊十三坪	西大寺芝町二丁目2552-1、2	75	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成11年度』
56	SD14-1	2002	西大寺寺地推定地・右京一条三坊四坪、 一条条間南小路)	西大寺南町2413	1000	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成14年度』
57	SD14-2	2002	西大寺寺地推定地・右京一条三坊四坪、 一条条間南小路)	西大寺南町2364ほか	87	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成14年度』
58	SD15	2003	食堂院推定地・右京一条三坊八坪	西大寺本町258-1、260-7	332	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成15年度』
59	SD16-1	2003	寺地推定地・右京一条三坊三坪	西大寺南町2414-1ほか	740	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成15年度』
60	SD16-2	2003	寺地推定地・右京一条三坊三坪			『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成15年度』
61	SD16-3	2003	寺地推定地・右京一条三坊四坪	西大寺南町2390-6ほか	100	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成15年度』
62	SD17	2004	金堂院推定地・右京一条三坊九坪	西大寺北町一丁目370-6 ほか	252	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成16年度』
63	SD18	2004	寺地推定地・右京一条三坊三坪	西大寺南町2419ほか	490	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成16年度』
64	SD19	2004	寺地推定地・右京一条三坊三坪	西大寺南町2430-1ほか	1000	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成16年度』
65	SD20	2005	寺地推定地・右京一条三坊四坪	西大寺南町2405-1ほか	1060	『奈良市埋蔵文化財調査年報平成17(2005)年度』
66	SD21	2005	寺地推定地・右京一条三坊四坪、 一条南大路	西大寺南町2387-2ほか	460	『奈良市埋蔵文化財調査年報平成17(2005)年度』
67	SD22	2006	金堂院西面回廊推定地・右京一条三坊十坪	西大寺小坊町348-18	3	『奈良市埋蔵文化財調査年報平成18(2006)年度』
68	SD23	2007	寺地推定地・右京一条三坊四坪	西大寺南町2406-5ほか	495	『奈良市埋蔵文化財調査年報平成19(2007)年度』
69	SD24	2008	寺地推定地・右京一条三坊四坪、 一条条間南小路	西大寺南町2438-1ほか	400	『奈良市埋蔵文化財調査年報平成20(2008)年度』
70	SD25	2009	十一面堂院推定地・西南角院推定地・ 右京一条三坊十三・十四坪 一条条間南小路(今回の調査地)	西大寺新田町2564-1ほか	321	『西大寺旧境内発掘調査報告書1』 —西大寺旧境内第25次調査—
71	SD26	2009	正倉院推定地 右京一条三坊十五坪	西大寺新田町536番ほか	44	『奈良市埋蔵文化財調査年報平成21(2009)年度』
72	SD27	2009	寺地推定地・右京一条三坊二坪	西大寺国見町一丁目224番地1の 一部ほか	78	『奈良市埋蔵文化財調査年報平成21(2009)年度』
73	SD28-1	2010	寺地推定地・右京一条三坊三坪	西大寺南町2405-6	150	『奈良市埋蔵文化財調査年報平成22(2010)年度』
74	SD28-2	2010	寺地推定地・右京一条三坊四坪	西大寺南町2425-3ほか	452	『奈良市埋蔵文化財調査年報平成22(2010)年度』

表5 西大寺旧境内発掘調査一覧（その他の機関調査分）

No.	調査回数	調査年度	伽藍・院推定地名・平城京条坊等	調査地	調査面積(m ²)	典拠・文献
75	1-1	1955 ～ 1956	東西塔跡 (文部省科学研究費による調査)			「西大寺東西両塔跡の発掘」『仏教芸術第62号』1966
76		1984	四王院推定地(清浄院) (西大寺清浄院発掘委員会による調査)	西大寺芝町1-1-5	264	『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』の巻末に付録

査した防災施設関連の国174-25次調査で、創建当初の四王堂と思われる基壇を有する掘立柱建物を検出している。調査の結果、創建時の四王堂は基壇化粧が凝灰岩で北側に階段があることがわかった。全体の規模はわからないが、資財帳の建物規模と矛盾しない。この建物配置についての考察では、四王堂の中心は左京一条三坊六坪の東西中心線上にあるのではなく約50尺東にずれた位置になり、これは西大寺の伽藍中心線から500尺東、一条条間路から100尺南のところ計画されたものであるという。四王堂は当然四王院の中心的建物であるから建物の中心で折り返した院の東西方向の幅は約350尺に復元でき、通常の坪の東西幅(450尺)より100尺ばかり幅が狭くなる可能性がある。

食堂院推定地では、平成9(1997)年度の市SD12次調査で大型建物SB07を検出、平成15(2003)年度の市SD15次調査で南北方向の凝灰岩列と埋甕列を検出した。平成18(2006)年に奈文研が実施した国404・410・415次調査では、検出した建物の規模が、資財帳に記載されている規模と一致しているとしている。ただし、調査で検出したSB960が「大炊殿」、SB955が「殿」にあたるが、SB970を「甲双倉」にあてることについては、問題点が残るとしている。また、井屋をもつ戸SE950を検出しており、枠内の埋土から大量の木簡が出土している。その内容は食材の進上に関わる木簡、食材の保管に関わる木簡、食料ないし食材の支給に関わる木簡の三種類で構成されており、まさしく食堂院で使用されたものであったといえる。

この調査で判明した食堂院の中軸線は、先述の四王堂の成果と同様、坪の中心ではなくそこから約50尺東にずれることがわかった。このことから、食堂院の敷地の東西幅については、一坪分よりも狭かったという指摘がなされている。この中軸線が判明したことにより、市SD12次調査で検出した大型建物が中軸線で折り返した場合に梁行60尺となり、資財帳記載の「食堂」の規模と一致することが判明した。これらの調査結果から、食堂院が主要伽藍の北東隅部にあることは間違いない。

今回の調査地周辺の調査例については、南側の西南角

院推定地で、平成11(1999)年度に奈良市が市SD13次調査を実施している。検出した遺構は奈良時代以前の自然流路と、奈良時代の掘立柱建物である。掘立柱建物からは、奈良時代前半の土器・瓦が出土しており、西大寺造営以前の遺構であった。

今回の調査地の西側延長上の西大寺南西門が推定される位置で、昭和62(1987)年度に奈文研が国183-2次調査を実施しているが、門の遺構は検出されなかった。また、今回の調査で検出したSD01の続きにあたる溝も検出されていない。

十一面堂院推定地では平成2(1990)年に奈良市が試掘調査を実施しており(市90-13次^{註4)}、柱穴と溝を確認しているが、詳細な時期はわからない。

今回の調査地の東側約80m隔てた、西塔の南側にあたる位置で、平成6(1994)年に奈文研が国294次調査を実施しているが、奈良時代の遺構はなく、西側同様に溝SD01の続きは見つかっていない。

(久保邦江)

註1) 奈良県が公開している「奈良県遺跡地図」のWeb版では、喪儀寮を含んだ部分を西大寺跡(5A-104)としているが、奈良市教育委員会では現在のところ従来の「平城京条坊復元図」に基づき、喪儀寮の部分は西大寺旧境内に含めていない。なお、右京一条三坊一坪で元興寺文化財研究所が平成18(2006)年に行った調査^{文4)}では、「同法所」と書かれた墨書土器が出土しており、「当該地が喪儀寮である確率はきわめて低いと結論付けられる。」としている。

註2) 各調査例の説明については一覧の典拠・文献の項に記載されている文献を参考にしており、特に参考文献を引かない。

註3) 奈良市教育委員会「25.平成14～17年度実施試掘調査一覧」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成17(2005)年度』2008の一覧表に掲載。国409次調査との位置関係については、国409次の報告文中に掲載^{文22)}。

註4) 奈良市教育委員会「4. その他の小規模調査・立会調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度』1991^{文30)}の一覧表に掲載。

第3章 検出遺構

第1節 調査の方法

奈良市が平城京内で実施する発掘調査は、同じく京内を発掘する他の機関（奈良文化財研究所・奈良県・大和郡山市）と共通した地区割りをを用いている。地区割りの詳細については『1989年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』（1990）^{文16)}に記載がある。

平成14（2002）年4月1日から改正測量法が施行されたのにもない、地区割りも改訂された。改訂後の座標については、奈良文化財研究所が作成した『平城京跡発掘調査地区割図2003』^{註1)}にまとめられている。奈良市では、平成19（2007）年度以降、改訂後の地区割りをを用いて調査を実施している。

大地区 地区割りは平城京朱雀大路心と平城京二条大路計画心との交点に近い座標点（世界測地系第VI系 X

= -145,674、Y = -18,846）を基準にし、南北・東西とも531m（約1800尺）ごとに大きく区切っている。これを、大地区とよび、ほぼ平城京の一坊分の大きさに相当する（図25）。

大地区内の寺院跡および東西両市跡については、特定の遺跡記号が付けられている。また、これらの推定域については、遺跡の大きさに従って大地区、あるいは大地区を南北・東西ともに四分し計十六分割した範囲をあてる。この十六分割したものが、一坪分の大きさにほぼ相当する（図26）。

中地区 大地区を東西二分し、南北を九分割して計18に分割したものが中地区である（図27）。中地区はアルファベットの大文字で南東の隅から上へA・B・C…Iと表記され、南西に移って同様にJ・K・L…Rと続く。

小地区 中地区の中を3mごとに区切り小地区とする。小地区は、3mごとに東西方向を東から10より始まる数

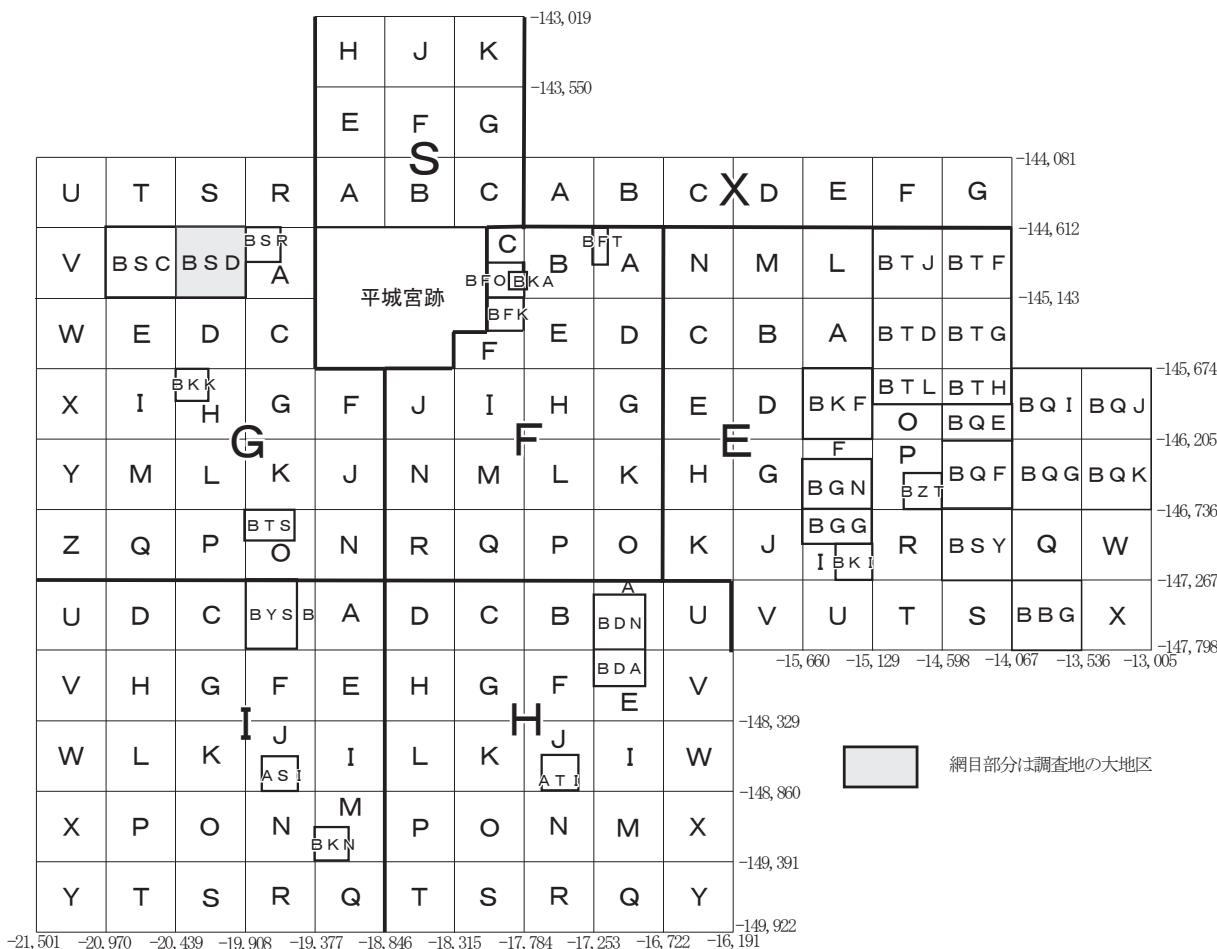


図25 平城京跡発掘調査新地区割図
(1990年の地区割り図に、「平城京跡発掘調査地区割図2003」の座標値をいれたもの)

字（10・11・12…97または98まで）で、南北方向を南からアルファベット（A・B・C…QまたはT）で区切り、その南東隅の交点（A10・A11など）を代表させて小地区名を表記する。

なお、地区名を用いる際は、アルファベット文字の前に中地区名をいれ、AA-10のように表現する。遺物取り上げなどの際には、この地区名と遺構番号・土層名・取り上げ日などをラベルに書き込む。

調査区の地区割り

今回の調査地は西大寺旧境内を包括する大地区のうち東半の「BSD」区に該当する。大地区名は、奈良時代の遺跡を意味する6を頭につけて、正式には「6 BSD」と

なる^{文15)} (図26)。そして、これを細分した中地区ではL区に相当する (図27)。市SD25次調査に関わる小地区はLE～LI-68～79区である。

本報告では、検出した遺構が広範囲に続くことから、遺物観察表には出土地区名の欄を設け、同一遺構のなかでも、出土位置がある程度限定できるように配慮した。出土地区と調査区との位置関係については、下図 (図28) を参照されたい。 (久保邦江)

註1) 『平城京跡発掘調査地区割図2003』 独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 2003：平成9年12月経年変化奈良県都市計画図1:10,000をもとに編纂した地図

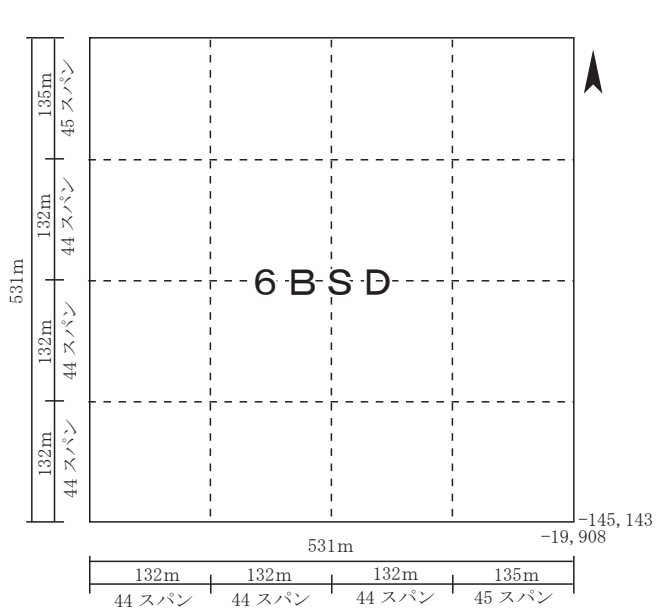


図26 平城京基本大地区16分割線

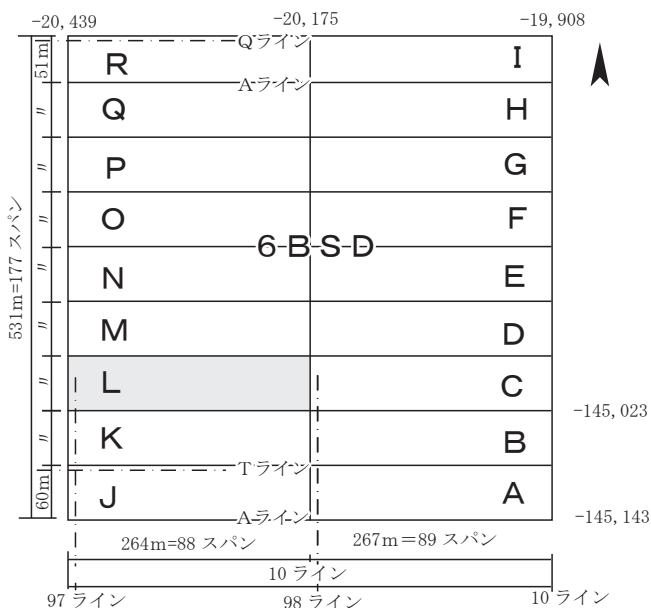


図27 平城京跡中地区割図

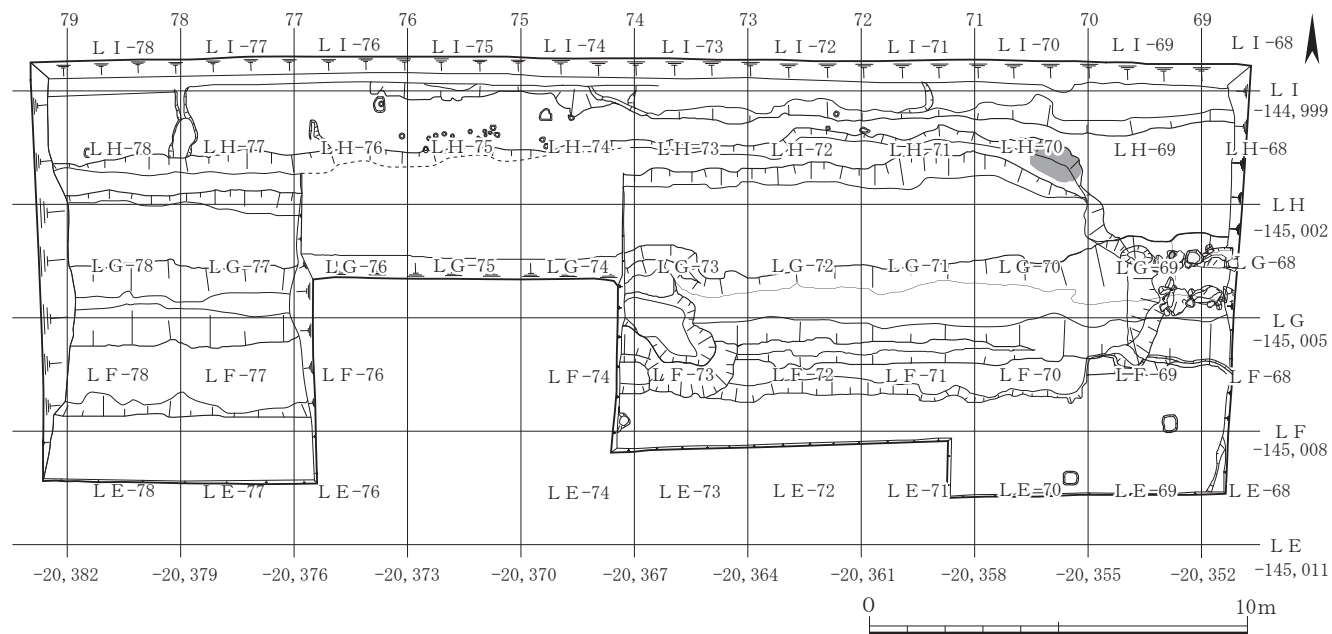


図28 市SD25次調査小地区割図 (1/200)

第2節 検出した遺構

I. 基本的層序

調査区内の基本的層序は、上から概ね以下のとおりである。

- 黒色粘質土（厚さ0.2～0.4m・図30-1）
- 灰色砂（厚さ0.05～0.1m、一部に堆積・図30-2）、
- 淡黒色粘質土（厚さ0.17m・図30-3）
- 暗青灰黒色砂質土（厚さ0.1m・図30-4）
- 暗青灰色砂質土（厚さ0.15m、マンガンを含む・図30-5）
- 暗青灰色砂質土（厚さ0.1m、鉄分を含む・図30-6）
- 淡青灰色砂（厚さ0.25m・図30-7）

現地表面下0.8～1.05mの深さが遺構面となる。遺構面を構成する地山の層相は図30-I～XIII、あるいは図33・34のXIV～XXVIの通りで、狭い範囲内で変化している。

また、遺構検出面の標高は、概ね以下の通りである。

- 北西隅：73.10m（西壁土層）
- 北東隅：72.70m（東壁土層）
- 南西隅：73.00m（西壁土層）
- 南東隅：72.68m（東壁土層）

全体的には、北西から南東方向にむけて緩やかに下っている。これは周辺の現地形と同様の傾斜である。

II. 検出遺構

検出した遺構には、東西方向の素掘溝SD01（古・新）、SD02、南北方向の素掘溝SD03の溝3条と、SD01埋没後の凹みに土器片などを投棄した土器溜まりSX04、小柱穴、土橋SX05、石組SX06がある。

SD01は埋土の堆積状態から大きく二時期に分かれるため、それぞれSD01古・SD01新と区別する。溝の断面形状とその堆積状態については、図33・34に示した。

SD01の新・古によって遺構の様相が大きく変化するため、A・B期に分けて、遺構の報告を行う。

A期の遺構（図31）

A期の遺構にはSD01古・02・03がある。

SD01古

長さ31.3m分を検出し、発掘区外西・東に続く。

SD01古はSD01新によって溝上部が壊されており、検出時の溝幅は2.0～4.0mである。SD01新の溝幅が狭くなる東端の土橋SX05の南北幅が、SD01古の本来の溝幅である可能性が高い。溝断面形状は上部が開き気味のU形である。検出面からの深さは西端の断面A-A'で1.5m、地山が砂質で崩れている中央部の断面C-C'で1.55m、

東端の断面E-E'では1.65mである。発掘区東半で若干低くなっているが、ほぼ同じ深さで掘削されている。溝底のレベルは西端が71.5m、東端が71.0mで、東西両端で0.5mの比高差があり、西から東への下り勾配となっている。溝心の座標値はX:-145,004.760・Y:-20,357.000である。

溝埋土の堆積は、大きく3層に分けられる。最下層は、溝底で部分的に堆積する灰色砂礫層（最下層：厚さ0.1～0.3m・図30-25）で、その上に大量の木屑や、遺物を含む暗灰褐色土（木屑層：厚さ0.1～0.4m・図30-23・24）があり、その堆積を青灰色砂質粘土・暗灰褐色土ブロック混合土（埋立層：厚さ0.25～0.6m・図30-18～22）で埋め立てている。

最下層 灰色砂礫層は断面A-A'・B-B'では見られない。断面C-C'付近は地山に砂を多く含む層で崩れやすくなっており、特にY座標-20,365.000から-20,367.000付近で南肩が大きく崩れている部分がある。最下層の堆積は断面C-C'で0.3m、断面D-D'・断面E-E'では0.05mと東に行くほど薄くなり、最下層の堆積土の供給源は断面C-C'付近の地山に含まれる砂礫である可能性が高い。出土遺物量は少なく、8世紀後半の土師器・黒色土器A類・須恵器・軒丸瓦（6272型式A種・6301型式B種）・軒平瓦（6644型式A・C種）、削器、木製品では曲物底板、非常に精緻に加工した小さい正方形板が出土した。

木屑層 SD01古の全体に広がる層である。大量の遺物が木屑に混じるため、廃棄物として意図的に投棄されたものとする。木屑層の厚さは断面A-A'で0.35m、東端のE-E'で0.175mと東に行くほど薄くなる。投棄場所が西寄りの部分で、東の方に均^{なら}しながら埋めた可能性がある。木屑層に含まれる木屑は、層の底部分では残存状態がよいが、上部になると腐植して土壌化する部分もある。断面C-C'・断面D-D'で木屑層の堆積が溝の南寄りに貼り付くように斜めに堆積していることから、木屑の投棄は南側から行われた可能性がある。

木屑層の土壌は遺物整理箱に入れすべて持ち帰り、洗浄した。出土した遺物には8世紀後半の土師器・黒色土器A類・須恵器・奈良三彩・イスラム陶器、軒丸瓦（6139型式A種・6272型式B種・6301型式B種・型式不明）・軒平瓦（6644型式A種・6663型式F種・6694型式A種・型式不明）・平瓦・丸瓦、木製品、木簡、帯金具（鉸具・丸軛）、基石、石鏃、檜皮、種実がある。特に木製品はこの層に集中し、製品と認識できるもの（箸状木製品除く）のうち94.2%が木屑層から出土した。

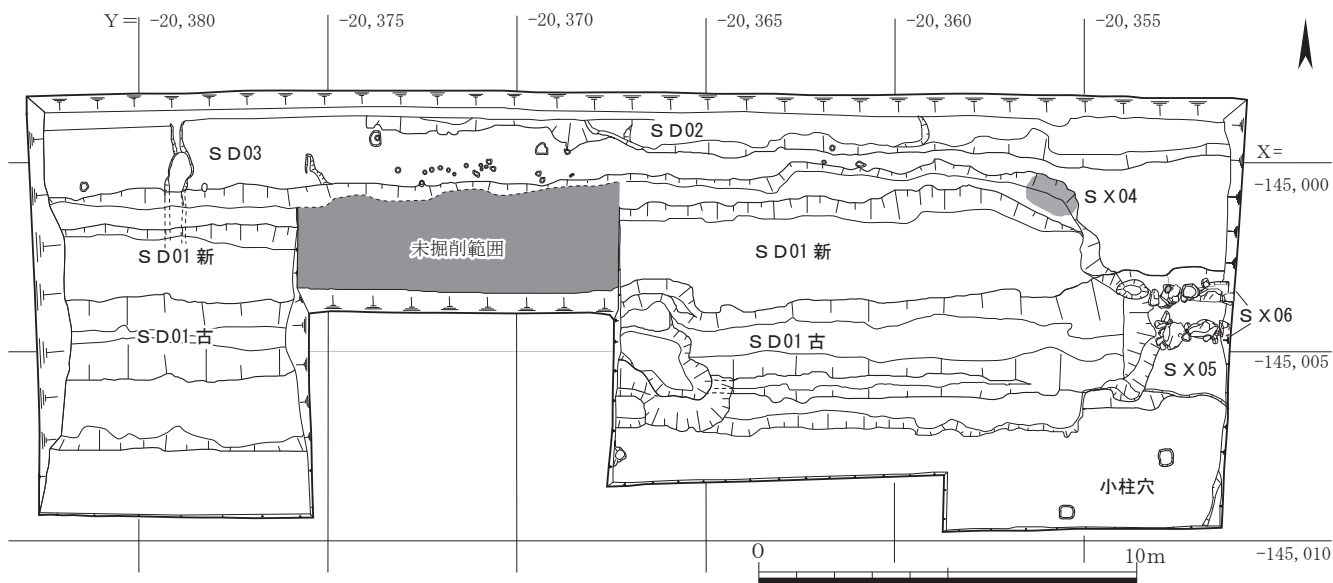


図29 市SD25次調査遺構平面図 (1/200)

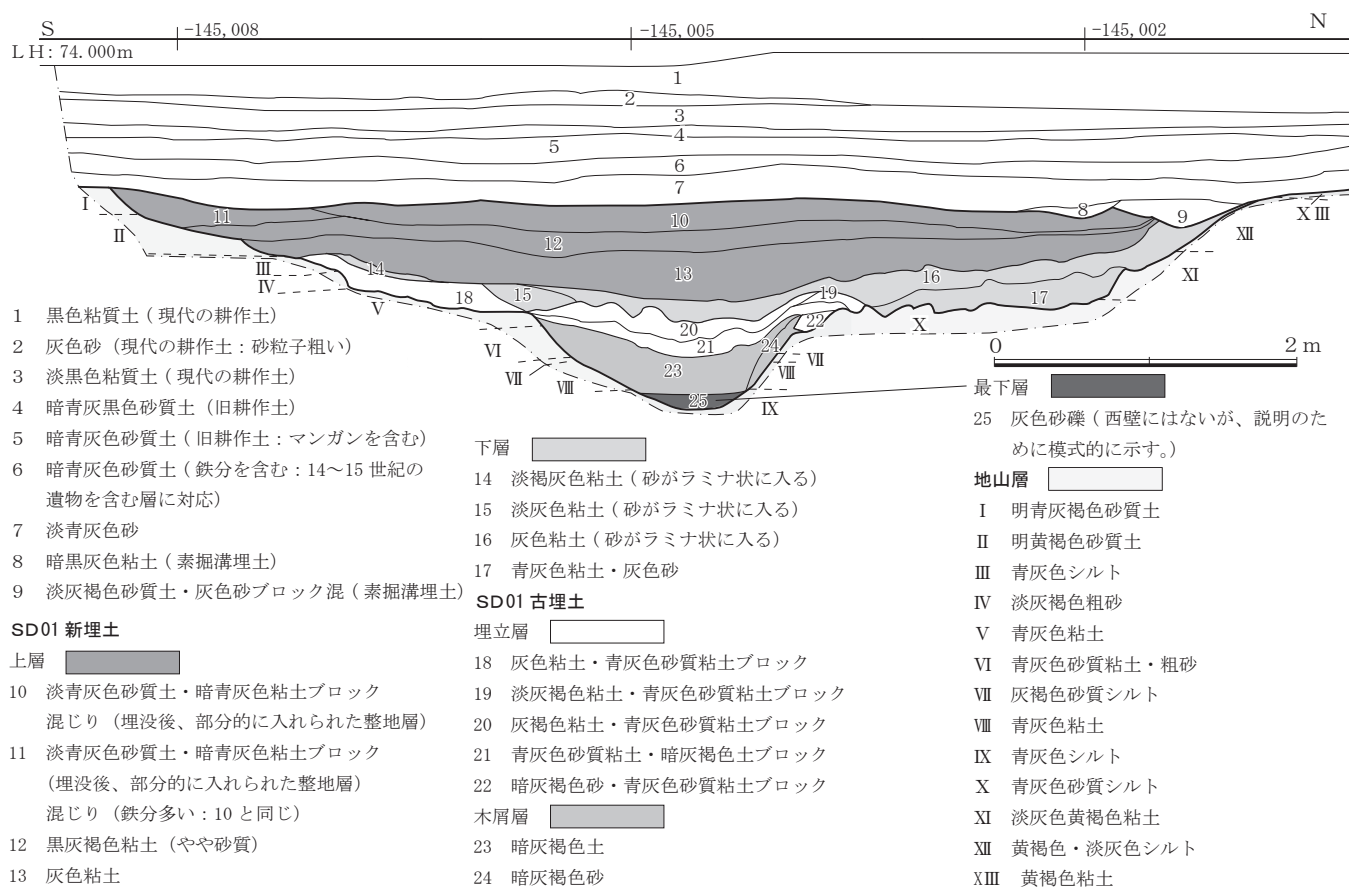


図30 発掘区西壁土層断面図 (発掘区西壁をもとに25層の堆積土を模式的に配置) (1/50)

土壌に含まれる花粉を分析した結果、マツ（アカマツないしクロマツ）とコナラ属アカガシ亜属を主とする森林が近隣に分布し、ツツジ・シキミなどの植栽が行われていた可能性があることが判明した。鞭虫卵がわずかに検出され、生活排水も流れ込む溝であったと思われる（114頁参照）。また、珪藻分析の結果、珪藻密度が低く、やや乾燥ないし湿った環境を示し、溝内に常に流水があった状態ではないことがわかった（119頁参照）。

埋立層 溝全体に広がり、断面A-A'では厚さが0.25mであるのに対し、東に行くほど厚さを増し、断面E-E'では0.6mの厚さになる。これは、下の木屑層の堆積が

東に行くほど薄くなるのに対し、不足分を埋め立てていったためである。この層は木屑層に含まれる土壌と、埋め戻しに使った周辺の地山土がブロック状に混ざった土なので、基本的に層に含まれる遺物は木屑層の遺物と同じ8世紀後半のものと考えているが、出土した土器のなかに8世紀末から9世紀初頭とみられるものがある。

出土した遺物には、土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・イスラム陶器、軒平瓦（6702型式A種・丸瓦・平瓦、木簡、檜扇・匙形木器・杓子形木製品・刀形木製品・箱側板・台座・紡輪・部材・和同開珎がある。

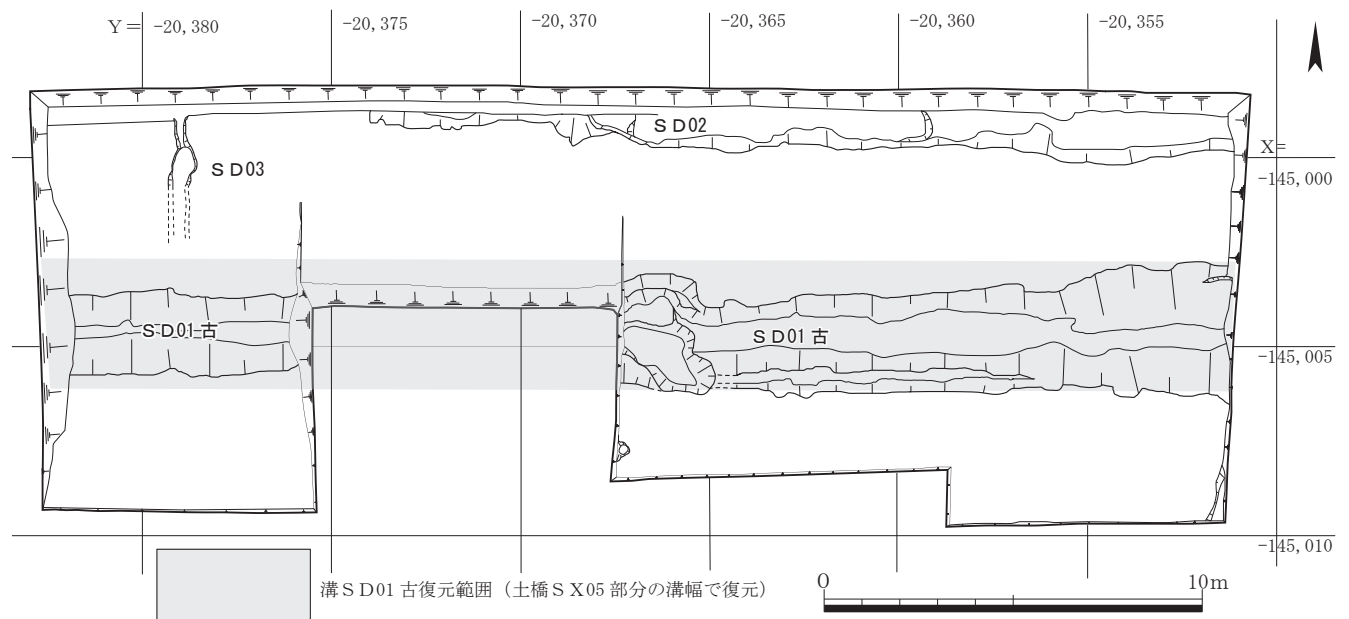


図31 A期の遺構平面図 (1/200)

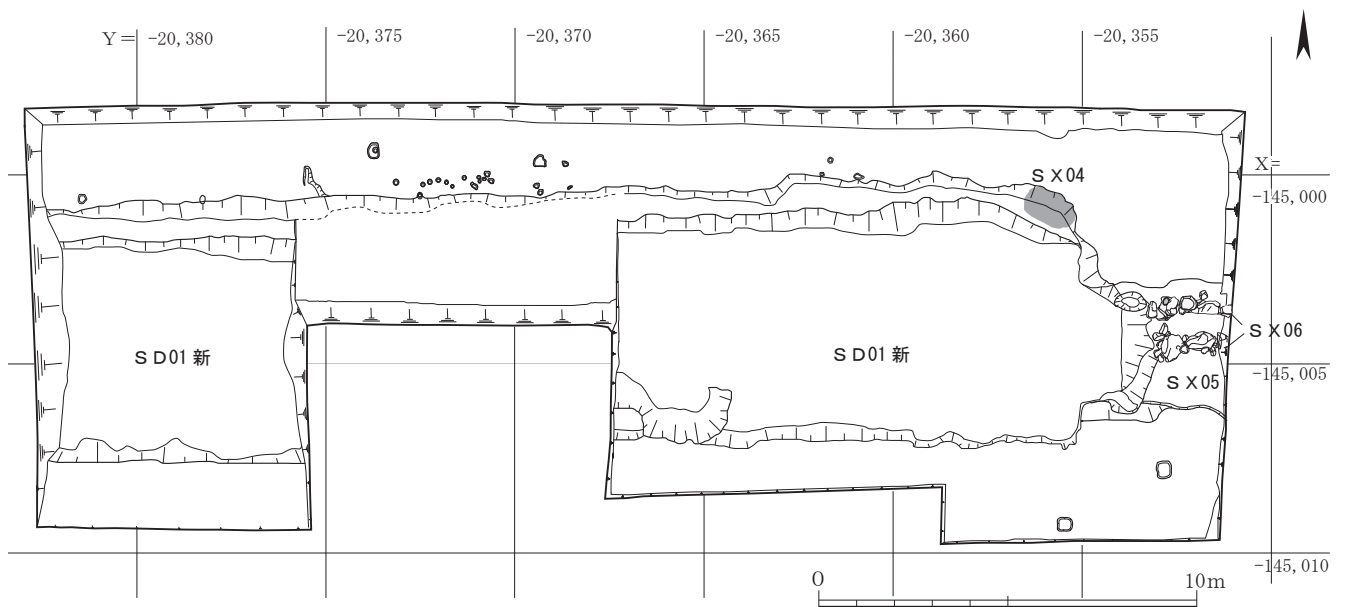
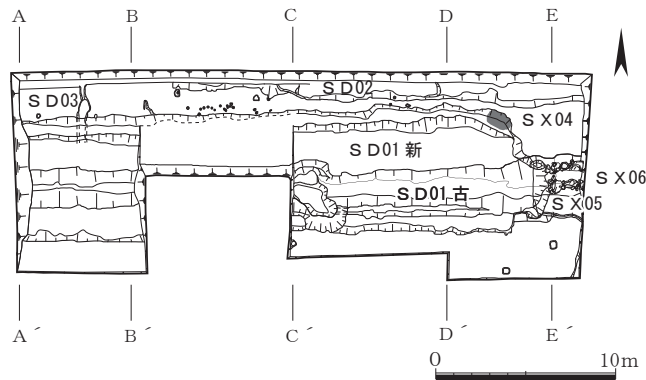
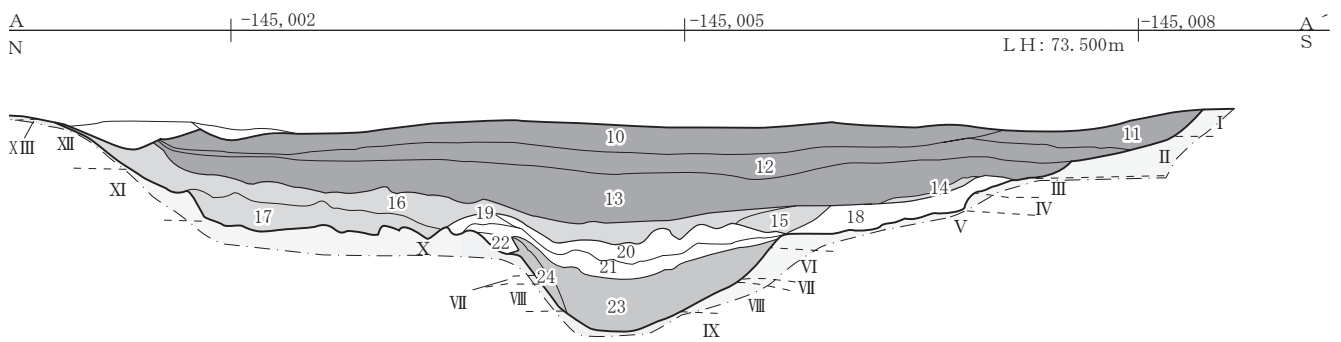


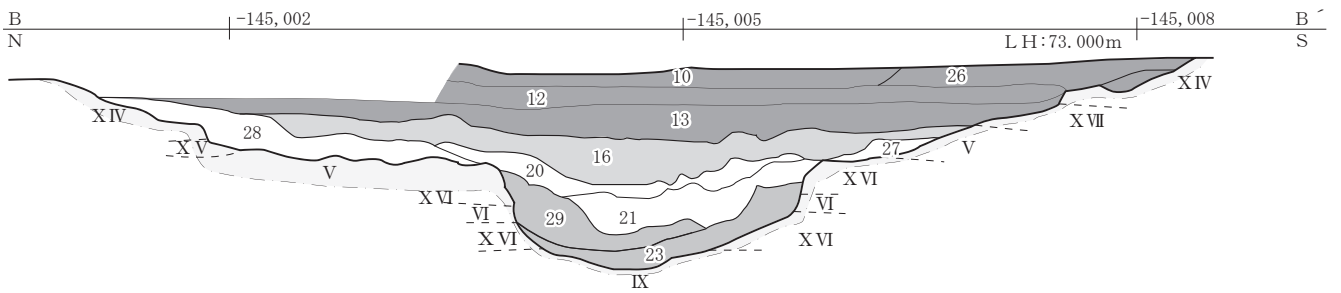
図32 B期の遺構平面図 (1/200)



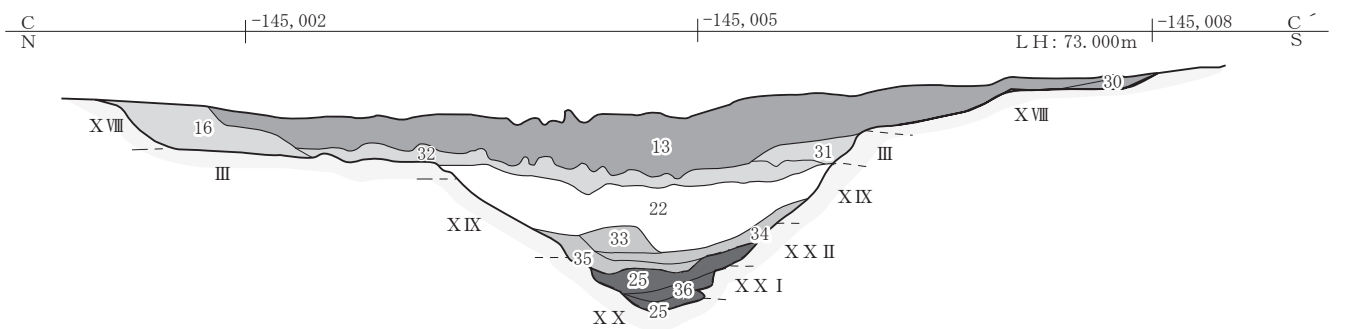
各断面図の位置



SD01断面図A-A' (1/50) (南北方向鏡面反転)



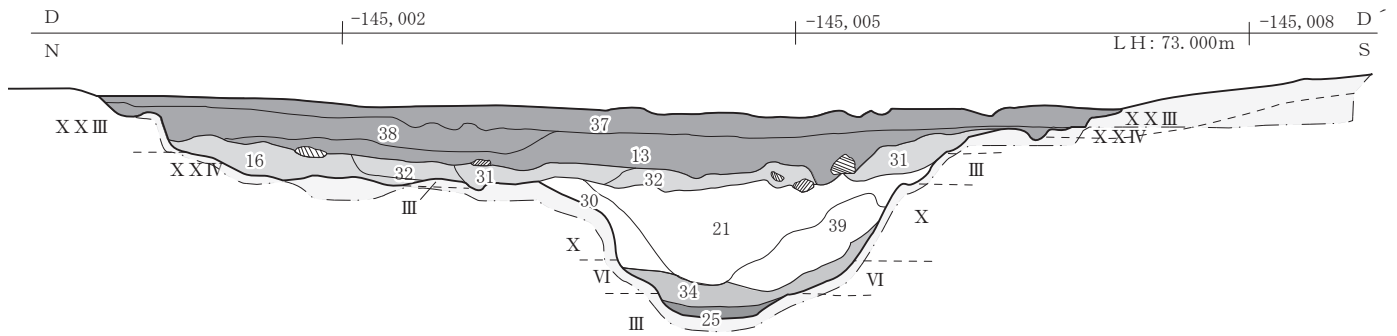
SD01断面図B-B' (1/50)



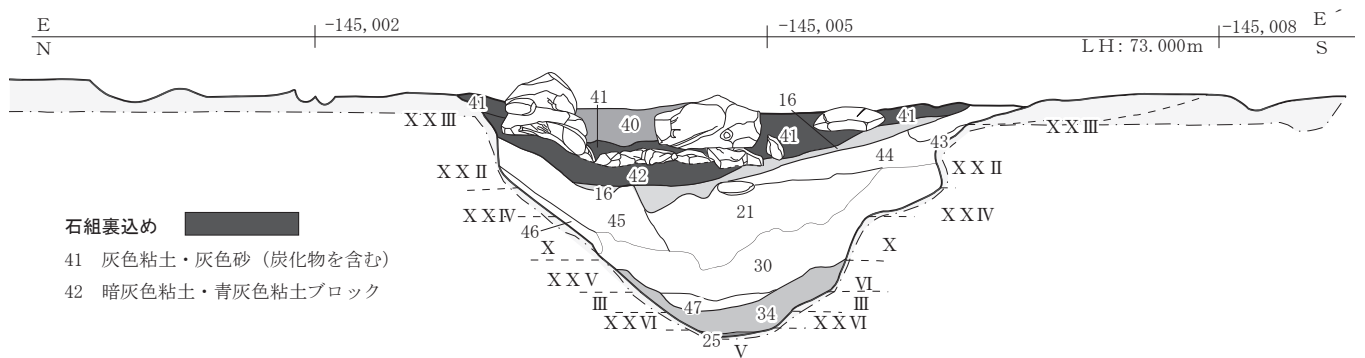
SD01断面図C-C' (1/50) (南北方向鏡面反転)



図33 SD01土層断面図(1)



SD01断面図D-D' (1/50) (南北方向鏡面反転)



石組裏込め

- 41 灰色粘土・灰色砂 (炭化物を含む)
- 42 暗灰色粘土・青灰色粘土ブロック

SD01断面図E-E' (1/50)

土色名 (1~25, I~XIII) は 20 頁図 30 の土色名を参照

SD01 新埋土

- 上層
 - 26 淡青灰色砂質土・暗灰色粘土ブロック
 - 37 淡灰色粘質土
 - 38 灰色粘土・灰褐色砂
 - 40 暗灰色粘土 (淡灰色砂がラミナ状に入る。)
- 下層
 - 31 暗灰色粘土 (灰色砂がラミナ状に入る。)
 - 32 灰色粘土・灰色砂

SD01 古埋土

- 埋立層
 - 27 灰色粘土・青灰色粘土ブロック
 - 28 青灰色粘土・灰色砂ブロック
 - 30 暗灰褐色砂質土・青灰色粘土ブロック混
 - 39 淡黒灰褐色砂・淡灰色粘土混
 - 43 淡黄褐色粘質土・灰褐色土ブロック
 - 44 暗灰色粘土 (灰色砂・青灰色ブロック混)
 - 45 青灰色砂質粘土・暗灰褐色土ブロック (粘土ブロックの大きさが小さい)
 - 46 暗灰色砂質粘土・青灰色粘土ブロック
 - 47 青灰色粘土・黄灰色土ブロック
- 木屑層
 - 29 暗灰褐色土 (腐植土化)
 - 33 暗灰褐色粘土 (檜皮がまとまって出土)
 - 34 暗灰褐色砂質土
 - 35 灰褐色粘土
- 最下層
 - 36 暗灰褐色砂質土

地山層

- XXIV 黄褐色・淡褐色砂質シルト
- XXV 青灰色粘土 (腐植土少量混)
- XXVI 青灰色粘土 (やや砂質)
- XXVII 黄褐色・淡灰色粗砂
- XXVIII 暗青灰色砂
- XXIX 青灰色砂質土
- XXX 灰白色砂
- XX XI 暗青灰色砂質土
- XX XII 青灰色砂質粘土
- XX XIII 青灰褐色砂質シルト
- XX XIV 青灰褐色砂
- XX V 青灰色砂礫
- XX VI 淡灰褐色砂質シルト



図34 SD01土層断面図(2)

SD02

発掘区北端で検出した東西方向の溝。長さ22.6mを検出、西は削平されている。北肩は14世紀の素掘溝で壊されている。幅1.4mまでは確認できるが、正確な幅員はわからない。

検出面からの深さは東端で0.4m。溝底のレベルはY座標-20,374.000付近で72.745m、東壁で72.30mとなり、SD01古と同様に西から東への傾斜である。

埋土は2層に分かれ、上層は明黄褐色粘土ブロック状 (0.25m)、下層は明灰黄褐色砂質土ブロック状 (0.15m)。

周りの地山の土で一気に埋め立てられている。SD01古でみられた木屑は一切みられなかった。8世紀後半の土師器・須恵器、丸瓦・平瓦が少量出土した。

SD03

発掘区北西部で検出した南北方向の溝。長さ約2mを検出。深さ0.15mである。埋土は灰色砂。奈良時代の土師器・須恵器・瓦が出土した。SD01新の上層よりも古い。SD02との前後関係はわからない。

B期の遺構 (図32)

B期の遺構にはSD01新、土器溜まりSX04、土橋SX05、

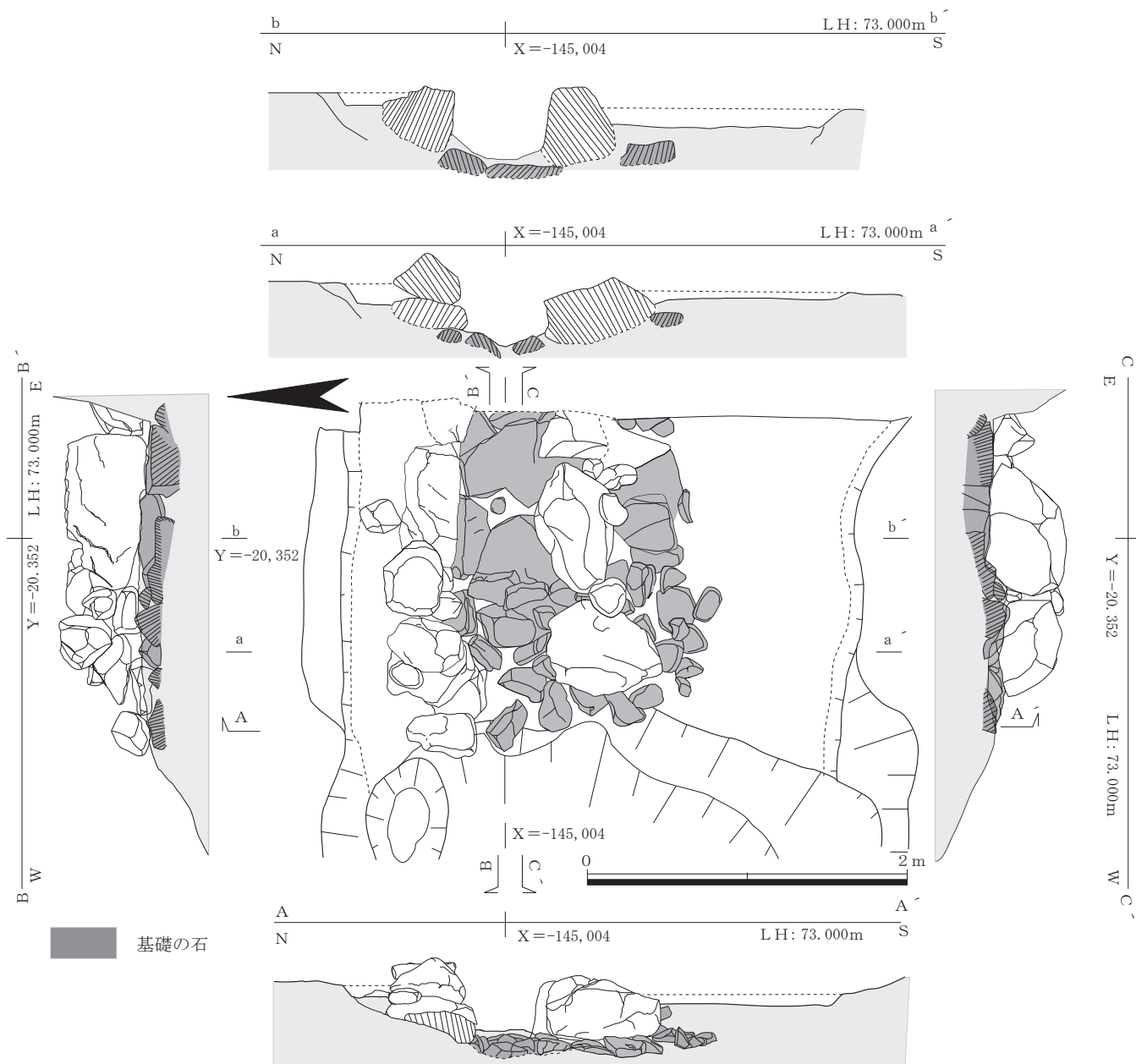


図35 土橋SX05・石組SX06平面図・立面図・断面図 (1/40)

石組SX06、小柱穴がある。

SD01新

SD01古の上半南北両側の地山を掘削し、その土砂で下半を埋め立てたため、結果的に幅広で浅くなった溝である。断面形状は皿状になる。幅は約7mとなるが、発掘区の東端から約4mの範囲は掘削が及ばないため、溝幅が狭まり、その部分の溝幅は約3.6mである。

検出面からの溝の深さは、断面A-A'で0.9m、断面C-C'で0.7m、断面D-D'で0.65mと東に行くほど溝は浅くなる。

溝底のレベルはSD01古の埋立層の上面で、断面A-A'は72.12m、断面B-B'は72.0m、断面C-C'は71.90m、

断面D-D'は71.95m、E-E'は71.85mとなり西から東に低くなる。東西の比高差は0.3mで、SD01古よりも傾斜が緩い。

溝心の座標はX: -145,003.700・Y: -20,357.000で、SD01古よりも溝心が0.39m北になる。

基本的な溝埋土は大きく2層に分けられる。堆積順に記すと、灰色粘土に灰色砂が薄く葉理（ラミナ）状に入る層（下層：厚さ0.1~0.3m・図30-14~17）と、その上の灰色粘土層（上層：厚さ0.4~0.5m・図30-12・13）である。

下層 下層の堆積は断面A-A'で0.3mで、断面B-B'で0.3m、断面C-C'で0.3mと、ほぼ同じで断面D-D'で

0.2mと東にむかって若干薄くなる。土橋SX05よりも古い堆積になり、木屑層を埋立ててから、土橋が造られるまでに堆積した層である。溝全体に広がるが、場所によって色調が若干異なる。薄い砂層が葉理状に入ることから、ゆっくりした水の流れがあったと思われる。土壌に含まれる花粉を分析した結果、木屑層に比べアカマツないしクロマツは少なく、二次林のハンノキが調査地周辺で多くなっていることが判明した(114頁参照)。また、珪藻は増加し、水草が繁茂し、淀みながら流れる環境に変化した結果となり(119頁参照)、堆積土壌の観察から導かれる見解と一致する。下層からは8世紀後半と8世紀末～9世紀初頭の土師器・黒色土器A類・須恵器・奈良三彩・緑釉陶器・灰釉陶器・イスラム陶器片、軒丸瓦(6133型式R種・6139型式A種・6314型式G種・型式不明)・軒平瓦(6682型式B種・6702型式A種・6732型式A種・型式不明)・丸瓦・平瓦、文杖形木製品が出土した。

上層 上層埋土は溝全体に堆積している。基本的に灰色粘土で、局所的に若干色調が異なる。下層の灰色粘土よりも暗い色調で、ところどころで砂が葉理状に入りが、下層の堆積土ほど明確には見られない。層の厚さは0.4～0.5mで西側の方が厚く堆積する。

西半の断面A-A'・B-B'部分では、上層の上に淡青灰色砂質土と暗青灰色粘土がブロック状に混じる層(厚さ0.2m 図30-10・11)が堆積する。埋土がブロック状になっていることから、SD01埋没後に凹んでいる部分に土を入れて整地したと考える。

上層の土壌に含まれる花粉を分析した結果、草本花粉が増加しており、農耕地的な様相に変化していることが判明した(114頁参照)。また、珪藻の傾向は下層と変化がないようで、水流は少なく、淀みながら流れる環境が続いたとみられる(119頁参照)。

上層からは、9世紀初頭の土師器・黒色土器A類・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・白磁、軒丸瓦(6133型式R種・6200型式A種・6236型式I種・6272型式B種・6282型式G種・6348型式Aa種・型式不明)・軒平瓦(6644型式A種・6644型式種不明・6721型式I種・6732型式K種・6732型式Q種、新形式、型式不明、丸瓦・平瓦、球状木製品、付札が出土している。

SX04

SD01新の北肩が、東側の土橋SX05にむけて溝幅を減少する付近で、投棄遺物が集中する箇所を確認した。東西1.3m、南北0.8mの範囲に堆積する層で、SD01新の傾斜に沿っており、溝が埋没していく過程でできた凹みに多量の遺物が投棄されたとみられる。

埋土は、細かい炭化物を含む灰色粘土で、層の厚さは0.1mである。9世紀前半～中頃後半の土師器・黒色土器A類・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・白磁、円面硯、軒丸瓦(型式不明)軒平瓦(6732型式K種)が出土した。

土橋SX05

発掘区東端で検出した南北方向の土橋である。東西幅2.9m以上で発掘区以東に続く。南北幅は3.7mである。SD01古を埋め立て、SD01新に造り変えた後、SD01新の下層の土が堆積し、その後溝の北肩に沿って石組SX06を構築すると同時に、石組の北と南に土を入れ、SD01新の溝底より約0.5m高く全体を盛り上げている。この形状から考えて、SD01新を横断するための土橋として構築された可能性が高いと考える。

石組SX06

土橋によって狭くなったSD01新の護岸を目的としてつくられた石組である。

はじめに石を据えるため、SD01新の底に暗灰色粘土と青灰色粘土のブロック土(図34-42)を敷き、基礎となる石を置く。石の大きさは大小様々で、10cmから大きいもので80cmある。石材はほとんどが花崗岩であり、三笠安山岩、チャートが少量混じる。

基礎の石を据えた後、その上に炭をわずかに含む灰色粘土と砂の混合土(図34-41)を敷き、SD01の北肩に沿って石を組む。長さ100cm・幅40cm・高さ50cmの角柱状の花崗岩を長軸が北肩に沿う形で置き、その西側に20～40cmの円礫を南面を揃えるように2段もしくは3段に積んでいる。石組の間に隙間があるが、特に小礫などを詰めた様子もない。この南側に約0.5mの間隔をあけて同様の石組を造るが、北側の石組列と比べて石の組み方が雑然としている。長さが70～80cmの大型の石を並べているが、石の長軸が溝と直交するものもあり、統一感がない。大型の石の間には20cm大の石を詰めている。

石組に用いられた石材は、花崗岩が多く、三笠安山岩、チャート、凝灰岩が少量含まれる。

石組の外側には、基礎の石の上に敷いた土と同じ土で土橋を構築している。石組間の埋土は暗灰色粘土に淡灰色砂が葉理状に入り、SD01新の上層に連続する。

小柱穴

発掘区南東隅で小柱穴を2箇所確認したが、いずれも深さが0.1m未満であった。出土遺物は土師器片が少量あるが小片で時期が特定できない。また、SD01新の北肩に沿って小穴が東西方向に点在する。埋土はいずれも灰色粘土で出土遺物はない。(久保邦江)

第4章 出土遺物

西大寺第25次調査では、瓦埴類、土器類、土製品、木製品、木簡、金属製品、銭、石製品、石器、自然遺物が出土した。現場からは遺物整理箱（内法54cm×34cm×15cm）に87箱の遺物と、SD01古木屑層の土層を236箱分持ち帰った。洗浄を行い整理を進めた結果、瓦埴類65箱、土器・土製品84箱、木製品55箱、その他1箱、合計205箱と木簡1939点になった。これらの遺物のうち刻印瓦・木簡・墨書土器などの文字資料の積文・写真図版については文字資料篇で報告する。ただし、刻印瓦は本章第1節、墨書土器の一部は第2節、木製品として転用された木簡については第3節でもとりあげる。その場合3桁の「史料番号」を示し、対応できるようにし、観察表もしくは一覧に掲載した。以下の第1節～第4節で各遺物の報告を行う。SD01の出土遺物の報告は、基本的に土層の堆積順に報告するが、瓦・埴類の報告については軒瓦の型式番号、瓦の種類を優先して行った。

第1節 瓦・埴類

遺物整理箱で65箱分の瓦・埴類が出土した。瓦は軒瓦、丸瓦、平瓦の他、道具瓦に大別できる。大半がSD01古とSD01新から出土した。

I. 軒瓦（図36、表6・7）

52点出土した。このうち50点が奈良時代のもので、2点が平安時代以降のものである。内訳^{註1)}と出土遺構は表6の通りである。

奈良時代の軒瓦 50点のうち、瓦当面が完存するものはSD01古の最下層から出土した軒丸瓦6139型式A種が1点のみで、全体的に遺存状態は悪い。軒丸瓦が9型式

10種（20点）と型式不明（10点）の計31点、軒平瓦が8型式11種（15点）と新型式^{註2)}（1点）、型式不明（3点）の計19点で、その他に珠紋のみが遺存し、軒丸瓦か軒平瓦かいずれか不明なものが1点あった。

平安時代以降の軒瓦 遺物包含層から出土した室町時代の巴紋軒丸瓦と軒平瓦（西大寺306型式A種^{註3)}）が小片各1点ある。前者は内圏線を有する右巻巴紋で、尾が圏線に付く。後者は向かって左端の断片で、段顎B I^{註4)}である。顎段部に凹型成形型の圧痕がある。

SD01古出土軒瓦の内訳 各層から出土しているが、木屑層に集中する。最下層から軒丸瓦6272型式A種と6301型式B種、軒平瓦6644型式A・C種が各1点出土した。

表6 出土軒瓦一覧表

		軒丸瓦											軒平瓦											軒丸瓦計	型式不明軒瓦	軒平瓦計	軒瓦合計						
型式など		613	612	622	623	633	634	643	648	653	658	型式不明	巴紋	664	667	677	680	682	684	689	690	692	694					697	698	新型式	型式不明	西大寺306	
種		R	A	A	I	A	B	G	B	G	Aa			A	C	不明	F	A	B	A	A	I	A	K	Q			A					
個体数		6	4	1	1	1	3	1	1	1	1	10	1	31	1	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	3	1	20	52
出土遺構	その他	(1)										3	1				1	1												1			
	SX04											1																					
	SD01新	上層																															
		下部	2		1	1		1	1			1	2		(1)		1																
	SD01古	SX06																															
		下層	4	(1)								1	3								1	(1)	1							1			
埋立層														1							(1)												
木屑層		3				2		(1)			1								1		(1)								1				
最下層					1			(1)						(1)	1																		

*他層位からの出土資料と接合が可能な場合は、当該破片を（点数）で表示して、他層位との接合関係を明確にした。

木屑層から軒丸瓦6139型式A種（3点）、6272型式B種（2点）、6301型式B種（1点）、型式不明（1点）、軒平瓦6644型式A種、6663型式F種、6694型式A種、型式不明が各1点出土した。このうち6301型式B種は、最下層出土の断片と接合し、同一個体であることが判明した。埋立層には軒平瓦6702型式A種と型式不明の軒瓦が各1点含まれる。

SD01新出土軒瓦の内訳 下層から軒丸瓦6133型式R種（4点）、6139型式A種（1点）、6314型式G種（1点）、型式不明（3点）、軒平瓦6682型式B種、6702型式A種、6732型式A種、型式不明が各1点出土した。このうち6702型式A種は、SD01古の埋立層出土の断片と接合した。上層から軒丸瓦6133型式R種と型式不明が各2点、6200型式A種、6236型式I種、6272型式B種、6282型式G種、6348型式Aa種が各1点、軒平瓦6644型式A種、6644型式種不明、6721型式I種、6732型式K種、6732型式Q種、新形式、型式不明が各1点出土した。このうち6644型式A種は、SD01古の最下層出土の断片と接合した。

以下、奈良時代の軒瓦について詳述する。

A. 軒丸瓦（図36-1～10）

1～10は軒丸瓦である。1はSD01新の下層出土の6133型式R種である。接合溝を設けず、瓦当裏面に丸瓦部端部を合わせた後に丸瓦部先端の凸面側に別粘土をユビナデする。胎土は精良、焼成はやや軟質、色調は内面が灰白色、外面が灰～暗灰色である。2はSD01古の木屑層から出土した6139型式A種である。丸瓦部凸面はタテケズリ後、ナデを行う。瓦当側面はヨコナデを行い、範端痕はほぼ消される。丸瓦部の取り付け位置は低く、内面補充粘土を充填した後、接合部分から丸瓦部凹面にかけてタテナデを行う。接合部には工具の圧痕が残る。胎土はやや粗く、焼成は軟質、色調は内面が灰白色、外面が淡黒色である。3はSD01新の下層と上層の素掘溝出土の6139型式A種（2片接合）で、2に比べると瓦当紋様の傷みが激しい。胎土は精良、焼成は軟質、色調は内面が灰白色、外面が淡暗灰色である。4はSD01新の上層出土の6200型式A種である。丸瓦部は接合式であるが、接合溝の有無は不明である。瓦当面から0.2～0.3cmの位置に範端が確認できる。胎土は精良、焼成は軟質、色調は淡橙灰～淡黄茶色である。5はSD01新の上層出土の6236型式I種である。瓦当側面の摩滅が著しく、調整は不明である。胎土は径0.1～0.2cmの白色粒子を含むが精良、焼成は軟質、色調は淡い肌～灰白色である。6はSD01新の上層出土の6272型式B種である。丸瓦部は接合式であるが、接合溝を有しないようである。瓦当裏

面には丁寧なナデを行う。胎土は径0.1～0.4cmの茶色や白色粒子を含むが精良、焼成はやや硬質、色調は淡い肌～灰白色である。7はSD01新の上層出土の6282型式G種である。瓦当面はケズリ後、ユビナデで平坦に仕上げる。胎土はやや粗く径0.2～0.5cmの白色粒子を多く含む。焼成はやや硬質、色調は灰色である。8はSD01古の最下層と木屑層出土の6301型式B種（2片接合）である。丸瓦部凸面はタテケズリ後、ナデを行う。瓦当側面はヨコナデを行い、瓦当面から約0.6cmの位置に範端が確認できる部分がある。内面補充粘土は少なく、丸瓦部の取り付け位置は高い。粘土を充填後、接合部分から丸瓦部凹面にかけて粗いタテナデで仕上げる。接合溝を設けず、瓦当面から約2cmの位置に丸瓦端部を当てた後に内面・外面粘土を充填する。丸瓦端部は凹・凸面の両面を面取りする。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質、色調は灰白色である。9はSD01新の下層出土の6314型式G種である。丸瓦部が欠損し、接合方法も不明である。胎土は精良、焼成はやや軟質、色調は灰白色である。10はSD01新の上層出土の6348型式Aa種である。瓦当裏面はケズリ後、不定方向のユビナデ・オサエで平坦に仕上げる。胎土は精良、焼成は硬質、色調は青灰色である。

B. 軒平瓦（図36-11～18）

11～18は軒平瓦である。11はSD01古の最下層とSD01新の上層出土の6644型式A種（2片接合）である。部分的に狭端部まで遺存し、全長約38cmである。段顎で段顎はヨコナデを行う。平瓦部凸面にはナデが施されるが、部分的にやや斜め方向の粗いタテ縄タタキが残る。凹面は瓦当寄りの大部分と模骨部分にナデを行うが、ナデが及ばない範囲には布目痕が残る。糸切痕も確認でき、粘土板桶巻き成形と考えられる。側縁には幅0.4～0.7cmの面取りをする。胎土は径0.1～0.4cmの白色粒子を含むが精良、焼成はやや軟質、色調は内面が灰白色、外面が暗灰色である。12はSD01古の木屑層出土の6663型式F種である。タテケズリ成形後に顎後部をヨコナデで仕上げる曲線顎IIで、約1.5cmの顎面をもつ。瓦当面から10cm程度離れた範囲にはタテ縄タタキ痕が残る。平瓦部凹面は摩滅が著しい。胎土は径0.1～0.2cmの白色粒子を含むが精良、焼成はやや軟質、色調は灰白色である。13は遺物包含層出土の6675型式A種である。段顎で平瓦部が約6cm遺存する。顎段部にはヨコナデを行い、平瓦部凸面のタテ縄タタキ痕の大半が消される。凹面には丁寧なヨコナデが施され、やや細かい布目痕がわずかに残る。胎土は精良、焼成は硬質、色調は灰色である。14はSD01古の木屑層出土の6694型式A種である。段顎で平瓦部凸

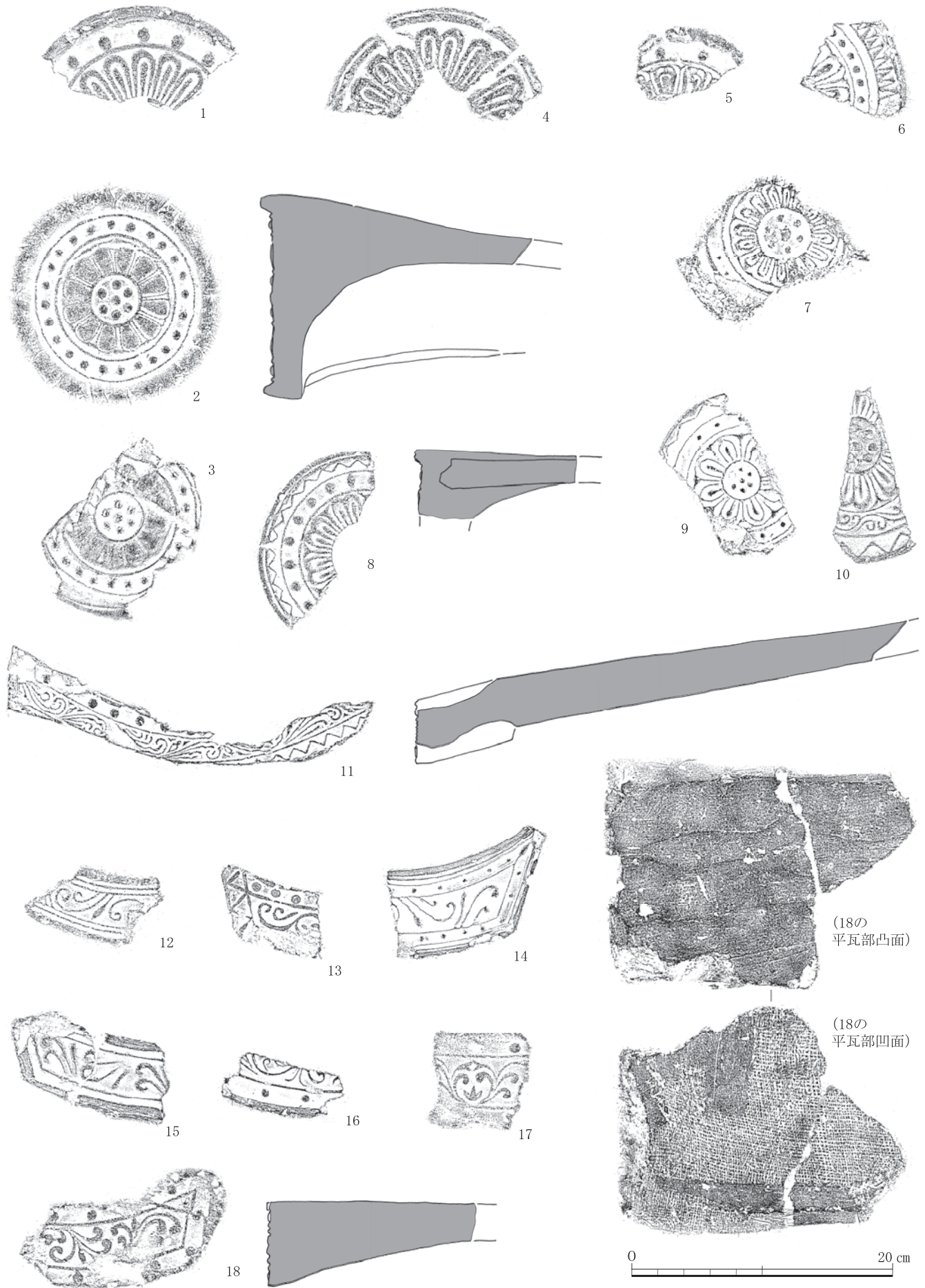


图36 出土軒瓦実測図・拓影 (1/4)

面にはタテ縄タタキ痕が残る。顎段部にヨコナデを行う。凹面にはヨコケズリ後、丁寧なヨコナデを行い、側縁に幅1.1～1.5cm、瓦当面外縁上端には、幅0.4cm程度の面取りをする。胎土は精良、焼成はやや硬質、色調は内面が灰白色、外面が淡灰～暗灰色である。15はSD01古の埋立層とSD01新の下層出土の6702型式A種（2片接合）である。タテケズリ成形する曲線顎Ⅱで、約1.8cmの顎面をもつ。瓦当面から約8.5cm離れた範囲にはタテ縄タタキ痕が残る。平瓦部凹面は瓦当寄りを約4cmの幅でヨコケズリするが、その範囲以外には布目痕が残る。胎土は精良、焼成は軟質、色調は内面が灰色、外面が淡暗灰色である。16はSD01新の下層出土の6732型式A種である。曲線顎Ⅱで、長さ約5cmが遺存する。瓦当部粘土板の剥離面に糸切痕が残る。胎土は精良、焼成はやや軟質、色調は内面が灰白色、外面が淡黒色である。17はSX04出土の6732型式K種である。瓦当面から約6cm遺存する直線顎である。平瓦部凹面瓦当端には丁寧なナデが及び、布目痕は残らない。胎土は径0.1～0.2cmの白色粒子を含むが精良、焼成はやや軟質、色調は内面が灰白色、外面が淡灰～暗灰色である。18はSD01新の上層出土の6732

型式Q種である。向かって右端の断片で、上外区～脇区に範割れ痕がある。顎形態は直線顎で、平瓦部凸面～顎部をタテケズリ成形して仕上げる。平瓦部凹面には粗い布目痕が残り、中央付近の瓦当寄りを部分的にヨコケズリを行う。側縁には幅1～2cmのタテケズリが行われるが、凹面から側面にかけて連続する布目痕が確認できる。胎土は粗く、焼成はやや軟質、色調は内面が灰白色、外面が暗灰～灰色である。

Ⅱ. 丸瓦・平瓦

遺物整理箱で50箱分出土した。内訳は丸瓦が1,536点（約160kg）、平瓦が2,712点（約310kg）で、軒瓦と同様に遺存状態が悪い。以下、特徴的な資料を列挙する。後述するが、「西」の文字が刻印された瓦（丸瓦と平瓦が各2点）や施釉瓦（緑釉丸瓦と三彩平瓦が各2点）も出土している。

A. 丸瓦（図37-19・20）

すべてが玉縁式であり、完存するものは無い。図36の丸瓦は、SD01新の下層から出土した玉縁凸面に凸線を有する特徴がある。19は玉縁凸面の両側縁を面取りし、玉縁の平面形が台形を呈する。長さ約6cmの玉縁に凸線

表7 出土主要軒瓦計測表

図番号	軒丸瓦／型式・種	直径 (mm)	内区				外区					地区	出土遺構・層位
			中房径 (mm)	蓮子数	弁区径 (mm)	弁数	内縁		外縁				
							幅 (mm)	紋様	幅 (mm)	高さ (mm)	紋様		
1	6133R			1+8		T16	14	S16	10	8		LG-72	SD01新の下層
2	6139A	150	40	1+6	94	T12	15	S24	13	10		LG-78	SD01古の木屑層
3	6139A		39	1+6		T12	15	S24	13	10		LG-69	SD01新の下層
4	6200A			1+8		F16						LH-77・78	SD01新の上層
5	6236I			1+8		F12	11	S12	10	7		LH-77	SD01新の上層
6	6272B			1+4+8		F8	11	S33	22	5	MV58	LH-72	SD01新の上層
7	6282G		39	1+6	94	F8	12	S24			LV25	LG-70	SD01新の上層
8	6301B			1+5+9		F8	13	S20	15	5	LV	LF-78、LG-71	SD01古の最下層と木屑層
9	6314G		28	1+6	80	F4	10	S16	11	5	LV		SD01新の下層
10	6348Aa		42	1+8		F7	20	HK	14	6	LV19	LH-73	SD01新の上層

計測値の単位はmmで、計測不能な項目は空欄とした。紋様に関しては各型式・種の良い資料を基に記した。当該する項目がない場合は斜線を付した。T：単弁、F：複弁、S：珠紋、HK：偏行唐草紋、MV：面違鋸歯紋、LV：凸線鋸歯紋を表わす。

図番号	軒平瓦／型式・種	瓦当厚 (mm)	内区		外区				脇区		顎形態	地区	出土遺構・層位
			厚 (mm)	紋様	上外区		下外区		幅 (mm)	紋様			
					厚 (mm)	紋様	厚 (mm)	紋様					
11	6644A		19	HK	12	S17	12	LV21			段	LG-70・78	SD01古の最下層とSD01新の上層
12	6663F	49	25	KK	8	K	8	K		K	曲	LG-78	SD01古の木屑層
13	6675A		20	KK	10	S15		LV16	14	LV3	段		遺物包含層
14	6694A	64	26	KK	11	S15	12	S14	11	S2	段	LG-77	SD01古の木屑層
15	6702A	60	31	KK	6		5		9		曲	LF・LG-72	SD01古の埋立層とSD01新の下層
16	6732A			KK		S9	23	S9		S3	曲	LG-78	SD01新の下層
17	6732K	70	38	KK	16	S9	16	S9		S3	直	LH-70	SX04
18	6732Q	63	33	KK	11	S9	12	S9	18	S3	直	LG-77	SD01新の上層

計測値の単位はmmで、計測不能な項目は空欄とした。紋様に関しては各型式・種の良い資料を基に記した。当該する項目がない場合は斜線を付した。HK：偏行唐草紋、KK：均整唐草紋、S：珠紋、K：界線、LV：凸線鋸歯紋を表わす。

が2本あり、凸線は2本とも幅約0.3cm、高さ約0.1cmである。端面寄りの凸線は端面から約2.5cmの位置にあり、2本の凸線間は心々で約1.6cmある。胎土は精良、焼成は軟質、色調は内面が白色、外面が淡暗灰色である。20は玉縁凹面の両側端と狭端縁を面取りする。玉縁は方形で、19とは平面形が異なる。長さ約7cmの玉縁に凸線が1本ある。凸線は端面から約4.2cmの位置にあり、幅約0.2cm、高さ約0.1cmである。胎土は精良、焼成はやや硬質、色調は内面が灰白色、外面が暗灰色である。SD01新の上層からも、19と同様に玉縁凸面に凸線が2本廻る丸瓦が2点出土した。いずれも玉縁長は約6.5cmで、玉縁凸面の両側面を面取りする。胎土は精良、焼成は軟質、色調は内面が淡暗灰色と淡灰色、外面が淡暗灰色である。

凸線は廻らないが、玉縁凸面の両側面を面取りする丸瓦を2点確認した。出土層位はSD01古の木屑層と石組SX06構築土（SD01古の木屑層出土の断片と接合）である。前者は玉縁長が約4.3cmで、玉縁凹面の両側端と狭端縁を面取りする。胎土は径0.1~0.2cmの白色粒子を含むが精良、焼成はやや硬質、色調は内面が灰白色である。後者は玉縁が長さ約5.7cmで、平面形が台形を呈する。胎土は精良、焼成は軟質、色調は内面が淡暗灰色と淡灰色、外面が淡灰色である。

B. 平瓦 (図38-21~24)

完存するものは少ないが、確認できる資料の大半が粘土板一枚作り成形である。図38の21・22は、長さの分かる平瓦である。21は長さ約36cm、広端幅約29cm、厚さ約1.9cmである。凹面には糸切痕と布目痕が残る。広端寄りには幅1.5cm前後の板状工具による凹凸がある。側面の凹面端を幅約0.7cmで面取りする。凸面にはタテ縄タタキ痕が残り、狭端寄りの約13cmには部分的にヨコケズリとナデが施される。胎土は0.1~0.2cmの白色粒子を含むが精良、焼成はやや硬質、色調は内面が灰色、外面が暗灰色である。遺物包含層から出土した。22は長さ約

33.5cmで、広端部は厚さ1.2~2.0cm、狭端部は厚さ約1.6cmである。凹面には糸切痕と布目痕が残る。狭端側を幅約0.8cm、側面側を幅約1.5cmで面取りし、広端側には布端痕がある。凸面にはタテ縄タタキ痕が残り、狭端寄りの約5cmには部分的にヨコケズリが施され、部分的に縄タタキ目が消される。胎土は径約0.5cmの石粒を含むが精良、焼成はやや軟質、色調は灰白色である。SD01新の下層から出土した。

粘土紐桶巻き作り成形の平瓦を2点確認した。23はそのうちの1点で、SD01古の埋立層から出土した。長さ約16cm、幅約9cm遺存する広端左隅部で、厚さ約1.5cmである。広端面を下にして幅3~4cm程度の粘土紐を積み上げ成形する。胎土は精良、焼成は軟質、色調は内面が淡黒色、外面が淡灰色~淡黒色である。

24は隅平瓦で、広端幅約30cmの平瓦の隅を約45°の角度で焼成前に切断する。厚さ約2cmで、長さ約32.5cmが遺存する。凹面には糸切痕と布目痕が、凸面にはやや粗いタテ縄タタキ痕が残る。胎土は精良、焼成はやや軟質、色調は灰白色であるが、凸面端から側面にかけて淡黒色である。SD01新の下層から出土した。

側面に布目痕跡をもつ瓦 SD01新から凹面と側面に布目痕が確認できる平瓦が49点出土した。すべての平瓦凸面にはタテ縄タタキ痕が残る。凹面から側面にかけての断面形状が鋭角を成すものと、ほぼ直角に立ち上がるものがある。また、凸面・凹面の側面端や側面の凸面・凹面端のヘラケズリの有無に差異がある。少数ながら、これらの箇所へヘラケズリが及ばない資料があり、これらの布目痕は凹面から側面に連続することを確認した。少なくとも当資料は、上面から側面にかけてほぼ直角に立ち上がる形状の凸型台でタタキが施された後に、側面付近の成形が凹型台で行われる。これらは平瓦部の製作技法の特徴とも推察できるが、少数ながら広端隅部片が含まれることも確認した。そのため、この製作技法は平

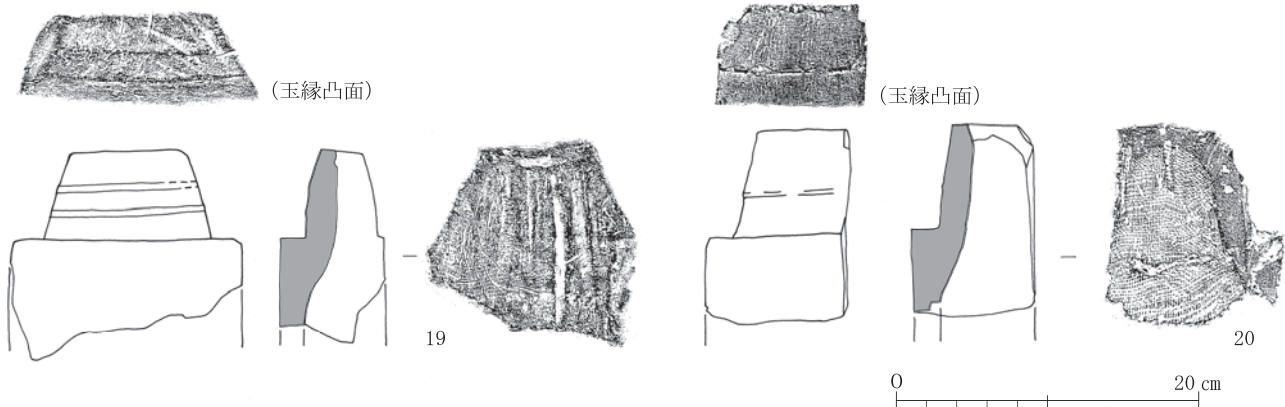


図37 出土丸瓦実測図・拓影 (1/5)

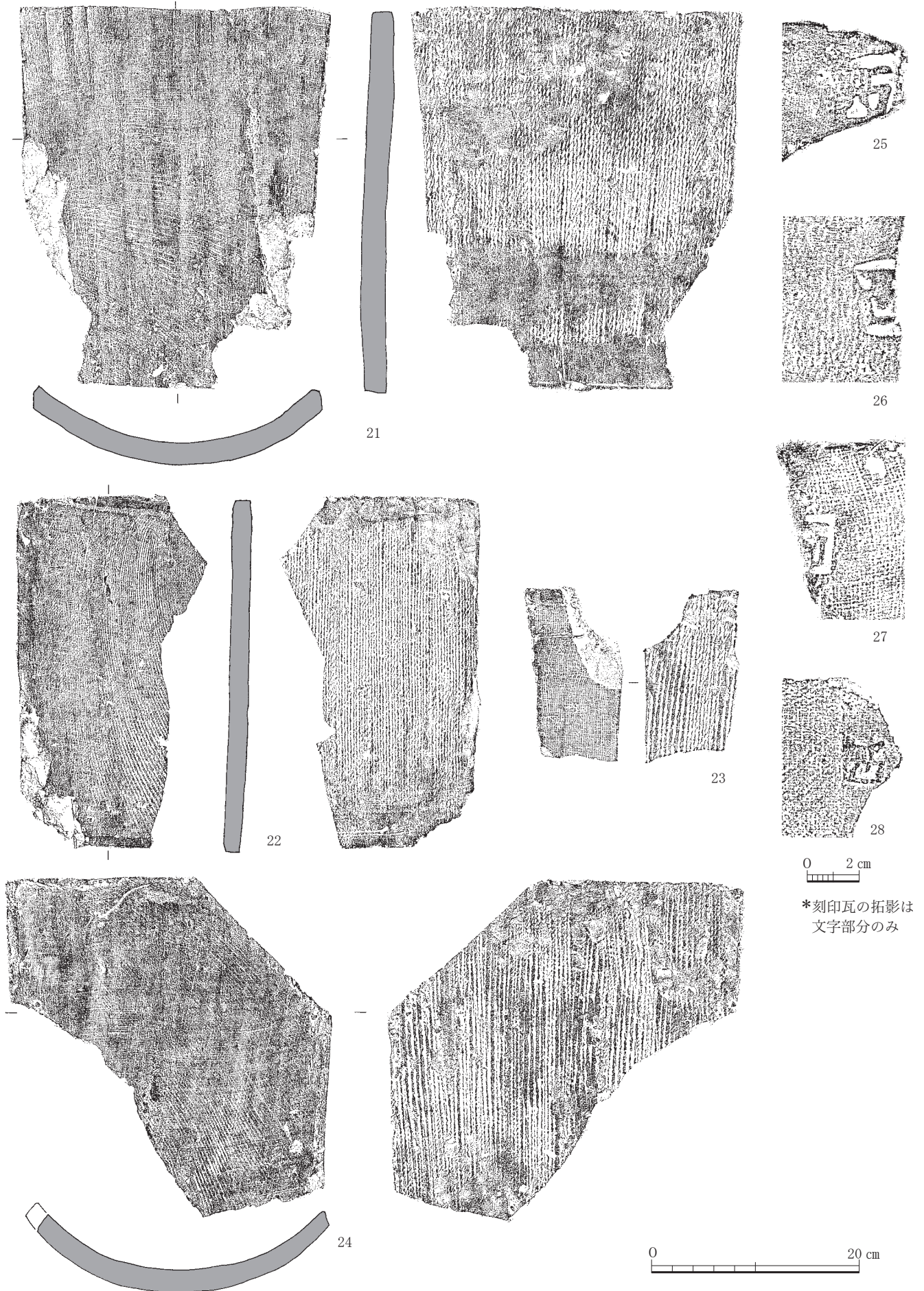


図38 出土平瓦実測図・拓影 (1/5)、刻印瓦拓影 (1/2)

瓦にも用いられていることは確実である。なお、胎土・焼成・色調、布目痕やタタキ痕の粗密などに規格性を認めるには至らなかった。

C. 刻印瓦 (図38-25~28・文字資料篇78頁・図版96)

25~28は「西」が陽刻^{註5)}された瓦で、刻印部分の陰影である。25・26 (史料番号851・852) は丸瓦、27・28 (史料番号853・854) は平瓦である。25は印面が縦2.6cm以上×横2.3cm以上、厚さ約1.9cmの丸瓦凸面に押捺される。押捺部位は不明である。胎土は精良、焼成は軟質、色調は内面が淡暗灰白色と淡灰色、外面が淡暗灰色である。SD01新の上層から出土した。「西 (b)」^{註6)}の可能性がある。26は印面が縦2.8cm以上×横1.4cm以上、厚さ2cm前後の丸瓦凸面に押捺される。押捺部位は、筒部の横断中央付近である。胎土は精良、焼成は軟質、色調は内面が灰白色、外面が淡灰色である。SD01新の下層から出土した。「西 (b)」の可能性はある。27は印面が縦2.3cm以上×横1.1cm以上、厚さ2cm前後の平瓦凹面に押捺される。狭端面から約3.5cm、側面から約10cmの位置に、文字の天地を逆に押捺される。凸面にはタテ縄タタキ痕が残る。胎土は精良、焼成は軟質、色調は灰白色である。SD01新の上部付近の遺物包含層から出土した。28は文字のみが陽刻され、印面は確認できない。約1.8cmの平瓦凹面に押捺される。狭端面から約3cm、側面から約14.5cmの位置に、文字の天地を逆に押捺される。凸面にはやや細かいタテ縄タタキ痕が残る。胎土は精良、

焼成はやや硬質、色調は淡灰色である。SX04から出土した。

D. 施釉瓦 (図39-29~32 巻首図版VI-12)

SD01古の木屑層から三彩平瓦 (2点)、SD01新の上層から緑釉丸瓦 (2点) が出土した。

a. 三彩平瓦 29は厚さ約1.6cm、幅約4.5cm、長さ約5.7cmが遺存する。平瓦凹面と端面に緑・褐・白の三色で施釉される。素地の段階で、凹面の布目痕が消され、狭端寄りにヨコケズリが行われた後に施釉される。凸面に糸切痕はあるが、タタキの痕跡は確認できない。胎土は精良、焼成はやや軟質、色調は薄い黄灰色である。施釉箇所から、狭端部片と推察できる。30は厚さ約2cm、幅約6.5cm、長さ約4cmが遺存する端部である。平瓦凹面と端面に緑・褐・白の三色で施釉されるが、凸面には施釉されない。表面の状態と釉の色合いからみて、二次焼成で被熱しているようである。凸面には糸切痕が残る。胎土は精良、焼成はやや軟質、色調は灰色である。施釉箇所から、狭端部片と推察できる。

b. 緑釉丸瓦 31は丸瓦凸面に緑釉が施されるが、剥離が著しい。釉の色調はやや暗い緑色で、二次焼成を受けている可能性がある。凹面には施釉されない。厚さ約1.5cm、幅約6cm、長さ約4.5cmが遺存する。凸面には丁寧なナデが施され、凹面には布目痕が残る。胎土は精良、焼成はやや軟質、色調は灰白色である。施釉箇所から、筒部片と推察できる。32は筒部側面の断片で、凸面には

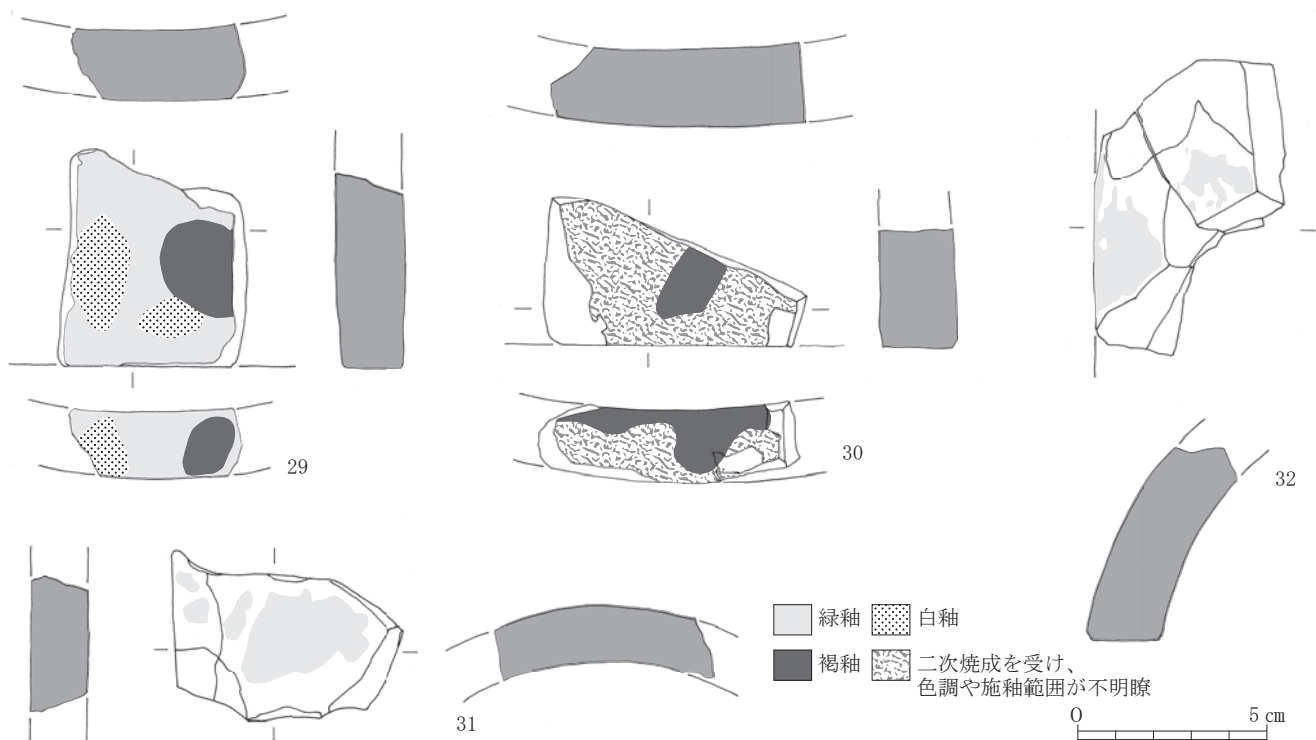


図39 出土施釉丸瓦・平瓦実測図 (1/2)

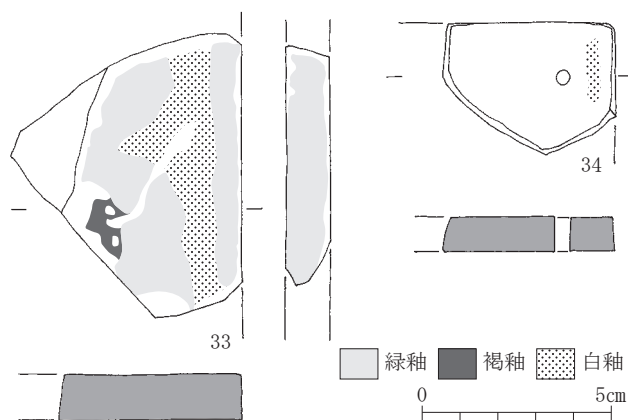


図40 出土榼先瓦実測図 (1/2)

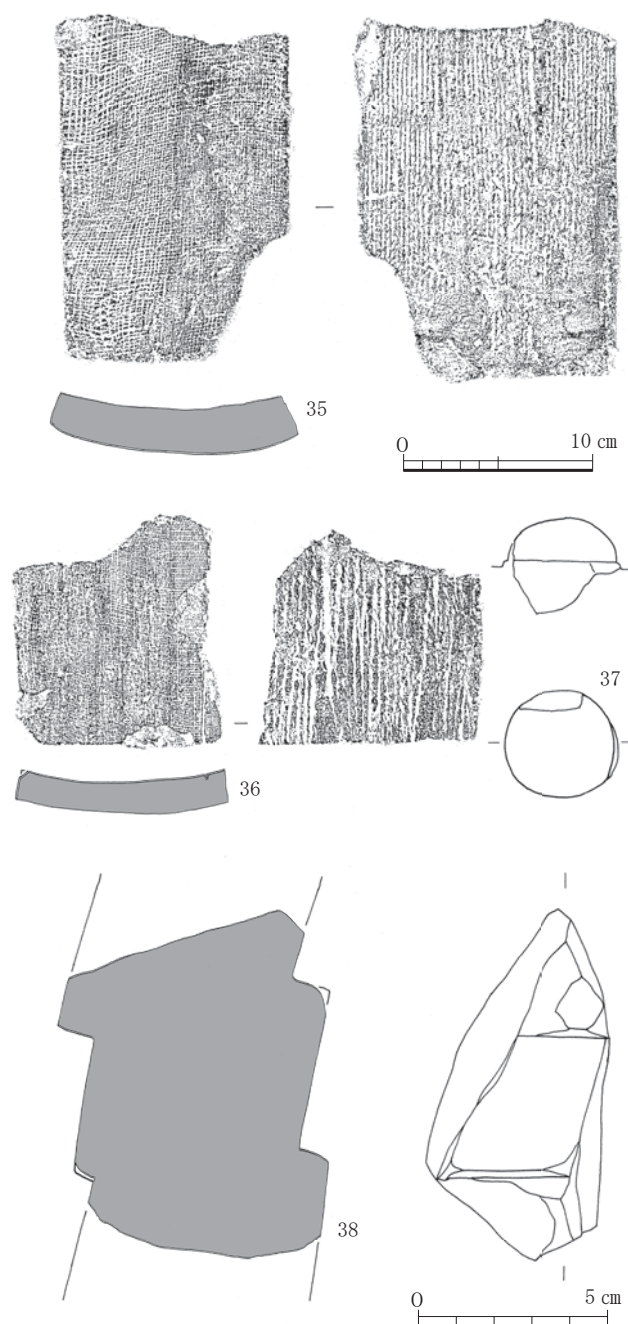


図41 出土熨斗瓦実測図・拓影 (1/4)・鴟尾実測図 (1/2)

緑釉が施される。凹面・側面は施釉されない。厚さ約1.8cm、幅約9cm、長さ約5.5cmが遺存する。凹面には粗いナデが行われ、大半の布目痕が消される。胎土は精良、焼成はやや軟質、色調は灰白色である。

F. 道具瓦

榼先瓦、熨斗瓦、面戸瓦、鴟尾、埴の他、土管状瓦製品がある。

a. 榼先瓦 (図40-33・34)

33はSD01古の木屑層から出土した。厚さ約1.2cm、縦約7cm、横約6cmが遺存する方形榼先瓦で、飛檐榼用である。表面は緑・褐・白の三色で、側面は緑で施釉される。裏面は施釉されず、ハケ目ないしは丁寧なナデで平滑に仕上げられる。胎土は精良、焼成は軟質、色調は灰白色である。西大寺旧境内では既存^{註7)}の榼先瓦で、四葉花紋を芯として、対角線方向に三葉紋を描く三彩榼先瓦である。34はSD01新の下層から出土した厚さ約0.9cm、縦約3.5cm、横約4.5cmが遺存する方形榼先瓦で、33よりも薄手の飛檐榼用と考えられる。表面には施釉の痕跡がわずかに残るが、遺存状態が悪く、他面の施釉の有無は不明である。隅から縦・横ともに約1.3cmの位置に、焼成前に開けられた径0.3~0.4cmの円形の釘穴がある。胎土は精良、焼成は軟質、色調は灰白色である。

b. 熨斗瓦 (図41-35・36)

26点を確認した。平瓦状に成形した粘土板の凹面側に縦方向の分割截線を入れて焼成後に二分割する割り熨斗が25点で、他の1点は(乾燥後)焼成前に分割した可能性がある。調整に大差は無く、凹面には布目痕、凸面にはタテ縄タタキ痕が残る。平瓦を焼成前に分割成形する切り熨斗や、分割截線を入れない平瓦を焼成後に分割する割り熨斗瓦なども想定すべきであるが、抽出できなかった。大半がSD01新の上層と下層から出土した。厚さ1.7~2.6cmで、分割截線は深さ0.1~0.5cmである。完存あるいは長さの分かる資料は無く、遺存状態は悪い。また、出土層位による製作技法や法量などの差異は確認できなかったが、一枚幅の分かる資料が2点出土した。

35は幅約12cm、厚さ約2.2cm、截線は深さ約0.3cm、長さ約18.5cmが遺存する隅部片である。凹面にはやや粗い布目痕が、凸面にはやや細かいタテ縄タタキ痕が残る。胎土は径0.1~0.2cmの白粒子を多く含みやや粗く、焼成はやや軟質、色調は内面が灰色、外面が暗灰色である。SX04から出土した。36は幅9.5~10.5cm、厚さ約1.7cm、截線は深さ約0.1cmで、長さ約12cmが遺存する隅部片である。凹面には布目痕が、凸面にはやや粗いタテ縄タタキ痕が残る。胎土は径0.1~0.2cmの白色粒子を含むが精

良、焼成はやや硬質、色調は内面が灰色、外面が灰～暗灰色である。SD01新の上層から出土した。35・36ともに、側面は凹・凸面に対してほぼ直角を成す。

c. 面戸瓦

丸瓦を焼成前に面戸瓦用に成形した「蟹面戸」の舌部片を1点確認したのみである。胎土は径0.1～0.2cmの白色粒子を含むが精良、焼成は軟質、色調は内面が淡黄灰色、外面が暗灰色である。SD01新の上層から出土した。

d. 鷗尾 (図41-37・38)

SD01新から鷗尾の断片が2点出土した。37は下層から出土した直径約2.8cm、高さ約1.1cmの半球形状の断片である。型で成形後に、表面をナデ調整で仕上げる。形状と大きさから、縦帯部の珠紋と推察できる。胎土は精良、焼成はやや軟質、色調は内面が淡灰白色、外面が淡暗灰色である。38は表裏両面に深さ約0.9cmの段が2段分遺存し、各段部分の厚さが約5.5cmの断片である。SD01新の上層から出土した。粘土塊からヘラケズリで段を削り出し成形した「逆段」の鱗(部)と考えられる。胎土は径0.1～0.3cmの白色粒子を含むが精良、焼成はやや軟質、色調は内面が淡灰白色、外面が淡灰色である。西大寺旧境内の既存資料と比較しても大差は無かった^{註8)}。

e. 埴

26点を確認した。出土層位の大半はSD01新の上層と下層である。完存するものや縦・横一辺以上が確認できるものは無く遺存状態は悪い。厚さの分かるものが12点あり、2.3～8.1cmに収まる。出土層位による、胎土・焼成・色調の明確な差異などは確認できなかった。

f. 土管状瓦製品 (図42-39・40)

39・40は、いずれもSD01古から出土した。遺存状況が悪く、部分的な復元に留まる。39は復元径約10.5cm、厚さ3.5～3.8cmの円筒に、復元径約6cm、厚さ1.0～1.8cmの玉縁が付く。円筒～玉縁までの凹面側は、径約3cmが中空になっている。円筒部凸面にはタテ縄タキ痕が確認できる。胎土は径0.1～0.3cmの白色粒子を含むが精良、焼成は軟質、色調は内面が淡灰白色、外面が淡灰色である。最下層から出土した。40は復元径約11.2cm、厚さ約3.2cmの円筒の断片で、同筒部分の形状や成形・調整は39に似る。胎土は径0.1～0.3cmの白色粒子を含むが精良、焼成は軟質、色調は内面が淡灰白色、外面が淡灰色である。木屑層から出土した。39・40はともに破面を観察する限り、板状や紐状ではなく、塊状の粘土を用いて成形しているようである。凹面側すなわち内側には、布目痕は確認できない。棒状の模骨に粘土を巻いて成形し、成形後に模骨を抜いてから内面をナデで仕上げるようである。

(宮崎正裕)

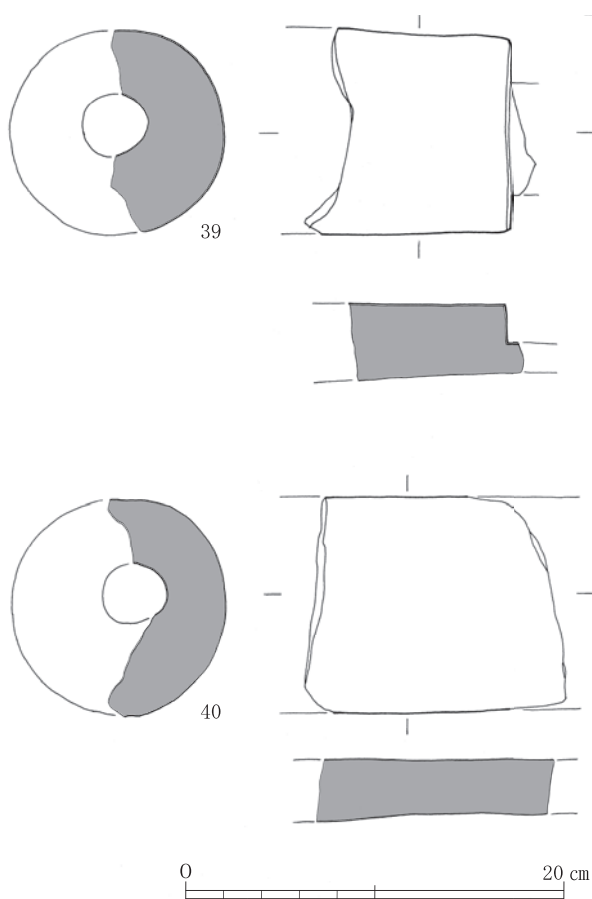


図42 出土用途不明瓦製品実測図 (1/4)

註1) 本文、表、図で使用する型式・種は、『平城京・藤原京出土軒瓦一覽』奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編 1996 に準拠している。

註2) 『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』奈良文化財研究所 2007 において、「6733の新型式」と報告されている資料と同範品で、今回の出土品は向かって右第一単位の唐草上半～上外区珠紋にかけての小片である。

註3) 『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所編 1990 で設定の型式・種である。

註4) 註3) 文献で分類された顎形態である。

註5) 瓦表面における状態での表記である。

註6) 註3) 文献で設定された型式・種である。

註7) 註3) 文献での報告資料を参照のこと。

註8) 寺地(市SD18次調査)(『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』奈良市教育委員会 2007 所収)、および食堂院(『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』奈良文化財研究所 2007 所収)出土資料と実見した。

第2節 土器類・土製品

I. 土器類

土器類には土師器、黒色土器A類、須恵器、製塩土器、奈良三彩、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、青磁、国産陶磁器、イスラム陶器があり、破片数15,956点を数える。このうち土器類の約91%がSD01から出土し、SX04、遺物包含層からの出土はわずかである。

本稿で使用する器種の名称・調整技法は、『平城宮発掘調査報告VII』^{文12)}『平城宮発掘調査報告XI』^{文14)}(以下、『平城宮報告VII・XI』)に掲載された器種名、技法名に準拠したが、一部名称を変更したものや土器群の型式的特徴を把握するために新たに分類記号を付したものがあ

(1) 土師器杯Aの分類

土師器杯Aは、これまでの研究により、口縁部の形状からA形態とB形態に分類されているが、今回報告する土器群は、口縁部の形状がA形態とB形態との中間的な要素をもつ一群にも着目し、土師器杯Aを以下のように

三つに分類して説明する。(図44)

杯A-A形態：広く平坦な底部からやや内湾しながら口縁部が立ち上り、口縁部上半で外反し口縁端部が内側に丸く肥厚するもの。

杯A-B形態：広く平坦な底部から斜め上方に開く口縁部からなり、口縁端部は内側に小さく肥厚するもの。

杯A-C形態：A形態とB形態の中間的な一群で、底部から口縁部の形状はB形態に近似しているが、口縁部上半でやや外反し、A形態に近似するものもある。口縁部上端部は、斜め内側もしくは上方につまみあげられたような形を呈し、端部を小さく肥厚させるもの。

(2) 土師器皿Aの分類

土師器皿Aについても口縁部の形状からA形態、B形態に分けられているが、ここでは新たにC形態、D形態を設定して分類した。

皿A-A形態：広く平坦な底部からやや内湾しながら口縁部が立ち上り、口縁部上半で外反し口縁端部が内側に丸く肥厚するもの。

皿A-B形態：広く平坦な底部から斜め上方に開く口

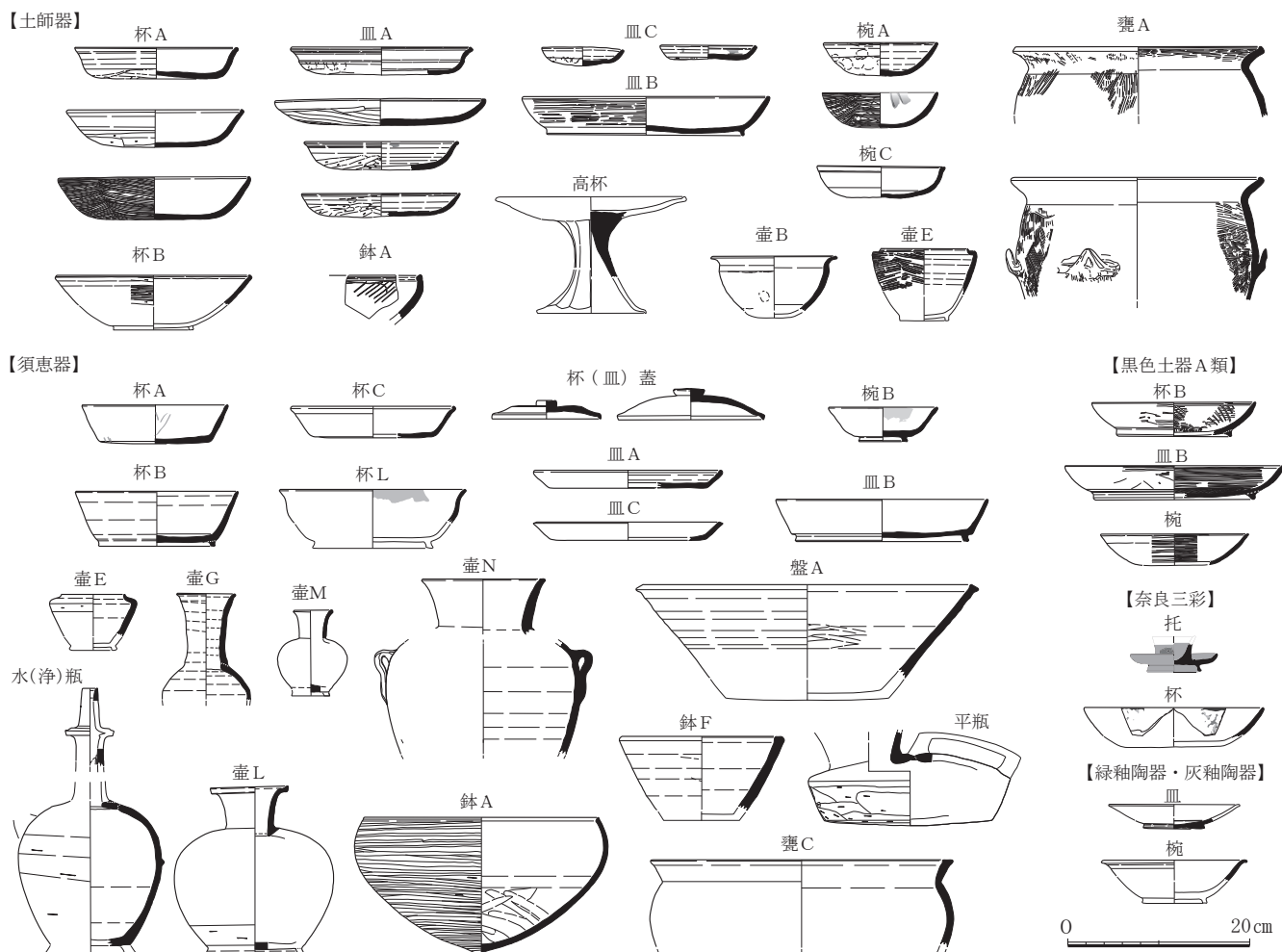


図43 出土土器主要器種名 (1/8)

縁部からなり、口縁端部は内側に小さく肥厚するもの。

皿A-C形態：『平城宮報告VII・XI』で杯C^{註1)}と呼ばれたもので、平坦な底部またはやや丸味のある底部と外反する口縁部からなり、口縁端部が内傾するもの。

皿A-D形態：広く平坦な底部から斜め上方に開く口縁部からなり、口縁端部は丸くおさまるもの。

以下、上記の分類に従い各出土遺構ごとに説明する。

(3) SD01出土土器

SD01埋土には、幾つかの型式的特徴をもつ土器群が含まれているため、各層ごとに出土土器を分類し、遺物の調査をすすめた。

まず、土器類の全体像を把握するために、現地調査での取上げ単位ごとに種類・器種・破片数・法量測定・調整手法などの観察をおこなった後、接合作業をした。取上げ単位の中で接合するものが多いが、須恵器やイスラム陶器は層を越えて接合するものもあった。

次に、土師器食器類（杯・皿・碗）を0.5cm単位ごとの大きさで口径の階級^{註2)}を設定し、口径復元できる全ての土師器食器類を対象にそれぞれの階級に分類した。

同じ階級にあるものを、器高・形態的特徴・調整技法を再度観察した結果、幾つかの型式的特徴をもつ土器群が存在していることが明らかになった。また、大きさの違う口径階級に分類したものの中にも同様の結果をみる事ができた。

SD01出土土器は基本的に層位ごとに記述するが、イスラム陶器はSD01古とSD01新から出土しているため、SD01出土土器の末尾（54・55頁）で一括して述べる。

A. SD01古最下層出土土器（図45、表8、Ph. 8-1）

土師器、黑色土器A類、須恵器がある。

a. 土師器（1~24）

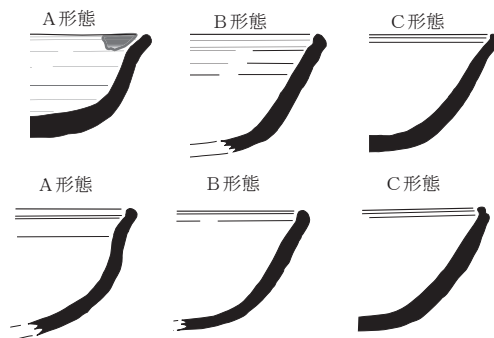
土師器には、杯A・B、杯蓋、皿A・C、碗A・C、高杯、鉢A、盤、壺B・E、甕Aがあり、破片数では528点ある。

杯A 口径階級で14.5~20.5cm台のものが破片数で14点、個体数^{註3)}にすると8個体ある。口縁部から底部が残る資料では、ヨコナデ調整だけで仕上げるa手法が2点、底部外面だけをヘラケズリするb手法が2点、底部から口縁部外面をヘラケズリするc手法が4点あり、ヘラケズリを行うものが主体を占めている。また、小破片においてもケズリ痕跡が残るものが多い。

これらは口縁部の形態から、A形態、B形態、C形態の三つに分類できる。

A形態（4~8）口縁部が大きく外反するものが多い。口径14.5~20.0cm台、器高2.8~4.5cmまでのものが

【杯A】



【皿A】

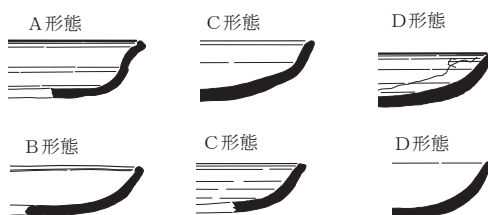


図44 土師器杯A・皿Aの形態分類

表8 SD01古最下層出土土器の器種構成

土師器			須恵器			黑色土器A類		
種類・器種	点数	比率	種類・器種	点数	比率	種類・器種	点数	比率
杯 A	19		杯 A	10		杯カ皿B	1	
杯 B	4		杯 B	9				
皿 A	28		杯 C	10				
皿 C	53		杯 L	1				
碗 A	35		杯・皿	60				
碗 C	7		蓋	50				
杯・皿	173		皿 B	1				
蓋	7		皿 C	1				
高杯	8		高杯	1				
計	334	63.3	計	143	40.9	計	1	100.0
壺 B	37		平瓶	3		壺		
壺 E	1		水・浄瓶	3				
鉢 A	2		壺 A	1				
壺・鉢・盤	7		壺 L	2				
計	47	8.9	鉢 A	7		計	0	
甕 A			鉢 D	1		甕		
口縁	13		鉢・壺	35				
体・底部	134		甕 C	1				
			甕体・底部	154				
計	147	27.8	計	207	59.1	計	0	
土師器合計	528	100.0	須恵器合計	350	100.0	黑色土器A類合計	1	100.0
比率	土師器	60.1%	比率	須恵器	39.8%	比率	黑色土器A類	0.1%

ある。4は口径14.8cm、器高2.9cm。底部外面にユビオサエによる凹凸や粘土紐接合痕が残る。内外面全体が二次的に熱を受けて赤黒色に変色しており、口縁端部は黒色に変色している個所もある。a₀手法。5は口径17.8cm、器高3.0cm。口縁部内面と底部外面が二次的な被熱で黒く変色している。底部内面には墨痕が残る。b₀手法。6は口径17.8cm、器高4.5cm。底部外面から口縁部下半にナデやユビオサエの痕跡が残る。a₀手法。7は口径20.8cm。内面に一段の粗い斜放射状暗文を施す。b₀手法。6・7の形態はよく似ており、ともに口縁部外面には強いヨコナデ調整を行う。8は底部を欠くが、口縁部

上半部までケズリ痕跡が残るため c_0 手法によるものと考えられる。4・5・8は、口縁端部直下付近から外反するのが特徴である。

B形態 (1) 1は口径17.8cm、器高約3.7cm。底部からやや内湾ぎみに立ち上る口縁部で、端部は内側にわずかに肥厚する。外面をヘラケズリで調整しているが、ヘラミガキはみられない。 c_0 手法。

C形態 (2・3) 2は口径18.4cm、器高4.5cm、 c_0 手法であるが、底部外面から口縁部半ばまでしかヘラケズリを行わない。3は口径19.2cm、器高3.9cm。口縁部上半を強くヨコナデしているため、ケズリ残し箇所がみられる。 c_3 手法。底部から口縁部下半の器厚は0.6cmあるが、口縁部上半から端部までは0.4cmと薄くなるのが特徴である。

皿A 口径16.0~21.0cm台、器高2.4~3.2cmに復元できるものが破片数で8点、個体数は3個体ある。調整技法は、ヘラミガキを施さず外面全体をヘラケズリする c_0 手法が大半を占めるが、わずかに a_0 手法のものがある。口縁部の形態からB形態とC形態に分類できる。

B形態 (18・19) 口縁部がやや内湾ぎみにたちあがり口縁端部が内側に小さく肥厚するもの。18は口径19.0cm、器高2.85cm。器表面が磨滅しているため調整の詳細は不明だが、口縁端部外面にわずかにヘラケズリの痕跡が残るので、外面全体をヘラケズリする c_0 手法と考える。内面に煤が付着。19は口径21.6cm、器高2.4cm。調整は c_0 手法、内外面ともに二次的な被熱で変色し、部分的に器面が剥離している。口径に対して器高は低く、器厚は0.6cmある。

C形態 (17) 底部から斜め上方に口縁部が立ち上り、口縁端部が内傾するもの。17は口径16.0cm、器高3.2cm。底部の形状はやや丸底を呈している。調整は a_0 手法だが、底部外面は不定方向のナデ調整をしており、部分的にユビオサエの痕跡が残る。

皿C (11~16) 小型の皿で、口縁部を強くヨコナデして仕上げるのが特徴的である。口径8.2~11.2cm、器高1.9~2.5cmまでのものが、破片数で12点、個体数では6個体ある。底部が平坦なもの(11・12・14)とやや丸みをおびたもの(13・15・16)がある。11は口径8.2cm。12は口径9.5cm、器高1.9cm。口縁端部内外面には油が焦げた痕跡が残る。14は口径10.2cm、器高1.8cm。底部外面には、部分的にヘラケズリの痕跡が残る。13は口径10.1cm、器高2.5cm、15は口径10.4cm、器高2.35cm。いずれも口縁部内面から口縁端部外面にかけて油が焦げた痕跡が残る。16は口径11.2cmで、内面全体に煤が付着し、

一部口縁端部外面にも及んでいる。15・16ともに底部外面にはユビオサエ、部分的にヘラケズリの痕跡が残る。

椀A (9・10) 小さい平坦な底部とやや内湾ぎみに立ち上る体部からなり、口縁端部は内側に小さく肥厚する。口径12.0~14.0cm台に復元できるものが破片数で7点、個体数にすると2個体ある。9は口径12.2cm。口縁部外面をヘラケズリで調整した後、粗いヘラミガキを施す(c_3 手法)。口縁部内外面は、二次的に熱を受けて変色している部分がある。10は口径14.0cm、器高5.0cm。内外面は磨滅しているため調整は不明。体部下半にユビオサエの凹凸、粘土紐接合痕がわずかにみえる。

高杯 (21) 高杯は個体数で8点ある。脚部が残存しているものは図示した個体だけで、芯棒造りによるものである。縦方向のヘラケズリで面取りを行い、十一角に仕上げる。脚部内面はヨコナデ調整である。杯部片は6点あるが、いずれも小片のため口径復元できない。

鉢A (20) 須恵器鉢Aと同じく尖底の底部から内湾しながら立ち上る体部からなる。いわゆる「鉄鉢」形の鉢が2点ある。20は小片のため口径復元ができず、外面も磨滅しているため詳細はわからないが、内面には一段の斜放射状暗文と連弧状暗文を施している。

壺B (22) やや丸底ふうの底部から内湾しながら立ち上る体部と外反する口縁部からなる広口の壺片が37点ある。口径13.9cm。口縁部内外面から体部内面をヨコナデ調整、体部外面は粘土紐接合痕とユビオサエが残る。

壺E (23) 底部から斜め上方に開く体部と、蓋受けのような短い口縁部からなる小型の広口壺が1点ある。口径9.5cm。体部外面には粗いヘラミガキを施しているが、ヘラミガキの下の調整は不明。

甕A (24) 『平城宮報告VII・XI』では、丸底甕を甕A、丸底で把手が付くものを甕Bとしているが、ここでは把手の有無に関わらず短胴で丸底の甕を甕Aとした。口縁部片が13点、底体部片が134点ある。大半の破片には煤や二次的に火を受けた痕跡が残る。24は口径28.0cmの大型の甕で、球形状の体部と大きく外反しながら立ち上る口縁部からなり、口縁端部が内側に肥厚する。全体の形状は、平城京出土の土師器甕の中で主流を占めるタイプである。口頸部外面から肩部外面にかけて縦方向のハケメ後、ヨコナデで調整をする。体部全面には、斜めおよび縦方向のハケメ痕跡が残るが、その下にユビオサエの痕跡がみられる。内面はヨコナデで調整。内外面には、二次的に火を受けた痕跡や煤などの煮炊きした痕跡はみられない。体部外面には「西大寺/信師/六/□」の墨書がある。

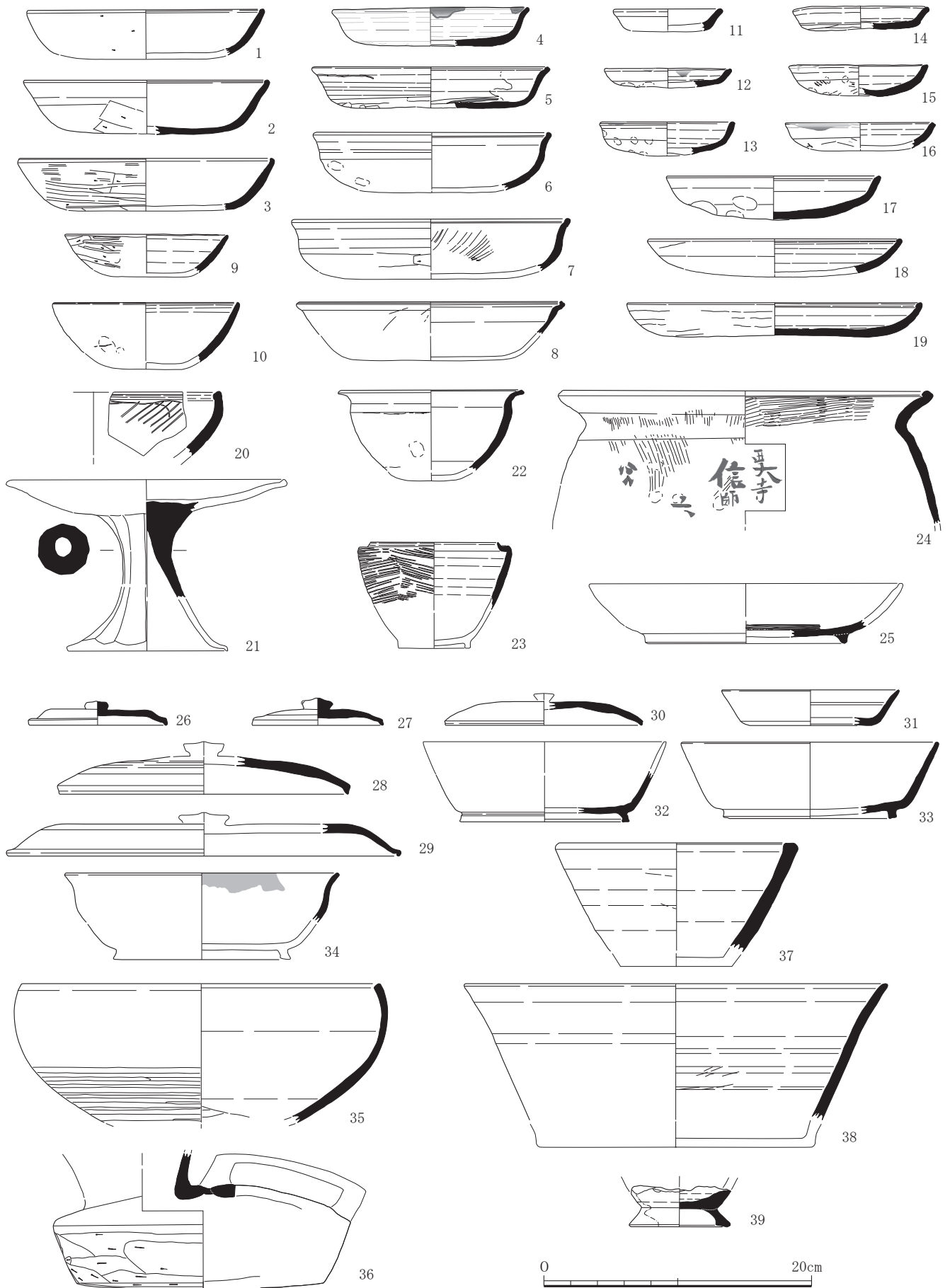


图45 SD01古最下層出土土器実測図 (1/4)

b. 黒色土器A類 (25)

黒色土器A類には皿Bが1点ある。

皿B (25) 広く平坦な底部に三角形状の細長い高台を付している。高台径15.0cm。口縁部を欠くが、口径21.0cmを越す大型の皿に復元できる。底部外面はヘラケズリで調整し、底部内面には平行線状のヘラミガキ、底部から口縁部の立ち上る箇所には横方向のヘラミガキを施す。外面の色調は赤褐色、焼成はやや軟質である。

c. 須恵器 (26~39)

須恵器には、杯(皿)蓋、杯A、杯B、杯L、鉢A、水(浄)瓶、平瓶、鉢F、甕があり、破片数で350点ある。

杯(皿)蓋 平らな頂部と屈曲する縁部からなるA形態と、丸い笠形を呈した頂部と屈曲せず湾曲気味に端部にいたる縁部からなるB形態とがある。

A形態 (26・29) 5個体ある。26は口径10.4cm、器高1.8cm。縁部はロクロナデで調整する。頂部外面はヘラキリ未調整。頂部内面全体に墨痕が残る。29は口径29.4cm、皿蓋である。内外面全体をロクロナデ調整で仕上げる。

B形態 (27・28・30) 5個体ある。27は口径9.8cm、器高2.0cm、28は口径21.9cm、30は口径14.8cm。27・28はともに頂部外面はロクロケズリの後ロクロナデ調整で、頂部内面はヨコナデ。30は外面全体に焼成時の降灰がみられ、調整は不明。内面はロクロナデである。28の頂部内面は平滑で墨が付着しており、硯として転用されたようである。胎土中に0.05~0.1cm程度の白色砂粒を多く含む。

杯A (31) 31は口径13.2cm、器高2.7cm。口縁部内外面ともロクロナデ。底部外面はヘラキリの後ヨコナデである。口縁部内面に先の丸い工具でつけたとみられる一条の沈線がめぐる。

杯B (32・33) 32は高台径12.6cm、33は口径19.3cm、器高5.8cm、高台径12.9cm。いずれも口縁部はロクロナデ、底部内面はヨコナデである。33の底部外面は、ロクロケズリの後ロクロナデで、胎土中に細かい白色砂粒を多く含む。32はヘラキリの後ヨコナデで仕上げる。

杯L (34) 杯Lは1個体だけで、34は口径20.4cmの大型品である。金属器の鉢を模したものと考えられ、口縁端部は外反する。口縁部内外面ともロクロナデ。口縁部内面に墨痕がある。

この他に、杯・皿類の口縁部・底体部破片が60点ある。

鉢A (35) いわゆる「鉄鉢形」の鉢である。35は口径26.45cm。体部内面・口縁部内外面をロクロナデ、体部下半をロクロケズリの後、粗いロクロミガキを加えて

いる。灰白色でやや軟質に焼きあがり、口縁端部から下に5.5cm程度の幅で灰黒色に帯状に変色している。重ね焼きの痕跡と考えられる。

鉢F (37・38) 平坦な底部と斜め上方に開く口縁部からなる深い器形である。2個体ある。37は口径17.6cm、38は口径31.5cm。調整はいずれも口縁部内外面ともロクロナデで、ロクロナデの前に斜め方向のナデを行なっている。38は口縁端部を丸くおさめ、口径の大きさからみて高台がつかない形態になると考えられる。

平瓶 (36) 体部最大径が22.1cmの大型品である。底部外面は未調整、体部外面はヘラケズリ、体部上半はロクロナデで調整する。把手は欠損しているが、把手の痕跡の周辺にはヘラケズリの痕跡が残る。胎土に0.1~0.2cmのやや大きい白色砂粒が目立つ。

水(浄)瓶 (39) 水瓶もしくは浄瓶の底部片で、高台径7.2cmを測る。高台の下端部をやや凹ませ、外端で接地させている。外面はロクロナデで、一部に自然釉がかかる。底部内面が平滑で、墨が付着していることから硯に転用したものと考える。使用時の安定性を考慮してか、体部の高さが均一になるよう故意に打ち欠いて使用したものとみられる。

B. SD01古木屑層出土土器 (図46~51、表9、巻首図版IV-11、Ph. 8-2、9-1・2、10-1)

土師器、黒色土器A類、須恵器、奈良三彩、イスラム陶器、ミニチュア竈がある。SD01の堆積土の中で量的に最も多くの土器が出土し、総破片数で10,910点ある。

a. 土師器 (40~149)

土師器には、杯A・B、皿A・B・C、椀A・C、高杯、鉢、壺B、甕Aがあり、破片数は8,583点である。

杯A 口径を復元できる資料は破片数で233点、個体数では131点ある。口径16.0~22.0cm台までのものがあり、量的には口径17.5~19.5cm台に集中している。

調整はヘラケズリが主体で、個体数131点のうち111点(約85%)にヘラケズリ痕跡が残る。調整技法は、a₀手法12点、a₁手法4点、a₃手法2点、b₀手法35点、b₁手法3点、b₃手法16点、c₀手法19点、c₃手法38点、不明2点である。ヘラミガキがあるもの(63点)とないもの(66点)は、量的にほぼ均衡する。煤や二次的な被熱で器表面が変色しているものが多い。口縁部は、A~C形態に分類できる。

A形態 (40~43) 40は口径16.8cm、器高3.0cmの浅い器形である。b₀手法。器厚は0.4cmと薄い。41は口径18.0cm、器高3.5cm。底部から口縁部の立ち上りが強く、箱形状を呈している。b₀手法で調整されているが、底

部外面の中心部にはヘラケズリが及ばず、ユビオサエの痕跡が残る。42は口径18.4cm、器高3.7cm。a₀手法。底部外面はヨコナデによりユビオサエを消している。41・42ともに口縁部内面上半部の湾曲が強い。43は口径19.8cm、器高は約3.5cm。b₀手法。口縁部は外湾し、底部はやや丸みをおびて腰が張ったような形態である。内面に墨痕が残る。

B形態 (44~51) 口径18.0~21.5cm台、器高3.4~5.6cmのものがある。44は口径18.3cm、b₃手法。45は口径18.4cm、器高4.3cm。46は口径18.6cm、器高4.4cm。47は口径18.8cm、器高4.4cm。45・46はc₀手法、47はc₁手法であるが、3点とも口縁部外面上端までケズリが及んでいない。45の底部内面から口縁部内面にはヨコナデ調整の下にハケメ痕跡がみられることから、口縁部を成形する際にコテ状の工具を使用した可能性が考えられる。48は口径19.6cm、器高3.9cm。49・50はともに口径20.4cm、51は口径21.6cm、器高4.3cm。調整技法は、49がa₀手法、48・50はb₀手法、51はc₀手法である。51は底部外面から口縁部外面中半までしかヘラケズリが及んでいない。口径18.0~18.5cm台の杯Aは、器高が4.0cm以上のものが多いが、口径19.5cmを越す杯Aには、器高が4.0cm以下の低いものがある。

C形態 (52~77) C形態には、口縁部の形態がB形態とC形態の中間的な形態のもの(62~77)が一定量あるが、ここでは口縁端部形態の特徴からC形態として分類した。

52~61は口径18.4~21.2cm、器高3.7~4.7cm。調整技法は、58~60がb₀手法、56はb₃手法、52・57はc₀手法、53~55・61はc₃手法である。いずれもヘラケズリで調整しているが、口縁部上端を削り残すものが大半である。ヘラミガキも粗いものが多い。53の底部外面には「吉万呂/二/斗」の墨書がある。

62~77は口径16.0~22.4cm、器高3.6~5.15cm。調整技法は、67がb₀手法、75はb₃手法、73・74はc₀手法で、その他はc₃手法である。この一群についても、ヘラケズリは口縁端部まで及ばない。56の底部外面に「粥」の刻書が、73の底部外面には墨で人面が描かれている。69の口縁部内面にも墨書がある。

杯B 高台の小片が2点ある。図示し得なかったが、皿Bの高台になる可能性もある。

皿A 口径復元できる資料は、破片数で266点、個体数は122個体である。口径13.5~24.0cm台、器高1.2~3.5cm台のものがあり、口径17.0~17.5cm台の資料が多い。個体数による技法の内訳は、a₀手法7点、a₂手法1点、

表9 SD01古木屑層出土土器の器種構成

土師器				須恵器				黒色土器A類			
種類・器種	点数	比率		種類・器種	点数	比率		種類・器種	点数	比率	
食膳具	杯A	233		杯A	164		食膳具	杯	12		食膳具
	杯B	2		杯B	127			皿	32		
	杯A・B	121		杯C	1			杯・皿	41		
	皿A	455		杯A・B	201						
	皿B	12		皿A	30						
	皿C	137		皿C	76						
	杯・皿	5172		杯・皿	421						
	蓋	11		蓋	248						
	椀A	219									
	椀C	10									
高杯	10										
計	6382	74.4	計	1338	60.6	計	85	100			
貯蔵具	鉢・盤・壺	18		貯蔵具	鉢	229		貯蔵具	壺	0	
	壺	37			壺	266				0	
	計	55	0.6		水・浄瓶	57			計	0	0.0
煮炊具	甕A口縁	172		煮炊具	鉢・壺	11		煮炊具	甕		
	体・底部	1973			甕口縁	4			口縁	0	
	鍋	1			甕体・底部	302			体・底部	0	
	計	2146	25.0		計	869	39.4		計	0	0.0
土師器合計 8583 100.0			須恵器合計 2207 100.0			黒色土器合計 85 100.0					
比率	土師器	78.9%	須恵器	20.3%	比率	黒色土器A類	0.8%				

(※奈良三彩・イスラム陶器を除く)

b₀手法87点、b₁手法2点、b₂手法1点、b₃手法1点、c₀手法20点、c₃手法1点、不明2点であり、b₀手法が全体の約70%を占める。口縁部の形態から、A~D形態の四つに分類できる。いずれも二次的な被熱で器面が変色し、煤が厚く付着している個体が多い。

A形態 (83~85) 口径19.5~21.0cm台、器高2.5~3.0cmのものがある。83は口径19.5cm、器高2.8cm。84は口径20.0cm、器高3.1cm。85は口径21.3cm、器高2.5cm。83・84は底部外面をヘラケズリ、口縁部を強いヨコナデで調整しているため、底部から口縁部の立ち上りに段差がつく。83の底部外面には粗いヘラミガキが施されている(b₂手法)。85は口縁部の屈曲は強くないが、口縁端部の形態からみてA形態に分類できるものと考えられる。3点とも外面に煤が付着し、二次的な被熱で変色している。胎土には白色微粒砂が含まれ、84は長石、85には雲母がみられる。焼成は良好。

B形態 (86~90) 口径17.5~23.0cm台、器高2.7~3.0cmのものがあり、口径21.0cmを越す大型品が多い傾向にある。86は口径17.9cm、器高は3.0cm。口径に対して器高がやや深めである。87は口径21.6cm、器高3.0cm。口縁部がやや開きぎみに立ち上る。88は口径21.8cm、器高2.9cm。89は口径22.2cm、器高2.8cm。90は口径23.2cm、器高2.9cm。調整技法はいずれもc₀手法であるが、89以外は口縁部上端までケズリが及んでいない。焼成はいずれも良好で、胎土には白色微粒砂を含む。86のみ赤色微粒粒子がみられる。

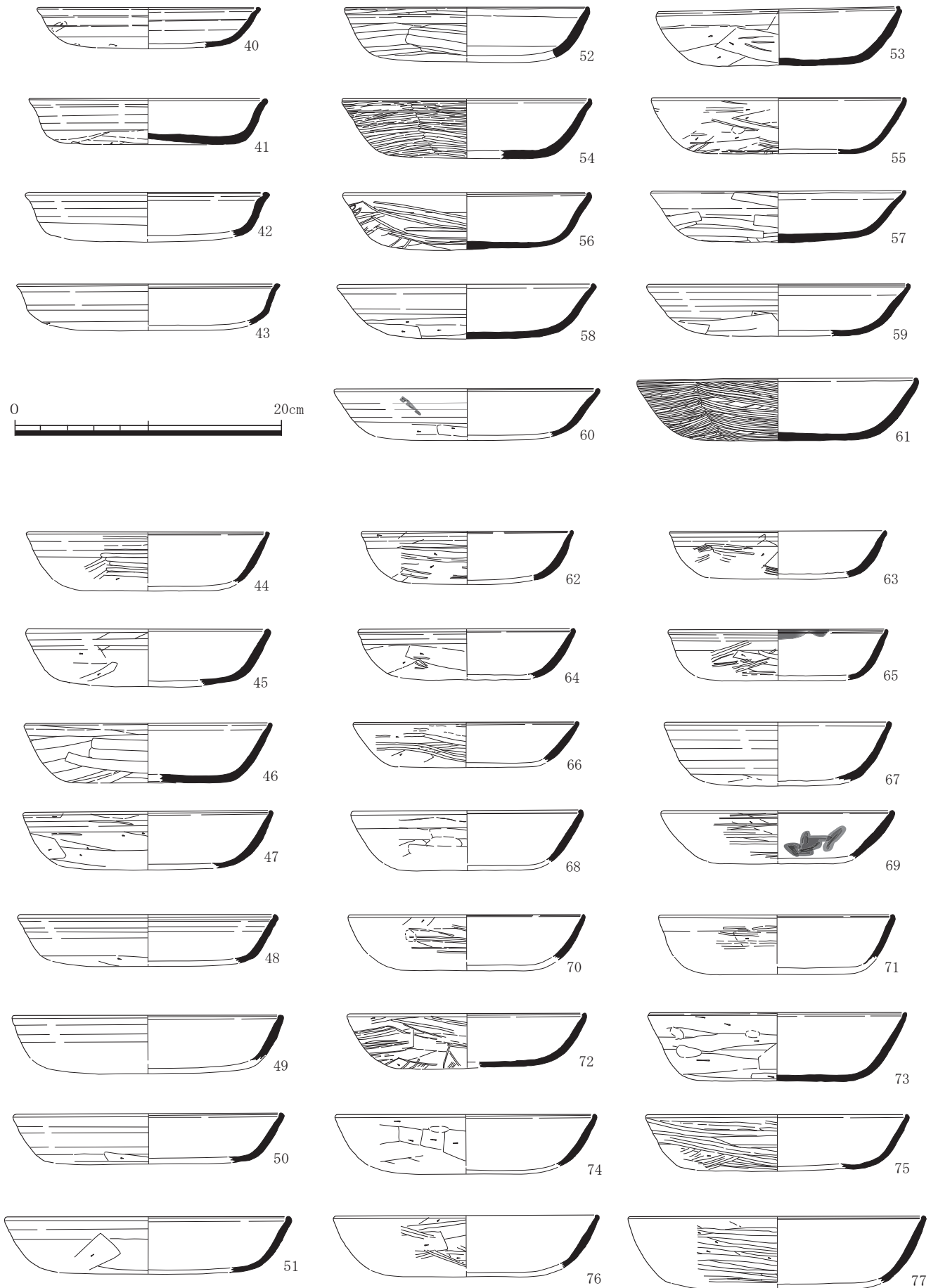


图46 SD01古木屑層出土土器実測图 1 (1/4)

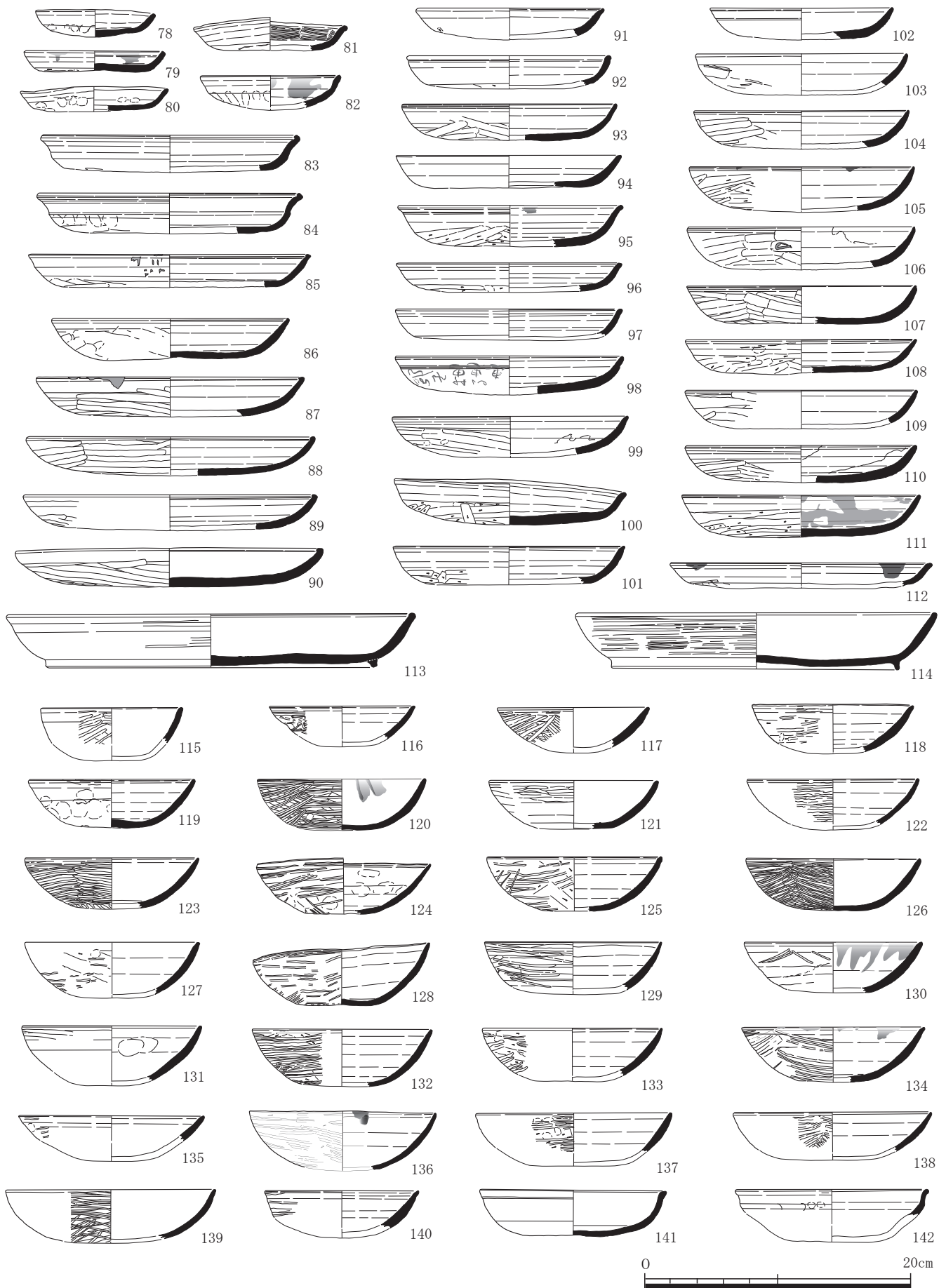


图47 SD01古木屑層出土土器実測图2 (1/4)

C形態 (91~101・112) 口径13.5~19.5cm台、器高1.7~3.45cmまでのものがあり、量的には口径16.5~17.5cm台のものが主体を占める。91は口径13.9cm、器高2.3cmで、焼成はやや軟質。内外面には煤が付着し、器表面が荒れている。92は口径15.4cm、器高2.5cm。胎土には雲母および黒色微粒子が多く含まれている。93は口径16.2cm、器高2.7cm。二次的な被熱により底部内外面は黒褐色に変色している。94~101は口径17.0~17.5cm、器高2.2~3.1cmで、98以外は器表面の一部が被熱により黒褐色に変色している。調整技法は、97が a_0 手法、91・92・96・100は b_0 手法、93・95・98・99・101は c_0 手法であるが、口縁端部までヘラケズリは及ばない。98の口縁部外面から底部外面に「□部王□□□恵恵恵/□西大寺二□」の墨書がある。112は、口径19.8cm、器高1.9cmの扁平な皿で、口縁部内外面の一部に油が焦げた痕跡が残る。

D形態 (102~111) 口径13.5~18.0cm台、器高2.4~3.5cmのものがあるが、量的には口径17.0cm台が多い。102は口径13.8cm、器高2.4cm。口縁部外面上半部には、わずかに稜線がめぐり、ヨコナデ調整の際に生じた痕跡と考えられる。103は口径16.0cm、104は口径16.2cm、器高が2.9cm。105~110は口径17.0~17.5cm、器高2.5~2.85cm。106の口縁部外面には記号と考えられる墨書がある。111は口径18.0cm、器高3.2cm。これらには二次的な被熱による器面の変色や、煤が付着する。調整技法は、104~111が c_0 手法で、103は底部を欠くため詳細は不明だが、口縁部外面にミガキがあることから、底部外面にも施され c_3 手法になる可能性がある。102は b_0 手法。

皿B (113・114) 皿Aに高台を付したもので、口縁部は皿AのB形態の特徴と同じで、底部から斜め上方に開き、端部が内側に肥厚する。破片数で12点、2個体ある。113は口径30.8cm、器高4.05cm、高台径24.9cmの大型品で、 b_1 手法で調整している。底部外面に「□□/□処福□/□/福福□」の墨書がある。底部内外面に煤が付着しており、煤は墨書の上にまで被っている。114は口径27.2cm、器高4.25cm、高台径21.7cm。 a_1 手法。底部外面は、ユビオサエの凹凸を不定方向のナデで消している。

皿C (78~82) 口径10.0cm前後の小型の皿で、口縁部が歪むものが多い。6個体ある。78~82は口径9.0~11.6cm、器高1.4~2.6cm。口縁部はヨコナデ、底部はユビオサエのままのものが多い。口縁部内面にはハケメ痕跡が残るもの(81)や工具のアタリと考えられる斜線状の押圧痕跡がみられる。成形時に使用したコテ状工具痕と考える。器表面には煤や油分の焦げが付着し、被熱に

より変色しているものもある。

この他に、杯または皿になると考えられる底部~口縁部の破片が5,172点ある。いずれも小片で全体が分からないが、ケズリ痕跡が残る破片が多い。

杯(皿)蓋 小破片が11点ある。このうち2点は宝珠形つまみ。5点は頂部片で、外面にミガキがある。

椀A (115~139) 小さく平坦な底部から内湾ぎみに斜め上方に開く口縁部からなる。器壁が厚く、底部から口縁部の立ち上りが丸みをおびた個体が多い。口径復元できるものは、破片数で40点、個体数では28個体ある。口径10.5~15.5cm台、器高3.65~4.5cmまでのものがあるが、量的には口径13.0~13.5cm台が主体を占める。115は口径10.7cm。116・117は口径11.0cmと11.5cm。118~121は、口径12.2~12.8cm、器高3.65~3.9cm。122~134は口径13.0~13.8cm、器高3.8~4.5cm。135~137は口径14.0~14.8cm。138・139は、口径15.0cmと15.8cmである。

調整技法は、116・124・138が a_3 手法、119が b_0 手法で、この他のものはすべて c_3 手法である。 c_3 手法のものは、口縁端部までケズリが及ぶものはない。ヘラミガキは、丁寧に行われているものも少数あるが、粗いものが主流でミガキの幅が0.3cmもある太いもの(115・117)がある。煤の付着や二次的な被熱で器表面が変色し、中には煤や油分がタール状になって器面に付着しているもの(121・126)がある。

椀C (140~142) 平坦な底部と屈曲しながら立ち上る口縁部からなる。口縁部上端を強くヨコナデで調整し、体部~底部にかけてはユビオサエがそのまま残る。破片数で10点ある。140は口径11.6cm。口縁部外面にわずかながらヘラミガキの痕跡があることから、椀Aになる可能性もある。141は口径14.1cm、器高3.4cm。口縁部下半までヨコナデで調整している。142は口径14.6cm。口縁部上端を強くヨコナデし、下半はユビオサエのままである。3点とも煤の付着と油が焦げた痕跡が残る。

高杯 杯部の破片が10点ある。いずれも二次的な被熱で変色している。杯部内面に一段の斜放射状暗文を施すものが1点、杯部外面に墨書があるものが1点ある。

盤 小破片が4点あるが、全形は不明。体部内面に一段の斜放射状暗文+連弧状暗文を施すものが2点ある。

甕A (143~149) 丸い底部と短胴~中胴の胴部、外反する口縁部からなる。破片で2,145点、うち口縁部片が172点、底~体部片が1,973点ある。口縁部の形態的特徴から大きく三つに分類できる。

①144・146~149は平城京内で多くみられる口縁部の形態である。口縁部が外反しながら立ち上り、口縁端部

が内側に肥厚する。口縁部片172点のうち85点を占める。148には胴部中に三角形の把手が一対付く。

②143は体部から「く」字状に口縁部が開く特徴を持ち、口縁端部は丸くおさまられている。口縁部外面には粘土紐の接合痕跡が、内面にはヨコ方向のハケメ痕跡が残る。丸底で中胴ぎみの体部になると考える。

③145は体部に比してやや長めの外反する口縁部で、口縁端部が外傾する特徴をもつ。肩部外面にはユビオサエの痕跡が多く残る。内面はヨコナデ。

三つに分類した甕は、産地の差によるものと考えられ、144・146～149は、いわゆる「都城形甕」^{註4、文63)}の範疇のもので、大和北部から山城南部地域で製作されたものとする。146は平城京内でも多く出土するが、山城南部地域に多く見られるタイプである^{文71)}。143は和泉から南河内地域、145は南河内地域で主流をなしているものであり^{文63)}、生産地も同地域に求められよう。

b. 黒色土器A類 (150～153)

杯12点、皿B 32点、杯または皿の破片が41点ある。

杯B (150) 口径18.0cm、器高3.7cm、高台径12.6cm。口縁部外面をヘラケズリで調整後、粗いヘラミガキを行う。

口縁部内面はヨコナデの後、横方向のヘラミガキを行ない、その上から右下がりの斜放射状暗文、底部内面にはラセン状とジグザグ状の暗文を施している。

皿B (151～153) 151は口径22.2cm、器高4.4cm、高台径16.6cm、152は口径24.0cm、器高3.75cm、高台径17.8cm、153は口径27.0cmを測り、いずれも大型品である。153は高台が剥がれた痕跡が残る。杯B・皿Bともに、口縁端部内側が小さく窪んで沈線がめぐる特徴をもつ。

c. 須恵器 (154～218)

須恵器には杯蓋、杯A・B・C、皿A・C、皿B蓋、水(浄)瓶、壺蓋、壺G、壺、鉢A・D、鉢、甕がある。

杯蓋 (160～162) いずれも頂部が平坦で縁部が屈曲するA形態である。160は頂部外面はヘラキリ、縁部内外面ロクロナデ、頂部内面をヨコナデで調整する。頂部内面全体に擦痕がみられ、平滑であることから硯に転用したとみられる。162は縁部の器壁が薄く、屈曲が強い形態。縁部内外面ともロクロナデ、頂部内面をヨコナデで調整する。161は頂部外面はヘラキリの後ロクロナデ、縁部内外面と頂部内面をロクロナデで調整する。内面全体に墨痕が残る。

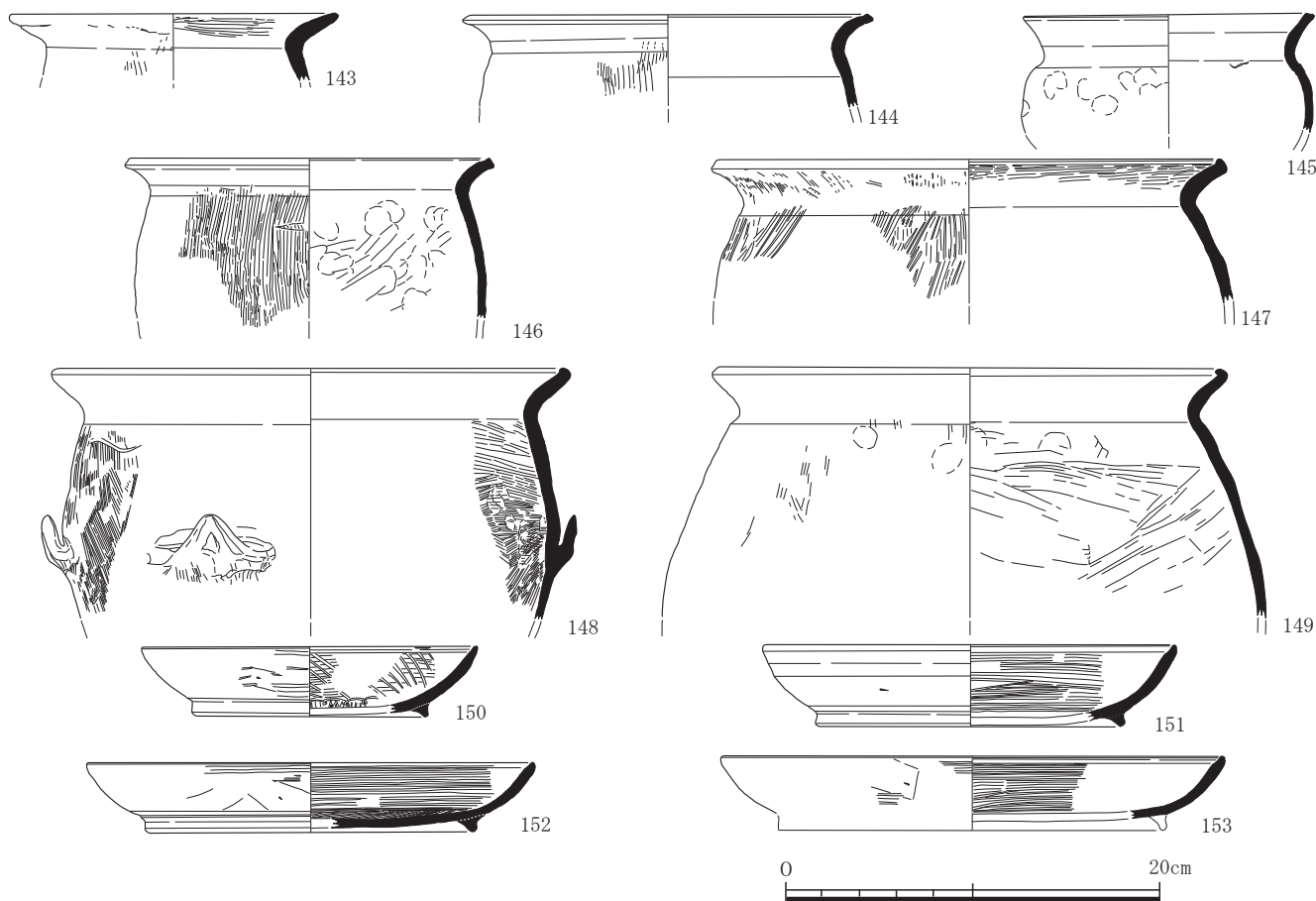


図48 SD01古木屑層出土土器実測図3 (1/4)

杯A (154~159・163・164・190) 口径の大きさから杯AⅠ：口径16.4~17.2cm (163・164) と杯AⅡ：口径15.6cm (190)、杯AⅢ：口径10.1~11.6cm (154~159) に分けることができる。調整は、154・155・163は底部外面がヘラキリ未調整で、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ロクロナデである。156~157・159は底部外面ヘラキリ未調整で、口縁部内外面~底部内面はロクロナデで仕上げる。164・190は底部内面がヨコナデ、口縁部内外面はロクロナデ、底部外面はヘラキリ後ヨコナデである。154・156は口縁部内面に油が焦げた痕跡があり、灯明に用いられたものとみられる。154・163は灰白色で軟質の焼き上がりである。163は内外面ともに火櫛がみられる。155は内面に火櫛があり、157は口縁部内外面に重ね焼きの痕跡が残る。155の底部外面に「備」、口縁部に「川」、190の底部外面には「東口(朝カ)『所』皇浦『所』/『水』」の墨書がある。

杯B (165~178・191~193・195) 口径の大きさから杯BⅠ：口径17.1~19.0cm (174~178・191~193・195)、杯BⅡ：口径14.0cm (172・173)、杯BⅢ：口径9.0~11.3cm (165~171) に分けることができる。

176は灰白色から淡橙色の焼き上がりで、底部のやや内側に入った位置に高台が付く。底部内面に板状の工具でなでたような直線的な工具痕と内外面に煤の付着がみられる。172は高台から口縁部に向かいやや丸みをおびて立ち上がり、高台の内側が接地する形態である。

調整はいずれも口縁部内外面ともロクロナデで、底部外面はヘラキリの後ナデ調整が多く、ロクロナデのもの(168・171・172・174)、ロクロケズリ後ロクロナデ(175)、未調整のもの(166・167・176)がある。底部内面は磨滅のため不明なもの(169・170・171・173)が多いが、166・167・195はロクロナデで、176は板状工具による擦痕がある。器面が磨滅しているものの中には硯に転用されているもの(173・192)がある。167は底部外面に墨痕がある。171は口縁部内外面に油が焦げた痕跡があり、灯明に使ったものとみられる。高台内面に墨痕がみられる。165は口縁部内面に墨痕がみられる。173は底部外面に爪型の圧痕が残る。口縁部外面に先が丸い工具によると思われる三条の沈線が施されている。174は口縁部外面に「綱」の墨書がある。178は体部下半が緩やかに内湾し、口縁部は若干外反する形態。口縁部外面に墨痕がみられる。167・170・177・192・195は底部外側に高台が付き、口縁部が直線的に外方に延びる形態。177は口縁部内面に油が焦げた痕跡があり、灯明に用いたのであろう。外面全体と口縁部内面が煤けている。

底部外面に墨書きされたものがあり、168は「長」、193は「口(水カ)」、195は「北」、192は「一番」、「[]麻呂」、191は「田人」である。172は底部外面から口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデで調整。高台から口縁部に向かいやや丸みを帯びて立ち上がり、高台の内側が接地する形態である。

杯C (183~187・194) 土師器杯Aを模した形態。口縁端部をつまみ上げて作るもの(185~187)と丸みを作るもの(183・184・194)とがある。調整は、186・187以外は底部外面はヘラキリの後ナデ、口縁部内外面ともロクロナデ、底部内面はヨコナデで、灰白色を呈しやや軟質に焼きあがる。186・187の底部外面はヘラキリ未調整である。194は内面全体に墨痕がみられ、底部外面に「口(打カ)櫃」の墨書がある。186の口縁部内面には粘土紐の巻き上げの痕跡が明瞭に残る。

皿A (179) 179は口縁端部を内側に巻き込む。底部外面はヘラキリの後ナデ、口縁部から底部内面はロクロナデである。底部外面に墨書があるが判読不明。

皿B (188・189・197) 杯部が箱形の形態で、底部のやや内側に高台がつくもの。197の底部外面はロクロケズリの後ロクロナデ、高台から口縁部内外面ともロクロナデ、底部内面はヨコナデである。底部外面に墨書があるが判読できない。188は底部外面ロクロケズリの後ロクロナデ。口縁部内外面ともロクロナデ、底部内面は磨滅のため調整不明で、内面全体に墨痕がみられることから硯に転用したとみられる。189の調整は底部外面から口縁部内外面ともロクロナデ、底部内面はヨコナデ。内外面ともに煤の付着がみられる。

皿B蓋 (196) 頂部外面はロクロケズリの後ロクロナデ、縁部内外面ともロクロナデ、頂部内面はヨコナデ調整する。頂部外面に火櫛が、頂部内面に重ね焼きの痕跡がある。灰白色でやや軟質の焼き上がりである。

皿C (180~182) 口縁端部を平坦に作る皿で、ともに口縁部内外面ロクロナデである。182は口縁部外面に、「口大大『口口』(麻呂カ)」の墨書があり、181は内外面に筆ならしとみられる墨痕がある。

水(浄)瓶 (202~209) 金属器を模した器形で、色調は灰白色から灰黒色を呈する。外面に灰緑色の自然釉がかかる一群(202)と青灰色(205)の一群とがある。202~204・206・207は浄瓶である。205は水瓶の口縁部。丸くおさめた口縁端部に粘土紐をつけて垂下させて作る。203は注口部と頸部とに二条の沈線があるが、202には沈線はない。208は底部外面に糸切り痕跡があり、高台の三箇所を意図的に打ち欠いている。内面には淡黄白色の

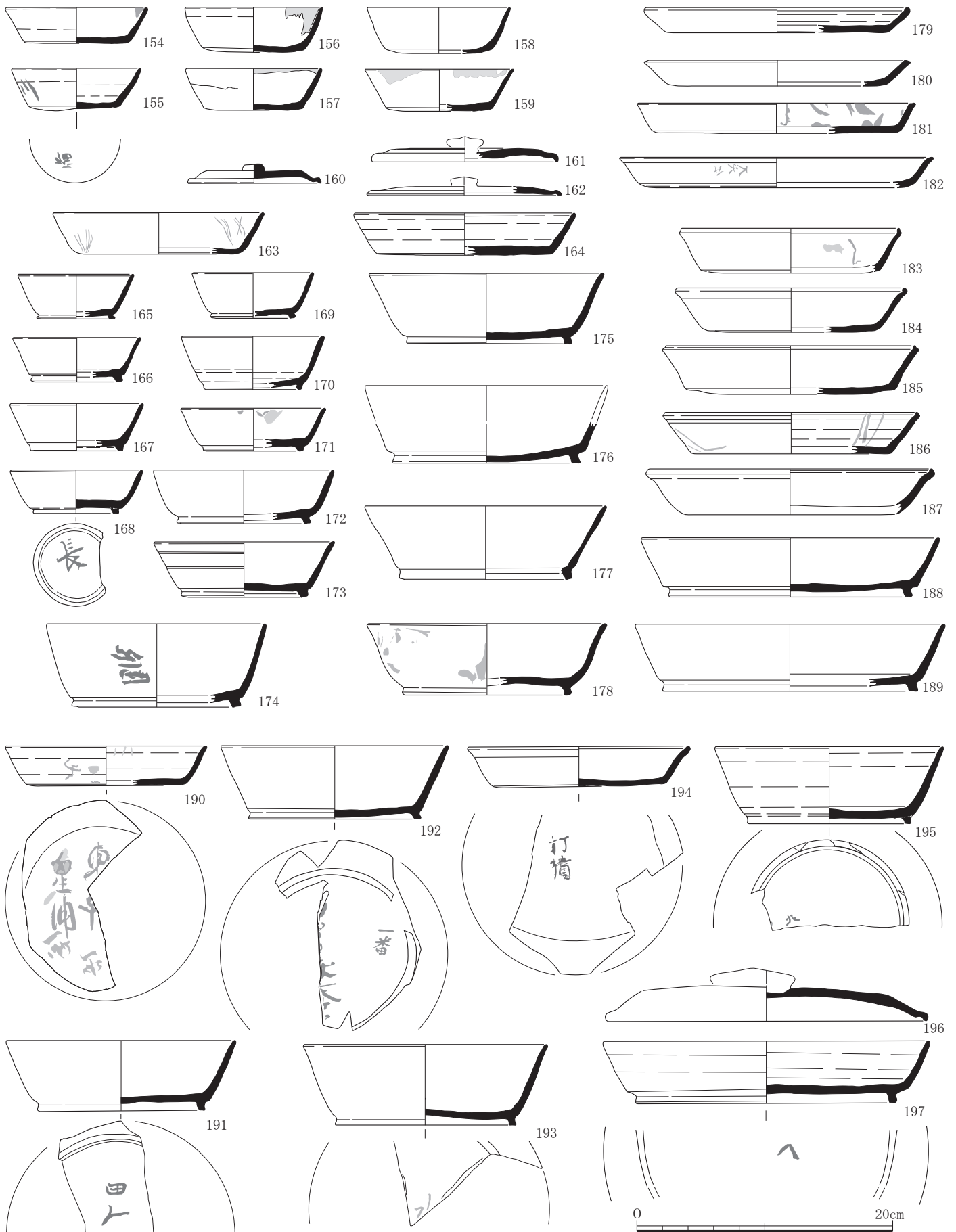


图49 SD01古木屑層出土土器実測图4 (1/4)

付着物がみられる。

壺A蓋 (210~212) 3点ともつまみを欠くが、壺Aの蓋である。210・211はいずれも縁部は丸くおさめ、頂部外面に灰緑色の自然釉がかかる。調整はロクロナデである。212は胎土中に細かい白色砂粒を多く含み、赤褐色に焼き上がる。縁部を平坦に作り、頂部外面はロクロケズリの後ロクロナデ、縁部内外面ともロクロナデで調整する。内面に煤の付着と墨痕がある。210は東海産の製品と考えられる。

壺G (213) 体部と頸部の接合は二段構成で、内面に

は粘土紐の痕跡が明瞭に残る。口頸部と肩部の境がやや膨らみ、突帯状をなしている。これは花瓶の特徴でもあり、213は花瓶になる可能性も考えられる。調整は体部、口頸部内外面ともロクロナデ。

壺L (200) 大きさは、口径8.4cm、器高18.6cm、高台径10.6cm。口縁端部を一部欠く以外は、ほぼ完形品である。底部外面は未調整。体部下半は弱いロクロケズリ、体部上半から頸部・口縁部内外面ともロクロナデである。胎土中に黒色微粒子が目立つ。肩部、口縁部内面に降灰がみられる。

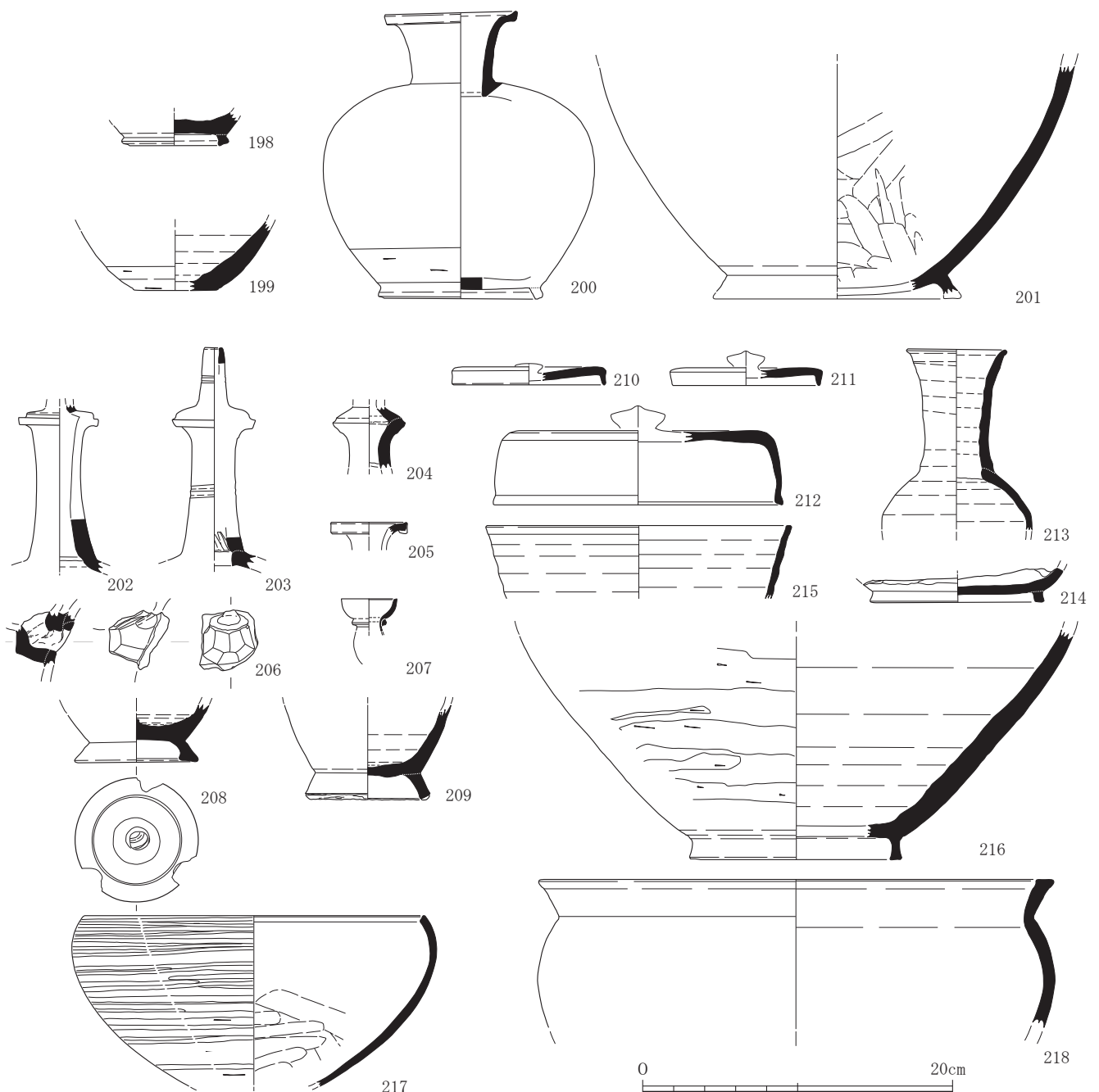


図50 SD01古木屑層出土土器実測図5 (1/4)

壺 (198・199・201・214) 198は高台の内側が接地し、外側に踏ん張るような形状である。199は体部下半をロクロケズリ、上半から内面はロクロナデ。内面は焼き膨れが目立つ。201はやや内湾しながら立ち上る体部に外側に開く高台が付くもので、鉢になる可能性もある。体部外面下半をロクロケズリ、体部外面上半はロクロナデ、内面はロクロナデの後不定方向のナデ。底部外面、体部外面に漆が付着している。214は壺の底部で、底部内面をヨコナデで調整する。内外面とも墨痕が付着し、底部外面が磨耗し非常に平滑であることから、意図的に打ち欠き天地逆位で転用硯として利用したと考える。

鉢A (217) 体部下半はロクロケズリの後ロクロミガキ、体部はロクロナデの後ロクロミガキ、内面の下半はヨコナデ、上半はロクロナデ。内面に黒褐色の炭化物が付着している。胎土中に細かい砂粒を多く含む。

鉢D (216) 体部下半である。細く高い高台が付く。体部下半はロクロケズリの後ロクロナデ、内面はロクロナデで調整する。内面に筆ならしの墨痕が残る。

鉢 (215) 灰白色を呈した硬質の焼き上がりで、胎土中に細かい黒色微粒子を多く含む。口縁端部を平坦につくり、粘土紐の巻き上げの痕跡が明瞭に残る。調整は内外面ともロクロナデである。

甕C (218) 体部から口縁部内外面をロクロナデで仕上げており、全体的に煤の付着が目立つ。灰白色で軟質。

d. 奈良三彩 (219)

托 (219) 筒状の受部と高台の付いた皿部からなる。器表面が全体的に銀化して黒緑色を帯びるが、淡緑色と濃緑色の釉が確認できる部分もある。受部内面、高台内部にも施釉している。調整は内外面ともにロクロナデ。底部外面にはヘラキリの痕跡がみられる。胎土は砂粒が少なく精良で、灰白色を呈する。表面は銀化しており、濃緑色の釉薬が黒ずんでいる。

この他に、イスラム陶器片が30点ある。SD01古埋立層、SD01新下層からも出土しており、同一個体になるものとする。

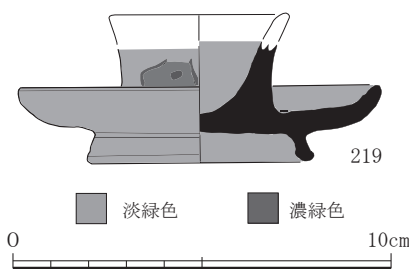


図51 SD01古木屑層出土奈良三彩実測図 (1/2)

C. SD01古埋立層出土土器 (図52、表10、Ph.10-1)

土師器、黒色土器A類、須恵器、灰釉陶器、イスラム陶器があり、総破片数で860点ある。

a. 土師器 (221~224)

杯A・B、皿A・B・C、椀A・C、杯または皿蓋、高杯、鉢、盤、壺、甕Aがあり、破片数で561点ある。相対的に器壁が厚くてヘラケズリが残る破片が多く、木屑層から大量に出土した杯・皿・椀と同じ型式の特徴をもつものが大半である。内面に斜放射状暗文や連弧状暗文+斜放射状暗文が施された資料もあるが、新しい特徴をもつものもある。以下、図示したものを中心に記す。

杯A 木屑層から出土した杯Aと同じ特徴をもつものが多い。b手法とc手法が主体である。

皿A (221~222) 2点ともC形態に分類できるもので、221は口径16.2cm。底部外面から口縁部上半まで粗いヘラケズリで調整(c₀手法)し、内面には粗い一段の斜放射状暗文を施す。222は口径16.0cm、器高2.1cm。a₀手法で、内面には一段の斜放射状暗文があるが、器高が低く、口縁部が外側に開いた形態である。木屑層出土の皿Aよりもやや新しい型式の要素といえよう。

椀A (223・224) 223は口径12.5cm、器高3.9cm。224は口径13.4cm、器高4.5cm。いずれもc₃手法。

b. 黒色土器A類

杯または皿の口縁部片が8点ある。

c. 須恵器 (225~243)

杯A (226・227) 227は底部、口縁部内外面ともロク

表10 SD01古埋立層出土土器の器構成

土師器				須恵器				黒色土器A類			
種類・器種	点数	比率		種類・器種	点数	比率		種類・器種	点数	比率	
食膳具	杯A	62		食膳具	杯A	17		食膳具	杯	0	
	杯B	6			杯B	34			皿	0	
	皿A	53			杯C	1			杯・皿	8	
	皿B	2			杯A・B	0					
	皿C	8			皿A	2					
	杯・皿	161			皿B	3					
	蓋	6			杯・皿	56					
	椀A	30			蓋	41					
	椀C	1			椀B	1					
	高杯	10			計	155	53.8				
計	339	60.4		鉢A	16			計	8	100	
貯蔵具	壺	15		貯蔵具	鉢D・F	2		貯蔵具	壺	0	
	盤	4			壺L	1			皿	0	
	鉢	4			水・浄瓶	2					
	計	23	4.1		鉢・壺	43				計	0
煮炊具	甕A			煮炊具	平瓶	1		煮炊具	甕		
	口縁	29			甕C	1			口縁	0	
	体・底部	170			甕体・底部	67			体・底部	0	
計	199	35.5		計	133	46.2		計	0	0.0	
土師器合計	561	100.0		須恵器合計	288	100.0		黒色土器合計	8	100.0	
比率	土師器	65.5%		比率	須恵器	33.6%		比率	黒色土器A類	0.9%	

(灰釉陶器・イスラム陶器は除く)

ロナデで調整している。口縁部内外面に重ね焼きによる色調の違いがみられる。底部外面に墨痕がある。226は口縁部が灰白色で、底部内外面は重ね焼きにより変色し、灰黒色を呈す。軟質の焼き上がりである。底部外面はへ

ラキリの後ナデ、口縁部内外面ともロクロナデ、底部内面はヨコナデである。内外面とも火樫がみられる。埋立層と木屑層から出土した破片が接合したもの。

杯B 法量から杯B I (228・232・233)、杯B II (231)、

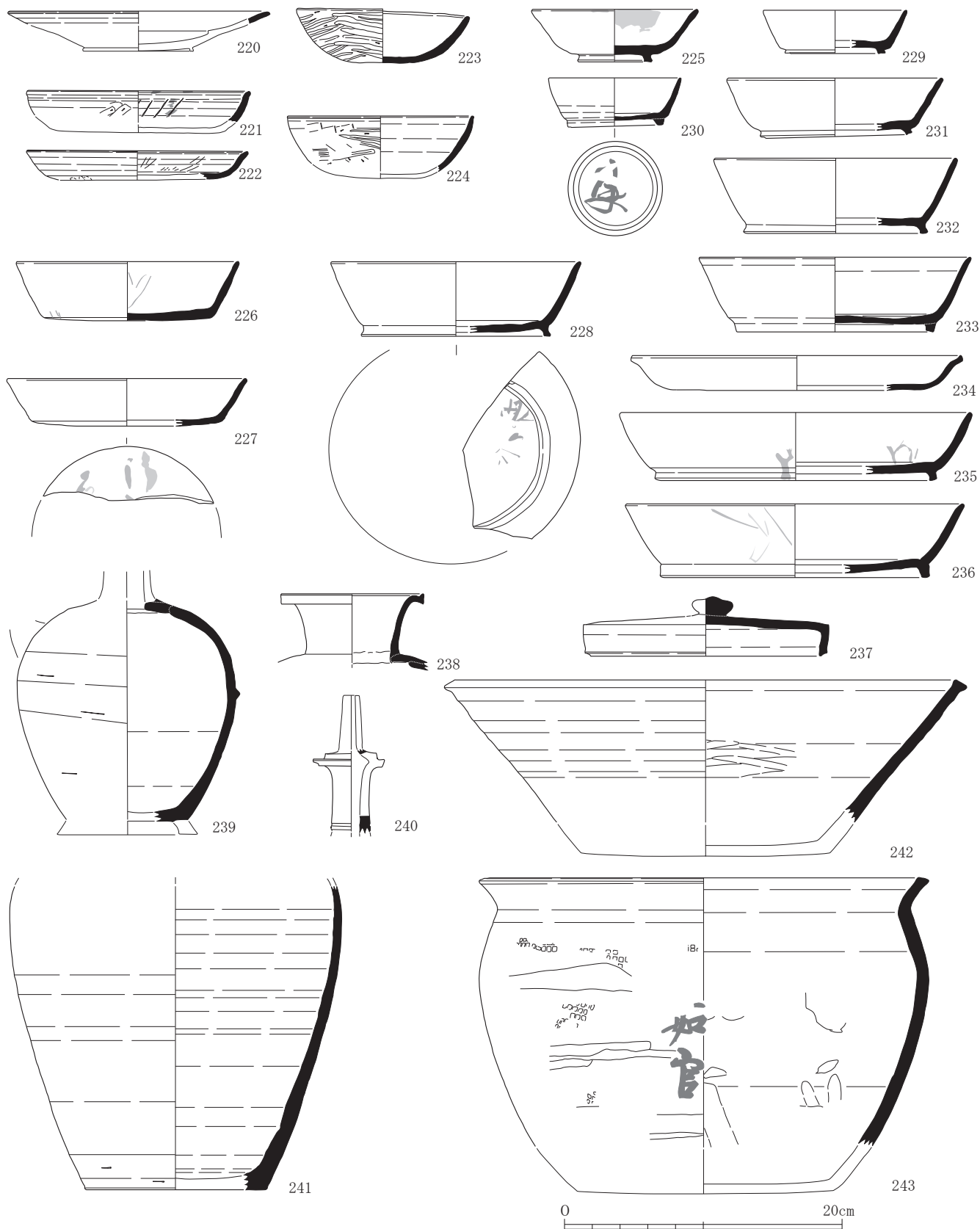


図52 SD01古埋立層出土土器実測図 (1/4)

杯BⅢ(229・230)に分けることができる。229は底部内外面の中央部はヨコナデ、他の部分はロクロナデ。胎土中に細かい白色砂粒を多く含む。230・231は底部外面未調整。高台から口縁部内外面ともロクロナデである。いずれも埋立層と木屑層出土の破片が接合した。230は口縁部に油が焦げた跡が点々と残り、灯明に用いたものと思われる。底部外面に墨書があるが判読不明である。231は高台から口縁部に向かいやや丸みを帯びて立ち上がり、高台の内側が接地する形態。内外面とも墨痕があり、底部内面が平滑であることから硯に転用したとみられる。228・232・233は底部と口縁部の境の位置に高台が付く。233は高台の外側面が内傾し、外端が接地する。口縁部内外面ともロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ロクロナデ、底部内面はヨコナデである。口縁部内面に火襻がある。埋立層と木屑層からの破片が接合したものの。228の底部外面はヘラキリ未調整。232は、口縁部内外面はロクロナデ、底部外面はヨコナデである。232の底部外面は煤が付着。埋立層と木屑層出土破片とが接合したものの。228の底部外面には墨書がある。

椀B(225) やや径の小さい高台がつく底部から丸みを帯びて外方へ開き気味に立ち上がる形態。底部外面はヨコナデ、口縁部内外面ともロクロナデ、底部内面はヨコナデである。口縁部内外面に油が焦げた痕跡があり、灯明に用いられたものと思われる。底部外面に爪形の圧痕がみられる。東海産の製品と考える。

皿A(234) 口縁部が外方へ開き気味に立ち上がる形態。底部外面未調整、口縁部内外面ともロクロナデ、底部内面はヨコナデである。底部内面に墨書がある。

皿B(235・236) いずれも底部外面から口縁部内外面はロクロナデ、底部内面はヨコナデ調整。灰白色でやや軟質に焼き上がり、胎土中に細かい黒色微粒子を多く含む。内外面ともに火襻がみられる。236は高台接合部が「く」字状の形態を呈す。底部内面が非常に平滑であることから硯に転用したものとみられる。埋立層と木屑層出土の破片が接合したものの。

壺A蓋(237) 縁部に段をつくり先端を尖らせる形態。頂部外面から縁部内外面ともロクロナデ、頂部内面をヨコナデで調整する。頂部外面に墨痕がみられる。胎土中に白色・黒色の微粒子が含まれ、黒色微粒子はロクロナデにより墨が流れたような状態となっている。埋立層と木屑層出土の破片が接合したものの。

壺L(238) 体部と頸部との間を円盤状の粘土板を用いて閉塞する三段構成のもの。体部、頸部ともロクロナデである。内外面に降灰がみられる。埋立層と木屑層出

土の破片が接合したものの。

水(浄)瓶(239・240) 239の体部と頸部の接合方法は三段構成である。体部には注口の剥離した痕跡がみられる。体部外面下半はロクロケズリであるが、上半は濃灰緑色の自然釉が付着しているため調整は不明である。体部内面はロクロナデである。底部外面に糸切りとみられる痕跡がある。埋立層と木屑層から出土した破片が接合したものの。240は頸部に二条以上の沈線がある。外面全体に自然釉がかかる。

壺N(241) 体部外面下端部をロクロケズリ、体部外面から体部内面をロクロナデで調整する。底部外面は未調整である。埋立層と木屑層から出土した破片が接合。

盤A(242) 口縁部の形態や法量からみて盤Aと考える。口縁端部を内外面ともにやや肥厚させる。調整は内外面ともロクロナデで、内面の中位にヘラケズリの痕跡がみられる。内面に煤が付着し、外面に筆ならしとみられる墨痕が残る。

甕C(243) 外面は格子目タタキの後、上半部はロクロナデで部分的にヘラケズリを加え、下半部はヘラのような工具でナデを加えている。内面は上半部はロクロナデ、下半部はヨコナデである。当て具の痕跡がナデ消されずに残っている。体部外面に「茹官」の墨書がある。埋立層、木屑層、最下層から出土した破片が接合した。

c. 灰釉陶器(220)

灰釉陶器皿の口縁部片(220)が1点ある。口縁部内面に自然釉がみられる。段皿になると考えられる。

D. S D01新下層出土土器(図53・54、表11、Ph.10-2)

土師器、黒色土器A類、須恵器、奈良三彩、緑釉陶器、灰釉陶器、イスラム陶器、ミニチュア甕があり、破片数は1,170点である。

a. 土師器(244~253)

土師器には、杯A・B・C、皿A・B・C、椀A・C、杯または皿蓋、高杯、盤、壺、甕Aが破片数で737点あるが、小片の資料が多い。図化できたものを中心に記す。

杯A(244~246) 口縁部はいずれもC形態で、244は口径17.4cm、器高4.55cm、c₁手法である。245は口径17.8cm、c₃手法によると考える。246は口径18.2cm、器高4.3cm、c₀手法であるが、ヘラケズリは口縁端部まで及ばない。これらは、木屑層出土の土師器杯Aと同じ特徴をもち、同一型式のものであると考える。

皿A(250~253) 口縁部の形態には、A形態(252)、B形態(253)、C形態(250)、D形態(251)がある。A・B形態は、口径が19.0cm以上の大型品である。250は口径14.8cm、c₀手法。口縁部にはユビオサエの凹凸

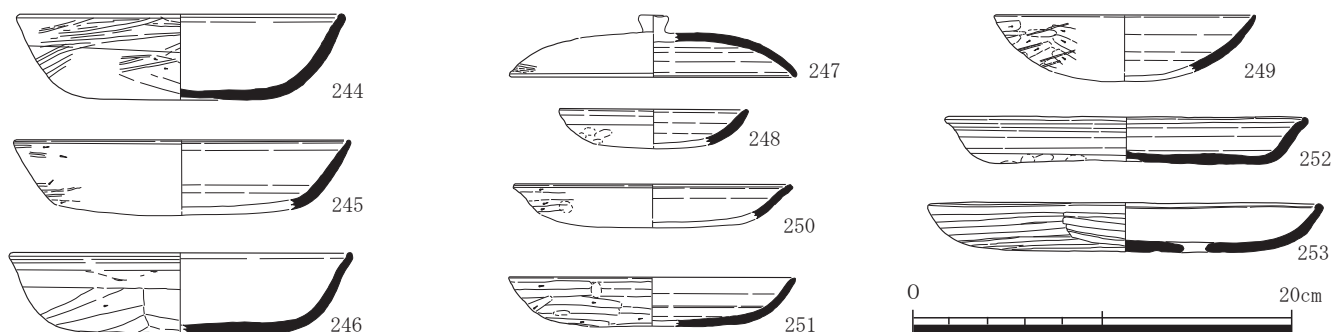


図53 SD01新下層出土土器実測図1 (1/4)

が残る。251は、口径15.2cm、器高2.6cm、c₀手法。木屑層出土の土師器皿Aと比べると、口径が小さく器高も低い。口縁部の外傾が強く、木屑層のものより新しい特徴である。

皿C (248) 口径10.0cm。底部から口縁部下半にかけてユビオサエの痕跡が明瞭に残る。

杯(皿)蓋 (247) 外面が磨滅しており詳細は不明だが、頂部外面にわずかにヘラミガキ痕跡が残る。

碗A (249) 破片数で16点ある。249は、口径13.8cm。粗いヘラミガキを行ない、器高が低くて口縁部が開いた形態を呈す。木屑層の碗Aよりも新しい特徴と考える。

甕A 二次的に火を受けて煤が付着する破片が多い。口縁端部が内側に肥厚する都城形甕が多い。

b. 黒色土器A類

碗・皿類が23点、盤が1点ある。いずれも小片で、底部内面にラセン状の暗文を施すものが2点ある。

c. 須恵器 (254~275)

杯(皿)蓋 (257~262) 258・262は頂部外面をヘラケズリの後ロクロナデ。内面はヨコナデである。257は頂部外面に自然釉がかかり調整は不明。258は内面中央が平滑であることから硯に転用したとみられる。259は頂部外面ヘラキリ未調整で、縁部外面から内面はロクロナデ。260は笠形の形態。内面はロクロナデ、内面中央はヨコナデである。外面は自然釉がかかり調整は不明。内面全体に墨痕がある。261は外面と縁部内面がロクロナデ、内面中央はヨコナデ。内面全体に墨痕があり、硯に使用したとみられる。262は胎土中に0.1cm程度の白色砂粒を含む。

杯B (254・255) いずれも底部外面未調整。254は高台から底部内面はロクロナデ。底部内面が磨滅して墨痕がある。硯に転用されたようである。255は内外面ロクロナデ。胎土中に細かい黒色微粒子を多く含む。

杯C (256) 口縁端部を内側に肥厚させて丸く収める。底部外面はヘラキリ未調整。口縁部内外面ともロクロナデ、底部内面は磨滅のため調整は不明。

表11 SD01新下層出土土器の器種構成

土師器				須恵器				黒色土器A類			
種類・器種	点数	比率		種類・器種	点数	比率		種類・器種	点数	比率	
食 膳 具	杯A	48		食 膳 具	杯A	9		食 膳 具	碗	4	
	杯B	6			杯B	29			皿	1	
	皿A	63			杯C	6			碗・皿	18	
	皿B	1			皿A	1					
	皿C	7			皿E	1					
	杯・皿	267			杯・皿	40					
	蓋	10			蓋	51					
	碗A	16			碗B	2					
	碗C	2			計	139	35.5				
	高杯	7									
計	427	57.9									
貯 蔵 具 ・ 他	鉢A	1		貯 蔵 具 ・ 他	鉢A	33		貯 蔵 具 ・ 他	計	23	95.8
	盤	1			鉢F	2			壺	0	
	壺・鉢	8			壺	92			平瓶	5	
	計	10	1.4		横瓶	1			横瓶	1	
調 理 具	甕A口縁	36		調 理 具	水・浄瓶	5		煮 炊 具	計	1	4.2
	体・底部	263			鉢・壺	8			甕		
	瓶	1			甕口縁	1			口縁	0	
	計	300	40.7		甕体・底部	106			体・底部	0	
					計	253	64.5		計	0	0.0
土師器合計	737	100.0	須恵器合計	392	100.0	黒色土器合計	24	100.0			
比率	土師器	63.9%	比率	須恵器	34.0%	比率	黒色土器A類	2.1%			

(※緑釉陶器・灰釉陶器・奈良三彩・イスラム陶器を除く)

皿B (263) 調整は内外面ともロクロナデである。口縁端部外側を一段強くナデており、直線的な面をなしている。内外面とも粘土紐の痕跡が明瞭に残る。

壺E (264) 肩部外面下半をロクロケズリし、それ以外の部分はロクロナデ調整。

壺M (265) 底部外面は未調整で、体部から口縁部にかけてはロクロナデである。口縁端部は丸くおさめる。

水(浄)瓶 (266~268) 267は口縁端部内面をロクロケズリ、それ以外はロクロナデ。外面には自然釉がかかる。266の口頸部と268の底部内外面はロクロナデ。

盤A (274) 鉢Fの可能性もあるが、口径が33.9cmの大型品に復元できることから盤Aとしておく。灰白色を呈し、やや軟質である。口縁端部内外面を肥厚させて作り、外面側の下端に強いナデを加えている。内外面ともロクロナデ。内面に墨痕があり、平滑であることから硯に転用したとみられる。体部内外面に墨書がある。

鉢A (269~272) 底部の形態が丸みを帯びるもの(269)と尖底のもの(270~272)とがある。271は体部

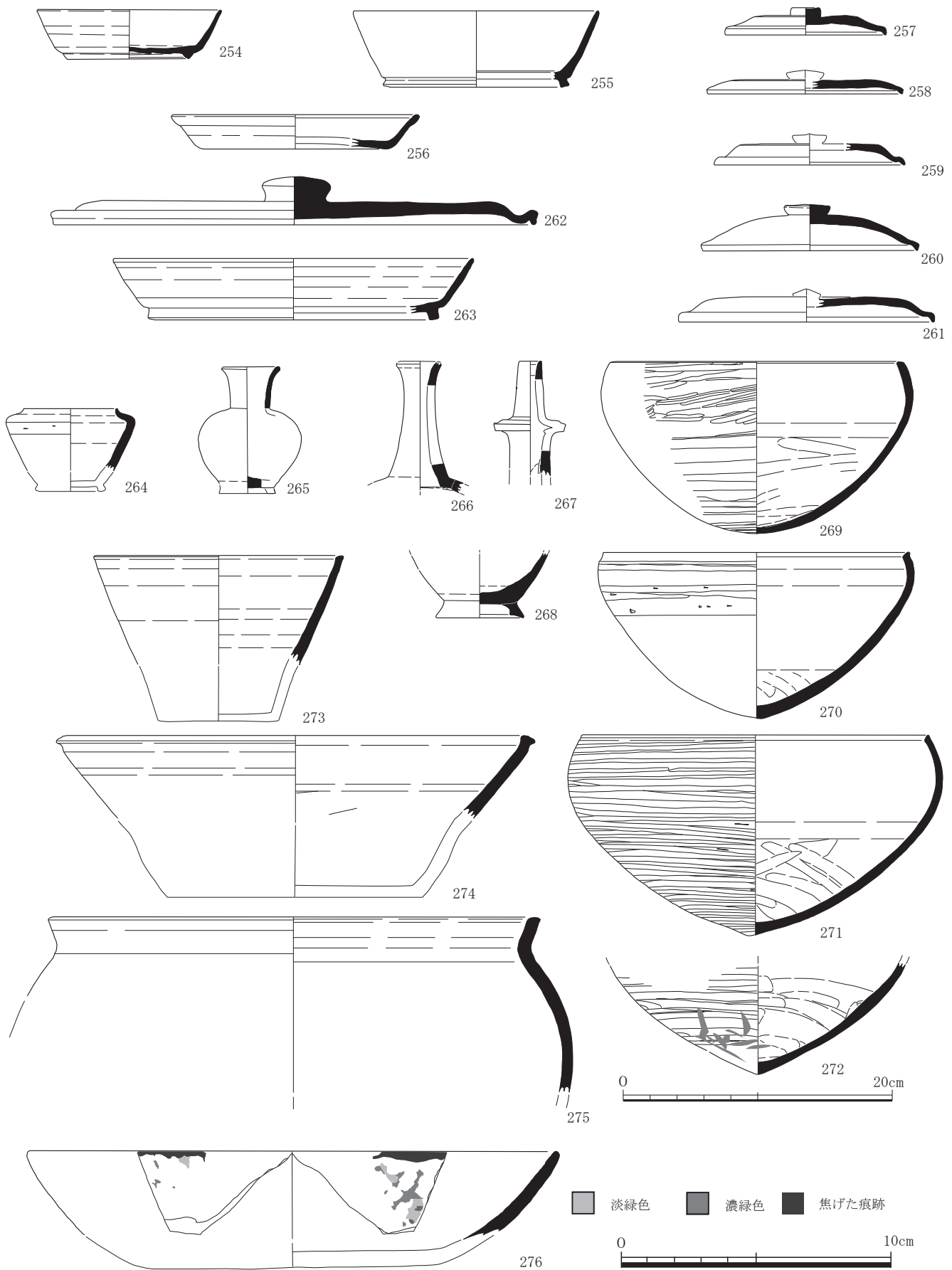


図54 SD01新下層出土土器2 (1/4)・奈良三彩実測図 (1/2)

外面下半、270は体部外面全体をロクロケズリした後、粗いロクロミガキを施している。269は底部外面をロクロケズリ後ヘラミガキで仕上げる。内面下半はヨコナデ、上半はロクロナデ。272の体部外面には「今水」の墨書があり、内面に筆ならしの墨痕が残る。270は外面に火襷がある。269は内外面とも非常に煤けている。271は内外面に煤と油の焦げた痕跡が残る。269～271はSD01新下層と木屑層のものが接合。

鉢 F (273) 円盤状の底部と斜め上に開く口縁部からなる器形。口縁端部はやや丸みをもった面をつくる。内外面をロクロナデで調整する。体部外面に墨書がある。

甕 C (275) 器表面は黒色微粒子がナデにより墨をばかしたような状態である。口縁部内外面ともロクロナデ、体部外面はタタキの後粗いヨコナデ、内面はヨコナデで当て具痕を消している。口縁部内面に煤けた部分がある。

d. 奈良三彩 (276)・緑釉陶器・灰釉陶器

奈良三彩は、杯・皿類5点、蓋1点、壺片が1点ある。276は口径19.8cmの大型の杯である。釉の大半が剥離して

いるが、淡緑釉を施した後に濃緑色釉を部分的に配したことがわかる。口縁端部内外面には、油が焦げた痕跡が残る。灯明皿として使用したようである。緑釉陶器は椀4点、灰釉陶器には皿1点がある。いずれも破片であるが、緑釉陶器椀のうち蛇ノ目高台になると考えられる破片が1点ある。9世紀代のものである。

E. SD01新石組溝裏込出土土器

土師器には、杯または皿片が1点、須恵器は杯・皿類15点、鉢A2点、甕5点がある。土師器片と須恵器杯Bと杯または皿の破片に墨書がある。小片の資料が多いため詳細な時期は不明だが、須恵器杯Bおよび蓋の形状から見て木屑層と同時期と考える。

F. SD01新上層出土土器 (図55、Ph.10-2)

土師器、黒色土器A類、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器が破片数で733点ある。小破片が多く図化できるものが少ない。以下、掲載したものを中心に記述する。

a. 土師器 (277)

土師器には杯A、皿A・B、杯または皿蓋、椀A、高

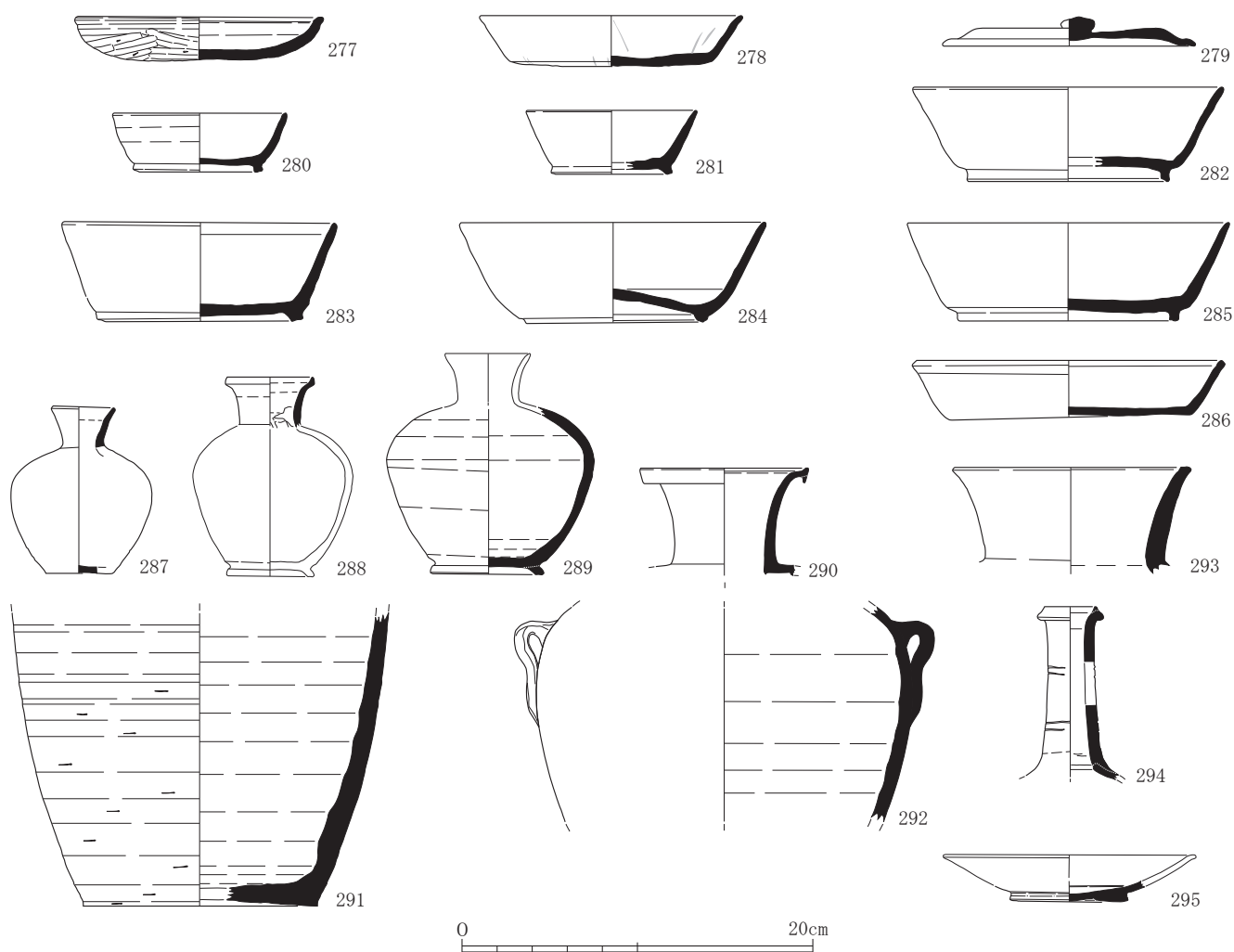


図55 SD01新上層出土土器実測図 (1/4)

杯、鉢、壺、甕、鍋、羽釜、ミニチュア高杯があり、破片数で334点ある。大半が土師器甕の底体部片である。

皿A (277) 口縁部形態はC形態で、調整はc₀手法。

b. 須恵器 (278~294)

須恵器には杯A・B・C、皿C、杯(皿)蓋、鉢A、壺L・M、N、水(浄)瓶が破片数で354点ある。

杯(皿)蓋 (279) 縁部が薄く作られている。頂部内面中央ヨコナデ、縁部内外面はロクロナデ。頂部内面が平滑で、硯に転用されている。

杯A (278) 底部外面はヘラキリ未調整である。内外面ともに火襷がみられる。口縁部外面に墨書がある。

杯B (280~285) 281・283は底部内面が平滑で、硯に転用したようである。底部外面には重ね焼きの痕跡が残る。280は胎土中に細かい白色砂粒を含む。284は底部の焼け歪みが大きく、高台外端部には工具の当たった痕跡がみられる。口縁部内面に油が焦げた痕があり、灯明に用いたものと思われる。285は胎土中に0.05~0.1cm程度の白色砂粒を多く含む。

杯C (286) 灰白色でやや軟質の焼成で、胎土中に細かい灰色砂粒を多く含む。内面には火襷がみられる。

壺M (287・288) 287は底部外面に糸切り痕跡がみられる。288の口縁端部内外面に煤が付着している。

壺L (289・290) 289は底部外面に糸切り痕跡がある。SD01新上・下層から出土した破片が接合したもの。頸部と体部との接合方法は三段構成によるとみられる。

壺N (292・293) 292の肩部には幅1.5cmの粘土帯を折り曲げて耳形状の把手がつけられている。

水(浄)瓶 (294) 頸部には二条一組の手描きによる沈線が二箇所みられる。口縁端部内面をロクロケズリ、それ以外の部分はロクロナデで調整。

c. 緑釉陶器 (295)

椀・皿類が13点ある。295は、貼付による蛇ノ目高台で、内外面に施釉する。京都産の製品と考える。9世紀初頭から前半のものであろう。

G. イスラム陶器 (図56・表20・図版Ph.12・13)

SD01からイスラム陶器^{註5)}の青緑釉陶器短頸壺(296)の破片34点が出土した。これらはSD01古木屑層(30点)、埋立層(1点)、SD01新下層(3点)の各層から出土したが、釉薬および胎土の観察からみて同一個体と考える^{註6)}。破片の内訳は頸部片1点、頸~肩部1点、肩~体部4点、体部25点、底部2点、不明1点で口縁部を欠く。これらの破片を図上で復元したのが、図56である。高さ33.5cm、胴部最大径24.6cm、底径は外径9.4cm、接地面で8.1cmに復元できる。上から約2/3付近が最大径

で、なで肩になる。器壁は概ね1cm前後で、底部の器壁の厚さは1.35cmである。底部は平底で若干窪み、周囲が高台状に盛り上がる。

成形はロクロを使用しており、内外面にロクロメが残り、外面には直径1cm前後のユビ押さえの痕跡が多く残る。底部外面は施釉のため不明瞭であるが、ヘラケズリで調整をした可能性がある。

296-2は、頸~肩部にかけての破片で、外面の釉薬が大きく剥離している。この時期の青緑釉陶器の短頸壺の肩から頸部に耳状の把手を三箇所つけるものがあるため^{註7)}、この釉薬の剥離は把手状のものが外れた痕跡であると考え復元図にいった。

296-5~12は体部上半の破片で、外面に施文されている。施文は以下の3種類ある。

① 篋二条の凹線を引く。② ①の凹線上に篋状のものを押圧して楕円形や三角形の模様を付ける。模様は2~2.5cm間隔で、右斜め下から突き刺すように押さえている。③ ②の下に位置に篋状工具で波状文をつける。線の太さは0.3cm前後で、波状文の上下幅は約1.5cm、波頂の間隔は約2.5cmである。

切り合い関係から①→②→③の順に施文されたことがわかる。胎土は全体的に灰白色で非常に脆いチョーク状で、鬆が多く入り、0.1~0.2cm大の砂礫粒が少量含まれている。胎土については296-34を試料として粉末X線回析分析を行っており、石英、輝石類、長石類を検出している。また、粘土鉱物が検出されず、長石が溶融していないこと、ムライトクリストバライト等熱変性によって生じる鉱物を検出しないことから、1100°C以下の焼成温度である可能性がある(97・98頁参照)。

内外面には、青緑色の釉薬がかけられており、釉層の厚さは0.05~0.15cmである。外面色調は概ね青緑色であるが、内面は発色が悪く緑黒色で、薄い水色が斑状もしくはひびの部分に入る。釉薬は底部外面にもおよび、トチンを用いて焼成したと考えられるが、底部片296-32・33の範囲にはその痕跡はない。

釉薬は蛍光X線分析を行っており、Caが顕著に検出していることから、アルカリ釉の可能性が高いという分析結果がでている(97・98頁参照)。

破片は34点中31点が調査区西端部のLG-78区を中心とした部分に集中し、残りの3点は約25m離れた調査区東端LG-69区で出土している。SD01新下層出土の3点は、調査区東端部のLG-69区からの出土である。イスラム陶器の溝内での分布と出土した歴史的背景については第6章の総括で検討する。

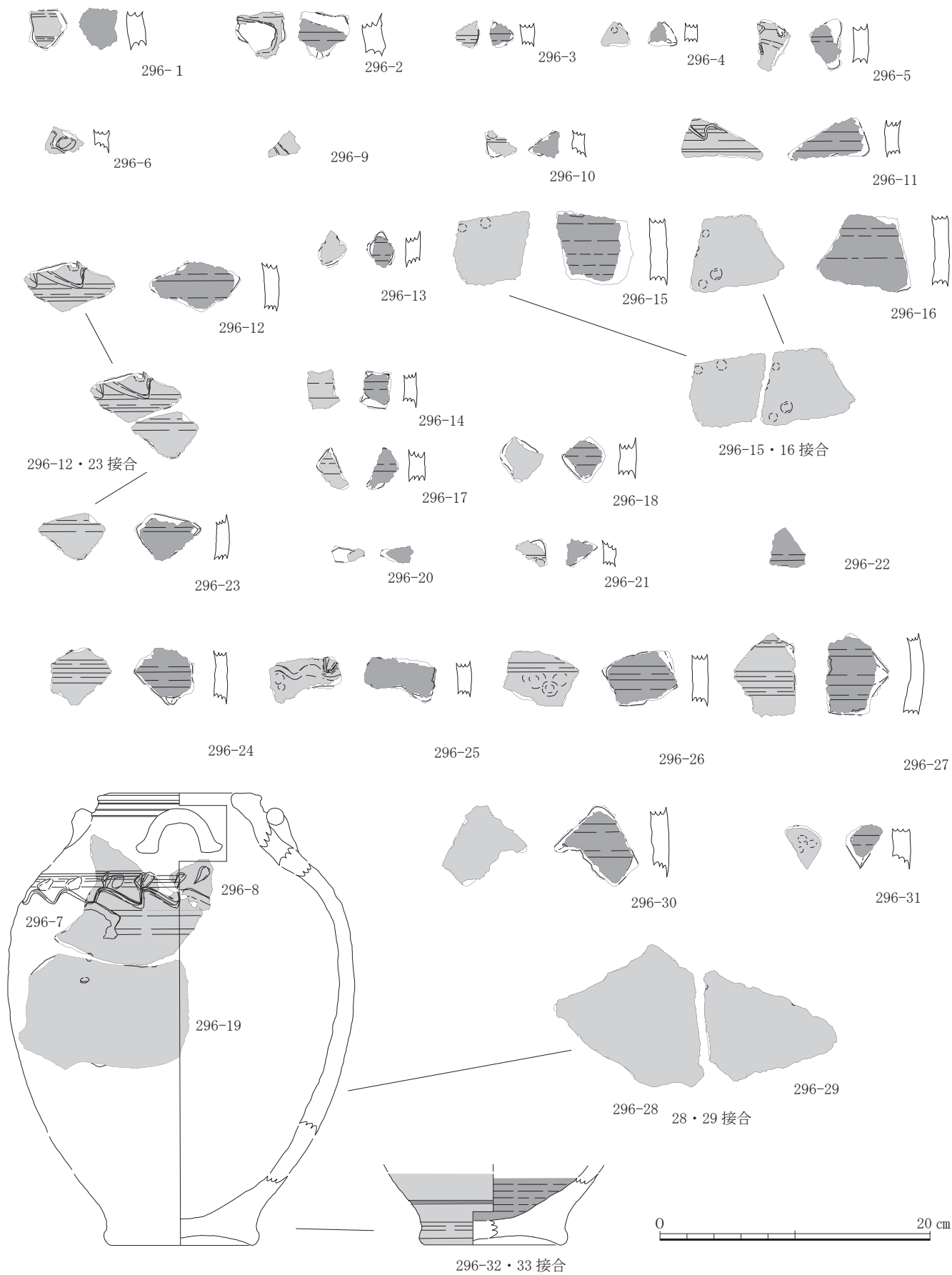


図56 イスラム陶器破片実測図・復元図 (1/4)

H. SD01出土土器の時期

SD01出土土器群を層位ごとに記述してきたが、特に木屑層出土土器は、形式的にまとまりのある良好な土器群であるといえる。土師器食器類は、8世紀後半に位置づけられている平城宮SK219等の資料群と同様の法量傾向を示し、調整はb・c手法が多く、ヘラミガキも多用されている。また、暗文を施すものが少なく、杯・皿類の口縁部形態はB形態が主体となっている。黒色土器A類の皿Bは、大型で器壁も厚く、8世紀後半の皿Bに共通する形態を有している。須恵器食器類は、やや内側に付される高台が多く、口縁部の立ち上りは、長岡京期の土器群ほど開いていない。これらの特徴から、木屑層出土土器群は、8世紀後半に位置づけられると考える。

その他、SD01古最下層から8世紀後半の土器と共に8世紀中頃の土師器・須恵器も少量出土した。埋立層、SD01新上・下層からも8世紀後半の土器が出土するが、埋立層には8世紀末～9世紀初頭の土師器・須恵器と共に9世紀初頭の灰釉陶器が、SD01新下層から8世紀末～9世紀初頭の土師器・須恵器が、SD01新上層からは9世紀初頭～前半頃の緑釉陶器が出土した。

SD01古木屑層出土土器群の年代観については、他の資料と比較検討しながら、第6章第2節で詳述する。

(4) SX04出土土器 (図57・58、Ph.11-1・2)

土師器、黒色土器A類、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁が破片で925点ある。内訳は、土師器789点、黒色土器A類48点、須恵器75点、奈良三彩1点、緑釉陶器6点、灰釉陶器5点、白磁1点で、土師器が全体の85%を占める。土師器の大半は、杯・皿類の底部や口縁部片、甕の体部片であり、図化できるものは少ない。

土師器 (297～306) 杯A・B、皿A・C、甕A、羽釜がある。杯A (297・298) は口縁部が大きく開く。

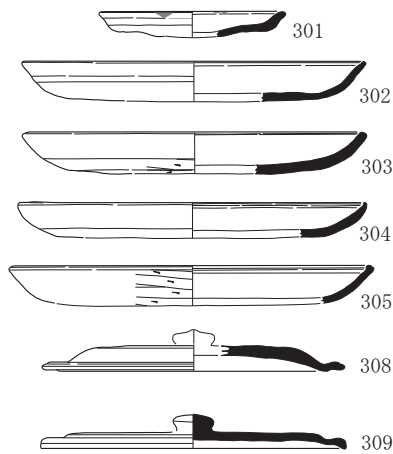
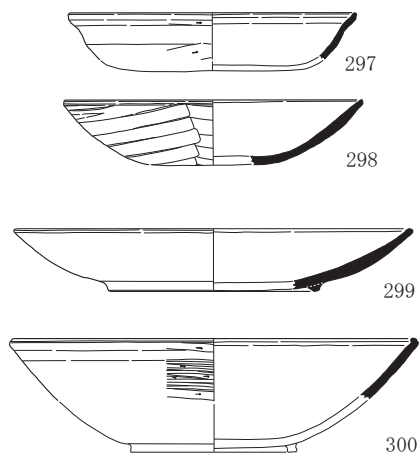


図57 SX04出土土器実測図 (1/4)

297は外面全体をヘラケズリで調整するが、口縁部上半部の強いヨコナデによる窪みはケズリ残されている (e-c手法)。杯B (299・300) は2点あり、299は三角形の小さい高台が付く。300はe-c手法。皿A (302～305) は器高が2.0cm前後と低く、木屑層出土の土師器皿Aと比べると器壁が薄い。皿C (301) も器壁が薄く、器高も低い。甕A (306) は、口径21.4cmの大型品。体部内面にはタタキの当て具痕跡が、肩部外面にはタタキメの痕跡が残る。

黒色土器A類 (307) いずれも碗または皿の小破片である。307は口縁部が大きく開いた碗で内外面を磨く。

須恵器 (308・309) 杯 (皿) 蓋が2点あり、扁平な形態で、縁部の屈曲が強い。いずれも硯に転用したとみられる。内面中央には墨痕がある。

緑釉陶器 (310) 口径16.0cmの碗。口縁部内外面は施釉されているが、釉層は薄い。

灰釉陶器 (311) 口径17.1～17.4cmの碗。体部外面は無釉。内面には降下釉がある。体部外面はロクロケズリ後、丁寧なミガキで仕上げている。低い角高台が付されており、東海産の製品と考えられる。

白磁 (312) 水注の体部に付く耳状の把手の一部である。全面に釉がかかり、胎土は緻密で硬質である。

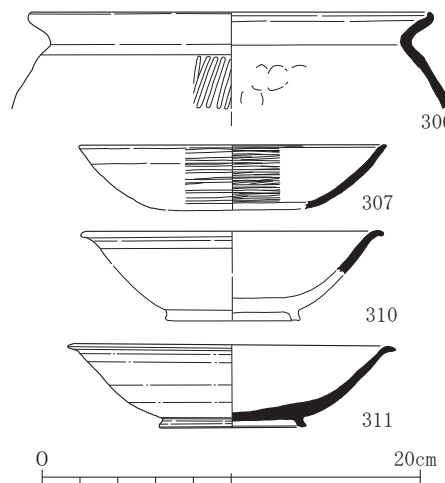
土器群の時期 調整技法や形態の特徴からみて、9世紀前半～中頃のものと考えられる。

(5) 包含層出土土器 (図59)

8世紀代の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・皿、奈良三彩、9世紀代の土師器羽釜、緑釉陶器 (313)・灰釉陶器 (314)、10世紀代前半の黒色土器A類碗、12世紀～13世紀前半の龍泉窯系の



図58 SX04出土白磁



青磁碗、13～14世紀の土師器甕（315）・羽釜、16世紀以降の瓦質土器鉢・鉢蓋、17世紀中～後半の肥前産陶器鉢、18世紀以降の肥前産磁器碗、19世紀前半以降の信楽産鍋があるが、小破片である。緑釉陶器碗（313）は京都産、灰釉陶器碗（314）は東海産の製品である。

II. 土製品（図59・60）

陶硯、球形状土製品がある。

A. 陶硯（316～322）

圈足円面硯、形象硯、円形硯がある。

圈足円面硯（316～320） 圈足円面硯は外堤部径・脚台径の大きさから、大型品（317）、中型品（318～320）、小型品（316）に分けられる。317・319は、硯面が明確な段をもって隆起するもので、硯部の分類^{文24)}ではa類になる。316は硯面が弧を描いて隆起するb類。318はSD01古木屑層、316・317はSD01新上層、319・320はSX04出土。

形象硯（321） 長辺9.6cm、短辺4.6cmの破片で、鳥の羽のような陽刻を施している。裏面は、ヘラケズリで調整されている。焼きあがりは非常に硬く、胎土には白色粒石が若干含まれる。SD01新下層出土。

円形硯（322） 六角に面取りされた脚部で、高さは3.1cm。外面全体に自然釉がかかる。円面硯になる可能性もある。遺物包含層出土。

この他に、須恵器が硯として使用されたものが多数ある。今回報告したSD01出土須恵器のうち、杯・皿類8点、杯（皿）蓋6点、壺・鉢・甕類3点が硯に転用されていた。破片のため実測図を掲載できなかったが、須恵器の転用硯は、破片数で、杯・皿類251点、杯（皿）蓋は279点、壺・鉢・甕類は24点ある。寺院内における硯

の使用実態を考える際の手がかりとなろう。

B. 球形状土製品（323）

表面が黒く煤け、直径2.4～2.5cm、重さ15.0gを測る球形状の土製品が1点ある。粘土を丸めて作り、表面をヘラミガキで平滑にするが、部分的に磨滅する個所がある。胎土に0.9cmのチャートが含まれる。SD01古埋立層から出土。



図60 球形状土製品

（三好美穂・池田裕英・池田富貴子・久保邦江）

註1) 平城京で使用されている土師器杯Cは、皿形を呈している器形であり、皿Aに分類される器形であると考えられる。

註2) 口径階級は5mm単位で設定した。例えば、口径12.0cm台階級は、口径12.0～12.4cm、口径12.5cm台階級には口径12.5～12.9cmのものが相当するということである。

註3) 口径復元ができる資料のうち、残存率に関わりなく、接合したものは1個体とみなしてカウントした。

註4) 「都城形」甕については、古代の土器研究会編「都城の土器集成Ⅲ」で位置づけられた概念を基軸として観察した。

註5) イスラム陶器とは「イスラーム教圏の中心地域、すなわち中東地域で生産された陶器」^{文68)}のことである。「イスラーム陶器」と表現することもあるが、本書ではより一般的に使用されている「イスラーム陶器」の表記を使用する。

註6) 遺物番号は一つで個々の破片については枝番号をつけた。

註7) 金沢大学名誉教授佐々木達夫氏から「8世紀後半～9世紀前半のパハレーン国アーン遺跡出土の青緑釉陶器瓶に形態的に似る」とご教示いただいた。

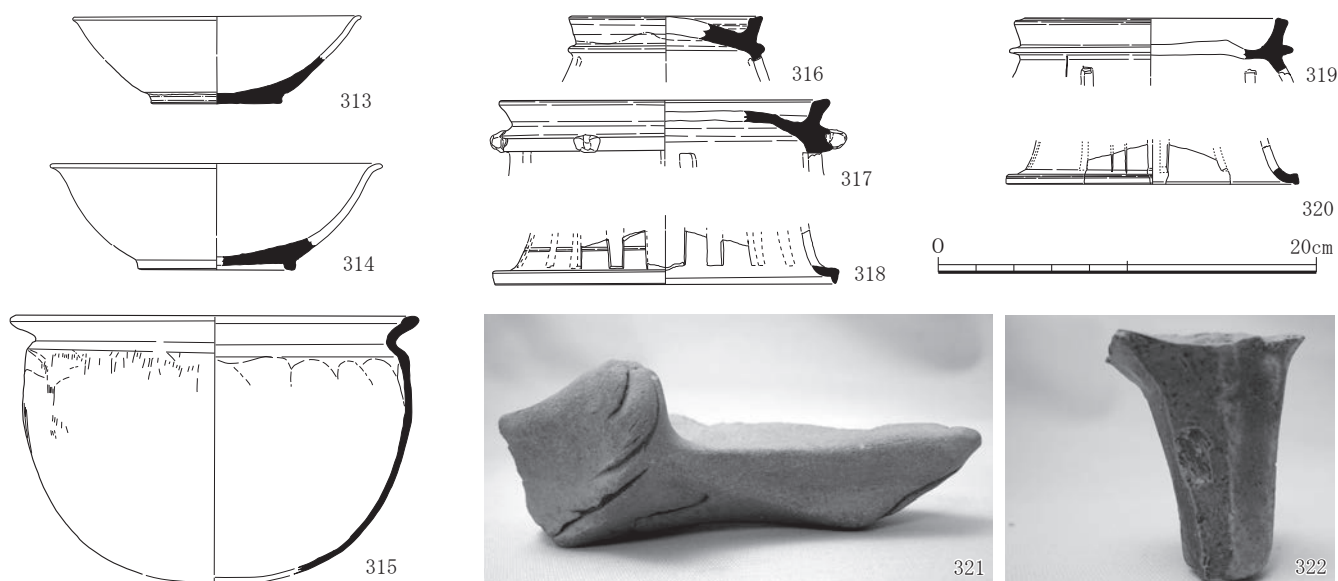


図59 遺物包含層出土土器・陶硯実測図・写真（1/4）

第4章 出土遺物

表12 SD01古最下層出土土器観察表

図番号	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
1	土師器	杯A	(17.8)	(3.7)		外面全体をヘラケズリ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/2 灰黄		LG-71
2	土師器	杯A	(18.4)	4.5		口縁部下半～底部外面をヘラケズリ	2.5Y8/2 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙	2.5Y8/2 灰白	底部外面が煤で変色	LF-73
3	土師器	杯A	(19.2)	(3.9)		ヘラケズリ後粗いヘラミガキ 口縁部上半外面が強いヨコナデで窪む	2.5Y6/1黄灰～ 2.5Y6/2灰黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y6/2灰黄～ 2.5Y7/2灰黄		LG-71
4	土師器	杯A	14.8	(2.9)		口縁部をヨコナデ、底部外面をユビオサエ	2.5Y8/2 灰白	7.5YR8/4 浅黄橙	2.5Y8/2灰白～ 2.5Y8/3淡黄	内外面全体が熱受けて変色	LG-69
5	土師器	杯A	(17.8)	(3.0)		底部外面をヘラケズリ	2.5Y8/1灰白～ 2.5Y2/1黒	2.5Y8/1灰白	2.5Y8/2灰白～ 2.5Y2/1黒	口縁部内面と底部外面は熱を受けて変色	LG-71
6	土師器	杯A	(17.8)	(4.5)		口縁部上半ヨコナデ、底部外面ナデ	5Y8/1 灰白	2.5YR7/3 淡赤橙 2.5Y7/1灰白	2.5Y2/1黒 2.5Y7/1灰白		LF-70
7	土師器	杯A	(20.8)	(4.5)		口縁部上半ヨコナデ、口縁部下半～底部外面ヘラケズリ 粗い一段斜放射状暗文	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙		LF-73
8	土師器	杯A	(20.0)	-		口縁部外面をヘラケズリ	2.5Y8/2 灰白	7.5YR6/6 橙	2.5Y7/3 浅黄		LG-70
9	土師器	碗A	(12.2)	(3.2)		ヘラケズリ後粗いヘラミガキ	2.5Y8/2 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙	2.5Y8/2 灰白	熱を受けて変色	LG-70
10	土師器	碗A	(14.0)	(5.0)		ユビオサエ痕残る	7.5YR8/2 灰白	10YR6/1 褐灰	7.5YR8/2 灰白	外面は熱を受けて変色	LG-70
11	土師器	皿C	(8.2)	(1.7)		口縁部内面ヨコナデ	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	10YR7/1 灰白		LG-71
12	土師器	皿C	(9.5)	(1.9)		口縁部内外面、底部内面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ	10YR8/2 灰白	2.5YR7/3 淡赤橙	10YR8/2 灰白	口縁端部内外面に灯明痕	LF-73
13	土師器	皿C	(10.1)	2.5		口縁部内外面、底部内面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ	10YR8/2 灰白	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR8/2 灰白	口縁端部内外面に灯明痕	LG-69
14	土師器	皿C	(10.2)	1.8		底部外面にヘラケズリか	10YR8/1 灰白	5YR7/3 にぶい橙	10YR8/1 灰白		LG-70
15	土師器	皿C	(10.4)	2.35		底部外面ユビオサエとヘラケズリ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR7/6 橙	7.5YR8/2 灰白	口縁端部内外面に灯明痕	LF-73
16	土師器	皿C	(11.2)	-		底部外面ユビオサエ後ヘラケズリ	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5YR7/2 明赤灰	10YR7/2 にぶい黄橙	内面全体と口縁端部外面に煤付着	LG-71
17	土師器	皿A	(16.0)	3.2		底部外面に不定方向のナデ部分的にユビオサエの痕跡残る 口縁端部が内傾する	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/3 浅黄		LF-73
18	土師器	皿A	(19.0)	(2.85)		口縁端部外面にわずかにヘラケズリの痕跡残る	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1灰白～ 2.5Y6/1黄灰	内面に煤付着	LG-71
19	土師器	皿A	(21.6)	2.4		外面をヘラケズリ	10YR7/2 にぶい黄橙～ 5YR7/6橙	5YR8/4淡橙 5YR7/1明褐灰	10YR7/2 にぶい黄橙～ 5YR7/6橙	熱のため、表面が剥離している	LG-70
20	土師器	鉢A	-	-		内面に連弧状暗文と一段斜放射状暗文	5YR6/6 橙	5YR5/2 灰褐	5YR6/6 橙		LF-73
21	土師器	高杯	-	残存 7.0	-	脚部内面中心に芯棒を刺した痕跡	7.5YR7/8 黄橙	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙		LG-73
22	土師器	壺B	(13.9)	(6.8)		体部外面にユビオサエと粘土紐接合痕が残る	2.5Y6/3 にぶい黄 2.5Y8/1灰白	7.5Y8/1 灰白	2.5Y7/2 灰黄		LG-73・78
23	土師器	壺E	(9.5)	-		体部外面にヘラミガキ ヘラケズリの有無は不明	2.5Y7/1 灰白	5Y6/6 橙	2.5Y7/1 灰白		LG-72
24	土師器	甕A	(28.0)	-		胴部外面ハケメ調整の下にユビオサエの痕跡残る	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5Y8/2 灰白	史料番号501	LF-73 LG-73
25	黒色土器A類	皿B	-	-	高台径 (15.0)	内面にヘラミガキ、底部外面はヘラケズリ	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	N3/0 暗灰		LG-70
26	須恵器	杯蓋	(10.4)	1.8		頂部外面ヘラキリ未調整、内面ロクロナデ	N6/0 灰	N6/0 灰	N6/0 灰	内面全体に墨痕 口縁4/5	LG-71
27	須恵器	杯蓋	9.8	2.0		頂部外面ロクロケズリ後ロクロナデ、頂部内面ヨコナデ	N6/0 灰	N7/0 灰白	N6/0 灰	口縁1/2	LG-71
28	須恵器	杯蓋	(21.9)	-		頂部外面ロクロケズリ後ロクロナデ、頂部内面ヨコナデ	N7/0 灰白	N7/0 灰白	N7/0 灰白	転用碗、口縁1/6	LF-73
29	須恵器	皿蓋	(29.4)	-		内外面ロクロナデ	N7/0 灰白	N7/0 灰白	N7/0 灰白	口縁1/16	LG-73
30	須恵器	杯蓋	(14.8)	-		内面ロクロナデ、頂部外面降灰のため不明	N7/0 灰白	7.5R5/3 にぶい赤褐	N7/0 灰白	口縁1/4	LG-68

図番号	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
31	須恵器	杯A	(13.2)	2.7	-	底部外面ヘラキリ後ヨコナデ、口縁部内外面ロクロナデ	N6/0 灰	N7/0 灰白	N6/0 灰		LG-78
32	須恵器	杯B	-	-	高台径 (12.6)	底部外面ヘラキリ後ヨコナデ、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N7/0 灰白	N7/0 灰白	N7/0 灰白	底部外面にヘラ記号 墨痕あり	LG-72
33	須恵器	杯B	(19.3)	5.8	高台径 (12.9)	口縁部内外面ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ後ロクロナデ	N5/0 灰	N7/0 灰白	N6/0 灰		LG-73
34	須恵器	杯L	(20.4)	-	-	内外面ロクロナデ	N6/0 灰	N8/0 灰白	N8/0 灰白	口縁部内面に墨痕 あり	LG-72
35	須恵器	鉢A	(26.45)	-	-	外面下半ロクロケズリ後ロクロミガキ、外面上半～内面上半ロクロナデ、内面下半ヨコナデ	N5/0灰 N8/0灰白	N8/0灰白	N8/0灰白	重ね焼きの痕跡あり	LG-71
36	須恵器	平瓶	-	-	18.4	底部外面未調整、体部下半ヘラケズリ、体部上半・頂部ロクロナデ	N7/0灰白～ N5/0灰	N7/0灰白～ N5/0灰	N7/0灰白～ N5/0灰		LG-69
37	須恵器	鉢F	(17.6)	-	-	内外面ロクロナデ	7.5Y5/1灰	7.5R5/1赤灰	N6/0灰		LF-73 LG-69
38	須恵器	鉢F	31.5	-	-	内外面ロクロナデ	N4/0 灰	N6/0灰～ N4/0灰	N6/0灰		LG-73
39	須恵器	水(浄)瓶	-	-	高台径 7.2	内外面ロクロナデ	N7/0灰白～ 7.5YR4/1褐 灰	N6/0灰～ N7/0灰白	N6/0灰～ N7/0灰白	外面に自然釉付着 転用硯	LF-73

表13 SD01古木屑層出土土器観察表

図番号	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
40	土師器	杯A	(16.8)	(3.0)		底部外面ヘラケズリ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙		LF-78
41	土師器	杯A	18.0	3.5		底部外面ヘラケズリ 底部外面中心部にユビオサエの 痕跡残る	2.5Y7/2 灰黄	5Y7/1 灰白	2.5Y7/2 灰黄	内面に煤付着 内外面とも表面 剥離激しい	LF-78
42	土師器	杯A	(18.4)	(3.7)		口縁部内外面ヨコナデ、底部外 面ナデ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/2 灰黄		LG-78
43	土師器	杯A	(19.8)	(3.5)		底部外面ヘラケズリ	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄		LF-78
44	土師器	杯A	(18.3)	(4.4)		口縁部外面上半ヨコナデ、口縁 部外面下半ヘラケズリ後全体を ヘラミガキ	2.5Y6/2灰黄 2.5Y5/1黄灰	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y6/2 灰黄		LF-78
45	土師器	杯A	(18.4)	(4.3)		外面全体ヘラケズリ、口縁部上半 にケズリ残しあり 口縁部内面にハケメ痕跡残る	2.5Y6/1黄灰 2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/2 灰黄		LG-78
46	土師器	杯A	(18.6)	4.4		外面全体ヘラケズリ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄		LG-78
47	土師器	杯A	(18.8)	(4.4)		ヘラケズリ後所々にヘラミガキ 口縁部上半にケズリ残しあり	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄		LG-78
48	土師器	杯A	(19.6)	(3.9)		口縁部外面2段ナデ、底部外面 ヘラケズリ	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/2 灰黄		LG-78
49	土師器	杯A	(20.4)	-		口縁部内外面ヨコナデ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y6/3 にぶい黄		LG-78
50	土師器	杯A	(20.4)	(3.8)		口縁部内外面ヨコナデ、底部外 面ヘラケズリ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白		LG-78
51	土師器	杯A	(21.6)	(4.3)		口縁部外面上半ヨコナデ、下半 ～底部外面ヘラケズリ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白		LG-78
52	土師器	杯A	(18.4)	(4.1)		外面全体ヘラケズリ、口縁部上 半にケズリ残しあり 口縁部内面にハケメの痕跡	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白		LF-77
53	土師器	杯A	18.5	4.3		外面ヘラケズリ後粗いヘラミガキ 口縁部内面にハケメの痕跡	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/2 灰黄	史料番号506	LF-78 LG-78 LG-79
54	土師器	杯A	(18.8)	4.5		外面ヘラケズリ後ヘラミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙 ～ 10YR6/2灰黄 褐	7.5YR7/6 橙	10YR8/2 灰白～ 10YR4/1褐灰	内面に煤付着	LF-77
55	土師器	杯A	(19.2)	4.2		外面ヘラケズリ後粗いヘラミガ キ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/3 浅黄		LG-79
56	土師器	杯A	18.7	4.3		口縁部内外面ヨコナデ、底部外 面ヘラケズリ後全体ヘラミガキ	2.5Y8/2 灰白	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y8/2 灰白	史料番号535	LG-78
57	土師器	杯A	(19.2)	3.7		外面全体ヘラケズリ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄		LG-78
58	土師器	杯A	(19.5)	4.1		底部外面ヘラケズリ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/2灰黄 N2/0黒	底部内面に煤付 着	LG-78

第4章 出土遺物

図番号	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
59	土師器	杯A	(19.8)	3.9		底部外面へラケズリ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白		LG-79
60	土師器	杯A	(20.0)	(3.9)		底部外面へラケズリ	2.5Y8/2 灰白	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y8/2 灰白	外面に墨痕	LG-78
61	土師器	杯A	(21.2)	4.7		外面へラケズリ後へラミガキ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄		LG-78
62	土師器	杯A	(16.0)	(4.0)		外面へラケズリ後へラミガキ 口縁端部に強めのヨコナデで ケズリ残しあり	2.5Y6/2灰黄 10YR6/3 にぶい黄橙	5YR5/4 にぶい赤褐 2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2 灰黄		LG-78
63	土師器	杯A	(16.4)	(3.6)		外面へラケズリ後へラミガキ 口縁端部に強めのヨコナデで ケズリ残しあり	2.5Y6/2 灰黄	7.5YR5/4 にぶい褐 10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄		LG-79
64	土師器	杯A	(16.4)	(3.8)		口縁端部に強めのヨコナデ 口縁部下半外面へラケズリ後 粗いへラミガキ	7.5YR5/4 にぶい褐 10YR7/2 にぶい黄橙	7.5YR5/4 にぶい褐 10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄		LG-78
65	土師器	杯A	(16.6)	(3.8)		口縁部外面上半ヨコナデ、口 縁部下半外面へラケズリ後へ ラミガキ	2.5Y7/2灰黄 10YR3/1黒褐	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/2灰黄 10YR3/1黒褐	口縁端部内外面 に灯明痕	LG-79
66	土師器	杯A	(17.0)	-		口縁部外面へラケズリ後へラ ミガキ、口縁部内面にハケメ の痕跡	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y6/2灰黄 10YR6/4 にぶい黄橙		LF-79
67	土師器	杯A	(17.2)	(4.8)		口縁部内外面ヨコナデ、底部 外面へラケズリ	10YR7/1灰白 ~ 10YR8/1灰白	10YR8/1 灰白	2.5Y8/2灰白 10YR4/1褐灰		LG-78
68	土師器	杯A	(17.5)	-		口縁部上半外面ヨコナデ、口 縁部下半外面へラケズリ後へ ラミガキ、口縁部内面ハケメ の痕跡	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	5Y7/1 灰白		LG-78
69	土師器	杯A	(17.6)	-		外面へラケズリ後へラミガキ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y8/2灰白	2.5Y7/2灰黄	史料番号749	LG-78
70	土師器	杯A	(17.8)	-		外面へラケズリ後へラミガキ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y8/2灰白	2.5Y7/1灰白		LF-78
71	土師器	杯A	(17.8)	-		外面へラケズリ後へラミガキ	N5/0灰	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	外面全体に煤付着	LG-78
72	土師器	杯A	(18.1)	4.1		外面へラケズリ後へラミガキ	2.5Y6/3 にぶい黄 N5/0灰	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y6/2灰黄 2.5Y4/1黄灰 2.5Y2/1黒	内面全体と外面 の一部に煤付着	LF-78
73	土師器	杯A	19.5	5.15		外面全体へラケズリ、所々に ケズリ残しあり	7.5YR7/6橙 2.5Y5/2 暗灰黄 2.5Y7/4浅黄	2.5Y7/2灰黄 10YR8/2灰白	2.5Y7/2灰黄 2.5Y4/1黄灰 10YR7/4 にぶい黄橙	史料番号596	LF-78 LF-79 LG-78
74	土師器	杯A	(19.7)	(4.5)		外面へラケズリ、ヨコナデの 窪みが残る	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙		LF-79
75	土師器	杯A	(20.0)	(4.3)		口縁部上半外面ヨコナデ、底 部外面へラケズリ後全体をへ ラミガキ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2灰黄 7.5YR6/4 にぶい橙 10YR3/1黒褐	底部内面に煤付着	LF-78
76	土師器	杯A	(20.0)	-		外面へラケズリ後へラミガキ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/3浅黄		LG-79
77	土師器	杯A	(22.4)	(5.5)		へラケズリ後粗いへラミガキ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	2.5Y7/2灰黄		LG-78
78	土師器	皿C	9.0	2.1		口縁部内外面ヨコナデ、底部 外面ユビオサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/1 灰白	10YR8/2 灰白	内面に煤付着 外面わずかに変色	LG-78
79	土師器	皿C	10.6	1.4		底部外面ユビオサエ後粗いへ ラケズリ	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	口縁部内外面に 灯明痕	LG-78
80	土師器	皿C	(11.2)	(1.9)		口縁部内外面ヨコナデ、底部 外面ユビオサエ	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白	口縁端部内外面と 底部外面変色	LG-78
81	土師器	皿C	(11.6)	2.5		底部外面ユビオサエ、口縁部 内面にハケメ	2.5Y7/1 灰白	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y7/1 灰白	内外面変色	LF-78
82	土師器	皿C	(10.6)	(2.6)		口縁部ヨコナデ、底部外面ユ ビオサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	内外面とも煤、油 煙で変色	LF-78
83	土師器	皿A	(19.5)	(2.8)		底部外面をへラケズリ後へラ ミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	10YR6/2 灰黄褐	内面に煤付着	LG-78
84	土師器	皿A	(20.0)	(3.1)		底部外面ユビオサエ後へラケ ズリ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	外面わずかに変色	LG-78
85	土師器	皿A	(21.3)	2.5		底部外面へラケズリ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/2 灰黄	外面に煤付着	LF-78

図番号	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
86	土師器	皿A	17.9	3.0		口縁部下半外面～底部外面へラケズリ 底部内面にハケメ痕跡残る	2.5Y8/2灰白 ～2.5Y7/1灰白	10YR8/2 灰白	2.5Y8/2灰白 ～2.5Y7/1灰白		LG-78
87	土師器	皿A	(21.6)	(3.0)		口縁部下半外面～底部外面へラケズリ へラケズリの間にユビオサエ残る	7.5Y8/2 灰白	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	史料番号769 口縁部外面に煤付着	LF-78 LG-78
88	土師器	皿A	(21.8)	2.9		外面全体をへラケズリ	2.5Y8/3 淡黄	7.5YR8/2 灰白	2.5Y8/3 淡黄	内外面わずかに変色	LG-78
89	土師器	皿A	(22.2)	(2.8)		外面全体をへラケズリ後口縁端部をヨコナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/2 にぶい黄橙～ 7.5YR7/4 にぶい橙		LG-77
90	土師器	皿A	(23.2)	2.9		口縁部下半外面～底部外面へラケズリ	10YR8/4 浅黄橙	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白		LG-79
91	土師器	皿A	(13.9)	(2.3)		底部外面へラケズリ	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	内外面に煤付着	LG-78
92	土師器	皿A	(15.4)	(2.5)		底部外面へラケズリ 口縁端部内傾	2.5Y8/2 灰白	2.5YR7/6 橙	2.5Y8/2 灰白		LG-79
93	土師器	皿A	16.2	2.7		口縁部下半～底部外面へラケズリ	10YR7/2 にぶい黄橙～ 7.5YR6/2 灰褐	10YR7/2 にぶい黄橙	5YR8/4 赤褐～ 5YR6/1褐灰 N2/0黒	二次的に火を受けて変色 内面の変色が著しい	LF-78
94	土師器	皿A	(17.0)	2.4		外面全体をヨコナデ	5Y8/1灰白	10YR8/1灰白	5Y8/1灰白	底部内面に煤付着	LG-78
95	土師器	皿A	(17.0)	3.1		口縁部下半外面～底部外面へラケズリ、口縁端部内傾	10YR8/2 灰白	7.5YR7/6 橙	10YR8/2 灰白	口縁端部内面に灯明痕	LG-78
96	土師器	皿A	(17.0)	(2.2)		口縁部下半外面～底部外面へラケズリ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	内外面に油煙付着	LG-79
97	土師器	皿A	(17.1)	(2.35)		口縁部内外面をヨコナデ、底部外面をユビオサエ 底部内面にわずかにラセン暗文	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙	内外面の広範囲に油煙付着	LF-79 LG-79
98	土師器	皿A	(17.2)	(2.9)		口縁部下半外面～底部外面へラケズリ	10YR8/2 灰白	7.5YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	史料番号567	LG-77
99	土師器	皿A	(17.5)	2.8		口縁部下半外面～底部外面へラケズリ	10YR7/2 にぶい黄橙～ 10YR7/1灰白	10YR7/2 にぶい黄橙～ 10YR7/1灰白	10YR7/2 にぶい黄橙～ 10YR7/1灰白	内面わずかに変色	LG-78
100	土師器	皿A	17.5	3.1		口縁部下半外面～底部外面へラケズリ、口縁端部内傾	10YR8/1 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/1 灰白	内面若干変色	LF-79
101	土師器	皿A	(17.5)	2.9		口縁部下半外面～底部外面へラケズリ、口縁端部内傾	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	内面わずかに変色	LG-79
102	土師器	皿A	(13.8)	(2.4)		底部外面へラケズリ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/2灰白～ 2.5YR6/1赤灰	10YR7/3 b	底部内面に煤付着	LG-78
103	土師器	皿A	(16.0)	-		口縁部下半外面～底部外面へラケズリ後へラミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	5YR7/4 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙	外面に煤付着	LG-79
104	土師器	皿A	(16.2)	(2.9)		口縁部下半へラケズリ	10YR7/2 にぶい黄橙	5YR7/4 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙	外面の一部二次的に火を受けている	LG-78
105	土師器	皿A	(17.0)	(3.4)		口縁部下半外面～底部外面へラケズリ	2.5Y7/2灰黄～ 10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	2.5Y7/2 灰黄	口縁端部内外面に灯明痕	LF-78
106	土師器	皿A	(17.2)	(3.2)		外面全体へラケズリ	2.5Y8/2 灰白	7.5YR8/1 灰白	2.5Y8/2灰白～ 2.5Y7/2 灰黄	史料番号574 内外面とも火を受けて変色	LF-78
107	土師器	皿A	(17.3)	2.85		外面全体へラケズリ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y8/2 灰白	10Y8/2 灰白		LF-78
108	土師器	皿A	(17.4)	2.5		口縁部下半外面～底部外面へラケズリ	10YR8/1灰白～ 7.5YR7/8 黄橙	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2灰白～ 7.5YR8/4 浅黄橙	底部外面火を受けて変色 底部内面に煤？付着	LG-79
109	土師器	皿A	(17.5)	(2.9)		外面全体へラケズリ	2.5Y8/1灰白～ 2.5Y7/1灰白	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白		LF-78
110	土師器	皿A	(17.5)	(2.8)		口縁部下半外面～底部外面へラケズリ	10YR8/2灰白～ 5YR8/3淡橙	5YR7/2 明褐灰	10YR8/2灰白～ 5YR8/3淡橙	内面火を受けて変色	LG-78
111	土師器	皿A	18.0	3.2		口縁部下半外面～底部外面へラケズリ	2.5Y8/2灰白～ 2.5Y6/1黄灰	-	2.5Y7/1 灰白	内面に煤が付着	LF-79
112	土師器	皿A	(19.8)	(1.9)		底部外面をナデ後へラケズリ	2.5Y6/1 黄灰	10YR8/1 灰白	2.5Y6/1 黄灰	口縁部内外面に灯明痕	LF-79

第4章 出土遺物

図番号	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
113	土師器	皿B	(30.8)	4.05	高台径 (24.9)	口縁部内外面ヨコナデ後ヘラミガキ、底部外面ヘラケズリ	2.5Y7/3 浅黄	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y6/3 にぶい黄 10YR7/3 にぶい黄橙	史料番号573 底部内外面に煤付着	LG-78
114	土師器	皿B	(27.2)	4.25	高台径 21.7	口縁部内外面ヨコナデ後ヘラミガキ、底部外面ナデ	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/3 浅黄		LG-78
115	土師器	椀A	(10.7)	-		口縁部上半ヨコナデ、下半を粗いヘラケズリ後ヘラミガキ	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	口縁端部内外面に煤、油煙付着	LF-79
116	土師器	椀A	(11.0)	-		口縁部外面ユビオサエ後ヘラミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁端部内外面に油煙付着	LG-78
117	土師器	椀A	(11.5)	-		口縁部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	内面に煤付着	LG-78
118	土師器	椀A	(12.2)	(3.7)		口縁部上半外面ヨコナデ、下半外面をヘラケズリ後口縁部外面をヘラミガキ	10YR8/2 灰白	N7/0 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	内外面に煤付着	LF-78
119	土師器	椀A	12.6	3.65		底部外面ヘラケズリ、口縁部外面ユビオサエ	2.5Y7/2 灰黄	-	2.5Y8/2 灰白	外面に煤付着	LG-70
120	土師器	椀A	12.7	3.9		外面全体をヘラケズリ後ヘラミガキ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	口縁端部内面に灯明痕	LG-78
121	土師器	椀A	(12.8)	(3.65)		外面全体をヘラケズリ後ヘラミガキ	2.5Y6/4 にぶい黄	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	内外面に煤付着	LG-78
122	土師器	椀A	(13.0)	(3.8)		外面全体に密なヘラミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR8/1 灰白	内外面に油煙付着	LG-78
123	土師器	椀A	(13.1)	(3.8)		外面全体をヘラケズリ後ヘラミガキ	2.5Y8/2灰白 ~10YR6/2 灰黄褐	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白		LF-77
124	土師器	椀A	(13.1)	4.2		口縁部上半外面ヨコナデ、下半外面ユビオサエ後ヘラミガキ	10YR8/1灰白 ~N4/0灰	10YR8/1 灰白	10YR8/1灰白 ~N4/0灰	内面に煤付着 外面は変色	LG-78
125	土師器	椀A	(13.2)	(4.1)		外面全体をヘラケズリ後粗いヘラミガキ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄		LG-79
126	土師器	椀A	(13.2)	3.9		口縁部上半外面ヨコナデ、下半外面ヘラケズリ後ヘラミガキ	2.5YR7/6橙 2.5Y8/2灰白	10YR8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	内外面にタール状になった煤付着	LF-77 LG-78
127	土師器	椀A	(13.2)	(4.2)		外面全体をヘラケズリ後ヘラミガキ 粘土紐接合痕残る	10YR7/2 にぶい黄橙 7.5YR5/1褐灰	5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙~ 7.5YR8/4 浅黄橙	内外面に煤付着	LG-78
128	土師器	椀A	(13.3)	4.1		外面全体をヘラケズリ後ヘラミガキ	2.5Y7/2 灰黄	5YR7/4 にぶい橙	2.5Y7/2 灰黄	内面に煤付着	LG-78
129	土師器	椀A	(13.4)	(3.9)		外面全体をヘラケズリ後ヘラミガキ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/1 灰白	10YR7/3 にぶい黄橙	内面黒色化	LG-77
130	土師器	椀A	(13.5)	3.8		口縁部上半外面ヨコナデ、下半外面ヘラケズリ後ヘラミガキ 外面に粘土紐接合痕残る	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	10YR7/3 にぶい黄橙	内面に煤付着	LG-78
131	土師器	椀A	(13.6)	(4.5)		外面全体をヘラケズリ後ヘラミガキ 口縁部内面にユビオサエ痕	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白		LG-78
132	土師器	椀A	(13.6)	4.3		外面全体をヘラケズリ後ヘラミガキ	2.5Y7/1 灰白	5YR7/4 にぶい橙	2.5Y7/2灰黄 ~2.5Y7/1灰白	口縁端部内外面に灯明痕	LG-78
133	土師器	椀A	(13.6)	-		外面全体をヘラケズリ後粗いヘラミガキ	2.5Y7/2 灰黄	7.5YR7/3 にぶい橙	2.5Y8/2 灰白	口縁端部内外面に灯明痕	LF-78
134	土師器	椀A	(13.8)	4.15		外面全体をヘラケズリ後ヘラミガキ	10YR8/2 灰白	5YR6/6 橙	7.5YR8/1 灰白	口縁端部内外面に灯明痕	LF-79
135	土師器	椀A	(14.0)	-		口縁端部に強いヨコナデヘラミガキが残る	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白		LG-79
136	土師器	椀A	(14.1)	(4.5)		外面全体をヘラケズリ後ヘラミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	5YR7/4 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁端部内面に灯明痕	LG-77 LG-78
137	土師器	椀A	(14.8)	-		外面全体をヘラケズリ後ヘラミガキ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白		LG-78
138	土師器	椀A	(15.0)	-		ヨコナデ後ヘラミガキ	10YR8/2灰白	5YR7/6橙	10YR8/2灰白	内面少し変色	LG-78
139	土師器	椀A	(15.8)	(4.0)		外面全体をヘラケズリ後ヘラミガキ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄		LG-79

図番号	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
140	土師器	碗C	(11.6)	-		ヨコナデ後ヘラミガキ	10YR6/6 明黄褐	10YR7/1 灰白	10YR7/6 明黄褐	外面は変色 内面に煤付着	LG-78
141	土師器	碗C	(14.1)	3.4		口縁部内外面ヨコナデ	2.5Y8/3 淡黄	-	2.5Y2/1 黒	内外面とも煤と油 煙付着	LG-78
142	土師器	碗C	(14.6)	-		口縁部内外面ヨコナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	-	内外面ともに煤と 油煙が付着	LF-79
143	土師器	甕	(17.6)	-		口縁部内面ハケメ後ヨコナデ 胸部外面タテ方向のハケメ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/3 浅黄		LF-78 LG-78
144	土師器	甕	(22.0)	-		口縁部ヨコナデ、胸部外面タ テ方向のハケメ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y4/1 黄灰		LG-78
145	土師器	甕	(15.6)	-		胸部外面ユビオサエ	5Y7/3 浅黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2灰黄 ～2.5Y7/3浅黄		LG-78
146	土師器	甕	(19.8)	-		胸部内面ユビオサエの後ナデ	5Y7/3 浅黄	5Y7/3 浅黄	5Y7/3 浅黄		LG-78
147	土師器	甕	(27.6)	-		外面全体にタテ方向のハケ が残る	2.5Y7/2灰黄 ～2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2灰黄 ～2.5Y7/3浅黄		LF-78
148	土師器	甕	(27.8)	-		胸部外面に把手	10YR7/2 にぶい黄橙	5Y8/1 灰白	2.5Y8/2灰白～ 2.5Y6/2灰黄		LG-78
149	土師器	甕	(27.6)	-		胸部内外面ユビオサエ後ハケ	7.5YR8/2灰白 ～7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙 7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙 7.5YR6/4 にぶい橙		LG-78
150	黒色土 器A類	杯B	(18.0)	3.7	高台径 (12.6)	外面ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面ヨコ方向のヘラミガキ後、 斜放射状の暗文、底部にラセ ン状暗文とジグザグ状暗文	2.5Y5/2 暗灰黄	10YR7/2 にぶい黄橙	N3/0 暗灰		LG-78
151	黒色土 器A類	皿B	(22.2)	4.4	高台径 (16.6)	口縁部上半ヨコナデ、下半ヘ ラケズリ、内面ヘラミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	N2/0 黒		LF-78
152	黒色土 器A類	皿B	(24.0)	3.75	高台径 (17.8)	口縁部外面ヘラケズリ後ヘラ ミガキ、口縁部内面ヘラミガ キ	2.5Y7/2 灰黄	10YR8/3 浅黄橙	N3/0 暗灰		LF-78
153	黒色土 器A類	皿B	(27.0)	-	-	口縁部外面ヘラケズリ後ヘラ ミガキ 口縁部内面ヘラミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	N3/0 暗灰		LG-78
154	須恵器	杯A	11.1	2.85		底部外面未調整、口縁部内外 面、底部内面ロクロナデ	5Y7/1灰白～ 5Y3/1 オリーブ黒	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	灯明皿	LG-73
155	須恵器	杯A	10.1	3.3		底部外面未調整、口縁部内面、 底部内面ロクロナデ	N7/0灰白～ N6/0灰	5P6/1 紫灰	N7/0灰白～ N6/0灰	史料番号538 内面火樺 最下層と接合	LF-73 LG-72
156	須恵器	杯A	10.75	3.5		底部外面未調整、口縁部内外 面、底部内面ロクロナデ、底 部内面中央ヨコナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	灯明皿、口縁3/4	LF-78
157	須恵器	杯A	(10.6)	3.3		底部外面ヘラキリ未調整、口 縁部内外面、底部内面ロクロ ナデ	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白	重ね焼き痕あり	LG-78
158	須恵器	杯A	(11.3)	3.65		底部外面ヘラキリ未調整、口 縁部内外面ロクロナデ、底部 内面ヨコナデ	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白	重ね焼き痕あり	LF-78 LF-79 LG-78 LG-79
159	須恵器	杯A	(11.6)	3.35		底部外面ヘラキリ未調整、口 縁部内外面、底部内面ロクロ ナデ	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白	灯明皿	LG-78
160	須恵器	杯蓋	(10.4)	1.5	-	頂部内面中央ヨコナデ、縁部 内外面ロクロナデ	N7/0灰白～ N6/0灰	N7/0灰白～ N6/0灰	N7/0灰白～ N6/0灰	転用硯、口縁2/3	LG-78
161	須恵器	杯蓋	(14.6)	-	-	内外面ロクロナデ	N5/0灰～ N4/0灰	N5/0灰～ N4/0灰	N5/0灰～ N4/0灰	内面全体に墨痕、 口縁1/4、最下層と 接合	LF-71 LG-78
162	須恵器	杯蓋	(15.2)	-	-	頂部内面ヨコナデ、縁部内外 面、頂部外面ロクロナデ	N6/0 灰	N6/0 灰	N6/0 灰	口縁1/8	LF-78
163	須恵器	杯A	(16.4)	3.2		底部外面未調整 口縁部内外面ロクロナデ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	内外面火樺 口縁1/6	LF-73
164	須恵器	杯A	(17.2)	3.35		底部外面ヘラキリ後ヨコナデ、 口縁部内外面ロクロナデ、底 部内面中央ヨコナデ	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白	重ね焼き痕あり	LG-79
165	須恵器	杯B	(9.0)	3.5	高台径 (6.0)	底部外面中央ヨコナデ、底部 外面、口縁部内外面ロクロナ デ、底部内面中央ヨコナデ	N6/0 灰	N6/0 灰	N6/0 灰	口縁部1/6、底部 1/3残存 口縁部内面に墨痕	LG-79

第4章 出土遺物

図番号	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
166	須恵器	杯B	(10.0)	3.5	高台径(7.2)	口縁部内外面、底部内面ロクロナデ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N6/0 灰		LF-73
167	須恵器	杯B	(10.4)	3.5	高台径(7.2)	底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ロクロナデ	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白	底部外面墨痕あり	LF-73
168	須恵器	杯B	10.3	3.4	高台径6.65	底部外面、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N6/0 灰	N6/0 灰	N6/0 灰	史料番号523 口縁3/4	LG-78 LG-79
169	須恵器	杯B	(9.4)	3.6	高台径(6.6)	底部外面ヘラキリ後ヨコナデ、口縁部内外面ロクロナデ	N6/0 灰	N6/0 灰	N6/0 灰	口縁部1/4	LG-78
170	須恵器	杯B	(11.2)	4.15	高台径(7.7)	口縁部内外面ロクロナデ、底部内外面摩擦のため調整不明	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	N8/0 灰白	底部5/8	LG-78
171	須恵器	杯B	(11.3)	3.4	高台径(7.8)	底部外面、口縁部内外面ロクロナデ	N6/0 灰	N7/0 灰白	N6/0 灰	灯明皿、口縁2/3	LF-78 LG-69
172	須恵器	杯B	(14.0)	4.2	高台径(10.4)	底部外面、口縁部内外面ロクロナデ 底部内面ヨコナデ	N6/0 灰	N6/0 灰	N6/0 灰	口縁1/12 底部1/4	LF-69
173	須恵器	杯B	(14.0)	4.4	高台径(9.8)	底部外面ヨコナデ、口縁部内外面ロクロナデ	N7/0灰白～ N6/0灰	N7/0灰白～ N6/0灰	N7/0灰白～ N6/0灰	転用硯、底部外面に爪形痕	LG-78
174	須恵器	杯B	(17.1)	6.55	高台径(13.2)	内外面ロクロナデ	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	史料番号525 口縁部1/12 底部1/4	LF-77
175	須恵器	杯B	18.3	5.6	高台径12.9	底部外面ロクロケズリ後ロクロナデ 口縁部内外面ロクロナデ 底部内面ヨコナデ	N7/0 灰白	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	史料番号734 ほぼ完形	LF-77 LF-78 LG-78
176	須恵器	杯B	-	-	高台径(14.6)	底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面板状工具による痕跡	7.5YR7/4 にぶい橙～ 10YR8/1灰白	7.5YR7/4 にぶい橙～ 10YR8/1灰白	7.5YR7/4 にぶい橙～ 10YR8/1灰白	高台1/3 内外面に煤が付着	LF-73
177	須恵器	杯B	(18.8)	5.8	高台径(13.5)	内外面ロクロナデ	N8/0灰白	N8/0灰白	N8/0灰白	灯明皿、口縁1/4	LG-78 LG-79
178	須恵器	杯B	(18.6)	5.6	高台径(13.2)	底部外面ヘラキリ後ヨコナデ 口縁部内外面ロクロナデ	N6/0 灰	N6/0 灰	N6/0 灰	口縁部2/3	LF-78 LG-78
179	須恵器	皿A	(20.7)	2.4		底部外面ヘラキリ後ヨコナデ 口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ロクロナデ	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	史料番号711	LG-78
180	須恵器	皿C	(20.7)	2.0		内外面ロクロナデ	5Y7/1灰白～ 5Y4/1灰	5Y8/1 灰白	5Y7/1灰白～ 5Y4/1灰		LG-78
181	須恵器	皿C	(21.7)	2.4		底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	史料番号686	LG-72
182	須恵器	皿C	(24.4)	2.4		口縁部内外面ロクロナデ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	史料番号566	LG-78
183	須恵器	杯C	(17.2)	-		内外面ロクロナデ	N8/0灰白～ N7/0灰白～	N8/0灰白～ N7/0灰白～	N8/0灰白～ N7/0灰白～	口縁1/8 口縁1/4	LF-73
184	須恵器	杯C	(18.2)	3.5	-	底部外面ヘラキリ後ナデ、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白	口縁1/8	LF-78 LG-78
185	須恵器	杯C	(20.0)	3.8	-	底部外面ヘラキリ後ナデ、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	口縁1/8	LG-78
186	須恵器	杯C	(20.0)	3.25		底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面、底部内面ロクロナデ	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	内外面火樺	LF-73 LF-78
187	須恵器	杯C	(17.2)	3.35	-	底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面中央ヨコナデ	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白	重ね焼き痕あり	LG-78
188	須恵器	皿B	(23.2)	4.7	高台径(19.0)	底部外面ロクロケズリ後ロクロナデ 口縁部内外面ロクロナデ 底部内面磨滅のため不明	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白	史料番号617 口縁1/2 転用硯	LF-73
189	須恵器	皿B	(24.0)	3.25	高台径(19.8)	底部外面、口縁部内外面ロクロナデ 底部内面ヨコナデ	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白	内外面煤付着 口縁1/6	LF-73
190	須恵器	杯A	(15.6)	3.1		口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N8/0灰白～ N7/0灰白	N8/0灰白～ N7/0灰白	N8/0灰白～ N7/0灰白	史料番号502	LG-78
191	須恵器	杯B	(17.8)	3.5	高台径(13.0)	底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白	史料番号513 口縁1/18・底部1/4	LG-78
192	須恵器	杯B	(17.7)	5.75	高台径(13.4)	底部外面ヘラキリ後ナデ、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白	史料番号509 転用硯 口縁1/12 底部1/4	LF-70 LG-69 70-72
193	須恵器	杯B	(19.0)	6.3	高台径(14.2)	底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N7/0 灰白	N7/0灰白～ N8/0灰白	N7/0 灰白	史料番号590 口縁1/8・底部1/6	LG-79
194	須恵器	杯C	17.5	3.2	-	底部外面ヘラキリ後ナデ、口縁部内外面、底部内面ロクロナデ	N7/0 灰白	N7/0 灰白	N7/0 灰白	史料番号548 転用硯 口縁1/4	LF-79 LG-78

図番号	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
195	須恵器	杯B	(18.0)	6.0	高台径 (12.8)	内外面ロクロナデ	N7/0 灰白	N7/0 灰白	N7/0 灰白	史料番号529	LG-78
196	須恵器	皿B蓋	(25.2)	-	-	頂部内面ヨコナデ、口縁部内外面 ロクロナデ、頂部外面ロクロケズ リ後ロクロナデ	N8/0灰白～ 5Y8/1灰白	N8/0灰白～ 5Y8/1灰白	N8/0灰白～ 5Y8/1灰白	重ね焼き痕 口縁1/4	LG-78
197	須恵器	皿B	25.4	4.9	20.4	底部外面ロクロケズリ後ロクロナデ 口縁部内外面ロクロナデ 底部内面ヨコナデ	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白	史料番号605	LF-77・78 LG-78
198	須恵器	壺	-	-	高台径 7.0	内外面ロクロナデ	5Y6/1 灰	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	底部外面、体部外 面漆付着	LF-70・73
199	須恵器	壺	-	-	(5.3)	底部外面・体部下半ロクロケズ リ、体部上半・内面ロクロナデ	N5/0灰～ N3/0暗灰	5P6/1紫灰～ N4/0灰	5P6/1紫灰～ 5P5/1紫灰		LF-71
200	須恵器	壺L	8.4	18.6	高台径 10.6	底部外面未調整、体部下半ロクロ ケズリ、体部上半・口縁部内外面 ロクロナデ	7.5Y8/1灰白 ～7.5Y5/1灰	-	7.5Y8/1灰 白 ～7.5Y5/1 灰	ほぼ完形	LF-73
201	須恵器	壺	-	-	-	底部外面未調整、体部内外面ロク ロナデ、体部外面下半ロクロケズリ	N3/0 暗灰	2.5Y8/1 灰白	2.5Y5/2 暗灰黄	内面に漆膜状のもの の付着	LF-73
202	須恵器	浄瓶	-	-	-	内外面ロクロナデ	N6/0灰～ 10Y5/2 オリーブ灰	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y6/1 黄灰	外面に自然釉降灰	LF-71
203	須恵器	浄瓶	1.1	-	-	内外面ロクロナデ	7.5Y7/1灰白 ～7.5Y2/1黒	2.5Y7/2 灰黄	7.5Y7/1 灰白		LG-78
204	須恵器	浄瓶	-	-	-	内外面ロクロナデ、頸部下半内面 ロクロケズリ	5Y6/1灰～ 5Y5/1灰	N6/0灰～ 7.5Y6/1灰	N6/0灰	外面に自然釉降灰	LG-77
205	須恵器	水瓶	(4.85)	-	-	内外面ロクロナデ	7.5Y6/2 灰オリーブ	N6/0灰	7.5Y6/1灰		LG-78
206	須恵器	浄瓶	-	-	-	外面ヘラケズリ後ナデ、内面ロク ロナデ	5Y7/3 浅黄	N7/0 灰白	2.5Y7/1 灰白		LG-78
207	須恵器	浄瓶	3.6	-	-	内外面ロクロナデ	5Y3/2 オリーブ黒	N7/0灰白	5Y4/2 灰オリーブ ～10Y4/2 オリーブ灰		LG-78
208	須恵器	水(浄) 瓶	-	-	高台径 (8.0)	底部外面糸切り、体部外面・内面 ロクロナデ	N7/0灰白～ 5GY4/1 暗オリーブ 灰	7.5YR6/2 灰褐	N6/0灰	高台三箇所打ち欠き	LG-78
209	須恵器	水(浄) 瓶	-	-	高台径 (8.0)	内外面ロクロナデ	N8/0灰白～ N3/0暗灰	10R6/1 赤灰	10R6/1 赤灰	外面に自然釉付着 最下層と接合	LF-78 LG-72
210	須恵器	壺A蓋	(9.7)	1.25	-	内外面ロクロナデ、頂部内面ヨコ ナデ	N7/0灰白～ N5/0灰	N7/0灰白～ N5/0灰	N7/0灰白～ N5/0灰	頂部外面に降灰	LG-69
211	須恵器	壺A蓋	(9.5)	-	-	内面ロクロナデ、頂部外面降灰の ため不明	N5/0 灰	N7/0 灰白	N5/0 灰	口縁1/5	LF-79 LG-78
212	須恵器	壺A蓋	(18.6)	4.8	-	頂部外面ロクロケズリ後ロクロナ デ 口縁部内外面ロクロナデ、頂部内 面ヨコナデ	7.5YR7/3 にぶい橙～ 7.5YR7/4 にぶい橙	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	口縁1/6 内面に煤と墨痕付着	LF-78 LG-78
213	須恵器	壺G	6.25	-	-	内外面ロクロナデ	N7/0灰白～ N4/0灰	N6/0 灰	N6/0 灰		LF-78 LG-78
214	須恵器	壺	-	-	高台径 11.2	底部外面摩滅のため調整不明、体 部内外面ロクロナデ、底部内面ヨ コナデ	5B5/1 青灰	5P5/1 紫灰	5Y5/1 灰	体部意図的に打ち欠 いている 転用硯	LG-78
215	須恵器	鉢	(19.6)	-	-	内外面ロクロナデ	N7/0灰白	N8/0灰白	N8/0灰白		LF-78
216	須恵器	鉢D	-	-	高台径 (13.6)	外面ロクロケズリ後ロクロナデ、 内面ロクロナデ、底部内面ロクロ ナデ後ヨコナデ	2.5Y6/2 灰黄	N7/0 灰白	N6/0 灰	内面に墨痕 筆ならし	LF-71
217	須恵器	鉢A	(21.8)	-	-	体部下半ロクロケズリ後ロクロミ ガキ、体部上半ロクロナデ後ロク ロミガキ、内面上半ロクロナデ、 内面下半ヨコナデ	10YR8/1灰白 ～ 10YR7/1灰白	10YR8/1灰白 ～ 10YR7/1灰白	10YR8/1灰 白～ 10YR7/1灰 白	内面に黒褐色の炭化 物付着	LG-78
218	須恵器	甕C	(33.2)	-	-	内外面ロクロナデ	N8/0灰白	N8/0灰白	N8/0灰白	内面に煤付着	LG-79
219	奈良三 彩	托	(4.8)	(3.9)	高台径 6.0	底部外面ヘラキリ、皿部、托部内 外面ともロクロナデ	10G3/1暗緑 灰 10G5/1緑灰	7.5Y8/1 灰白	10G3/1暗緑 灰 10G5/1緑灰	高台内部にも施釉	LG-79

第4章 出土遺物

表14 SD01古埋立層出土土器観察表

号 番	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
220	灰釉陶器	段皿	(19.8)	-	-	口縁部外面ロクロナデ	2.5Y6/1黄灰	2.5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	内面に降灰	LG-69
221	土師器	皿A	(16.2)	-		口縁部上半外面ヨコナデ、下半外面ヘラケズリ、内面に粗一段斜放射状暗文	10YR7/2にぶい黄橙	2.5Y8/2灰白	10YR7/2にぶい黄橙	内外面変色 内面に煤付着	LG-70
222	土師器	皿A	(16.0)	(2.1)		口縁部内外面ヨコナデ、底部外面ユビオサエの痕跡残る。内面に一段斜放射状暗文	2.5Y7/3浅黄 ~2.5Y7/4浅黄	7.5YR8/2灰白	2.5Y7/3浅黄 ~2.5Y7/4浅黄		LG-70
223	土師器	椀A	(12.5)	(3.9)		外面全体ヘラケズリ後ヘラミガキ	2.5Y8/2灰白	7.5YR7/3にぶい橙	2.5Y8/2灰白	口縁部内外面に灯明痕	LG-70
224	土師器	椀A	(13.4)	(4.5)		外面全体ヘラケズリ後粗いヘラミガキ	10YR7/2にぶい黄橙 ~10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR7/4にぶい橙	10YR7/2にぶい黄橙 ~10YR7/3にぶい黄橙		LF-79
225	須恵器	椀B	(12.0)	3.8	高台径(5.4)	底部内外面ヨコナデ、口縁部内外面ロクロナデ	N7/0灰白	N7/0灰白	N7/0灰白	内外面煤付着 口縁1/8、東海産	LF-69
226	須恵器	杯A	(16.0)	4.2		底部外面ヘラキリ後ヨコナデ、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	7.5Y8/1灰白 ~N3/0暗灰	7.5Y8/1灰白 ~N3/0暗灰	7.5Y8/1灰白 ~N3/0暗灰	内外面に火樫 口縁部1/8 木屑層と接合	LF-78
227	須恵器	杯A	(17.2)	3.45		内外面ロクロナデ	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	5Y7/1灰白	底部外面に墨痕 口縁1/6	LG-69
228	須恵器	杯B	(17.9)	5.4	高台径(13.6)	底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	7.5Y8/1灰白	N8/0灰白	N8/0灰白	史料番号613 転用碗 口縁1/4	LF-77
229	須恵器	杯B	(10.2)	3.15	高台径(7.2)	底部外面ヨコナデ、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N5/0灰	N7/0灰白~ N5/0灰	N5/0灰		LG-71
230	須恵器	杯B	9.5	3.55	高台径6.8	内外面ロクロナデ、底部内面未調整(一部ヨコナデ)、底部外面未調整	N5/0灰	N5/0灰	N5/0灰	史料番号606 灯明皿 木屑層と接合	LG-78
231	須恵器	杯B	15.5	4.25	高台径10.9	底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面中央ヨコナデ	N6/0灰	N6/0灰	N6/0灰	転用碗、口縁1/2 木屑層と接合	LG-78 LG-79
232	須恵器	杯B	(17.4)	5.45	高台径(13.2)	底部外面ヨコナデ、口縁部内外面ロクロナデ	N8/0灰白~ N7/0灰白	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	口縁1/4 木屑層と接合	LG-69 LG-77 LG-78
233	須恵器	杯B	19.55	5.4	高台径(14.15)	底部外面ヘラキリ後ロクロナデ 内外面ロクロナデ	N7/0灰白~ N6/0灰	5PB4/1暗青灰	2.5Y5/2暗灰黄	口縁部内面に火樫 木屑層と接合	LG-70
234	須恵器	皿A	(23.8)	2.5	-	底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N6/0灰	N7/0灰白	N6/0灰	史料番号637	LF-78
235	須恵器	皿B	(25.3)	4.9	高台径(20.2)	底部外面、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	5Y7/1灰白	火樫あり	LG-72
236	須恵器	皿B	(24.3)	5.3	高台径(19.3)	底部外面、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N3/0暗灰	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	火樫あり、転用碗 木屑層と接合	LF-78 LF-79 LG-78 LG-79
237	須恵器	壺A蓋	(16.5)	4.3	-	頂部外面、縁部内外面ロクロナデ、頂部内面ヨコナデ	N6/0灰	N6/0灰	N6/0灰	木屑層と接合	LF・G-69 LF-79
238	須恵器	壺L	(10.3)	-	-	内外面ロクロナデ	N6/0灰~ N3/0暗灰	N6/0灰	N6/0灰~ N3/0暗灰	内外面に降灰 木屑層と接合	LF・G-69 LG-78
239	須恵器	水(浄)瓶	-	-	-	底部外面糸切り、体部下半ロクロケズリ、内面ロクロナデ。3段構成	2.5Y4/1黄灰~ 10Y6/2オリーブ灰	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	木屑層と接合	LF-78 LG-70 LG-78
240	須恵器	浄瓶	-	-	-	内外面ロクロナデ	N7/0灰白~ 10Y5/2オリーブ灰	7.5Y6/1灰	7.5Y6/1灰		LF-77
241	須恵器	壺N	-	-	13.0	底部外面未調整、胴部外面下半ロクロケズリ、胴部外面上半~内面ロクロナデ	N8/0灰白~ N3/0暗灰	5RP6/1紫灰	N5/0灰	木屑層と接合	LF-69 LF-77 LG-72
242	須恵器	盤A	(35.8)	-	-	内外面ロクロナデ	N6/0灰	N7/0灰	N6/0灰	転用碗 外面に墨痕あり	LG-78
243	須恵器	甕C	(32.2)	-	-	胴部外面格子目タキ後下半ヘラナデ、上半ロクロナデ、内面上半ロクロナデ、下半はヨコナデ	N3/0暗灰	2.5Y7/1灰白~ 2.5Y7/2灰黄	2.5Y6/2灰黄~ 2.5Y5/2暗灰黄	史料番号518 最下層、木屑層と接合	LF-72 LF-77 LF-78 LF-79 LG-68 LG-69 LG-77 LG-78 LG-79

表15 SD01新下層出土土器観察表

図番号	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
244	土師器	杯A	17.4	4.55		口縁部上半外面ヨコナデ、下半外面ヘラケズリ後ヘラミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR8/2 灰白	2.5Y7/1 灰白	底部外面に線刻「吉カ」	LH-70
245	土師器	杯A	(17.8)	(4.0)		口縁部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5YR6/6 橙	10YR7/2 にぶい黄橙		LF-78
246	土師器	杯A	(18.2)	4.3		口縁部外面上半ヨコナデ、下半外面ヘラケズリ	2.5Y8/1 灰白	5YR6/6橙 5Y8/2灰白	5Y8/2 灰白	史料番号717	LG-78
247	土師器	杯(皿) 蓋	(15.2)	-		頂部外面にわずかにヘラミガキ残る	N7/0 灰白	N7/0 灰白	10YR8/1 灰白～ 2.5Y7/4浅黄	内外面とも二次的に火を受ける 内面一部変色煤付着	LG-72
248	土師器	皿C	(10.0)	(2.1)		口縁部外面上半ヨコナデ、下半～底部外面ユビオサエ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白		LG-72
249	土師器	椀A	(13.8)	-		口縁部外面上半ヨコナデ後外面全体をヘラケズリ、ヘラミガキ	10YR7/1 灰白	5YR7/6 橙	10YR7/1 灰白		LG-77
250	土師器	皿A	(14.8)	-		口縁部外面上半ヨコナデ後口縁部外面をヘラケズリ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙		LH-71
251	土師器	皿A	(15.2)	(2.6)		口縁部外面をヘラケズリ	2.5Y8/2 灰白	5YR7/3 にぶい橙	2.5Y8/2 灰白		LG-70
252	土師器	皿A	(19.2)	2.4 ～2.5		口縁部内外面ヨコナデ、底部外面ユビオサエ	2.5Y8/2 灰白	7.5YR7/6 橙	2.5Y8/2 灰白		LG-78
253	土師器	皿A	20.9	2.6		口縁部外面ヘラケズリ、底部に穿孔	2.5Y7/4浅黄	2.5Y7/4浅黄	2.5Y7/4浅黄		LH-70
254	須恵器	杯B	13.5～ 13.7	3.8	高台径 9.1	底部外面未調整、口縁部内外面、底部内面ロクロナデ	N7/0灰白～ N5/0灰	5R5/1 赤灰	N7/0 灰白	転用硯	LG-71
255	須恵器	杯B	(18.1)	5.75	高台径 (13.7)	内外面ロクロナデ	N7/0 灰白	N7/0 灰白	N7/0 灰白	口縁1/6	LG-73
256	須恵器	杯C	(18.3)	2.6		底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面磨滅のため不明	N7/0 灰白	7.5Y8/1灰白 ～5Y8/1灰白	7.5Y8/1灰白 ～5Y8/1灰白	内面火樺 口縁1/6	LG-72
257	須恵器	杯蓋	(12.0)	1.5		頂部内面ロクロナデ、頂部外面降灰のため不明	N6/0灰～ N5/0灰	N6/0灰～ N5/0灰	N6/0灰～ N5/0灰	重ね焼き痕あり 口縁1/4	LF-77
258	須恵器	杯蓋	(14.6)	-		頂部外面ヨコナデ、縁部内外面ロクロナデ、頂部外面ロクロケズリ後ロクロナデ	N6/0灰	N6/0灰	N6/0灰	口縁1/4 転用硯	LF-70
259	須恵器	杯蓋	(14.2)	-		頂部外面ヘラキリ未調整、頂部内面ロクロナデ	N6/0灰～ N5/0灰	10YR4/3 にぶい黄褐	N6/0灰～ N5/0灰	口縁1/8	LH-71
260	須恵器	杯蓋	(16.0)	3.45		頂部内面ロクロナデ、頂部外面降灰のため不明	N7/0灰白～ N6/0灰	N8/0 灰白	N7/0灰白	内面全体に墨痕 口縁1/6	LG-73
261	須恵器	杯蓋	(19.0)	-		頂部内面ヨコナデ、縁部内面～頂部外面ロクロナデ	N8/0灰白～ N7/0灰白	N8/0灰白～ N7/0灰白	N8/0灰白～ N7/0灰白	転用硯、口縁1/4	LG-70
262	須恵器	皿B蓋	(19.0)	1.8		頂部外面ロクロケズリ後ロクロナデ 頂部内面ヨコナデ	N7/0 灰白	N7/0 灰白	N7/0 灰白	口縁9/10	LF-77
263	須恵器	皿B	(24.6)	4.6	高台径 (21.4)	内外面ロクロナデ	N6/0 灰	N6/0 灰	N6/0 灰	口縁1/8	LG-72
264	須恵器	壺E	(6.9)	-	-	肩部外面下半ロクロケズリ、内外面ロクロナデ	N7/0灰白～ N6/0灰	N7/0灰白	N7/0灰白		LG-73
265	須恵器	壺M	4.1	残存 8.95	-	内外面ロクロナデ、底部外面未調整	N7/0灰白～ N4/0灰	-	N7/0灰白～ N4/0灰	頸部～肩部に降灰	LG・H- 79
266	須恵器	水瓶	(2.9)	-	-	内外面ロクロナデ	N7/0灰白～ N5/0灰	N6/0灰	N6/0灰		LH-70
267	須恵器	浄瓶	端部1.1 鏝部5.4	-	-	口縁端部内面ロクロケズリ、内外面ロクロナデ	7.5Y7/1灰白 ～10Y4/2 オリブ灰	5Y7/2 灰白	5Y7/1 灰白	外面全体に自然釉 付着	LH-78
268	須恵器	水(浄) 瓶	-	-	高台径 (6.4)	内外面ロクロナデ	5Y6/1灰～ N7/0灰白	N7/0 灰白	N7/0 灰白		LG-70
269	須恵器	鉢A	(20.9 ～21.2)	12.9	-	底部外面ロクロケズリ後ヘラミガキ 口縁部外面ヘラミガキ 内面上半ロクロナデ、下半ヨコナデ	5Y7/1灰白～ 2.5Y5/1 黄灰	2.5Y8/1灰白～ 10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y8/1灰白～ 10YR7/2 にぶい黄橙	内外面に煤付着 木屑層と接合	LF-69 LF-79 LG-78
270	須恵器	鉢A	22.6	12.4	-	外面ロクロケズリ後ロクロミガキ 内面上半ロクロナデ、下半ヨコナデ	N5/0灰～ N4/0灰	N5/0灰～ N4/0灰	N7/0 灰白	底部外面煤付着 木屑層と接合	LF-78 LG-69 LG-72 LG-78
271	須恵器	鉢A	(25.6)	15.1	-	外面下半ロクロケズリ後ロクロミガキ、 上半ロクロナデ後ロクロミガキ 内面上半ロクロナデ、下半ヨコナデ	2.5Y5/2 暗灰黄～ N4/0灰	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	内外面に煤付着 木屑層と接合	LF-73 LF-78 LG-78 LG-79
272	須恵器	鉢A	-	-	-	内面ヨコナデ、外面ヘラミガキ	N6/0灰	N6/0灰	N6/0灰	史料番号530	LF-73
273	須恵器	鉢F	(18.4)	-	-	内外面ロクロナデ	N5/0 灰	N6/0灰～ 5Y7/1灰白	5Y7/1 灰白	史料番号612	LG-70

第4章 出土遺物

図番号	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
274	須恵器	盤A	(33.9)	-	-	内外面ロクロナデ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	史料番号718 転用硯	LH-78・79
275	須恵器	甕C	(36.5)	-	-	胴部外面タタキ後ナデ、内面ヨコナデ、口縁部内外ロクロナデ	N7/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白		LF-69
276	奈良三彩	杯	(19.8)	-	-	淡緑色の釉薬を施釉後、濃緑色の釉薬を施釉	-	2.5Y8/1 灰白	-	口縁端部内外面に煤附着、軟質	LG-72

表16 SD01新上層出土土器観察表

図番号	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
277	土師器	皿A	14.2	2.4		口縁端部が内傾する。口縁端部外面ヨコナデ、口縁部から底部外面ヘラケズリ	10YR7/2 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙		LH-72
278	須恵器	杯A	(14.8)	2.9		底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面中央ヨコナデ	N6/0灰～ N7/0灰白	N7/0灰	N6/0灰～ N8/0灰白	史料番号687 内外面に火襌 口縁1/8	LG-72 LH-72
279	須恵器	杯(皿) 蓋	(14.4)	1.7		頂部内面中央ヨコナデ、縁部内面～外面ロクロナデ	N7/0灰	N7/0灰	N7/0灰	転用硯、口縁4/5 新下層と接合	LG-71 LH-71
280	須恵器	杯B	9.9	3.4	高台径 (7.1)	底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N7/0灰～ N6/0灰	N7/0灰～ N6/0灰	N7/0灰～ N6/0灰		LF-70 LG-H-70
281	須恵器	杯B	(9.7)	3.7	高台径 (6.8)	底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面中央磨滅のため調整不明	N7/0灰～ N6/0灰	N7/0灰～ N6/0灰	N7/0灰～ N6/0灰	転用硯	LG-77
282	須恵器	杯B	(17.6)	5.4	高台径 (11.5)	口縁部内外面ともロクロナデ、底部内面ヨコナデ、底部外面降灰のため不明	N7/0灰～ N6/0灰	N7/0灰～ N6/0灰	N6/0灰～ N5/0灰	外面に降灰 木屑層と接合	LG-70 LG-78
283	須恵器	杯B	(15.6)	5.75	高台径 11.7	底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面磨滅のため不明	N6/0灰	N6/0灰	N6/0灰	転用硯、口縁1/6 底部4/5 新下層と接合	LF-77 LG-77 LG-78
284	須恵器	杯B	17.4	5.7	高台径 10.3	底部外面ヘラキリ後ナデ、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N7/0灰～ N8/0灰白	N7/0灰	N7/0灰	底部焼け歪大きい 口縁1/2 新下層と接合	LG-71 LH-71
285	須恵器	杯B	(18.3)	5.65	高台径 (12.6)	底部外面ヨコナデ、口縁部内外面ロクロナデ、底部内面ヨコナデ	N7/0灰～ N6/0灰	N7/0灰～ N6/0灰	N7/0灰～ N6/0灰	埋立層・新下層と 接合	LF-78 LG-78
286	須恵器	杯C	17.8	3.25		底部外面ヘラキリ未調整、口縁部内外面、底部内面ロクロナデ	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白	ほぼ完形 木屑層と接合	LF-78 LF-79 LG-72 LG-78 LG-79
287	須恵器	壺M	3.4	9.5	3.8	底部外面糸切り、内外面ロクロナデ	N6/0灰～ N5/0灰	-	N6/0灰～ N5/0灰		LH-72
288	須恵器	壺M	(4.9)	-	-	内外面ロクロナデ	N7/0灰～ N6/0灰	N7/0灰～ N6/0灰	N7/0灰～ N6/0灰		LF-78
289	須恵器	壺L	-	-	高台径 6.2	底部外面糸切り、内外面ロクロナデ3段構成	N8/0灰白～ N5/0灰	N6/0灰	N6/0灰	新下層と接合	LG-71 LG-72 LH-71
290	須恵器	壺L	(9.7)	-	-	内外面ロクロナデ	N8/0灰白～ N4/0灰	N6/0灰	N8/0灰白～ N4/0灰		LG-69
291	須恵器	壺N	-	-	(13.4)	底部外面未調整、外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ	N6/0灰～ N4/0灰	N6/0灰～ N4/0灰	N6/0灰～ N4/0灰	底部1/2 新下層と接合	LG-69 LG-70 LH-73
292	須恵器	壺N	-	-	-	内外面ロクロナデ	N7/0灰～ N5/0灰	N7/0灰～ N5/0灰	N7/0灰～ N5/0灰		LF-70
293	須恵器	壺N	13.6	-	-	内外面ロクロナデ	N7/0灰	5Y8/2灰白	5Y7/2灰白		LG-72 LH-72 LH-73
294	須恵器	水瓶	(3.0)	-	-	口縁端部内面ロクロケズリ、それ以外はロクロナデ	5PB6/1青灰～ 5PB4/1暗青灰	5PB5/1青灰	5R4/1暗赤灰	頸部に二条一組の沈線が二組	LG-70
295	緑釉陶器	皿	-	-	高台径 (6.7)	口縁部外面ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ、底部内面ナデ	5GY8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	5GY8/1 灰白	山城産	LG-71

表17 SX04出土土器観察表

図番号	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
297	土師器	杯A	(15.2)	(3.1)		外面全体をヘラケズリ、口縁部上半に強いヨコナデによる窪みがケズリ残されている	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙		LH-71
298	土師器	杯A	(15.8)	(3.4)		外面全体ヘラケズリ	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/6 明黄褐	7.5YR8/3 浅黄橙		LH-70・71
299	土師器	杯B	(21.1)	3.3	高台径 (11.1)	調整不明	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	7.5YR8/3 浅黄橙		LH-70
300	土師器	杯B	(21.4)	-	-	外面をヘラケズリ後ヘラミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR8/2 灰白	10YR5/4 にぶい黄褐		LH-70
301	土師器	皿C	(9.8)	(1.4)		口縁部内外面、底部内面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ後ナデ	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR6/6 橙	10YR8/4 浅黄橙	口縁端部に灯明痕	LH-70
302	土師器	皿A	(18.2)	2.1		口縁部内外面、底部内面ヨコナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR5/8 黄褐	7.5YR8/2 灰白		LH-70
303	土師器	皿A	(18.2)	2.2		底部外面ヘラケズリ、口縁部外面 不明、内面ヨコナデ	10YR6/8 明黄褐	7.5YR6/8 橙	10YR6/6 明黄褐		LH-70
304	土師器	皿A	(18.4)	1.9		口縁部内外面、底部内面ヨコナデ 底部外面ナデ	2.5Y8/4 淡黄	10YR6/8 明黄褐	2.5Y8/4 淡黄		LH-70
305	土師器	皿A	(19.3)	(2.1)		外面全体ヘラケズリ	10YR8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白		LH-70
306	土師器	甕A	(21.4)	-		体部外面にタタキ痕、内面に当て 具の痕跡が残る	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR6/6 橙	10YR8/3 浅黄橙		LH-70
307	黒色土器 A類	椀	(16.2)	(3.4)		外面粗いミガキ、内面密なミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y2/1 黒	2.5Y8/1 黒灰		LH-70
308	須恵器	杯蓋	(16.0)	-	-	頂部外面ヘラキリ未調整、口縁部 内外面ロクロナデ、頂部内面ヨコ ナデ	N4/0灰	5YR4/3 にぶい赤褐	N4/0灰～ 10YR2/2黒 褐	転用碗、口縁1/4	LH-71
309	須恵器	杯蓋	(16.2)	1.8	-	頂部外面ヘラキリ後ヨコナデ、内 面ロクロナデ	N7/0灰白～ N6/0灰	N7/0灰白～ N6/0灰	N7/0灰白～ N6/0灰	転用碗、口縁1/4	LH-70
310	緑釉陶器	椀	(16.0)	-	-	内外面に施釉	5GY8/1灰白	N8/0灰白	5GY8/1灰白	東海産	LH-70
311	灰釉陶器	椀	17.1～ 17.4	4.3～ 4.5	高台径 7.8	口縁部外面ロクロケズリ後ヘラミ ガキ、底部外面ロクロケズリ 口縁端部の反りが強い	N8/0灰白	N8/0灰白	N8/0灰白	東海産	LH-70
312	白磁	水注 把手	残存長 幅	3.4 2.0		全面に釉薬がかかり、胎土は緻密	7.5Y8/2 灰白	10Y8/1 灰白	-		LH-71

表18 包含層出土土器観察表

図番号	種類	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			口径	器高	底径		外面	断面	内面		
313	緑釉陶器	椀	-	-	高台径 6.9	口縁部下半～底部ロクロケズリ 底部内面調整不明、内外面施釉	7.5Y8/0 灰白	7.5Y8/1 灰白	5GY8/1 オリーブ灰	京都産	不明
314	灰釉陶器	椀	-	-	高台径 8.3	底部外面ロクロケズリ、高台部分 ロクロナデ、底部内面に自然釉 重ね焼き痕あり	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白	東海産	LH-78
315	土師器	甕	21.6	(14.1)		肩部内外面にタタキ痕跡と当て具 痕、口縁部内外面ヨコナデ	2.5Y8/1灰白～ 2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/1灰白～ 2.5Y8/2灰白		不明

表19 土製品観察表

図番号	出土地点	器種	法量			技法の特徴	色調			備考	出土地区
			径	器高	底径		外面	断面	内面		
316	SD01新上層	圈足円面硯	外堤径 (10.2)	-	-	内外面ロクロナデ、自然釉かかる	N7/0 灰白	N7/0 灰白	2.5GY7/1 明オリーブ灰～ 2.5GY6/1 オリーブ灰	硯面に墨残る	LG-72
317	SD01新上層	圈足円面硯	外堤径 (17.6)	-	-	内面ロクロナデ後ナデ 外堤外面～海部内面ロクロナデ 硯面ヘラケズリ	N7/0 灰白	N7/0 灰白	N7/0 灰白	硯面に研磨痕 残る	LH-70
318	SD01古木層層	圈足円面硯	-	-	脚台 (18.2)	内外面ロクロナデ、内面に自然釉 かかる	N5/0 灰	N5/0 灰	N5/0 灰		LG-69
319	SX04	圈足円面硯	外堤径 (14.4)	-	-		N6/0 灰	N6/0 灰	N6/0 灰	透孔の横にタ テ方向の線刻 あり	LH-70
320	SX04	圈足円面硯	-	-	脚台 (18.0)	内外面ロクロナデ、自然釉かかる	N6/0 灰	N6/0 灰	N6/0 灰		LH-70
321	SD01新下層	形象硯	長辺 9.6 短辺 4.6	-	-	鳥の羽根のような陽刻 裏面ヘラケズリで調整	N8/0 灰白	N8/0 灰白	N8/0 灰白		LH-70
322	包含層	円形硯または 円面硯の 脚部	-	-	-	六角に面取り、自然釉かかる	2.5GY7/1 明オリーブ 灰～N4/0 灰	N8/0 灰白	-		不明
323	SD01古埋立層	球形土製品	直径 2.4 ～2.5cm	-	-	粘土を丸めて作る 表面にミガキ	N4/0 灰	-	-	表面に煤が付 着・重さ15g	LG-78

第4章 出土遺物

表20 イスラム陶器観察表

枝番号	部位	破片			胎土	色調			接合関係他	出土層位	出土地区
		長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		内面	断面	外面			
1	頸部	3.0	2.8	1.2~1.3	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5G2/1緑黒・10G7/1明緑灰	7.5Y8/1灰白	青緑色		SD01古木屑層	LG-78
2	頸~肩部	3.5	3.8	1.5	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5G2/1緑黒・5G7/1明緑灰	5Y8/1灰白	青緑色	把手の剥離痕	SD01古木屑層	LG-78
3	肩~体部上部	2.0	1.8	0.85~1.0	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5G2/1緑黒・5G7/1明緑灰	5Y8/2灰白	青緑色		SD01古木屑層	LG-78
4	肩~体部上部	1.9	2.2	0.9	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	10G2/1緑黒・10G7/1明緑灰	5Y8/2灰白	青緑色		SD01古木屑層	LF-78
5	肩~体部上部	3.8	2.4	1.0~1.05	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	10G1.7/1青黒・10G7/1明緑灰	5Y8/2灰白	青緑色	波状文	SD01古木屑層	LG-78
6	肩~体部上部	2.0	2.8	0.9~1.1	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5G2/1緑黒・5G7/1明緑灰	7.5Y8/1灰白	青緑色		SD01古木屑層	LG-78
7	体部上部	9.7	10.9	1.0	脆いチョーク状・やや砂質	5G3/1暗緑灰	5Y8/1灰白	青緑色	8・19と接合	SD01古木屑層	LG-79
8	体部上部	3.8	3.2	1.0	脆いチョーク状・やや砂質	5G3/1暗緑灰	5Y8/1灰白	青緑色	7と接合	SD01古木屑層	LG-78
9	体部上部	2.0	2.4	—	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	—	7.5Y7/1灰白	青緑色	波状文	SD01古木屑層	LG-78
10	体部上部	2.1	2.3	0.8~0.9	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	10G2/1緑黒	7.5Y8/1灰白	青緑色		SD01古木屑層	LG-78
11	体部上部	3.1	6.1	1.0~1.05	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	10G2/1緑黒・10G7/1明緑灰	7.5Y8/1灰白	青緑色	波状文	SD01新下層	LG-69
12	体部上部	3.8	6.7	1.0~1.1	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	10G2/1緑黒・10G7/1明緑灰	7.5Y8/1灰白	青緑色	波状文・23と接合	SD01古木屑層	LG-78
13	体部上部	2.8	2.1	1.1	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5G3/1暗緑灰・5G7/1明緑灰	5Y8/1灰白	青緑色		SD01古木屑層	LG-78
14	体部上部	3.0	2.3	0.9~1.0	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5G2/1緑黒・10GY7/1明緑灰	7.5Y8/1灰白	青緑色		SD01古木屑層	LG-78
15	体部中部	5.0	5.7	1.2	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5G2/1緑黒・10GY7/1明緑灰	5Y8/2灰白	青緑色	16と接合	SD01古木屑層	LG-78
16	体部中部	5.3	7.0	1.1~1.2	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5G7/1緑黒・10GY7/1明緑灰	5Y8/2灰白	青緑色	15と接合	SD01古木屑層	LG-78
17	体部中部	3.2	2.3	1.2	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	7.5GY2/1緑黒・5G7/1明緑灰	5Y8/2灰白	青緑色		SD01古木屑層	LG-78
18	体部中部	3.4	3.2	1.2~1.3	1mm大の礫混・やや砂質・鬆がはいる	5G3/1暗緑灰・5G7/1明緑灰	10Y8/1灰白	青緑色		SD01古木屑層	LG-78
19	体部中部	8.6	12.6	1.2	脆いチョーク状・やや砂質	5G2/1暗緑灰	5Y8/1灰白	青緑色	7と接合	SD01古埋立層	LF-78
20	体部中部	1.3	2.4	—	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5G2/1緑黒・5G7/1明緑灰	5Y8/2灰白	青緑色		SD01古木屑層	LG-78
21	体部中部	2.4	1.8	—	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5G3/1暗緑灰・10GY7/1明緑灰	5Y8/2灰白	青緑色		SD01古木屑層	LG-78
22	体部中部	3.0	2.7	—	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5G2/1緑黒・5G7/1明緑灰	5Y8/2灰白	—	外面剥離	SD01古木屑層	LG-78
23	体部中部	3.5	5.0	0.9~1.0	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	10G2/1緑黒・10G7/1明緑灰	7.5Y8/1灰白	青緑色	12と接合	SD01古木屑層	LG-78
24	体部中部	4.2	4.5	0.8~1.0	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5G2/1緑黒・10G7/1明緑灰	5Y8/2灰白	青緑色		SD01古木屑層	LG-78
25	体部中部	3.4	5.3	1.0	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5G2/1緑黒・5G7/1明緑灰	5Y8/2灰白	濃青緑と淡青緑	剥離痕跡	SD01古木屑層	LG-78
26	体部中部	4.1	5.6	1.2	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5GY2/1緑黒・5G7/1明緑灰	7.5Y8/1灰白	青緑色		SD01古木屑層	LF-78
27	体部中部	6.2	4.6	0.9~1.1	2mm大の砂礫・やや砂質・鬆がはいる	7.5GY2/1緑黒・5G7/1明緑灰	5Y8/1灰白	青緑色		SD01古木屑層	LG-78
28	体部下層	10.6	11.0	1.1~1.4	チョーク状	5G3/1暗緑灰・5G7/1明緑灰	7.5Y8/2灰白	青緑色	29と接合	SD01新下層	LG-69
29	体部下層	7.5	10.7	1.05~1.35	チョーク状	5G3/1暗緑灰・5G7/1明緑灰	7.5Y8/2灰白	青緑色	28と接合	SD01新下層	LG-69
30	体部下層	6.0	6.3	1.1~1.3	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	5G2/1緑黒・5G7/1明緑灰	5Y8/2灰白	青緑色		SD01古木屑層	LF-79
31	体部中~下部	3.3	3.2	1.2~1.25	チョーク状・やや砂質・鬆がはいる	7.5G2/1緑黒・5G7/1明緑灰	5Y8/2-8/2灰白	青緑色		SD01古木屑層	LG-78
32	底部		底径11.0	高さ:5.0	脆いチョーク状・やや砂質	5G3/1暗緑灰	5Y8/1灰白	青緑色	31と接合	SD01古木屑層	LG-78
33	底部		底径11.0	高さ:5.0	脆いチョーク状・やや砂質	5G3/1暗緑灰	5Y8/1灰白	青緑色	32と接合	SD01古木屑層	LG-78
34	不明	1.0	1.58	0.45	脆いチョーク状・やや砂質	—	5Y8/1灰白	青緑色	分析資料No.3	SD01古木屑層	LG-78

第3節 木製品

ここで報告する木製品の定義は、素材が木製（蔓類含む）で、明らかに用途が特定できるもの、若しくは板状、棒状など整った形態に加工しているもの、また、孔が穿たれていたり、切欠き、柄のつくり出しなど細部に意図的な加工を行っているもの、表面を丁寧に調整しているものなどである。

西大寺旧境内第25次調査で出土した木製品はほとんどが、SD01古木屑層から出土したものである。木屑層の土壌を遺物整理箱に236箱分もち帰り、水洗洗浄した結果、約78箱分の木製遺物が得られた。なかには、木炭5箱、自然遺物（木の枝、皮、葉、種実）6箱、檜皮12箱分が含まれており、それらを除いた製品、未製品、製作過程で生じる端材、木屑は55箱分であった。

出土木製遺物のうち木製品として登録したのは805点である。これらの他に、細い棒状のもので稜を取り除く調整加工を行っている所謂箸状木製品は全体で約6,000点ある。四方を削り棒状^{註1)}に加工するには太さが太すぎたり、稜を取り除く調整加工を行っていないものが約14,000点、四方を削り板状に加工するのが約3,500点、多面体をなすものが約3,500点である。これ以外に製作過程で生じた薄板状のもの、端材は湿性重量で80,075 g分あった。本項では木製品のうち、用途がある程度わかるもの、用途不明でも丁寧に加工され、良好な残存状況にあるものを選び報告する。報告は堆積

層ごとにまとめ、木屑層出土遺物については点数が多いため、『木器集成図録 近畿古代篇』^{文21)}（以下『集成図録』）の分類にしたがって分類する。ただし、点数の少ない紡織具については、その他の項で、一括して取り上げる。木製品の寸法、樹種については一覧（表21～32）に掲載した。計測値は基本的に図に示した上下端の距離を長さ、左右の距離を幅、それらと直交する上面と下面の最大距離を厚さとし、必要に応じて身と柄の区別をして厚さを測定している。欠損している場合の計測値には（ ）を付けた。

I. SD01古最下層出土木製品（表21・図61・Ph.14）

最下層の灰色砂礫層からは、木製品が3点出土している。容器である円形曲物^{註2)}が2点、用途不明品が1点である。

円形曲物は側板が残存していない。ともに、側板の上から木釘を打ち込んで結合する釘結合曲物である。1は側面に五箇所の釘孔があり、そのうち二箇所に木釘が残存する。両面に墨が滲んだ痕跡が認められる。2は釘孔が二箇所あるが、木釘は残存していない。

3は用途不明品。直方体の部材の上面と下面の稜を落とし丁寧に仕上げている。

II. SD01古木屑層出土木製品

『集成図録』の分類に従い、その特徴を以下に述べる。

A. 工具（表22・図62・Ph.14）

鈎針状木製品1点、木針1点、木釘5点、飾り金具の型板1点、刀子の柄2点、叩き板1点、刷毛2点、篋1点、楔3点がある。

表21 SD01古最下層出土木製品一覧

No.	種類	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	備考	写真図版	出土地区
1	容器	曲物底板	(12.8)	(5.0)	0.8	ヒノキ	墨痕・焦げ・刃物傷あり。測面に木釘穴五箇所	Ph.14-1	LF-73
2	容器	曲物底板	径13.0	(5.7)	0.8	ヒノキ	木釘穴二箇所	Ph.14-2	LG-72
3	用途不明	不明木製品	1.9	1.8	1.15	ナシ亜科	表面を非常に丁寧に削り調整	Ph.14-3	LG-72

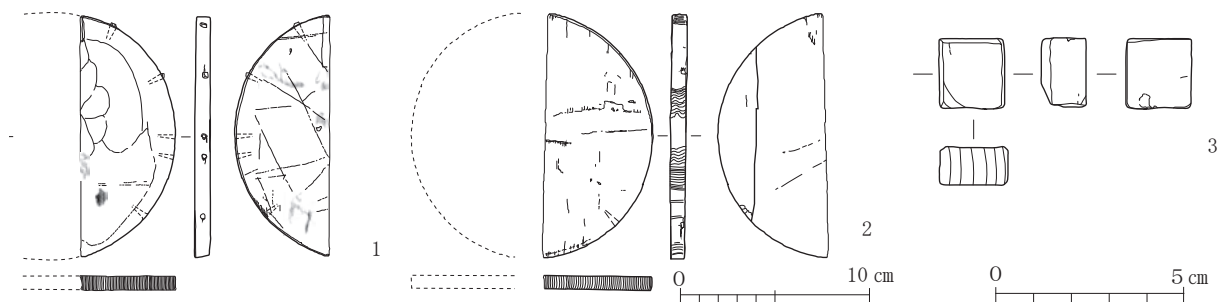


図61 SD01古最下層出土木製品実測図（1・2：1/4、3：1/2）

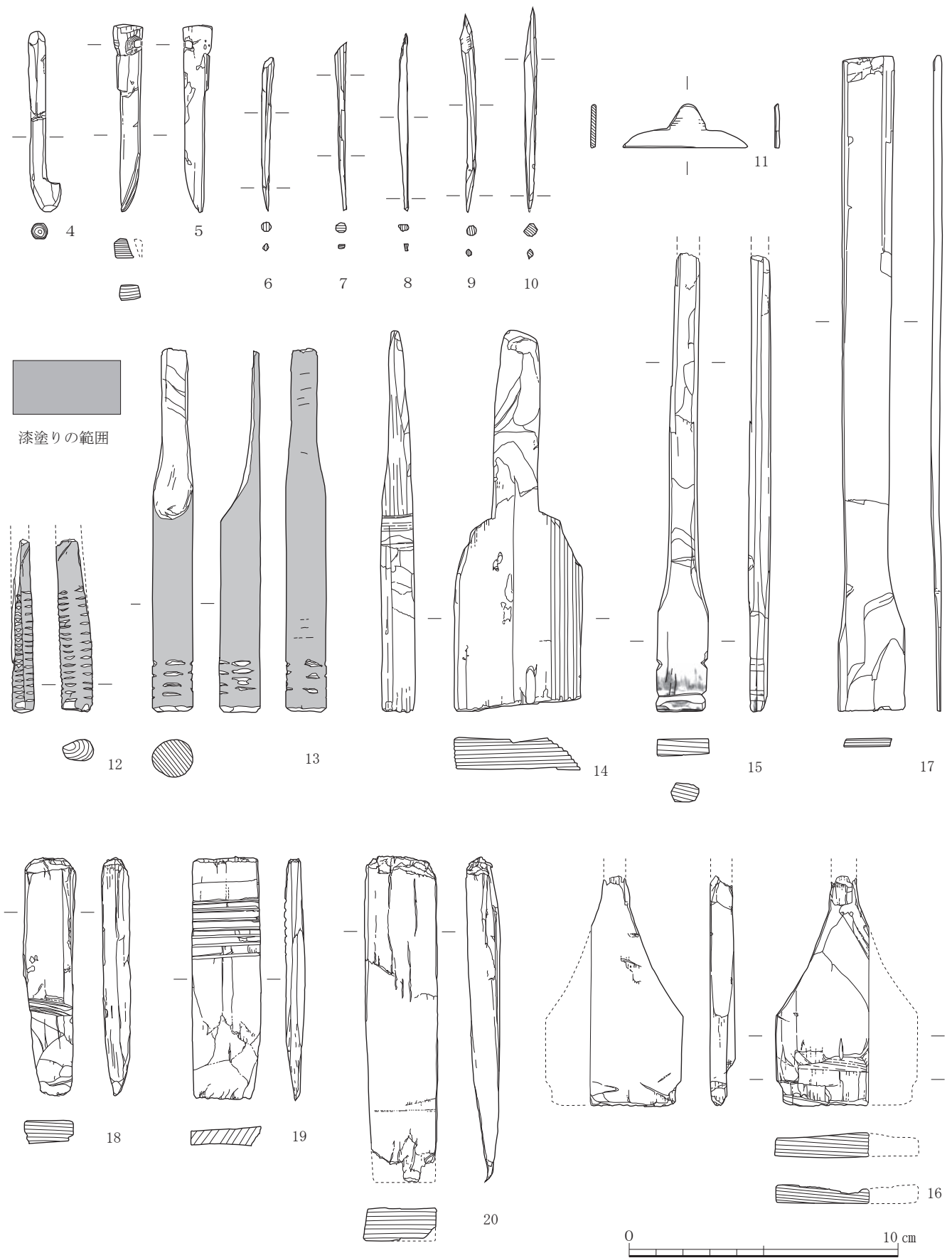


図62 SD01古木屑層出土木製品実測図（工具）（1/2）

4は片端が鉤針状に加工されている。『集成図録』には同一のものはないが、現代の鉤針に似るため、工具に分類した。他端は粗く面取りしている。5は木針である。板目材の小片の一端を斜めにそぎ落とし、片刃状に加工する。他端に頭部をつくり出して穿孔し、針耳とする。針耳は斜めに穿孔されるが、裏面では端に寄るため、使用時もしくは製作段階で破損したと考えられる。6～10は木釘である。一端を細く尖らせ、他端は斜めにそぎ落としている。軸は断面が円形になるように丁寧に削られている。11は平面形が帽子形の板状加工品である。周縁は両面から面取りする丁寧な仕上げである。形態は異なるが、同様のものが左京二坊の二条大路路面上の濠状遺構SD5100^{x17)}から出土しているため、飾り金具の型板とした。12・13は刀子の柄である。ともに黒漆を塗った後、紡錘形の刻み目を入れる。12は断面形が楕円になるよう整形し、柄元を欠く。13は断面形を正円に整形している。柄元部分が籠状に加工され、転用されている。漆の塗りは丁寧に、薄く均一である。14は板材の一端を斜めに切り、さらに柄をつくりだしたもの。食事具の杓子に似るが、大きさに比して、身に厚みがあるため叩き板とした。身の片側縁は外側にむけて斜めに切り落としている。柄は両面から柄頭に向かって薄くなるように粗く

るが、同様のものが左京二坊の二条大路路面上の濠状遺構SD5100^{x17)}から出土しているため、飾り金具の型板とした。12・13は刀子の柄である。ともに黒漆を塗った後、紡錘形の刻み目を入れる。12は断面形が楕円になるよう整形し、柄元を欠く。13は断面形を正円に整形している。柄元部分が籠状に加工され、転用されている。漆の塗りは丁寧に、薄く均一である。14は板材の一端を斜めに切り、さらに柄をつくりだしたもの。食事具の杓子に似るが、大きさに比して、身に厚みがあるため叩き板とした。身の片側縁は外側にむけて斜めに切り落としている。柄は両面から柄頭に向かって薄くなるように粗く

表22 SD01古木屑層出土木製品一覧(工具・服飾具)

No.	種類	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	備考	写真番号	出土地区
4	工具	鉤針状木製品	(6.7)	鉤部1.1	軸部径0.6	散孔材		Ph.14-4	LG-78
5	工具	木針	7.0	頭部1.1 軸部0.7	0.6	スギ	耳部割れ	Ph.14-5	LG-78
6	工具	木針	5.8	0.4	0.4	ヒノキ	完形	Ph.14-6	LG-78
7	工具	木釘	6.3	0.4	0.3	スギ	完形	Ph.14-7	LG-78
8	工具	木釘	6.7	0.4	0.2	スギ	完形	Ph.14-8	LG-71
9	工具	木釘	7.4	0.5	0.4	ヒノキ	完形	Ph.14-9	LG-78
10	工具	木釘	7.5	0.5	0.5	ヒノキ	完形	Ph.14-10	LF-78
11	工具	飾り金具の型	1.6	4.7	0.2	ヒノキ属	完形	Ph.14-11	LF-78
12	工具	刀子柄	(6.4)	1.2	0.8	ヒサカキ属(?)	外面黒漆	Ph.14-12	LG-79
13	工具	刀子柄	13.5	径1.5		ヒノキ	柄元部分を籠状に加工	Ph.14-13	LG-78
14	工具	叩き板	14.2	身4.8 柄1.7	身1.2 柄0.8	スギ	完形	Ph.14-14	LG-78
15	工具	刷毛柄	(16.9)	身(1.9) 柄(1.0)	身(0.7) 柄(0.7)	スギ	先端に墨痕	Ph.14-15	LG-78
16	工具	刷毛柄	(8.5)	(3.4)	0.9	ヒノキ	別材で蓋をするタイプ	Ph.14-16	LG-78
17	工具	籠状木器	24.2	身2.5 柄1.9	0.3	スギ	完形	Ph.14-17	LG-73
18	工具	楔	8.9	1.8	0.9	スギ	完形	Ph.14-18	LG-78
19	工具	楔	9.0	(2.6)	0.7	ヒノキ	転用材	Ph.14-19	LG-78
20	工具	楔	12.2	2.7	1.3	ヒノキ科		Ph.14-20	LG-78
21	服飾具	留針	(3.1)	頭部0.8 軸部0.5	頭部(0.3) 軸部(0.2)	ヒノキ		Ph.15-21	LG-78
22	服飾具	留針	(2.0)	頭部0.6 軸部0.4	0.5	ヒノキ属		Ph.15-22	LG-78
23	服飾具	留針	(2.6)	頭部0.9 軸部0.5	0.8	スギ		Ph.15-23	LF-79
24	服飾具	留針	(4.1)	頭部1.0 軸部0.5	1.0	ヒノキ属		Ph.15-24	LG-78
25	服飾具	留針	(4.9)	頭部径1.5	軸部径0.7	ヒノキ		Ph.15-25	LG-78
26	服飾具	留針	(4.0)	頭部1.8	軸部径0.6	スギ		Ph.15-26	LG-78
27	服飾具	留針	(11.6)	頭部1.5	軸部1.0	スギ		Ph.15-27	LF-79
28	服飾具	留針	(11.4)	頭部1.2	軸部1.0	スギ		Ph.15-28	LF-79
29	服飾具	留針	(11.7)	頭部1.4	軸部0.8	スギ		Ph.15-29	LF-78
30	服飾具	留針	13.5	頭部0.8	軸部径0.4	ヒノキ	完形	Ph.15-30	LG-78
31	服飾具	留針	(5.2)	頭部径0.9	軸部径1.0	スギ		Ph.15-31	LG-78
32	服飾具	留針	(6.3)	頭部1.0	軸部径0.8	スギ		Ph.15-32	LG-78
33	服飾具	留針	(7.4)	頭部1.2	軸部径0.6	スギ		Ph.15-33	LF-73
34	服飾具	留針	7.6	0.9	0.8	スギ	完形	Ph.15-34	LG-78
35	服飾具	横櫛	(4.4)	(5.2)	0.7	ヤブツバキ	歯は26本/3cm	Ph.15-35	LF-79
36	服飾具	横櫛	(3.7)	(5.0)	0.7	固定不能	歯は26本/3cm	Ph.15-36	LG-78
37	服飾具	横櫛	(4.5)	4.5	0.6	イスノキ	歯は22本/3cm	Ph.15-37	LG-78
38	服飾具	横櫛	(5.7)	(3.6)	0.7	イスノキ	歯は17本/2cm	Ph.15-38	LF-78
39	服飾具	檜扇	(18.1)	2.8	0.4	ヒノキ		Ph.15-39	LG-78
40	服飾具	檜扇	(13.8)	1.8	0.1	ヒノキ	史料番号069	Ph.15-40	LF-78
41	服飾具	檜扇	28.9	2.1	0.2	ヒノキ	史料番号149	Ph.15-41	LF-78
42	服飾具	檜扇	51.2	身3.5 柄2.3	0.7	スギ	木器集成図録1605に似る B型式の檜扇	Ph.15-42	LF-78

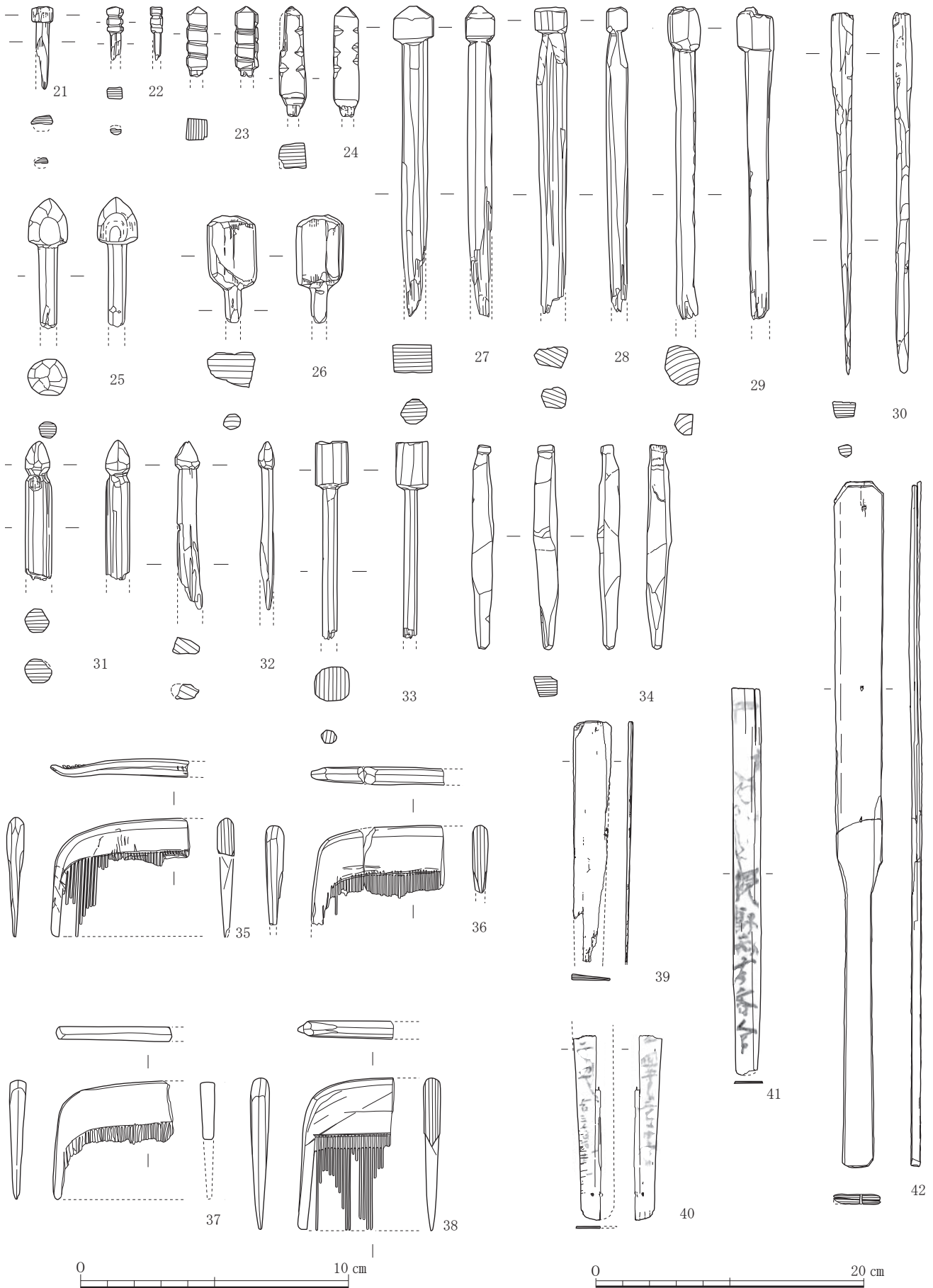


图63 SD01古木屑層出土木製品実測図（服飾具）（21~38：1/2、39~42：1/4）

削り込んでいる。15・16は刷毛で、ともに毛は残存していない。15は柄元に割れ目を入れ毛を挟むもの。柄元の両側縁に2組の切り欠きを入れる。柄元に墨痕が残る。16は残存状態が悪く加工痕が不明瞭であるが、柄元に一段削り込みを入れ、そこに毛を並べて別材で蓋をするタイプと考えられる。17は篋。先端を幅広にし、片刃状に削りだしている。18～20は楔である。長方形の板材短辺の片端を片面、あるいは両面から荒く削り、斧頭状に整形したものである。他端は面取りしている。19は上半部に七条の横方向の線刻がある。転用材の可能性はある。

B. 服飾具 (表22・図63・Ph.15)

留針14点、横櫛6点、檜扇^{ほね}の橋3点、檜扇の親骨1点がある。留針は本来、棒状で一端もしくは両端を尖らせているものである。今回出土したものは破損している物が多く、先端の尖りを確認できない。ただし、これらの頭部は、鋌頭状やいろいろな細工を施すことが多いため、棒状の先端に加工のあるものをこれに分類した。先端の加工が鋌頭状のA型式には21・25・27・28・31・32・34などが該当する。30は先端を薄板状に造るB型式。27～

29は身の削りが粗雑なため、未製品の可能性がある。35～38は横櫛である。全部で6点出土しているが、図示していない2点はいずれも小片で形態が不明である。図示した4点については、いずれも長方形で肩部に丸みを持つA II型式。35～37は、切通し線が背の上縁に平行するが、38は直線である。39～41は檜扇の橋、42は親骨の可能性のあるものである。39～41はいずれもヒノキの薄板である。39は本の部分が欠損する。末の両角を落とし、丸みつけている。40は両面に墨書があり、末部分を欠く。本は片側縁が欠損する。要孔は二つでA II式に分類できる。41は片面に墨書があり、末は方頭。本部分は若干幅を狭め、端部を丸く整えるが要孔は見られないため未製品の可能性がある。42は文書を挟み紐で結び封印する封緘木簡に似るが、紐をかける切り込みや・墨書がなく、穿孔があるため、檜扇の親骨と考える。『集成図録』で団扇形のB型式に分類されている1605に似る。1605は二枚の親骨からなるが、42は下半の幅を細く削り出して柄とし、上半の厚さを二分する切れ目をいれ、そこに子骨を収納する構造に復元できる。上半部には三箇所に一孔ずつ穿

表23 SD01古木屑層出土木製品一覧 (容器)

No.	種類	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	備考	写真番号	地区
43	容器	刳物小皿	(6.9)	(2.0)	高0.8	ヒノキ		Ph.16-43	LF-73
44	容器	挽物皿	(12.3)	(2.9)	0.9 高1.2	ヒノキ属	底部裏面に刃物傷	Ph.16-44	LG-71
45	容器	漆皿片	(復元径)12.4	高2.0	0.2	ケヤキ		Ph.16-45	LG-79
46	容器	曲物底板	(6.4)	(2.0)	0.4	未同定		Ph.16-46	LF-73
47	容器	曲物底板	(13.2)	(6.2)	0.8	ヒノキ		Ph.16-47	LG-78
48	容器	曲物底板	(13.6)	(3.8)	0.7	ヒノキ	焦げあり	Ph.16-48	LG-78
49	容器	曲物底板	(15.3)	(5.9)	0.7	ヒノキ属	焦げで欠損	Ph.16-49	LG-78
50	容器	曲物底板	15.2	(9.1)	0.8	ヒノキ		Ph.16-50	LG-78
51	容器	曲物底板	(18.6)	(4.3)	0.9	ヒノキ		Ph.16-51	LG-73
52	容器	曲物底板	(19.0)	(1.9)	1.3	ヒノキ	2箇所釘穴、うち1箇所に木釘残る	Ph.16-52	LF-78
53	容器	曲物底板	(20.2)	(3.7)	0.7	ヒノキ属		Ph.16-53	LF-78
54	容器	曲物底板	(27.4)	(3.9)	0.6	スギ	両面に墨画あり。史料番号188	Ph.16-54	LF-72
55	容器	曲物底板	(19.2)	(4.4)	0.7	ヒノキ	周囲に側板受けを溝状に彫る	Ph.16-55	LG-78
56	容器	曲物底板	19.8	(2.5)	0.6	ヒノキ	下端切り折り	Ph.16-56	LF-78
57	容器	楕円形曲物底板	30.9	2.0	0.8	ヒノキ	樺皮の紐残る。底板を切断	Ph.16-57	LF-71
58	容器	曲物底板	(11.2)	2.9	0.7	ヒノキ属	右側縁に二次加工	Ph.16-58	LG-78
59	容器	曲物底板	(10.8)	6.6	0.8	ヒノキ	樺皮紐残る。底板を切断。右側縁に二次加工	Ph.16-59	LG-77
60	容器	曲物底板	(16.7)	(3.1)	0.5	ヒノキ科		Ph.16-60	LG-77
61	容器	曲物底板	(10.9)	(2.4)	0.6	未同定	樺皮紐残る	Ph.16-61	LG-78
62	容器	曲物底板	(17.6)	(2.6)	0.6	スギ		Ph.16-62	LG-78
63	容器	曲物底板	(14.7)	(7.3)	0.9	ヒノキ属	樺皮紐残る。下端切り折り	Ph.16-63	LG-78
64	容器	楕円形曲物底板	11.9	7.8	0.7	ヒノキ	樺皮紐残る。下端切り折り	Ph.16-64	LG-78
65	容器	曲物底板	11.1	(5.2)	0.5	ヒノキ	樺皮紐残る。下端切り折り	Ph.16-65	LF-73
66	容器	曲物蓋	7.3	(3.1)	0.8	ヒノキ	小型容器の蓋	Ph.16-66	LG-73
67	容器	栓	1.2	1.2	0.8	ヒノキ	非常に整地な造り	Ph.16-67	LG-78
68	容器	蔓巻把手	14.0	12.0	1.6	マタタビ属		Ph.16-68	LF-73

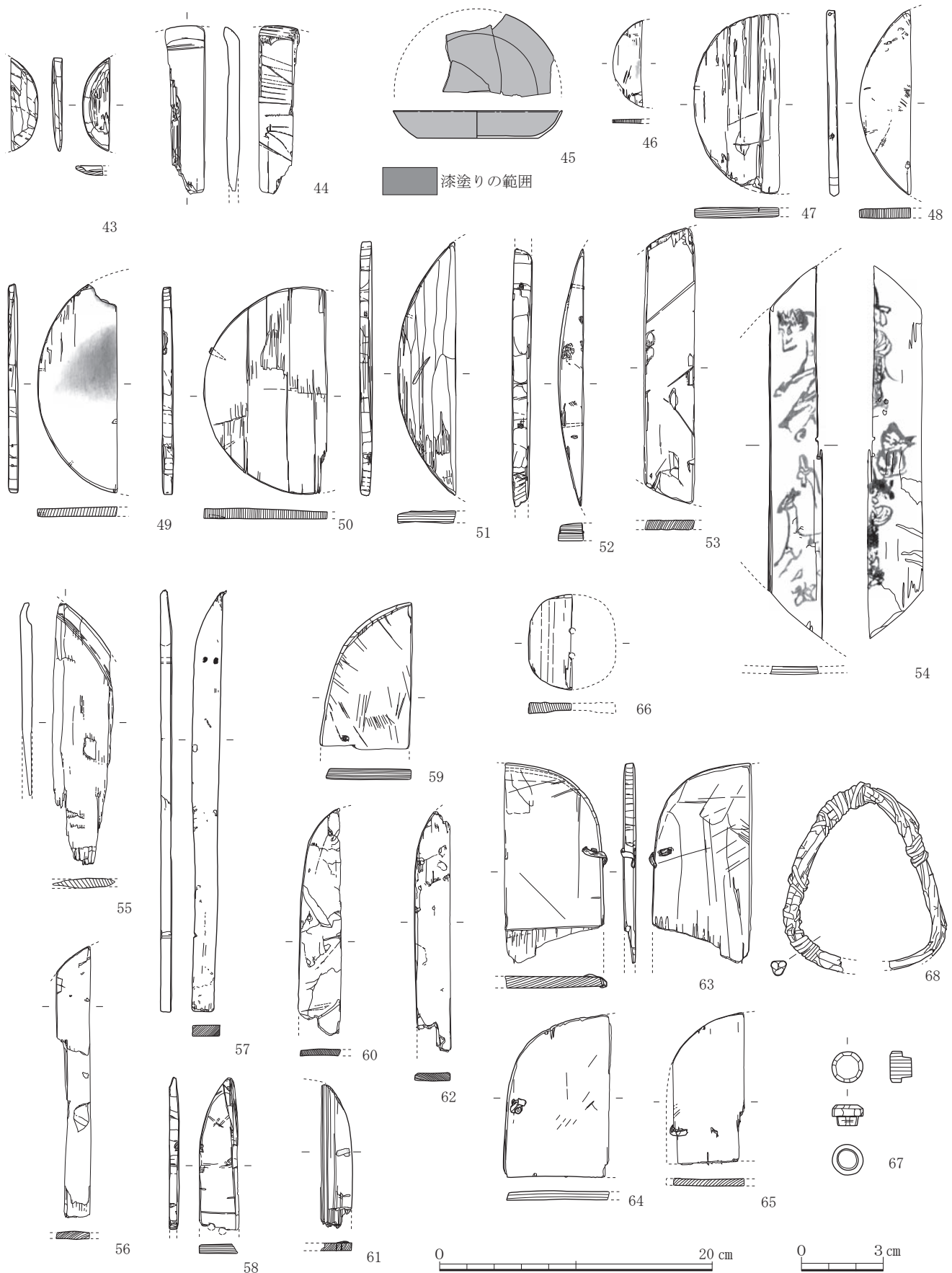


图64 SD01古木屑層出土木製品実測図（容器）（43~66・68：1/4、67：1/2）

孔されている。一番上のものが要孔、下二箇所が綴り目からの紐を結ぶものであろうか。これに見合う子骨は見つかっていないが、要孔と親骨の切れ目から子骨の長さは約26cmに復元でき、団扇状に全開すると全長約75cmになる。C. 容器 (表23・図64・Ph.16)

剝物小皿1点、挽物皿1点、漆塗り皿1点、曲物底板20点、蓋板1点、栓1点、蔓巻把手1点がある。

43は剝物皿である。非常に小さく、復元しても直径8cm前後である。板目材の周縁を粗く円形に加工し、中を浅く削り窪める。44は白木作りの挽物皿である。高台はなく、円形の板目材の縁を残し、中を一段薄く加工している。底部外面に刃物傷があり、俎としても利用している。45は黒漆塗りの挽物皿、高台はない。非常に薄く厚さ0.18cm、漆の塗りも丁寧である。同一個体の破片が、LG-77区から1点出土。このほかに漆塗り容器のものと思われる小片が3点出土している。

曲物は、円形、楕円形の二種類が出土している。いずれも側板と分離し、身か蓋の区別ができない。『集成図録』によると古代においては側板の内側に底板を置き、側面側から木釘を打ち込む釘結合曲物が身、円板の上にひとまわり小さい側板をあて、樺皮で結合するものが蓋になることが多いとしている。したがって本報告では便宜上結合方法によって底・蓋の区別をする。ただし、楕円形の場合蓋板になる可能性が少ないためすべて底板とする。側板もケビキなどで辛うじて判断できるものが約40点出土しているが、小片で接合できず、正確に何個体分あるかはわからない。また、側板をとじ合わせた樺皮紐も10点確認している。46～54は円形に復元できるもの

である。46は小型曲物の底板である。一部に焦げた痕跡が残る。47～53には板の側面側からの釘穴があり、釘結合曲物と考える。50には木釘が刺さったまま残存している。53、54は側面部の残りが少なく釘孔を確認できないが、板上下面に側板のアタリがないため、釘結合であった可能性が高い。54には両面に墨で絵画が描かれ、中央部分に補修孔と思われる小孔が二つ縦方向に並ぶ。55～65は、楕円形になるものである。55は板周縁を一段低く削りこんでおり、樺皮で結合した樺皮結合曲物Aと考えられる。それ以外は樺皮紐を通した結合孔が認められるが、側板を据える段を巡らせていないので、樺皮結合曲物Bに分類できる。これらのうち、56・57・63～65は板を直線的に切断しており、別の用途に転用している可能性がある。57・59・63～65には樺皮紐が残る。66は小型で中央が少し凹み小円孔が縦方向に二つ並ぶ。紐状の把手をつけた蓋板と考える。67は円柱状に加工した材の一端を轆轤引きして、一段細く仕上げ、他端の稜を除き斜めに整形している。形態的には、栓に分類できる。非常に精緻な造りではあるが、直径1.2cmとかなり小さく実用には向かない。ミニチュアの土製品に使用したものであろうか。68は蔓巻き把手。マタタビ属蔓科の植物の茎を三本ねじり束ね、上から板を薄く削った紐をコイル状に巻き付けている。両端は欠損。

D. 食事具 (表24-1・2・図65・66・Ph17)

剝物匙2点、匙形木器13点、杓子形木器6点、箸54点、箸状木製品約6,000点、転用俎1点がある。

69・70は白木作りの剝物匙である。いずれも身幅が1.5cm程度の小型品で、身の部分が受皿状に丁寧な剝ら

表24-1 SD01古木屑層出土木製品一覧(食事具1)

No.	種類	品目	長さ (cm)	幅 (cm)		厚さ (cm)		材質	備考	写真番号	地区
				身	柄	身	柄				
69	食事具	剝物匙	11.6	1.5	0.5	0.3	0.3	ヒノキ	ほぼ完形	Ph.17-69	LG-78
70	食事具	剝物匙	(7.1)	1.4	0.5	0.2	0.3	ヒノキ	身の先端・柄は欠損	Ph.17-70	LG-78
71	食事具	匙形木器	(4.9)	1.1	0.6	0.3	0.3	スギ	身の先端焦げ・柄は欠損	Ph.17-71	LG-78
72	食事具	匙形木器	(6.0)	1.6	0.8	0.3	0.3	ヒノキ	柄は欠損	Ph.17-72	LF-79
73	食事具	匙形木器	(4.4)	1.6	0.8	0.2	0.2	ヒノキ	柄は欠損	Ph.17-73	LF-79
74	食事具	匙形木器	(4.5)	1.3	0.5	0.2	0.3	スギ	柄の上半欠損	Ph.17-74	LG-78
75	食事具	匙形木器	(8.4)	(1.2)	0.3	0.6	0.6	ヒノキ	身と柄の上半が欠損	Ph.17-75	LG-78
76	食事具	匙形木器	(10.5)	1.8	0.6	0.1	0.3	スギ		Ph.17-76	LG-78
77	食事具	匙形木器	16.8	2.1	1.3	0.4	0.4	ヒノキ	墨書あり	Ph.17-77	LG-78
78	食事具	匙形木器	(4.8)	(1.6)	(0.7)	0.3	0.3	ヒノキ	身の半分と柄は欠損	Ph.17-78	LG-78
79	食事具	匙形木器	(7.1)	1.4	0.5	0.3	0.5	スギ	柄は欠損	Ph.17-79	LG-78
80	食事具	匙形木器	(11.0)	3.0	1.1	0.8	0.7	ヒノキ	柄の上半は欠損	Ph.17-80	LG-78
81	食事具	匙形木器	(10.4)	2.5	0.9	0.4	0.4	スギ		Ph.17-81	LF-78
82	食事具	匙形木器	10.9	2.2	1.3	0.2	0.4	ヒノキ	柄は欠損	Ph.17-82	LG-78
83	食事具	匙形木器	23.3	1.9	0.9	0.5	0.4	スギ	ほぼ完形	Ph.17-83	LF-73
84	食事具	匙形木器	25.1	2.0	-	0.5	0.5	スギ	身と柄の境が不明瞭	Ph.17-84	LF-79
85	食事具	杓子形木器	(21.2)	3.6	2.1	0.8	0.8	モミ属	柄の先端欠損	Ph.17-85	LG-71
86	食事具	杓子形木器	(10.3)	(1.9)	(1.0)	0.5	0.3	ヒノキ科		Ph.17-86	LG-78
87	食事具	杓子形木器	(9.6)	3.6	1.3	0.3	0.3	ヒノキ	柄が焦げて欠損	Ph.17-87	LF-78
88	食事具	杓子形木器	(12.2)	(2.9)	(1.2)	0.3	0.3	ヒノキ	身の上端付近に小孔二箇所	Ph.17-88	LG-78
89	食事具	杓子形木器	17.6	(2.4)	(0.9)	0.4	0.3	ヒノキ	縦半分欠損	Ph.17-89	LG-78
90	食事具	杓子形木器	(26.8)	3.8	2.1	0.6	0.6	スギ	焦げあり	Ph.17-90	LG-77

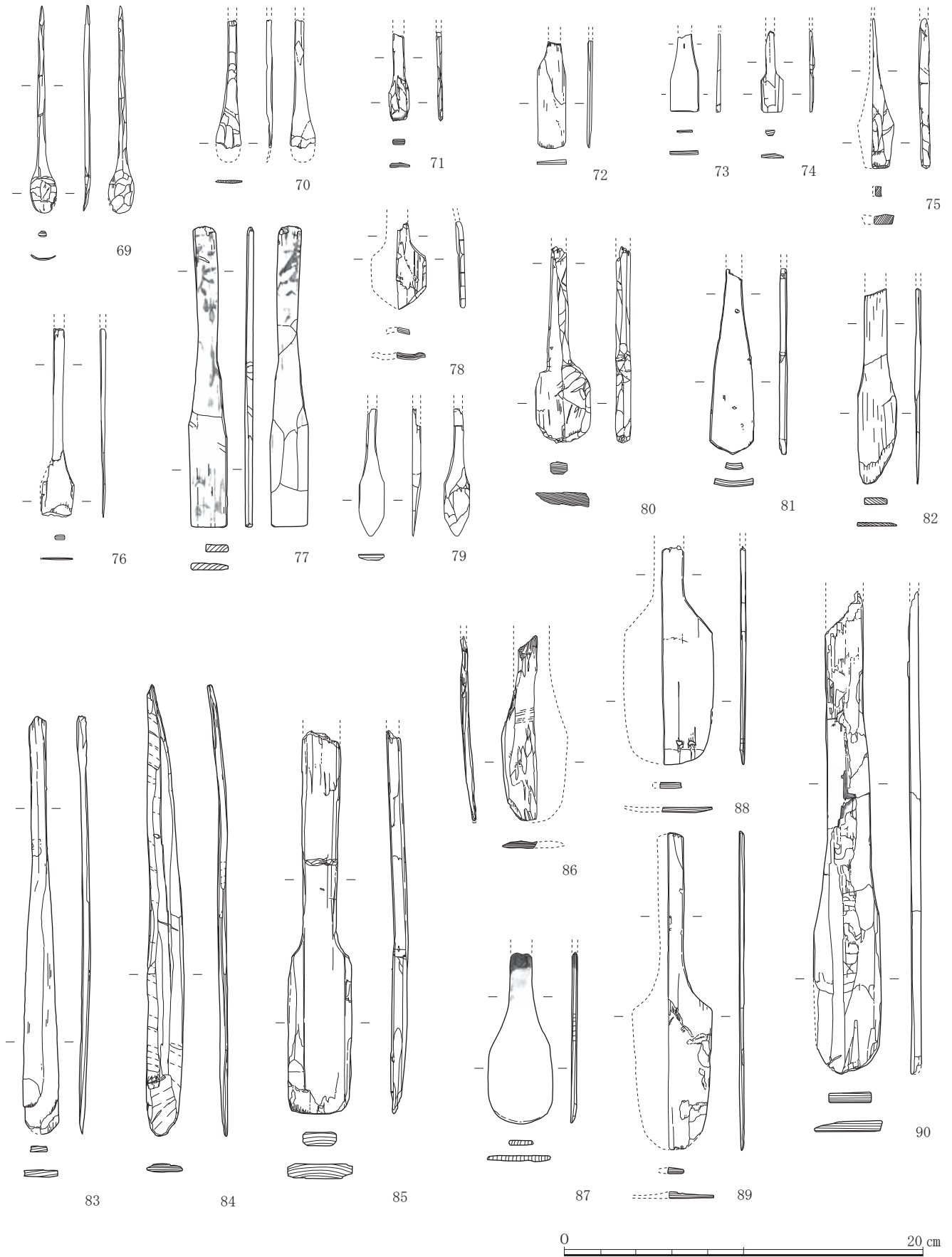


图65 SD01古木屑層出土木製品実測図（食器具1）（1/3）

表24-2 SD01古木屑層出土木製品一覧（食事具2）

No.	種類	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	備考	写真番号	地区
91	食事具	箸状木製品	31.0	0.9	0.7	スギ	未製品	Ph.17-91	LG-78
92	食事具	箸状木製品	26.4	0.8	0.6	スギ	未製品	Ph.17-92	LG-71
93	食事具	箸状木製品	26.8	0.7	0.3	スギ	未製品	Ph.17-93	LF-78
94	食事具	箸	24.3	径0.7		ヒノキ	完形	Ph.17-94	LG-78
95	食事具	箸	23.6	径0.6		ヒノキ	完形	Ph.17-95	LG-78
96	食事具	箸	23.4	径0.7		ヒノキ	完形	Ph.17-96	LG-78
97	食事具	箸	23.1	径0.5		ヒノキ	完形	Ph.17-97	LG-78
98	食事具	箸	21.8	径0.7		ヒノキ	完形	Ph.17-98	LG-78
99	食事具	箸	21.0	径0.5		スギ	完形	Ph.17-99	LG-78
100	食事具	箸	(21.0)	径0.7		ヒノキ	先端欠損	Ph.17-100	LG-78
101	食事具	箸	(20.7)	径0.5		スギ	先端欠損	Ph.17-101	LG-78
102	食事具	箸	20.2	径0.6		ヒノキ	完形	Ph.17-102	LG-78
103	食事具	箸	(19.7)	径0.5		ヒノキ	先端欠損	Ph.17-103	LG-78
104	食事具	転用俎	13.3	8.7	0.7	ヒノキ	容器の蓋板を転用。焦げの痕跡	Ph.17-104	LG-78

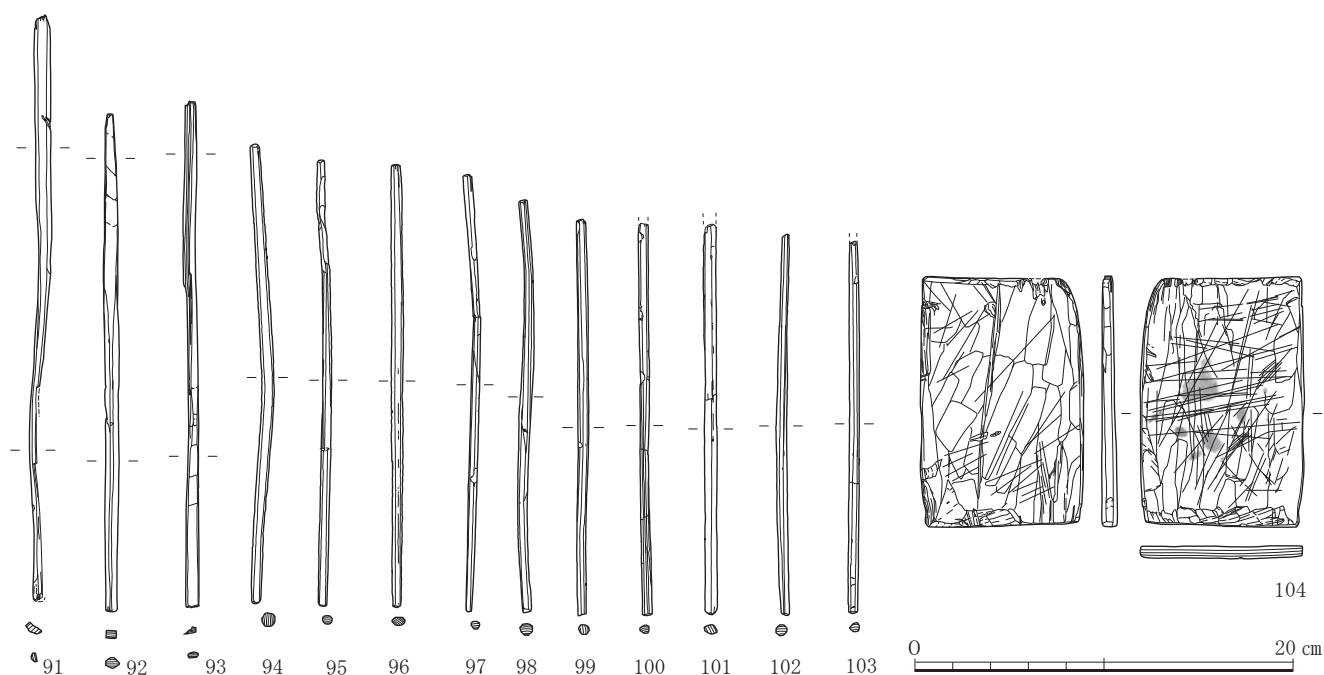


図66 SD01古木屑層出土木製品実測図（食事具2）（1/4）

れ、身に対して柄は水平につくものである。69は身の側面が一部欠損するものの、ほぼ完形である。柄は断面が円形になるように先端に向かって細く削り、先を尖らせている。70は両端欠損しており、69と比べて身の削りが浅く、身と柄の区別が明瞭でない。柄は扁平である。

71～84は匙形木器である。身の形状からA～Cの三型式に分類されている。

71～77は身の先端が直線的なA型式である。身は先端を若干薄く削るものがあるが、基本的に片面は平坦で、他面は中央が少し甲高になるように両側を削る。75は身中央部が、少し削り込まれている。77には墨書があり、木簡を転用してつくられたものである。78・80は身の先端が半円形になるB型式。A型式のものより、大きく、厚みがある。78は、柄をほとんど欠き、身も半分しか残

らない。先端は木葉状にやや尖る。中央を少し削り込み受け皿状に加工する。80は身が隅丸方形に整えられる。表面は平滑で他面は斜めに削る。79・81～84は身幅が細長く、先端が半円形になるC型式に分類される。79・82は身の側縁から頸部の屈曲点でわずかに稜角をつけるが、他は明確な頸部をもたず、身から柄に漸次的に移行する。81は身の内面をわずかに受け皿状に削り、外面も内面の曲面にあわせて削る。82～84は片刃状で箸として使用された可能性もある。

85～90は杓子形木器である。85は先端を直線的に加工するA型式、それ以外はすべて先端が半円形のB型式である。いずれも身の先端は片刃状に削られている。87は柄が炭化して欠損している。88の先端には補修孔の可能性のある孔が横に二つ並んで穿たれている。

91～93は箸状木製品としたが、おそらく箸の未製品と考える。板材を角棒状に割り裂き、稜を落とし丸棒状に仕上げている。91は一部を削りすぎて、極端に細くなり、製作を放棄したものであろうか。92は下半の先端を細め丁寧に加工しているが、上半は未調整。93は中央部の稜を落とししかけているが、両端は未加工である。木屑層からは、細めに割裂いた角材の稜のみ落して加工する箸状木製品が約6,000点出土している。また、板材を割裂いただけの角棒状のものも約14,000点出土している。94～103のようにひととおり加工が終わっているものは、箸と考える。図示した94～103は、100・101・103の一部を欠損するものの、他はほぼ完形である。削りは粗雑で、両端をやや細めに削り込んでいる。上下端を断ち切るものと、斜めに削り出すものがある。

棒状のものは、籌木である可能性も指摘されるが、籌木の場合は稜を落とさないことが多い。また土壌分析の結果、寄生虫卵などは少量しかみつかっていないため、積極的に籌木であるといえない。大量の食器類とともに廃棄されていることを考えあわせると箸と考えるのが妥当であると考えられる。また、木屑のなかには、棒状に仕上げるときに出る細長く薄いものが大量に認められ、箸の製作時に出る削屑と一緒に廃棄されている。

箸や箸状木製品に用いられる木材のほとんどがヒノキであり、若干スギが混じる。出土した箸は、短く折れているものが多く、平均的な長さは8.50cm、直径0.49cmである。そのうち、両端が折れていない完形の箸は54点で、その平均長は20.60cm、直径は0.58cmである。『集成図録』で平城宮出土の箸の長さの平均が20～21cmとしているので、妥当な値であるといえる。

99は転用俎である。俎専用につくられた脚のつくタイプのものではなく、本来は蓋板などに利用されていたものが破損し俎として転用されたと考えられる。薄板の両

面に無数の刃物傷が残る。板の上下端は材の稜を両面から削り落とし、直線的に仕上げている。片側縁は角を落とし、緩い曲線状に仕上げている。もう一方の側縁は粗い削りで仕上げている。曲物の底板にも刃物傷が残るものは見うけられたが、104は刃物傷が多く確実に俎として利用されたと考えられるため、ここで取り上げた。

E. 文房具 (表25・図67・Ph.18)

物指1点、付札2点、文書軸12点がある。

105は物指である。スギの板目材を用い、表面の中央を残して両側を削り、断面がかまぼこ状になるように整形する。図の表面からみて左側縁側には上半に分刻みの28本の線刻が確認できる。左側縁を斜めに削り落としていたため正面から目盛が見える。目盛の間隔にはばらつきがあり、最狭値が1.5mm、一番下が最も間隔が広く4mmある。10目盛りごとに一寸刻みの線刻を表面まで延長しているが、三本目は8目盛めを延長し、その線刻は右下がりである。一番上の線刻は比較的的水平ではあるが、二番目はやや右上がりと同様ではない。表面の寸刻線の間隔は上から2.4cm、2.25cm、2.2cmである。

裏面は下半の側縁付近を削るが、表面に比べると平らである。上部に二列「僧卍一」「口廿九」の墨書がある。右側縁にも左側縁と同様に分刻線があり、線刻は41本である。目盛の間隔は最狭値1.8mm、最広値4.5mmである。上から10目盛りごとに裏面まで線刻を延長し、寸刻線を引く。裏面の寸刻線の間隔は上から2.5cm、3.05cm、2.85cm、2.65cmと均一ではなく、いずれも右下がりりで粗雑な線刻である。この物指は表面左側縁の目盛平均値が2.4mm、反対側縁で2.76mmである。いずれもこれまで平城宮跡出土資料から得られた平均値2.94～2.97mm^{文79)}よりさらに短く、その基準が明らかでない。

106・107は付札である。106は上下端を圭頭状に加工し、両側縁からV字の切目を入れている。「葛野秦浄足小」

表25 SD01古木屑層出土木製品一覧 (文房具)

No.	種類	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	備考	写真番号	地区
105	文房具	物指	21.0	2.4	0.7	スギ	史料番号 033	Ph.18-105	LG-78
106	文房具	付札	10.6	1.1	0.2	ヒノキ	史料番号 066	Ph.18-106	LG-78
107	文房具	付札	8.4	1.3	0.4	未同定	史料番号 067	Ph.18-107	LF-79
108	文房具	文書軸	(3.5)	頭部 1.0	軸部径 0.5	ヒノキ		Ph.18-108	LG-78
109	文房具	文書軸	(3.7)	頭部 1.0	軸部径 0.5	ヒノキ属		Ph.18-109	LG-78
110	文房具	文書軸	(6.0)	頭部 1.5	軸部径 0.7	スギ		Ph.18-110	LG-78
111	文房具	文書軸	(5.9)	頭部 1.1	軸部径 0.6	未同定		Ph.18-111	LG-78
112	文房具	文書軸	(7.6)	頭部 1.1	軸部径 0.7	スギ		Ph.18-112	LF-79
113	文房具	文書軸	(10.9)	頭部 1.0	軸部径 0.7	ヒノキ		Ph.18-113	LG-78
114	文房具	文書軸	(7.7)	頭部 1.0	軸部径 0.8	スギ		Ph.18-114	LG-78
115	文房具	文書軸	(7.9)	頭部 1.2	軸部径 0.7	ヒノキ		Ph.18-115	LG-78
116	文房具	文書軸	(8.7)	頭部 1.2	軸部径 0.7	スギ		Ph.18-116	LG-78
117	文房具	文書軸	(7.7)	頭部 1.2	軸部径 0.9	スギ		Ph.18-117	LG-78
118	文房具	文書軸	(4.3)	頭部 1.0	軸部径 0.6	スギ		Ph.18-118	LG-78
119	文房具	文書軸	(23.6)	頭部 1.3	軸部径 0.8	スギ		Ph.18-119	LG-78

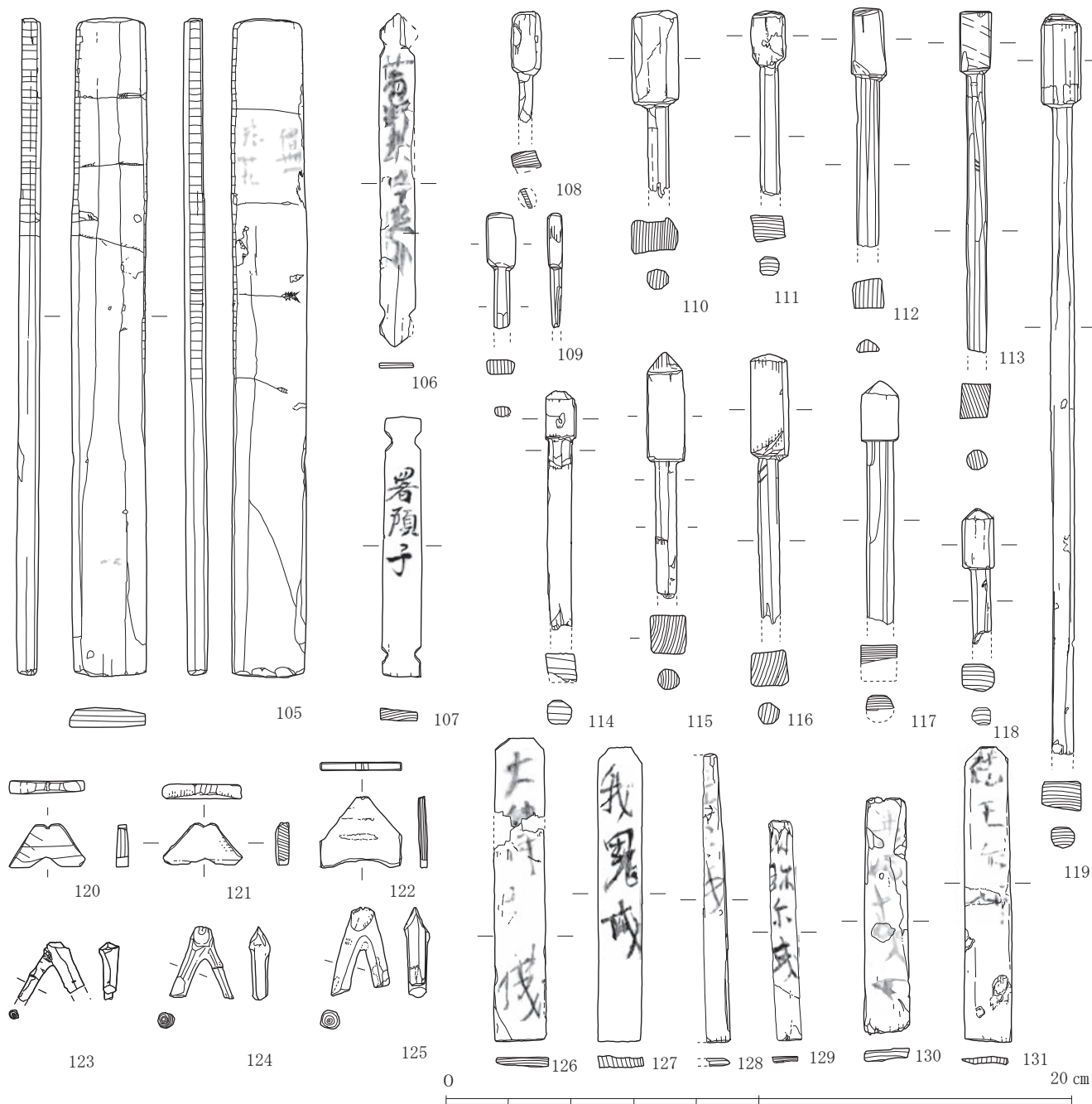


図67 SD01古木屑層出土木製品実測図（文房具・遊戯具）（1/2）

表26 SD01古木屑層出土木製品一覧（遊戯具）

No.	種類	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	備考	写真番号	地区
120	遊戯具	琴柱	1.4	2.4	0.4	スギ	完形	Ph.18-120	不明
121	遊戯具	琴柱	1.4	2.5	0.5	未同定	完形	Ph.18-121	LF-73
122	遊戯具	琴柱	2.3	2.6	0.3	スギ	完形	Ph.18-122	LF-78
123	遊戯具	(和琴) 琴柱	(2.0)	(2.2)	0.6	広葉樹	樹皮残る	Ph.18-123	LG-78
124	遊戯具	(和琴) 琴柱	2.3	2.1	0.5	シイ属-コナラ属 アカガシ亜属	樹皮残る	Ph.18-124	LG-78
125	遊戯具	(和琴) 琴柱	2.9	1.9	0.6	ツツジ属	樹皮残る	Ph.18-125	LG-78
126	遊戯具	籤	9.6	1.6	0.3	ヒノキ	史料番号 061	木簡図版 25-061	LG-78
127	遊戯具	籤	9.5	1.4	0.4	ヒノキ	史料番号 065	木簡図版 26-065	LF-78
128	遊戯具	籤	9.3	(0.8)	0.2	ヒノキ	史料番号 064	木簡図版 26-064	LG-78
129	遊戯具	籤	7.1	(0.8)	0.2	ヒノキ	史料番号 063	木簡図版 25-063	LF-77
130	遊戯具	籤	7.6	1.5	0.4	ヒノキ	史料番号 062	木簡図版 25-062	LF-77
131	遊戯具	籤	9.5	1.5	0.3	ヒノキ	史料番号 060	木簡図版 25-060	LG-78

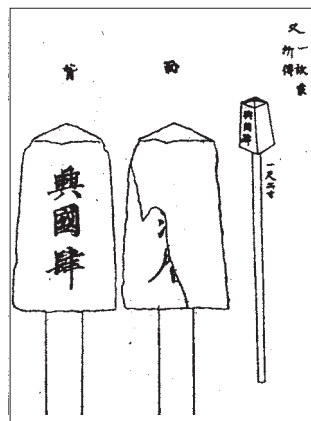


図68 参考：一故家所傳題籤軸
(藤貞幹『好古小録』)

の墨書がある。107は上下端を方形にし、両側縁からV字の切目を入れている。ムカゴを意味する「署預子」の墨書がある。図示してないが、下端が柳葉状に尖り「椎子」と墨書のある木簡(史料番号068)も付札の可能性もある。

108~119は棒状の先端に加工があるものである。服飾具で先端に加工のある棒

状木製品を留針としたが、先端部に平坦面があって、字が書けるものは文書軸の可能性もあるため文房具として別に扱った。ただし、墨書の残っているものは1点もない。文書軸とは本来、棒状の先端に方形若しくは、圭頭状の扁平な頭部を持つ所謂題籤軸とよばれるものと、頭部を持たない棒状のものがある。卷子状に巻いた文書の軸とし、文書の題名などを記入し、外からでもその内容がわかるインデックスの役目をしている。字を書く部分の題籤部は2~3cm程度の幅を有する例が多いが、今回出土したものは1cm前後と幅が狭い。藤貞幹の『好古小録』に一故家所傳として長さ一尺二寸の題籤軸が掲載されている(図68)。台角柱状の先端が尖る形態で「興國肆」の墨書がある。年紀はないが形態的に類似する。108~111は頭部が扁平、112~113は直方体である。114は直方体の頭部の上を台形状に、115~119は先端を四角錐に整形している。

F. 遊戯具(表26・図67・Ph.18)

琴柱6点、籤5点がある。

琴柱は等脚台形の両斜辺の途中から垂直に断ち落とした六角形のA型式のものと、等脚台形の平面形態のB型式のものがある。122はA型式の琴柱。他の2点と比較して高さがあるが薄い。上辺中央に弦受けの溝をつけ、下辺は緩い曲線を描くように少し削り込む。120・121はともにB型式の琴柱である。上辺中央に弦受けの溝を切り、底辺は三角形の切り込みを入れる。120・121は形態が似るため、同一の琴に使用されていたものの可能性がある。123~125は二股に分かれた自然木の枝を切り、二股の根本を先端が尖るように両面にむかって斜めに切り落とし弦受けの溝を切っている。脚は接地面に対して平行になるように斜めに切り落とされる。頂点以外は加工せず。樹皮がついた状態で使用。おそらく和琴の琴柱であると考えられる。124・125は弦受けの溝が明確であるが、

123は弦受けの溝位置が中央からずれ、切れ込みが不明瞭である。

126~131は墨書のある板材で、その墨書の内容から籤引の引札に使用されたものと考えられる。長さは9.3~9.5cm程度のもので7cm前後の二種類に分けられ、樹種はすべてヒノキである。126・127・131は方形の板材の上部の隅切りをしており、同じ形態である。127・131はおそらく同じ材から割取られたものであると考えられる。墨書の釈文、内容の解説は文字資料篇12・29・30頁を参照。

G. 祭祀具(表27・図69・Ph.18)

人形6点、鳥形4点、斎串4点がある。

人形は立体人形、正面全身人形、横向全身人形の三種類が出土している。133は立体人形である。扁平な板材の側縁を加工し、横向きの顔を表現している。頭に被り物を表現し、側面の刻み目で目・鼻・口と反対側縁の刻み目で頭髪を表現している。目の刻み目の部分には、側面側に墨書で丸い二つの眼を表現している。頸部で欠損しており、胴部の表現は不明である。134~137は正面全身人形である。134は頸部で欠損するため、顔形の可能性があるが、頸部のラインが外向きに延びていることから、全身人形の一部と判断した。薄板を被り物、耳、あごから頸のラインをつけるように加工し、墨書で被り物、目、鼻、口、顎を表現している。裏面全体に薄い墨痕が認められる。

135・136は、ほぼ同じ寸法の人形である。一端を圭頭形に整え、頸部に両側縁から切り込みを入れて頭部と肩部の区別をしている。136は両側縁に切り欠きを入れて両腕を表現するA型式、135は手の表現がないためB型式になる。いずれも下端部を長方形に切り取り、残った部分の先端を斜めに切り落として脚を表現している。

132は横向き全身人形である。頭部先端は載頭方錘形に加工し、斜辺の稜はそぎ落とされている。横顔の額に当たる部分の両面に横線を刻み、被り物を表現している。鼻は高く削り出し、口は開くようにV字に切り込まれている。口から頸へは緩やかに続き、胴体には手足の表現がない。下端は細くすぼまり、端部を欠損する。

138~141はいずれも鳥形木製品と考えられる。138・139は具体的な嘴や羽根などは表現せず、鳥の形を抽象的に表現している。139は断面三角形の薄い板材を使用しているが、138は断面六角形で立体的に削られている。140は薄板を鳥形に削り、片面に線刻で目と、羽毛を表現している。尻尾の先端を割裂き窪んだ部分を墨書で黒く塗っている。裏面は尻尾の先端にわずかに線刻が認められるが、割裂いたままで未調整である。141は鶏形に

表27 SD01古木屑層出土木製品一覧(祭祀具)

No.	種類	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	備考	写真番号	地区
132	祭祀具	横向全身人形	(19.6)	頭部 2.2 身部 1.0	0.3	ヒノキ	横向きで鼻、開いた口を表現	Ph.18-132	LF-79
133	祭祀具	横向立体人形	(8.3)	1.7	顔部 1.0 頸部 (0.8)	ヒノキ	側面に墨書で目を表現	Ph.18-133	LG-78
134	祭祀具	正面全身人形	(6.4)	2.4	0.3	スギ	墨書で顔を表現	Ph.18-134	LF-78
135	祭祀具	正面全身人形	9.7	1.5	0.3	ヒノキ	片足折れ	Ph.18-135	LF-78
136	祭祀具	正面全身人形	9.6	1.75	0.3	ヒノキ		Ph.18-136	LF-78
137	祭祀具	正面全身人形	(7.1)	(1.5)	0.3	スギ		Ph.18-137	LG-78
138	祭祀具	鳥形木製品	0.8	(4.4)	0.7	スギ		Ph.18-138	LG-79
139	祭祀具	鳥形木製品	0.7	(6.2)	0.3	ヒノキ		Ph.18-139	LG-78
140	祭祀具	鳥形木製品	2.1	9.4	0.3	スギ	線刻で目・羽毛を表現	Ph.18-140	LF-78
141	祭祀具	鶏形木製品	4.7	5.8	0.6	ヒノキ		Ph.18-141	LG-78
142	祭祀具	斎串	(4.7)	1.2	0.1	未同定		Ph.18-142	LG-78
143	祭祀具	斎串	(6.3)	1.6	0.3	ヒノキ		Ph.18-143	LG-78
144	祭祀具	斎串	39.5	2.5	0.5	ヒノキ	大型	Ph.18-144	LG-73

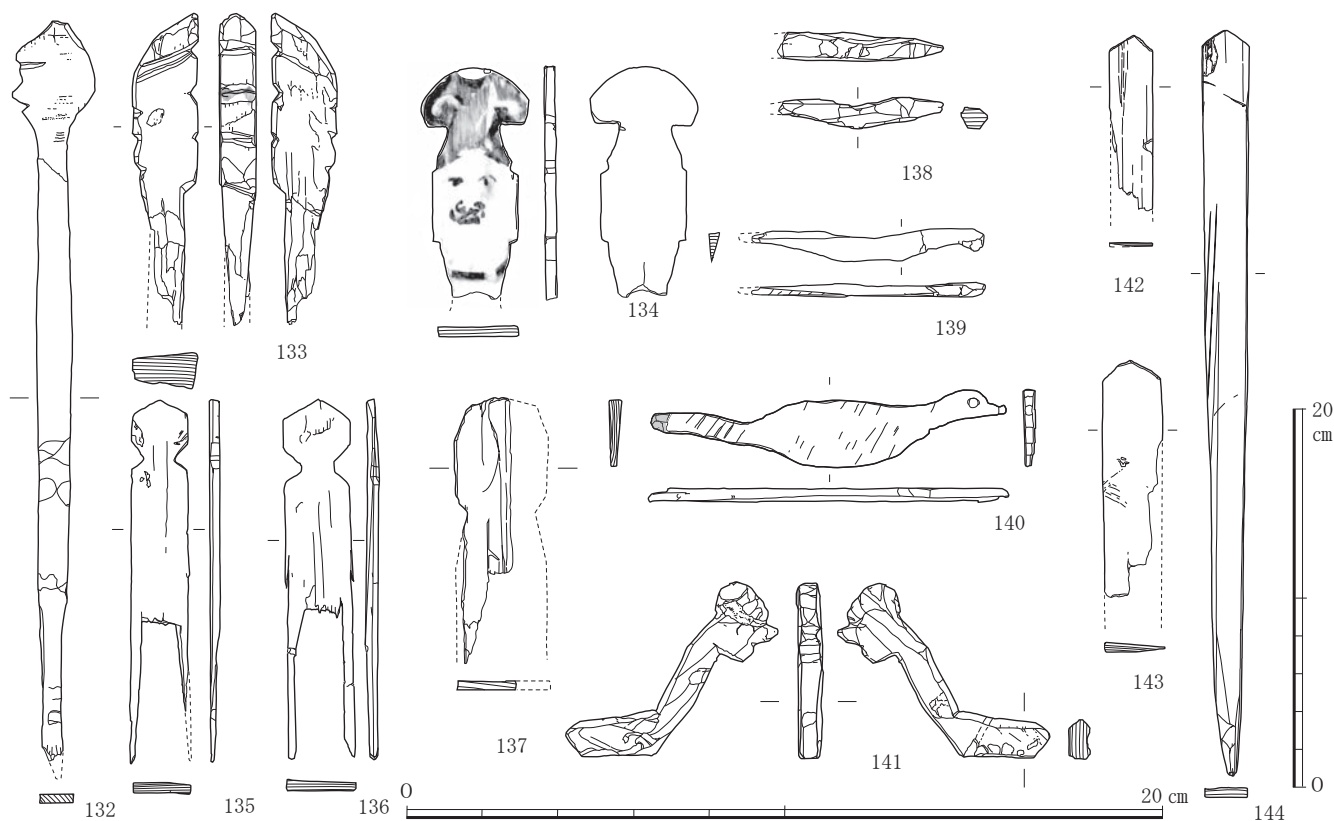


図69 SD01古木屑層出土木製品実測図(祭祀具)(132~143:1/2、144:1/4)

近いものであると考える。嘴と鶏冠を表現し尾の部分の尖らせている。

142~144は斎串である。142・143は上端を圭頭状に尖がらせるが、下半が欠損するためB型式かC型式か判断できない。上端木口や側縁に切れ込みがないI式である。144は、長さ39.5cmの大型品である。上端は圭頭状に加工し、下端は次第に細くなり剣先状に尖る。木口・側面に切れ込みがないC I式になる。

H. 調度(表28・図70・Ph.19)

近年の木製品の報告では、『集成図録』で部材に分類されていたもののうち、箱を調度として別扱いする傾向

にあり、それにならい別の項目を立てた。箱部材には側板20点がある。削り抜き式のものはなく、すべて組み合わせ式の箱である。なお、側板に墨書のあるもの(145・148・155)の文字の釈文とその解釈については、一覧に史料番号を示すので文字資料篇を参照。

145~164は組み合わせ式の箱側板である。組み合わせ方には以下の三種類の方法が用いられている^{註3)}。①長方形の板材の短辺側に舌状の柄を造り出した部材と、受けるための段欠きを入れた材を組み合わせるもので三枚組接ぎと呼ばれる方法。厳密には柄組が材の三分になるが、今回の出土品はほとんどが柄の部分の幅広になって

いる。柄部分、もしくは切り欠いた部分の上下の突出部を木釘で留めることが多い。②板材の上端と下端を等しく切り欠いて、木釘留めするもので、相欠きもしくは二枚組接ぎと呼ばれるもの。③柄などはつくり出さず板の側面に他の板の木口を突きつけて接合し木釘などで留める打付接ぎと呼ばれるものである。

157～159は②、152・162が③でその他は①である。

145は材の両小口面に柄をつくり出す側板。材は外面がやや甲高気味になり墨書がある。両端の柄には外面側から木釘が打たれ、その上下の切り欠き部分は小口面側から木釘が打たれている。長辺下端中央部には側板を留めるには浅い深さ0.2cm程度の孔が三箇所認められる。146は中央に長方形の透孔と、左右端近くで中央からやや上下にずれる位置に円形の透孔をあけている。柄を受ける段欠きの上下には二箇所ずつ木釘が打たれている。長辺下面中央は四角く切り欠かれ、三つの木釘穴が並んでいる。底板の柄を受け木釘で留めたと考えられる。147は両端近くの左右対称の位置に円形の透孔をあけている。内面には墨書が認められるが判読不能。長辺下端中央部には深さ2mm程度の浅い切り欠きがあり、四つの木釘孔が並ぶ。左右の切り欠きの上下には木釘が打ち込まれている。右下に二個の釘孔があるが、他の三箇所は木釘が一本ずつで、いずれにも木釘が残存する。148は上端中央部が鋭い刃物で鋸歯状に切り刻まれ、切除されている。右上部は割れ口から、折れて破損していると考えられる。円形の透孔が左右対称の位置の一つずつあけられている。両面に文字と絵画の墨書がある。柄を受ける左右の段欠きの部分には木口方向から二本ずつ木釘が打たれている。長辺下端は中央部以外は欠損しているが、

中央部は破損せず、下方向からの木釘孔が三箇所に残る。146・147の例と同様に下辺中央部に切り欠きを入れ、底板と結合し、木釘で留めたと考えられる。

149は段欠きのある材である。左右の切り欠き部分には木口側から二箇所ずつ木釘が打たれている。底板との結合痕跡は認められない。

150は柄をもつ材。左右の柄に一箇所ずつ木釘を打込み、上下の切り込み部分にも木口方向から各一箇所木釘孔がある。底板との結合は中央部ではなく両端近くに各一箇所木釘孔が認められ、右側の木釘は下面から側面側に抜けている。

151は両端に段欠きをもつ材。長辺下端中央部に底板を留める木釘孔が一箇所ある。隅丸方形の透孔が左右両端近くのやや上よりにあけられている。接合部分に木釘孔はない。152は柄組せず、板を木釘で留めるタイプのもので左右の木口方向から上下に並んで二本木釘が打ち込まれている。円形の透孔が両端の上部付近に各一箇所あけられている。透孔の周りには円形の何かが当たった痕跡が残る。153は木釘痕跡がなく、上下がわかりにくい。方形と円形の透孔があり、方形透孔が中央下方、円形透孔が両端上方にある傾向を認めるので、図示している面が外面になると考える。外面は中央をやや甲高に削る。154は柄を造り出す材。片側縁を欠損し上下関係が不明。円形の透孔が一箇所確認でき、柄部分に木釘を一本打ち込んでいる。155は木簡を転用して箱側板にしたもの。左右両端に柄をつくり出すが、木釘は使用されていない。両面に墨書されているが、墨は片面にしか残らず、もう片面は墨書があった部分が立体的に浮き出た状態である。墨で表面が保護された部分以外が、風化して薄くなった

表28 SD01古木屑層出土木製品一覧(調度)

No.	種類	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	備考	写真番号	地区
145	調度	箱側板	32.5	5.8	1.2	スギ	史料番号129	Ph.19-145	LG-78
146	調度	箱側板	31.3	5.2	0.8	スギ		Ph.19-146	LG-78
147	調度	箱側板	32.2	4.2	1.0	スギ	墨書あり	Ph.19-147	LG-78
148	調度	箱側板	33.2	(4.6)	0.8	スギ	史料番号158	Ph.19-148	LG-79
149	調度	箱側板	33.7	5.3	1.4	スギ		Ph.19-149	LG-78
150	調度	箱側板	33.6	3.9	1.0	スギ	木釘残る	Ph.19-150	LF-78
151	調度	箱側板	38.7	4.5	0.7	ヒノキ	二箇所に円孔	Ph.19-151	LF-79
152	調度	箱側板	30.9	2.7	0.7	スギ	二箇所に円孔	Ph.19-152	LG-78
153	調度	箱側板	(26.8)	3.4	1.0	スギ	円と長方形の透	Ph.19-153	LG-78
154	調度	箱側板	(25.1)	(2.6)	(0.8)	スギ	木釘一本残る	Ph.19-154	LG-78
155	調度	箱側板	24.1	3.0	0.4	スギ	史料番号156	Ph.19-155	LF-73
156	調度	箱側板	(18.2)	(1.7)	0.6	スギ	墨書あり	Ph.19-156	LG-78
157	調度	箱側板	(22.2)	3.9	1.0	スギ		Ph.19-157	LG-78
158	調度	箱側板	(16.1)	4.0	0.7	ヒノキ	木釘二本残る	Ph.19-158	LG-78
159	調度	箱側板	(16.8)	3.4	0.6	スギ	円形の透・墨書	Ph.19-159	LG-78
160	調度	箱側板	(15.9)	(4.0)	0.6	ヒノキ	円形の透	Ph.19-160	LG-78
161	調度	箱側板	(16.0)	2.3	0.4	スギ	円形の透	Ph.19-161	LG-78
162	調度	箱側板	(12.0)	3.0	0.3	ヒノキ		Ph.19-162	LG-77
163	調度	箱側板	9.0	3.8	0.5	スギ		Ph.19-163	LF-78
164	調度	箱側板	7.7	6.0	1.2	スギ	木釘二本残る	Ph.19-164	LG-78

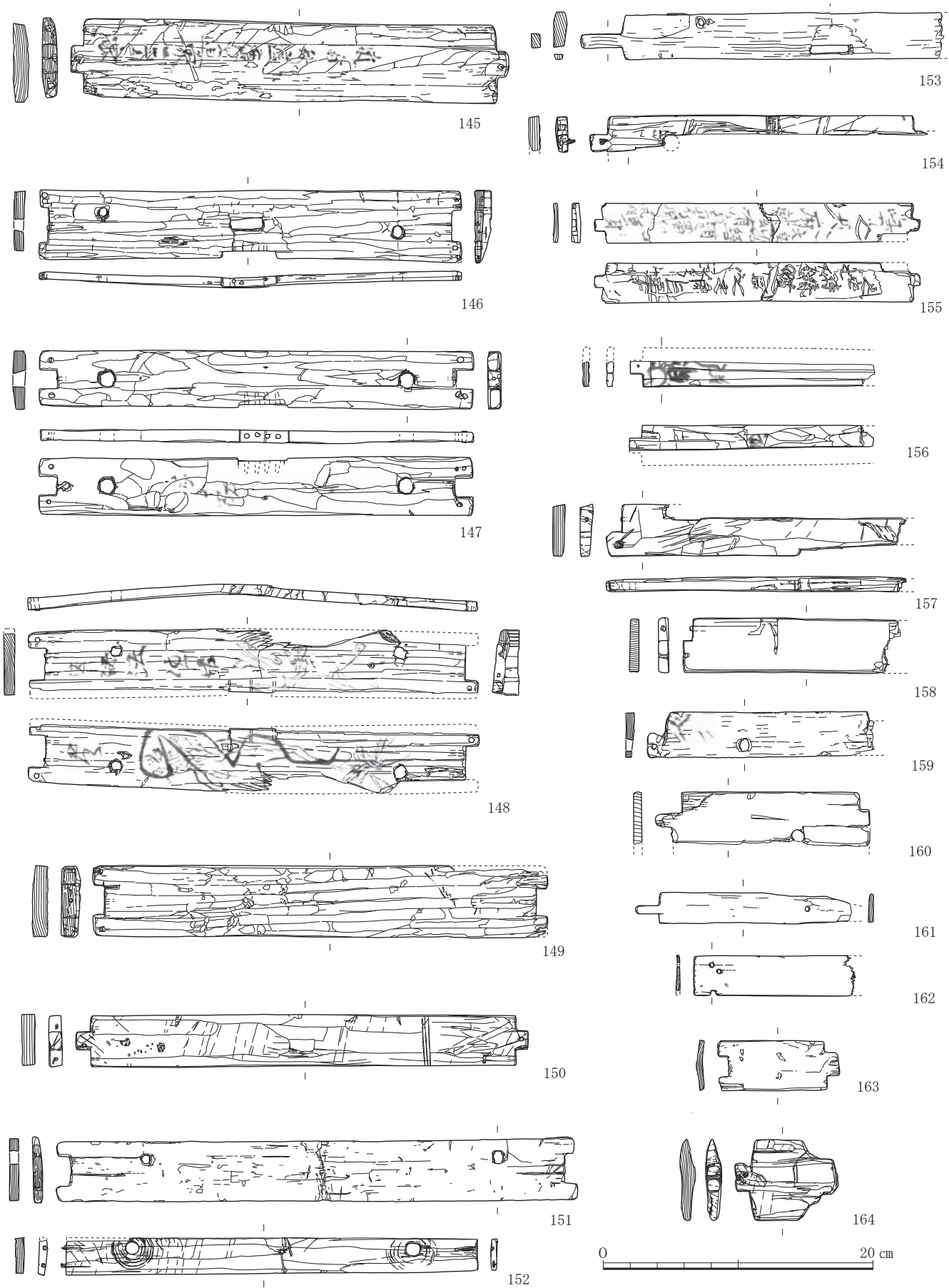


图70 SD01古木屑層出土木製品実測図（調度）（1/4）

と考えられる。切り欠き部分の角度が直角にはならず、雑な作りである。156は上端が破損するが三枚組接ぎの箱の部材である。片面は墨書、反対面に墨痕が残る。側面側からの木釘穴が一箇所ある。157は製作方法からみて、もともと箱部材であったのを、何かに転用していると考えられるものである。板材は片方の端部が破損しているものの、上下端の側縁は、板幅を狭めて削り整えられている。側板の結合は、材の端の片隅を切り落として、相欠きにつくり、側面と切り欠いた木口面から木釘を打ち込んでいる。158は相欠き接ぎで、側面側からと木口側から各一本木釘を打ち込んでいる。159は片側縁が欠損している。外面は平坦に削り調整しているが、内面は割裂いた段が残る。図の左側縁は相欠きのように上端を切り欠くが、直角ではなく斜めになる。円形の透孔が一箇所あけられている。柄部分には側面側から木釘が打ち込まれている。160は一側縁に柄をつくり出し、反対側は相欠きで結合する。相欠きの側面から木釘が打たれているが、柄のほうは釘止めしていない。中央からずれた位置で円形の透孔があけられている。161は柄と円形の透孔があることから箱側板としたが、途中で細く削り込まれているため、他に転用されている可能性がある。木釘は打ち込まれていない。162は薄板に切り欠きと木釘穴が残るもの。木釘留めの箱側板の可能性もある。163は、柄と段欠きが同一の材にあるもの。木釘は使用されていない。164は片側縁に柄をつくり出し、柄に一箇所木釘を打ち込む。反対側側縁はいびつに切り取られ、別材と結合ができる体をなしていない。他に転用された可能性がある。

I. 部材 (表29・図71・72・Ph.20)

柄をつくり出してあったり、柄孔を切った部材などを32点確認している。建築部材などの大型のものは見られず、机や台座などの小型家具の部材であると考えられるが、明確に種類がわかるものは少ない。

165～169は湾曲する棒状加工品の一端に柄をつくり出している部材である。いずれも断面の形状が、縦に長い六角形である。架のように何かを架ける調度か、あるいは、柄が上で机の支脚のようなものになる可能性がある。165は柄をつくり出してはいないが、根本部分を削り細め、何かに挿した痕跡がある。他端は欠損している。166は一方に柄をつくり出しており、もう一方の先端は次第に細くすぼまる。全体的に象牙のような形態になっている。167・169は柄が肩部と直角をなす。先端が折れている。167の上面に墨痕が残る。168は柄のつくり出しの一面が肩部と直角をなさず斜めになる。他端は蛇頭形

に加工する。175は板材に柄をつくり出し、Jの字形に加工する。曲線部分の内側は曲線を組み合わせて削り、外側には外向きの曲線を組み合わせている。軸状のものを受けるものであろうか。

170～184・186は支脚および台座の可能性のあるもの。170・171は形態的に非常に似ているが、大きさ、柄のつくり出し方が異なる。170は板の端部を半分の厚さを切り落とし、板幅より少し狭い柄をつくり出している。171は柄をつくり出すのに、板の両面を切り落とし、板幅より少し狭い柄をつくり出している。いずれにも柄部分に横方向からの釘孔が残る。172の柄の造り出しは171と同じであるが、柄部分に木釘孔ではなく、細い切り目を入れている。下端は、角をとり、丸棒状に加工している。173・174は箱部材にも似るが、板幅に対して柄幅が広いので、支脚と考えた。173には、柄部分に二箇所、174には一箇所釘孔が残る。176は形態的に、170～174と異なるが、板材の一端に柄をつくり出しているという点から、支脚に分類した。板の両面を切り欠き、板幅と同じ幅の柄をつくり出している。柄部分には円孔が穿たれている。板の両面には墨書が残る。下端は板幅をカーブをつけながら大きく削り角棒状に加工するが、欠損しており全長は不明である。177は粗い削りで丸棒状に削り、端部を猫脚形に加工している。脚底面は平坦で、脚は斜め方向につく。178は上部が欠損しているために詳細不明であるが、上面を緩い曲線状に削り先端を跳ね上げるように細くすぼめ、下端には浅い曲線的な削りを入れている。加工が凝っていて、上端が上に延びるため、調度の支脚と考えた。179～184・186は他の部材とあわせて台座として使用するものとする。179は板材の二箇所に相欠きを入れる。相欠きの上には別の板材が当たった痕跡が残っている。埋立層からも同様な部材が2点(268・269)出土した。180・181は板材の下辺に相欠きを入れる。180は上辺を緩やかな山形に加工し、181は同じく上辺を山形に加工するが、両端を跳ね上げる形状に加工する。186はハの字形の板材の上辺中央に相欠きをいれている。

182・183・184は横長の板材に装飾的な削り込みを施していることから、箱などにつく台脚であると考えられる。182の上辺は平坦で、下辺には三箇所に曲線を組み合わせた浅い削りを入れる。三箇所ある削り込みの両端部の中央部には釘孔が残る。材の両端は上辺に丸い削り込みをいれそれにあわせて下辺も上方に向かって丸く巻き込むように加工している。片端は破損、他端は炭化している。183・184は他材との組み合わせのための釘孔などは確認

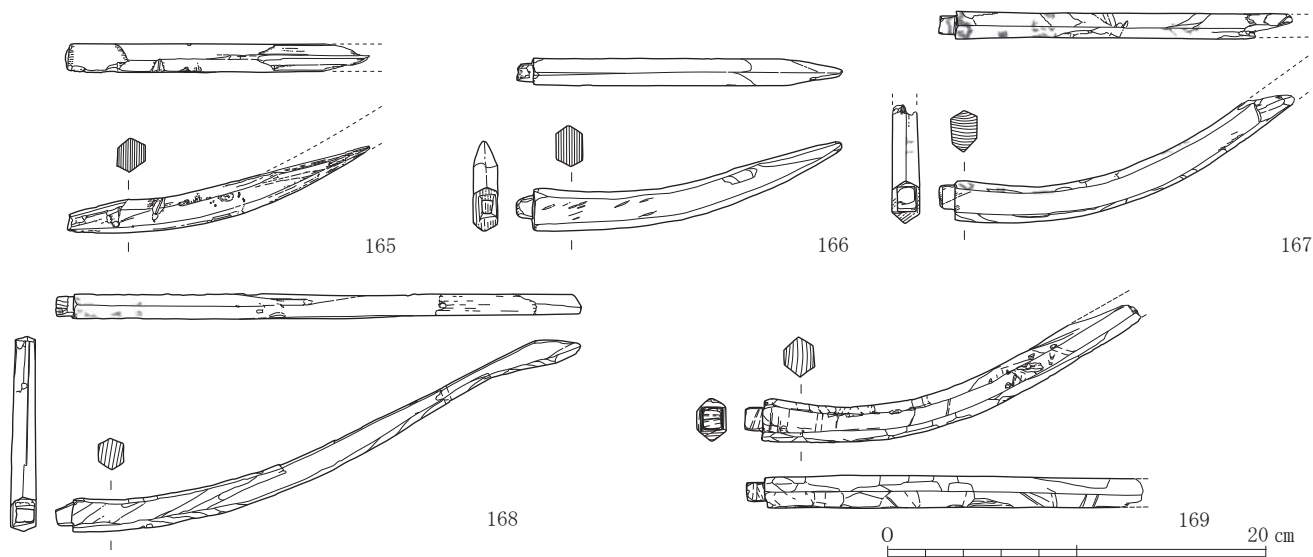


図71 SD01古木屑層出土木製品実測図(部材1)(1/4)

表29 SD01古木屑層出土木製品一覧(部材)

No.	種類	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	備考	写真番号	地区
165	部材	組物部材	(16.0)	1.8	1.5	ヒノキ	先端折れ	Ph.21-165	LG-77
166	部材	組物部材	17.2	2.3	1.4	ヒノキ	完形	Ph.21-166	LG-78
167	部材	組物部材	(18.8)	2.1	1.5	ヒノキ	先端折れ・墨痕あり	Ph.21-167	LG-78
168	部材	組物部材	27.3	1.8	1.3	ヒノキ	完形	Ph.21-168	LG-78
169	部材	組物部材	(21.0)	2.3	1.6	ヒノキ	先端折れ	Ph.21-169	LG-77
170	部材	机脚	26.5	4.4	1.0	スギ	史料番号040	Ph.21-170	LG-73
171	部材	机脚	24.5	4.0	1.9	アスナロ属		Ph.21-171	LF-77
172	部材	机脚?	25.7	3.2	2.1	スギ		Ph.21-172	LG-78
173	部材	組物部材	(17.3)	3.2	1.1	スギ		Ph.21-173	LG-78
174	部材	組物部材	(15.0)	2.8	0.9	スギ		Ph.21-174	LG-78
175	部材	組物部材	高3.9	9.4	0.7	スギ	完形	Ph.21-175	LG-78
176	部材	支脚転用	(11.0)	3.4	1.5	スギ	史料番号120	Ph.21-176	LG-78
177	部材	支脚	高(5.8)	軸径1.7	脚部径2.6	コナラ属 アカガシ亜属		Ph.21-177	LG-78
178	部材	支脚?	高(2.0)	9.5	0.8	ヒノキ		Ph.21-178	LG-78
179	部材	台座	高1.9	13.9	1.0	スギ	埋立層出土268・269に似る	Ph.21-179	LG-78
180	部材	台座	1.5	5.6	0.8	サワラ		Ph.21-180	LG-78
181	部材	台座	1.5	4.4	0.9	サワラ		Ph.21-181	LG-78
182	部材	台座	高1.6	幅13.2	0.9	ヒノキ	焦げで欠損	Ph.21-182	LF-73
183	部材	台座	高3.0	(6.8)	0.5	ヒノキ		Ph.21-183	LF-78
184	部材	台座	高1.5	(6.5)	0.5	ヒノキ		Ph.21-184	LG-79
185	部材	書几部材	(復元径15.0)	高8.6	底径11.7 (接地面の復元底径10.0)	ヒノキ	墨書あり・内面が焦げ、上面も焦げで破損。破片5点確認。	Ph.21-185	LF-78・LG-78
186	部材	台座	高3.9	10.6	1.1	スギ		Ph.21-186	LG-78
187	部材	部材(飾り)	5.5	11.6	0.5	ヒノキ	墨線あり	Ph.21-187	LG-78
188	部材	部材(飾り)	(8.9)	(4.0)	0.8	ヒノキ	半分折れ	Ph.21-188	LG-73
189	部材	部材(飾り)	(2.4)	(3.2)	1.5	ヒノキ	金箔残る	Ph.21-189	LG-79
190	部材	組物部材	(19.4)	2.7	0.9	ヒノキ		Ph.21-190	LG-78
191	部材	組物部材	26.2	2.1	細0.9	ヒノキ		Ph.21-191	LG-79
192	部材	組物部材	29.1	1.7	1.6、細0.9	スギ		Ph.21-192	LG-79
193	部材	組物部材	(29.8)	2.0	1.7	スギ		Ph.21-193	LF-78
194	部材	組物部材	(25.0)	2.2	1.1	ヒノキ属		Ph.21-194	LG-78
195	部材	組物部材	(16.2)	2.0	2.0、0.8	ヒノキ		Ph.21-195	LG-73
196	部材	組物部材	(16.4)	(1.9)	1.8、0.9	ヒノキ		Ph.21-196	LG-73

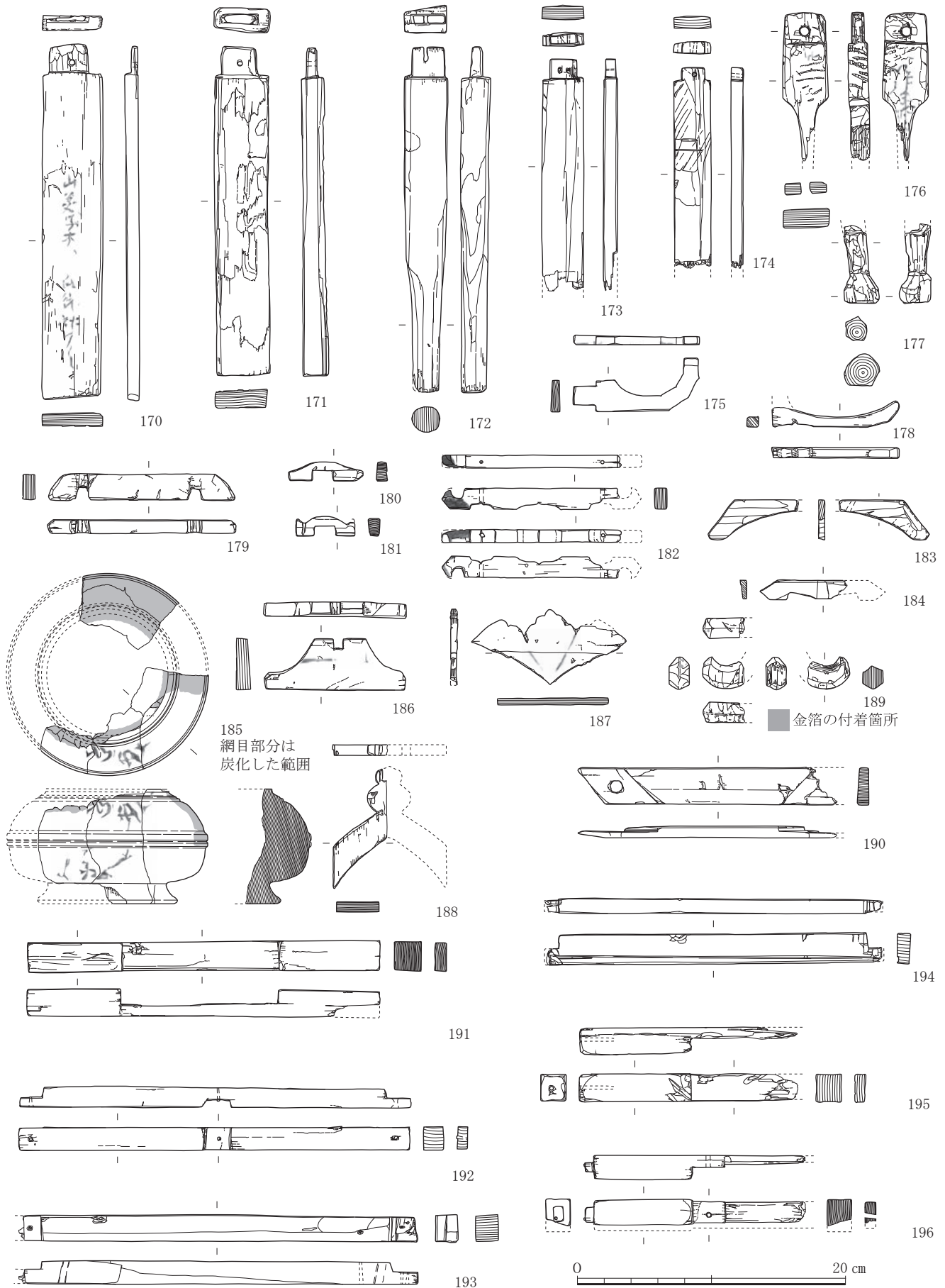


図72 SD01古木屑層出土木製品実測図(部材2)(1/4)

できない。183は台形の板材の下辺を緩い弧状に削り込んでいる。184は下辺をMの字形に削り込み板の短辺側を尖らせるように加工する。

185は挽物である。破片を5点確認している。口縁が短い高台付の壺のような外形をしている。中央部が炭化しているため、上面が確認できない。外面中央の最大径にあたる部分に、二条の線を挽き出し、土器の口縁のように上端部を立ち上げ、その下に二条の線を挽き出している。また、肩の部分には墨書が残る。正倉院御物の巻子を広げて見る書几の柱座部分に酷似する。

187～189は組み合わせるための柄や木釘の痕跡はないが、装飾性が高いため調度を飾る部材と考えた。187は扇形の材の円弧部に雲形の曲線を描きながら等間隔に二箇所の切れ込みを入れている。二箇所の切れ込み部から中心に向かって墨線を入れている。188は半分以上欠損しているが、おそらく、左右対称になると考え、図のように復元した。大小二つの楕円形を重ね、その下に逆V字形を付けたような形に加工する。189は華足などの装飾加工の端部の材と思われる。巻き毛の先端のように巻き込む形に加工し、丁寧に面取りをしている。ところどころに金色の塗料が付着していた。塗料を分析した結果、金であることを確認した(112頁参照)。仏具関係の調度の一部である可能性がある。190は板材で片端を欠損する。材の端を菱形に削り込み、その中央に円孔を穿つ。欠損している他端にも逆方向に違えて同様に材を削り込んでいる。端部の角度は135°で、同じ材を組み合わせて八角形にした可能性がある。

191～196は、柄や仕口をもつ角材である。材の太さから、小型家具などの調度の部材と考える。

191は片面の中央部を切り欠いている。両端は切り落として加工はない。195は同様の材で片端が欠損している。木口中央に釘孔が一つ残る。192は片面中央に相欠きを入れ、反対面の両端にも相欠きを設ける。三箇所相欠きの仕口には材の垂直方向に釘孔が残る。193は両端に相欠きを入れ、それぞれに釘孔が残る。また、材の右端付近にも一箇所釘孔が残る。196は片端が破損。中央部に、相欠きがあり、その中央に釘孔が残る。材の端部に柄がつくりだされ木口側から木釘が打ち込まれている。194は板材である。両端に相欠きの切り込みがあり、材の下辺に樋状の彫り込みがある。

J. その他・用途不明品(表30・図73・74・Ph.20・21)

分類するには出土量が少ないもの、用途のわからないものを一括した。

197・198は紡織具の紡輪。円盤形の板材の中央に円形

の孔を穿ち、周縁を斜めに落とす。199～261は用途不明品である。199は円盤形の板の破片であるが、全体的に薄く、中心部をさらに薄く削るため、紡輪や曲物板である可能性が低い。200は紡錘形の板材の中央に円孔を穿つもの。平面形態が紡織具の糸巻きの横木に似るが、相欠きがなく枝部にあたる部分は断面四角形で梓木との結合に向かない。201は芯の周辺材を紡錘状に加工し、その両端を尖らせているもの。集成図録の漁猟具の浮子に似る。202は棒状の材の中央部分に切れ込みを入れ、同じ幅の薄板材を差し込み十字形に組むもの。薄板材の片側縁にはV字の切り込みをいれている。容器の把手に似る。203～205は板状の小片で203は山形、204は隅丸方形、205は小判形に整形する。206は算盤玉形に脚を付けたような形態。東二坊の二条大路路面の濠状遺構SD5100^{x17)}から出土し、形代として報告されているものに似る。207は円柱形の一部を断面L字形になるように切り取ったもの。非常に丁寧な削りで仕上げている。208～210は方形の板材の一側縁を曲線から直線状に削りとり、柄のように作り出す。同形態のものが3点出土していることから何らかの用途が考えられる。211は板材を丸茄子状に加工したもの。212は幅広の板材の片端を曲線状に削り、他端は切り折りし、一側縁に抉りを入れる。213はT字形に板材を加工し、中央部二箇所に小円孔を穿つ。両面全体に刃物傷が見られる。台座の部材を組に転用したものか。214は細長い板状の下半に柄を造り出している。身と柄の境目には半円形の抉りを両側縁から入れ、さらに柄にむけて斜めに削りこんでいる。身の下端には三箇所の木釘孔があり、うち一つに木釘が残る。215は細長い板状の両先端を半円形に加工する。216は撥形に加工した板材の幅広部分を板目に沿って割裂いたもの。217は厚みのある板材を二等辺三角形に加工し、中心に円孔を穿つ。三角形の頂点部分には溝を切り込んでいる。218は厚みのある板材の上辺を浅く弧状に削る。219は分厚い板を円形に加工したもの。上半を蓋形に挽き、その部分には墨書が認められる。半分以上が欠損する。220は厚い板材の上端中央部を切り抜き、コの字形に整形して、残った両端部分上端を斜めに削ったもの。埋立層からも同様な形態のもの(274)が出土している。221は寸詰まりの材の一面を尖らせるように粗く削ったもの。222～229は形態に多少のバリエーションがあるものの板材の一端を斜めもしくは山形に加工したもの。222は比較的薄い材で、上端は折れているが中央部が直線的に伸びる。下端は曲線的に削り、上半中央付近に木釘が残る。埋立層出土の273に形態が似ており、上端が柄状の突起

第4章 出土遺物

表30 SD01古下層出土木製品一覧（その他・用途不明品）

No	種類	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	備考	写真番号	地区
197	紡織	紡輪	径 4.5	(2.5)	0.5	スギ	半分欠損	Ph.21-197	LG-78
198	紡織	紡輪	(4.3)	(2.3)	0.8	スギ	半分欠損	Ph.21-198	LG-78
199	用途不明	円盤形木製品	(5.0)	(1.9)	0.3	ヒノキ属	中央部薄い	Ph.21-199	LG-78
200	用途不明	板状木製品	13.8	2.6	0.5	スギ	中央に穿孔	Ph.21-200	LG-78
201	用途不明	浮子形木製品	(8.5)	1.5	1.4	ヒノキ属		Ph.21-201	LG-78
202	用途不明	棒状木製品	11.2	1.0	1.0	サワラ	棒状の材に切り込みを入れ、薄板を差し込み、十字に組む	Ph.21-202	LG-78
		板状木製品	7.9	1.0	0.2	スギ			
203	用途不明	板状木製品	4.1	3.1	0.2	スギ	下部は切り折り		LF-73
204	用途不明	板状木製品	3.7	2.9	0.4	ヒノキ	題籤軸の頭部に似るが折面なし	Ph.21-204	LG-78
205	用途不明	板状木製品	3.3	1.6	0.3	ヒノキ	上下端切り	Ph.21-205	LG-78
206	用途不明	板状木製品	(2.0)	1.5	0.7	広葉樹	東二坊二条大路路面 SD5100 出土形代に似る	Ph.21-206	LG-78
207	用途不明	不明木製品	1.9	1.5	1.9	ヒノキ		Ph.21-207	LG-78
208	用途不明	板状木製品	(12.3)	2.1	0.5	未同定		Ph.21-208	LG-77
209	用途不明	板状木製品	13.3	2.9	1.2	スギ		Ph.21-209	LG-78
210	用途不明	板状木製品	(15.2)	3.3	1.2	ヒノキ		Ph.21-210	LF-78
211	用途不明	板状木製品	9.5	(4.3)	0.6	ヒノキ	丸茄子形に加工	Ph.21-211	LG-78
212	用途不明	板状木製品	(9.2)	7.8	0.7	サワラ	削りこみあり	Ph.21-212	LF-79
213	用途不明	板状木製品	4.6	14.2	0.6	ヒノキ	木釘穴二箇所。うち一つに木釘残る	Ph.21-213	LG-78
214	用途不明	不明木製品	(28.9)	3.8	0.8	スギ	木釘穴三箇所	Ph.21-214	LG-78
215	用途不明	板状木製品	23.1	3.6	0.7	スギ	両端を圭頭状に加工	Ph.21-215	LG-78
216	用途不明	板状木製品	12.5	2.8	0.9	スギ	上端部を溝状に彫り込む	Ph.21-216	LG-78
217	用途不明	板状木製品	高 4.9	9.3	2.7	ヒノキ	中央に穿孔	Ph.21-217	LG-78
218	用途不明	板状木製品	高 (4.8)	9.7	2.5	ヒノキ	上部中央を半円形に挟り込む	Ph.21-218	LG-78
219	用途不明	挽物	高 (4.7)	(9.2)	(3.0)	ヒノキ	上面は挽き、墨書あり	Ph.21-219	LG-78
220	用途不明	板状木製品	10.3	6.8	2.3	ヒノキ	埋立層出土 274 に似る	Ph.21-220	LG-78
221	用途不明	塊状木製品	4.5	5.1	3.9	ヒノキ			LF-79
222	用途不明	板状木製品	(15.7)	3.8	0.5	スギ	木釘を打ち込む。削り込み加工	Ph.21-222	LF-78
223	用途不明	板状木製品	(6.9)	4.5	1.1	スギ	上部切り折り	Ph.21-223	LG-78
224	用途不明	板状木製品	(5.4)	3.7	2.0	ヒノキ		Ph.21-224	LG-78
225	用途不明	板状木製品	5.6	4.1	0.6	スギ		Ph.21-225	LG-78
226	用途不明	板状木製品	4.5	3.6	0.8	スギ		Ph.21-226	LG-71
227	用途不明	板状木製品	6.3	2.6	0.8	ヒノキ属	樺皮残る	Ph.21-227	LG-78
228	用途不明	板状木製品	9.3	3.8	1.4	ヒノキ	木釘残る	Ph.21-228	LG-78
229	用途不明	板状木製品	7.8	3.4	1.0	スギ		Ph.21-229	LG-71
230	用途不明	板状木製品	4.4	軸径 1.8	下部径 2.9	針葉樹	枝を切りおとす。	Ph.21-230	LF-77
231	用途不明	棒状木製品	(3.8)	0.8	0.5	スギ	全周に刻み目を入れる	Ph.21-231	LG-78
232	用途不明	棒状木製品	12.9	0.6	0.8	スギ		Ph.21-232	LG-77
233	用途不明	棒状木製品	19.0	1.0	0.6	ヒノキ	一側縁が鋸歯状になっている	Ph.21-233	LG-78
234	用途不明	棒状木製品	(11.3)	頭部 1.7	頭部 1.6	ヒノキ属	頭部に彫刻	Ph.22-234	LG-71
				軸部 0.9	軸部 1.0				
235	用途不明	板状木製品	8.5	1.3	0.4	スギ	上下端に穿孔あり	Ph.22-235	LF-79
236	用途不明	板状木製品	8.9	1.4	0.4	スギ	削込加工と穿孔あり	Ph.22-236	LF-79
237	用途不明	棒状木製品	12.0	1.1	1.0	ヒノキ	上部側縁を切り欠く	Ph.22-237	LG-78
238	用途不明	板状木製品	18.5	(1.7)	0.6	スギ	穿孔五箇所。	Ph.22-238	LF-78
239	用途不明	板状木製品	(17.6)	2.5	0.8	スギ	粗い穿孔	Ph.22-239	LG-78
240	用途不明	板状木製品	25.8	2.5	0.9	スギ	図の下端に箱材の出柄が残る	Ph.22-240	LG-78
241	用途不明	棒状木製品	16.5	1.5	1.1	ヒノキ	刀子柄の未製品か？	Ph.22-241	LG-78
242	用途不明	板状木製品	13.8	1.1	0.5	スギ	一側縁の二箇所 V 字状の切込	Ph.22-242	LF-78
243	用途不明	板状木製品	(13.5)	(1.1)	0.6	スギ	木釘が残る	Ph.22-243	LG-78
244	用途不明	棒状木製品	(11.9)	2.6	1.6	ヒサカキ属		Ph.22-244	LF-78
245	用途不明	棒状木製品	12.0	1.5	1.3	スギ		Ph.22-245	LG-78
246	用途不明	棒状木製品	10.0	1.5	1.1	ヒノキ		Ph.22-246	LG-78
247	用途不明	棒状木製品	(10.6)	0.9	0.7	スギ		Ph.22-247	LG-78
248	用途不明	棒状木製品	(9.8)	1.5	0.8	スギ	「H」の焼印あり。史料番号 187 と同じ焼印	Ph.22-248	LG-70
249	用途不明	板状木製品	18.8	1.3	0.5	ヒノキ		Ph.22-249	LG-79
250	用途不明	板状木製品	18.7	1.6	0.3	アスナロ属		Ph.22-250	LG-77
251	用途不明	板状木製品	16.1	1.5	0.3	スギ		Ph.22-251	LG-78
252	用途不明	板状木製品	(13.1)	1.3	0.3	未同定		Ph.22-252	LG-78
253	用途不明	板状木製品	(12.1)	2.3	0.9	スギ		Ph.22-253	LF-78
254	用途不明	棒状木製品	15.6	2.9	1.5	コナラ属アカガシ亜属		Ph.22-254	LG-78
255	用途不明	棒状木製品	(19.3)	(3.7)	0.8	スギ		Ph.22-255	LG-79
256	用途不明	板状木製品	(28.2)	2.8	0.9	スギ	上端切り折り		LG-78
257	用途不明	板状木製品	(43.1)	2.6	0.8	ヒノキ属		Ph.22-257	LG-78
258	用途不明	棒状木製品	34.7	1.8	1.1	スギ		Ph.22-258	LG-78
259	用途不明	棒状木製品	(41.2)	1.0	0.9	スギ	湾曲し、上下端折れ	Ph.22-259	LG-73
260	用途不明	棒状木製品	54.0	径 1.1		スギ		Ph.22-260	LG-73
261	用途不明	棒状木製品	54.1	1.2	0.9	スギ		Ph.22-261	LG-73

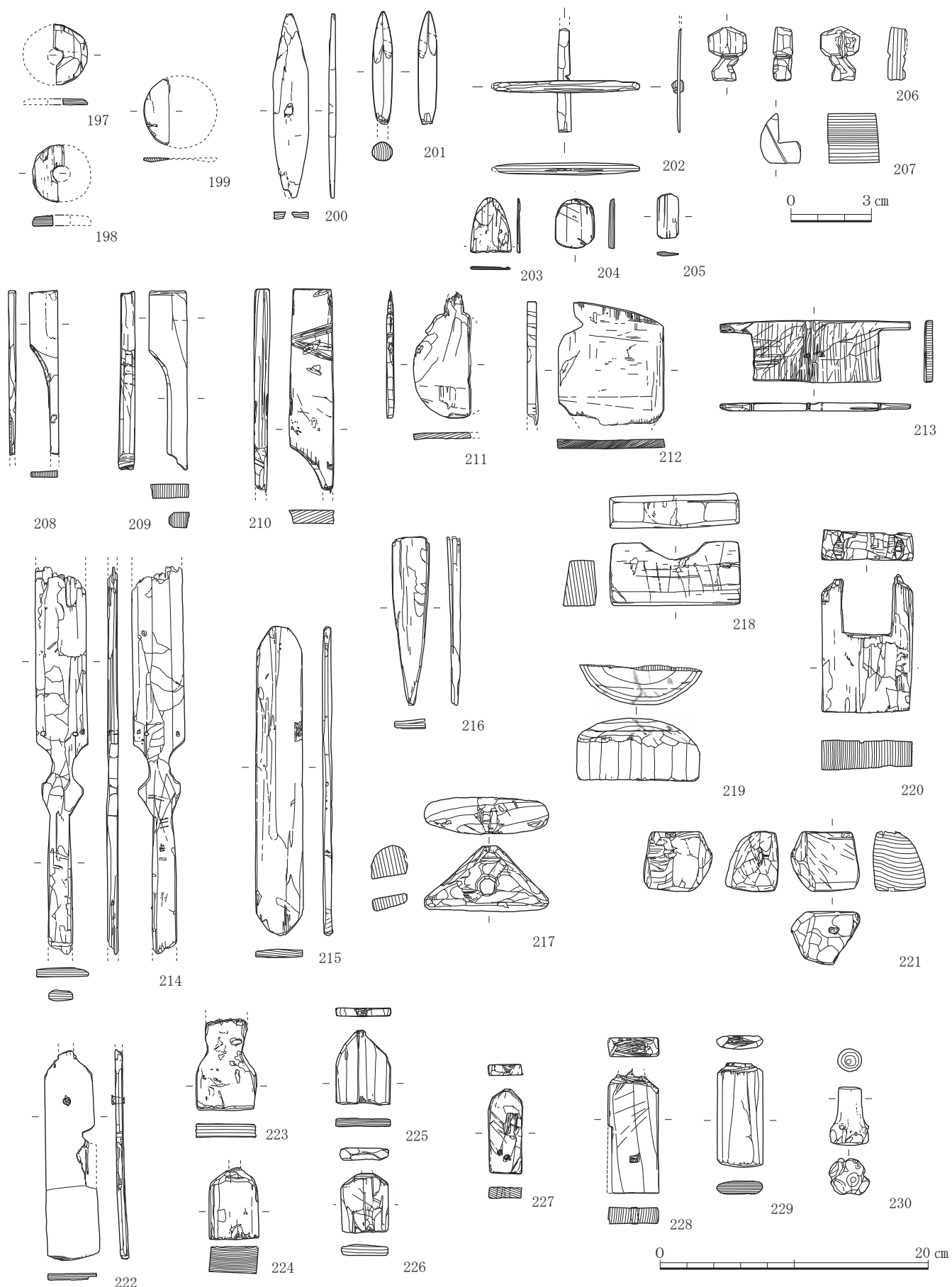


図73 SD01古木屑層出土木製品実測図（その他・用途不明品1）（206・207：1/2 それ以外は1/4）

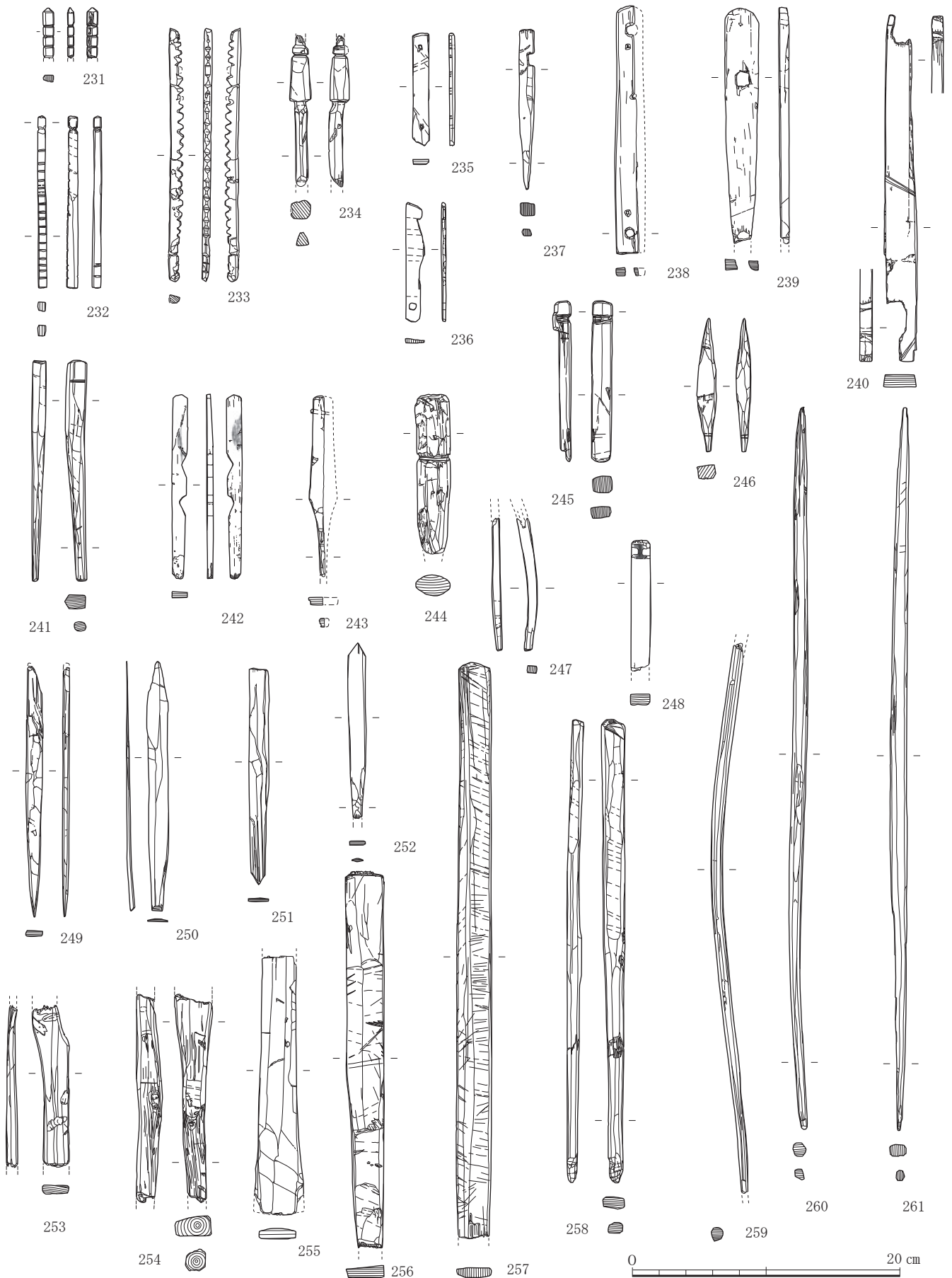


图74 SD01古木下層層出土木製品実測图(用途不明品2)(1/4)

になる可能性がある。223は両側縁を斜めに削り込み、さらに上へ伸びる。225・227・229は上面まで整形するが、224・226・228は上端を折り取ったままで、その後未調整である。227には二箇所、228には一箇所の釘穴が認められる。230は芯持材の枝部分を丁寧に取り除き加工したもの。切り口は上下とも丁寧に仕上げている。

231～261は細い長い棒状または板状のもの。231は四角い棒の片端を方錐状に加工し、以下等間隔に線刻する。文房具の算木に似るが、刻まれる線刻は四面を一周し、1～4の数的対応をしていない。232は断面四角形の細い棒の片端近くに溝を一週巡らし、角材の一面に不等間隔に刻み目を入れる。下端付近に二条だけ刻み目を入れる面がある。233は細い棒の側縁を連続的に切り欠き鋸歯状に加工したもの。「棒ササラ」の名称で遊戯具として報告されている例がある。234は両端を欠損する。棒の片端に四角柱と台形柱をつくり出している。235は幅の狭い薄板材の上下端部付近に各一箇所釘穴が残る。236も同様の薄板で下端に円孔を穿ち、片側縁に曲線的な削り込みを入れる。237は角棒状の材の下端を尖らせ、上端付近を切り欠く。木釘に似るが、耳が破損した痕跡はない。切り込みに紐状のものを括り付けて使用したものか。238は材の一端を丸くし、直径0.8cmの円孔と木釘孔程度の孔を二つ一組にして上下に配置する。239は板材の一端を半円形に加工し、次第に幅を狭めている。上端寄りに方形の孔を穿つ。柄の本部分の可能性がある。240は何かの柄のような形態である。上端は丸く抉られ、下端は上と反対側の側縁を丸く抉っている。下端には柄のような段があり、箱板などの部材を転用した可能性がある。242は側縁に同形の切り欠きを二箇所入れている。243は板材を柳葉形に加工し、上端付近に側縁側から木釘を打つ。244は断面が楕円形の棒状。下端は欠損するが周囲より薄く削り出している。やや上よりの位置に線刻を一条巡らす。245は下端を厚さ半分になり切り欠き、上端部に溝を彫る。246は板材を紡錘状に削ったもの。下

端付近に縛ったような痕跡がある。247は板棒状で、刀子の柄のように緩やかに曲折する。上端は欠損しているが、方形に切り欠かれている。248は丁寧に削った板材に横向きの「H」形の焼印を押している。史料番号187にも同じ焼印を同方向と、90°方向を離れた計二箇所に押している。249～252は片端を尖らせる棒状と板状の加工品。253～255は表面を丁寧に削った柄などの一部と考えられる。253は両端が欠損しており、一端の両側縁が緩い円弧を描くように曲がる。254は図の上半が断面四角形で、下端が楕円形である。255は扁平な板材で、一端の幅を少し広め、両側縁の稜を落とす。256・257は長い板棒状の木製品で、非常に丁寧に表面を削る。258は上半が角棒状で、下半は幅を狭め楕円形に削る。下端は丁寧に削り亀頭状につくり出している。259は両端を欠損するが、弓のように曲線的である。260・261はほぼ同じ長さの棒。両端を尖らせている。

Ⅲ. SD01古埋立層出土木製品 (表31・図75・Ph.23)

埋立層は木屑層の土と地山の土が混じるあった層であり、遺物が出土するのは木屑層の土の中である。遺物の様相は木屑層と似ている。服飾具・食事具・祭祀具・調度・部材・紡織具・用途不明品がある。

262は服飾具の檜扇である。末を欠く。本の要孔は一孔でA I型式である。本の末端は半円形に削られる。263・264は食事具。263は杓子形木器である。柄の上半は欠損する。身の先端は半円形ではないが、丸みをもつためB型式になる。身の先端を斜めに切り、先端に向けて薄く削り落としている。身と柄の明確な境界はなく、柄に向かって次第に幅を狭めている。264は匙形木器。身の先縁は半円形で身幅が狭く細長いC型式。265・267は祭祀具である。265は齋串である。上端は直線的で下端が丸みをもつことから、下端が尖るA～C型式以外のD型式である。両側縁の左右対称の位置を三角形に切り欠きその一辺に三～四箇所の切れ込みを入れ、鋸歯状に加工する。266は刀形で、刃と茎のみを表現するB型式

表31 SD01古埋立層出土木製品一覧

No.	種類	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	備考	写真番号	出土地区
262	服飾具	檜扇	(9.3)	2.2	0.1	ヒノキ	上半欠損	Ph.23-262	LG-78
263	食事具	杓子形木器	(18.3)	5.5	1.1	スギ	柄の部分欠損	Ph.23-263	LG-72
264	食事具	匙形木器	25.1	2.5	0.8	スギ	完形	Ph.23-264	LG-72
265	祭祀具	齋串	20.1	1.7	0.3	スギ	上下端は欠損していない	Ph.23-265	LG-78
266	祭祀具	刀子形木製品	18.5	2.5	0.5	ヒノキ	完形	Ph.23-266	LG-71
267	調度	箱側板	(8.2)	5.3	0.8	スギ	出柄に木釘	Ph.23-267	LG-78
268	部材	台座	高2.0	13.9	0.8	スギ	木製品269と同じ形	Ph.23-268	LG-71
269	部材	台座	高2.1	14.1	0.9	スギ	木製品268と同じ形	Ph.23-269	LG-71
270	部材	台座	高3.1	8.0	0.9	ヒノキ	木器集成図録6609に似る	Ph.23-270	LG-78
271	部材	組物部材	(14.7)	2.6	0.8	スギ	焦げて欠損	Ph.23-271	LF-77
272	用途不明	円盤形木製品	(4.5)	(2.3)	0.3	ヒノキ科	中央部分は割れ	Ph.23-272	LG-72
273	用途不明	板状木製品	13.0	5.4	0.5	ヒノキ	上端に柄状の突起。円形透孔	Ph.23-273	LG-71
274	用途不明	部材	8.7	7.0	2.0	ヒノキ	木製品220と似る	Ph.23-274	LG-78・79

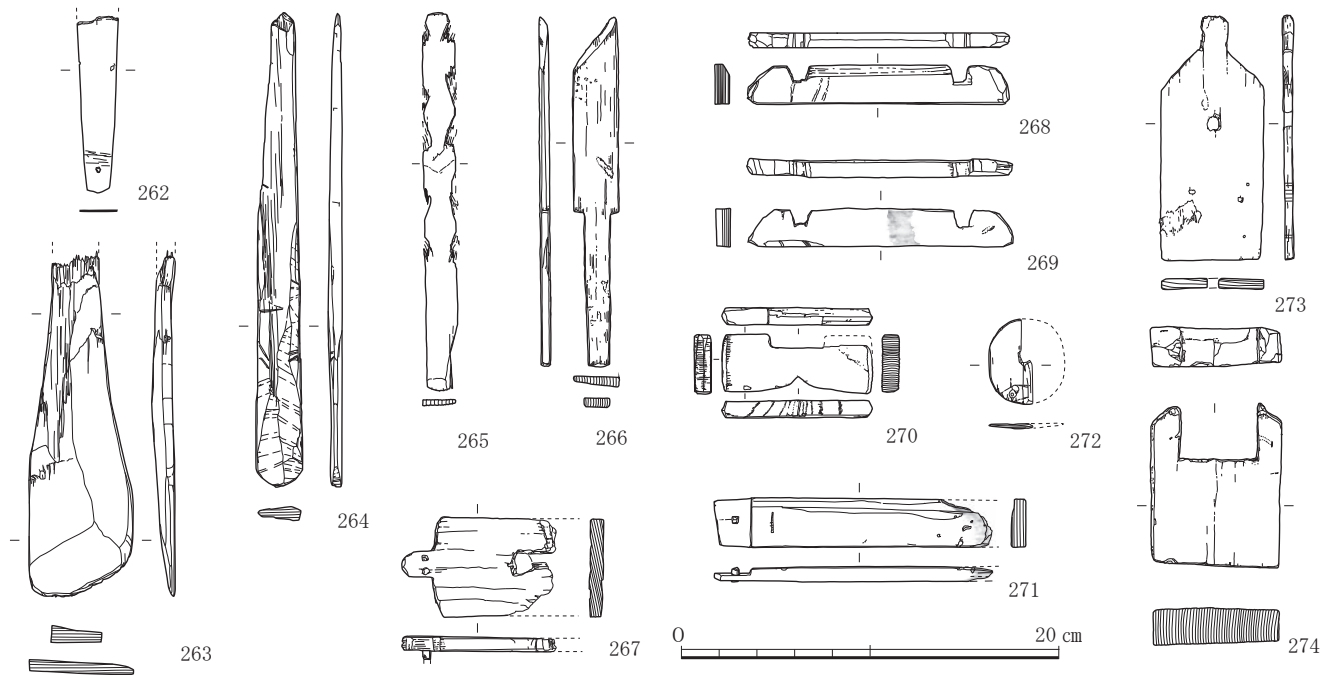


図75 SD01古埋立層出土木製品実測図 (1/4)

表32 SD01新・その他出土木製品一覧

No.	種類	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	備考	写真番号	地区	出土層位
275	容器	曲物底板	(15.6)	(5.5)	0.7	アスナロ属	表面の劣化が著しい	Ph.23-275	LG-69	SD01新下層
276	用途不明	文杖形木製品 (本体)	150.5	柄径3.0	先端部 (1.8 2.3)	モミ属	一部で樹皮残る	Ph.23-276	LF-71・72	SD01新下層
		文杖形木製品 (詰物)	4.2	1.5	0.7	ツブラジイ	劣化が著しい			
277	文房具	付札	16.1	2.3	0.6	スギ	墨書なし	Ph.23-277	LG-77	SD01新上層
278	遊戯具	球状木製品	3.1	3.2	(1.5)	マツ属複維管束亜属	半分欠損	Ph.23-278	LH-78	SD01新上層
279	服飾具	檜扇	25.8	(2.2)	0.2	ヒノキ		Ph.23-279		排土採集

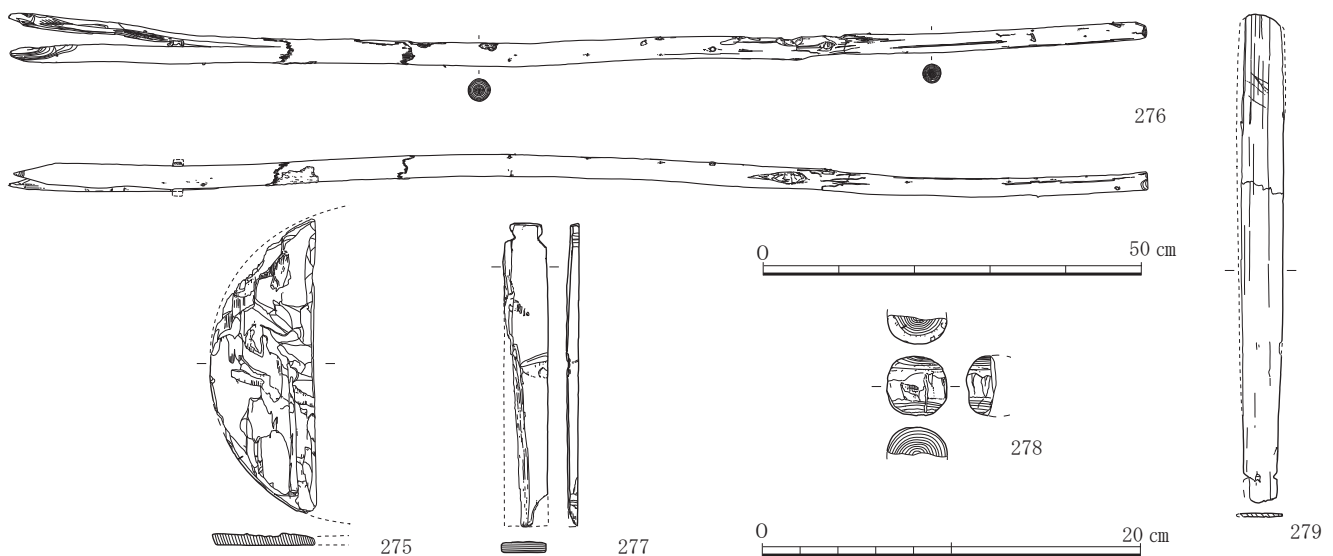


図76 SD01新その他出土木製品実測図 (275・277~279 : 1/4、276 : 1/10)

である。切先を斜めに切り落とし刃物状に整形する。267は調度の箱側板である。柄をつくり出しその部分を木釘二本で留める。板には円形の透孔が一つある。268～271は部材である。268・269は台座で、ともに上面二箇所に逆台形の切り欠きを入れている。270は上端中央部を切り欠き、下端に緩やかな山形の削形を入れる。271は板材で、片端を斜めに切り落とし半分の厚さに削って相欠きを設け、そこに木釘が一本残る。272～274は用途不明品である。272は円盤形木製品である。直径4.6cmで容器蓋としては小型である。両面平らで薄く、円孔もないため、紡輪とも考えにくい。

273・274は、ともに木屑層で出土した用途不明の木製品222・220とそれぞれ同形態である。273は板材の側縁を斜めに削り上面中央部に柄をつくり出している。274は上端中央を方形に切り欠き、残った両端を斜めに削り落としている。

IV. SD01新・その他出土木製品

(表32・図76・Ph.23)

SD01新下層からは容器・用途不明品、新上層から文房具・遊戯具が出土した。そのほか排土採集資料に服飾具がある。

275は容器曲物底板である。状態が悪く、側縁部分はかなり腐朽しており、釘穴などはわからない。

276は用途不明の文杖形木製品である。長い樹皮が残る自然木の先端を割裂き芯持材片をかましてV字形に広げる。割裂いた先端はさらに先端が尖るようにそぎ落とす。

集成図録には用途不明品として同形態の7303を掲載している。7303は割裂いた根本に蔓を巻き付けて固定している。火消しに使用する鳶口に似ることから、報告^{文11)}では鳶口形木製品という名称を使用していた。この形態は、貴人に差し出す文書を挟むために先端が二股に分かれた文杖(ふづえ・ぶんじょう)に似る。文杖は一般的に白木作りで、文書を挟む部分の鳥口が金属製、長さが約1.5mである。276は白木で、長さ1.5mであるが、樹皮が残存し、先端にも金属を装着した痕跡がない。文杖の古い型式のものか判断し難いため、今回はその形態の類似性から、文杖形木製品という名称を使用する。277は文房具の付札と考えられ、板材の上端の両側にV字形の切れ込みを入れている。墨書はない。278は遊戯具の球形木製品。芯持材の上下端を丸く整形する。279は檜扇である。一側縁の一部を欠くがほぼ完形である。末の先端は半円形、本の先端も緩い曲線状である。要孔は一孔で、本の両側縁にV字形の切り込みを入れる。綴目はなくAⅢ型式になる。

註1) 本書で四側面に加工痕が残るもののうち、幅が厚みの二倍以上あるものを「板状」とし、幅が厚みの二倍以下のものについては「棒状」とした。

註2) 曲物の底板・蓋板の区別についてはII.Cの項(77頁)で説明。

註3) 部材の接合技法については木村法光「正倉院木工品の接合技法について」(関根真隆編『正倉院の木工芸』日本の美術6 No.193 1982)を参考にした。

表33 その他の遺物一覧

No.	銭種	重さ(g)	G(mm)	N(mm)	g(mm)	n(mm)	T(mm)	t(mm)	写真番号	出土地区	出土層位
1	和同開珎	3.006	25.00	21.40	8.23	6.3	1.30	0.62	Ph.24-1	LG-69	SD01古埋立層
No.	種類	品目	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	材質	備考	写真番号	地区	出土層位
2	金属製品	鉸具(板金具)	4.5	3.2	0.1	9.226	銅	刺金欠損	Ph.24-2	LG-69	SD01古木屑層
3	金属製品	丸軋(表金具)	1.60	2.20	0.35	2.480	銅	裏面に漆残る	Ph.24-3	LG-78	SD01古木屑層
4	金属製品	鋌	1.1	1.1	頭部0.50 軸部0.42	1.293	銅	軸は根本のみ残存	Ph.24-4	LG-78	SD01古木屑層
5	石製品	有孔角形石製品	4.7	(3.15)	2.9	40.726	砂質凝灰岩	底面に円形の孔	Ph.24-5	LF・G-77・78	SD01新上層
6	石製品	砥石	(6.9)	2.9	1.03	37.522	流紋岩	上端に自然面残る	Ph.24-6	北壁崩落土	不明
7	石製品	碁石(黒石)	1.24	1.30	0.51	1.29	頁岩もしくは粘板岩		Ph.24-7	LG-78	SD01古木屑層
8	石製品	碁石(黒石)	1.30	1.38	0.43	1.176	頁岩もしくは粘板岩		Ph.24-8	LF-78	SD01古木屑層
9	石製品	碁石(黒石)	1.22	1.50	0.68	1.836	頁岩もしくは粘板岩		Ph.24-9	LG-79	SD01古木屑層
10	石製品	碁石(黒石)	1.30	1.75	0.45	1.64	石英		Ph.24-10	LG-78	SD01古木屑層
11	石製品	碁石(黒石)	1.76	1.87	0.59	3.107	頁岩もしくは粘板岩		Ph.24-11	LF-78	SD01古木屑層
12	石製品	碁石(白石)	0.88	1.01	0.48	0.619	石英		Ph.24-12	LF-78	SD01古木屑層
13	石製品	碁石(白石)	0.78	1.00	0.48	0.568	石英		Ph.24-13	LF-77	SD01古木屑層
14	石製品	碁石(白石)	0.91	1.32	0.59	1.046	石英		Ph.24-14	LF-78	SD01古木屑層
15	石製品	碁石(白石)	0.93	0.96	0.38	0.633	石英		Ph.24-15	LF-78	SD01古木屑層
16	自然石	墨書のある石	3.53	2.92	1.71	25.029	石英	「福」・「石」の墨書。史料番号801	文字資料篇 図版96-801	LF-73	SD01古木屑層
17	石器	石鏃	4.15	1.9	0.3	1.779	サヌカイト	縄文時代早期?	Ph.24-17	LF-73	SD01古木屑層
18	石器	削器	3.95	6.9	0.95	23.571	サヌカイト		Ph.24-18	LG-71	SD01古最下層
19	ガラス製品	玉	0.5	0.6	(0.26)	0.112	ガラス	鉛ガラス	Ph.24-19	LF-79	SD01古木屑層

第4節 その他の遺物

その他の遺物には、銭貨、金属製品、石器、石製品、ガラス製品、繊維がある。なお、繊維については第5章第3節で詳細に検討しており、ここではふれない。

A. 銭貨 (表33・図77・Ph.24)

和同開珎が1点出土した。「開」字の門構えの上端が、隸書風に開いた「新和同」。銭文は画線が細めで、一般的によく見られる和同開珎A^{x9)}と考えるが、背面の内郭縁が若干太く和同開珎Dに分類すべきかもしれない。

B. 金属製品 (表33・図77・Ph.24)

金属製品には銅鑄の鉸具の板金具、丸柄表金具が各1点、銅鋌が1点ある。2は帯の先端につけて帯を留めるバックルの役目をする金具である。鉸具頭を受ける折返し部分で破損し片面のみ残る。先端をコの字形に切り欠き、そこに刺金をはめるタイプである。3は丸柄表金具である。方形の透穴を開け、裏面に鋌足を三箇所鑄出す。裏面の一部に黒漆が残る。4は銅鋌である。頭部は隅丸方形で、軸は断面が方形。先端を欠損する。

C. 石製品 (表33・図77・Ph.24)

有孔角形石製品、砥石、基石、墨書石がある。5は砂質凝灰岩を寸詰まりの角形に加工し、底面に直径0.7cm、深さ1.7cmの円孔を穿ったもの。用途不明。6は砥石である。板状の流紋岩片を長方形に加工したもの。両面は緩やかに凹み、線状の使用痕が残る。7~15は基石である。7~9・11は頁岩もしくは粘板岩製で色は黒または、緑青色。比較的扁平で両面を研磨した痕跡が観察できる。10は緑色をおびるが石英製。12~15は石英製で白色。形が歪で研磨痕も見えにくい。他に石英に片面づつ「福」「石」と墨書する石がある。(史料番号801:文字資料篇15・78頁)

D. 石器 (表33・図77・Ph.24)

石鏃と削器が各1点ある。17は凹基無茎式の石鏃である。長身薄手で丁寧仕上げ。脚部の末端は先細りさせずに四角く整形し、U字形に抉りを入れる。縄文時代早期の特徴をもつ。18は削器である。横長剥片を素材とし、下端の両面から連続的な剥離によって刃部を形成している。ともにサヌカイト製。

E. ガラス製品 (表33・Ph.24)

青緑色を呈し、寸詰まりの球形。分析の結果、鉛ガラスであることがわかった(100頁参照)。半分以下の残りで、孔の有無は不明である。(久保邦江)

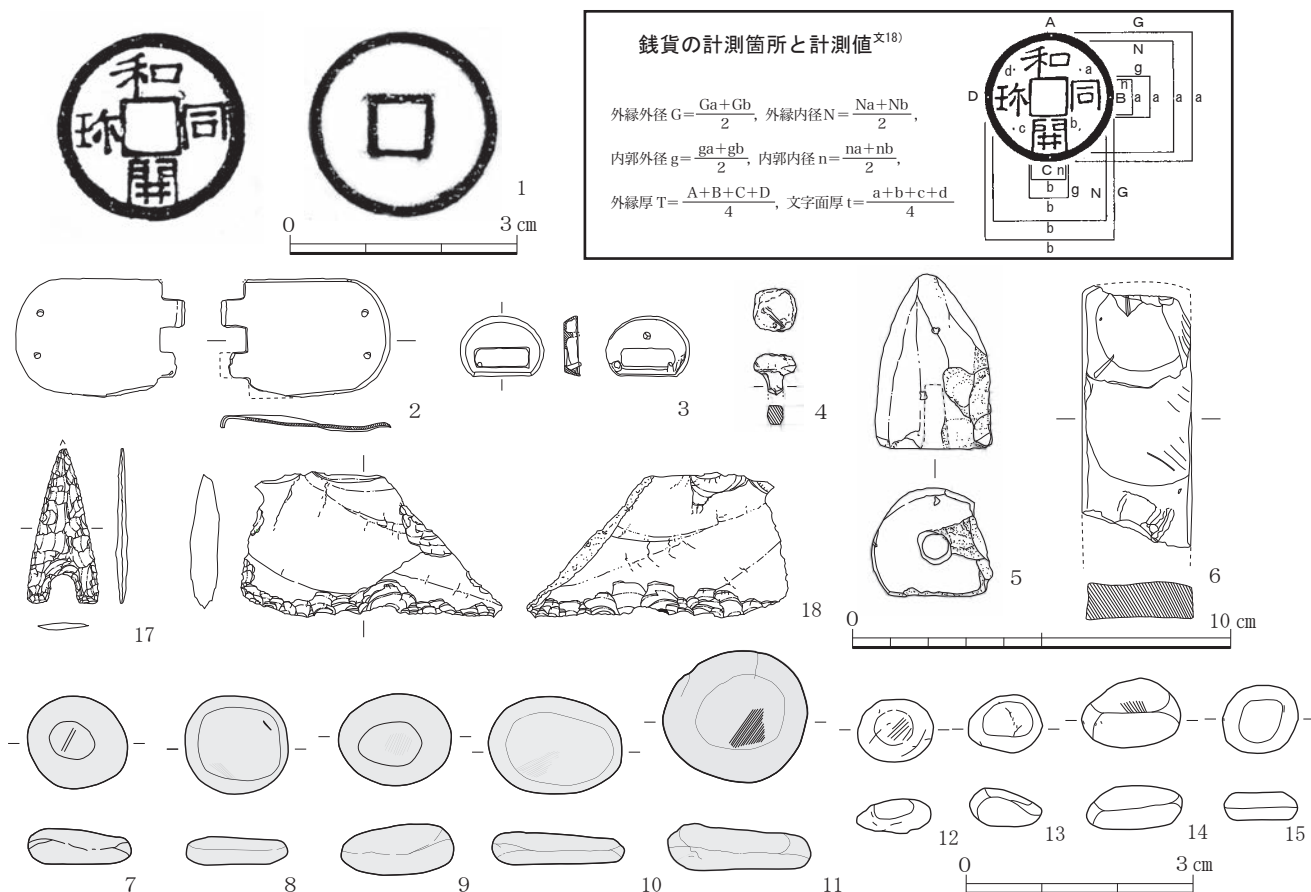


図77 その他遺物実測図 (1・7~15:1/1、2~6・17・18:1/2)

第5章 自然科学分析

多量の遺物を包含していたSD01出土のイスラム陶器の釉薬・胎土及び金属・ガラス・繊維製品について奈良県立橿原考古学研究所に分析を依頼し、その素材を知るための科学的な資料を得た（第1～3節）。株式会社古環境研究所には、SD01出土木製品の付着物について成分分析を委託し、金であることを確認した（第4節）。また、環境考古研究会に委託してSD01埋土中に含まれる花粉・珪藻と木屑層から出土した木材・種実の同定作業を行い、調査地周辺の自然環境や植物利用の実態を復元するための資料を得ることができた（第5～8節）。以下に、その分析報告を収載する。

第1節 イスラム陶器の釉薬・胎土の蛍光X線分析

I. はじめに

SD01古木屑層から出土したイスラム陶器片の材質調査の機会を得た。資料は同一個体と思われる細片3点で、表面の釉薬が剥落したものである。イスラム陶器細片3点のうち、胎土がほとんど残存しない2片を資料No.1（4.5×6.5mm）とNo.2（4.5×5mm）として釉薬の蛍光X線分析をし、胎土がよく残った大きな破片をNo.3（9.9×15.8mm、胎土厚4.5mm 表17:296-34）として粉末X線回折分析を行った。（図78～83）

筆者の管見では、本資料が出土した遺構の属する年代に近い日本の遺跡から出土したイスラム陶器（9～10世紀の遺跡から出土）について蛍光X線分析が行われている例は見当たらない。

本調査では、元素として何が含まれているかという定性分析にポイントを絞って調査を行い、ここに報告する。

II. 各調査の方法

調査は、実体顕微鏡（Optical Microscope: OM）とデジタルマイクロスコープ（Digital Microscope: DM）による観察を行い資料の形状や表面状態などを観察した。

引き続き、資料の元素構成を確認するため蛍光X線分析をおこなった。蛍光X線分析では、何がどれくらい含まれているか、すなわち定性・定量分析が可能であるが、本調査による測定は資料の形態や分析条件などから定性分析にとどめたので、あらかじめここでお断りしておく。

各観察・分析法に用いた機器及び測定条件は以下のとおりである。

- 1) 観察：実体顕微鏡 Leica MC-6 M
- 2) 観察：デジタルマイクロスコープHirox Digital Microscope KH-7700
- 3) 蛍光X線分析：卓上型エネルギー分散型蛍光X線分析装置SPECTRO MIDEX MII、軽元素測定モ

ードによる測定、低電圧測定は管電圧19kV、管電流0.3mA、測定時間300秒、高電圧測定は管電圧45kV、管電流0.25mA、測定時間180秒、測定雰囲気はすべてHeでパージしていた。

- 4) 粉末X線回折分析：粉末X線回折分析装置(Rigaku MiniFlex II、測定条件：ターゲットはCu、電圧は30kV、電流は15mA。計数時間は1 deg/minで、走査範囲は3～90°。試料はメノウ乳鉢で細かく粉碎し、シリコン単結晶の試料台に載せ測定した。

III. 調査結果

イスラム陶器No.1～3のいずれの資料も施釉面はガラス光沢を持つエメラルドグリーンを呈しており、細かな亀裂や気泡が確認できた。釉薬層の厚さは計測可能な部分で0.5～0.75mmを測った。

観察に引き続き、イスラム陶器No.1・2について蛍光X線分析による元素分析を行った。分析は、各資料について施釉された表面を測定した。

まず、イスラム陶器No.1およびイスラム陶器No.2の表面を分析した結果は、いずれもNa（ナトリウム）、Mg（マグネシウム）、Al（アルミニウム）、Si（ケイ素）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Ni（ニッケル）、Cu（銅）、Zn（亜鉛）、Pb（鉛）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）を検出した。中でも、Si、K、Ca、Fe、Cu、が顕著に、Na、Mg、Ti、Mn、Znを微量検出した。

イスラム陶器No.3の胎土採取資料について、粉末X線回折分析を行った結果、石英（ α -SiO₂）、輝石類、長石類が検出された。

IV. まとめ

釉薬の構成元素を見てみると、わずかながらPbを検出しており、鉛釉と考えたいところではあるが、Pbのカウンタ数が比較的低いので、鉛釉ではないと考えられる。また、Naもほんのわずかに検出している程度であるため、ソーダ石灰ガラスと判断できない。消去法的な

判断になるが、本資料釉薬はアルカリ釉薬の可能性が考えられる。また、着色材料は顕著に検出されたCuと考えられる。定性分析にとどまるため定量的議論は難しいが、検出元素から判断して、本資料はアルカリ釉によるCu着色の釉薬であった可能性が考えられる。

イスラム陶器No.3の胎土分析結果より粘土鉱物が検出されないことや長石が溶融していないこと、ムライト・クリストバライト等熱変成によって生じる鉱物が検出されないことなどから、1100°C以下で焼成された可能性が考えられる。
(奥山誠義)

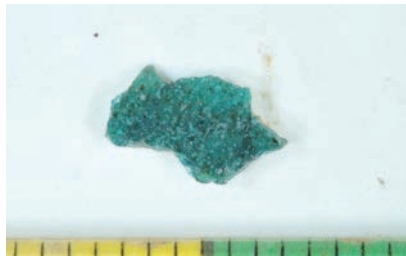


図78 イスラム陶器 No. 1 (表面)

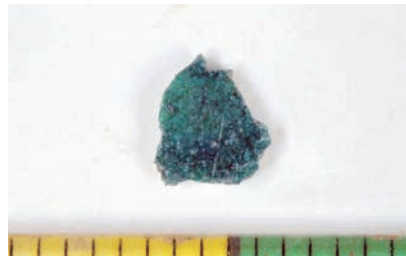


図80 イスラム陶器 No. 2 (表面)



図82 イスラム陶器 No. 3 (裏面)

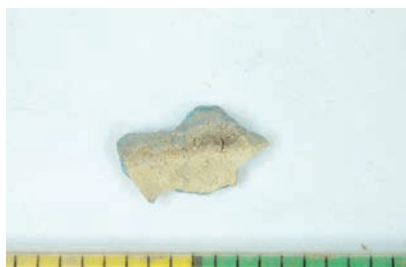


図79 イスラム陶器 No. 1 (裏面)



図81 イスラム陶器 No. 2 (裏面)

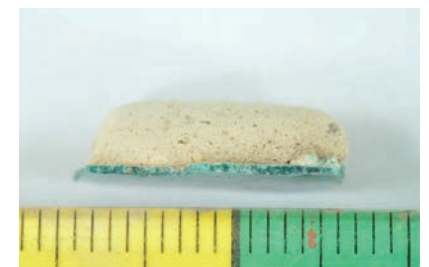


図83 イスラム陶器 No. 3 (側面)

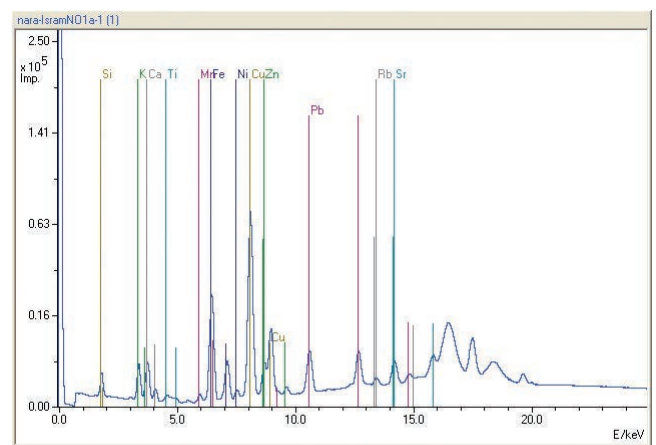
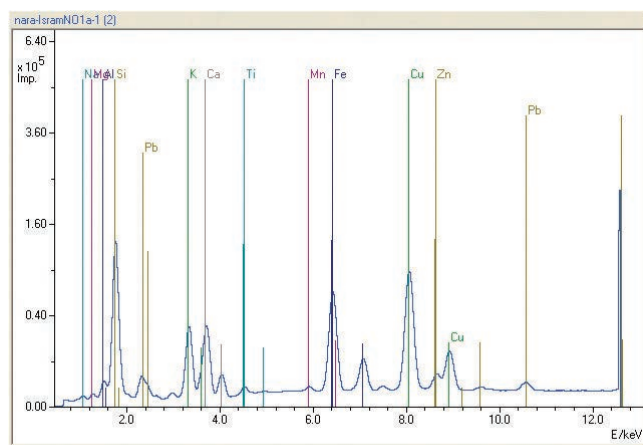


図84 イスラム陶器No.1 施釉層の蛍光X線スペクトル (左: 低電圧測定、右: 高電圧測定)

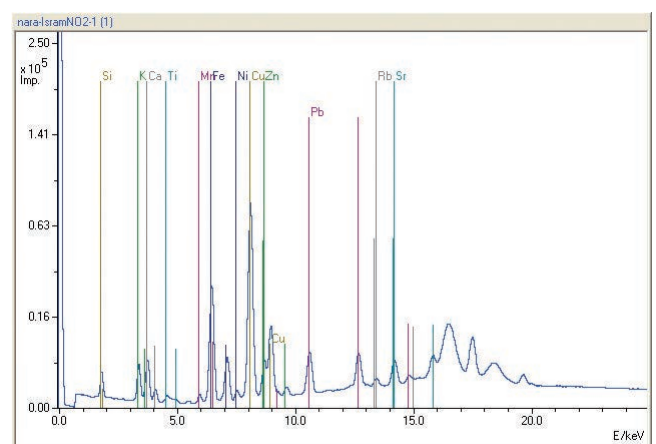
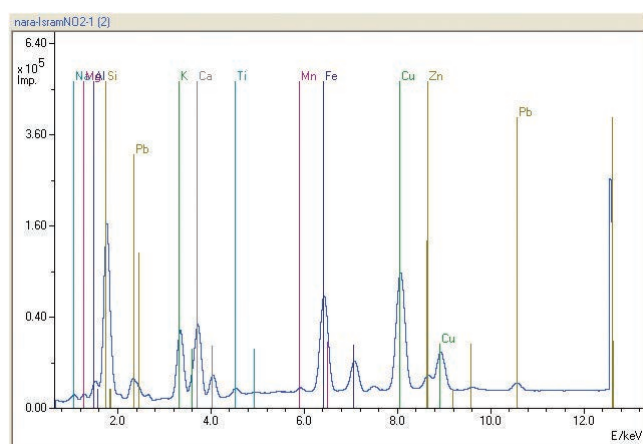


図85 イスラム陶器No.2 施釉層の蛍光X線スペクトル (左: 低電圧測定、右: 高電圧測定)

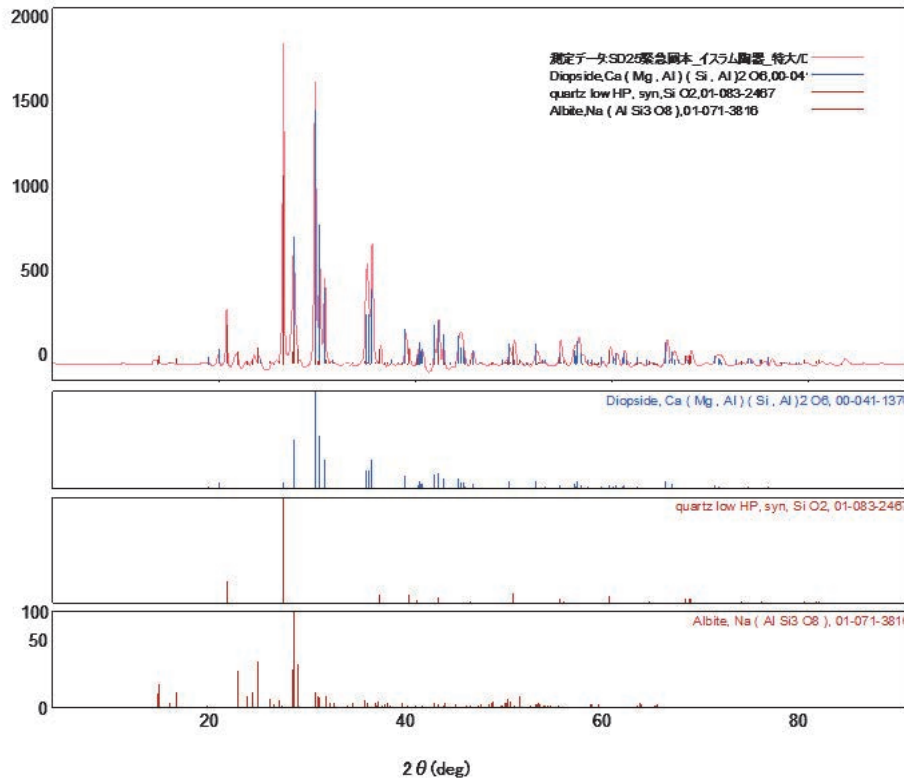


図86 イスラム陶器No. 3 胎土粉末X線回折分析結果

第2節 出土金属・ガラスの成分分析

I. はじめに

調査資料は、SD01の埋土を篩にかけながら水洗い（ウォーターセパレーション）して得られた金属およびガラス製の細片化・断片化した資料4点である。本調査では、素材が何であるかという点にポイントを絞って調査を行い、ここに報告する。

II. 各調査の方法

調査は、まず実体顕微鏡（Optical Microscope: OM）とデジタルマイクロスコップ（Digital Microscope: DM）による観察を行い資料の形状や表面状態などを観察した。

引き続き、資料の元素構成を確認するため蛍光X線分析をおこなった。蛍光X線分析法は、X線を物質に照射すると構成元素がそのエネルギーを受けて、2次X線（蛍光X線）を放出する。この蛍光X線のエネルギーを解析することにより構成元素を特定することが可能である。蛍光X線分析では何が、どれくらい含まれているか、すなわち定性・定量分析が可能であるが、本調査による測定は、資料の形態や分析条件などから定性分析にとどめたので、あらかじめここでお断りしておく。

各観察・分析法に用いた機器及び測定条件は以下のとおりである。

- 1) 観察：実体顕微鏡 Leica MC-6 M
- 2) 観察：デジタルマイクロスコップHirox Digital Microscope KH-7700
- 3) 蛍光X線分析：卓上型エネルギー分散型蛍光X線分析装置SPECTRO MIDEX M、軽元素測定モードによる測定、低電圧測定は管電圧19kV、管電流0.3mA、測定時間300秒、高電圧測定は管電圧45kV、管電流0.25mA、測定時間180秒、測定雰囲気はすべてHeでページしていた。
- 4) 蛍光X線分析：携帯型蛍光X線分析計 JEOL INNOV X α -2000を用いた。

III. 調査結果

分析資料のうち、構成元素まで特定できたのは以下の4点である。

資料No. 1（図87：SD01古木屑層 LG-73区出土）

資料No. 1は、4 mm × 2 mm × 1 mmの青色不透明なガラスの破片である。部分的に黒色を呈し、微細な気泡が無数に入っている。

蛍光X線分析の結果、Na（ナトリウム）、Mg（マグネシウム）、Al（アルミニウム）、Si（ケイ素）、Cl（塩素）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Co（コバルト）、Cu（銅）、Zn（亜鉛）、Pb（鉛）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）、Sb（アンチモン）を検出した。中でも、Si、Ca、Coが顕著に、

Na、Ti、Cu、Zn、Pb、Rb、Sr、Sbはわずかに検出した。Co着色によるソーダ石灰ガラスと考えられる。

資料No. 2 (図88: SD01古木屑層LF-79区出土)

資料No. 2は、緑色不透明な直径6mmの半球形を呈している。微細な気泡が多数観察でき、表面には傷や亀裂が多数存在する。

蛍光X線分析の結果、Na (ナトリウム)、Al (アルミニウム)、Si (ケイ素)、Cl (塩素)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Cr (クロム)、Mn (マンガン)、Fe (鉄)、Cu (銅)、Zn (亜鉛)、Pb (鉛)を検出した。中でもSi、Ca、Cu、Pbが顕著に、Na、Mg、Al、Ti、Cr、Mnがわずかに検出した。Cu着色による鉛ガラスと考えられる。

資料No. 3 (図89: SD01古木屑層LG-78区出土)

資料No. 3は14mm×10mm×7mmの小塊で、茶色の土壌の塊の表面に光沢を持つ紺青色、緑青色、赤色の粒状微小塊があばた状に存在する。

蛍光X線分析の結果、Al (アルミニウム)、Si (ケイ素)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Mn (マンガン)、Fe (鉄)、Cu (銅)、As (ヒ素)を検出した。特にFe、Cu、Asが顕著に検出された。検出元素は指摘できたが、何であるかは不明である。

資料No. 4 (図90: SD01古木屑層LG-73区出土)

資料No. 4は5×7mmの小塊を最大破片とする小片8個からなる。表面が白色を呈した黄色のロウ状物質で、部分的に黒色を呈するものがある。硬度はガラスほど硬くはなく、文字通り蠟のような硬さであった。

蛍光X線分析の結果、黄色部分と黒色部分ともに、Al (アルミニウム)、Si (ケイ素)、Cl (塩素)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Fe (鉄)、Cu (銅)を検出した。黄色部分ではSi、Fe、Cuが顕著に検出され、黒色部分ではSi、Ca、Feが顕著に検出された。検出元素は指摘できたが、何であるかは不明である。

IV. まとめ

本調査では、資料の素材を把握することを目的として材質調査を行い、4点の資料で構成元素を特定することができた。このうち、2点については元素構成からおおむね物質を知ることができた。この2点はガラス製品であり、うち1点はCo着色によるソーダ石灰ガラス、残る1点はCu着色による鉛ガラスである。調査資料4点中2点については色調や表面状態が非常に特徴的であるものの、観察および元素分析だけでは何であるかを特定することができなかった。この2点の物質特定は今後の課題として提起しておきたい。

(奥山誠義)

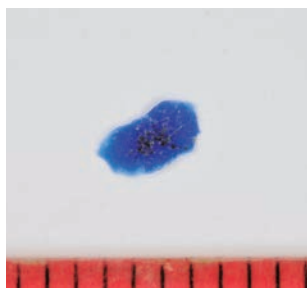


図87 資料No. 1

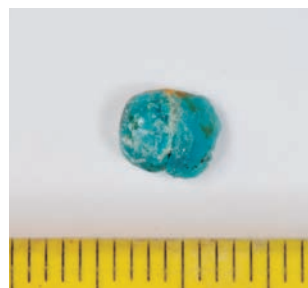


図88 資料No. 2



図89 資料No. 3

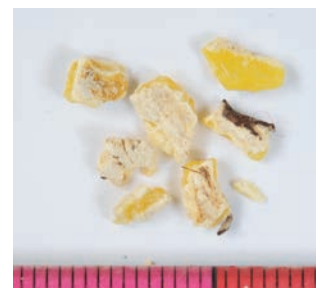


図90 資料No. 4

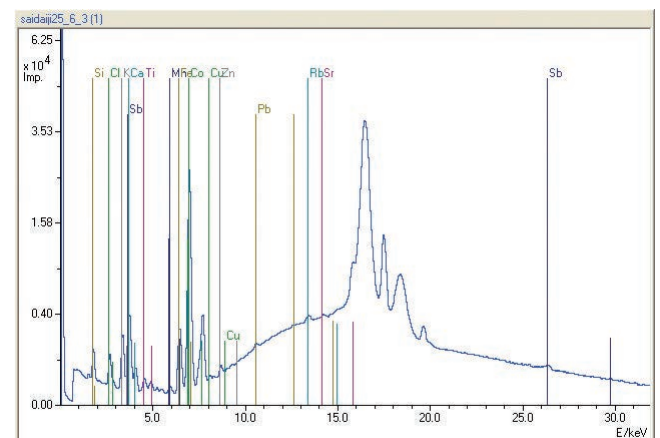
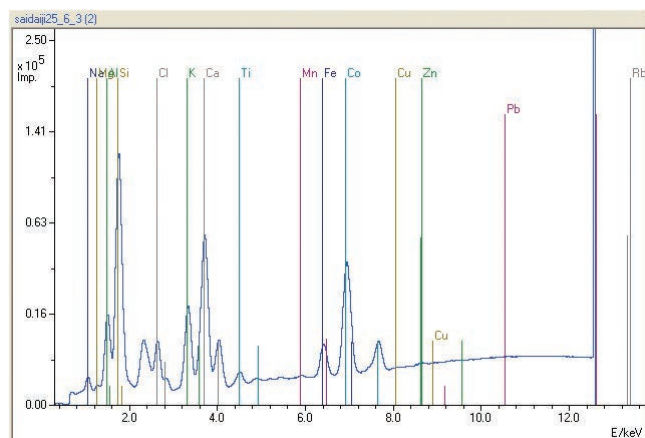


図91 資料No. 1の蛍光X線スペクトル (左: 低電圧測定、右: 高電圧測定)

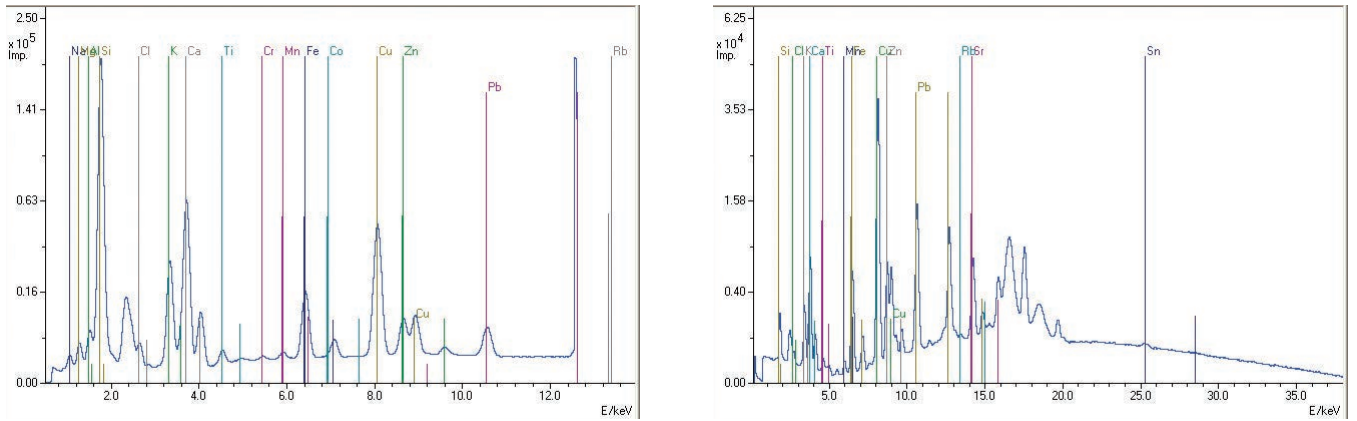


図92 資料No. 2の蛍光X線スペクトル (左：低電圧測定、右：高電圧測定)

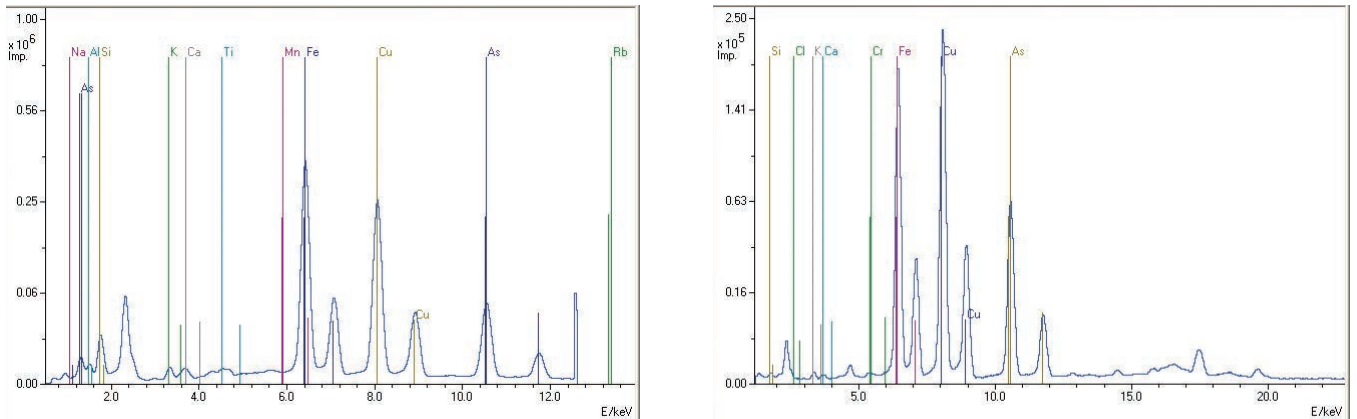


図93 資料 No. 3の蛍光X線スペクトル (左：低電圧測定、右：高電圧測定)

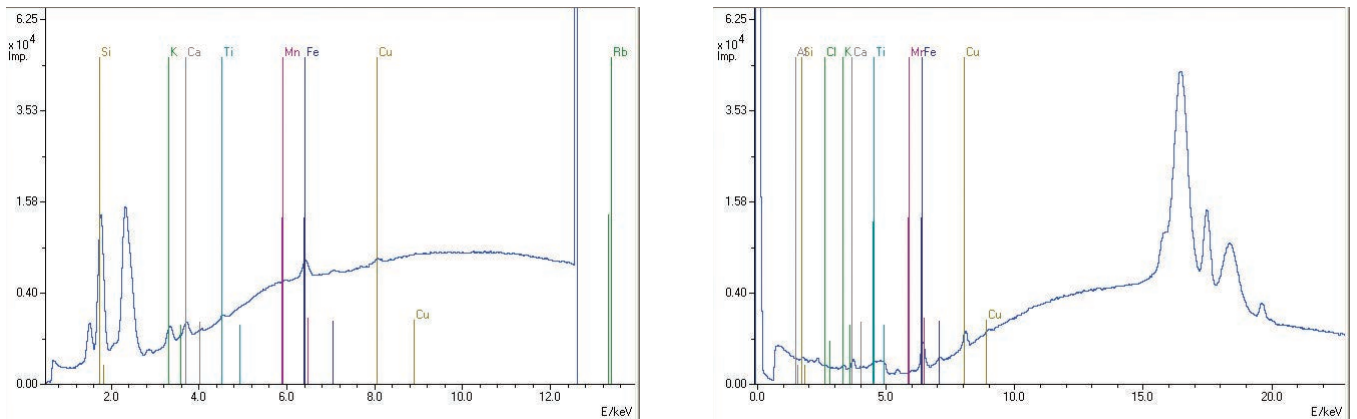


図94 資料No. 4の黄色部分の蛍光X線スペクトル (左：低電圧測定、右：高電圧測定)

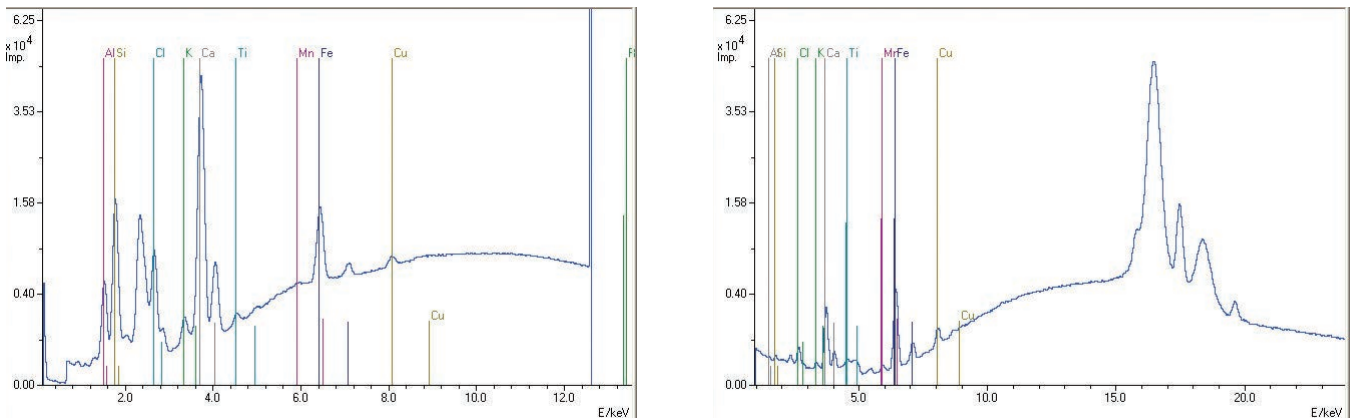


図95 資料 No. 4の黒色部分の蛍光X線スペクトル (左：低電圧測定、右：高電圧測定)

第3節 出土繊維製品の分析

I. はじめに

調査資料は、SD01の埋土を篩にかけながら水洗い（ウォーターセパレーション）して得られた破片化・断片化した繊維製品である。資料数は織物組織を持つ資料が9点、紐状の資料が5点であった。いずれもSD01古木層層のものである。本調査では、繊維製品の構造と素材にポイントを絞って調査をおこない報告する。

II. 各調査の方法

調査は、まず実体顕微鏡（Optical Microscope: OM）とデジタルマイクロスコープ（Digital Microscope: DM）による観察を行い、資料の形状や表面状態などを観察した。さらに微小部の観察が必要なものは、走査型電子顕微鏡（Scanning Electron Microscope: SEM）による観察と元素分布測定をおこなった。

引き続き、有機質もしくは有機質と思われる資料は、赤外分光分析（Fourier Transfer Infra-Red Spectroscopy: FT-IR）を行った。赤外分光分析法は、物質に赤外線照射すると、その物質を構成する原子団（分子や原子と原子の結合体）の種類に応じて、特定波長の赤外線を吸収する特性を利用した分析方法である。有機質からなる繊維や漆等の文化財の材料分析で広く利用されている分析法である。測定は顕微赤外（顕微FT-IR）測定もしくは全反射吸収（ATR）測定による。

各観察・分析法に用いた機器及び測定条件は以下のとおりである。

- 1) 観察：実体顕微鏡 Leica MC-6 M
- 2) 観察：デジタルマイクロスコープHirox Digital Microscope KH-7700
- 3) 観察：走査型電子顕微鏡 日本電子JSM-5400LV、一部で実施した元素分析の条件：視野倍率500倍、加速電圧20kV、電流1 nA、
- 4) 赤外分光分析：ATR法、Perkin Elmer Spectrum 100、測定波数領域 $4000\text{cm}^{-1}\sim 400\text{cm}^{-1}$ 、分解能 4cm^{-1} 、積算回数32回
- 5) 赤外分光分析：顕微FT-IR法、Perkin Elmer Spotlight 400、測定波数領域 $4000\text{cm}^{-1}\sim 750\text{cm}^{-1}$ 、分解能 8cm^{-1} 、積算回数640回、偏光子挿入し 0° から 90° まで 15° ごとに回転しスペクトルを採取

III. 調査結果

(1) 観察（図96～103）

織物組織を持つ資料9点（No. 1～9）は、実体顕微

鏡等による観察により、二種類の繊維製品に分類することができた（観察所見は表36）。そこで、2グループを便宜的にAグループ、Bグループと名付けることとした。まず、AグループはNo. 1 およびNo. 2、No. 9の3点で、濡れた状態で焦げ茶色、乾燥すると茶色を呈し、織密度（1 cm幅あたりの経糸と緯糸の本数）が13本×10本前後であった。経糸と緯糸はいずれも撚りが比較的弱く、一子-S撚であった。なお、乾燥すると硬くもろくなる。

一方、もうひとつのBグループはNo. 3～8で、水濡れ・乾燥のいずれの状態でも黒色を呈し、織密度がほぼ13本×11本前後であった。経糸と緯糸はいずれも一子-S撚で、撚りが強く、細い糸や太い糸が入り混じる。乾燥するとほつれるように微細片化した。

No.10は、黒色の薄層状の繊維をS撚りに撚った細紐状である。

No.11は、径0.8mm程度の細い繊維二本を緩くS撚りに撚り合わせ一本を成している。繊維は細いが硬質で、コの字型を保持しており、容易に形状は変わらない。

No.12は、幅2.6mm、厚み0.5mmほどの扁平な繊維である。観察すると、黒色と白色、もしくは黒と灰色の縞模様が規則正しく並んでおり、一見、木材の柾目面を見ているような印象を受けた。繊維は非常に硬いが弾力性があり、触れても形状が変わることはなく、押し引きすると元の形状へ戻る復元力を持っている。

No.13は、茶色の2～3 mmほどの二本の繊維をS撚り、径5 mmほどの縄状を呈している。繊維は非常に柔らかく、触れると容易に形状が変化するほどであった。

No.14は、長さ13mm、太さ3 mmほどのS撚りの紐状である。繊維は硬質でしなやかさはなく、容易に変化するほど脆弱であった。

(2) SEM観察と赤外分光分析

SEM観察写真を図104～116に、赤外分光分析のIRスペクトルを図117～122に示す。

まず、二種類の織物に対して、SEM観察と赤外分光分析を行った。

観察ではいずれの繊維も表面には土壌由来と思われる微細な粒子が付着していた。またA・Bグループともに繊維断面観察から、埋蔵環境中の腐朽により繊維実質が消失し、陰鋳型状に鋳物化するNegative Castingの状態にあると考えられた。

① Aグループ

SEM観察によれば、Aグループの表面は、繊維方向に滑らかで、繊維を横断するような条痕や亀裂はみられなかった。その断面は、10～30 μm ほどの不定形を成す単

繊維が集合した状態であった。一部に二つの三角形の断面形が背中合わせに存在するように観察できる部分もあり、絹糸の可能性が考えられる。ただし、絹糸としては、繊維が太いため、繊維種の断定は困難である。走査型電子顕微鏡付帯蛍光X線分析 (SEM-EDS) マッピング (図106) によれば、繊維表面に鉄や銅が蓄積した様子はみられず、ケイ素 (Si) やアルミニウム (Al) など土壤構成成分が集中していた。

図117はAグループに分類したNo. 1の経糸の赤外分光分析結果である。試料のIRスペクトルのほか比較のため代表的な繊維の精練絹糸 (図117-c) と大麻 (岩島麻) (図117-d) のIRスペクトルを掲載した。

No. 1 経糸は、3697、3622、3374、2927、2856、1710、1621、1440、1370、1268、1209、1032、1004、912、798、779 cm^{-1} に吸収帯が確認できる。一見して精練絹糸や大麻 (植物性繊維) と異なることがわかる。ここで特徴的に現れている2927、2856 cm^{-1} に注目する。この波数に顕著な吸収帯を示す物質として漆が挙げられる。参考に漆 (生漆) のIRスペクトルを図117-bに掲載した。その結果、No. 1 経糸のIRに酷似していることが確認できた。この測定では繊維の情報は全く得られなかった。

さらに繊維の偏光特性の有無を確認した (図118)。精練絹糸や大麻は、顕著な偏光スペクトルを示すことが知られており^{1)・2)}、明らかな偏光特性を有している。しかし、No. 1 経糸では、0°から90°へ偏光角度を変えてもIRスペクトルに大きな変化はみられず、漆のIRスペクトルだけが検出され、繊維を示す吸収帯は確認できなかった。

以上より、No. 1 経糸は、SEM写真にも示すとおり、繊維表面の漆のみが残存し、繊維実質は遺存していないものと考えられる。すなわち、No. 1 経糸は漆が付着した繊維であり、繊維実質は表面層を残し腐朽し消失しているが、繊維の表面に付着した漆は腐朽を免れ残存したものと考えられる。

No. 1 経糸と同様に観察されたAグループ資料について、繊維断面観察により繊維が陰鋳型状に鈹物化するNegative Castingの状態にあるように見えたのは、漆により形骸化した「繊維」を観察していたからに他ならない。繊維が形骸化していること、さらに繊維を示す吸収帯が確認できていないため化学的に繊維の種類を確認できないが、Aグループの繊維は表面に漆が付着した繊維であることが確認できた。

② Bグループ

SEM観察によれば、Bグループは、繊維方向に滑らか

であるが、繊維を横断する条痕らしき痕跡がみられた。その断面は、10~20 μm ほどの不定形を成す丸みを帯びた単繊維が集合した状態であった。一部に繊維実質が遺存しており、内腔を持つことが確認できた。このことより植物性繊維であることが確認できた (図113)。腐朽・破片化が進んでおり、現存の姿がオリジナルであるとは断定できないため大麻か苧麻、あるいは他の植物性繊維であるかは判断できない。

図119にBグループに分類したNo. 3 経糸のIRスペクトルを示す。検出した吸収帯は、3398、1697、1589、1384 cm^{-1} で、一見して大麻と異なることがわかる。

一見、Aグループのように漆を検出しているようにも見えるが、漆にみられる2930 cm^{-1} 、2850 cm^{-1} の炭化水素 (CH) の吸収帯が存在しない。

図120には下池山古墳出土縞織物の繊維 (精練絹糸) のIRスペクトルを掲載した。この資料は本来2つある吸収帯 (1634、1504 cm^{-1}) が繊維の劣化により、1628 cm^{-1} で一体化した状態を示す。具体的には、1504 cm^{-1} の吸収帯 (アミドII) が1634 cm^{-1} の吸収帯 (アミドI) にシフトし、劣化が進むにつれて最終的に一体化する。このように精練絹糸では劣化によりスペクトルが変化する場合もあるが、No. 3 経糸の1697及び1589 cm^{-1} 吸収帯はこの劣化した精練絹糸の吸収帯には一致しない。

現時点では、赤外分光分析では化学的に繊維の種類が特定できなかったものの、SEM観察により内腔を持つ不定形を成す丸みを帯びた単繊維が確認されていることから、植物性繊維とし、赤外分光分析による結果の判断は今後の課題としたい。

③ 織物以外の繊維製品

No.10は、植物の細胞壁が観察されることから、植物から作られていることは明らかである。

No.11は、SEM観察により、部分的に植物の細胞壁が観察されることから、植物性繊維を撚り合わせて作られていることがわかった。

No.10および11は組織観察から植物であることを確認したが、断面形態などから植物種を同定できるほどの情報が得られなかった。そのような資料に対して、赤外分光分析を行っても効果的な成果が期待できないため、植物性繊維であることの確認が行えたこの時点で、この2点の調査は終了した。

No.12は、SEMによる断面観察から、幅5 μm ほどの小さな繊維が集合した断面構成であることが確認できたが、特徴的な形状などを有している様子は見られなかったため、断面形状から繊維種を判断することはできな

った。赤外分光分析では、2925、2853 cm^{-1} に炭化水素(CH)に帰属される吸収帯が存在し、1640 cm^{-1} 付近から1330 cm^{-1} 付近までいくつかの吸収帯が見られ、1030~1000 cm^{-1} 付近および911 cm^{-1} には明瞭な吸収帯が確認できた(図121)。一見しただけでは、物質を特定することはできないが、2925、2853 cm^{-1} に見える炭化水素(CH)に帰属される吸収帯から漆の付着が考えられる。また、漆にはみられない吸収帯(911 cm^{-1})も存在することから、繊維に由来する吸収帯が現れているものと考えられるが、繊維を明確に判断できる吸収帯はない。IRスペクトルは、Aグループのものに似ているが、異なる部分もあり同一とは判断できない。

以上より、No.12は断面径の小さな繊維に漆が付着している可能性が考えられる。なお、繊維の種類は現段階では断定できない。

No.13およびNo.14は、脆弱化と細片化が著しく、SEM観察が行えなかった。赤外分光分析を行った結果、図122のような結果を得た。No.13は2919、2851 cm^{-1} に炭化水素(CH)に帰属される吸収帯が存在し、1730 cm^{-1} から700 cm^{-1} にかけて大小の吸収帯が現れている。2919、2851 cm^{-1} に炭化水素(CH)に帰属される吸収帯とその全体に及ぶIRスペクトルから漆の存在が強く示唆される。一方、No.14は、1700 cm^{-1} 付近と1360 cm^{-1} 付近に小さな吸収帯が、1590 cm^{-1} 及び1050 cm^{-1} 付近に大きな吸収帯が確認できた。いずれの資料も明瞭な吸収帯は確認できたものの、繊維に匹敵する吸収帯を特定することができなかった。

以上より、No.13は種類不明ながら漆付着の繊維である可能性が考えられる。No.14は、明瞭なIRスペクトルが得られていながら繊維種の同定には至らなかった。

IV. まとめ

本調査では14点の繊維製品について、観察と赤外分光分析から材質調査をおこなった。織組織を持つ2グループ(9点)では、各グループごとに漆付着繊維(繊維種類不明)と植物性繊維であることが確認できた。

漆付着繊維は繊維表面の漆のみが遺存し、繊維実質が消失した状態で、漆により繊維が陰鋳形状(Negative Casting)に残存していた。この繊維は形態的判断のみであるが、絹糸の可能性が考えられる。

5点の繊維製品では、うち2点が形態的判断により植物性繊維であることが確認できた。残る3点はIRスペクトルが確認できたものの繊維種の特定には至らなかった。

8世紀の溝跡からこれほど大量に繊維製品が検出された例は、繊維製品の歴史を検討するうえで極めて貴重な事例である。

なお、本調査を行うにあたり繊維鑑定および赤外分光分析について、京都工芸繊維大学名誉教授佐藤昌憲先生ならびに独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所特別研究員赤田昌倫氏に助言いただいた。記して感謝の意を表します。(奥山誠義)

参考文献

- 1) 赤田昌倫, 佐藤昌憲, 奥山誠義, 今津節生, 顕微FT-IRを用いた遺跡出土絹織物の劣化状態の分析, Journal of Textile Engineering, Vol.55, No. 5, 2009
- 2) 奥山誠義, 佐藤昌憲, 赤田昌倫, 森脇太郎, 放射光顕微赤外分光分析法による出土繊維文化財の材質同定及び劣化状態の解析, 分析化学, Vol. 59, No. 6 2010

表34 植物性繊維(大麻)のIR吸収帯帰属表

Wavenumber (cm^{-1})	Assignment
3415	H-bonded OH stretch
2892	C-H stretching
1424	δ CH ₂ Scissoring motion
1372	CH bending (deformation stretch)
1160	Asym.Bridge C-O-C
1110	Asym.Bridge C-O-C
1066	Asym.In-plane ring stretching
1034	C-O stretching
897	Asym.out-of-phase ring stretch, C ₁ -O-C ₄ ; β -glucosidic bond

表35 精練絹糸のIR吸収帯帰属表

Wavenumber (cm^{-1})	Assignment
3290	N-H stretching
2983	C-H stretching
2934	C-H stretching
1649	Amide I, C=O stretching mode
1520	Amide II, N-H bending, C-N stretching
1454	CH ₃ -N, CH ₃ -C bending
1393	CH ₃ -N, CH ₃ -C bending
1234	Amide III, N-H bending, C-N stretching
1171	CH ₃ -N, CH ₃ -C bending
1050	CH ₃ -N, CH ₃ -C bending

表 36 織組織を持つ繊維製品の組織観察表

	含水時		乾燥時		織密度 (本/cm)		太さ (平均:mm)		撚り	備考
	色調	性状	色調	性状	経糸 × 緯糸	経糸 緯糸	経糸 緯糸			
No.1	焦茶色	しなやか	茶色	硬く脆い	13 × 11	0.74	0.76	一子 - S撚り		
No.2	焦茶色	しなやか	茶色	硬く脆い	13 × 10	0.65	0.79	一子 - S撚り	経緯共により撚りが弱い	
No.3	黒色	しなやか	黒色	ほつれやすく微細片化	13 × 11	0.44	0.5	一子 - S撚り	緯糸は細糸・太糸交互に入る	
No.4	黒色	しなやか							資料少量のため未調査	
No.5	黒色	しなやか	黒色	ほつれやすく微細片化	12 × 9	0.55	0.79	一子 - S撚り	経緯共に撚りが強い	
No.6	黒色	しなやか	黒色	ほつれやすく微細片化	13 × 11	0.65	0.63	一子 - S撚り		
No.7	黒色	しなやか	黒色	ほつれやすく微細片化	13 × 11	0.49	0.59	一子 - S撚り		
No.8	黒色	しなやか	黒色	ほつれやすく微細片化	12 × 11	0.5	0.51	一子 - S撚り	織りに粗密がある	
No.9	焦茶色	しなやか	茶色	硬く脆い	13 × 9	0.56	0.65	一子 - S撚り	緯糸は撚りが弱い	

デジタルマイクロスコープ観察結果

Aグループ (No.1 およびNo.2、No.9)

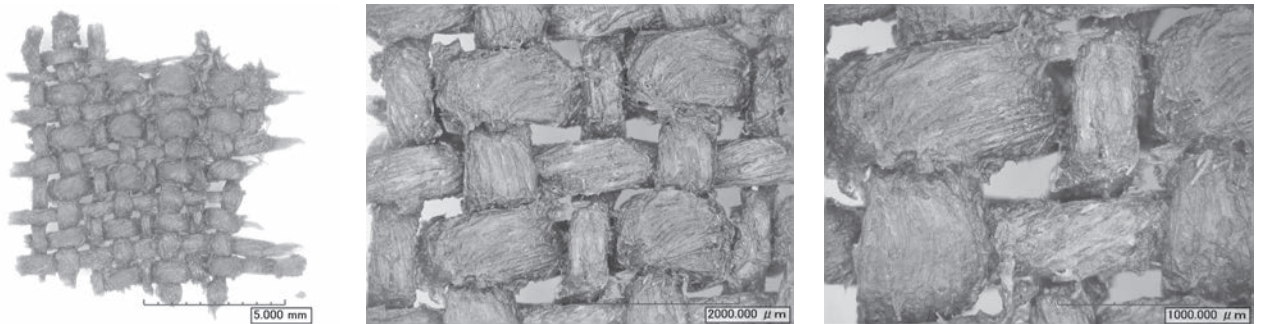


図 96 No.1 の観察記録 (左から×20、×60、×100)

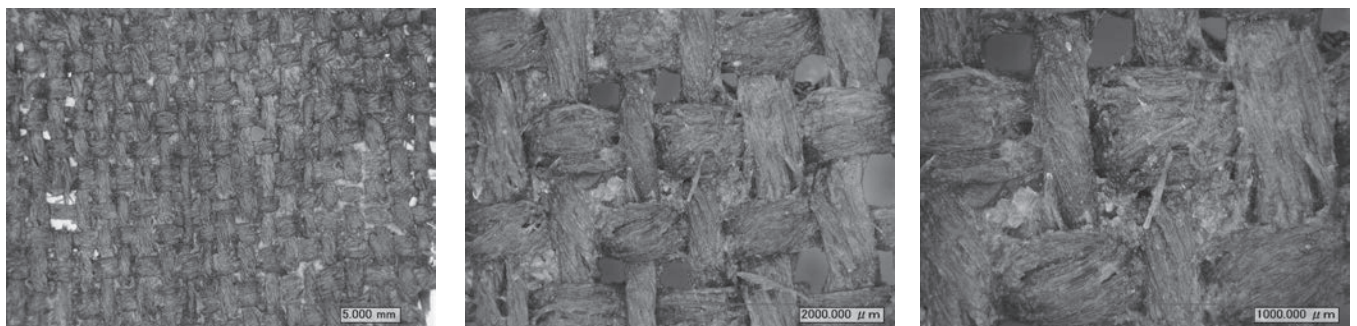


図 97 No.9 の観察記録 (左から×20、×60、×100)

Bグループ (No.3～8)

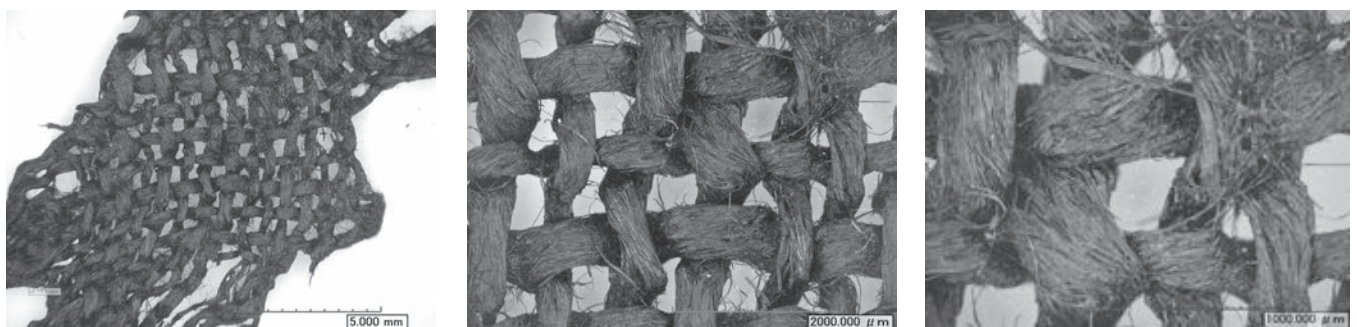


図 98 No.3 の観察記録 (左から×20、×60、×100)

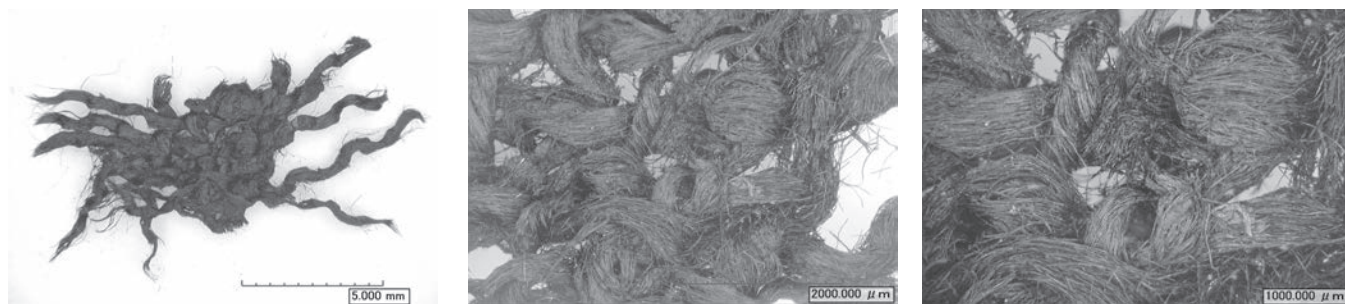


図99 No. 4の観察記録 (左から×20、×60、×100)

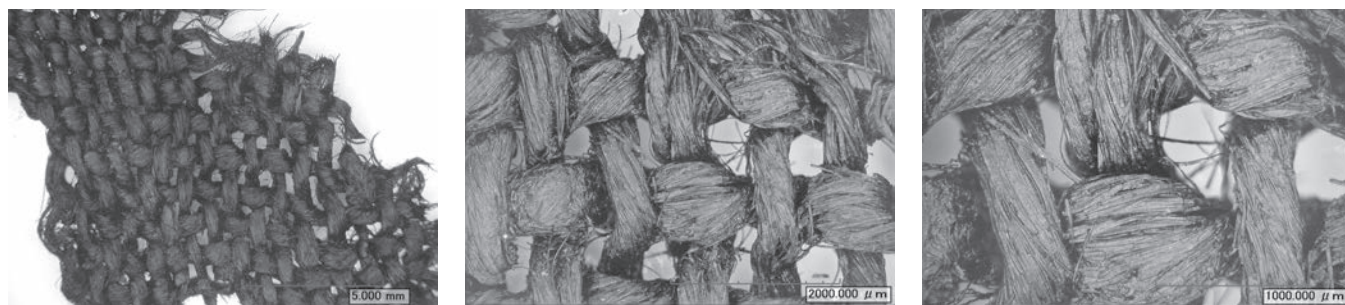


図100 No. 5の観察記録 (左から×20、×60、×100)



図101 No. 6の観察記録 (左から×20、×60、×100)



図102 No. 7の織りが粗い(目が粗い)部分の観察記録 (左から×20、×60、×100)

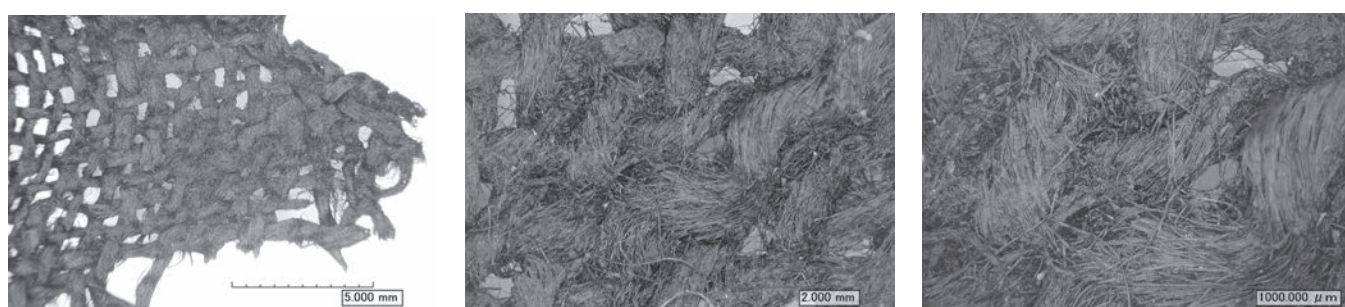


図103 No. 7の織りが緻密(目が密)部分の観察記録 (左から×20、×60、×100)

走査電子顕微鏡 (SEM) 観察結果

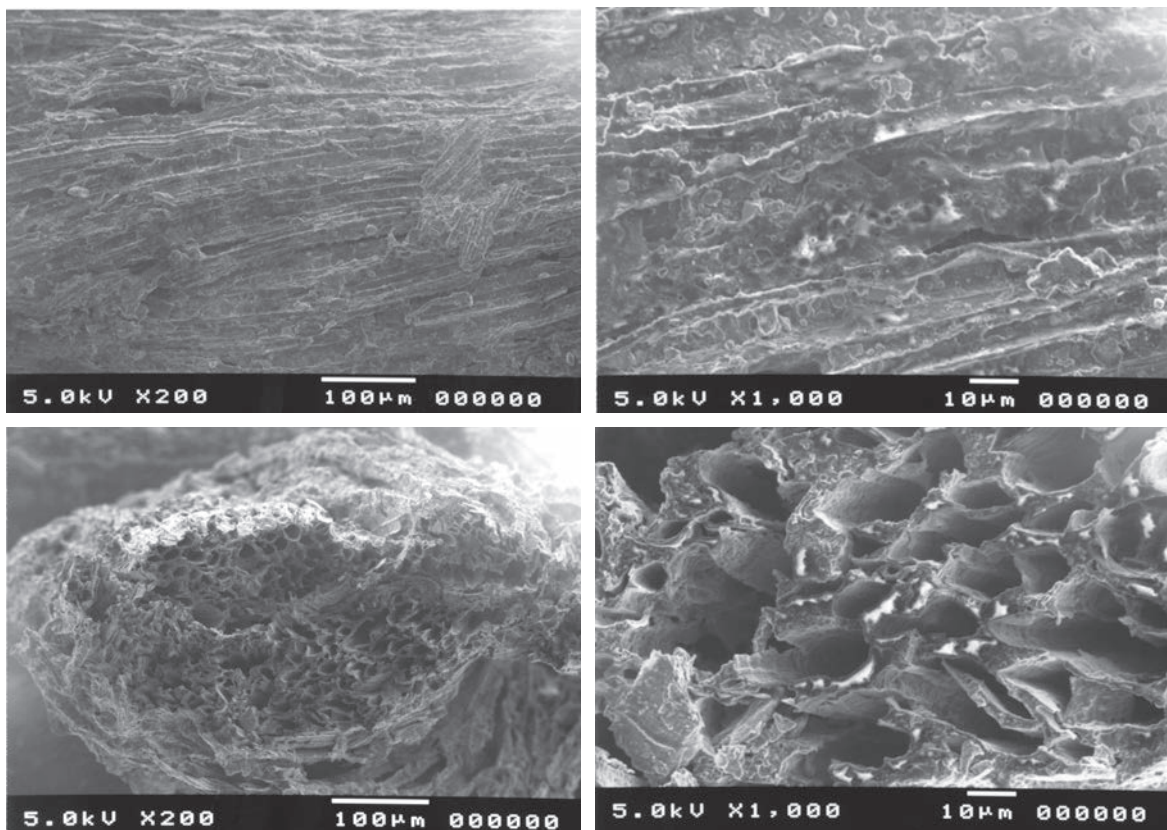


図104 No.1の経糸表面(上)・断面(下) SEM写真

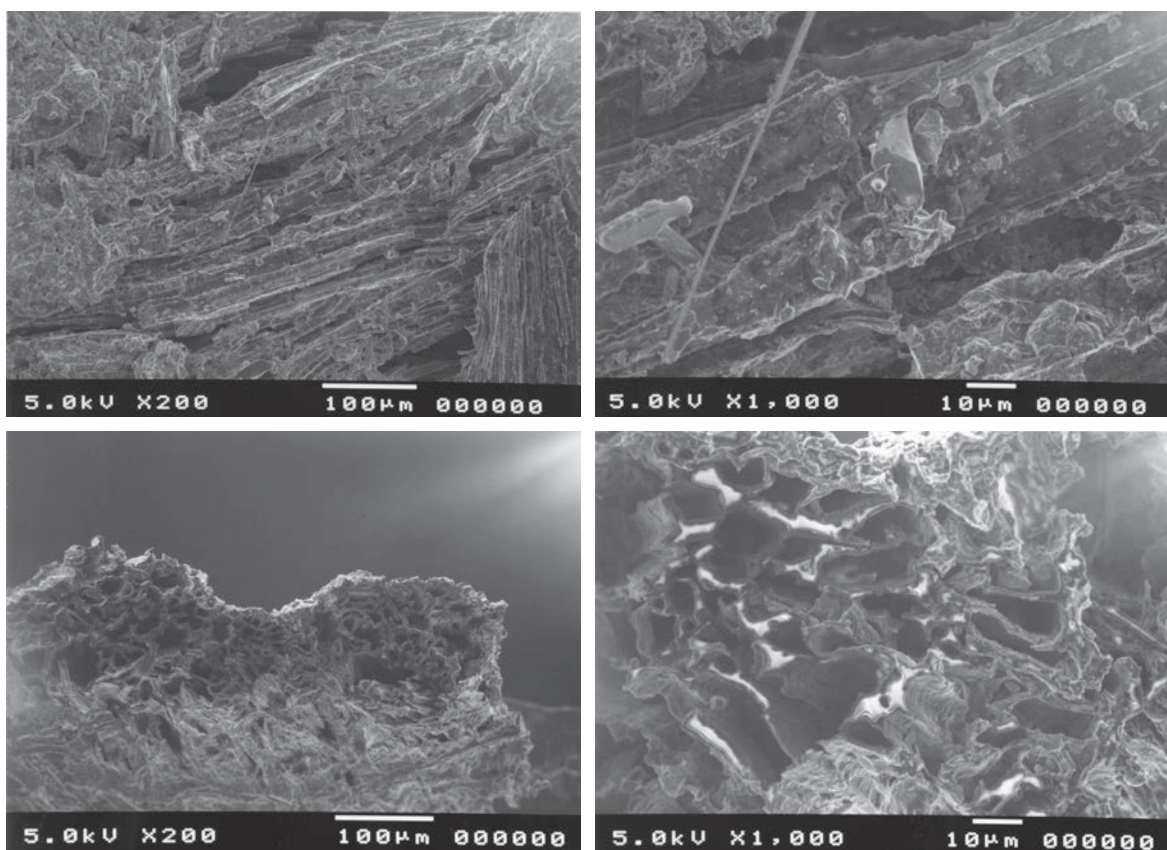


図105 No.1の緯糸表面(上)・断面(下) SEM写真

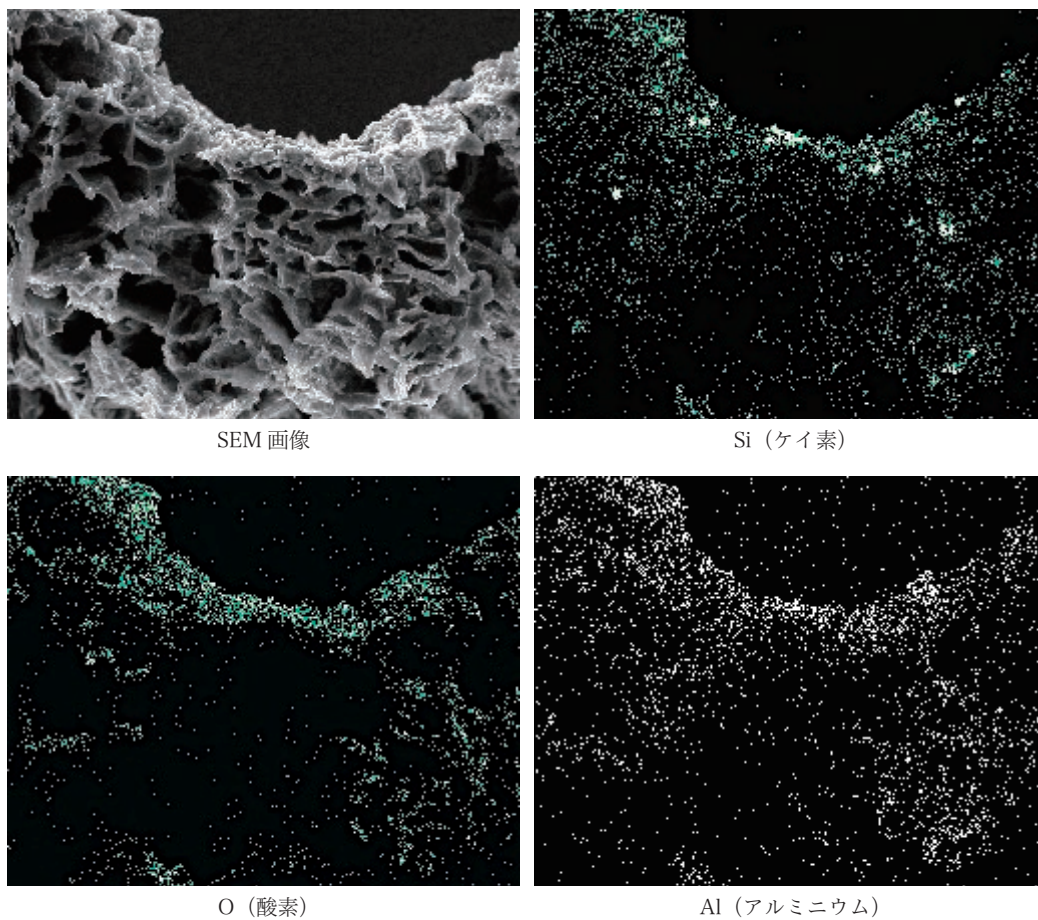


図106 No. 1 の緯糸断面のSEM-EDS Mapping画像

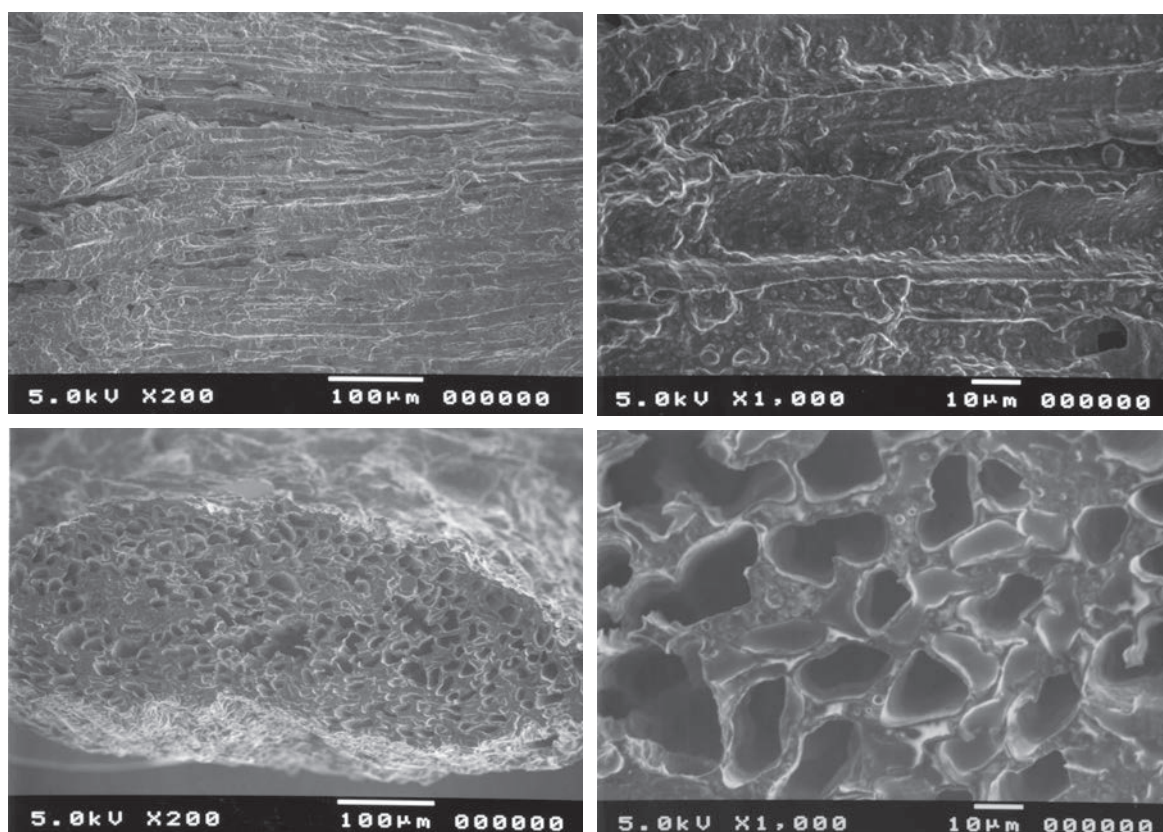


図107 No. 2 の経糸表面 (上)・断面 (下) SEM写真

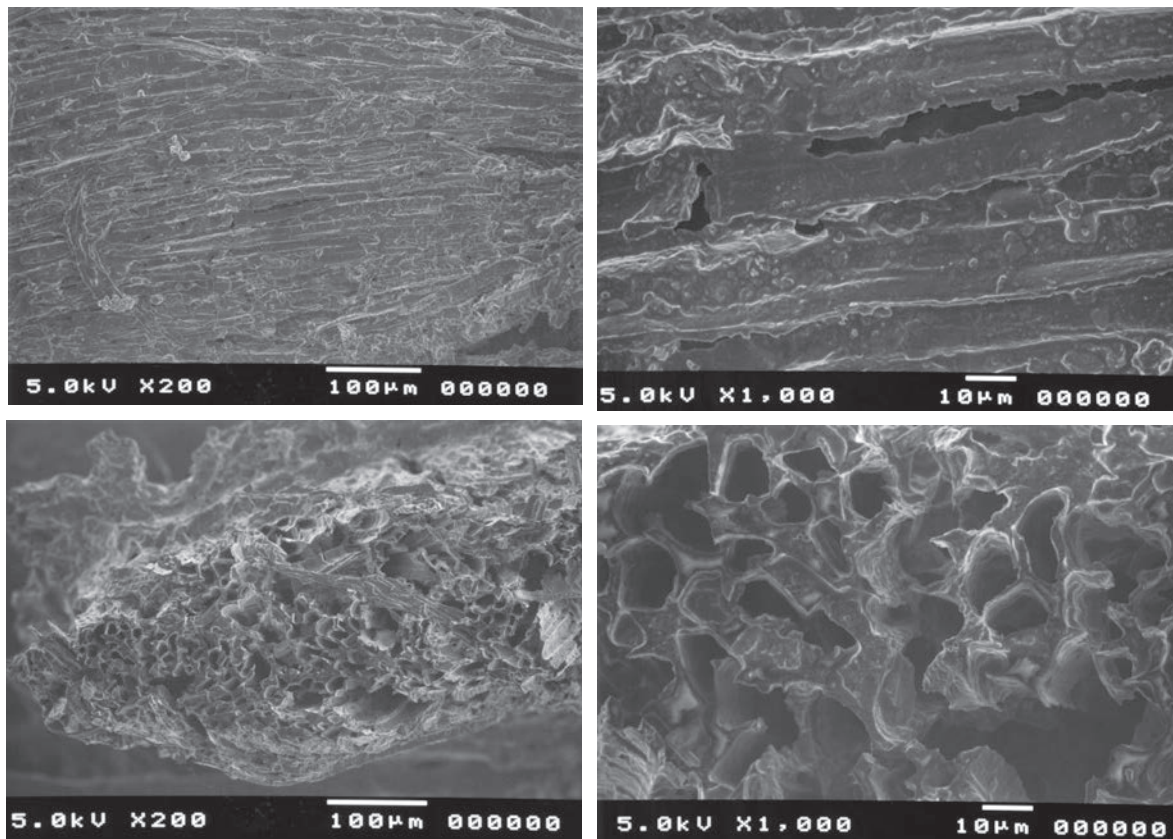


図108 No. 2の緯糸表面(上)・断面(下) SEM写真

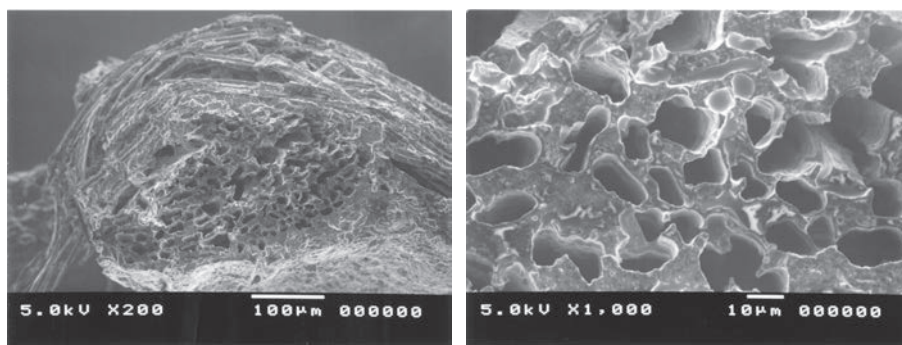


図109 No. 9の経糸断面 SEM写真

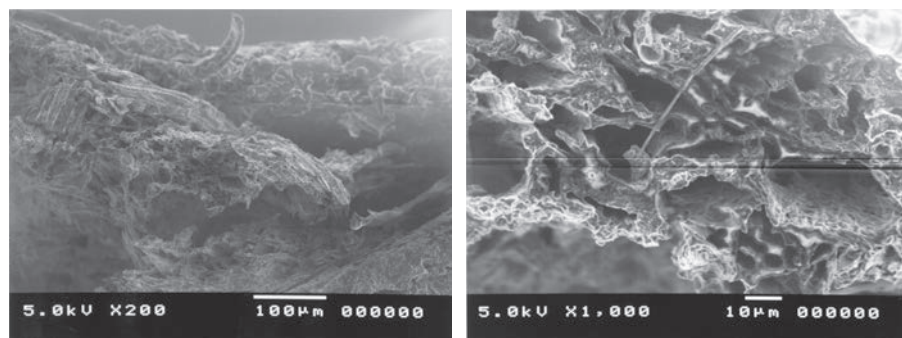


図110 No. 9の緯糸断面 SEM写真

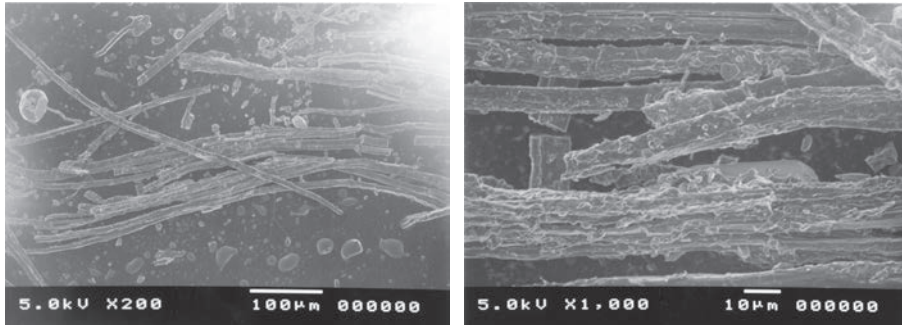


図111 No.9の経糸繊維表面 SEM写真

Bグループ (No. 3～8) SEM写真

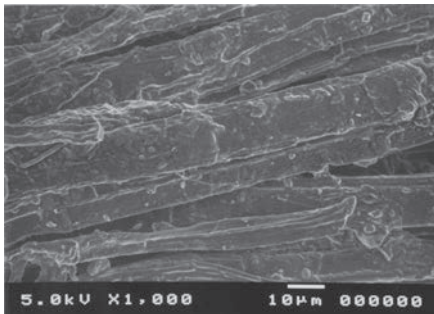


図 112 No. 4 の緯糸表面 SEM 写真

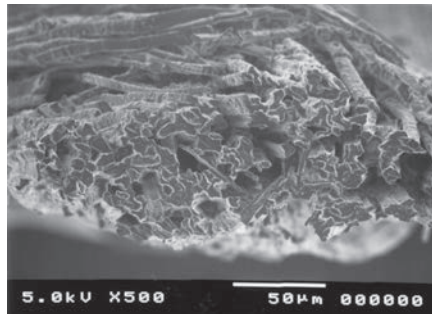


図113 No. 4の緯糸断面 SEM写真

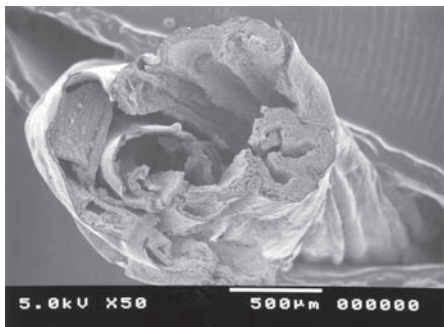
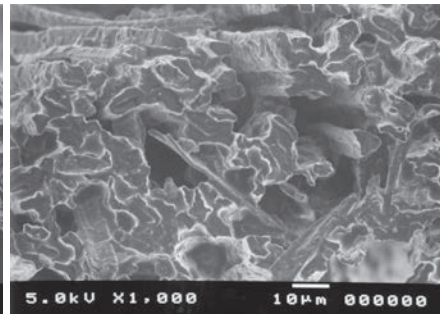


図 114 No.10の断面 SEM 写真

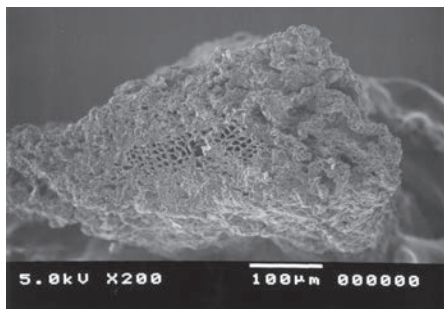
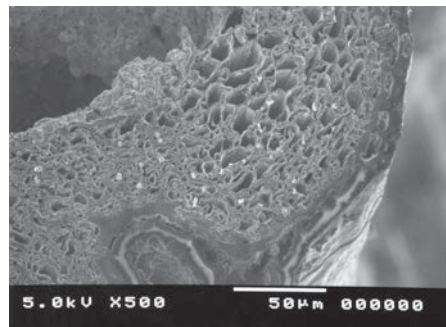


図 115 No.11の断面 SEM 写真

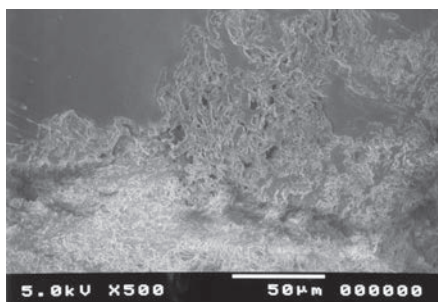
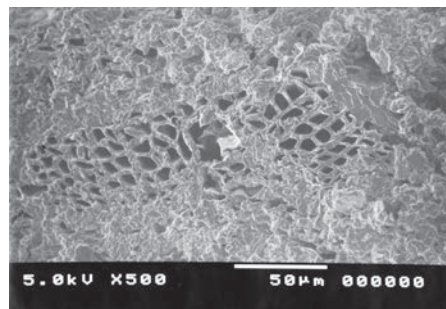
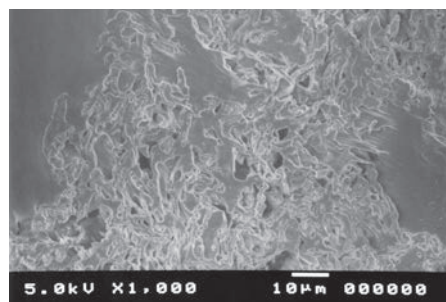


図 116 No.12の断面 SEM 写真



赤外分光 (FT-IR) 分析

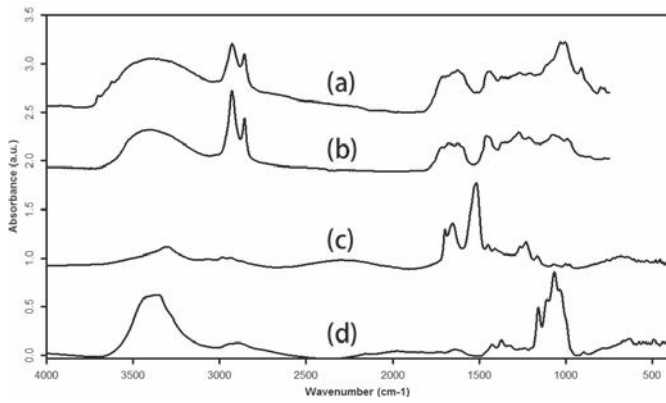


図117 Aグループ 赤外分光分析の結果
(a : No. 1 経糸、 b : 漆、 c : 精練絹糸、 d : 大麻)

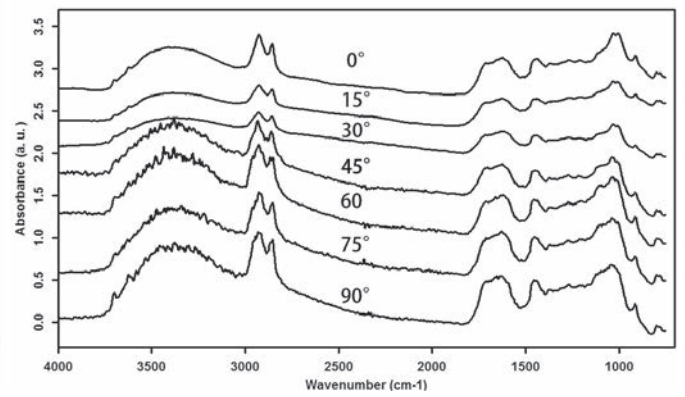


図118 No. 1 (Aグループ) 経糸の偏光IRスペクトル

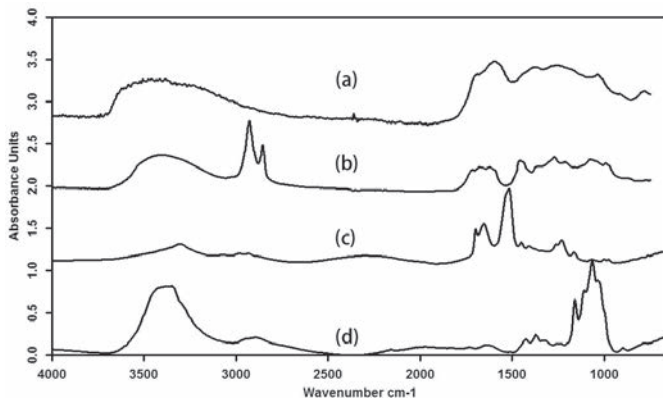


図119 No. 3 (Bグループ) 経糸の赤外分光分析の結果
(a : No. 3 経糸、 b : 漆、 c : 精練絹糸、 d : 大麻)

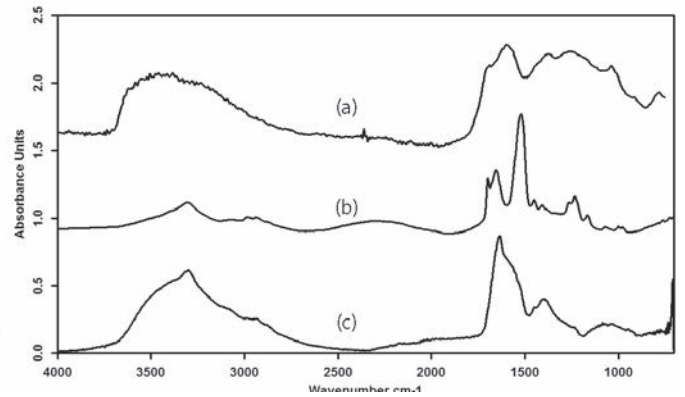


図120 No. 3 (Bグループ) 経糸と下池山古墳出土絹織物絹糸とのIRスペクトル比較
(a : No. 3 経糸、 b : 精練絹糸、 c : 下池山古墳出土絹織物絹糸 (劣化絹糸))

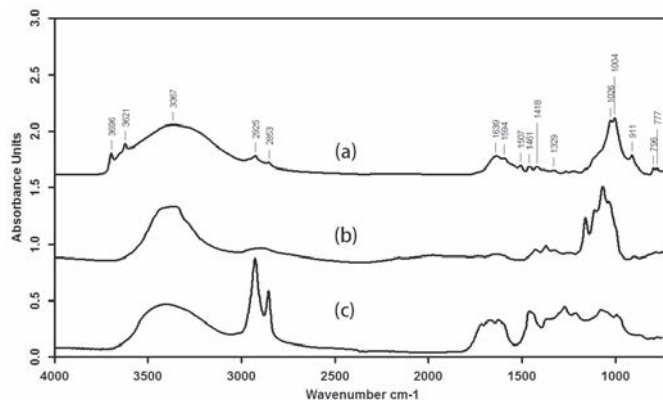


図121 No.12の赤外分光分析結果
(a : No.12、 b : 植物性繊維 (大麻)、 c : 漆 (生漆))

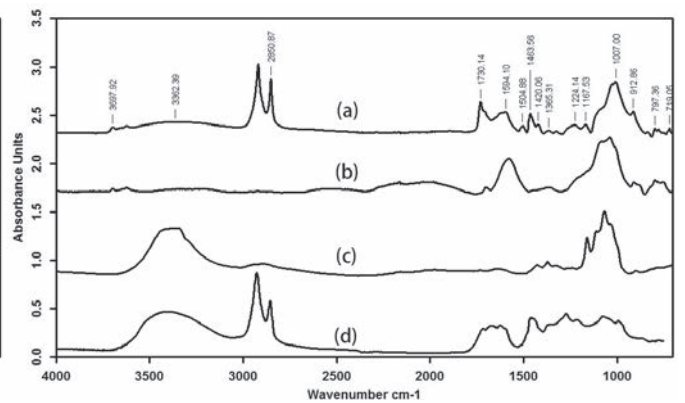


図122 No.13およびNo.14の赤外分光分析結果
(a : No.13、 b : No.14、 c : 植物性繊維 (大麻)、 d : 漆 (生漆))

第4節 木製品付着物の蛍光X線分析

I. はじめに

SD01から、表面に金箔とみられる金属片が付着した木製の部材片（88頁図72-189）が出土した。そこで、この表面付着物について蛍光X線分析を行い、その材質を調査した。

II. 試料と方法

分析対象は木製品表面に付着する膜状の物質で、金色で金属光沢を有することから金箔と予想された。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type II）を使用した。装置の仕様は、上面照射方式で、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム（Rh）ターゲット、X線ビーム径が100 μ m、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）で、検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）である。

一般に出土木材は、乾燥すると収縮、変形が起きるため、測定時においても、通常の遺物測定とは異なり、常に湿潤状態を保ちつつ測定する必要がある。そこで対策として、粉末試料や液体試料等の蛍光X線分析に用いられるポリエステル製のマイラーフィルムで遺物の測定面を覆い、水を入れた液体試料測定用サンプルカップに遺物を入れて保持し、測定した。

測定条件は、50kV、0.16mA（自動設定）、測定時間3000sに設定し、非破壊で行った。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメーター法（以下FP法）による半定量分析で、装置付属ソフトで行った。定量値は正確度が低いため、参考程度の解釈にとどめておく。

III. 結果および考察

図123に測定により得られたスペクトル図、FP法による半定量分析結果を示す。金（Au）が極めて高く検出され、他に、リン（P）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、鉄（Fe）、銅（Cu）が検出された。

分析の結果、表面付着物の材質は金であることが判明した。このことから、表面付着物は金箔と考えられる。また、銅が少量検出されており、これも金箔に由来する可能性がある。その他少量検出されたリンやカルシウムなどの元素は、木材や埋蔵環境等に由来するものと考えられる。なお、金箔に少量含まれることの多い銀（Ag）については検出限界以下であった。

IV. まとめ

SD01から出土した木製品の付着物について、蛍光X線分析により材質を調査した。その結果、当該付着物は金であることが確認された。

（株式会社古環境研究所）

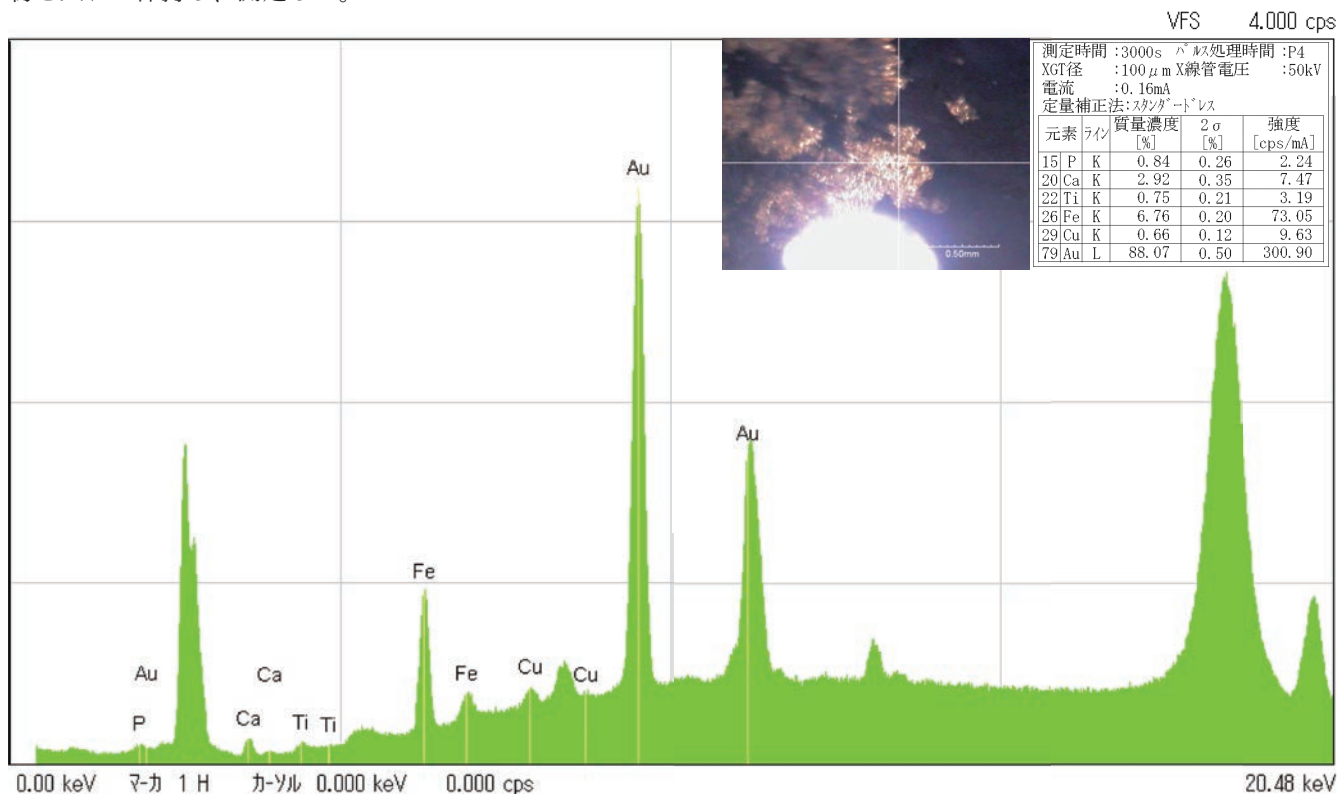


図123 蛍光X線分析結果

第5節 花粉分析

I. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

II. 試料

分析試料は、SD01 (LG-78区) 埋土から採取した試料A～Eの計5点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図 (図124) に示す。

III. 方法

花粉の分離抽出は、中村 (1973) の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム (12水) 溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理 (無水酢酸9 : 濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎) を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉1973および中村1980をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (—) で結んで示す。イネ属については、中村1974・1977を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

IV. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉28、樹木花粉と草本花粉を含むもの7、草本花粉26、シダ植物胞子2形態の計63

である。これらの学名と和名および粒数を表37に示した。花粉数を200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを作成し図125に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した (図126)。また、寄生虫卵についても同定した結果、3分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ヤナギ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、シキミ属、アカメガシワ、モチノキ属、カエデ属、ハイノキ属、トネリコ属、リョウブ、ツツジ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ゴマノハグサ科、ニワトコ属—ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属—ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、アリノトウグサ属—フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、オオバコ属、オミナエシ科、タンポポ科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵、不明虫卵

(2) 花粉群集の特徴

SD01 (試料E～A) において、下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

1) 試料E

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、約60%を占める。樹木花粉ではマツ属複雑管束亜属が比較的高率に出現しコナラ属アカガシ亜属、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属などが伴われ、ツツジ科、シキミ属なども出現する。草本花粉ではイネ科 (イネ属型を含む) を主に、ヨモギ属、アリノトウグサ属—フサモ属、アカザ科—ヒユ科などが出現する。鞭虫卵がわずかに検出される。

2) 試料D

樹木花粉と草本花粉の占める割合がほぼ同じになる。シダ植物孢子が約20%を占め花粉密度は低くなる。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、セリ亜科、チドメグサ亜科が増加する。樹木花粉ではハンノキ属が増加し、マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属が減少する。

3) 試料C

樹木花粉が約60%を占めるようになり、密度は高くなる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が増加し、ハンノキ属が出現する。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが出現する。回虫卵、鞭虫卵がわずかに検出される。

4) 試料B

試料Cとほとんど同じ出現傾向を示す。イネ科には集塊が認められ、ミズアオイ属が増加する。鞭虫卵、不明虫卵がわずかに検出される。

5) 試料A

草本花粉の占める割合が高くなり、樹木花粉の占める割合とほぼ同じになる。草本花粉ではオモダカ属、アカザ科-ヒユ科、タデ属サナエタデ節、ヨモギ属が増加し、ソバ属が出現する。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、スギが増加し、ハンノキ属は減少する。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

花粉群集の特徴から、下位より植生の復元を行う。

1) 試料E

堆積層は木屑層で加工木、自然木などが多く含まれる。出現した樹木花粉は、比較的高率に出現するマツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属などで、風媒花が多く近隣の森林植生を反映している可能性が高い。ただし、ツツジ科、シキミ属なども出現しており、溝の周囲ないし境内の植栽も考えられる。また、草本花粉のイネ科、ヨモギ属、アリノトウグサ属-フサモ属、アカザ科-ヒユ科などは溝周辺に生育していたと考えられる。ミズアオイ属などの水田雑草を伴ってイネ属型が出現することから、周辺に水田の分布も示唆される。鞭虫卵がわずかに検出され、生活排水などが流れ込む溝であったと思われる。

2) 試料D、試料C、試料B

試料Eに比べると花粉密度が低くなり、堆積時間が速かった可能性が考えられ、マツ属複維管束亜属がやや減少し、湿地性のハンノキ属が増加し、二次林である可能性が高い。試料C、試料Bでは花粉密度が高くなり、同

様の変化を示す。

3) 試料A

草本花粉の占める割合が高くなり、草本花粉のオモダカ属、アカザ科-ヒユ科、タデ属サナエタデ節、ヨモギ属が増加する。ソバ属が出現することから、ソバなどを栽培した畑の分布が示唆される。近隣の森林は、マツ属複維管束亜属、スギの針葉樹が増加し、湿地性のハンノキ属は減少する。

VI. まとめ

SD01 (LG-78区) 埋土の花粉分析を行った結果、下部より試料Eではマツ属複維管束亜属 (アカマツないしクロマツ) とコナラ属アカガシ亜属を主とする森林が近隣に分布し、ツツジ科などの樹木が生育し、溝の周囲はイネ科やヨモギ属などの人里の草本が生育していた。試料D、試料C、試料Bの層準になると、マツ属複維管束亜属 (アカマツないしクロマツ) がやや減少し、湿地性のハンノキ属の二次林が増加したと考えられる。試料Aの層準では、オモダカ属、アカザ科-ヒユ科、タデ属サナエタデ節、ヨモギ属が増加し、ソバ属が出現し、農耕地的な様相を呈してきた。 (株式会社古環境研究所)

参考文献

金原正明 「花粉分析法による古環境復元」『新版古代の日本』第10巻 (古代資料研究の方法) 角川書店, p.248-262, 1993
 島倉巳三郎 『日本植物の花粉形態』大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p, 1973
 中村純 『花粉分析』古今書院, p.82-110, 1967
 中村純 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究』13, p.187-193, 1974
 中村純 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号, p.21-30, 1977
 中村純 『日本産花粉の標徴』大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p, 1980

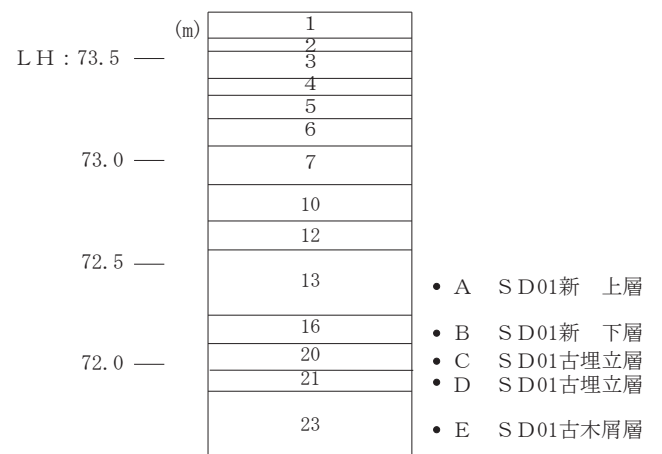


図124 試料採取箇所模式柱状図 (土層番号は20頁図30に対応)

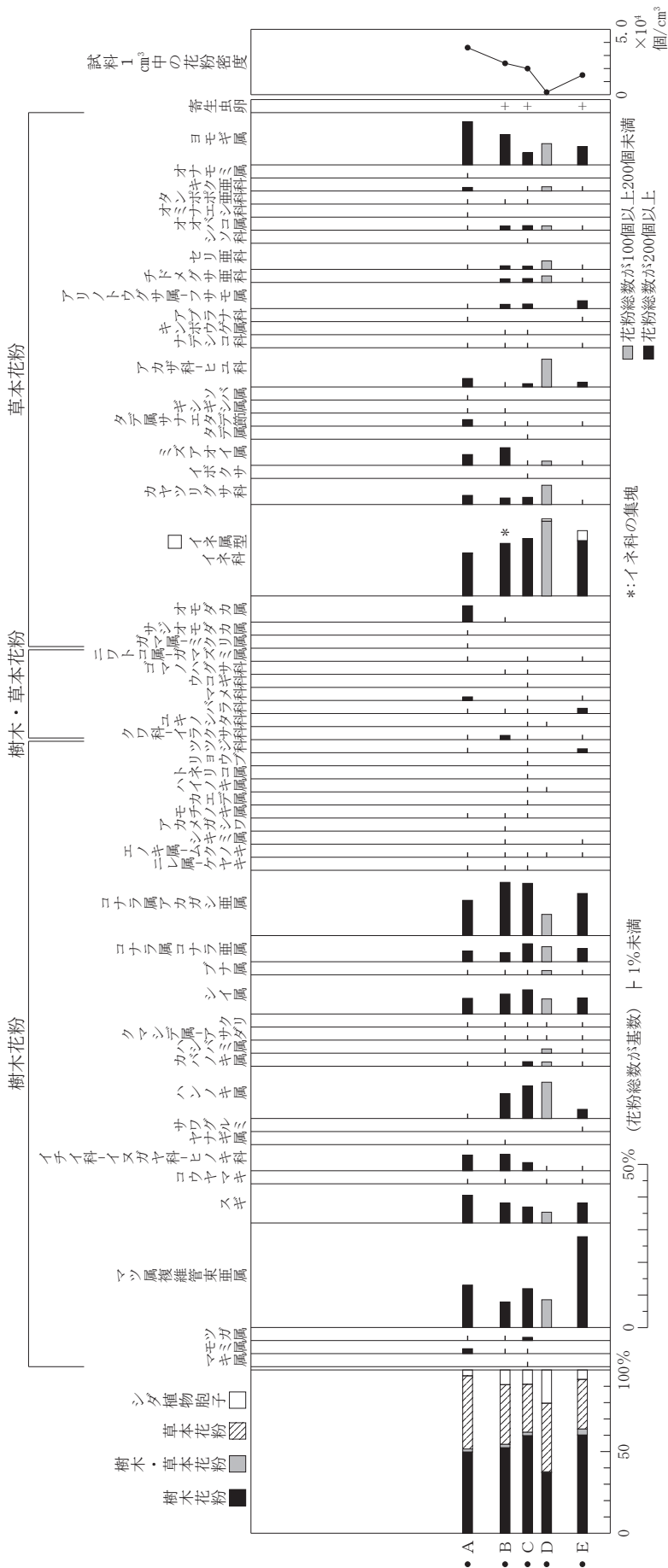
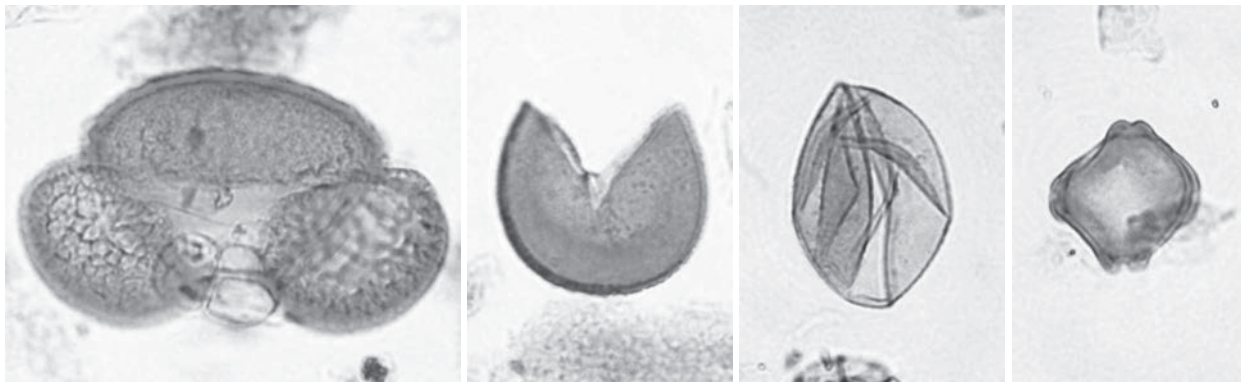


図125 SD01 (LG-78区) 採取試料における花粉ダイアグラム

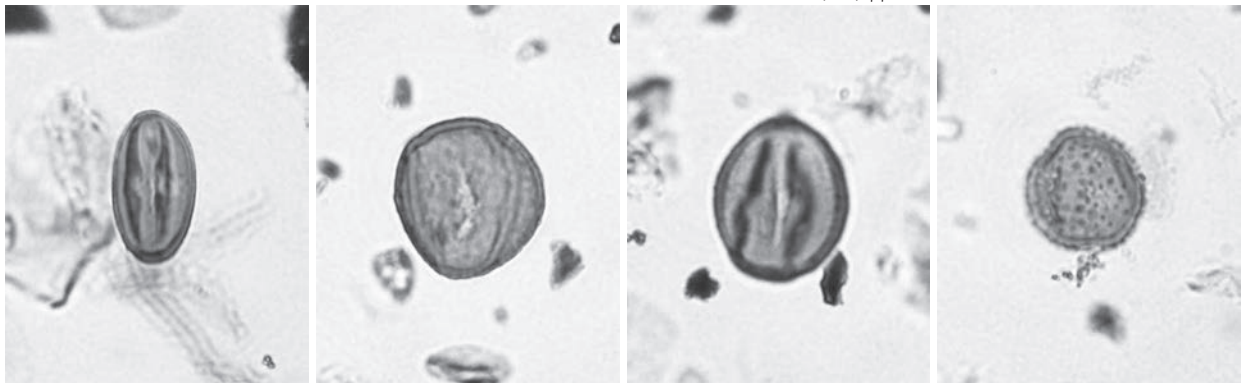
表37 SD01 (LG-78区) における花粉分析結果

学名	分類群	和名	SD01 (LG-78区)					
			A	B	C	D	E	
Arboreal pollen		樹木花粉						
<i>Podocarpus</i>		マキ属			1			
<i>Abies</i>		モミ属	7	1	2			
<i>Tsuga</i>		ツガ属	1	2	5			
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	60	36	58	13	118	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	39	28	24	5	26	
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ	1	1			1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	22	23	12	1	2	
<i>Salix</i>		ヤナギ属	3	1				
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ						1
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	4	35	49	17	12	
<i>Betula</i>		カバノキ属	4	2	7	2	2	
<i>Corylus</i>		ハシバミ属		1		2	1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	3	4	2	1	3	
<i>Castanea crenata</i>		クリ	1	3	3	1	2	
<i>Castanopsis</i>		シイ属	22	28	36	7	21	
<i>Fagus</i>		ブナ属	1	4	3	2	1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	15	13	27	7	17	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	50	75	78	10	55	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ	1	4	3			
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ	2	1	3	1	4	
<i>Illicium</i>		シキミ属		1				1
<i>Mallotus japonicus</i>		アカメガシワ		1				
<i>Ilex</i>		モチノキ属	1	2				
<i>Acer</i>		カエデ属			1			
<i>Symplocos</i>		ハイノキ属			1	1		
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属			1			
<i>Clethra barbinervis</i>		リョウブ			1			
Ericaceae		ツツジ科	1		1			5
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	2	6	2		3	
Saxifragaceae		ユキノシタ科			2	1		
Rosaceae		バラ科	1	2	2		7	
Leguminosae		マメ科	5		1		2	
Araliaceae		ウコギ科			1			
Scrophulariaceae		ゴマノハグサ科		1	1			
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属	1		1		4	
Nonarboreal pollen		草本花粉						
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属	1					
<i>Alisma</i>		サジオモダカ属	1					
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属	23	1				
Gramineae		イネ科	60	74 *	86	35	72	
<i>Oryza type</i>		イネ属型	1			1	13	
Cyperaceae		カヤツリグサ科	13	9	11	9	4	
<i>Aneilema keisak</i>		イボクサ			1			
<i>Monochoria</i>		ミズアオイ属	15	25	3	2	1	
<i>Polygonum</i>		タデ属			1			
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節	9	1	1		1	
<i>Rumex</i>		ギンギシ属	1	1				
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属	1					
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	12	4	5	13	6	
Caryophyllaceae		ナデシコ科	1	3	2		1	
<i>Ranunculus</i>		キンポウゲ属		2	1			
Cruciferae		アブラナ科	1				1	
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>		アリノトウグサ属-フサモ属	3	6	7		10	
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科		5	6	3	1	
Apioidae		セリ亜科	1	5	5	4	1	
Labiatae		シソ科			1			
<i>Plantago</i>		オオバコ属	2	6	7	2	1	
Valerianaceae		オミナエシ科	1					
Lactuicoideae		タンポポ科	1	1	1			
Asteroideae		キク亜科	5		2	2	1	
<i>Xanthium</i>		オナモミ属	1					
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	61	43	18	10	24	
Fern spore		シダ植物胞子						
Monolate type spore		単条溝胞子	6	21	10	15	4	
Trilate type spore		三条溝胞子	11	25	37	24	22	
Arboreal pollen		樹木花粉	238	266	321	71	272	
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	9	9	10	1	16	
Nonarboreal pollen		草本花粉	214	186	158	81	137	
Total pollen		花粉総数	461	461	489	153	425	
Pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉密度	3.6	2.4	2.0	1.9	1.5	
			×10 ⁻³	×10 ⁻³	×10 ⁻⁴	×10 ⁻³	×10 ⁻⁴	
Unknown pollen		未同定花粉	13	12	17	14	13	
Fern spore		シダ植物胞子	17	46	47	39	26	
Helminth eggs		寄生虫卵						
<i>Ascaris(tumbricoides)</i>		回虫卵			1			
<i>Trichuris(trichiura)</i>		鞭虫卵		3	6		1	
Unknown eggs		不明虫卵		1				
Total		計	0	4	7	0	1	
Helminth eggs frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度	0.0	4.0	7.0	0.0	1.1	
				×10	×10		×10	
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	

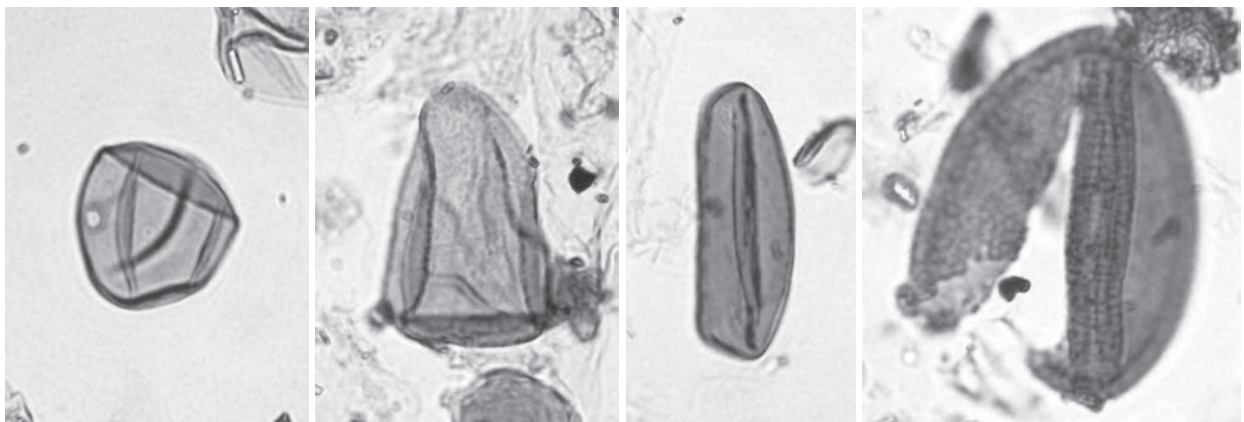
*:集塊



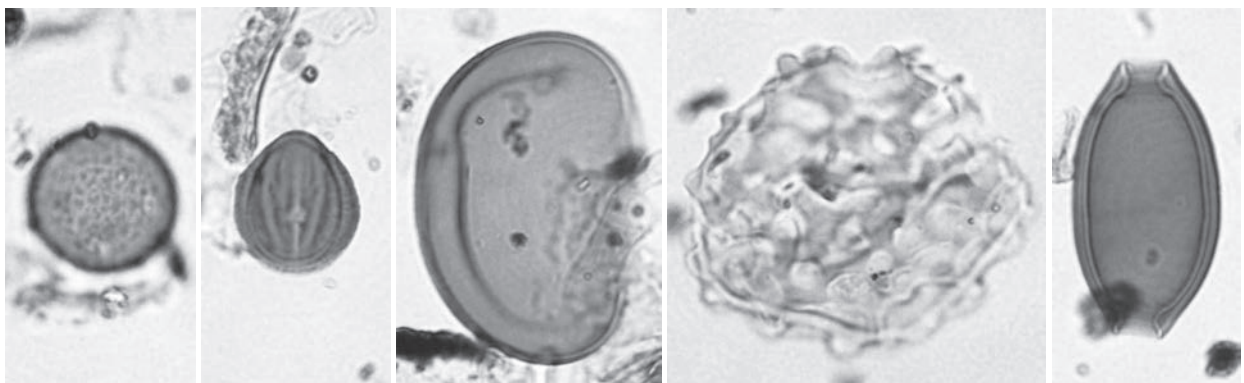
1 マツ属複維管束胚属 2 スギ 3 イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科 4 ハンノキ属



5 シイ属 6 コナラ属コナラ胚属 7 コナラ属アカガシ胚属 8 オモダカ属



9 イネ科 10 カヤツリグサ科 11 ミズアオイ属 12 ソバ属



13 オオバコ属 14 ヨモギ属 15 シダ植物単条溝孢子 16 回虫卵 17 鞭虫卵

— 10 μm

図126 花粉・孢子・寄生虫卵顕微鏡写真

第6節 珪藻分析

I. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

II. 試料

分析試料は、SD01 (LG-78区) 埋土から採取した試料A～Eの計5点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図 (図124) に示す。これらは、花粉分析に用いたものと同じ試料である。

III. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1 cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗(5～6回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

IV. 結果

(1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種 (淡水生種) 63分類群である。表38に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図129に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe, R. L. (1974) や渡辺2005等の記載による。陸生珪藻は小杉1986、環境指標種群の淡水生種は安藤1990による。主要な分類群の顕微鏡写真を図130に示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

[貧塩性種]

Achnanthes hungarica, *Amphora montana*, *Cymbella silesiaca*, *Eunotia bilunaris*, *Eunotia minor*, *Eunotia soleirolii*, *Fragilaria capucina*, *Frustulia*

vulgaris, *Gomphonema augur*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema parvulum*, *Gomphonema sphaerophorum*, *Gomphonema spp.*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*, *Navicula contenta*, *Navicula cryptocephala*, *Navicula elginensis*, *Navicula gallica*, *Navicula goeppertiana*, *Navicula laevissima*, *Navicula mutica*, *Navicula spp.*, *Nitzschia palea*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia gibba*, *Pinnularia interrupta*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia subcapitata*, *Pinnularia viridis*, *Stauroneis phoenicenteron*, *Synedra ulna*

(2) 珪藻群集の特徴

SD01 (LG-78区) (試料E～A) において、下位より珪藻構成と珪藻組成の変化の特徴を記載する。

1) 試料E

珪藻密度は低い。出現した分類群のうち、陸生珪藻が約70%を占め、次に流水不定性種が多い。陸生珪藻では *Navicula mutica*, *Pinnularia subcapitata*, *Hantzschia amphioxys*, *Pinnularia borealis*などが優占する。流水不定性種では *Nitzschia palea*, *Pinnularia interrupta*, 沼沢湿地付着生環境指標種群の *Pinnularia viridis*, *Pinnularia gibba*などが低率に出現する。好止水性種では *Pinnularia microstauron*が低率に出現する。真・好流水性種では *Gomphonema parvulum*, 沼沢湿地付着生環境指標種群の *Navicula elginensis*が低率に出現する。

2) 試料D

珪藻密度が極めて低くなり、ほとんど検出されない。

3) 試料C

流水不定性種が約75%を占めるようになり、*Navicula laevissima*が優占種となる。流水不定性種の *Gomphonema minutum*, 沼沢湿地付着生環境指標種群の *Pinnularia gibba*, 好流水性種の *Gomphonema parvulum*などが伴う。

4) 試料B

流水不定性種の占める割合が約50%になり、真・好流水性種と好止水性種の占める割合が高くなる。下位で優占した *Navicula laevissima*は減少し、好流水性種の *Gomphonema parvulum*, 好止水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor*, 流水不定性種の *Gomphonema minutum*が優占種となる。好止水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の *Gomphonema gracile*, 流水不定性種の *Achnanthes hungarica*, *Cymbella silesiaca*, *Fragilaria capucina*などが伴う。

5) 試料A

試料Bと類似した出現傾向を示し、珪藻密度がやや高くなる。

V. 珪藻分析から推定される堆積環境

下部より、試料Eの層準では珪藻密度は低く、陸生珪藻が優占することから、やや乾燥した環境ないしやや湿った環境が示唆される。試料Dでは、珪藻がほとんど検出されなくなり、乾燥した環境が示唆される。試料Cの層準になると、流水不定性種の*Navicula laevis*が優占し、滞水するが流れたり止まったりする不安定な滞水状況となる。

試料Bおよび試料Aの層準では流水不定性種が多いが、沼沢湿地付着生種の好止水性種や好流水性種もやや多くなり、水草が繁茂し淀みながら流れる環境が推定される。

VI. まとめ

珪藻分析の結果、SD01 (LG-78区) の環境は下部より、試料Eの層準ではやや乾燥した環境ないしやや湿った環境であり、試料Dの層準の乾燥した環境を経て、試料Bおよび試料Aの層準では水草が繁茂し淀みながら流れる環境へと変遷したと推定された。

(株式会社古環境研究所)

参考文献

Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p.131-506.

Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch. Center.

K. Krammer · H. Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae · 1-4.

Asai, K. &, Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.

安藤一男1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『東北地理』42, p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6, p.23-45.

小杉正人1986 「陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—」『植生史研究』第1号, 植生史研究会, p.29-44.

小杉正人1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27, p.1-20.

渡辺仁治2005 『淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAI_{po}, pH耐性能』内田老鶴圃, pp.666.

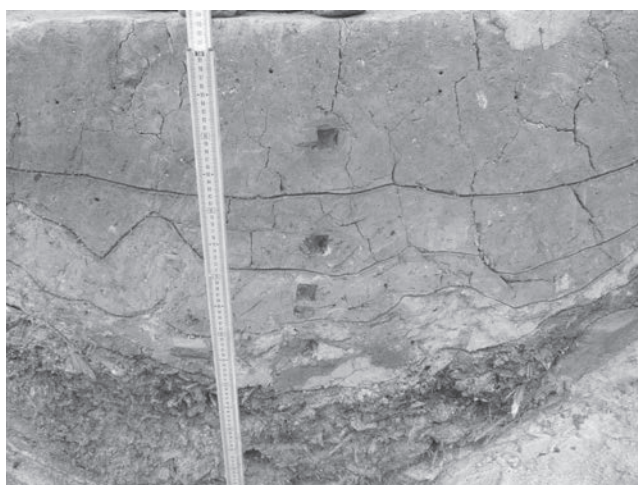


図127 SD01 (LG-78区) 試料採取箇所 (東から)



図128 SD01 (LG-78区) 試料採取状況 (東から)

表38 SD01 (LG-78区) における珪藻分析結果

分類群	S D01 (LG-78区)				
	A	B	C	D	E
貧塩性種 (淡水生種)					
<i>Achnanthes exigua</i>		1			
<i>Achnanthes hungarica</i>	2	14			
<i>Achnanthes lanceolata</i>		3			
<i>Amphora copulata</i>	1				
<i>Amphora montana</i>	3	1	1		3
<i>Amphora</i> spp.			1		
<i>Aulacoseira ambigua</i>	1				
<i>Cymbella gracilis</i>	1	1			
<i>Cymbella lanceolata</i>	1				
<i>Cymbella naviculiformis</i>	2	1	1		
<i>Cymbella silesiaca</i>	14	17	1		1
<i>Cymbella sinuata</i>			1		
<i>Eunotia bilunaris</i>	17	3			
<i>Eunotia minor</i>	101	50	2		1
<i>Eunotia pectinalis</i>		1			
<i>Eunotia soleirolii</i>	2	2	2		
<i>Fragilaria capucina</i>	7	18			
<i>Fragilaria construens</i>	1				
<i>Frustulia rhomboides</i> v. <i>saxonica</i>	1				
<i>Frustulia vulgaris</i>	8	1			
<i>Gomphonema acuminatum</i>		2			
<i>Gomphonema augur</i>	1	5			
<i>Gomphonema clevei</i>	3	1			
<i>Gomphonema gracile</i>	22	24	9	1	
<i>Gomphonema minutum</i>	135	64	15	1	
<i>Gomphonema parvulum</i>	66	61	24	1	2
<i>Gomphonema sphaerophorum</i>	2	6	6		
<i>Gomphonema</i> spp.	2	6	2	2	1
<i>Gomphonema truncatum</i>	1	2			
<i>Hantzschia amphioxys</i>	3	2			14
<i>Navicula americana</i>	4	1			
<i>Navicula confervacea</i>	12	6	5	1	2
<i>Navicula contenta</i>	8	5	3		1
<i>Navicula cryptocephala</i>		4	1		1
<i>Navicula cryptotenella</i>		1			
<i>Navicula cuspidata</i>	1	1	2		
<i>Navicula elginensis</i>	3	1	7		2
<i>Navicula gallica</i>	1	11			
<i>Navicula goeppertiana</i>	18	1	2		1
<i>Navicula halophila</i>		3			
<i>Navicula laevisissima</i>	38	27	215		1
<i>Navicula mutica</i>	20	11	12		25
<i>Navicula</i> spp.	6	5	4	1	1
<i>Neidium affine</i>	3	1	1		
<i>Neidium ampliatum</i>	1	1			
<i>Nitzschia levidensis</i>	2				
<i>Nitzschia palea</i>	6	6	5		5
<i>Pinnularia appendiculata</i>	1				
<i>Pinnularia borealis</i>	1		1	1	9
<i>Pinnularia gibba</i>	9	8	16		2
<i>Pinnularia interrupta</i>	13	2			3
<i>Pinnularia microstauron</i>	22	7	10		5
<i>Pinnularia schroederii</i>			1		3
<i>Pinnularia</i> spp.	1	1	1		
<i>Pinnularia subcapitata</i>	16	1	12		17
<i>Pinnularia viridis</i>	8	1	1		4
<i>Stauroneis anceps</i>	1	1	1		2
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	5	6	1		
<i>Stauroneis smithii</i>	4		1		
<i>Surirella angusta</i>	1		1		3
<i>Surirella ovata</i>	1		1		
<i>Synedra ulna</i>	1	5			
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>	1		1		
合計	605	403	370	8	109
未同定	20	12	7	1	2
破片	224	77	69	4	21
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	2.8	6.8	3.3	1.8	2.0
	×10 ⁶	×10 ⁵	×10 ⁵	×10 ³	×10 ⁴
完形殻保存率 (%)	73.6	84.3	84.5	-	84.1

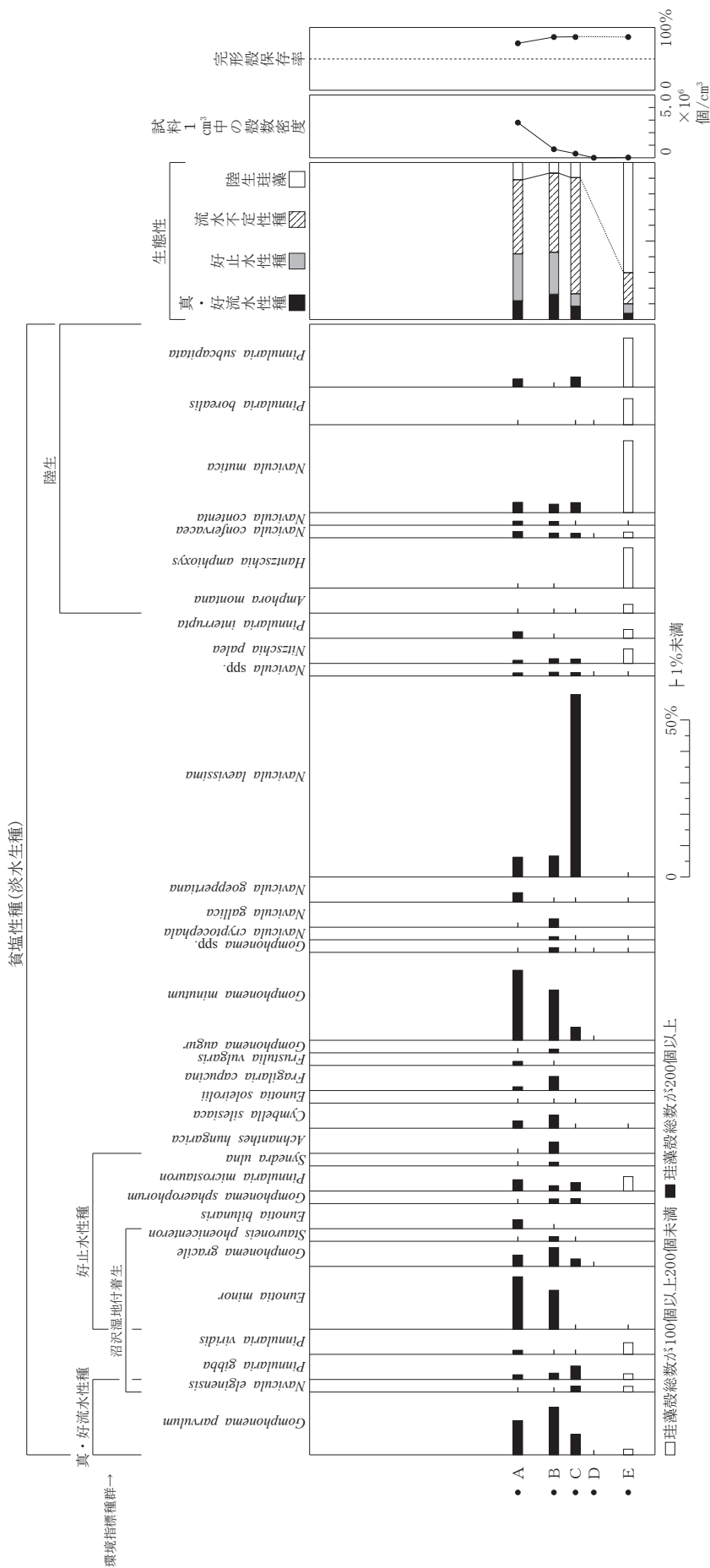


図129 SD01 (LG-78区) における主要珪藻ダイアグラム

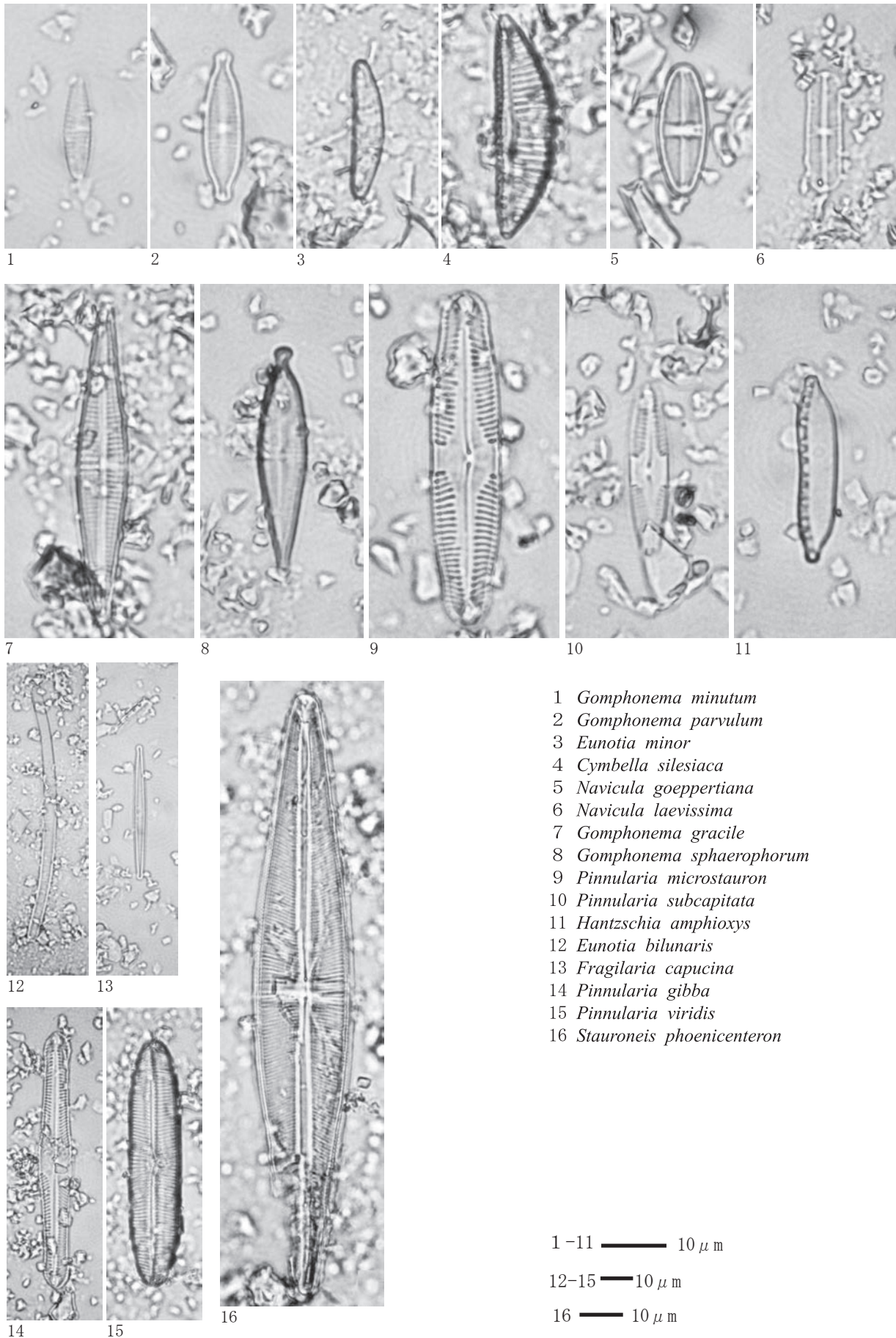


図130 SD01 (LG-78区) の珪藻顕微鏡写真

第7節 樹種同定

I. はじめに

SD01古の木屑層から出土した自然木、加工木などの木材に対して、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行った。木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的隣隣の森林植生の推定が可能である。また、遺跡から出土した資料については、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

II. 試料

試料は、SD01古 (LG-78区) 木屑層から採取した土壌 (壁面採取試料E) に含まれていた自然木7点、加工木20点、炭化材1点の合計28点と、LG-78区同層出土の水洗選別した自然木、加工木などの木材一式である。

III. 方法

試料のうち、木材はカミソリを用いて試料の新鮮な横断面 (木口と同義)、放射断面 (柁目と同義)、接線断面 (板目と同義) の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40~1000倍で観察した。また、炭化材については、試料を割折して新鮮な横断面 (木口と同義)、放射断面 (柁目と同義)、接線断面 (板目と同義) の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

IV. 結果

表39に試料Eの樹種同定結果、表40に水洗選別した木材の樹種同定結果を示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1~4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅう状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

ツガ属 *Tsuga* マツ科

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、1分野に2~4個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、ツガ属に同定される。ツガには、ツガ、コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ20~25m、径50~80cmである。材は耐朽、保存性中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には著しい鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりアカマツに同定される。アカマツは、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は重硬な良材で水湿によく耐え、広く用いられる。

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 (図131-1)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 (図131-2)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

スギーヒノキ科 *Cryptomeria japonica* D.Don–Cupressaceae

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はやや型および大きさは不明瞭であり、1分野には1～3個存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギーヒノキ科に同定される。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

横断面：小型で丸い、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合し、散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Carpinus* カバノキ科

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合し、全体として放射方向に配列する放射孔材である。集合放射組織が見られる。

放射断面：道管の穿孔は、単穿孔である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は、同性で1～3細胞幅のもの、集合放射組織からなる。

以上の形質よりクマシデ属イヌシデ節に同定される。落葉の中高木で、北海道、本州、四国、九州の山野に分布する。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科 (図131-3)

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

シイ属 *Castanopsis* ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州(福島県、新潟県佐渡以南)、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

なおシイ属には、スダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片のであり広範囲の観察が困難であったため、シイ属の同定にとどめる。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属

Quercus subgen. Cyclobalanopsis ブナ科 (図132-4)

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ムクノキ *Aphananthe aspera* Planch. ニレ科

横断面：中型から小型で厚壁の放射方向にのびた道管が、年輪界にむけて径を減少しながら、単独あるいは2～3個放射方向に複合して、まばらに散在する散孔材である。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では、数細胞幅で帯状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～4細胞幅である。多列部は平伏細胞からなり、単列部は直立細胞からなる。

以上の形質よりムクノキに同定される。ムクノキは本州（関東以西）、四国、九州、沖縄に分布する。落葉高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径1.5mに達する。材はやや堅

く密で強靱である。建築、器具、楽器、下駄、船、薪炭などに用いられる。

シキミ *Illicium religiosum* Sieb. et Zucc. モクレン科

横断面：小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。早材部の年輪界付近に於いて、道管が少し並ぶ傾向を示す。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く50を超える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅で、単列部が太い。

以上の形質よりシキミに同定される。シキミは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、高さ10m、径30cmに達する。材は、強さ中庸で、旋作、器具、薪などに用いられる。

クスノキ科 Lauraceae

横断面：中型から小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は道管径以外の点不明瞭な為、クスノキ科の同定にとどまる。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

サクラ属 *Prunus* バラ科

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合し散在する散孔材である。道管径は早材部から晩材部にかけて緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

ナシ亜科 Subfam. Maloideae バラ科

横断面：小型の道管が、単独あるいは数個不規則に複合して、散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は、単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で、1～3細胞幅である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりナシ亜科に同定される。ナシ亜科には、サンザシ属、ザイフリボク属、ナナカマド属、ビワ属、カナメモチ属などがある。

バラ属 Rosa バラ科

横断面：やや小型で丸い道管が、ほぼ単独で年輪のはじめに1～2列並び、晩材部では小型の道管が単独でややまばらに存在する環孔材である。早材から晩材にかけて道管の径はやや急速に減少するが、晩材部では不規則に変化する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、数個の直立細胞からなる単列のものと、10細胞幅超え、高さ2.5mmを超える大型のものからなる。

以上の形質よりバラ属に同定される。バラ属には、ノイバラ、ヤマイバラなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。低木で、落葉するものが多い。

ユズリハ属 Daphniphyllum ユズリハ科

横断面：小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～50本である。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～2細胞幅である。

以上の形質よりユズリハ属に同定される。ユズリハ属にはユズリハ、ヒメユズリハ、エゾユズリハなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木または低木である。

ウルシ属 Rhus ウルシ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。晩材部で小道管が単独あるいは主に放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管径は徐々に減少していく。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりウルシ属に同定される。ウルシ属にはヤマハゼ、ウルシ、ヌルデ、ツタウルシなどがあり、北海道（渡島半島）、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑または落葉の低木～高木、または藤本である。

モチノキ属 Ilex モチノキ科

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径はあまり変化しない。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～40ぐらいである。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、直立細胞のみからなる単列のものと、2～6細胞幅で上下の縁辺部の1～3細胞高が単列の多列のものからなる。

以上の形質よりモチノキ属に同定される。モチノキ属は常緑または落葉性の高木または低木で、モチノキ、クロガネモチ、イヌツゲなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

なおモチノキは常緑高木で高さ15m、径50cmに達する。やや堅硬な材で、旋作、器具、彫刻などに用いられる。

カエデ属 Acer カエデ科

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細ならせん肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で1～6細胞幅である。道管の内壁には微細ならせん肥厚が存在する。

以上の形質よりカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の形質からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径1mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

ヤブツバキ Camellia japonica Linn. ツバキ科

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔

で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には、大きく膨れているものが存在する。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmである。材は強韌で、耐朽性強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を超える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅で、多列部と比べて単列部が長い。

以上の形質よりヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

リョウブ *Clethra barbinervis* Sieb. et Zucc. リョウブ科

横断面：小型でやや角張った道管が、単独でまばらに散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～50本ぐらいである。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりリョウブに同定される。リョウブは北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ7m、径25cmに達する。やや堅硬な材で、建築、旋作、器具、薪炭などに用いられる。

シャシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. ツツジ科

横断面：小型で角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく10本前後のものが多いが、まれに単穿孔も認められる。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、直立細胞からなる単列のもの、6～8細胞幅で長い紡錘形を

示す多列のものからなる。多列のものはほとんどが平伏細胞からなるが、上下縁辺部と側面部に直立細胞が見られる。

以上の形質よりシャシャンボに同定される。シャシャンボは関東南部以西の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木で、通常高さ1～5m、径10cmぐらいであるが、大きいものは高さ10m、径70cmに達する。

ツツジ属 *Rhododendron* ツツジ科 (図132-6)

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は、階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10数本である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、数個の直立細胞からなる単列のもの、2～3細胞幅で、数細胞高の単列部をもつ多列のもの、多列のものは数が少ない。

以上の形質よりツツジ属に同定される。ツツジ属には、ミツバツツジ、ヤマツツジ、モチツツジ、バイカツツジ、サツキ、ホンシャクナゲなど多くの種がある。常緑または落葉の低木から高木である。

カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科

横断面：中型から大型の道管が、単独および2～4個放射方向に複合して、散在する散孔材である。道管の壁は厚い。軸方向柔細胞は周囲状および接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。いずれの放射組織も高さがほぼ同じで、層階状に配列する傾向を示す。

以上の形質よりカキノキ属に同定される。カキノキ属には、トキワガキ、ヤマガキ、マメガキなどがあり、本州（西部）、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径1mぐらいに達する。材は、建築、器具などに用いられる。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科

横断面：年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、おもに2～4個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。軸方向柔細胞が、晩材部において接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～3細胞幅である。

以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ10m、径30cmである。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

トネリコ属 Fraxinus モクセイ科

横断面：年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で1～3列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまろい厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。内部にはチロースが著しい。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

アジサイ属 Hydrangea ユキノシタ科 (図132-5)

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く50本を超えるものが見られる。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型であり、直立細胞からなる単列のものと、鞘細胞のある3細胞幅ぐらいで背の高いものが見られる。

以上の形質よりアジサイ属に同定される。コアジサイ、ヤマアジサイ、ツルアジサイ、コガクウツギ、ノリウツギなど多くの種があり、常緑または落葉性の低木から小高木またはつる性である。本試料は、道管配列や放射組織の特徴から、ツルアジサイ、ノリウツギ以外のアジサイ属である。

樹皮 bark

師部柔細胞、師部放射柔細胞が見られる。

以上の形質より、樹皮に同定される。

タケ亜科 Bambusoideae イネ科

横断面：基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。

放射断面及び接線断面：柔細胞及び維管束、維管束鞘が桿軸方向に配列している。

以上の形質よりタケ亜科に同定される。タケ亜科にはマダケ属、メダケ属、ササ属などがある。

V. 所見

土壌（試料E）に含まれる木材の樹種同定結果についての所見を述べ、水洗選別した木材一式は同定結果と出現順位・出現率を表40・41に示すにとどめる。

試料Eの木材のうち、加工木20点はスギ9点、ヒノキ10点、シイ属1点であった。スギは加工工作が容易な、大きな材がとれる良材である。ヒノキは木理通直で大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高い。シイ属は耐朽性、保存性は低い材である。スギ、ヒノキは温帯に広く分布する針葉樹であり、スギは積雪地帯や多雨地帯で純林を形成し、ヒノキは温帯中部に多い。シイ属は、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは二次林要素である。炭化材1点はコナラ属アカガシ亜属であった。自然木7点は、ツブラジイ1点、コナラ属アカガシ亜属4点、アジサイ属1点、ツツジ属1点であった。ツブラジイは温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要高木あるいは二次林要素である。コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称されるが、イチイガシ、アラカシなど多くの種があり、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。イチイガシは自然度が高いが、アラカシは二次林性でもある。アジサイ属とツツジ属には多くの種があり、低木が多く日本各地に分布する。またツツジ属は多くの園芸種が作られている。

以上のように、SD01出土の加工木はほとんどがスギ、ヒノキの針葉樹であった。自然木では、照葉樹で高木となるコナラ属アカガシ亜属、ツブラジイと、低木が多いアジサイ属とツツジ属がみられ、これらは植栽されていた可能性もある。

なお、木材とともに出土した葉は、保存状態が悪く、同定できる試料がなかった。（壁面採取試料E：株式会社古環境研究所・水洗選別試料：環境考古研究会）

参考文献

- 佐伯浩・原田浩 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版、p.20-48、1985
- 佐伯浩・原田浩 「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版、p.49-100、1985
- 島地謙・伊東隆夫 『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣、p.296、1988
- 山田昌久 『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成』植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242、1993

表39 SD01古木屑層（試料E）における樹種同定結果

試料	結果（学名／和名）	
自然木①	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
自然木②	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
自然木③	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
自然木④	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
自然木⑤	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
自然木⑥	<i>Rhododendron</i>	ツツジ属
自然木⑦	<i>Hydrangea</i>	アジサイ属
加工木（墨書）大	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
加工木（墨書）小	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
加工木（曲物？）	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
加工木（穴有り）	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
加工木①	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
加工木②	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
加工木③	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
加工木④	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
加工木⑤	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
加工木⑥	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
加工木⑦	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
加工木⑧	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
加工木⑨	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
加工木⑩	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
加工木⑪	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
加工木⑫	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
加工木⑬	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
加工木⑭	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
加工木⑮	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
加工木⑯	<i>Castanopsis</i>	シイ属
炭化材	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属

表40 SD01古木屑層における木材出現率（水洗選別した自然木、加工木などの木材一式）

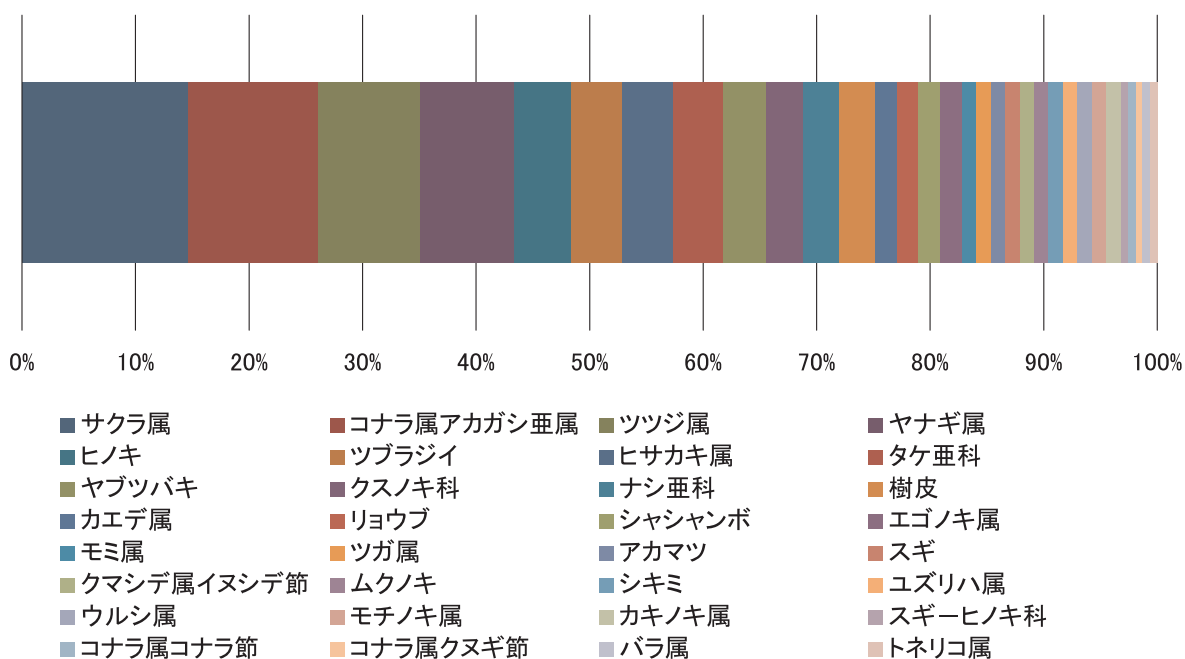
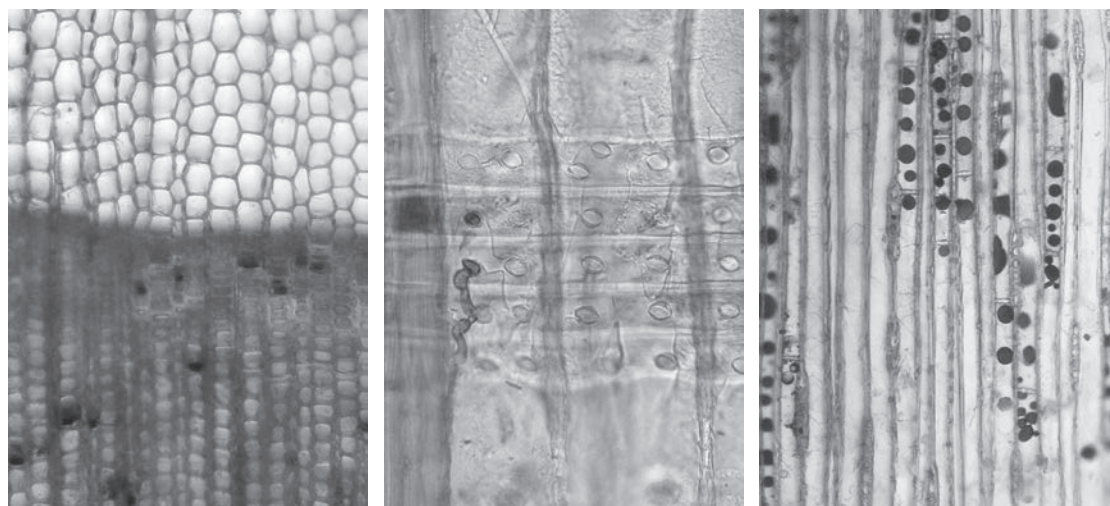


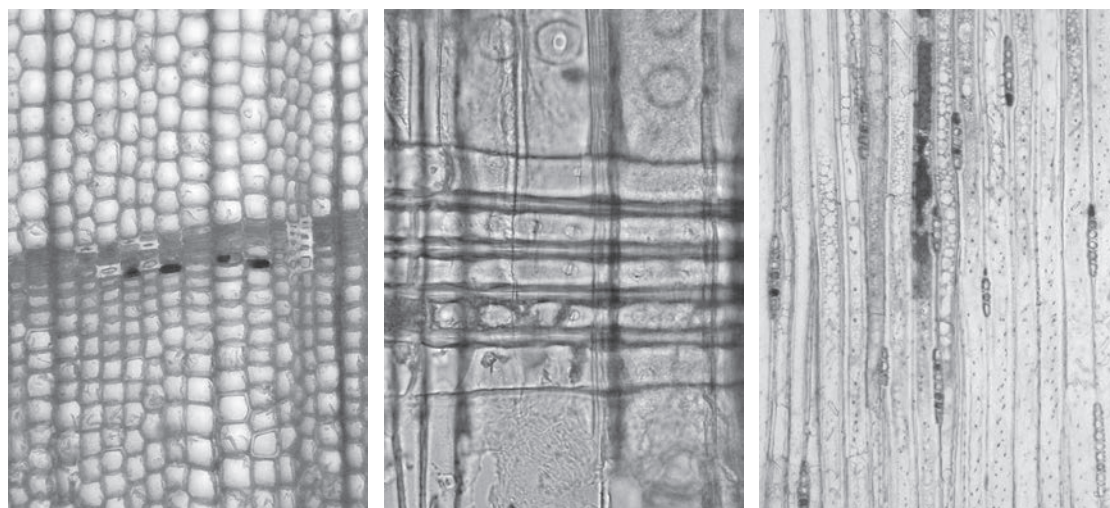
表41 SD01古木屑層における木材同定結果（水洗選別した自然木、加工木などの木材一式）

分類群		科	個数	出現順位
学名	和名			
<i>Abies</i>	モミ属	マツ科	2	17
<i>Tsuga</i>	ツガ属	マツ科	2	17
<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.	アカマツ	マツ科	2	17
<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ	スギ科	2	17
<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ	ヒノキ科	8	5
<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don-Cupressaceae	スギーヒノキ科		1	28
<i>Salix</i>	ヤナギ属	ヤナギ科	13	4
<i>Carpinus</i> sect. <i>Carpinus</i>	クマシデ属イヌシデ節	カバノキ科	2	17
<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ	ブナ科	7	6
<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節	ブナ科	1	28
<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節	ブナ科	1	28
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	ブナ科	18	2
<i>Aphananthe aspera</i> Planch.	ムクノキ	ニレ科	2	17
<i>Illicium religiosum</i> Sieb. et Zucc.	シキミ	モクレン科	2	17
Lauraceae	クスノキ科	クスノキ科	5	10
<i>Prunus</i>	サクラ属	バラ科	23	1
Subfam. <i>Maloideae</i>	ナシ亜科	バラ科	5	10
<i>Rosa</i>	バラ属	バラ科	1	28
<i>Daphniphyllum</i>	ユズリハ属	ユズリハ科	2	17
<i>Rhus</i>	ウルシ属	ウルシ科	2	17
<i>Ilex</i>	モチノキ属	モチノキ科	2	17
<i>Acer</i>	カエデ属	カエデ科	3	13
<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ	ツバキ科	6	9
<i>Eurya</i>	ヒサカキ属	ツバキ科	7	6
<i>Clethra barbinervis</i> Sieb. et Zucc.	リョウブ	リョウブ科	3	13
<i>Vaccinium bracteatum</i> Thunb.	シャシャンボ	ツツジ科	3	13
<i>Rhododendron</i>	ツツジ属	ツツジ科	14	3
<i>Diospyros</i>	カキノキ属	カキノキ科	2	17
<i>Styrax</i>	エゴノキ属	エゴノキ科	3	13
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	モクセイ科	1	28
bark	樹皮		5	10
Bambusoideae	タケ亜科	イネ科	7	6
unknown plants	※不明植物遺体	湿性重量	125g	
	未同定試料	湿性重量	690g	

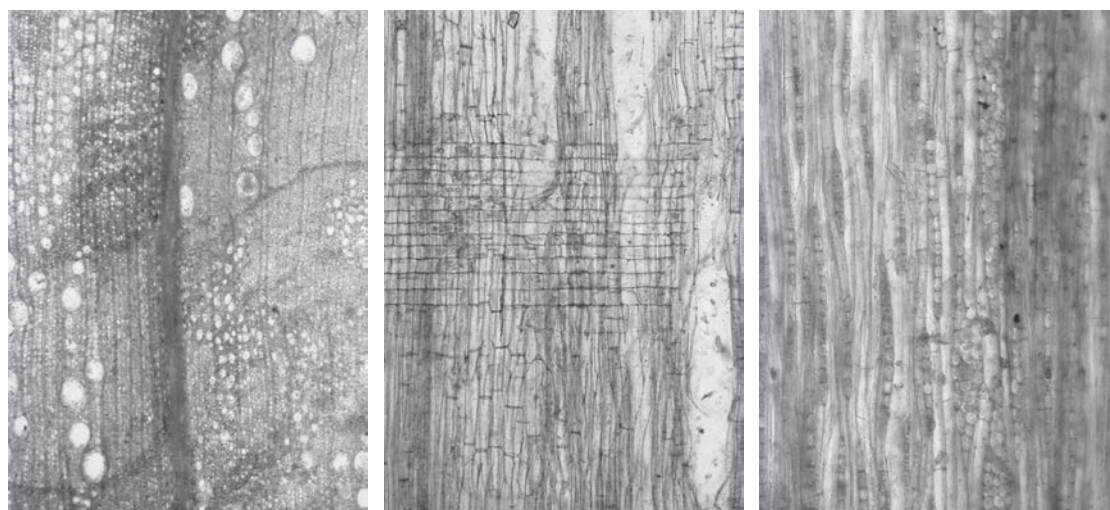
※不明植物遺体—劣化や腐敗が進み同定に至れない他の有機質であった。



横断面 ————— : 0.2mm 放射断面 ————— : 0.05mm 接線断面 ————— : 0.2mm
 1 加工木(墨書)大スギ

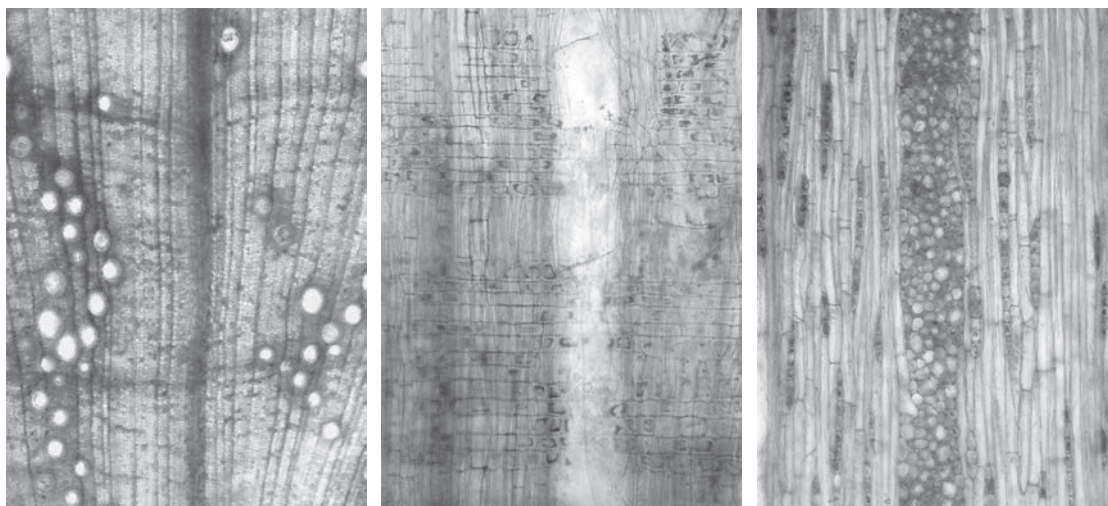


横断面 ————— : 0.2mm 放射断面 ————— : 0.05mm 接線断面 ————— : 0.2mm
 2 加工木(穴有り)ヒノキ



横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm
 3 自然木⑤ ツブラジイ

図131 SD01古木屑層(試料E)の木材顕微鏡写真(1)



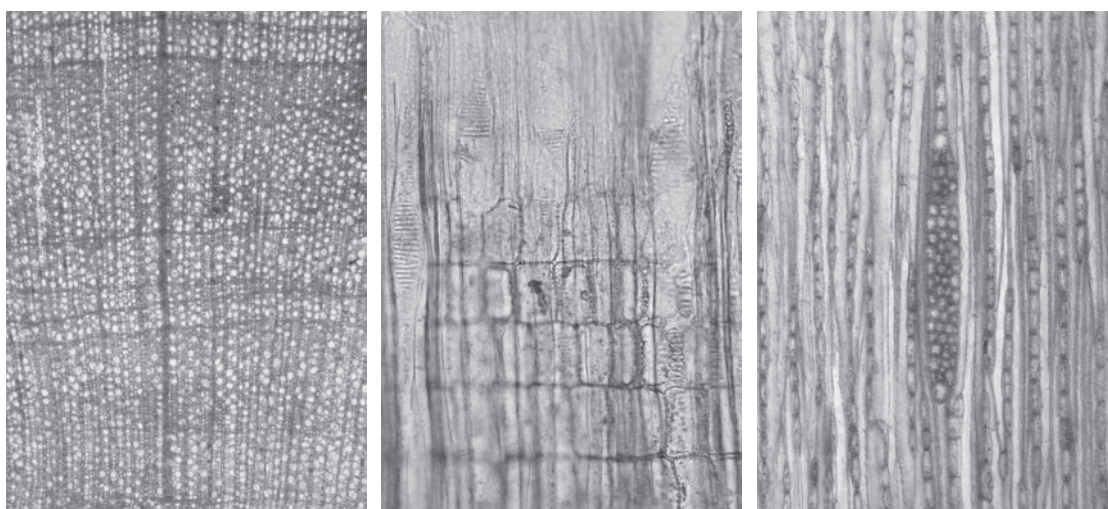
横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm

4 自然木① コナラ属アカガシ亜属



横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.1mm 接線断面 ————— : 0.2mm

5 自然木⑦ アジサイ属



横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.1mm 接線断面 ————— : 0.2mm

6 自然木⑥ ツツジ属

図132 SD01古木屑層（試料E）の木材顕微鏡写真（2）

第8節 種実同定

I. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。ここでは、基礎的データを供出し、植物利用の検討を行う。なお、本報告を作成するにあたり奈良教育大学の金原正明教授から教示を得た。

II. 試料

試料は、西大寺旧境内第25次調査LG-78区SD01古木層層から採取した土壌（壁面採取試料E）に含まれていた種実と、LG-78区同層出土の水洗選別済みの種実である。

III. 方法

土壌（試料E）については、以下の物理処理を施して種実の抽出を行った。

- 1) 試料500cm³に水を加え放置し、泥化
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実を同定・計数

同定は、試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

IV. 結果

(1) 土壌（試料E）抽出種実の分類群

樹木4、草本14の計18分類群が同定された。学名、和名および粒数を表43に示し、主要な分類群を写真（図134）に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

カヤ *Torreya nucifera* S. et Z. 種子（破片） イチイ科（図134-1）

茶褐色で長卵形を呈す。表面には縦方向の隆起が走る。断面は円形である。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* 毬果（破片） マツ科（図134-2）

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平五角形であり、その中央にはへそがある。

クリ *Castanea crenata* S. et Z. 堅果（破片） ブナ科（図134-3）

堅果は三角状扁円形を呈す。一側面は円みがあり、反対面は平らな形が多い。両面とも円みがある。

コナラ属 *Quercus* 堅果（破片） ブナ科（図134-4）

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、属レベルの同定までである。

〔草本〕

イネ *Oryza sativa* L. 穎（破片） イネ科（図134-5）

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった。

イネ科 *Gramineae* 穎（図134-6）

穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

スゲ属 *Carex* 果実（完形・破片） カヤツリグサ科（図134-7）

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科 *Cyperaceae* 果実（図134-8）

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

黒褐色で倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。

黒色で円形を呈し、断面形は両凸レンズ状である。側面には心形を呈するへそがある。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科（図134-9）

黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科（図134-10）

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みへそがある。断面は両凸レンズ形である。

ナデシコ科 *Caryophyllaceae* 種子（完形・破片）（図134-11）

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

キジムシロ属 *Potentilla* 種子 バラ科

黄褐色で腎臓形を呈す。表面はやや粗い。

ヒシ *Trapa japonica* Flerov 果実（破片） ヒシ科（図134-12）

黒褐色を呈し、ヒシ特有の角（上位角）の破片が得られた。

チドメグサ属 *Hydrocotyle* 果実 セリ科（図134-13）

淡褐色で半円形を呈す。断面は楕円形である。両面に明瞭な一本の円弧状の隆起が走る。

シソ属 *Perilla* 果実（完形・破片） シソ科（図134-14）

茶褐色で球形を呈し、下端にへそがある。表面には大きい網目模様がある。

ナス *Solanum melongera* L. 種子 ナス科（図134-15）

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだヘソがある。表面には網目模様がある。

ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科 (図134-16)

淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈し、上端は「ハ」字状にくぼむ。藤下によると小粒種子(雑草メロン型)、中粒種子(マクワウリ・シロウリ型)、大粒種子(モモルディカ型)がある。

タカサブロウ *Eclipta prostrata* L. 果実 キク科

淡褐色～茶褐色で長楕円形を呈す。上端は円形に突出し、下端は切形となる。表面中央部にいぼ状の突起がある。断面はひし形である。

(2) 水洗選別済み種実の分類群

樹木16、草本4の計20分類群が同定された。学名、和名および粒数を出現数の多い順に表43に示した。主要な分類群を写真(図135)に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

[樹木]

カヤ *Torreya nucifera* S. et Z. 種子(破片) イチイ科 (図135-1)

茶褐色で長卵形を呈す。表面には縦方向の隆起が走る。断面は円形である。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* 毬果(完形・破片) マツ科 (図135-2)

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平五角形であり、その中央にはへそがある。マツ属複維管束亜属にはアカマツとクロマツがあり、その交雑も存在する。

ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* Endl 毬果 ヒノキ科 (図135-3)

茶褐色で球形を呈し、種鱗は楕形で、縁は敷石状の接し、外面は不整な4・5角形を呈し、中央に小突起がある。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核(半形・破片) クルミ科 (図135-4)

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。内果皮が角質化した核である。種子は食用になる。

ヒメグルミ *Juglans mandshurica* var. *cordiformis* Rehder 核(半形・破片) クルミ科 (図135-5)

淡褐色で円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面にはオニグルミと比べて明瞭な隆起はない。断面は円～楕円形である。内果皮が角質化した核である。種子は食用になる。

クリ *Castanea crenata* S. et Z. 堅果(破片) ブナ科

(図135-6)

堅果は三角状扁円形を呈す。一側面は円みがあり、反対面は平らな形が多い。両面とも円みがある。種子は食用になる。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schott. 堅果(完形・破片) ブナ科 (図135-7)

堅果は広卵形を呈し、先端に花柱が見られる。種子は食用になる。

コナラ属 *Quercus* 堅果 ブナ科 (図135-8)

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗が欠落し破片のため、属レベルの同定までである。イチイガシなどはアク抜きせずに食用になる。

ウメ *Prunus mume* S. et Z. 核(完形・半形・破片) バラ科 (図135-9)

茶褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には小孔が散在する。内果皮が角質化した核である。果実は食用になる。

モモ *Prunus persica* Batsch 核(完形・半形・破片) バラ科 (図135-10)

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。内果皮が角質化した核である。果実は食用になる。

スモモ *Prunus salicina* Lindley 核 バラ科 (図135-11)

淡褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には不明瞭で微細な凸凹がある。断面は扁平である。内果皮が角質化した核である。果実は食用になる。

サクラ属サクラ節 *Prunus* sect. *Pseudocerasus* 核 バラ科 (図135-12)

黄褐色で楕円形を呈し、下端が大きくくぼむ。側面に縫合線が走る。表面はやや粗い。内果皮が角質化した核である。果実は食用になる。

センダン *Melia azedarach* var. *subtripinnata* Miq. 核 センダン科 (図135-13)

黒褐色で楕円形を呈し、一端は円孔となる。縦に5本の発達した稜が走る。

ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. 種子 ムクロジ科 (図135-14)

灰黒色で円状球形を呈し、線形のヘソがみられる。

ナツメ *Zizyphus jujuba* Mill. 核 クロウメモドキ科 (図135-15)

浅褐色で光沢はなく、狭倒卵形。先端は短い鋭い突起がある。鋭い縦隆条やいぼ状突起が分布し、ざらつく。

カキノキ属 *Diospyros* 種子 (完形・破片) カキノキ科 (図135-16)

[草本]

ジュズダマ *Coix lacryma-jobi* L. 果実 イネ科 (図135-17)

淡褐色～茶褐色で卵球形を呈す。表面には光沢があり、堅い。

ヒシ *Trapa japonica* Flerov 果実 (破片) ヒシ科 (図135-18)

暗黄緑灰色で倒3角形を呈し、側面はやや扁平で両肩に1個ずつの鋭い長刺があり、刺からは基部まで延びる翼状隆条がある。先端の中央部に低い円柱状突起があり、その中心に短い刺がある。

ヒョウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 果皮 (破片) ウリ科 (図135-19)

果皮は、木質化しやや厚みがある。表面はなめらかで裏面は粗い。藤下がヒョウタン仲間とするものには、ヒョウタン・フクベ・カンピョウが含まれ、このうちフクベ・カンピョウは食用になる。

ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 (完形・破片) ウリ科 (図135-20)

淡褐色～黄褐色である。楕円形を呈し、一端には「ハ」字状のへこみがある。藤下による長さ8.1mm以上の大粒種子 (モモルディカ型) にあたる。

不明 劣化や腐敗が進み同定に至れない種実、または種実ではない他の有機質であった。

V. 種実群集の特徴と推定される植生

(1) 土壌 (試料E) 抽出の種実群集と植生

溝の周囲には、ナデシコ科、イネ科、チドメグサ属、キジムシロ属、タデ属、ヒユ属、タカサブロウ、シソ属が生育していたと考えられる。これらは、乾燥した人為地に生育する植物であることから、溝の周囲には畑や集落が分布していたと推定される。また、溝内には湿地から浅い (1mまで) 水域に生育するスゲ属、カヤツリグサ科が生育していた。カヤ、クリ、ヒシ、栽培植物であるイネ、ナス、ウリ類は、食用の残滓の投棄と考えられる。樹木であるマツ属複雑維管束亜属 (アカマツないしくロマツ) とコナラ属 (カシ類ないしナラ類) は溝の周囲に生育していたと考えられる。

(2) 水洗選別済みの種実群集と植生

樹木種実では、マツ属複雑維管束亜属157が最も多く、モモ101、オニグルミ64、クリ58、ウメ42、ツブラジイ30、カキノキ属24、コナラ属11、カヤ8、スモモ5、ナツメ5、サクラ属サクラ節4、ヒメグルミ3、センダン

3、スギ2、ムクロジ2が認められた。草本種実では、ヒシ25が最も多く、ヒョウタン類6、ウリ類4、ジュズダマ1が認められた。

同定された種実類は、いくつかの性格群集として考え分けられる (図133)。多いマツ属複雑維管束亜属は種子を食べることはできるが普通利用されず、検出されている毬果は通常利用されず、植栽されていた樹木に由来すると考えられる。他にヒノキ、センダンも同様に植栽された樹木に由来すると考えられる、他にサクラ属サクラ節はウメやモモやスモモと同属で果実は食用になるが、小さく適さず、検出数が少ないことから、利用されたのではなく植栽されていたとみなすのが妥当と考えられる。ムクロシは果実にサポニンが含まれ石鹸の用途として利用された可能性がある。カヤ、オニグルミ、ヒメグルミ、クリ、ツブラジイ、コナラ属は、いずれも食用になり、破片であるか破片が多いため、食用として利用されたとみなされる。ウメ、モモ、ナツメ、スモモ、カキノキは、いずれも果樹であり、食用とされた残滓と推定される。ウメ、モモ、ナツメ、スモモ、カキノキの果樹の核ないし種子は、上ノ宮遺跡、飛鳥苑池遺構、藤原宮、平城京から同内容の群集が検出されており、律令期の特有の果樹を中心にする利用である。ヒョウタン類は有用作物で、ウリ類は食用となる作物である。ヒシはいずれも破片で、食用にされたものとみなされる。ジュズダマは雑草である。

(壁面採取試料E：株式会社古環境研究所・水洗選別試料：環境考古研究会)

参考文献

- 笠原安夫 『日本雑草図説』養賢堂、494p. 1985
- 笠原安夫 「作物および田畑雑草種類」『弥生文化の研究』第2巻 (生業)、雄山閣 出版、p.131-139. 1988
- 金原正明 「古代モモの形態と品種」『月刊考古学ジャーナル』No.409、ニューサイエンス社、p.15-19. 1996
- 南木睦彦 「栽培植物」『古墳時代の研究』第4巻 (生産と流通 I)、雄山閣出版株式会社、p.165-174. 1991
- 南木睦彦 「低湿地遺跡の種実」『月刊考古学ジャーナル』No.355、ニューサイエンス社、p.18-22. 1992
- 藤下典之 「菜畑遺跡から出土したメロン仲間 *Cucumis melo* L. とヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl. の種子について」『菜畑遺跡』唐津市文化財調査報告第5集、唐津市教育委員会、p.455-463. 1982
- 藤下典之 「出土種子からみた古代日本のメロンの仲間、その種類、渡来、伝搬、利用について」『月刊考古学ジャーナル』No.354、ニュー・サイエンス社、p.7-13. 1992

表42 SD01古木屑層（試料E）の種実同定結果

分類群		部位	LG-78 S D01
学名	和名		(木屑層)
Arbor	樹木		
<i>Torreya nucifera</i> S. et Z.	カヤ	種子(破片)	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	毬果(破片)	2
<i>Castanea crenata</i> S. et Z.	クリ	堅果(破片)	2
<i>Quercus</i>	コナラ属	堅果(破片)	2
Herb	草本		
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	穎(破片)	5
Gramineae	イネ科	穎	2
<i>Carex</i>	スゲ属	果実 (破片)	2 2
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	4
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子	2
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子 (破片)	8 5
<i>Potentilla</i>	キジムシロ属	種子	2
<i>Trapa japonica</i> Flerov.	ヒシ	果実(破片)	6
<i>Hydrocotyle</i>	チドメグサ属	果実	2
<i>Perilla</i>	シソ属	果実 (破片)	1 1
<i>Solanum melongena</i> L.	ナス	種子	1
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子	2
<i>Eclipta prostrata</i> L.	タカサブロウ	果実	1
Total	合計		54

(500cm³中0.25mm篩)

表43 SD01古木屑層における種実同定結果（水洗選別試料）

分類群		部位	出現順位
学名	和名		
Arbor	樹木		
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	毬果	1
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	2
<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr	オニグルミ	核	3
<i>Castanea crenata</i> S. et Z.	クリ	堅果	4
<i>Prunus mume</i> S. et Z.	ウメ	核	5
<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky.	ツブラジイ	堅果	6
<i>Diospyros</i>	カキノキ属	種子	7
<i>Quercus</i>	コナラ属	堅果	8
<i>Torreya nucifera</i> S. et Z.	カヤ	種子	9
<i>Prunus salicina</i> Lindley	スモモ	核	10
<i>Zizyphus jujuba</i> Mill.	ナツメ	核	11
<i>Prunus</i> sect. <i>Pseudocerasus</i>	サクラ属サクラ節	核	12
<i>Juglans mandshurica</i> var. <i>Rehder</i>	ヒメグルミ	核	13
<i>Melia azedarach</i> L. var. <i>Subtripinnata</i> Miq.	センダン	核	14
<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ	毬果	15
<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn.	ムクロジ	種子	16
Herb	草本		
<i>Trapa japonica</i> Flerov.	ヒシ	果実	1
<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.	ヒョウタン類	果実	2
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子	3
<i>Coix lacryma-jobi</i> L.	ジュズダマ	果実	4

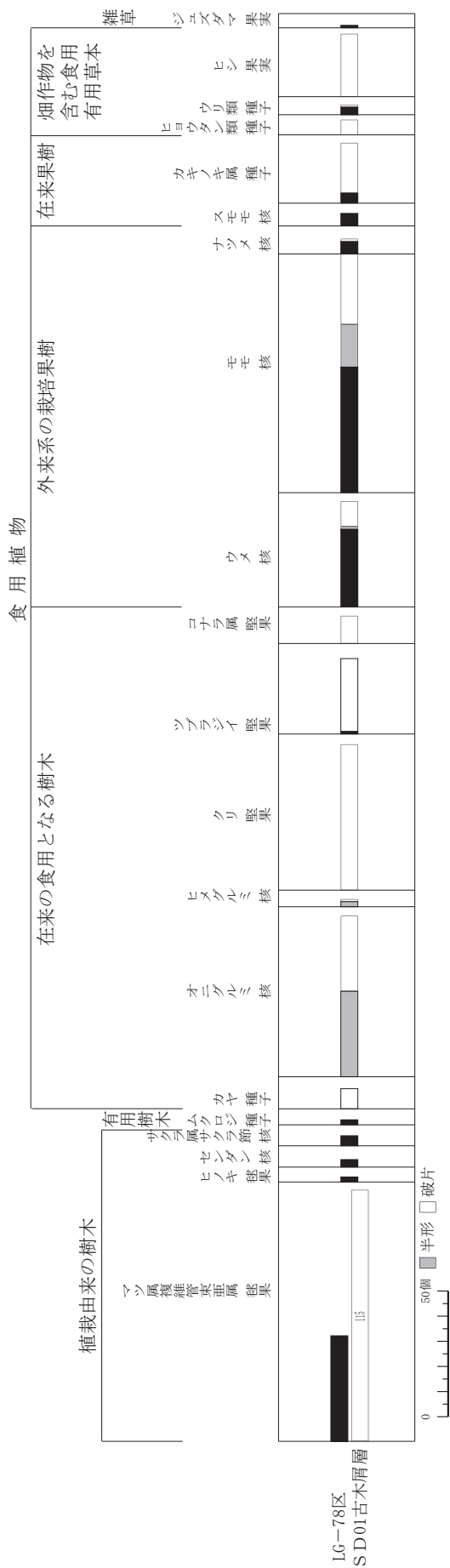


図133 SD01古木屑層の水洗選別試料における種実数および推定される性格区分

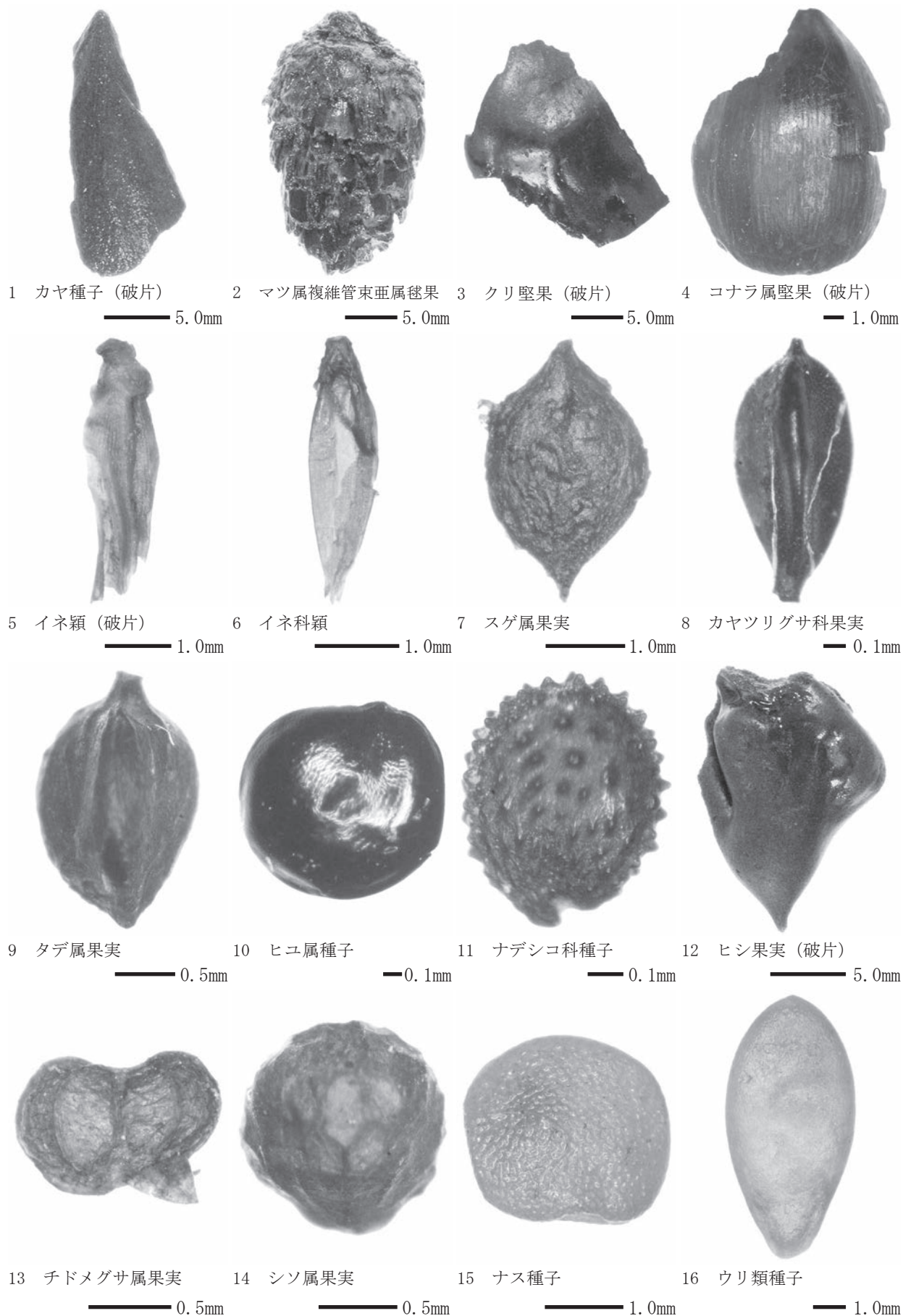


図134 SD01古木屑層 (試料E) の種実顕微鏡写真

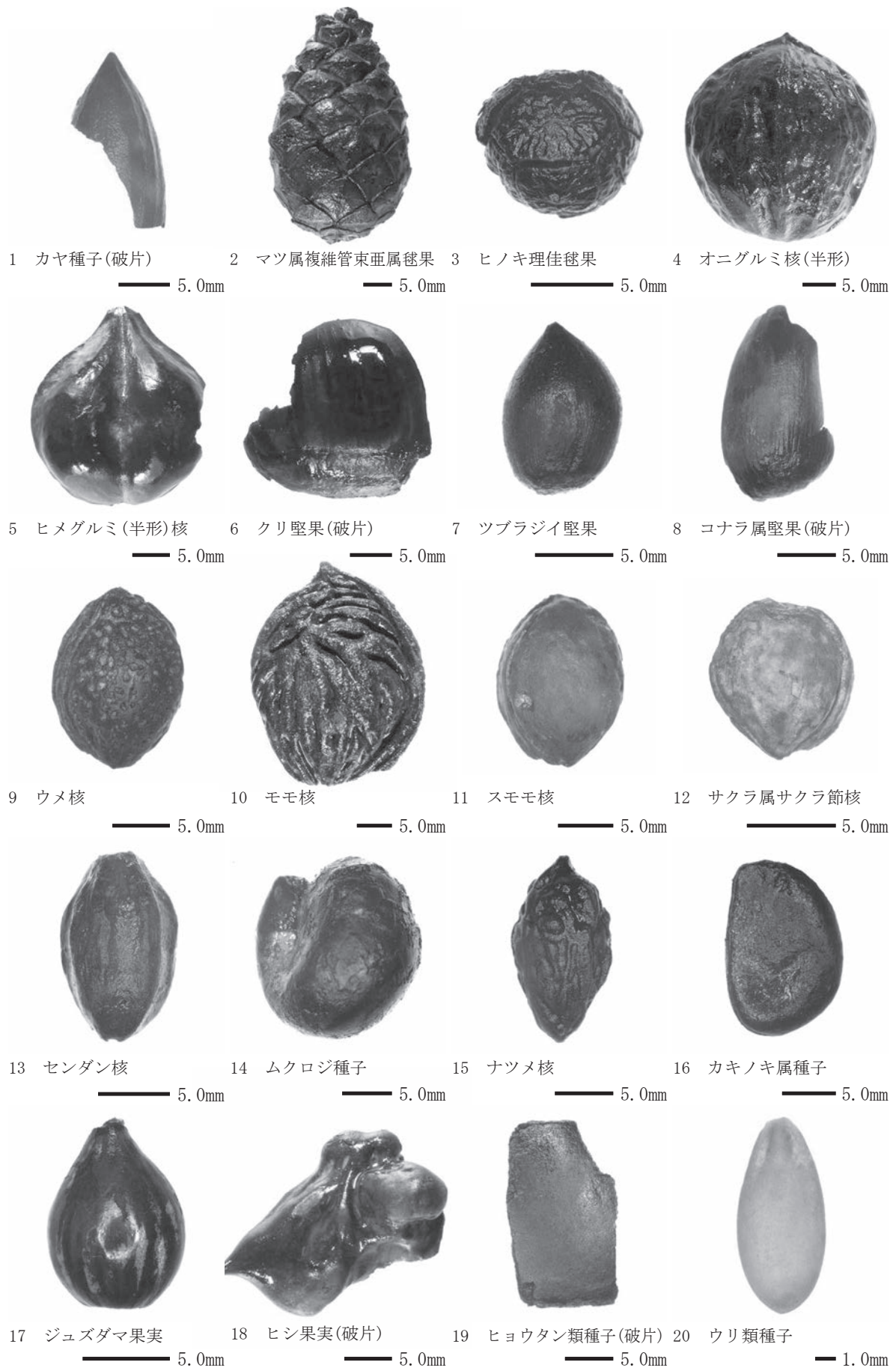


図135 SD01古木屑層水洗選別試料の種実顕微鏡写真

第6章 総括

本章では、まず第1節として検出した遺構について周辺の調査との関連を含めて検討する。第2節では、第4章で報告した遺物について概観し、あるいは細部を検討することによって検出した遺構の意義づけ、ひいては西大寺旧境内のという遺跡のなかでの評価を考えていきたい。第3節では、第1・2節での考察と、文字資料篇での成果も併せて本調査の全体的な結語としたい。

第1節 遺構について

第1節では、発掘調査結果から遺構の時期変遷を追い、SD01の堆積の問題を検討する。次に、調査で検出した遺構と周辺で実施された調査で検出した条坊側溝との比較のなかでSD01の位置づけを確認したい。

I. 遺構の変遷

重複関係がない遺構もあり、時期をすべて特定するのは困難であるが、SD01の新古によって、大きく様相が変化するのは確実である。発掘区内の遺構変遷をここにまとめておく。

A期 (21頁図31) SD02の出土遺物は9世紀に入るものがなく、埋土は、SD01古と同様に地山の土で埋め立てている。また、SD01新との間隔は0.4~1.3mと狭くなるが、SD01古では約3.0mの間隔があり、通路もしくは築地や塀などの区画施設の存在を十分に想定することができる。そのため、SD02はSD01古と同じA期の遺構と考える。SD03はSD01新との重複関係があり、SD03のほうがSD01新よりも古いことがわかる。よって、SD02・03はともにSD01古と同じA期の遺構と考えるのが妥当である。遺構の時期については、SD01古埋立層から9世紀初頭の灰釉陶器、8世紀末~9世紀初頭の特徴をもつ

土器が出土していることから、8世紀後半という木屑層の年代と、タイムラグが生じる。後述のように木屑層の廃棄物は、一度別の場所へ集められてからSD01古に投棄された可能性が高いので、その時間差を反映していると考えられる。その場合、20年以上の時間差が生じることになるが、木簡に書かれた文字の墨の状態、削られた面の劣化が進んでいないことから長期間放置したものとは考えがたい。埋立層から出土した新しい要素の土器については、後世の混入品である可能性があり、SD01古の埋立時期は8世紀後半のなかで収まると考える。

B期 (21頁図32) SX04はSD01新が埋没する最終段階に形成されたもので、検出した遺構のなかで最も新しくなる。SD01古は約半分の深さまで埋め立てられ、幅が広げられてSD01新がつくられる。SD01新下層の土が堆積した後、石組SX06をとまなう土橋SX05を構築する。発掘区南東隅の小柱穴は、SD01新と土橋SX05の連結部南辺に沿って分布するように見える。発掘区外の小柱穴の分布は不明ながら、土橋SX05を通路とすれば、それと関わる遺構の可能性を想定できるかもしれない。SD01新の北肩に沿う小柱穴と合わせて、ここでは小柱穴をB期の遺構ととらえておく。出土土器の時期からSD01新の年代について考えると、SD01古が埋め立てられた8世紀後半につくられ、9世紀前半のうちに埋まった

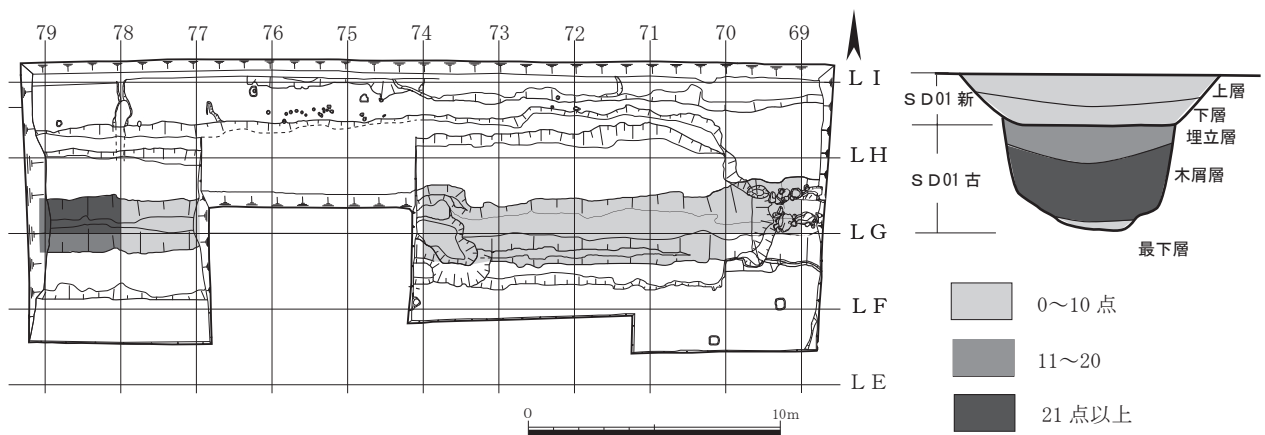


図136 出土木製品平面分布図・断面模式図

ことがわかる。SD01新の凹み部分に遺物を投棄したSX04については、一番新しい土器の時期が9世紀半ばになり、SD01新の埋まった時期は9世紀前半でも、半ばに近い時期であったと考えられる。出土瓦の検討から、長岡宮の創建に使用された後の軒平瓦6732型式Q種が出土しており、SD01新の埋没は平安時代以降であるという結論を得ている。

II. SD01埋土の遺物分布

第3章第2節で報告したように、SD01古の木屑層は西側で厚く堆積しており、東にいくほど薄くなるため、多量の投棄場所が西寄り部分であった可能性が高い。この点をSD01出土遺物の分布から確認しておきたい。

遺物の種類によって分布状況を確認する。

まず、木製品であるが、今回報告した約300点の遺物の出土位置を平面・模式断面図に示したのが図136である。平面図は小地区ごとの遺物量、模式断面図は層位ごとの遺物量を示している。平面的にはLG-78区周辺に集中し、78ライン以西で全体の70%を占め、78ライン以東

では1区画あたり10点以下と少量である。層位的にはSD01古木屑層に集中し、SD01古埋立層、SD01古最下層、SD01新上層・下層（上層と同量）の順になり、木製品の出土量はSD古木屑層の堆積量と比例し、投棄されたのはLG-78区付近であることがわかる。

つぎに、同一個体と考えられるイスラム陶器の分布について検討する。イスラム陶器の破片は釉薬の剥がれた細片を除くと破片が34点出土しており、その東西方向断面分布は図137のようになる。34点中28点がLG-78区に集中する。LF-78は2点・LG-79区は1点出土しているが、いずれもLG-78区に隣接しており、これらは一連のまとまりと考えてよいだろう。74~77ラインの間はSD01埋土を未発掘であるが、70~78ラインの間はまったく出土せず、調査区東端のLG-69区で3点出土する。出土層位は、図に示したように、SD01古木屑層から30点で最も多い。埋立層の1点は、下層の木屑層上面に貼りついた状態で出土しており、本来は木屑層に含まれると考える。一方、埋立層とSD01新下層の境目で出土

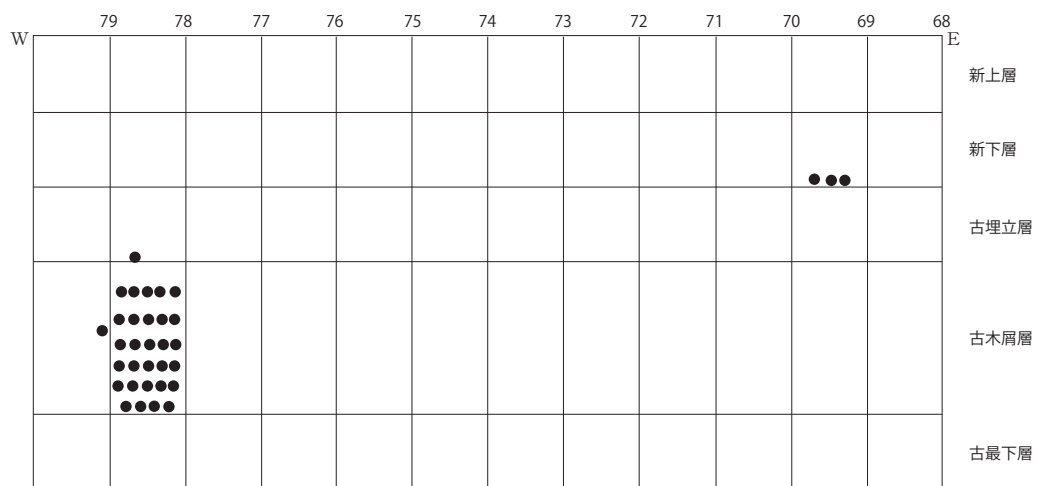


図137 イスラム陶器東西断面・層別出土分布図（●はイスラム陶器片1点を示す）

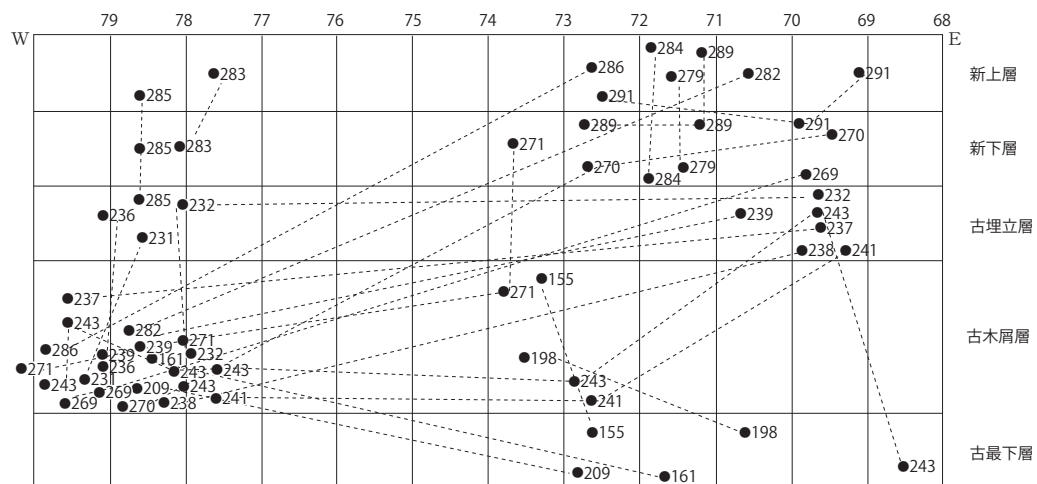


図138 須恵器接合関係東西断面・層別出土分布図（番号は報告番号）

した3点は、いずれもLG-69区から、埋立層の上面に貼りつくようにして出土した。これらも本来は埋立層に含まれていた破片であると考え。以上のように、イスラム陶器の分布の中心は、LG-78の木屑層で、埋立に際して、SD01古木屑層の遺物が東へ約25m移動していることがわかる。

同様に接合関係を確認できた須恵器の分布（図138）をみると、イスラム陶器と同様に78・79ライン付近のSD01古木屑層と東側の69～70ラインのSD01古埋立層と、また、69～73ラインのSD01新の上層・下層出土遺物との接合がみられる。

イスラム陶器・須恵器の接合関係をみると、78・79ライン付近のSD01古木屑層と69ライン付近のSD01古埋立層、SD01新の上下層との関連性がみとめられる。木屑層の出土遺物とSD01新の遺物に接合関係がある点については、何らかの合理的解釈が必要となる。そうでなければ、SD01新上層から出土した緑釉陶器の時期からみて、9世紀初頭から前半にまで時期を下げて考える可能性も生じてこよう。しかし、木屑層の遺物は土器群の詳細な検討から8世紀後半の良好な一括資料と考えて差し支えないため、以下の特殊な埋没過程を経て、木屑層の遺物がSD01新の埋土に再堆積した可能性があると考えた。

- ①多量の遺物投棄地点は本来発掘区外西にあり、そこでは木屑層が厚く、埋立層がほとんど被らない状態であったため、SD01新掘削後、露出した層内の遺物が下流に流れた。
- ②廃棄された木屑層内の遺物の量が多く、岸に残ったものが少しずつ流され、土橋付近で水流が滞り溜まった。

③埋立層の表面に含まれた遺物が風雨などの影響を受けて露出した際に、下流に流された。

これらのようにSD01新の下層・上層に木屑層の遺物が混じる要因がいくつか考えられることから、SD01新の堆積層にSD01古木屑層の遺物が二次的に堆積した可能性が高い。したがって、木屑層の資料と接合する遺物については、木屑層の遺物の時期である8世紀後半の範囲のものと理解したい。

遺物の分布に関連して、遺物の投棄された状態についてふれておく。SD01木屑層遺物の状態を観察すると、焦げのあるものが多いことが特徴として挙げられる。遺物報告のとおり、土器・木製品・木簡でも被熱しているものが少なくない。炭化材も多く出土しているが、溝内で燃やされた痕跡はない。また、同一個体と思われるイスラム陶器の分布をみると、その場で割れたような状況ではなく散漫である。以上のことから、SD01古に投棄された多量の木屑の一部は、直接この溝に投棄されたのではなく、別の場所に集められて燃やされ、ある程度分量を縮減した後に、投棄されたものと考えられる。

Ⅲ. SD01の性格

SD01が北側に想定される十一面堂院とその南の西南角院を区画する道路に関係すると同時に、条坊側溝とも関連する溝であるかについて検討したい。

A. 検出状況からの検討

調査結果から判断すると、SD01古の北側に細いSD02があり、それを繋ぐ位置に南北方向のSD03があるので、SD01古が東西道路の北側溝、SD02が十一面堂院の南限の排水路であると考えられることができる。つまり、SD01古とSD02の間に院をめぐる区画施設が存在し、SD03は

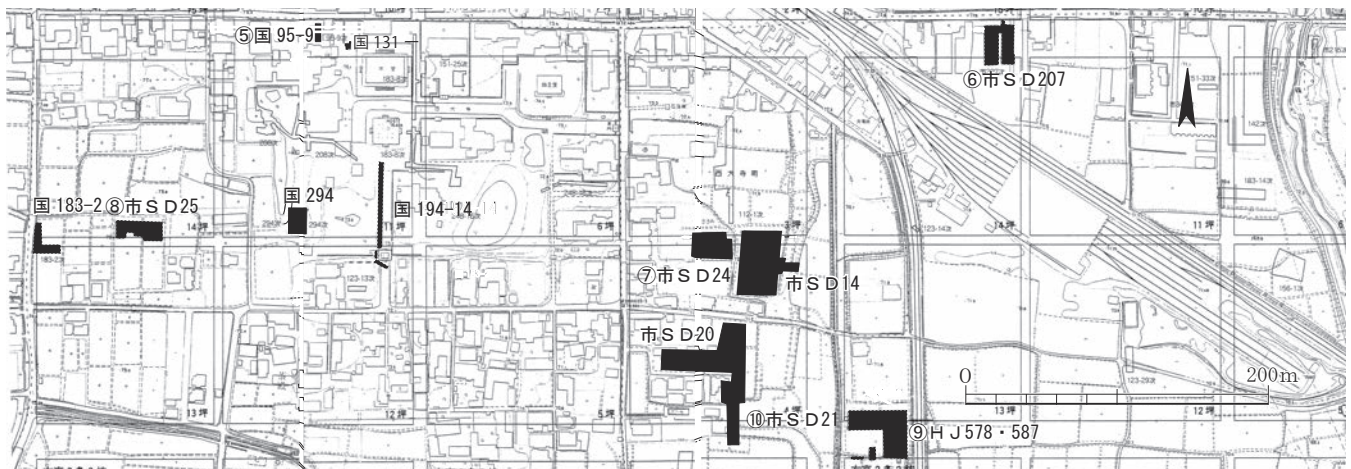


図139 周辺の調査例 (SD01 延長上・条坊関係) 丸数字は表44に対応 (1/5,000) (『平城京条坊総合地図』(奈良文化財研究所 2003)の「西大寺」「野神」をもとに作成)

院内の水をSD01に流すための暗渠であった可能性がある。

一方SD01古が区画道路の南側溝で、SD02がその北側溝になるという考え方もできる。SD02は北肩が14世紀の素掘溝で壊されているため溝心が不明で、SD01古との正確な心間距離が算出できないが、SD02の最深部とSD01古の心間距離は5.75m(約19.4小尺)で20小尺に近い値になる。しかし、本来のSD01古の溝幅と考えられる土橋付近での路面幅は3.0mしかなく、院前の通路としては狭すぎる感があるが、通行できない幅ではない。したがって検出状況から考えた場合、SD01は区画通路の北側溝と南側溝の両方の可能性があり、どちらか判断することができないといえる。

B. 周辺条坊遺構からの検討

つぎに、Aで検討した区画道路が西大寺を造営する以前の条坊に関係する遺構かどうかの検討をおこなう。発掘区周辺の条坊関連遺構の発掘調査結果を示したのが表44である。

この検討を行う前に、平城京右京域の条坊道路の「ずれ」について確認しておく必要がある。この「ずれ」の問題に関しては井上和人氏・佐藤亜聖氏らによって、いくつかの論考で言及されており^{文3・文61}、また、調査報告のなかでもその「ずれ」が指摘されている。その要点をまとめると以下ようになる。

a. 一条北大路は遺存地割から平城宮周辺の条坊計画規矩から北に約6m偏在する位置に造営されている。

(表44①の発掘結果から井上和人氏が指摘)

b. 食堂院推定地で確認した一条北大路南側溝は、西三坊間東小路をはさんだ東隣の喪儀寮推定地で検出した同側溝より北に約3mずれる。(表44③の発掘結果)

c. 一条条間路は「ある地点(おそらく秋篠川)以西で幅を狭めて、道路心を北に寄せている。(表44⑤の発掘結果から小野健吉氏^{文5})が指摘。)

d. 一条南大路は西二坊大路以東は条坊計画線上に施工されている。(表44⑨の発掘結果)

e. 一条南大路は西二坊大路以西で条坊計画線よりも約7m北にずれる。(表44⑩の発掘結果)

以上のように、右京域については一条南大路よりも北の東西道路に関して北にずれる傾向があるが、道路によってずれる位置が異なり、ずれ幅も一様でない。

この「ずれ」の要因としては、西大寺旧境内南方にある秋篠川の支流の外大門川が影響している可能性があると考えられるむきもある。

いずれにしろ、今回の調査地周辺の条坊道路を考える場合、通常条坊計画線を参考にすることができないことがわかる。

これらを踏まえたうえで、周辺の条坊道路との比較をおこなう。なお、右京域の条坊の東西方向のふれを考慮する場合、武田和哉が算出した $W-0^{\circ}9'16''-S$ を採用する^{文67}。道路幅を復元する場合、小路で検出例の多い20尺を採用し、大尺:0.3545m、小尺:0.2955mで計算する。

表44 周辺の調査例 (SD01 延長上・条坊関係)

番号	条坊道路	遺構	位置	検出遺構	X	Y	西大寺旧境内での位置	調査回数	備考
①	一条北大路	北側溝心	西二坊	SD01	-144,597.896	-20,434.277		市HJ430	報告では雨落ち溝。遺存地割から北側溝の可能性
②	一条北大路	北側溝心	西二坊	SD10197	-144,596.200	-19,872.000		(勸元興寺文化財研究所2003)	喪儀寮推定地。元興寺文化財研究所調査
	一条北大路	道路心	西二坊	SF10020	-144,605.000	-19,881.000		(勸元興寺文化財研究所2003)	同上。南北側溝心間距離17.2~17.8m。(50大尺)
	一条北大路	南側溝心	西二坊	SD10821	-144,613.570	-19,881.000		(勸元興寺文化財研究所2003)	同上。
③	一条北大路	南側溝心	西三坊	SD985	-144,610.500	—	食堂院	国404・410・415	④より約3m北にずれる。
④	一条北大路	南側溝心	西三坊	SD010	-144,614.000	—		(勸元興寺文化財研究所2006)	喪儀寮推定地。元興寺文化財研究所調査
⑤	一条条間路	北側溝心	西三坊	SD101	-144,871.946	-20,250.282	金堂院・塔院間	国95-9	世界測地系ソフト換算 ^{註1)}
	一条条間路	道路心	西三坊	—	-144,874.746	-20,249.282	金堂院・塔院間	国95-9	同上。南北側溝心間距離5.6m(15.8大尺・19小尺)
	一条条間路	南側溝心	西三坊	SD100	-144,877.545	-20,250.282	金堂院・塔院間	国95-9	世界測地系ソフト換算 ^{註1)}
⑥	一条条間路	南側溝心	西二坊	SD03	-144,871.263	-19,803.283		市207	世界測地系ソフト換算 ^{註1)}
⑦	一条条間南小路	南側溝心	西三坊	SD01	-145,006.100	-19,988.000	寺地	市SD24	
⑧	一条条間南小路		西三坊	SD01	-145,004.650	-20,351.000	十一面堂院・西南角院間	市SD25	本書の報告
⑨	一条南大路	北側溝	西二坊	SD101	-145,127.400	-19,872.000		市HJ578・587	
	一条南大路	道路心(推定)	西二坊	SF1012	-145,140.700	-19,872.000		市HJ578・587	復元座標値。幅75大尺に復元
⑩	参考	推定道路心	西三坊	SD49	-145,134.497	-19,981.286	寺地	市SD21	一条条間路を踏襲したと考えられる水路。

市SD24次調査（表44⑦）（平成20年度調査）

右京一条二坊四坪の北東隅部分に該当し、伽藍復元では西大寺旧寺地に含まれる。今回の市SD25次調査地の東方延長上で、一条条間南小路南側溝（SD01）が検出された。

この溝と比較した場合、市SD25次調査地で復元できる一条条間南小路南側溝心の座標値は

$X = -145,006.990 \cdot Y = -20,351.000$ となり、
 今回検出したSD01古の溝心の座標値（表44の⑧）と比較すると、⑧のX座標値が2.34m北にずれることになる。逆に北側溝と過程した場合、
 大尺： $X = -144,999.900 \cdot Y = -20,351.000$
 小尺： $X = -145,001.800 \cdot Y = -20,351.000$
 となり、⑧のX座標値が道路を20大尺と仮定した場合南に4.75m、20小尺と仮定した場合南に2.85mずれることになる。

市HJ 578・587次調査（表44⑨）（平成19年度調査）

西大寺旧境内ではないが、右京一条二坊十三坪と右京二条二坊十六坪の間を調査し、一条南大路とその南北側溝を検出した。検出路面幅は24.5mであり、復元できる道路幅は75大尺としている。ここで確認した一条南大路道路心から計算して市SD25次調査地で復元できる一条条間南小路北側溝心の座標値は

大尺： $X = -145,005.431 \cdot Y = -20,351.000$
 小尺： $X = -145,006.031 \cdot Y = -20,351.000$
 となり、一条条間南小路南側溝とすると
 大尺： $X = -145,012.551 \cdot Y = -20,351.000$
 小尺： $X = -145,011.951 \cdot Y = -20,351.000$
 となる。⑧のX座標値を比較すると、北側溝とした場合、道路幅を20大尺で復元すると北に0.781mずれ、20小尺で復元すると北に1.381mずれる。同様に南側溝とした場合、大尺で復元すると北に7.901mずれ、小尺で復元すると7.301mずれる。

以上、東の延長上にあたると考えられる⑦一条条間南小路と、一本南側の⑨一条南大路との比較を行った。

⑦との比較の場合、周辺のずれの傾向から、南にずれることは考えにくいので、北側溝である可能性は低いと考える。南側溝と考えた場合は、2.34mずれることになるが、西三坊坊間東小路をはさむという点で、表44③の食堂院の成果と④の喪儀寮推定地との間で約3mずれている関係に近いと考える。つまり、西大寺の主要伽藍の東辺にあたる西三坊坊間東小路を境に約3mの「ずれ」が生じており、この場合SD01は一条条間南小路の南側溝の可能性が高いといえる。

⑨との比較の場合、北側溝として、道路幅を20大尺で復元した場合との「ずれ」が0.781mもっとも少ないといえるが、「ずれ」の問題でとりあげたeの項目にあるように、一条南大路は西二坊大路以西が7m北にずれるということを考慮すると、南側溝とした場合の7m以上の「ずれ」も考えられることになる。この西二坊大路を境にずれる現象は⑦と⑨の関係からもうかがえ、その「ずれ」の距離は約5.5mになる。ただし、一条南大路に関しては、条坊計画線と遺存地割が概ね一致していることもあり、より詳細な検討が必要である。

これらのことをまとめると、周辺の条坊関連遺構から今回検出したSD01は一条条間南小路南側溝である可能性があるといえる。ただ、繰り返しになるが、西大寺旧境内周辺の条坊側溝の「ずれ」の問題をはらんでおり、断定するには至らない。今回の調査地の延長上で条坊関連遺構を検出できなかった調査についてもその「ずれ」が影響しているためかもしれない。北にずれる位置、距離になんらかの法則性がみいだせるのか、それとも自然地形に左右され、場所によって「ずれ」が異なるのかについては、周辺での条坊関連遺構の検出例の増加を待たねばなるまい。

（久保邦江）

註1) 新座標（世界測地系）との換算は、国土地理院がWeb上で公開している「TKY2JGD ver.1.3.79」によった。

第2節 遺物について

I. SD01出土瓦について

出土遺物の項で記した内容を踏まえて、SD01出土瓦から把握できたことを以下に記す。

A. 出土瓦の所用先

軒瓦 SD01から奈良時代の軒瓦が50点出土し、内訳は軒丸瓦が30点、軒平瓦が19点、いずれか不明が1点である。小破片が多く、概して遺存状態が悪い。

出土型式・種別を比較すると、軒瓦編年^{註1)} IV・V期の西大寺所用軒瓦が主体を占める。型式が特定できた軒丸瓦20点のうち、6133型式R種（6点）と6139型式A種（4点）で半数を占める。一方、軒平瓦は東大寺式の軒平瓦6732型式A種（1点）・K種（2点）・Q種（1点）が目立つ。また、小片ながら出土した新型式軒平瓦（1点）は所用先として食堂院が確実である。

西大寺所用の軒瓦以外では、軒丸瓦6272型式（4点）－軒平瓦6644型式（4点）が顕著である。この組み合わせは、平城京内では左京二条二坊（長屋王邸）、右京九条一坊（観世音寺）で主体を成している他、飛鳥周辺、平城宮や平城京内寺院などで出土しているが、西大寺旧境内では未出土で、軒瓦編年I期に比定される点からも時期的には異質である。その他は、平城宮や西隆寺をはじめ平城京内他所でも散見できる。

軒瓦はその使用状況から考えて、西大寺造営以前に当該地で使用（「A群」）・近隣で使用（「B群」）、西大寺造営以後に境内で使用（「C群」）・近隣で使用（「D群」）の4つに大別できよう。A・B群については、西大寺造営以前に編年されるI～III期が対象で、軒丸瓦6272型式－軒平瓦6644型式が組み合せて出土している点が特徴的で、A群の可能性が高い。ただし、長屋王と縁のある^{註2)} 右京一条北辺四坊で6272型式B種が出土している状況を考えると、B群の要素もある。その他、軒丸瓦では6282型式G種、6301型式B種、6314型式G種、6348型式A a種がA・B群の可能性がある。特に、6301型式B種は当調査地を除くと、旧境内では出土していない。出土数や出土状況を考えると、B群を想定するのが合理的であろう。さらに、6301型式B種は平城京条坊築地塀用瓦との指摘^{註3)}もあり、当調査地の西に所在する西三坊大路の築地塀をはじめ周辺条坊で使用していた可能性もある。また、6314型式G種の出土状況は6301型式B種と似る。当調査地の南に隣接する西南角院でのみ出土していることから、A群とすべき状況であるが、西南角院の南端で出

土していることなどを加味すると、6301型式B種と同様に条坊築地塀での使用、すなわちB群の可能性もある。軒平瓦については6644型式以外では6675型式A種、6682型式B種、6694型式A種、6702型式A種がA・B群に該当する。6675型式A種は金堂院をはじめ旧境内で出土しているが、6682型式B種と6694型式A種は旧境内初出、6702型式A種は散見できる程度である。

西大寺創建後のC・D群については、軒丸瓦では6133型式R種と6139型式A種の他、6200型式A種と6236型式I種が該当する。これらは金堂院や主要伽藍で相当数が出土していることからC群の代表格であることが確実である。一方、軒平瓦では6732型式K・Q種や食堂院所用の新型式軒平瓦がC群に該当する。この新型式軒平瓦は食堂院を除くと、当調査地以外では確認できない。また、同じく東大寺式の6732型式A種は旧境内では出土していないことから、C群には該当せず、条坊築地塀などで使用されたD群なのかもしれない。軒瓦編年から考えて、6663型式F種と6721型式I種もC・D群の候補であるが、いずれも旧境内で散見できる程度である。

上記に示したC群のうち、軒丸瓦6133型式R種・6139型式A種・6200型式A種・6236型式I種、軒平瓦6732型式K・Q種について、西大寺報告資料の主体を占める『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』（以下、『防災』）^{註4)}と当調査地の出土軒瓦を確認しておきたい。金堂院の南側、すなわち現本堂周辺を網羅している『防災』での傾向は、往時の西大寺主要伽藍の創建軒瓦を反映しているのは間違いない。もちろん、今回の出土数量と『防災』でのそれには大差があり、比較・検討は容易でないが、ある程度の様相は把握できると考えている。『防災』における奈良時代軒瓦については、軒丸瓦は6133型式R種が最も多く、次いで6236型式A種、6139型式A種、6236型式H・I種、6200型式A種の順である。この5型式・種で、出土軒丸瓦数の8割を占める。一方、軒平瓦は6732型式Q種が最も多く、次いで同型式N・K・M・F・R種の順である。この6型式・種で、出土軒平瓦数の8割を超える。今回の軒丸瓦6133型式R種と6139型式A種の出土傾向は『防災』と一致するが、軒丸瓦6236型式－軒平瓦6732型式の出土比率は『防災』に比べると低い。また、『防災』では型式・種を超えた胎土・焼成の差異に注目し、「I群」と「II群」に大別している。II群には、軒丸瓦では6139型式A種、6236型式I種、軒平瓦では6732型式K・Q種が該当する。これらII群は、出土分布から東西両塔・四王院を有力な使用伽藍と推定している。特に6139型式A種は西塔周辺での出土が顕著で

ある。一方、I群については出土分布がII群と一致しないことや主要分布から考えて、金堂院を主体とした所用を想定している。今回の出土軒瓦を観察した結果、I・II群の大別には追従するところである。今回、新たに確認した点を以下に示しておく。II群とされる軒丸瓦6139型式A種のうち、SD01新から出土した範の傷みが明確な後出資料(3)は、SD01古から出土した先行資料(2を含む3点)に比べると、胎土が精良で焼成もさらに軟質である。平城京廃都後も西大寺伽藍は存続し、平安時代以降も相当数のC群が引き続き使用される。軒平瓦6732型式Q種はC群の代表格である。『防災』では、主要創建軒瓦の一つである軒平瓦6732型式Q種は西大寺塔への供給がほぼ終了した段階で、範が長岡宮所用瓦を製作する工人集団へ移動する。その後、長岡宮への生産が一段落した時点で、範が西大寺に戻されたとされる^{註5)}。今回、SD01新から出土した6732型式Q種(1点)は、範傷進行や製作技法などから、範が西大寺に戻された後の資料である可能性が高い^{註6)}。

施釉瓦 SD01古から三彩平瓦(2点)、SD01新から緑釉丸瓦(2点)が出土した。三彩平瓦・緑釉丸瓦は『防災』をはじめ旧境内では出土していないようである。今回出土した三彩平瓦は、緑を基調に褐・白を斑紋に配色する。平城宮・京の主体を成す典型例であるが、唐招提寺出土例とは異なる^{註7)}。『西大寺資財流記帳』(以下、『資財帳』)には、薬師・弥勒両金堂の屋根は装飾が豊かな様子が記される。想像の域を出ないが、これらの施釉瓦は金堂をはじめ中心伽藍での使用を考えておきたい。

道具瓦 極先瓦、熨斗瓦、面戸瓦、鴟尾、塼が出土した。熨斗瓦と面戸瓦については後述し、ここでは極先瓦と鴟尾について述べる。『防災』によると、極先瓦は出土分布から東西両塔に使用されたとする。SD01古(33)・新(34)出土のものは飛檐極用で、33は『防災』資料と同規格と考えられるが、34は釘穴位置と厚さなどを勘案すると、『防災』資料とは法量が異なる。飛檐極用のものは、少なくとも2種類存在するようである。鴟尾はSD01新から2点出土したが、旧境内での出土例は食堂院と東側寺地で散見できる程度である^{註8)}。また、『資財帳』では金堂屋根に金銅製の鴟尾を載せていたことが知られるが、瓦製の鴟尾に関する記述は確認できない。

B. 出土瓦から推察したSD01

出土軒瓦から推察する限り、出土瓦の大部分が奈良時代の丸瓦と平瓦である。その大半がSD01から出土している状況から、当調査全体での丸瓦と平瓦を集計することは有効と考えた。もっとも計数量の相関関係を明らか

にすることは、遺跡の種類や主たる構成遺構で差異が生じることから厳密には不可能ではある。しかしながら、SD01の性格を明らかにする一助として、出土瓦から垣間見られる様相を示しておく必要がある。まず、SD01が当調査地の近接位置に想定される東西条坊側溝やその築地雨落溝か否かである。使用丸瓦に対する平瓦の重ね代を考えると、一般的に丸瓦の破片総点数は平瓦の2～3割程度で、丸瓦の破片総重量は平瓦の3割程度と考えて大過なさそうである。また、丸瓦・平瓦の一枚当たりの重量に関しては、今回の出土瓦は小片が多く完形復元が困難で、その対比や試算は除外せざるを得ない。

今回出土した丸瓦と平瓦の計数量を集計すると、丸瓦の破片総点数・重量はともに平瓦の5割強に達し、総点数・重量に占める丸瓦の比率が高い。仮に近接位置に本瓦葺きの築地塀を想定した場合、平瓦と認識した断片に熨斗瓦が含まれる公算がより高まるはずである。これを前提とすると、丸瓦と平瓦の計数量比率の矛盾がさらに拡大する。対して、丸瓦と認識した断片に面戸瓦が含まれる可能性も高くなるはずであるが、今回は面戸瓦を小片で1点確認したのみであり、面戸瓦の存在を積極的に認めること自体に疑問が生じる。以上の観点でSD01出土瓦を評価すると、その主体は築地塀の所用瓦とは言い難い。また、軒瓦に関しては、その型式・種が多岐に及ぶことや残り具合の悪さなどをも勘案すると、築地塀からの落下瓦として積極的に肯定できる状況にもない。

C. SD01の埋没経過

出土瓦から推察して、SD01古の埋没契機や時期、所用建物を特定するには至らなかった。また、西大寺創建に先立つ奈良時代前半に比定される軒瓦がSD01古から出土した点、当調査地付近に想定される東西条坊側溝の是非も確定できなかった。その一方で、埋没経過に関しては、ある程度の背景を想定することができる。

塔周辺での出土が顕著な軒丸瓦6139型式A種や塔に使用された可能性が高い施釉極先瓦、金堂での使用を想起させる三彩平瓦がSD01古から出土している。これらの状況から、中心伽藍にこれらの瓦が葺かれた後、SD01古に埋没するまでに相応の経過が不可欠である。さらに、長岡宮所用よりも後出の軒平瓦6732型式Q種がSD01新から出土していることから、少なくともSD01新の埋没時期は平安時代に降る可能性が高い。また、食堂院で主体的に使用される軒平瓦も出土したことなどから、出土瓦の主体は当調査地周辺の旧境内や周辺築地に限らず、金堂院をはじめ広範囲で発生した廃瓦を想定するのが合理的であろう。(宮崎正裕)

II. 土器類の検討

SD01の埋土には、型式的特徴からみて、8世紀後半、8世紀末～9世紀初頭、9世紀初頭～前半の土器群が包含されていることがわかった。これらの土器群のうち、SD01古木屑層（以下、木屑層）から出土した8世紀後半の土器が全体の約60%以上を占めている。8世紀後半の土器は他の層からも出土していることを第4章で述べたが、ここでは木屑層出土土器群に着目し、時期を特定した根拠を示したい。

I. SD01古木屑層出土土器群の時期

時期の決定については、型式特徴の変化が明瞭であり、他の遺跡から出土している土器群とも比較しやすい土師器杯・皿・椀を基軸に据えておこなった。

(1) 土師器（図140～151）

A. 法量分析 平城京跡から出土する土師器は、8世紀後半以降になると、法量（口径、器高）の縮小傾向が顕著になることが知られている。^{文76)}

そこで、最初に木屑層出土の土師器杯A・皿A・椀Aの法量について、分布図を使用しながらみていく。

図140～142は、土師器杯A・皿A・椀Aのうち、口径が測定できた全ての個体を0.5cm階級ごとに点数を数えヒストグラム^{註9)・文75)}にしたものである。

杯A（図140）口径14.5～22.0cm台までの様々な大きさのものがある。グラフの形状をみると、口径17.5～19.5cm台が幅のある高い山状（ピーク）に突出しており、その前後のものが短い裾として分布する形になっている。しかし、ピークは一つではなく、口径19.5cm台と18.0cm台の二つにピークがある様相を呈している。ヒストグラムからは、各階級の出土量が分かるだけでなく、口径の大きさによって群分けすることができる。少なくとも杯Aは、二つのピークの前段階と口径14.5cm台のものと大きく三つに分けることができる。

皿A（図141）口径13.5～24.0cm台までのものがある。口径17.0～17.5cm台が群を抜いて突出しており、この階級の皿Aが多く使用されたことがわかる。また、グラフの形状からは、口径21.0cmと17.0cm、13.5cmに三つのピークがあることがわかり、皿Aの大・中・小の関係を示しているものと考えられる。

椀A（図142）口径10.5～15.5cm台までのものがある。グラフの形状は、口径12.0～13.5cm台が高い山状に突出しており、その前後のものが短い裾として分布している。口径13.5cm台にピークが一つある。椀Aは小型の器形であるため、杯や皿とは異なり口径階級の幅が狭いのが特徴である。口径分布が接近しているため、大きさによる

群分けは難しいが、ピークの両側にあるものがそれぞれ群としてくれる可能性はある。

次に、口径と径高指数を表した分布図を使いながら、杯A・皿A・椀Aの法量についてみることにする。

径高指数（器高／口径×100）^{註10)・文10)}とは、口径に対して器高の高低を示したものである。図143～145は、各器種の口径を横軸に、径高指数を縦軸にとることにより口径ごとに器高の高低が理解できるようにし、第2節で掲載した土器のデータを基に作製した。

土師器杯Aは、口径19.0cmを境にして、概ね二つの群に分けることができる。口径19.0cm以上のものを土師器杯A I、口径19.0cm未満のものを杯A IIとした。口径計測が可能な資料の中に、14.5cm台の杯A片が1点だけあった。小片であったため掲載していないが、この資料を含めて考えると杯A IIIまで分類できる。杯A Iは、径行指数が17.8～30.0までがあり、器高が高いものは21.0以上、低いものは20.0以下であることが理解できる。杯A IIは、高いものは22.0以上、低いものは21.0以下のものである。このことから、SD01古木屑層出土土師器杯Aは、口径の大きさには少なくとも二群以上あり、それぞれに器高の高低がある土器構成となっている。

土師器皿Aは、Iが口径19.5cm以上、径高指数8.6～15.0、IIが口径16.0～18.0cm、径高指数12.9～20.6、IIIが口径13.8～13.9、径高指数17.3～17.4の三群に分けられ、杯A同様に器高の高低が認められる。皿A II・IIIは、皿A Iよりも径高指数が大きいもの（16.0以上）が多く、器高が高く深いものが主体である。

土師器椀Aは、Iは口径15.0cm以上、IIは口径11.5～14.1cmである。器高の高低は同じ群の中にはなく、Iのものが低く、IIが高いことが分かり、杯Aや皿Aとは異なる分布を示す。

以上のことから、杯A・皿A・椀Aは、大きさによって群としてくることができ、その中でも器高が高く深いものと低く浅いものが共伴することが理解できた。

B. 資料の比較検討 ここでは、平城京宮土器編年の基軸となっている平城宮SK219^{文8)}（以下、SK219）、平城宮SK2113^{文12)}（以下、SK2113）、および長岡宮SD20620^{文58)}（以下、SD20620）の土師器と木屑層の土師器との法量について、ヒストグラムと径高指数を作成し器種ごとに比較検討する^{註11)}。

杯A（図146・147）SK219は口径19.0～20.0cm台、径高指数は20.5～24.9のものがある。SK2113は口径17.0・18.0～18.5cm台、径高指数は21.9～26.8である。SD20620は、口径11.5・13.5・15.0～15.5・16.5～18.0cm台、径高

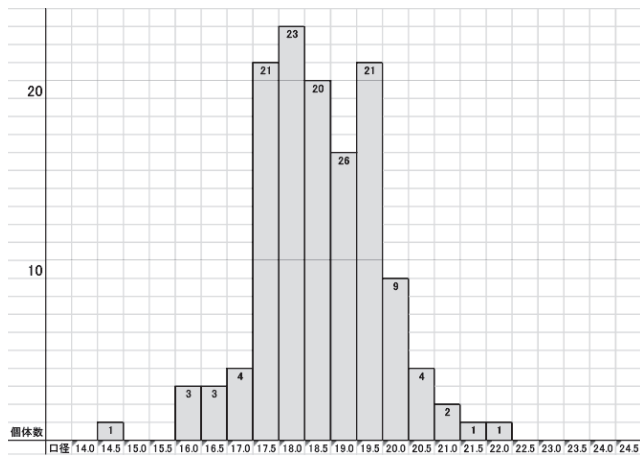


図140 木屑層出土土師器杯Aの口径ヒストグラム

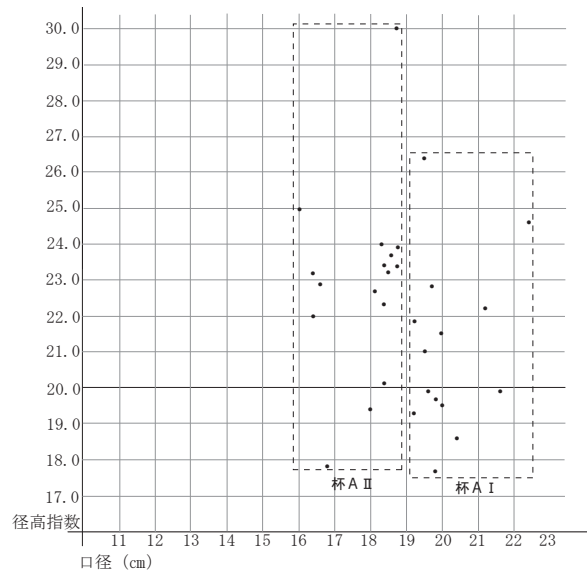


図143 木屑層出土土師器杯Aの口径と径高指数分布

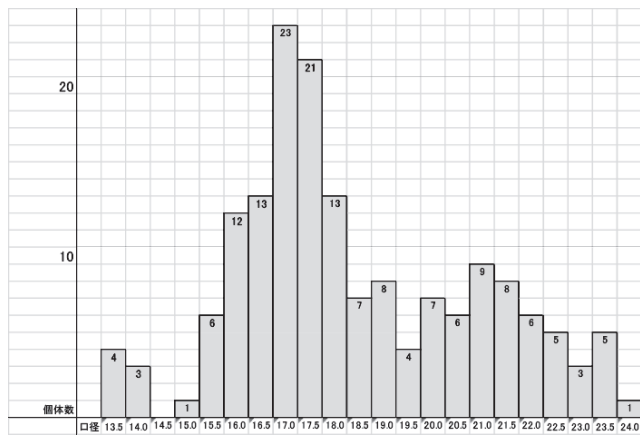


図141 木屑層出土土師器皿Aの口径ヒストグラム

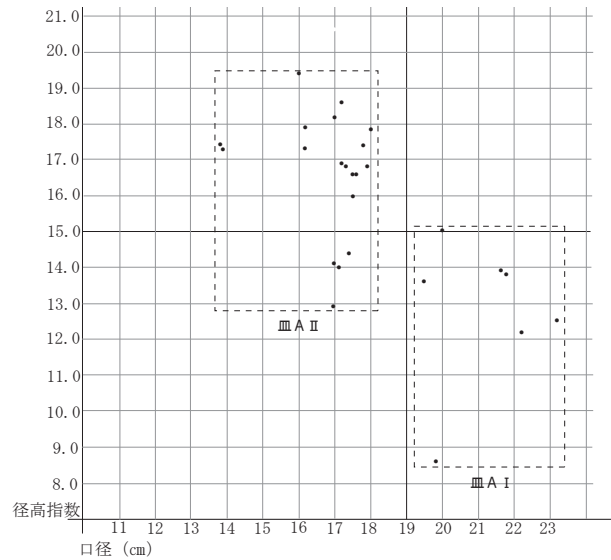


図144 木屑層出土土師器皿Aの口径と径高指数分布

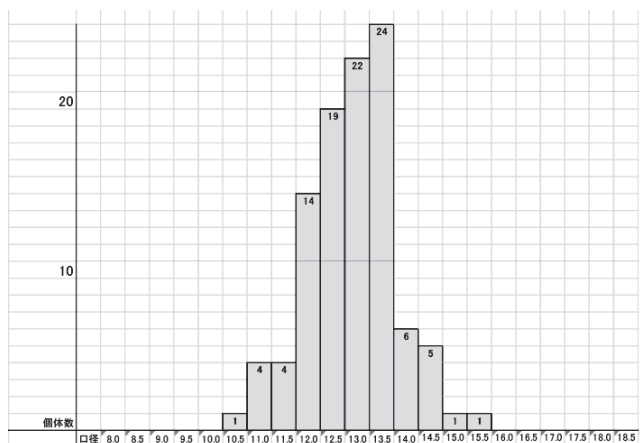


図142 木屑層出土土師器碗Aの口径ヒストグラム

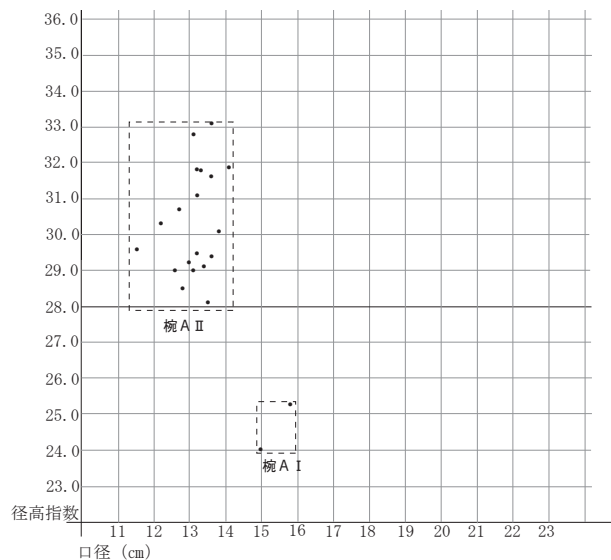


図145 木屑層出土土師器碗Aの口径と径高指数分布

指数は17.8～31.3までである。前述してきた木屑層のデータも併せて、ヒストグラフと径高指数の分布図から、口径の大きさによって以下のように分類できる。

(SK219)

杯A I : 口径19.0～20.0cm

(SK2113)

杯A II : 口径17.0～18.5cm

(木屑層)

杯A I : 口径19.0～22.0cm、杯A II : 口径16.0～18.5cm、

杯A III : 口径14.5cm

(長岡宮SD20620)

杯A I : 口径16.5～18.0cm、杯A II : 口径15.0～15.5cm、

杯A III : 口径13.5cm、杯A IV : 口径11.5cm

以上の口径による群別や、図146・147からも明らかのように、木屑層を含めSK219とSK2113の杯Aは、ほとんど同じ法量であることがわかる。一方、SD20620の杯Aは、法量の縮小化が進んでいることが明白であり、形式的な差を示す結果であることが理解できる。

皿A (図148・149) SK219は口径16.5～18.5・20.5・21.5～22.5cm台、径高指数は20.5～24.9。SK2113は口径16.0・17.5・21.0～22.5cm台、径高指数は21.9～26.8である。SD20620は、口径14.0～17.0、18.0～20.0、21.0cm台、径高指数は11.0～19.5までである。口径により以下のように分類できる。

(SK219)

皿A I : 口径20.5～22.5cm、皿A II : 口径16.5～18.5cm

(SK2113)

皿A I : 口径21.0～22.5cm、皿A II : 口径16.0～17.5cm

(木屑層)

皿A I : 口径19.5～23.5cm、皿A II : 口径15.0～19.0cm

皿A III : 口径13.5cm

(長岡宮SD20620)

皿A I : 口径18.0～21.0cm、皿A II : 口径14.0～17.0cm

皿Aは、基本的に大小二群に分かれ、径高指数15を境に、器高の深浅が分かれる傾向がある。SD20620は、杯Aほど法量縮小が進んでいるようにはみえないが、皿A Iに属すものは、21.0cm台に止まり22.0cmを越えるような大型の皿が少なくなるようである。皿A IIは、木屑層には口径14.0cm以下の小型品が数点あるが、主体を占めているものは口径17.0～17.5cm台のもので、SD20620は口径16.0～16.5cm台とやや小さくなっている。径高指数は、相対的に皿A Iの値が小さく、皿A IIの方が大きいものが多い。皿A IIの方が、口径に対して器高が高く深いものが主流であることがわかる。

椀A (図150・151) SK219は口径13.0～13.5・15.0～15.5cm台、径高指数は30.2～32.6。SK2113は口径9.5・11.5・13.0cm、径高指数は31.1～36.7である。SD20620は、口径8.0・9.0～10.0、11.0～13.5・14.0cm台、径高指数は25.2～34.6までである。口径の大きさにより以下のように分類できる。

(SK219)

椀A I : 口径15.0～15.5cm、椀A II : 口径13.0～13.5cm

(SK2113)

椀A II : 口径13.0cm、椀A III : 口径9.5～11.5cm

(木屑層)

椀A I : 口径15.0～15.5cm、椀A II : 口径11.0～14.0cm

(長岡宮SD20620)

椀A I : 口径11.0～14.0cm、椀A II : 口径8.0～10.0cm

SK219・SK2113・木屑層の椀Aは口径13.0cm台のものが、SD20620は口径12.5cm台が主体を占めている。口径の縮小化は緩やかにみえるが、径高指数が25.2～27.1と低い一群があり、口縁部が開き気味に立ち上るものが目立つようになる。また、SD20620には口径8.0～9.0cm台の小さい椀が存在するなど、形式的には新しい特徴を示しているものとする。

SK129・SK2113の椀Aは、径高指数が30.2～36.7と高い値で、口径に関わらず器高が高く深いのが特徴である。木屑層の椀A Iは、口径15.0cm以上あるが、径高指数は24.0～25.3と値が低い。これらの違いを時期差とみることもできるが、製作時における変異の幅によるものと理解しておきたい。

以上、法量の分析をおこなってきたが、木屑層出土の土師器は、SD20620よりもSK219・SK2113出土土器群と極めて似ていることが理解でき、8世紀後半の一括土器群として位置づけることができる。

C. 調整技法の検討 木屑層の調整手法については、第2節でもふれたように、杯Aの器表面を削って仕上げるものが85%以上あり、ヘラケズリ調整が主体であることがわかる。実測図を掲載した個体では、a手法が2点、b手法が12点、c手法が24点で、削りを行なうb・c手法は約95%近くを占める。このうちc手法は、口縁端部までヘラケズリが及ばない個体が大半である。また、ヘラケズリの仕方も規則性がなく、無造作に削るものが多い。一方、c手法が最も盛行する9世紀前半代の資料^{文69)}をみると、口縁端部までヘラケズリが及び、ケズリの単位も規則性があり、外周を四分割で仕上げるものが主体を占めるなど技法の定型化がみられる。これらの土器と比較すると、木屑層のものは口縁端部まで丁寧にヘラケ

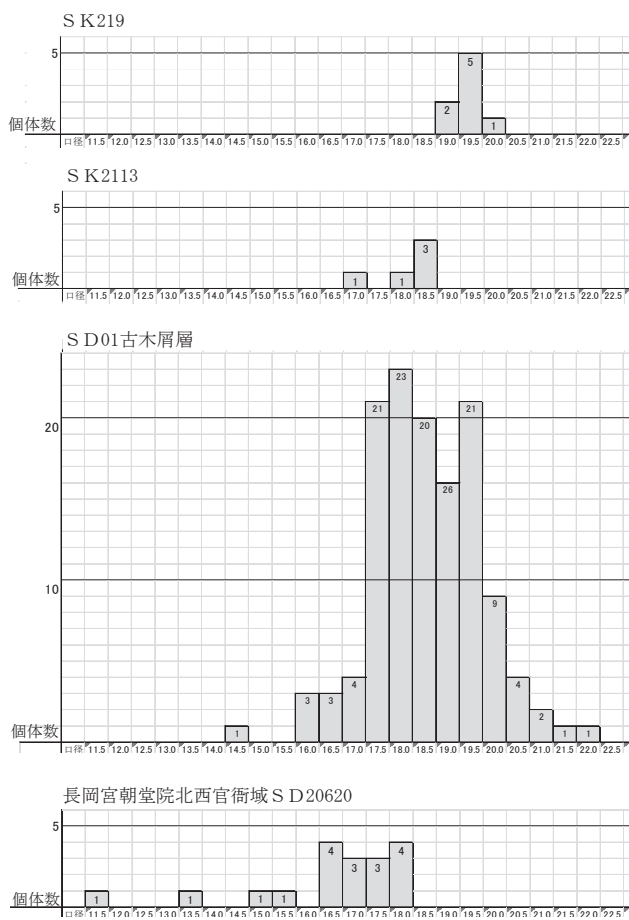


図 146 ヒストグラムによる木屑層出土土師器杯Aの比較

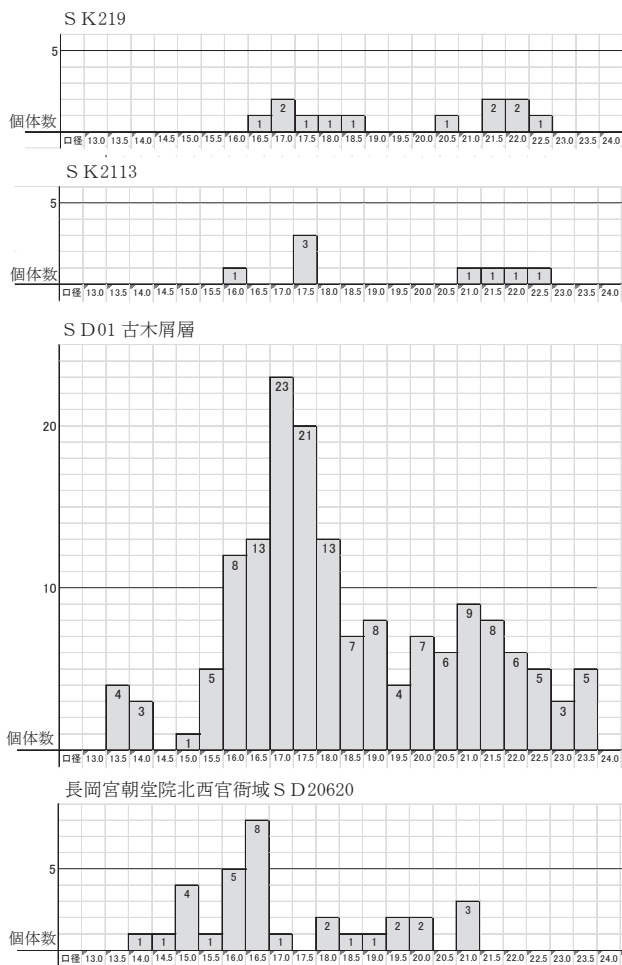


図 148 ヒストグラムによる木屑層出土土師器皿Aの比較

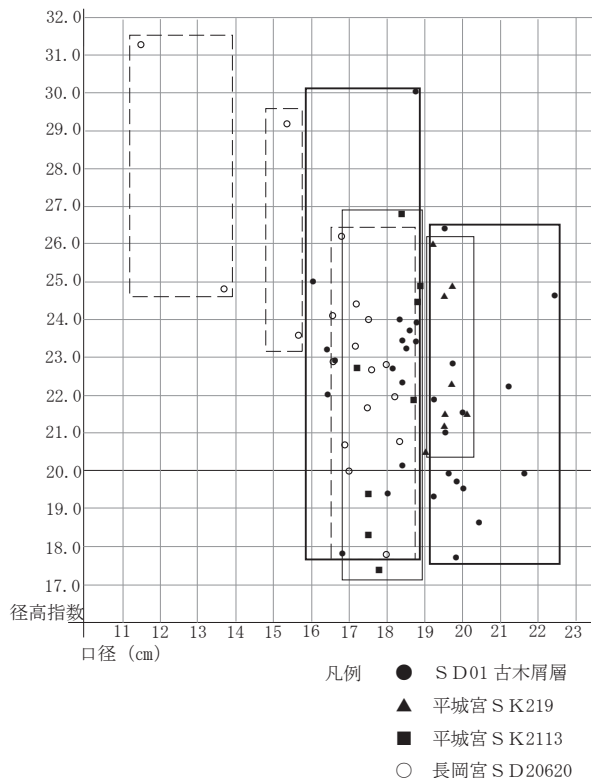


図 147 木屑層出土土師器杯Aの口径と径高指数による比較

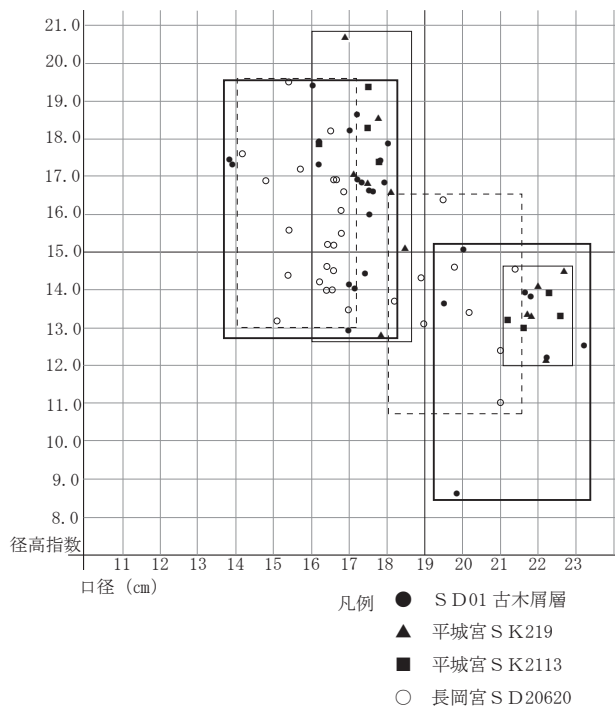


図 149 木屑層出土土師器皿Aの口径と径高指数による比較

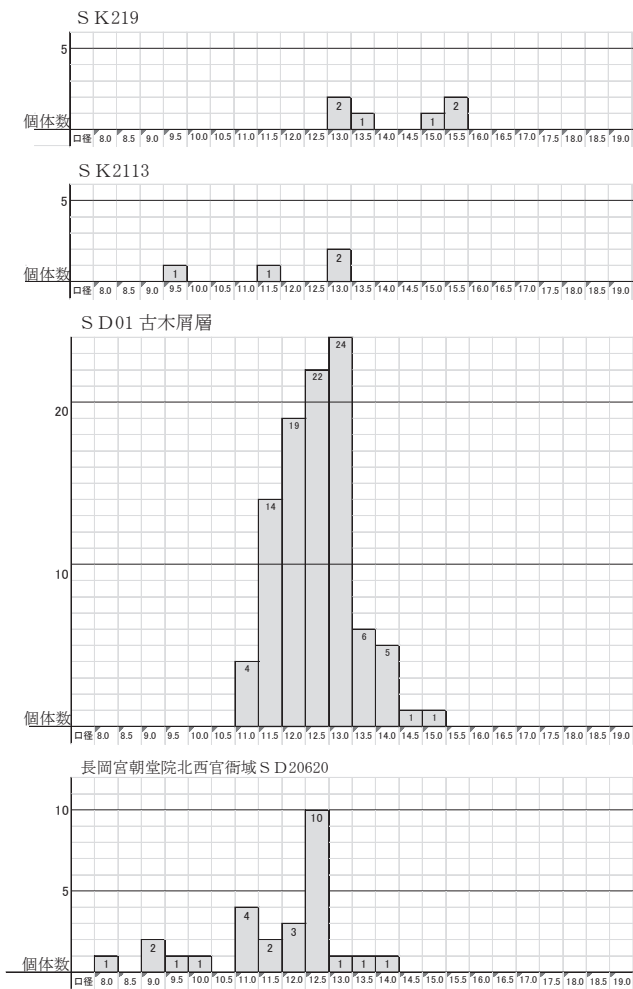


図 150 ヒストグラムによる木屑層出土土師器碗Aの比較

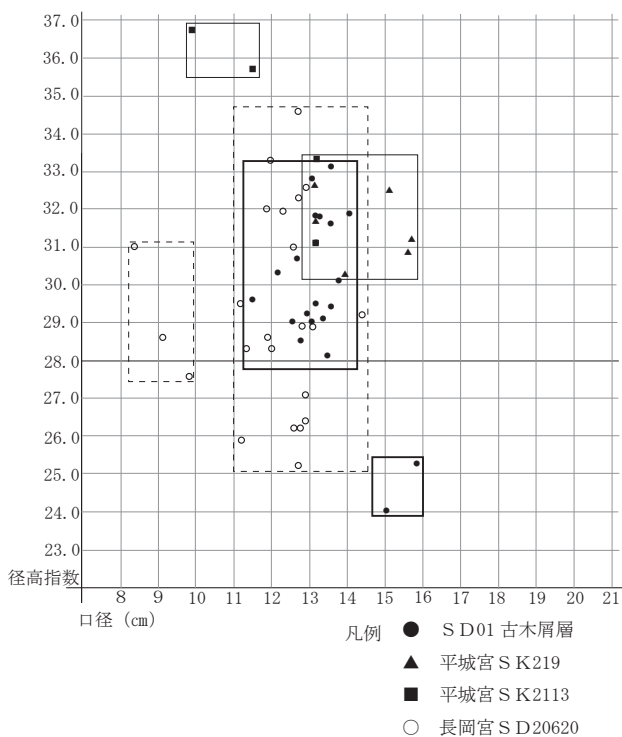


図 151 木屑層出土土師器碗Aの口径と径高指数による比較

ズリ調整する技術が定型化していないと考えられる。しかし、SK219の杯Aには、丁寧にヘラケズリを行なっているものが存在していることから、おそらく8世紀後半代の段階では、定型化が進んでいるものと遅れているものが混在している状態であったと推察する。

(2) 須恵器 (図152・153)

8世紀から9世紀初頭の須恵器は、土師器に比べると形態や調整手法の変化が緩慢で、時期的な変化がとらえにくい。基本的には、土師器による時間軸を設定し、それに伴う須恵器の器種や形態・技法の特徴をみていく方法をとった。SD01古最下層・木屑層・埋立層、SD01新下層・上層をそれぞれ比較し、特徴や時期についてふれていくこととしたい。

最下層から出土したものは量が少ないが、杯Bをみると高台が底部のやや内側に入った位置に付けられている(117・115)。杯L(116)や縁部の屈曲しない蓋(147・145・144)などは8世紀前半から中頃の土器群中によくみられるものである。これらからみると8世紀中頃のものとしてよいように思われるが、水(浄)瓶(35)は8世紀中頃には存在する器形ではあるものの、8世紀後半から末頃の土器群中にみられることが多く、やや時期幅がある可能性もある。

木屑層出土の一群は、蓋の縁部の屈曲が強く、杯Bの高台の位置が上述の最下層のものとは比べると外側に寄った位置に付けられているものが多い点などは、最下層の

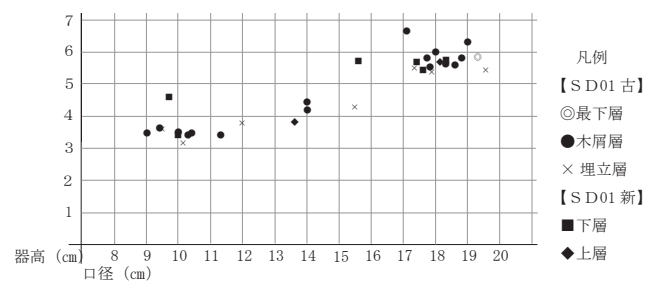


図 152 SD01 出土須恵器杯Bの層別による径高指数の分布

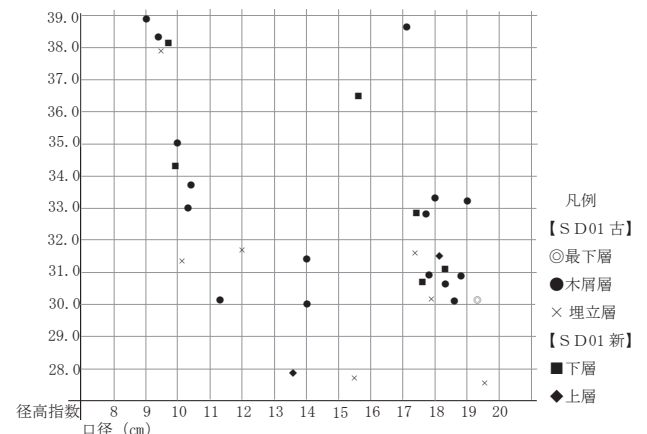


図 153 SD01 出土須恵器杯Bの層別による径高指数の分布

ものに比べて時期が下るものであることを示している。また、水（浄）瓶や壺Gが出土していることも8世紀後半～末頃の特徴をよく示していると思われる。これらの土器や縁部が薄くて屈曲が強い蓋（138）、杯B（86）の形態からみて、より時期が下るものとも思われるが量的には少ない。他の杯Bの形態や皿B・杯Cなど8世紀末（長岡京期）にはあまりみられなくなる土器が多く出土していることから、土器群の年代の中心は8世紀末より古く、8世紀後半にあるのではないかと考える。

埋立層およびSD01新も杯Bの分布図（図152・153）からみて取れるように、法量は木屑層出土のものと同じような分布を示している。個別的には時期が下る要素がみられるものもあるが、須恵器では器種構成や形態からも木屑層の土器群と明確な差があるとは思えない。

以上のようなことから、SD01古、新とも時期的には8世紀後半のものが中心で、その中にそれよりも古い8世紀中頃の特徴をもつもの、8世紀末～9世紀初頭頃の新しい特徴をもつものが若干含まれていると考える。

II. 生産地の検討

（1）土師器

口縁部の形態から、土師器杯AはA～C形態に、土師器皿AはA～D形態に分類し観察を行なった。その結果、杯AはC形態、皿AはC・D形態に分類できる個体が多いことがわかった。

杯A C形態は、A形態とB形態の中間的な口縁部を呈しているもので、底部～口縁部下半までの器厚は厚みがあるが、口縁部上半から端部にかけてやや薄くなる特徴がみられる。また、調整技法はc手法が多いが、口縁端部まで丁寧には削らず、口縁部中半までしか及んでいないものが多い。ヘラミガキについても粗いものが多い。B形態についても、C形態の調整技法に共通する点が多い。おそらく、B形態とC形態の相違は、産地の差を示すものではなく、工人の違いを示す程度のものであると考えられる。産地については今のところは不明であるが、B形態は、大和北部域で平安時代以降も隆盛する土師器の祖形であると考えられることから^{文69}、C形態も平城京近郊で生産された可能性が高いと考える。A形態のものは、8世紀前半では平城京域で主流を占めるタイプで、口縁部の屈曲が強く、暗文が施されたものが多い。8世紀後半になると口縁部の屈曲が弱くなり、B・C形態のものに似てくる傾向がある。河内地域や摂津地域^{文70}で多くみられることから、生産地は同地域に求めることも可能である。しかし、生産量やコスト面から推察すると平城京の南側の地域や山城南辺部など平城京近郊に工人

が移動し生産していたことも十分に考えられよう。

皿A 皿AのA・B形態は、杯AのA・B形態と共通する特徴をもち、平城京近郊もしくは河内地域や摂津地域で製作されたものであろう。C形態は口縁端部が内傾する特徴をもつ一群であり、平城京域では8世紀前半からよくみかけるタイプの皿である。難波宮などの摂津地域から山城北部・南部地域と広範囲にみられる^{文75}ものであるが、それぞれに微妙な形態差が認められる。D形態は、口縁端部を丸くおさめるタイプのもので、8世紀後半以降にみられる傾向があるが、平城京域においては、量的に主体を占める印象はない。全体のプロポーシオンはB形態のものと似ており、口縁端部の形態に相違点が認められるだけである。おそらく両者は、生産地の違いではなく、同じ地域の工房もしくは工人の差によるものと考えられる。

（2）須恵器

食器類をはじめ壺・甕の中で、量的に多いのは青灰色を基調とするもので、平城京出土須恵器の群別^{文14}ではI・II群（陶邑）、IV群（生駒産）の須恵器が主体を占めている。また、壺や水瓶、浄瓶の中には暗灰色に焼きあがり、暗灰緑色の自然釉がかかるV群（尾張産）がある。平城京では8世紀後半以降の壺・甕類を中心にV群土器が増えてくることが知られており、時期的な特徴が本土器群にも表れているものとみられる。

3. 土器群の特徴

SD01古木屑層の土器群では、圧倒的に土師器が多く全体の8割以上を占める。器種別では、土師器・須恵器・黒色土器A類の杯・皿類の割合が高いことが注目される。杯・皿など食器形態が多いのは、儀式や饗宴などに使用し廃棄された可能性を示すものであり、平城京域では一般的な土器構成である。今回出土した土師器・須恵器の大半の杯・皿・椀類は、器面が二次的に被熱し、煤や油煙で黒く変色しているものも多く、須恵器鉢Aや甕Cの破断面に煤が付着する例もある。これらの一部は、寺院での法要に際し灯明皿として使用されたことが窺える。また、須恵器の中に、水（浄）瓶・鉢Aが多くみられること、硯に転用されたものが多いことはこの土器群がもっている特徴といえよう。これに類するのは興福寺一乗院^{文6}や大安寺旧境内の杉山古墳周濠から出土した土器群^{文25}で、一乗院では水（浄）瓶が多く出土しており、杉山古墳周濠からは瓶類に加えて鉢Aや転用硯が多く出土している。これらの組成上の特徴は寺院によくみられ、西大寺という場所で使われていた土器であることをよく示していると考えられる。（三好美穂・池田裕英）

4. イスラム陶器

平城京跡から初めてイスラム陶器が出土した。出土点数34点のうち30点がSD01古木屑層からの出土であり、この層から出土した土器、木簡と同時期に投棄されたと考える。土器は奈良時代後半、木簡には神護景雲二(768)年の記年がある。遺物の性格を考えると、伝世品である可能性もあり、製作年代はさらに古くなる可能性がある。

日本国内および中国・東南アジアでのイスラム陶器の出土例については山本信夫氏による論考がある^{文73)}。その論考の記載をもとに日本国内の初期イスラム陶器^{註12)}出土例についてまとめたのが表45で、論文発表後に報告された出土例を含めて作成したものである。出土場所はほぼ北部九州に集中し、それ以外は近畿地方の京都・奈良の例のみである。いままで出土した初期イスラム陶器片は全部で109点前後になる。最も多く出土したのは福岡県福岡市の鴻臚館跡で43点である。

出土した資料の時期については、後世の遺物との共伴である例が多く、出土遺物の年代が限定できるものが少ない。西大寺旧境内を除く資料のなかで時期が最も古いのは鴻臚館跡出土のもので9世紀末が上限とされている。時期が限定される資料で確実に8世紀代に収まるという点で、今までの出土例のなかでは西大寺旧境内出土資料

が国内出土最古の例となる。

国内出土のイスラム陶器は小片が多く、図面や、器種^{註13)}、部位についての報告されていない例があり、西大寺旧境内の資料との器形を比較することは困難である。底部については福岡市の博多遺跡群築港第3次調査の資料がある。この高台は外開き形の台形状で西大寺旧境内の資料と同様であるが、博多遺跡群の資料のほうが、外に開く度合いが強い。この高台は中国揚福建省劉華墓(10世紀前半)と一致する^{文73)}ということから、高台が外に開く特徴は新しい要素であるかもしれない。また、福岡市の多々良込田遺跡から出土した頸部から肩部にかけての破片の釉薬や胎土が非常によく似ている^{註14)}。体部片外面にみられる調整は、西大寺旧境内出土の資料が、比較的幅広で丸みをもつクロロ目が残るのに対し、太宰府条坊跡第19次・第149次調査のものは幅の狭い平行調整痕であり^{文73)}、全く違った印象を受ける。

青緑釉壺の編年については、佐々木達夫氏によって貼り付け文の変遷や形態の変化に準拠して行われている^{文65)}。残念ながら西大寺旧境内出土例には貼り付け文がないため、参考にすることができない。形態については球状と表現できるほど丸みはないが、10世紀の資料といわれる中国福建省の劉華墓出土青釉四耳壺^{文64)}よりは器高が低く、丸みがあり古い要素が認められる。また、青緑釉陶

表45 国内の初期イスラム陶器出土例一覧

No.	出土地	遺跡名	器種・部位	年代	点数	備考
1		鴻臚館跡* ^{註13)}	口縁部1点、胴部上半12点、胴部下半3点、高台部(大壺か?)1点	9世紀末が確実な上限	43	
2		多々良込田遺跡*	頸部境から肩部につく耳の部分	9～10世紀	1	
3	福岡県福岡市	博多遺跡群		最も古い出土年代は12世紀		
		築港線1次調査*		12世紀の遺物と出土	3?	
		築港線2次調査		11～12世紀、16世紀後半	1?	未報告
		築港線3次調査*	壺高台(外開き形)	形態的特徴から9世紀後半～10世紀	1	
		築港線5次調査		12世紀前半	1	
4	福岡県福岡市	太宰府条坊跡				
		第19次調査*	壺体部?(図面から判断)	灰色土層出土。下限は12世紀前半	2	出土状態から11世紀後半～12世紀に出現する類になる可能性。
			壺体部?(図面から判断)	S K04出土。12世紀前半～中頃		
		第34次調査*	大型の壺か?	9世紀第4四半期～10世紀初頭	3	9世紀第3四半期に遡る可能性
				11世紀後半～12世紀前半土坑		
		第81次調査*	大型の壺か?	11世紀後半～12世紀初頭	5	8～11世紀前半の遺構からの混入品の可能性。
5	福岡県久留米市	第149次調査	壺体部?(図面から判断)	年代不明	1	包含層出土
		第194次調査	不明	11世紀後半～12世紀前半	1	12世紀中頃～後半に下る要素がある。
6	福岡県久留米市	箱崎遺跡	不明	9世紀以降	7	福岡市博物館に展示
		筑後国府跡				
		第69次調査*	頸部ないし胴部上半	11世紀後半～12世紀前半	1	
		第86次調査*	壺胴部中位からやや下。	11世紀後半	1	周囲に9世紀後半の遺構
7	長崎県壱岐郡石田町	第122次調査	壺の下部	11世紀中頃～12世紀前半	1	
		第140次調査		14世紀～16世紀の遺物と出土	1	古期遺構からの混入の可能性
8	京都府久御山町	原の辻遺跡	壺の下部上半部	8世紀末～12世紀前半	1	
9	奈良県奈良市	佐山遺跡	小片で部位不明	13世紀の桶葉型瓦器椀と共伴	1	島島上の耕作溝からの出土
		西大寺旧境内	短頸壺の頸部から底部にかけて	8世紀後半の土器・木簡と共伴	34	青緑釉壺1個体分

器の釉薬の違いが生産地と年代の違いを示すという見解があり^{文65)}、西大寺旧境内出土例が銅アルカリ釉薬であるという分析結果は、8世紀後半以前と年代を限定できる好資料として一つの基準となることであろう。

青緑釉陶器を焼いた窯跡が見つかっていないため、具体的な生産地は不明であるが、アッバース朝の首都バグダッドやペルシャ湾頭のバスラ、イラン西部のスーサなどが候補地として考えられてきた^{文62)}。いまのところデータの比較をおこなっていないが、今後、イランやイラク出土遺物の分析結果と比較検討することで将来産地同定が可能になると考える。また、西大寺旧境内出土のイスラム陶器を実見された佐々木達夫氏・佐々木花江氏は「復元される形状は8世紀後半から9世紀前半のイラク南部産といってよいもの。」^{文66)}という評価を与えている。

イスラム陶器が中国から日本へもたらされた経緯については、従来、ほとんどが北部九州からの出土であったため、中国商人が民間レベルで持ち込んだとの解釈が一般的であった。しかし、今回の出土が都である平城京のしかも称徳天皇とゆかりの深い西大寺から出土していることもあって、遣唐使などの公的なルートで奈良まで運ばれてきたものである可能性も考えられる。

いずれにしろ、廃棄された年代が8世紀後半で、釉薬・胎土の化学的分析結果を提示した本例は、イスラム陶器を考えるうえで今後の基準資料になることは間違いないだろう。8世紀後半の東西交流史上、年代と交流範囲を検討できる極めて重要な資料であるといえる。

(久保邦江)

Ⅲ. 木製品について

今回の調査で出土した木製品の全体的な傾向について述べる。

表46は、出土した木製品（箸状木製品を除く）を種類別と層位別に点数を示した一覧表である。

出土層位別をみると、SD01古木屑層が圧倒的に多く94.2%を占める。次いでSD01古埋立層から3.8%で、それ以外はすべて1%以下と微量である。

種類別でみると、用途不明品を除いて最も多いのは容器である。ついで食器具、部材、服飾具、調度の順になる。ただし、箸状木製品を除いているため種類別では食器具が本来は最も多いと考えられる。以下種類ごとに概要をみってみる。

工具 全体に占める割合は低く、大規模な工房の存在などを示す内容ではない。木釘の割合が多いが、木屑のなかに、細い棒状で木釘が折れたと思われるものが数点あるが先端を欠損しており判断できなかった。

服飾具 留針、横櫛など僧侶以外の使用者が想定される遺物である。西大寺内に僧侶以外の人々が存在したことを示す資料と考える。檜扇については、いままで平城宮内で1点しか出土していない団扇形のB型式^{文21)}の可能性のある42が出土している点に注目したい。全開すると復元長75cmであり当然自分を煽ぐ大きさではない。寺院内でも身分の高い人物の所用品であった可能性が考えられる。

容器 曲物が最も多いが、これは板材に曲線部があったり、樺皮の綴じ紐が残っていたり、側板のケビキがあるなどの特徴が多いため、小片でも比較的容易に種類を特定できることに起因しているためだと思われる。

また、第4章の遺物報告の楕円形曲物で一端を直線的に切断しているもの(56・57・63～65)については、史料番号027(文字資料篇図版11)や、133(文字資料篇図版38)、137(文字資料篇図版40)のように、一端が曲線になる木簡に再利用するための材である可能性が考えられる。楕円形曲物は円形曲物に比べて長方形の板材をとるのに適しているため、よく利用されたのではないだろうか。

食器具 箸の出土が目立って多い。平成18年度に奈文研が実施した西大寺食堂院の調査で検出した井戸SE950から木製品がまとまって出土している。報告では箸が多く「失敗品などを含むと思われ製作現場で削片とともに芥屑として一括され井戸廃棄時に遺棄されたものが多数あると思われる。」^{文23)}としており、SD01古木屑層の遺物

表46 出土木製品点数一覧(箸状木製品を除く)

	工具	服飾具	容器	食器具	文房具	遊戯具	祭祀具	調度(箱)	部材	紡織	不明	小計	割合(%)
上層	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	4	6	0.7
下層	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	5	6	0.7
埋立層	0	1	5	2	0	0	2	1	4	0	17	32	3.8
木屑層	17	24	79	77	15	13	13	20	32	2	497	789	94.2
最下層	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0.4
その他	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0.2
小計	17	26	87	79	16	14	15	21	36	2	525	838	100
割合(%)	2.0	3.1	10.4	9.4	1.9	1.7	1.8	2.5	4.3	0.2	62.7	100	

と同様な傾向が伺える。いずれにしる寺域内のどこかの作業場でまとめて箸を製作していると考えて間違いないだろう。

文房具 文書軸が多い。寺院という性格上当然であるかもしれない。教典の場合は軸の両端を装飾することも多く^{文78)}今回出土したのも、教典に使用されていたかもしれない。

「僧冊一」の墨書がある物指は、精緻に加工されているが、目盛りのつけかたが正確でない。実用品であるか疑問が残る。

遊戯具 琴柱と籤がある。琴と囲碁は僧尼令で認められている娯楽であるため、それを裏づける資料であるといえる。籤については文字資料篇(12・29・30頁)に詳しいが、その内容が、「法王」を頂点とする僧侶の序列を表している。寺院内での僧侶の娯楽を物語る資料として遊戯史上貴重である。

祭祀具 出土遺物から寺院内でも、斎串や形代を使って祭祀がなされていた可能性が高い。その主体が僧侶とも考えられるが、西大寺造営中に置かれていた造西大寺司の役人である可能性もある。祭祀具は、他の種類の木製品と同様に廃棄物に紛れた状態で出土しており、溝のなかで祭祀を行ったとは考えにくい。製作して使用されなかった可能性もある。

調度・部材 箱はすべて組み合わせ式のもので、刳り抜き式のものがない。大きさは長さ30cmを少し超える大きさのものと、それより小型のものである。小型のものは破損しているものが多く、本来の長さは全長が残る155(長さ25cm前後)くらいであったと思われる。

以上、種類別に概要をみてきた。種類としては、農具・狩猟具・漁労具などがなく、文房具、調度などがあることから、寺院的な性格を示す遺物が多いと考える。

今回の報告では出土木製品のいくつかの問題点を提起することができた。今後はこれらの資料をもとに、寺院跡や、遺跡の性格が異なる官衙、貴族の宅地などの木製品の出土傾向を比較し、西大寺旧境内出土の木製品の評価をしていきたい。

(久保邦江)

- 註1) 毛利光俊彦・花谷 浩「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮発掘調査報告XII -内裏の調査II-』奈良国立文化財研究所 1991 を参照。
- 註2) 鈴鹿王の旧宅地を称徳天皇山陵とする説に拠る。直木孝次郎「称徳天皇山陵の所在地」『有光教一先生白寿記念論叢』高麗美術 2006 などを参照。
- 註3) 原田憲二郎「平城京内出土の興福寺式軒瓦」『8世紀の瓦づくりI -大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開-』奈良文化財研究所 2012 で、6301型式B種を含む興福寺式軒瓦を出土地点から築地崩用途と考察している。
- 註4) 『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所編 1990
- 註5) 小澤 毅「西大寺創建瓦と復興期の瓦」『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所編 1990 を参照。
- 註6) 註5) 文献所収の6732型式Q種と比較した。
- 註7) 平松良雄「唐招提寺出土三彩小型瓦・小型瓦について」『唐招提寺防災施設工事・発掘調査報告』奈良県教育委員会・財団法人建築研究協会編 1995、中井 公「瓦類」『平城京左京二条二坊十二坪 -発掘調査概要-』奈良市教育委員会 1997 などで、平城宮・京と唐招提寺出土の三彩瓦を比較検討している。
- 註8) 小澤 毅「瓦塼」『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所編 1990 で、出土品ではないが、寺蔵品の鴟尾を掲載している。
- 註9) ヒストグラムを使用して土器群を分析する方法は、小森俊寛氏が考案したものである^{文79)}。土器群全体の法量の把握や型式的要素の相違点を考える際に役立つ分析方法として評価される。
- 註10) 径高指数は、数字で表すため分かりやすく、型式要素を考える際の有効な手段の一つであると考えられる。
- 註11) 平城宮SK219・SK2113、長岡宮SD20620の出土土器の法量(口径・器高)は、それぞれが掲載されている報告書の図版から計測したものである。それをもとに径高指数の値も算出した。
- 註12) 山本氏の論文によると初期イスラム陶器の特徴としては、「チョーク状の」胎土、釉は濃く半透明な青緑色で厚いことなどが挙げられる。従来は9世紀~11世紀のものとしていたが、今回の例で8世紀後半まで時期が遡ることになる。
- 註13) *印をつけた遺跡出土のイスラム陶器については、城戸泰利「III 調査のまとめ」『太宰府条坊跡 VII』太宰府市教育委員会 1995のなかで「すべて大壺」としている。
- 註14) 多々良込田遺跡出土のものと西大寺旧境内出土のものが似ていることについては岡野智彦氏も指摘している^{文80)}。

第3節 結語

本節では、第1・2節における検出遺構や遺物などの分析結果を概観しつつ、調査知見全体を総括する。

1. 検出遺構について

本調査で検出した東西溝SD01の位置について検討を行った。周辺調査における条坊検出事例と比較したところ、若干のずれはあるものの、一条条間南小路南側溝である可能性が高い。ただし、SD01の東側および西側の延長上において同規模の溝が検出されていない点や、西大寺旧境内周辺地区における条坊関連遺構の位置が平城京の他の地区における条坊関連遺構と位置的にずれているという問題^{文³ 文⁶¹}もあるため、本調査の成果のみではSD01が一条条間南小路南側溝であるとは確定できない。

西大寺は奈良時代後半期に造営を開始しており、それ以前に存在した右京北方の条坊や宅地の地割をある程度は踏襲しつつ寺域整備をした可能性がある。仮に西大寺域の伽藍配置が寺の造営以前の地割を完全に踏襲・再利用した形で実施されていたのであれば、SD01は西大寺造営後には十一面堂院・西南角院間^{註¹}の東西方向の通路の南側溝となって機能したものと推測される。ただし、西大寺域内の遺構の様相や伽藍復元などの問題にはまだ未解明の点が多いため、本調査の成果のみでは西大寺内におけるSD01の役割を特定することは、やはり困難である。

ただし、このSD01に関する手掛かりが皆無という訳ではない。それは、今回の調査で出土した豊富な資料群が少なからずその示唆を与えてくれている。

SD01の層位や遺構の変遷については既に本章第1節で総括した通りであるが、大きな流れとしては8世紀後半の遺物と木屑を廃棄し、溝の幅員を大きく広げるために、掘削した土砂でそれを埋め立て、さらにその上に土橋遺構SX05を構築している。この溝の拡張がどのような意味を持つのかは明確ではないが、花粉分析や珪藻分析の結果、溝を拡張する前後で周辺の環境や水流に変化があることが判明し、寺域内での何らかの変化を反映していると推定される。宝亀十一（780）年に資財帳の勘録があることから、時期的には西大寺の主要部分が整備できた頃だと考えられ、大規模工事の終了とともに、周辺整備が行われたではなかるうか。

2. 出土遺物について

SD01から出土した土師器杯・皿・碗の法量を、平城

宮SK219、SK2113、長岡宮SD20620の出土資料と比較した結果、長岡宮SD20620よりも、平城宮SK219とSK2113出土土器群と極めて似ており、SD01出土土器群のうち主体を占めるものが8世紀後半の一括土器群として位置づけることができる結果となった。ただ、調整技法は、9世紀前半の資料が口縁端部までヘラケズリが及びケズリ単位にも規則性があるのに対し、SD01出土土器は口縁端部まで丁寧にヘラケズリ調整する技術が定型化していないものと、一部に丁寧にヘラケズリしているものがあることから、8世紀後半では、ヘラケズリの定型化が、進んでいるものと、遅れているものが混在している状態であることが判明した。

須恵器の特徴については、水（浄）瓶・鉢Aが多くみられること、硯に転用されたものが多いことが挙げられる。これらの組成上の特徴が寺院の様相を示していることも注目すべき点である。

イスラム陶器は、青緑釉葉短頸壺で破片数が34点出土し、胎土や釉葉の観察からすべて同一個体のものであると考える。これが平城京で初めての出土例になり、廃棄された時期が8世紀後半以降であることから、現在のところ国内最古の出土事例でもある。

丸瓦・平瓦については点数・比率を分析したところ、丸瓦の破片総点数・重量がともに平瓦の5割強に達し、総点数に占める丸瓦の比率が高いことがわかった。また、熨斗瓦、面戸瓦の点数が少なく、出土軒瓦の型式・種に統一性がなく、残存状況も悪いことから、これらの瓦が近隣で所用されていたものであると仮定した場合、SD01出土瓦の主体は築地堀の所用瓦とは言い難いことがわかった。また、SD01新上層から出土した軒平瓦6732型式Q種は、範傷の進行や製作技法の変化から、その範型が長岡宮の所用瓦を製作する工人集団に移動し、再び西大寺にもどされたことが確認できる重要な資料でもある。

木製品については、その中に、金箔が付着した部材や、平城宮しか出土例のない団扇形に復元できる檜扇などがあるなど、木製品の種類の構成としては、平城京内で他に類を見ない様相を示している。また、箸の未製品を含む箸状木製品が約6,000点出土しており、木屑層の性格を考える上で看過できない資料である。

加えて、木簡や墨書土器などの出土文字資料から得られた知見としては、概ね神護景雲二（768）年以降数年間の時期の内容であることが判明した。また「西大寺」の記載が多く見られることから、これら出土文字資料は当該時期の西大寺に関するものであることは疑いがない。

その内容は多岐にわたっており、しかも仏教的内容も含んでいることから、寺内では既に宗教活動が本格的に開始されていたとみられる。特に木簡の中には、寺内僧侶による運営組織である三綱務所の記載があることから、これらの遺物はこの部署か類縁の機関から排出されたものと想定しうる。

出土文字資料のなかで注目すべきものは多くあるが、ここでは特に当時「文人之首」と称された石上宅嗣の官位と位階を記した木簡と、唐より渡来した「皇甫東朝」銘がある墨書土器の出土を挙げておきたい。それらの意義は文字資料篇の当該報告を参照されたいが、石上宅嗣や皇甫東朝は、称徳天皇治世下において活躍した人物であり、『続日本紀』に記される西大寺への天皇行幸や節会宴などの往時の様子が偲ばれるものである。

多種多彩な遺物のなかには、西大寺の僧侶の生活を垣間見ることのできる資料があり、籤引きの引き札はそのひとつである。「法王」「律師」「法師」「沙弥」「我（餓）鬼」などといった当時の仏教界の世相や、思想を反映した内容となっていることは興味深い。この他、基石・琴柱が出土しており、僧尼令と合致した内容の娯楽品の存在が確認できた。

この他に、SD01古木屑層から、斎串4点、人形6点、鳥形4点、古埋立層から刀形1点、斎串1点が祭祀具が出土した。これらは、出土状況から溝内で祭祀を行ったものではなく、投棄されたものである可能性が考えられる。ただし、西大寺食堂院の国404次調査で検出した井戸SE950^{文23)}、寺地に想定される市SD14次調査で検出した井戸SE27^{註2)}からも斎串が出土しており、寺域内での祭祀に使用されたものが投棄された可能性も排除できない。寺院跡での祭祀具の出土は他に大安寺旧境内で斎串^{註3)}、人形の例^{註4)}がある。こうしたことから寺院における祭祀のありかたについては僧侶以外の関係者の動向も含めて検討していくべきである。

3. 今後の展望

以上のように、本調査では、非常に重要な結果を得ることができた。特に創建後ほどない時期の西大寺を知る手がかりが得られたことは、極めて重要かつ貴重であり、今後の奈良時代の寺院史研究に資する点は多くある。

本調査で出土した遺物群は、他の平城京城および京内寺院からの出土遺物とは大きくその様相を異にしている。各出土遺物の内容や特徴からは、当時の国際性や貴重な物質文化の伝来が垣間見られる。イスラム陶器はその代表格である。すなわち、いままでのイスラム陶器の出土例が、北部九州に集中し、中国商人が民間レベルで持ち

込んだものと解釈されていたのに対し、今回出土したものが平城京内の寺院であることから、搬入ルートが異なる可能性がある^{文62)}。当時の西大寺が称徳天皇と関係が深かったことからみれば、遣唐使などによってもたらされた可能性も指摘できるであろう。また、一括性の高い共伴遺物から年代特定の手掛かりを得ることとなり、今後の研究に役立つ資料になったと考える。

末尾ながら、本書では、検出遺構、多岐にわたる遺物の基礎的データの整理および分析の報告に主眼をおいた。本書の成果が関係諸分野において今後の研究の進展の一助となれば幸甚である。

西大寺旧境内の範囲は、現在では大半がすでに市街化されており、特に主要伽藍の存在が推定される場所では、今後とも小規模な調査が見込まれる。個別の調査成果を蓄積し、長期的視野に立った寺域の再検討継続が必要である。

(久保邦江)

註1) 十一面堂院・西南角院の位置の比定については大岡実「西大寺の寺地について」『史蹟名勝天然記念物』八ノ四 1933 (後に『南都七大寺の研究』中央公論美術出版 1966 に所収) によった。

註2) 奈良市教育委員会「西大寺旧境内の調査 第14-1・2次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成14年度』2006 で報告されているSE27枠内から出土している。SE27は堀形から奈良時代末の土器が出土している。

註3) 奈良市教育委員会「13. 大安寺旧境内(第22次)の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和60年度』1986 で報告されているSE01から斎串が1点出土している。市DA22次調査は賤院推定地にあたり、SE01からは、奈良時代中頃の遺物が出土している。

註4) 奈良市教育委員会「1 史跡大安寺旧境内の調査(4) 食堂并大衆院推定地の調査 第57次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』1994 で報告されているSE02枠内から出土している。SE02枠内からは平城宮土器後半の土器が出土している。

参考文献

本文中の参考文献を、調査報告書・集成類、論文、単行本類に分けて一覧表にした。第2章の発掘調査一覧の典拠・文献は含まないが、別に引用されている場合はここに掲載している。なお、第5章自然科学分析の参考文献については、各節末に掲載する。

表47 参考文献一覧（調査報告書・資料集成）

番号	編・著者名	報告文献名	出典名	発行機関	刊行年
文1)	秋篠・山陵遺跡遺跡調査会	「第3章 調査の内容」 「第4章 調査成果のまとめ」	『秋篠・山陵遺跡』	学校法人正強学園 奈良大学文学部 考古学研究室	1998
文2)	尾崎正紀・寒川旭他	VIII. 鮮新統最上部一更新統下部（大阪層群） IX. 更新統中部一完新統	『奈良地域の地質』（5万分の1地質図幅）	地質調査所	2000
文3)	(財)元興寺文化財研究所	「平城京右京北辺の調査成果と北辺坊」	『平城京右京北辺』	(財)元興寺文化財研究所	2005
文4)	(財)元興寺文化財研究所	「5. 総括」	『平城京右京一条三坊一坪 平成18年度発掘調査報告書』	(財)元興寺文化財研究所	2008
文5)	奈良国立文化財研究所	「第4章 考察 2. 条坊遺構および東西両塔・四王堂の配置」	『西大寺防災工事・発掘調査報告書』	西大寺	1990
文6)	奈良県教育委員会	「第四章 発掘調査 第三節 遺物」	『重要文化財旧一条院宸殿・殿上及び玄関移築工事報告書』	奈良県教育委員会	1964
文7)	奈良県立橿原考古学研究所	「第3章 平成4年度の調査」 「第4章 平成5年度に調査」	『平城京右京一条北辺二坊三坪・四坪』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告67冊	奈良県教育委員会	1994
文8)	奈良国立文化財研究所	「第V章 遺物 3土器」	『平城宮発掘調査報告II』	奈良国立文化財研究所	1962
文9)	奈良国立文化財研究所	「IV 平城京の遺物 6 銭貨」	『平城宮発掘調査報告VI 平城京左京一条三坊の調査』奈良国立文化財研究所学報第23冊	奈良国立文化財研究所	1975
文10)	奈良国立文化財研究所	「IV 平城京の遺物 3土器」	『平城宮発掘調査報告VI』	奈良国立文化財研究所	1974
文11)	奈良国立文化財研究所	「第IV章 遺物 4木製品」	『平城宮発掘調査報告VII 内裏北外郭の調査』奈良国立文化財研究所学報第26冊	奈良国立文化財研究所	1976
文12)	奈良国立文化財研究所	「第IV章 遺物 3土器」	『平城宮発掘調査報告VII』	奈良国立文化財研究所	1976
文13)	奈良国立文化財研究所	「旧地形と平城宮造営前の遺跡」	『平城宮発掘調査報告X 古墳時代I』	奈良国立文化財研究所	1981
文14)	奈良国立文化財研究所	「第IV章 遺物 4土器」	『平城宮発掘調査報告XI』	奈良国立文化財研究所	1982
文15)	奈良国立文化財研究所	「付章 平城京跡発掘調査要綱」	『平城京左京三条二坊』	奈良国立文化財研究所	1975
文16)	奈良国立文化財研究所	「2 平城京跡の発掘調査地区割り」	『1989年度 平城宮発掘調査部発掘調査概報』	奈良国立文化財研究所	1990
文17)	奈良国立文化財研究所	「第IV章 遺物 4木製品 C SD5100出土木製品」	『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告一 長屋王邸・藤原麻呂邸の調査一』	奈良国立文化財研究所	1995
文18)	奈良国立文化財研究所	「別表23 銭貨計測表」の図	『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告一 長屋王邸・藤原麻呂邸の調査一』	奈良国立文化財研究所	1995
文19)	奈良国立文化財研究所	「II 遺構」	『西隆寺跡発掘調査報告書』	奈良市教育委員会	2001
文20)	奈良国立文化財研究所	「IV-2 遺構」	『西隆寺発掘調査報告書』	奈良市教育委員会	1993
文21)	奈良国立文化財研究所	「第II章 遺物解説」	『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 資料第27冊	奈良国立文化財研究所	1985
文22)	独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所	「西大寺薬師金堂の調査一第409次」	『奈良文化財研究所紀要 2007』	独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所	2007
文23)	独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所	「III 遺物 4金属製品・木製品」	『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』	独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所	2007
文24)	奈良文化財研究所	「III 平城宮出土陶硯について 第1節 陶硯の種類」	『平城京出土陶硯集成I -平城宮跡-』	奈良文化財研究所	2006
文25)	奈良市教育委員会	「第IV章 出土遺物 第3節土器」	『史跡大安寺旧境内I -杉山古墳の発掘調査・整備事業報告一』	奈良市教育委員会	1997
文26)	奈良市教育委員会	「4.平城京右京一条四坊七坪の調査」(SD第2次調査)	『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』	奈良市教育委員会	1985
文27)	奈良市教育委員会	「平城京右京三条三坊一坪の調査 第169・173・182・184次調査」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成元年度』	奈良市教育委員会	1990
文28)	奈良市教育委員会	「平城京右京三条二坊十五坪の調査 第200・213-1・2・3次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度』	奈良市教育委員会	1991
文29)	奈良市教育委員会	「1. 近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度』	奈良市教育委員会	1991
文30)	奈良市教育委員会	「4. その他の小規模調査・立会調査」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度』	奈良市教育委員会	1991
文31)	奈良市教育委員会	「平城京右京三条二坊十五坪の調査 第229次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』	奈良市教育委員会	1992
文32)	奈良市教育委員会	「平城京右京三条三坊二坪の調査 第226・2・237・3次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』	奈良市教育委員会	1992
文33)	奈良市教育委員会	「1. 近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』	奈良市教育委員会	1992
文34)	奈良市教育委員会	「(1) 平城京右京三条三坊三坪の調査・菅原東遺跡の調査 第236・236-2次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度』	奈良市教育委員会	1993
文35)	奈良市教育委員会	「平城京右京三条三坊二坪・菅原東遺跡の調査 第256次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度』	奈良市教育委員会	1993
文36)	奈良市教育委員会	「1 近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度』	奈良市教育委員会	1993

番号	編・著者名	報告文献名	出典名	発行機関	刊行年
文37)	奈良市教育委員会	「(1)平城京右京三条三坊八坪・菅原東遺跡の調査第257-1次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』	奈良市教育委員会	1994
文38)	奈良市教育委員会	「(2)平城京右京三条三坊七坪・菅原東遺跡の調査第257-2次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』	奈良市教育委員会	1994
文39)	奈良市教育委員会	「(3)平城京右京三条三坊二坪・菅原東遺跡の調査第257-3次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』	奈良市教育委員会	1994
文40)	奈良市教育委員会	「(4)平城京右京三条三坊六坪・菅原東遺跡の調査第257-4次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』	奈良市教育委員会	1994
文41)	奈良市教育委員会	「1近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』	奈良市教育委員会	1994
文42)	奈良市教育委員会	「(2)平城京右京三条三坊七坪・菅原東遺跡の調査第257-2次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』	奈良市教育委員会	1994
文43)	奈良市教育委員会	「(2)平城京右京二条三坊四坪・菅原東遺跡の調査第293次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成6年度』	奈良市教育委員会	1995
文44)	奈良市教育委員会	「1近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成6年度』	奈良市教育委員会	1995
文45)	奈良市教育委員会	「1近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成7年度』	奈良市教育委員会	1996
文46)	奈良市教育委員会	「1近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成8年度』	奈良市教育委員会	1997
文47)	奈良市教育委員会	「1近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に係る調査」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成9年度』	奈良市教育委員会	1998
文48)	奈良市教育委員会	「平城京右京三条四坊十坪・宝来遺跡の調査 第386次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成10年度』	奈良市教育委員会	1999
文49)	奈良市教育委員会	「(3)西大寺旧境内の調査 第14-1・2次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成14年度』	奈良市教育委員会	2006
文50)	奈良市教育委員会	「(1)平城京右京二条三坊十二坪の調査 第494-1・-3・-4」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成15年度』	奈良市教育委員会	2006
文51)	奈良市教育委員会	「(5)西大寺旧境内の調査 第16-1・2・3次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成15年度』	奈良市教育委員会	2006
文52)	奈良市教育委員会	「14.平城京跡(右京二条二坊十六坪)の調査 第504次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成15年度』	奈良市教育委員会	2006
文53)	奈良市教育委員会	「2.西大寺旧境内の調査 第18・19/平城京跡の調査 第513次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成16年度』	奈良市教育委員会	2007
文54)	奈良市教育委員会	「25.西大寺東遺跡・西隆寺跡の調査 第8次」	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成16年度』	奈良市教育委員会	2007
文55)	奈良市教育委員会	「(2)西大寺旧境内・平城京跡(一条南大路)の調査第21次」	『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成17(2005)年度』	奈良市教育委員会	2008
文56)	奈良市教育委員会	「赤田横穴墓群の調査(AD02・03次調査)」	『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成22(2010)年度』	奈良市教育委員会	2013
文57)	奈良市教育委員会	「(1)西大寺旧境内の調査(SD第28-1・2次)」	『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成22(2010)年度』	奈良市教育委員会	2013
文58)	向日市教育委員会	「長岡宮跡 第206次(7 AN13J地区)～朝堂院北西官衙～発掘調査概要 4 出土土器」	『向日市埋蔵文化財調査報告書第29集』	向日市教育委員会	1990

表48 参考文献一覧(論文)

番号	編・著者名	文献名	収録文献名	発行元	発行年
文59)	赤川一博	「西大寺造営試論 十一面堂創建時期の推定」	『四日市市立博物館研究紀要 第10号』	四日市市立博物館	2003
文60)	池田碩・大橋健	「奈良盆地の地形学的研究」	奈良大学紀要25	奈良大学	1997
文61)	井上和人	「平城京右京北辺坊考」	『古代都城制条理制の実証的研究』	学生社	2004
文62)	岡野智彦	「中近東から運ばれた青い壺」	『ベルシャの宝物-至高のガラスと銀の世界-』	岡山市立オリエント美術館	2010
文63)	小森俊寛	「総説」	『古代の土器4 煮沸具(近畿編)』	古代の土器研究会	1996
文64)	佐々木達夫	「東アジア出土のイスラム陶器」	『金沢大学法文学部論集 史学篇27』	金沢大学法文学部	1980
文65)	佐々木達夫	「第5章 イスラム陶器の中国陶磁生産技術への影響」	『元明時代窯業史研究』	吉川弘文館	1985
文66)	佐々木達夫・佐々木花江	「奈良出土青緑釉陶器瓶の産地・流通・ルート・用途・内容物・価値」	『金沢大学考古学紀要 第32号』	金沢大学人文学類考古学研究室	2011
文67)	武田和哉	「平城京外京条坊制考-興福寺伽藍中心線との位置関係について-」	『奈良古代史論集3』	真陽社	1997
文68)	三上次男	「前期イスラム陶器論-イスラム陶器史序説-」	『三上次男著作集2』	中央公論美術出版	1988
文69)	三好美穂	「南都における平安時代前半期の土器様相」	『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1995』	奈良市教育委員会	1996
文70)	三好美穂	「土師器食器類の形態」	『瓦衣千年-森郁夫先生還暦記念論集-』	森郁夫先生還暦記念論文集刊行会	1999
文71)	三好美穂	「都城形壺」	『續文化財學論集』第一分冊	文化財學論集刊行会	2003
文72)	矢野建一	「遣唐使と来日「唐人」-皇甫東朝を中心として-」	『専修大学東アジア世界史研究センター年報第6号』	専修大学世界史研究センター	2012
文73)	山本信夫	「日本・東南アジア海域における9～10世紀の貿易とイスラム陶器」	『国立歴史民俗博物館研究報告第94集 陶磁器が語るアジアと日本』	国立歴史民俗博物館	2002

表49 参考文献一覧(単行本類)

番号	編・著者名	文献名	発行者	発行年
文74)	太田博太郎	『南都七大寺の歴史と年表』	岩波書店	1979
文75)	小森俊寛	『京から出土する土器の編年的研究-日本律令的土器様式の展開、7世紀～19世紀-』	京都編集工房	2005
文76)	西 弘海	「平城宮の土器」『土器様式の成立とその背景』	西弘海遺稿集刊行会	1986
文77)	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所	「瓦の生産」(今井晃樹)『図説平城京事典』	柘風舎	2010
文78)	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所	「文房具 文書軸」(馬場基)『図説平城京事典』	柘風舎	2010
文79)	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所	「度量衡」(和田一之輔)『図説平城京事典』	柘風舎	2010

English Summary

Saidaiji Temple Former Precinct Excavation Report I

This volume is an excavation report on investigation No. 25 in the former precinct of Saidaiji Temple, conducted by the Board of Education of the city of Nara.

Saidaiji temple is located in the northeast portion of the Nara basin, where even today it draws followers as headquarters of the Shingon Risshū Buddhist sect.

The history of the temple's founding and its scale, the halls erected at each of its subtemples, its finances including its holdings of Buddha images and sutras, and so forth, are recorded in the Saidaiji shizai rukichō (Saidaiji Financial Inventory) drawn up in the year 780. According to that text, the temple's origins stem from a set of images of the Four Heavenly Kings commissioned by the Retired Empress Kōken, in prayer for victory in the rebellion instigated by Fujiwara no Nakamaro (also known as Fujiwaraemi no Oshikatsu) in 764. It was the largest temple within the capital, occupying a broad area of 31 chō (approximately 48 hectares) in Blocks 3 and 4, West Third Ward on First Street.

This excavation was an investigation made prior to construction for private residential purposes. The location corresponds to a site on the east-west boundary street running between the Jūichimendōin and the site inferred for the Seinansumiin.

Two ditches running east-west were detected as a result of the excavation. Of these the southern ditch, SD01, is inferred to have been a roadside gutter of a Nara capital road built prior to the construction of Saidaiji, which was then partly filled in and its upper portion expanded in width.

Prior to filling in SD01, large amounts of rubbish including bits of wood were discarded. The contents included mokkan (wooden documents), pottery including items with ink inscriptions, roof tiles, wooden and metal objects, along with natural products such as cypress bark, seeds, and tree branches. Among these items were the country's oldest recovered sherds of Islamic glazed stoneware, found in the same layer as a dated mokkan (from the year 768), precious materials for which a limit on the date of disposal can be set. Also, ink-inscribed pottery was found bearing the name of Kōho Tōchō 皇甫東朝, noted in the Shoku Nihongi as a person from Tang China.

More than 1,200 mokkan were recovered, including items in the form of wooden tablets as well as shavings, and their contents can be categorized as those related to the building of Saidaiji, those concerned with the temple's organization, those representing calligraphy practice and memos, and so forth. Among the mokkan is an item inscribed with the court rank and administrative posts of Isonokami no Yakatsugu, known as a man of letters and a bureaucrat, and it became clear as a new fact that he served as head of construction for the East Palace on the Nara palace grounds.

Although this investigation was on a small scale, significant results were obtained which tell of aspects of the construction of Saidaiji, for which materials are scarce.

西大寺旧院内发掘调查报告书 I

此书是奈良市教育委员会实施了西大寺旧院内第 25 次发掘的报告。

西大寺位于奈良盆地的西北部，作为真言律宗的总寺院，现在仍有人们的信奉。

关于西大寺的创建来历和规模、在各院修建的堂宇、所藏的佛像、佛教经典等的财产，在宝龟十一(780)年成书的《西大寺资财流记帐》里都有记述。按这段记述，西大寺是，在天平宝字八(764)年发生的藤原仲麻吕(惠美押胜)之乱的时候，为了祈祷战胜，以孝谦上皇发愿的四天王像为来历的寺院。在平城京右京的一条三坊、四坊里，占据 31 町(约 48ha)的京内最大的寺院。

这次的调查是，为了个人建设住宅的事前调查。进行调查的地區是通过十一面堂院和西南角院的推定地之间的，相当于区划东西的道路部分。

据调查结果，发现了两条东西方向的沟。其中，南侧的沟(即 SD01)，可能是平城京的道路侧沟，它是在西大寺营造以前做成的，然后填平这条沟而扩张沟幅。

在填沟(SD01)之前，包含木屑的大量垃圾被扔掉了，内容是木简、墨书土器、瓦、土器、木制品、金属制品、丝柏皮、种子、树枝等等的自然遗物。其中，日本最古的出土例的伊斯兰陶器片，是在与记年木简(神护景云二(768)年)同一的地层中出土的，就是能限定废弃时期的贵重资料。另外，有在《续日本纪》有记载的唐人“皇甫东朝”的名字的墨书土器等也出土了。

出土的木简是包含木板、刨花等等，一共 1200 件以上，其内容也能分类如下：关于营造西大寺的、关于寺院组织的，另外习书、备忘录等等。这些木简中，也有关于著名的文人官僚石上宅嗣的位阶官职的记载，我们新发现了他当了造东内长官这个事实。

虽然这次调查是小规模的，但我们对于有关资料很少的营造西大寺这场情形加以研讨的时候，有很大的学术收获。



1. 調査前写真（南東から）



2. 発掘区全景（西から）



1. 発掘区全景（南東から）



2. 発掘区全景（南西から）



1. SD01全景（西から）



2. SD02全景（東から）



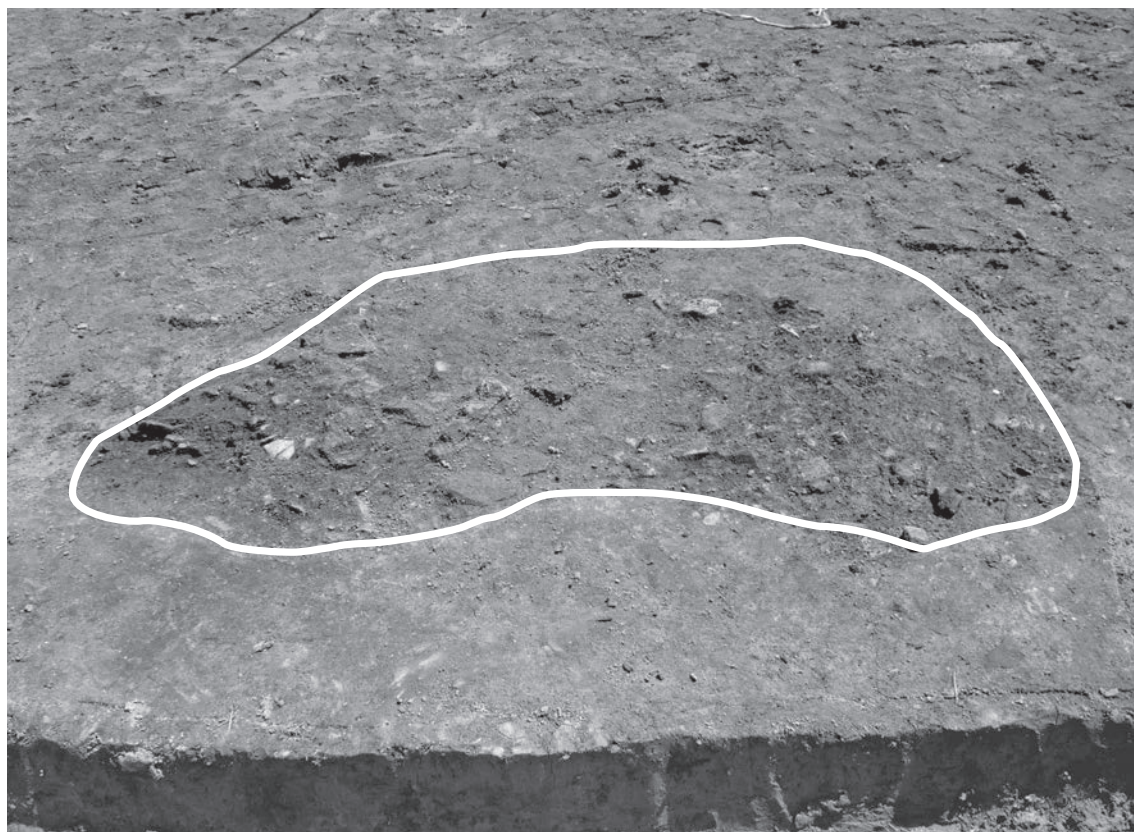
1. 土橋SX05全景 (南西から)



2. 石組SX06全景 (南西から)



1. 石組SX06基礎の石（東から）



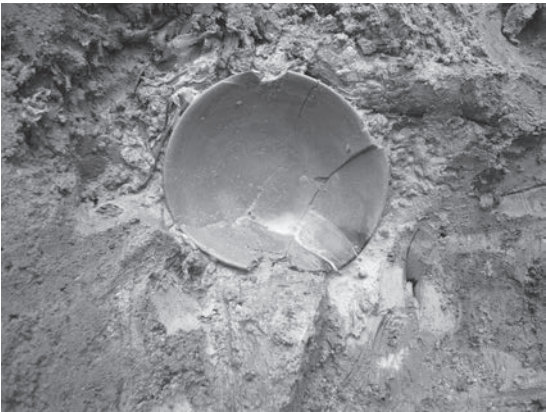
2. 土器溜まりSX04検出状況（白線の範囲：北から）



1. 軒丸瓦出土状況



2. 軒平瓦出土状況



3. 土師器出土状況



4. イスラム陶器出土状況



5. 木簡出土状況



6. 木簡取り上げ状況



7. 文杖形木製品出土状況



8. 和同開珎出土状況



(瓦当面)



(瓦当裏面)

—
2

軒丸瓦 6139 型式A種 (2) (1/3)



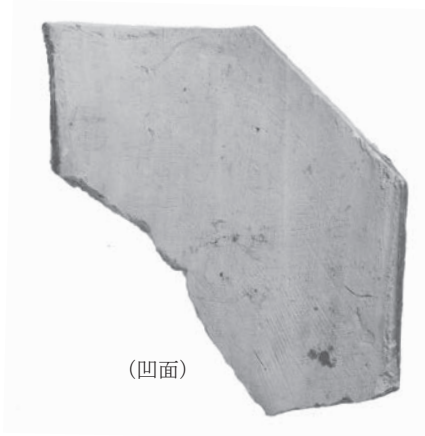
(瓦当面)

18



(平瓦部側面)

軒平瓦 6732 型式Q種 (18) (1/3)



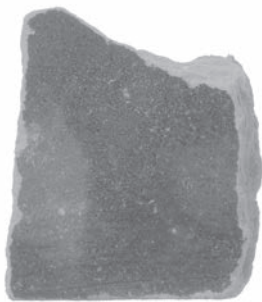
(凹面)



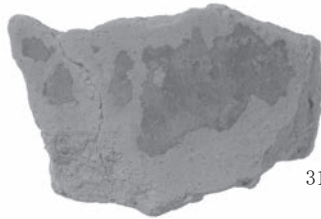
(凸面)

—
24

隅平瓦 (24) (1/6)



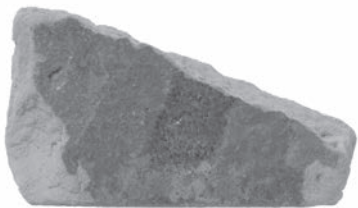
29



31



33



30



32



34

三彩平瓦 (29・30)、緑釉丸瓦 (31・32)、施釉極先瓦 (33・34) (2/3)

出土瓦類



1. SD01古最下層出土土師器・須恵器



2. SD01古木屑層出土土師器・黒色土器A類



1. SD01出土土師器（墨書土器は古最下層、他は古木屑層）



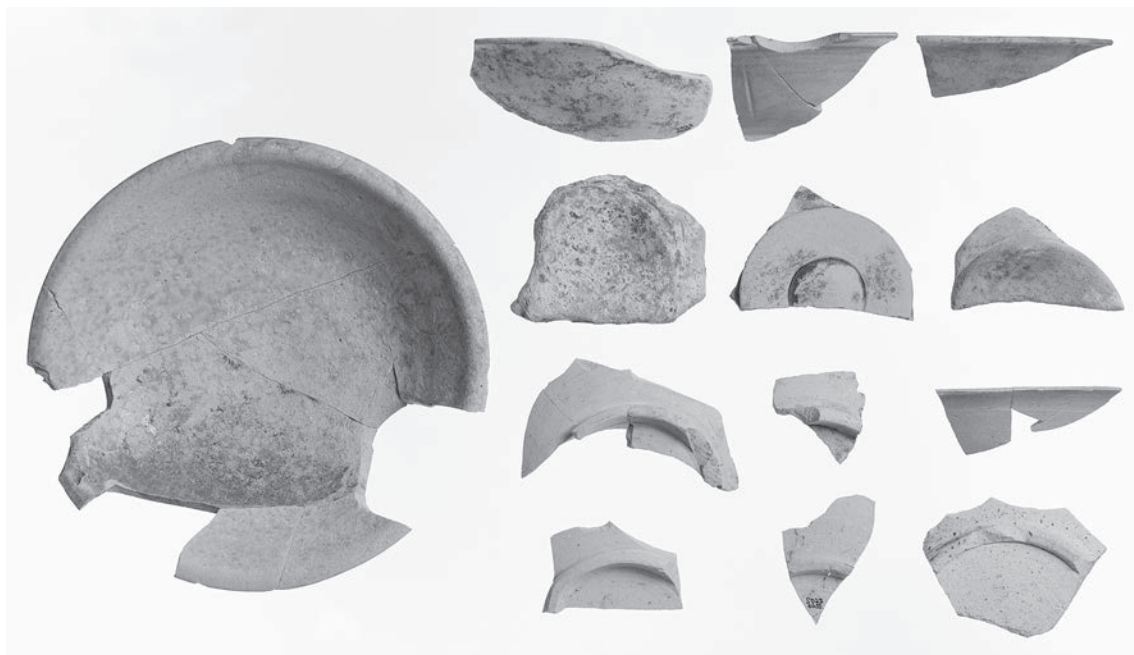
2. SD01古木屑層出土須恵器



1. SD01古木屑層・古埋立層出土須恵器



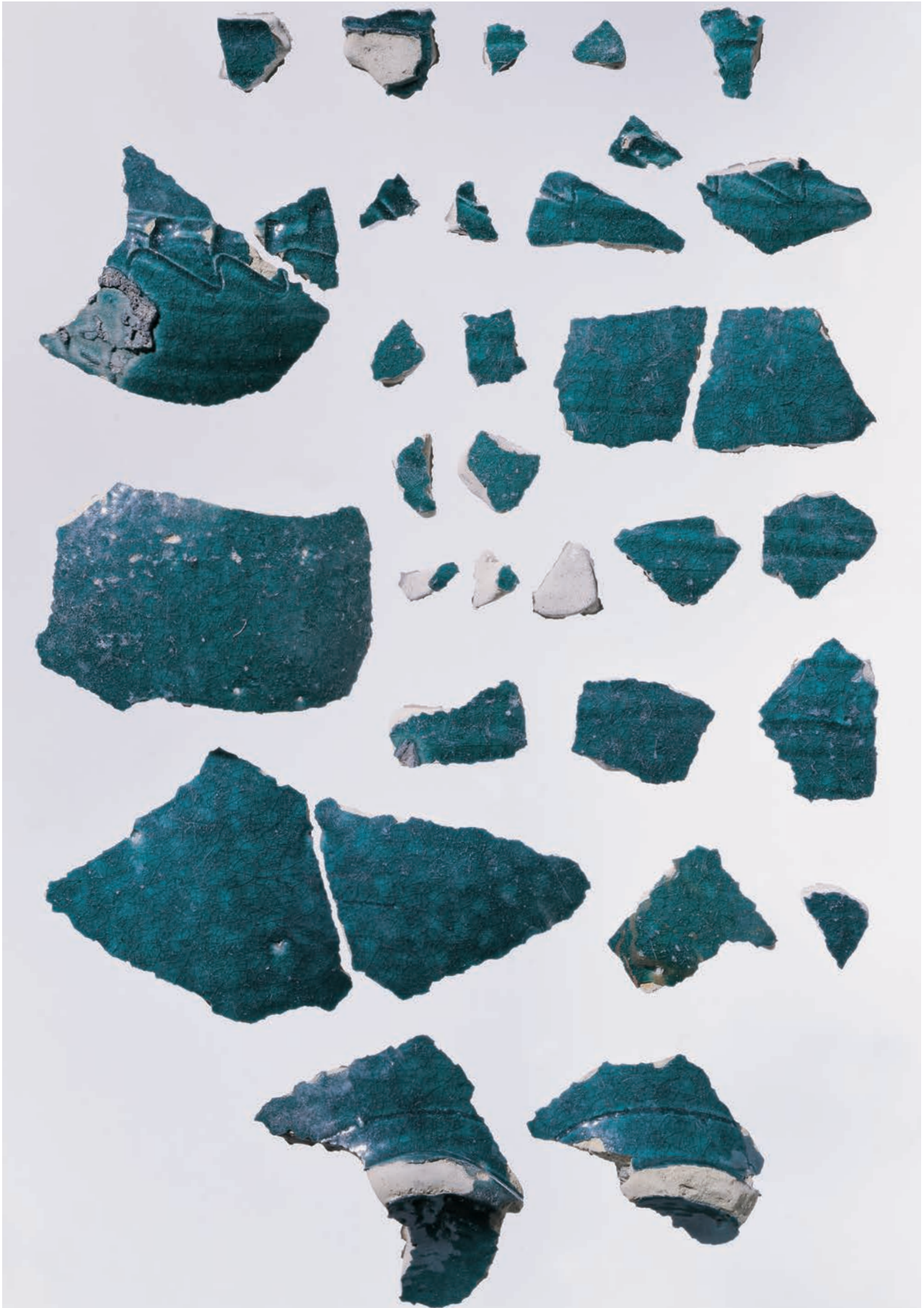
2. SD01新出土土師器・須恵器・黒色土器A類



1. SD01・SX04出土灰釉陶器・緑釉陶器



2. SD01・SX04出土陶硯・転用硯



SD01出土イスラム陶器（表面）



SD01出土イスラム陶器（内面）



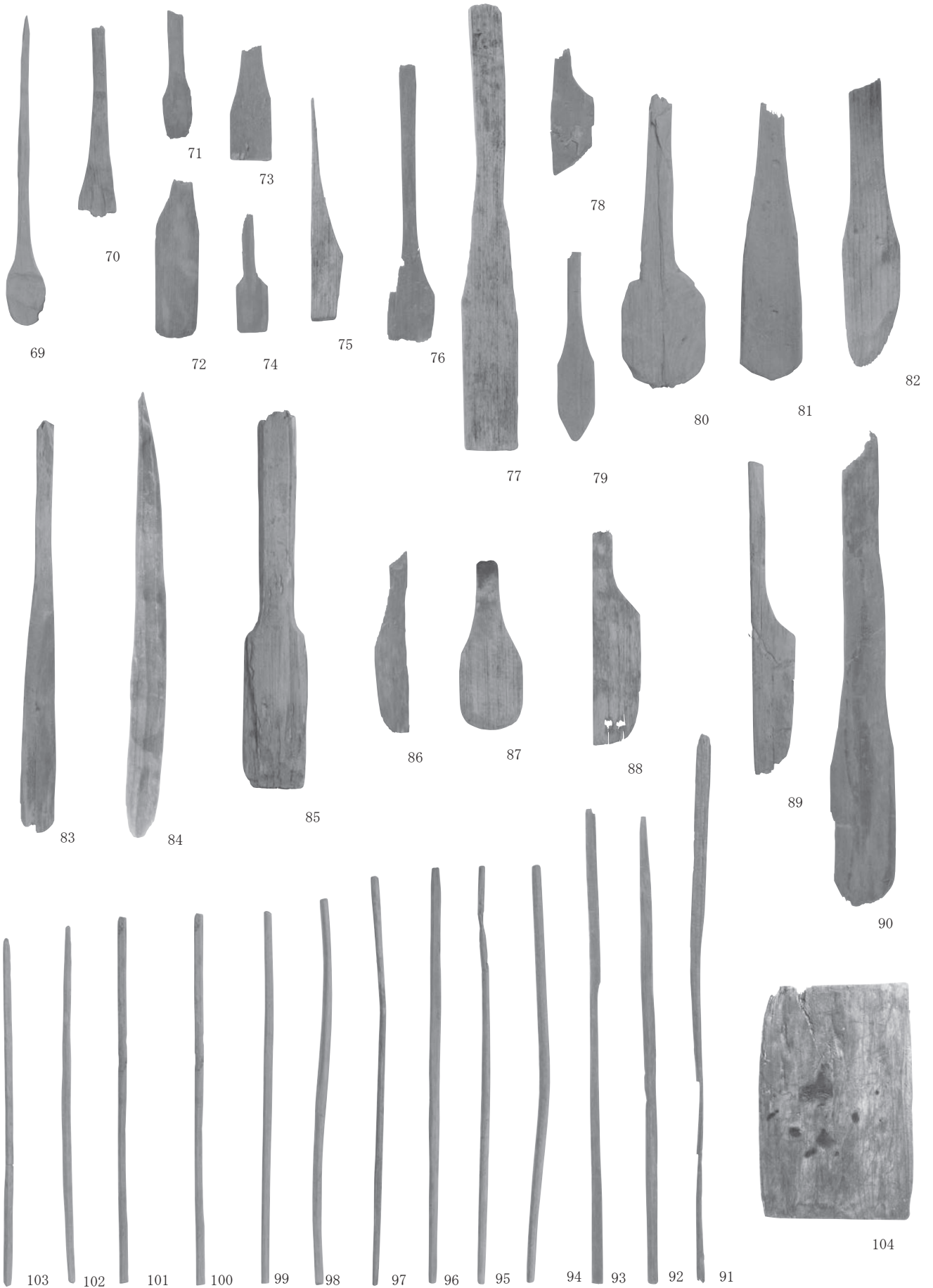
SD01古最下層出土木製品 (1~3)・古木屑層出土木製品 (工具: 4~20)
(1・2:1/3、3~10:1/1、11~20:1/2)



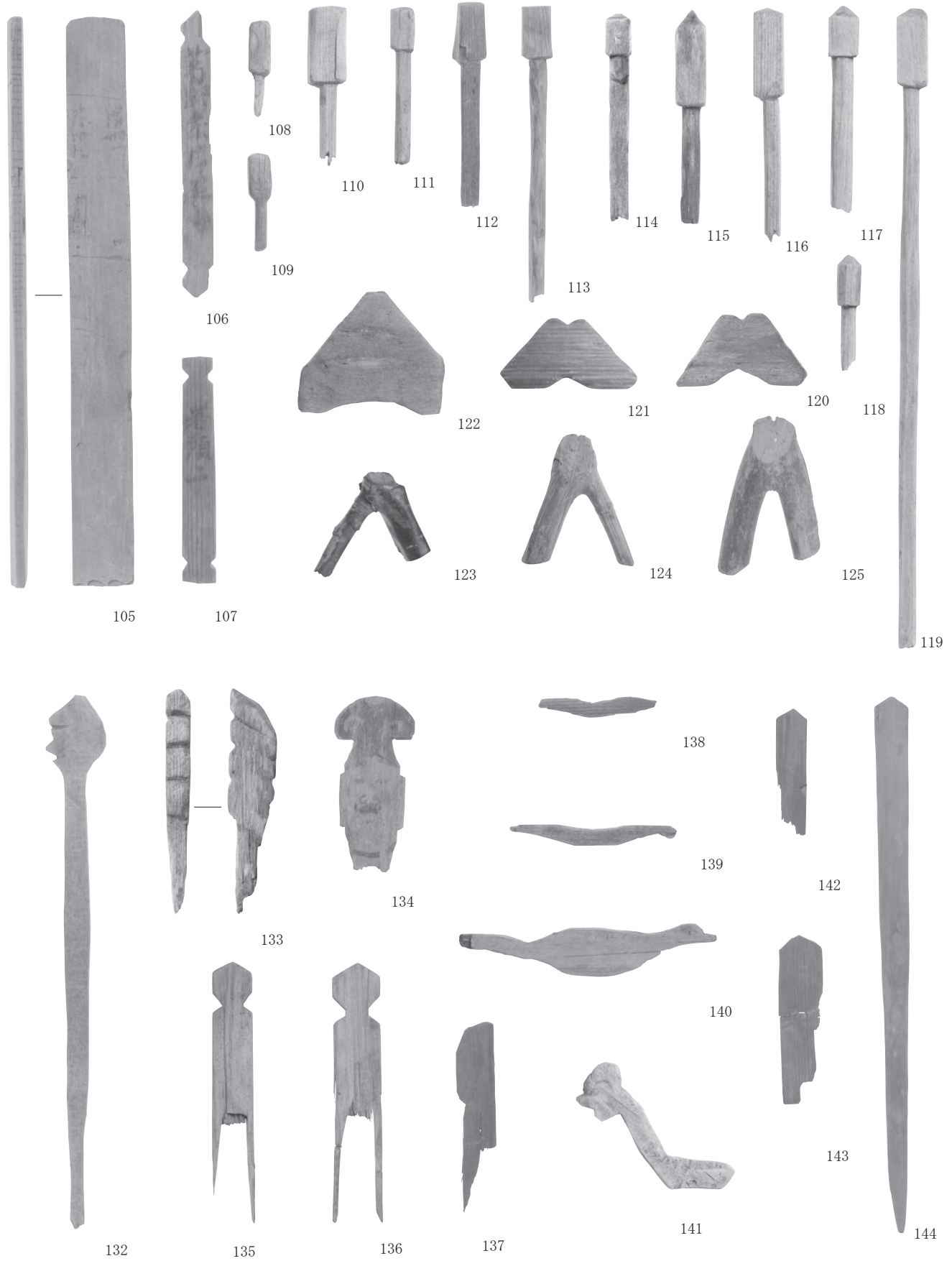
SD01古木屑層出土木製品（服飾具）
 (21~26・31~34:1/1、27~30・35~41:1/2、42:1/4)



SD01古木屑層出土木製品 (容器)
(67:1/1、43:1/2、44~66・68:1/3)



SD01古木屑層出土木製品（食器具）
(69~82:1/2、83~104:1/3)



SD01古木屑層出土木製品 (文房具:105~119、遊戯具120~125、祭祀具132~144)
 (105~119、132~143:1/2、120~125:1/1、144:1/4)



145



146



147



148



149



150



151



152



153



154



155



156



157



158



159



160



161



162

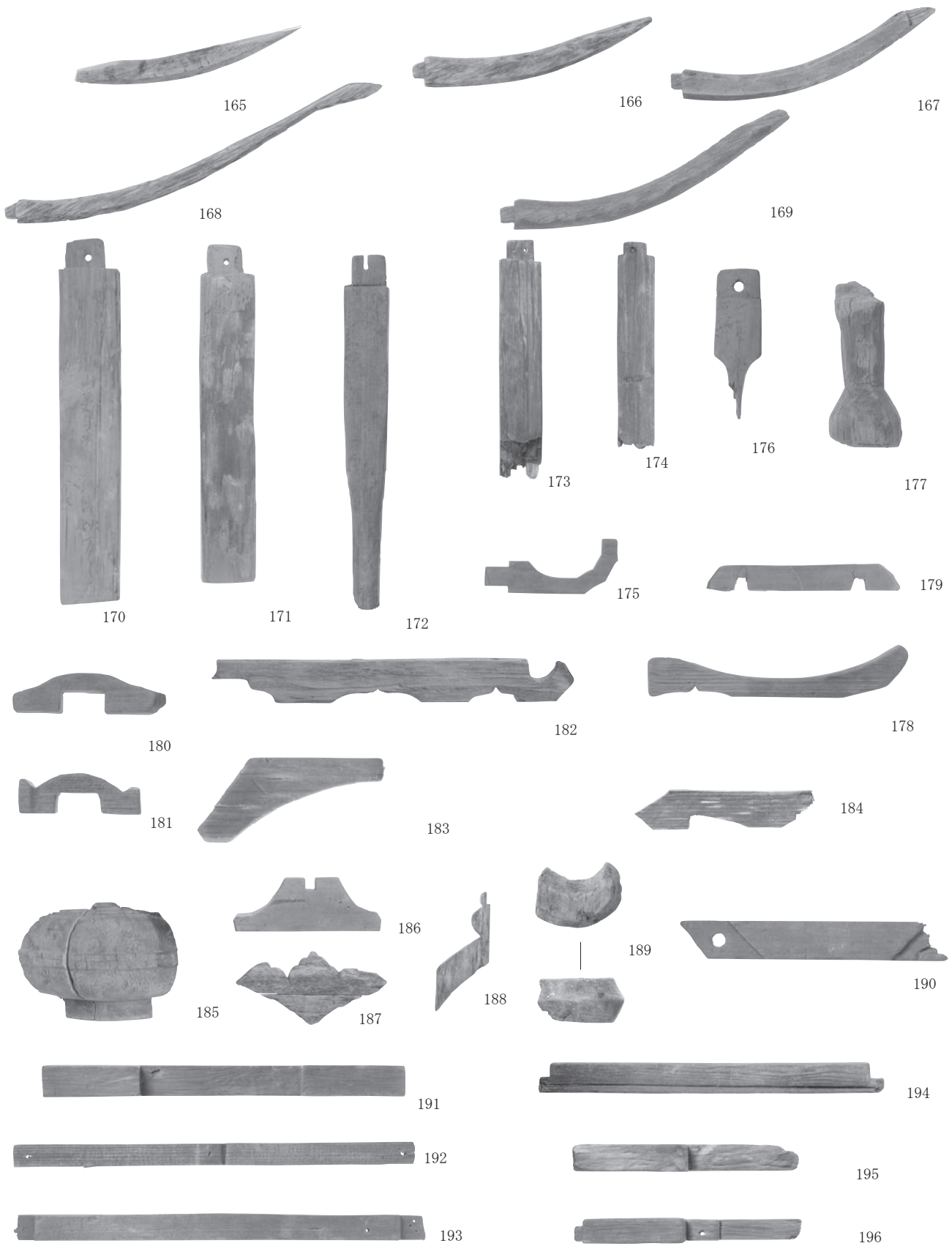


163



164

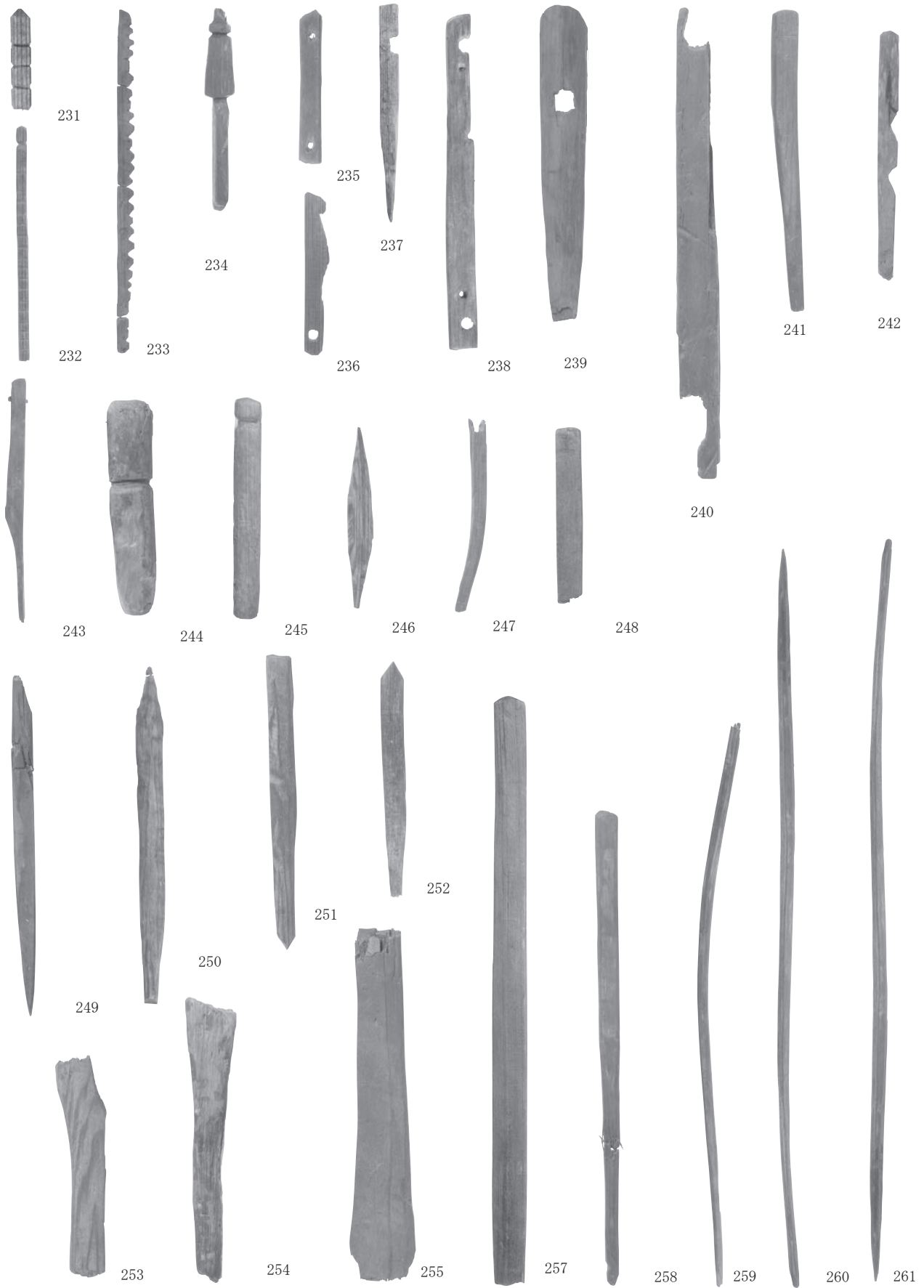
SD01古木屑層出土木製品 (調度)
(145~164:1/4)



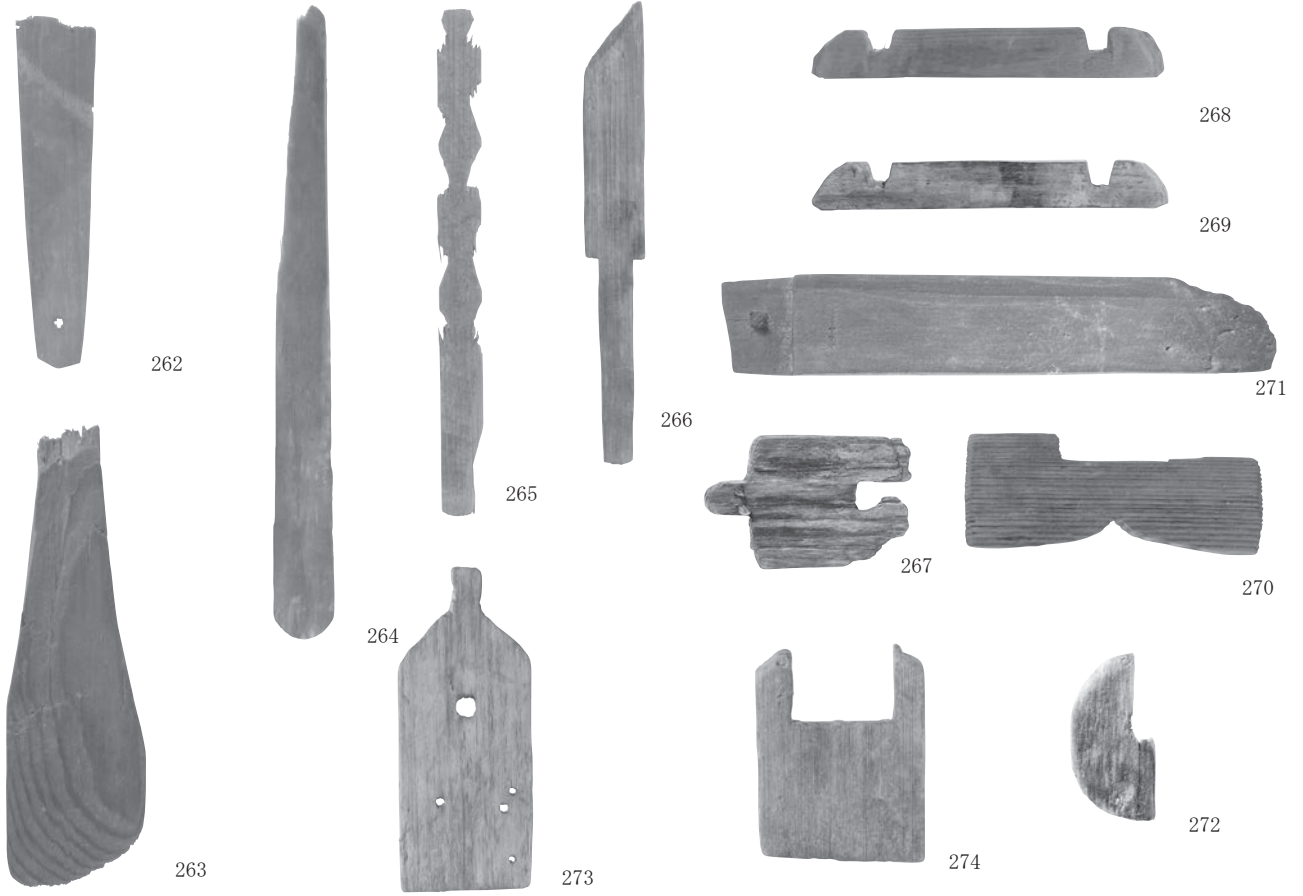
SD01古木層層出土木製品（部材）
(165~176・179・185~188、190~196:1/4、177・178・180~184・189:1/2)



SD01古木屑層出土木製品（その他・用途不明品1）
(197~199・201・202・204・205・230:1/2、206・207:1/1、200・208~229:1/3)



SD01古木屑層出土木製品 (用途不明品 2)
(231:1/2、232~255:1/3、257~261:1/4)



SD01古埋立層出土木製品
 (262:1/2、263~269・273・274:1/3、270~272:1/2)



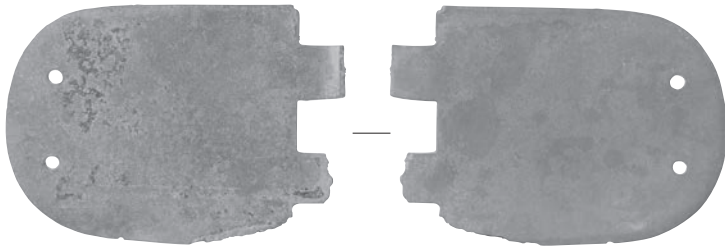
SD01新・その他出土木製品
 (275・277・279:1/3、276:1/10、278:1/2)



1



4



2



3



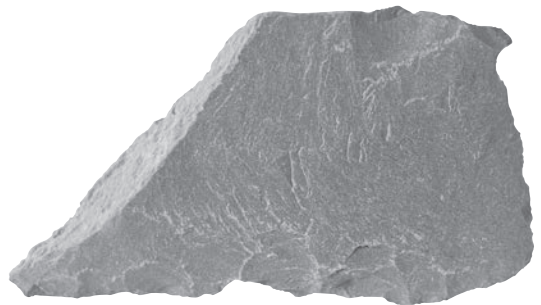
5



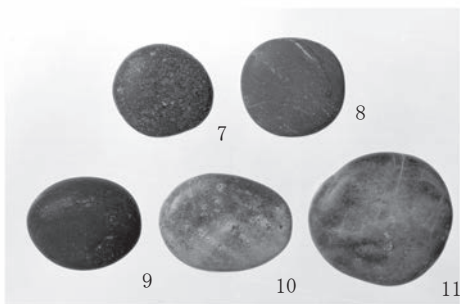
6



17



18



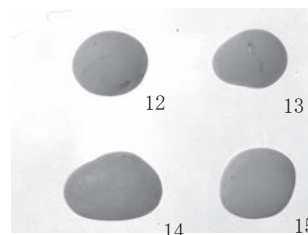
7

8

9

10

11



12

13

14

15



19

その他の遺物
(1~18:1/1、19:×2)

報告書抄録

ふりがな	さいだいじきゅうけいだいほくつちょうさほうこくしょ いち							
書名	西大寺旧境内発掘調査報告書 1							
副書名	西大寺旧境内第 25 次調査							
巻次								
シリーズ名	奈良市埋蔵文化財調査研究報告							
シリーズ番号	第 3 冊							
編著者名	久保邦江 武田和哉 三好美穂 安井宣也 池田裕英 池田富貴子 鶴見泰寿 奥山誠義 Walter Edwards 山根弓果 環境考古研究会							
編集機関	奈良市教育委員会 教育総務部 埋蔵文化財調査センター							
所在地	奈良市大安寺西二丁目 281 番地							
発行年月日	平成 25 年 3 月 27 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
さいだいじあと 西大寺跡	ならしさいだい 奈良市西大 じしんでんちょう 寺新田町	市町村	遺跡番号	34°41' 33.8"	135°46' 39.4"	2009.4.8 ～ 2009.7.14	321㎡	個人住宅新築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
西大寺跡	寺院跡	奈良時代～ 平安時代	溝・土橋・ 石組・小柱 穴・土器溜 まり	瓦・埴・鴟尾・土師器・黒色土器・ 須恵器・奈良三彩・緑釉陶器・灰釉 陶器・イスラム陶器・陶硯・球状土 製品・木簡・木製品・和同開珎・帯 金具・石製品・石器・ガラス玉・石器・ 繊維			西大寺の院を区画する 溝から、木屑とともに 大量の木簡、イスラム 陶器などが出土	
要旨	<p>本書は、奈良市教育委員会が実施した西大寺旧境内第 25 次調査の報告書である。西大寺は奈良盆地の北西部に位置し、真言律宗の総本山として現在も信仰を集めている。</p> <p>今回の発掘調査は、個人住宅建設を契機とする事前調査である。調査場所は、十一面堂院と西南角院推定地の間を通る、東西の区画道路部分に相当する箇所である。</p> <p>発掘調査の結果、東西方向の溝 2 条を検出した。このうち南側の SD01 は、西大寺造営以前につくられた平城京の道路側溝の可能性があり、それを埋立てて溝幅を拡張している。</p> <p>SD01 を埋立てる前に、木屑を含む大量のゴミを廃棄していた。そのなかには、木簡、墨書土器、瓦、土器、木製品、金属製品、檜皮、種子・樹枝などの自然遺物が含まれている。なかでも、国内最古の出土例であるイスラム陶器片は、記年木簡（神護景雲二（768）年）と同一層から出土しており、投棄時期がある程度推測できる貴重な資料となった。また、『続日本紀』に記載がある唐人「皇甫東朝」の名が記された墨書土器などが出土している。</p> <p>木簡は板状のもの・削り屑を含めて 1200 点以上が出土しており、その内容は西大寺造営に関わるもの、寺内組織に関わるもの、習書、手控えなどに分類できる。木簡のなかには、文人官僚として知られる石上宅嗣の位階官職が記されたものがあり、彼が造東内長官であったという新事実が明らかになった。小規模な調査ではあったが、資料の乏しい西大寺造営の一端を知る上で、大きな成果をあげることができた。</p>							

**SAIDAJI TEMPLE FORMER PRECINCT
EXCAVATION REPORT 1
(Main Volume)**

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION,

2013